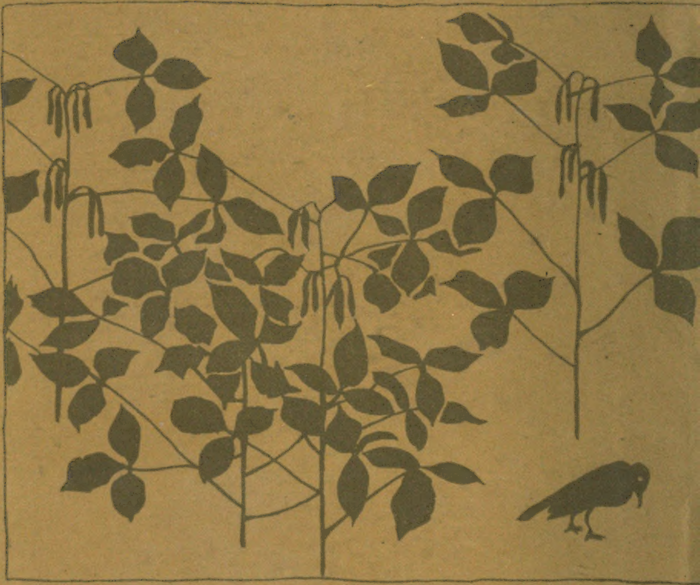
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03045 2411



大正十三年六月五日印刷
大正十三年六月八日發行

漢文叢書
唐詩選

不許複製

編輯者　塚本哲三
東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行者　三浦理
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷者　新井由藏
東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　合資會社電新堂
東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

(新井製本)

三、錦瑟

[illegible]

煩襟四坐淸。
霏微過二麥隴一。
蕭瑟傍二莎城一。
靜愛和レ華落。
幽聞入レ竹聲。
朝觀興無レ盡。
高詠寄二閑情一。

傍ふ。靜かに愛す華に和して落つるを。幽かに聞く竹に入つて聲るを。朝に觀れば興盡くることなし。(四)高詠して閑情を寄す。

(一)雨、軒端を洗ひ、心爽かなり (二)麥の畠に降る (三)はますげの生ずる城にそゝぐ (四)吟咏し、しづかなる情を寄す

(已前共に八首)

三體詩 終

紅明映二碧寥一。
店香風起夜。
村白雨休朝。
靜落猶連レ蔕。
繁開正滿レ條。
澹然閑賞久。
無レ奈似二嬌饒一。

幾行歸レ塞盡。
念爾獨何之。
暮雨相呼疾。
寒塘欲レ下遲。
渚雲低暗度。
關月冷相隨。
未三必逢二矰繳一。
孤飛自可レ疑。

片雨拂二簷楹一。

かに落ちて猶ほ蔕を連ね。繁く開いて正に條に滿つ。(四)澹然として閑かに賞すること久し。奈ともするなし嬌饒に似たるを。

(一)あんずの花 (二)霽をまろめ、晴れし梢につく。(白) (三)紅く明かに碧空に映ず。(紅) (四)淡き心に賞せんとするも、美人に似たるを如何せん

孤雁　崔塗

(一)幾行か塞に歸り盡く。念ふ爾獨り何にか之く。暮雨に相呼ぶこと疾く。寒塘に下らんと欲して遲し。(二)渚雲低れて暗に度り。關月冷かにして相隨ふ。(三)未だ必ずしも矰繳に逢はざるも。孤飛自ら疑ふべし。

(一)雁は皆塞地(北)に歸るに、汝獨りいづこに行く (二)渚雲垂るゝ中に度り、關月冴ゆる下に飛ぶ (三)いぐるみ(矢に絲をつけたるもの)に逢はざるまでも、危難の恐れ多からん

雨　皎然

(一)片雨簷楹を拂ひ。煩襟四坐清し。(二)霏微として麥隴を過ぎ。(三)蕭瑟として沙城に

入レ夜歸思切。笛聲寒更哀。愁人不レ願レ聽。自到二枕邊一來。風起寒雲斷。夜深關月開。平明獨惆悵。落盡一庭梅。

試向二東林一望。方知節候殊。亂聲千葉下。寒影一巢孤。不レ蔽二秋天雁一。驚二飛夜月烏一。霜風與二春日一。幾度遣二榮枯一。

團雪上二晴梢一。

夜に入つて歸思切なり。笛聲寒うして更に哀しむ。愁人聽くことを願はざるも。自ら枕邊に到り來る。風起つて寒雲斷え。夜深うして(一)關月開く。(二)平明獨惆悵す。落盡す一庭の梅。

㊀關山の月清し。(關山月の曲) ㊁曉に、庭の梅花落つるを傷む。(梅花落の曲)

秋林に感ず　姚倫

試みに東林に向つて望めば。方に知る節候の殊なるを。(一)亂聲千葉下り。(二)寒影一巢孤なり。(三)秋天の雁を蔽はず。夜月の烏を驚飛せしむ。霜風と春日と。幾度か榮枯を遣る。

㊀落葉亂れ鳴る ㊁鳥の巢淋しく殘る ㊂雁の影を隠さず、月夜の烏驚き飛ぶ

杏華(一)　溫憲

(二)團雪晴梢に上り。(三)紅明碧寥に映ず。店は香し風起る夜。村は白し雨休む朝。靜

雲液沁成レ泉。
色滿青苔裏。
寒凝紫綆邊。
銅瓶向レ影落。
玉甃抱レ虛圓。
永賴調二神像一。
堯時奉二萬年一。

引二出白雲根一。
潺潺漲二蘚痕一。
冷光搖二砌錫一。
疎影露二枝猿一。
淨帶二凋レ霜葉一。
香通二洗レ藥源一。
貝多文字古。
宜下向二此中一翻上。

の邊。銅瓶影に向つて落ち。(四)玉甃虛を抱いて圓なり。(五)永く賴に神像を調へ。(六)堯時萬年を奉ず。

(一)禁庭に井を鑿つ (二)雲中の水液、ひたりて泉となる。(冷なる意) (三)寒冷の氣、釣瓶の繩に凝る (四)石だたみ(井の壁)圓く、空虛をめぐる (五)永く井の神の像を祀れり (六)堯の民の如く、歌ひて君の萬年を祝せん。通鑑に、「堯の時、老人、壤を路に擊ちて曰く、井を鑿ちて飲み、田を耕して食ふ、帝力何ぞ我にあらんやと」

僧舍の小池　張蠙

(一)白雲の根を引出して。潺潺として蘚痕に漲る。(二)冷光砌錫搖き。疎影枝猿露る。(三)淨くして霜に凋む葉を帶び。(四)香しうして藥を洗ふ源に通ず。(五)貝多文字古りたり。(六)宜しくこの中に向つて翻すべし。

(一)石間より流れ出て、苔蒸す地に漲る (二)錫杖の影搖れ、猿の影うつる (三)清き水に落葉も添ひて一入美し (四)藥を泉源に洗ひ、自然に香を帶ぶ (五)貝多葉の經文古し (六)この中にひたし洗ふべし。酉陽雜俎に「貝多は摩伽陀國に出づ、その樹長さ六七丈、冬を經て凋まず、用ひて經を寫す」

笛を聞く　戎昱

麋鹿自成レ羣。
石面迸二出水一。
松頭穿二破雲一。
道人星月下。
相次禮二茅君一。

山中有二流水一。
借問不レ知レ名。
映レ地爲二天色一。
飛レ空作二雨聲一。
轉來深澗滿。
分出小池平。
恬淡無二人見一。
年年長自淸。

仙閣初鑿レ井。

㊀ 嶮路分れ、仙観に到る ㊁ 松高く、梢を雲外にあらはす ㊂ 星月明かなる夜、順次に茅君を拜す。神仙傳に「大茅君名は盈、次茅君名は固、小茅君名は衷（共に道士茅濛の玄孫）、三茅君と號す」

（已前共に四首）

詠物 （五言律に同じ）

山中の流泉　　儲光羲

山中流水あり。借問すれども名を知らず。(一)地に映じて天色を爲し。空に飛んで(二)雨聲を作す。轉じ來つて深澗に滿ち。分れ出でて小池平かなり。(三)恬淡として人の見るなし。年年長く自ら淸し。

㊀ 天とともに靑し ㊁ 雨の如く鳴る ㊂ 靜かに安らかなり

冷井　　孫欣

(一)仙閣初めて井を鑿ち。(二)雲液泌して泉を成す。色は湛ふ靑苔の裏。(三)寒は凝る紫綆

諸將旌ニ旄節一。
何人重ニ布衣一。
空城流水在。
荒驛舊材稀。
秋日平原路。
蟲鳴桑葉飛。

到レ台十二旬。
一片雨中春。
林葉黄梅盡。
山苗半夏新。
陽烏朝展レ翅。
陰魄夜飛レ輪。
坐喜無ニ雲物一。
分明見ニ北辰一。

歩歩入ニ山門一。
仙家鳥徑分。
漁樵不レ到處。

ん。空城流水在り。(五)荒驛舊材稀なり。秋日平原の路。蟲鳴いて桑葉飛ぶ。

(一)戰のために故郷荒れ、歸るに忍びず　(二)諸將節旄を賜ひ、勳功を賞せらる　(三)布衣(無位無官)の人を重んぜず。(從弟を憐む意)　(四)舊時の人々少し

晴を喜ぶ　　李敬方

(一)台に到つてより十二旬。(二)一片雨中の春。(三)林葉黄梅盡き。山苗半夏新なり。(四)陽烏朝に翅を展べ。陰魄夜輪を飛ばす。(五)坐に喜ぶ雲物なく。分明に北辰を見ることを。

(一)台州に至り、百二十日を經　(二)春を雨中に過ごす　(三)梅の實落ち盡し、半夏(藥艸)生ず　(四)日(陽の精)翔き、月(陰の精)めぐる　(五)空に雲なく、北極星明かに見ゆ

茅山　　杜荀鶴

歩歩山門に入る。(一)仙家鳥徑分る。漁樵到らざる處。麋鹿自ら羣を成す。石面水を迸出し。(二)松頭雲を穿破す。(三)道人星月の下。相次いで茅君に禮す。

山影似二相伴一。
濃遮到二客船一。

延陵初罷レ講。
建業去隨レ緣。
翻譯推二多學一。
壇場最少年。
浣レ衣逢二野水一。
乞レ食向二人煙一。
遍禮二南朝寺一。
焚レ香古像前。

故鄉何可レ到。
令弟獨能歸。

月を遮り僅かに客船に到らしむ。三峽記に「巫峽は夔州にあり、連山隱蔽し、亭午夜分にあらざれば日月を見ず」

（已前共に四首）

結　局（七言律に同じ）

陳法師上元に赴くを送る　皇甫冉

(一)延陵初めて講を罷め。建業去つて緣に隨ふ。(二)翻譯多學を推し。(三)壇場最も少年。衣を浣つて野水に逢ひ。食を乞うて人煙に向ふ。(四)遍く南朝の寺に禮し。香を焚く古像の前。

(一)延陵の講をやめ、建業に去る。（有緣衆生に隨ひ、布化する意）(二)學博く經文を翻譯す　(三)年少きも衆に勝る　(四)遍く六朝の古寺に詣づ

從弟河朔に歸るを送る　嘉祐

(一)故鄉何ぞ到るべき。令弟獨能く歸る。(二)諸將旄節を旌し。(三)何人か布衣を重んぜ

蒼然闇杜洲。

南行隨二越僧一。舊業一池菱。兩鬢已垂レ雪。五湖歸掛レ罾。夜濤鳴二柵鎖一。寒葦露二船燈一。此去更無事。卻來猶未レ能。

江聲五千里。瀉レ碧急二於絃一。不レ覺日又夜。爭教二人少年一。一汀巫峽月。兩岸子規天。

（已前共に二首）

耿山人湖南に遊ぶを送る　周賀

南行越僧に隨ふ。(一)舊業一池の菱。兩鬢已に雪を垂れ。五湖歸つて罾を掛く。(二)夜濤柵鎖に鳴り。寒葦船燈を露す。(三)此を去つて更に無事ならん。(四)卻つて來ること猶ほ未だ能はず。

(一)菱を採り舊業に復す　(二)白髮になり、五湖に漁りす　(三)夜の波、魚柵(やな)に鳴り、船の燈火、蘆の間に見ゆ　(四)無事を樂しみ、長安に歸らざるべし

巴江に宿す　僧栖蟾

(一)江聲五千里。碧を瀉いで絃よりも急なり。(二)覺えず日また夜。爭でか人をして少年ならしめん。一汀巫峽の月。兩岸子規の天。(三)山影相伴ふに似たり。(四)濃かに遮つて客船に到る。

(一)五千里の長流、弦を離れし矢よりも疾し　(二)輪路に日を費し、人を老いしむ　(三)山影常に人に伴ふ　(四)

酒渇愛ニ江清一。
餘酣漱ニ晩汀一。
軟莎敧坐穩。
冷石醉眠醒。
野膳隨ニ行帳一。
華陰發ニ從伶一。
數杯君不レ見。
都已遣ニ沈冥一。

江天清更愁。
風柳入ニ江樓一。
雁識ニ楚山晩一。
蟬知ニ秦樹秋一。
凄涼多獨醉。
零落半同游。
豈復平生意。

起句（篇首の二句を振はしむる格）

軍中の醉飲、沈八、劉叟に寄す　　暢當

㈠酒渇して江の清きを愛し。㈡餘酣晩汀に漱ぐ。軟莎敧坐穩かに。冷石醉眠醒む。㈢野膳行帳に隨ひ。㈣華陰從伶を發す。㈤數杯君見えず。都て已に沈冥を遣る。

㈠酒を飲み、喉乾く　㈡暮るゝ汀に醉をそゝぐ　㈢軍中の膳を帷内に運ぶ　㈣樂人を召し、音樂を奏す。（陰は音の誤ならん）　㈤數杯の後、二君去り、醉ひてすべてを辨ぜず

江陵臨沙驛の樓に題す　　司空曙

江天清うして更に愁ふ。風柳江樓に入る。雁は楚山の晩を識り。蟬は秦樹の秋を知る。㈠凄涼多くは獨醉。㈡零落半ば同游。豈また平生の意のみならんや。㈢蒼然たり蘭杜洲。

㈠獨、淋しく醉ふ　㈡同遊の友多く零落す　㈢芳蘭杜若の洲青し。（屈原を憶ふ意）

天賦識二靈草一。
自然鍾二野姿一。
閑來二北山下一。
似下與二東風一期上。
雨後探レ芳去。
雲間幽路危。
惟應下報春鳥。
得中共二斯人一知上。

(一)天賦靈草を識り。(二)自然に野姿を鍾む。閑かに北山の下に來つて。(三)東風と期するに似たり。雨後芳を探り去り。雲間幽路危し。(四)惟應に報春鳥のみ。斯の人と知ることを得べし。

㊀天性、茶の良種を知る　㊁茶を諸山に求め、自然に野人の姿をなす　㊂春風と約あるに似たり　㊃報春鳥と茶人とのみ、採茶の好期を知る。顧渚山茶記に「山に鳥あり鴝鵒の如く、色蒼し、正二月聲を作す、春起るなり、三月止む、春去るなり、茶を採る人、呼んで報春鳥となす」

陸羽を尋ねて遇はず　僧皎然

移レ家雖レ帶レ郭。
野徑入二桑麻一。
近種籬邊菊。
秋來未レ著レ華。
扣レ門無二犬吠一。
欲レ去問二西家一。
報道山中出。
歸來毎日斜。

(一)家を移して郭を帶ぶと雖も。野徑桑麻に入る。近ごろ種う籬邊の菊。秋來れども未だ華を著けず。門を扣くに犬の吠ゆるなし。去らんと欲して(二)西家に問ふ。報じ道ふ(三)山中より出でて。歸り來れば毎に日斜なりと。

㊀家を移して京に近きも、徑(こみち)桑麻の間に入る　㊁西隣の家に問ふ　㊂日々山中より出て、夕日の傾く頃に歸るといふ

(已前共に四首)

中歲頗好道。
晩家南山陲。
興來每獨往。
勝事空自知。
行到水窮處。
坐看雲起時。
偶然値林叟。
談笑滯還期。

掛席幾千里。
名山都未逢。
泊舟潯陽郭。
始見香爐峰。
嘗讀遠公傳。
永懷塵外蹤。
東林精舍近。
日暮坐聞鐘。

終南の別業　王維

中歲より頗る道を好み。晩に家す南山の陲。興來つて每に獨り往き。(一)勝事空しく自ら知る。(二)行きては到る水の窮る處。坐しては看る雲の起る時。偶然林叟に値ひ。談笑して(三)還期を滯らしむ。

(一)興深きこと　(二)流の盡くる處　(三)歸ること遲し

晩に潯陽に泊し、爐峰を望む　浩然

(一)席を掛く幾千里。名山都て未だ逢はず。舟を泊す潯陽の郭。(二)始めて見る香爐峯。(三)嘗て遠公の傳を讀み。永く塵外の蹤を懷ふ。(四)東林精舍近く。(五)日暮坐ながら鐘を聞く。

(一)舟行幾千里、未だ名山に逢はず　(二)始めて香爐峰(廬山の東南)を見る　(三)嘗て慧遠の傳を讀み、山中の舊跡を懷ふ　(四)東林精舍(慧遠の建てし寺)近し　(五)舟中に坐し鐘聲を聞く

茶人　陸龜蒙

園開二四季華一。
公庭飛二白鳥一。
官俸請二丹砂一。
知尉二黔中一後。
高吟採二物華一。

白日人稀レ到。
簾垂道院深。
雨苔生二古壁一。
雪鶴聚二寒林一。
忘レ慮憑二三樂一。
消レ閑信二五禽一。
誰知是官府。
煙縷滿爐沈。

吟して物華を採るを。

(一)古の蠻貊の地 (二)巴江に通ず (三)劍南の東西、及び山南の西道 (四)春來り百花一時に開く (五)辰溪の丹砂を請ひ、俸給に充つ (六)景物を賞す

道院　　王周

白日人到ること稀に。簾垂れて道院深し。雨苔古壁に生じ。雪鶴寒林に聚る。(一)慮を忘るゝは三樂に憑り。閑を消すは五禽に信す。(二)誰か知らん是れ官府なるを。(三)煙縷滿爐の沈。

(一)憂を忘れ、仙道を樂しむ。(榮啓期の歌に「天萬物を生じ、人を貴しとなす、吾、人たるを得たり、一の樂なり、男は尊く女は卑し、吾、男たり、二の樂なり、人生襁褓を免れざるものあり、吾年九十五、三の樂なり」、又、華佗の語に「吾に術あり五禽の戲をなす、一は虎、二は鹿、三は猿、四は熊、五は鳥、體中に不佳ある毎に起つて一禽の戲をなせば、恰然として汗を出す」) (二)官府に屬する道院に似ず (三)沈香の煙、絲の如く亂る

(已前共に三首)

一　意　(作法放肆なる如きも、よく音節に應ずる格)

竹間窺二遠鶴一。
巖上取二寒泉一。
西岳沙房在。
歸期更幾年。

曾見二邛人說一。
龍州地未レ深。
碧溪飛二白鳥一。
紅旆映二靑林一。
土產惟宜レ藥。
王租只貢レ金。
政成閑宴日。
誰伴二使君吟一。

盤レ山行幾驛。
水路復通レ巴。
峽漲二三川雪一。

(一) 上人去りて山中に宿す。(不在の意) (二) 燈火のために壁畫黑ずむ (三) 余が歸休し得るは何時ならん

(已前共に十四首)

(一) 後聯に實景を雜ふ

龍州の樊史君を送る(一)　許棠

曾て邛人の說を見く。(二)龍州地未だ深からずと。碧溪白鳥飛び。(三)紅旆靑林に映ず。(四)土產惟藥に宜しく。王租只金を貢す。政成つて閑かに宴する日。(五)誰か使君の吟に伴はん。

(一) 古の桑の氏羌の地、邛州と共に劍南に屬す (二) 邛州人いふ、龍州は蠻境に入ること深からずと (三) 紅旆(太守のはた)林に映ず (四) 良藥を產し、黃金を貢す (五) 君の吟咏に伴ふは誰ぞ

人の黔中に尉たるを送る(一)　周繇

山を盤つて行くこと幾驛ぞ。水路復た巴に通ず。(二)峽には三川の雪を漲らし。(三)園には四季の華を開く。(四)公庭白鳥飛び。官俸丹砂を請ふ。(五)知る黔中に尉たる後。(六)高

河流禹鑿深。
樵人應レ滿レ郭。
仙鳥幾巢レ林。
此會偏相憶。
曾供二雪夜吟一。

の吟を供せしことを。

㊀ 尚書傳に「虞芮田を爭ひ、文王に質す、境に入り、士大夫相讓るを見、乃ち爭ふ所を讓り、以て閑田となす」國名記に「虞と芮と讓る所の田は、今の平陸縣の西六十里、閑原是れなり」 ㊁ 禹王の古跡古し。（穴は禹穴） ㊂ 禹王開鑿の功深し。（龍門山） ㊃ 木茂り樵夫郭に滿つ ㊄ 曾て雪夜に會し、共に吟咏せしことを憶ふ

斷レ藥去還歸。
家人半掩レ扉。
山風藤子落。
溪雨豆華肥。
寺遠僧來少。
橋危客過稀。
不レ聞二砧杵動一。
應レ解レ製二荷衣一。

韋處士の山居　　許渾

藥を斷つて去つて還た歸る。家人（一）半ば扉を掩ふ。山風（二）藤子落ち。溪雨豆花肥ゆ。寺遠くして僧來ること少に。橋危くして客過ぐること稀なり。（三）砧杵の動くを聞かず。（四）應に荷衣を製することを解すべし。

㊀ 半ば門扉を閉づ ㊁ 藤の實落つ ㊂ 砧の音なし ㊃ 荷衣（蓮の葉の衣）のみを作るならん

林疎多二暮蟬一。
師去宿二山煙一。
古壁燈熏レ畫。
秋琴雨慢レ絃。

瀑布寺、貞上人の院　　鄭巢

林疎にして暮蟬多く。（一）師去つて山煙に宿す。（二）古壁燈畫に熏じ。秋琴雨弦を慢うす。竹間に遠鶴を窺ひ。巖上に寒泉を取る。西岳沙房在り。（三）歸期更に幾年ぞ。

山衣風壞レ帛。
香印雨沾レ灰。
坐久鐘聲盡。
禪餘嶽影回。
卻思同宿夜。
高レ枕説二天台一。

衆岫聳二寒色一。
精廬向レ此分。
流星透二疎木一。
走月逆二行雲一。
絶頂人來少。
高松鶴不レ羣。
一僧年八十。
世事未二曾聞一。

石田虞芮接。
種レ柳白雲陰。
穴閉神蹤古。

灰を沾す。坐久しうして(三)鐘聲盡き。(四)禪餘つて嶽影回る。卻つて思ふ同宿の夜。(五)枕を高うして天台を説くを。

(一)いつかは訪はるべしと思ひき (二)雨、灰を潤し、香火消ゆ (三)夜半の鐘聲止む (四)禪定の餘、山の影うつる。(月、西に傾く) (五)曾て同宿し、天台の幽境を語りしを思ふ

暮に山寺に過ぎる　賈島

衆岫寒色聳え。(一)精廬此に向つて分る。(二)流星疎木に透り。(三)走月行雲を逆ふ。絶頂人の來ること少に。(四)高松鶴羣せず。一僧年八十。世事未だ曾て聞かず。

(一)山寺明かなり (二)流星の影、林を透して見ゆ (三)月影雲に向つて走る (四)松高く、孤鶴すむ

永樂の殷侍御を懷ふ　馬戴

(一)石田虞芮接し。柳を種う白雲の陰。(二)穴閉ぢて神蹤古り。河流れて(三)禹鑿深し。(四)樵人應に郭に滿つべし。仙烏幾びか林に巣ふ。此の會偏に相憶ふ。(五)曾て雪夜

地際朝陽滿。天邊宿霧收。風兼殘雪起。河帶斷冰流。北闕馳心極。南圖尙旅遊。登臨思不已。何處可消憂。

地際朝陽滿ち。天邊宿霧收る。風は殘雪を兼ねて起り。(一)河は斷冰を帶びて流る。(二)北闕心極を馳せ。南圖尙ほ旅遊す。登臨して思已まず。何の處にか憂を消すべき。

(一)風吹き、殘雪を飛ばす　(二)朝廷を慕ひ、なほ南方に行く

早行　劉洵伯

鐘靜人猶寢。天高景自涼。一星深戍火。殘月半橋霜。客老愁城下。蟬寒怨路傍。青山依舊色。宛是馬卿鄉。

鐘靜かにして人猶ほ寢ね。天高うして景自ら涼し。(一)一星深戍の火。殘月半橋の霜。客老いて城下に愁へ。蟬寒うして路傍に怨む。(二)青山舊色に依る。宛も是れ馬卿が鄕。

(一)戍火星の如く、橋上の霜、殘月に似たり　(二)青山舊の如く、故鄕の蜀に異ならず。(司馬相如字は長卿、蜀の人)

嶓公に逢ふ　周賀

帶病稀相見。西城早晩來。

病を帶びて相見ること稀なり。西城より早晩來らん。(一)山衣風雨を壞り。(二)香印雨

泊レ舟淮水次。
霜降夕流清。
夜久潮侵レ岸。
天寒月近レ城。
平沙依二雁宿一。
旅館聽二雞鳴一。
鄉國雲霄外。
誰堪二羇旅情一。

楚山不レ可レ極。
歸客自蕭條。
海色晴看レ雨。
江聲夜聽レ潮。
劍留二南斗一近。
書寄二北風一遙。
爲報空潭橘。
無レ媒レ寄二洛橋一。

舟を盱眙に泊す　常建

舟を泊む淮水の次。霜降つて夕流清し。夜久しうして潮岸を侵し。天寒うして月城に近づく。(一)平沙雁宿に依り。旅館雞鳴を聽く。鄉國雲霄(二)の外。誰か羇旅の情に堪へん。

(一) 平沙に近く雁の宿る處に接す　(二) 天涯に隔たる

江南旅懷　祖詠

楚山極むべからず。歸客自ら蕭條。海色晴れて雨を看。江聲夜潮を聽く。劍は南斗に留めて近く。書は北風に寄せて遙かなり。爲に報ず空潭の橘。洛橋に寄するに媒なし。

○ 唐詩選に出づ

冬日野望　于良史

江亭酒甕香。白面繡衣郎。砌冷蟲喧レ坐。簾疎月到レ床。鐘催ニ離興一急。絃綴ニ醉歌一長。關樹應ニ先落一。隨レ君滿路霜。

結レ宇依ニ青嶂一。開レ軒對ニ翠疇一。樹交花兩色。溪合水重流。竹徑春來掃。蘭樽夜不レ收。逍遙自得意。鼓レ腹醉中遊。

南亭に鄭侍御、東臺に還るを送る

江亭酒甕香し。白面繡衣の郎。(一)砌冷かにして蟲坐に喧しく。簾疎にして月床に到る。鐘は離興を催して急に。(二)絃は醉歌を緩うして長し。關樹應に先づ落つべし。君に隨ふ滿路の霜。(三)

(一) 侍御史の義。(漢の武帝、繡衣の使者を遣り、郡國をめぐり、姦邪を伐ち、大獄を理む) (二) 晩鐘、別れを促し、絃歌なほ緩かなり (三) 君の行く所に、秋霜路に滿つべし

南溪の別業

宇を結んで青嶂に依り。軒を開いて翠疇に對す。樹交つて花兩色。(一)溪合して水重流。(二)竹徑春來つて掃ひ。蘭樽夜收めず。(三)逍遙自得の意。腹を鼓して醉中に遊ぶ。(四)

(一) 木々枝を交へ、紅白の花開く (二) 溪水合流す (三) 蘭陵の美酒を飲み、夜に至るも止めず (四) 莊子に「腹を鼓して遊ぶ」

雲送關西雨。
風傳渭北秋。
孤燈然客夢。
寒杵搗鄕愁。
灘上思嚴子。
山中憶許由。
蒼生今有望。
飛詔下林丘。

官舍臨江口。
灘聲已慣聞。
水煙晴吐月。
山火夜燒雲。
且欲求方士。
無心戀史君。
異鄕那可住。
況復久離羣。

關西の客舍に宿し、嚴許二山人に寄す

雲は關西の雨を送り。風は渭北の秋を傳ふ。(一)孤燈客夢に然え。(二)寒杵鄕愁に搗く。(三)灘上嚴子を思ひ。(四)山中許由を憶ふ。(五)蒼生今望むことあり。詔を飛して林丘に下さんことを。

(一) 孤燈客舍の枕上に燃ゆ　(二) 砧(きぬた)を聞きつゝ故鄕を思ふ　(三) 七里灘の嚴子陵を憶ふ。(嚴山人に比す)　(四) 箕山の許由を憶ふ。(許山人に比す)　(五) 天下の民、みな二山人の徵さるゝを望む

夜、(一)龍吼灘に宿し、峨嵋の隱者を思ふ

官舍江口に臨み。灘聲已に聞くに慣る。水煙晴れて月を吐き。山火夜雲を燒く。(二)且つ方士を求めんと欲す。史君を戀ふに心なし。異鄕那ぞ住るべけん。(三)況や復た久しく羣を離るゝをや。

(一) 眉州の灘　(二) たゞ隱者を尋ねんとし、官を慕ふ心なし。(史君は使君に同じ)　(三) 久しく友に別るゝをや

雪霽太陽津。
城池表裏春。
河流添二馬頰一。
原色動二龍鱗一。
萬里思二歸客一。
一杯逢二故人一。
因レ高向レ西望。
關路正飛レ塵。

（一）雪は霽る太陽津。（二）城池表裏春なり。（三）河流馬頰を添へ。（四）原色龍鱗を動す。（五）萬里歸客を思ひ。一杯故人に逢ふ。高きに因り西に向つて望めば。關路正に（六）塵を飛ばす。

（一）太陽關（即ち茅津）に雪晴る　（二）到る處に春を備す　（三）馬頰河に水添ふ　（四）野の土、日に輝き、龍鱗の動く如し　（五）遠き故鄉に歸らんとし、故人に逢ひて一杯を酌む　（六）戰塵あがる。（朱拙の說）

（已前共に三首）（一）

（一）後聯に數字を用ふ

渡口欲二黃昏一。
歸人爭レ渡喧。
近鐘清二野寺一。
遠火點二江村一。
見レ雁思二鄉信一。
聞レ猿積二淚痕一。
孤舟萬里夜。
秋月不レ堪レ論。

巴南舟中　岑參

渡口黃昏ならんと欲す。歸人渡を爭うて喧し。近鐘野寺に淸く。遠火江村に點ず。雁を見て鄉信を思ひ。猿を聞いて淚痕を積む。孤舟萬里の夜。（一）秋月論ずるに堪へず。

（一）愁多く、月を賞するに堪へず

波濤浸二薄田一。

逢レ君穆陵路。
匹馬向二桑乾一。
楚國蒼山古。
幽州白日寒。
城池百戰後。
耆舊幾家殘。
處處蓬蒿遍。
歸人掩レ淚看。

山曉旅人去。
天高秋氣悲。
明河川上沒。
芳草露中衰。
此別又千里。
少年能幾時。
心知剡溪路。
聊且寄二前期一。

（已前共に十首）(二)

● 全篇易直、結句の字法相似る

(一)穆陵關の北にして人の漁陽に歸るに逢ふ　劉長卿

君に逢ふ穆陵の路。匹馬桑乾に向ふ。楚國蒼山古り。幽州白日寒し。城池百戰の後。耆舊幾家か殘る。處處蓬蒿遍し。歸人淚を掩うて看る。

○ 唐詩選に出づ

早行、朱放に寄す　戴叔倫

山曉けて旅人去り。天高うして秋氣悲しむ。(一)明河川上に沒し。芳草露中に衰ふ。此の別又千里。少年能く幾時ぞ。(二)心知剡溪の路。聊か且つ前期を寄す。

● 銀河 ● 再び剡溪（越州）に會せんと期す

陝州の河亭に韋大夫の眺望に陪す　劉禹錫

巘路躡レ雲上。
來參二出世僧一。
松欹半巖雪。
竹覆一溪冰。
不レ說二有爲法一。
非レ傳二無盡燈一。
了然方寸內。
應三祇見二南能一。

離レ鄕積二歲年一。
歸路遠依然。
夜火山頭市。
春江樹杪船。
干戈愁二鬢改一。
瘴癘喜二身全一。
何處營二甘旨一。

(一)巘路雲を躡んで上り。來つて出世の僧に參す。松は欹つ半巖の雪。竹は覆ふ一溪の冰。(二)有爲の法を說かず。無盡の燈を傳ふるにあらず。(三)了然たり方寸の內。(四)應に祇南能に見ゆべし。

(一) 山背に雲を踏んで上り、出世間の僧に謁す (二) 人間有爲の法を說くにあらず、又、佛家不盡の妙旨を傳ふるにあらず。金剛經に「一切有爲の法、夢幻泡影の如し、如露また如電、應に如是觀をなすべし」(一切有爲の法は、幻化にして實義あることなしの意)、維摩經に「諸弟子に法門あり、無盡燈と名づく、たとへば一燈の百千燈を燃すが如し」。(法燈が傳へて盡くるなきの意) (三) たゞ心に悟り、本來無一物の妙理を得 (四) 禪僧南能(六祖大鑒禪師、南宗の祖)に見ゆるに足る

許棠を送る　　張喬

鄕を離れて歲年を積む。歸路遠くして依然たり。夜火山頭の市。(一)春江樹杪の船。(二)干戈鬢の改まるを愁へ。瘴癘身の全きを喜ぶ。(三)何の處にか甘旨を營まん。(四)波濤薄田を浸す。

(一) 帆影高く梢に見ゆ (二) 戰亂に白髮を愁へ、惡氣の中に健康を喜ぶ (三) いづこに甘旨(うまき物)の食を得、老を養すべきか (四) 故鄕の田、波濤に浸し荒さる

曲塘春盡雨。
方響夜深船。
行紀添二新夢一。
羇愁甚二往年一。
何時京洛路。
馬上見二人煙一。

浩蕩東風裏。
徘徊無レ所レ親。
危城三面水。
古木一邊春。
衰世難レ行レ道。
花時不レ稱レ貧。
滔滔天下者。
何處問二通津一。

くる船。(三)行紀新夢を添へ。羇愁往年より甚だし。(四)何の時か京洛の路。馬上人煙を見ん。

㊀ 呉地廣く、江水中分す ㊁ 舊唐書に「鐵を以て之を爲り、長九寸、廣二寸、上を圓にし、下を方にす」（夜行の船に打ち、衝突を防ぐ） ㊂ 紀行に、新しき夢を添ふ ㊃ 都に著き、馬上に人煙を見るは何時ぞ

春日　李咸用

浩蕩たる東風の裏。徘徊して(一)親む所なし。(二)危城三面の水。古木一邊の春。衰世道を行ひ難く。花時貧を稱せず。(三)滔滔たり天下の者。(四)何の處にか通津を問はん。

㊀ 親しき友なし ㊁ 城高く、三面に水をたゝへ、一方の古木に花を開く ㊂ 天下の人情日に薄し ㊃ 何處にか正道を問はん。論語に「長沮桀溺耦して耕す、孔子之を過ぎ、子路をして津を問はしむ云々、桀溺曰く、子は誰とかなす、曰く仲由となす、曰く是れ魯の孔丘の徒か、對へて曰く然り、曰く、滔々たるもの天下皆是なり、而して誰とともにか之を易へん」

雲居長老　王貞白

雲根禪客居。皆説舊吾廬。松日明二金像一。苔龕響二木魚一。依棲應レ不レ阻。名利本來疎。縱有二人相問一。林間懶レ拆レ書。

(一)雲根禪客の居。皆説く舊吾が廬と。松日金像明かに。苔龕木魚響く。(二)依棲應に阻てざるべし。(三)名利本來疎なり。(四)縱ひ人の相問ふあるも。林間書を拆くに懶し。

(一)岩石の間に僧居あり、皆いふ、君が舊居なりと　(二)余が來り住むを妨げじ　(三)余の心、固より名利に淡し　(四)俗人消息を問ふも、返書を作るにものうし

早春

傷レ懷仍客處。病眼卻レ華朝。草嫩侵レ沙短。氷輕著レ雨消。風光知レ可レ愛。客鬢不二相饒一。早晚丹丘伴。飛レ書肯見レ招。

(一)懷を傷めて仍ほ客處す。病眼華を卻る朝。草嫩うして沙を侵して短く。氷輕うして雨を著けて消ゆ。風光愛すべきを知り。(二)客鬢相饒さず。(三)早晚丹丘の伴。書を飛ばして肯て招かれん。

(一)愁へつゝ客となり、眼を病み花にそむく　(二)白髪を免れ難し　(三)仙郷の友、書を寄せて招くならん

江行

地闊分二吳塞一。楓高映二楚天一。

(一)地濶うして吳塞を分ち。楓高うして楚天に映ず。曲塘春盡くる雨。(二)方響夜深

楚客經レ年病。
孤舟人事稀。
晩晴江柳變。
春暮塞鴻歸。
今日方知レ命。
前年自覺レ非。
不レ能レ憂二歲計一。
無レ限故山薇。

池島清陰裏。
無三人泛二酒船一。
山蜩金奏響。
華露水精圓。
靜勝朝還暮。
幽觀白已玄。
家山正如レ此。
何不レ賦二歸田一。

春日病に臥し懷を書す(一)

劉商

楚客年を經て病み。孤舟人事稀なり。(二)晩晴れて江柳變じ。春暮れて塞鴻歸る。(三)今日方に命を知り。前年自ら非を覺る。(四)歲計を憂ふる能はず。(五)限なし故山の薇。

(一) 官を辭し、故鄕に歸る舟中の作 (二) 江上の柳いよ〳〵茂る (三) 年すでに五十になり、前非を悔ゆ。(孔子、五十にして天命を知る、遽伯玉、五十にして四十九年の非を悔ゆ) (四) 生計を憂ふるに及ばず (五) 故鄕に薇(わらびの類)多く、採りて食ふべし

林館に暑を避く

羊士諤

池島晴陰の裏。人の酒船を泛ぶるなし。(一)山蜩金奏響き。華露水精圓なり。(二)靜勝朝還た暮。幽觀白すでに玄なり。(三)家山正に此の如し。何ぞ歸田を賦せざる。

(一) 蜩(せみ)の聲、金板を打つ如く、花の露、水晶の圓きに似たり (二) 暑熱を忘れ、心幽玄に入る。老子に「靜は熱に勝る」、解嘲賦に「客に揚雄の玄、なほ白きを嘲るものあり」 (三) 故鄕は常に此の如し、今に歸り得ざるを恥づ

柏梯寺に舊僧を懷ふ

司空圖

獨坐悲ニ雙鬢ー。
空堂欲ニ二更ー。
雨中山菓落。
燈下草蟲鳴。
白髮終難レ變。
黃金不レ可レ成。
欲レ知レ除ニ老病ー。
惟有レ覺ニ無生ー。

林塘夜汎レ舟。
蟲響荻颼颼。
萬影皆因レ月。
千聲各爲レ秋。
歲華空復晚。
鄉思不レ堪レ愁。
西北浮雲外。
伊川何處流。

前實後虛（七言律に同じ）

秋夜獨坐　王維

(一)獨坐雙鬢を悲しむ。空堂二更ならんと欲す。雨中山菓落ち。燈下草蟲鳴く。(二)白髮終に變じ難く。黃金成すべからず。(三)老病を除くことを知らんと欲せば。惟無生を覺るに在り。

㊀白髮を悲しむ　㊁白髮は黑くし難く、黃金の術卽ち長壽の仙術は成り難し　㊂老病の苦しみを免れんとせば、佛に歸依し、無生の妙理を悟るにあり

秋夜舟を汎ぶ　劉方平

林塘夜舟を汎ぶ。蟲響いて(一)荻颼颼。(二)萬影皆月に因り。千聲各〻秋を爲す。歲華空しく復た晚れ。鄉思愁に堪へず。西北浮雲の外。(三)伊川何の處にか流る。

㊀風の荻を吹く音　㊁月照して萬物影を生じ、樹聲水聲、みな秋の淋しさを添ふ　㊂伊水は何處を流るゝか。（洛陽を憶ふ意）

村行　　姚揆

天淡雨初晴。遊人恨不勝。亂山啼蜀魄。孤棹宿巴陵。影暗村橋柳。光寒水寺燈。罷吟思故國。窗外有漁罾。

天淡くして雨初めて晴る。遊人恨勝へず。亂山蜀魄啼き。孤棹巴陵に宿す。影は暗し村橋の柳。光は寒し水寺の燈。吟を罷めて故國を思ふ。(一)窗外漁罾あり。

(一) 船窗の外に漁網を掛く（故鄕の景に似る）

甘露寺に題す　　曹松

香門接巨壘。畫角間清鐘。北固一何峭。西僧多此逢。天垂無際海。雲白久晴峯。日暮然燈外。潮頭振蟄龍。

(一)香門巨壘に接し。畫角淸鐘に間る。(二)北固一に何ぞ峭しき。(三)西僧多く此に逢ふ。(四)天は垂る無際の海。雲は白し久晴の峯。日暮然燈の外。(五)潮頭蟄龍振ふ。

（已前共に十七首）

(一) 寺、石頭城に接す　(二) 北固山嶮し　(三) 西域の僧、多く來る　(四) 海、天に連り、際涯なし　(五) 溢潮の時龍出で躍る

(一) 三四、實事を敍し、情思に傾く

夜入楚家煙。
煙中人未眠。
望來淮岸盡。
坐到酒樓前。
燈影半臨水。
箏聲多在船。
乘流向東去。
別此易經年。

露白草猶青。
淮舟倚岸停。
風帆幾處客。
天地兩河星。
樹靜禽眠草。
沙寒鹿過汀。
明朝誰結伴。
直去泛滄溟。

夜淮陰に泊す　項斯

(一)夜楚家の煙に入る。煙中人未だ眠らず。望み來れば淮岸盡き。(二)坐して到る酒樓の前。燈影半ば水に臨み。(三)箏聲多くは船に在り。(四)流に乘じて東に向ひ去らば。此に別れて年を經るに易からん。

(一)夜景の煙の中に入る　(二)舟に坐し、酒樓の前に到る　(三)舟に箏(こと)の音多し　(四)年を經ざれば再び來り難し

秋夜淮口に宿す　景池

露白うして草猶ほ青し。淮舟岸に倚つて停る。風帆幾處の客ぞ。(一)天地兩河の星。樹靜かにして禽草に眠り。沙寒うして鹿汀を過ぐ。明朝誰か伴を結んで。(二)直に去つて滄溟に泛ばん。

(一)星の影、銀河と淮水とに滿つ　(二)世を避け海に泛ばん

徒悲行路難。

遠聲霜後樹。秋色水邊村。野徑無來客。寒風自動門。海山藏日影。江石落潮痕。惆悵高飛晚。年年別故園。

相思春樹綠。千里各依依。鄠杜月頻滿。瀟湘人未歸。桂華風半落。煙草蝶雙飛。一別無消息。水南蹤跡稀。

秋晚郊居　　任蕃

(一)遠聲霜後の樹。秋色水邊の村。野徑來客なく。寒風自ら門を動す。海山日影藏れ。(二)江石潮痕落つ。(三)惆悵す高飛の晚きを。年年故園に別る。

(一) 霜を受けし樹、遠く鳴る　(二) 石に引き潮のあとを留む　(三) 榮進遲く、年々故園を出づるを悲しむ。(科擧に應ずるため)

(一)友人南遊して還らず　　于武陵

相思春樹綠なり。千里各々依依たり。(二)鄠杜月頻りに滿ち。瀟湘人未だ歸らず。(三)桂華風に半ば落ち。(四)煙草蝶雙び飛ぶ。一別して消息なし。(五)水南蹤跡稀なり。

(一) 武陵の妻の作なりといふ、友人は武陵を指す　(二) 鄠の地に歳月を費す　(三) 秋の花　(四) 春の艸　(五) 水南(瀟湘)の地は人跡稀なる處なり

迢遞不歸客。(一)
人傳虛隱名。

鳥鳴春日晚。
喜見竹門開。
路自二高巖一出。
人騎二痩馬一來。
折レ華林影動。
移レ石澗聲回。
更欲二留深語一。
重城暮色催。

林棲無二異歡一。
煮レ茗就二花欄一。
雀啄北窗晚。
僧開二西閣一寒。
銜レ橋二水急。
扣レ月一鐘殘。
明發還分レ手。

(一) 久しく山に入らざれば、虛僞の隱士なりといはれん

春、友人山舍に至るを喜ぶ　周賀

鳥鳴いて春日晚れ。喜び見る竹門の開くを。(一)路は高巖より出で。人は痩馬に騎つて來る。華を折れば林影動き。石を移せば(二)澗聲回る。更に留めて深語せんと欲すれば。重城暮色催す。

(一) 巖の間に屈曲す　(二) 谷の水めぐり鳴る

(一)龍翔に胡權が宿を訪ふを喜ぶ　喩鳧

(二)林棲異歡なし。(三)茗を煮て花欄に就く。雀は啄む北窗の晚。僧は西閣を開いて寒し。橋を銜いて二水急に。月に扣いて一鐘殘る。明發還た手を分つ。徒に悲しむ行路の難きを。

(一) 弘農龍翔寺　(二) 山居にめづらしき樂しみなし　(三) 茗(ちや)を煮、花咲く欄に倚る

無言亦已忘。

華宮難久別。道者憶千燈。殘雪入林路。深山歸寺僧。日光依嫩草。泉響滴春氷。何用求方便。看心是一乘。

一瓶離別酒。未盡卽言行。萬水千山路。孤舟幾日程。川原秋色盡。蘆葦晩風鳴。

れ眞の入不二法門なり」)

普門上人を送る

皇甫冉

(一)華宮久しく別れ難し。(二)道者千燈を憶ふ。殘雪林に入る路。深山寺に歸る僧。(三)日光嫩草に依り。泉響春氷滴る。(四)何ぞ用ひん方便を求むることを。心を看る是れ一乘。

(一)久しく寺を離れ難し (二)道を求むるもの、上人を憶ひ、千燈の光明に比す (三)日光、軟かき艸を照す (四)法を說くに諸方便を用ひず、たゞ心より心に傳ふ。(惠海禪師云、律師、法師、禪師、三學殊なりと雖も、宗を得言を忘るゝは、一乘何ぞ異ならん)

耿處士を送る

賈島

一瓶離別の酒。未だ盡きざるに卽ち行を言ふ。萬水千山の路。孤舟幾日程ぞ。川原秋色盡き。蘆葦晩風鳴る。(一)迢遞として不歸の客たらば。人は傳へん虛隱の名。

長江獨至レ今。

塞鴻歸欲レ盡。北客始辭レ秦。零桂雖レ逢レ竹。瀟湘少レ見レ人。江花鋪二淺水一。山木暗二殘春一。修レ刺轅門裏。多憐爾爲レ親。

雲天宜二北戸一。塔廟似二西方一。林下僧無レ事。江淸日正長。石泉爲レ掬冷。山實滿レ枝香。寂寞傳二心印一。

樊兵曹が潭州の韋大夫に謁するを送る　　李嘉祐

塞鴻歸つて盡きんと欲し。（一）北客始めて秦を辭す。（二）零桂竹に逢ふと雖も。瀟湘人を見ること少なり。（三）江花淺水に鋪き。山木殘春に暗し。（四）刺を修す轅門の裏。多くは憐む（五）爾が親の爲にするを。

（一）兵曹、長安を出づ　（二）零陵八桂に到り、斑竹（湘君の涙痕をとゞむる竹）を見る　（三）水淺く落花滿ち敷く　（四）軍門に到り韋大夫に謁す。刺（名刺）　（五）親のために事ふるを憐む

西郊の蘭若（一）　　羊士諤

雲天北戸に宜しく。（二）塔廟西方に似たり。（三）林下僧事なく。江淸うして日正に長し。石泉掬に盈ちて冷かに。（四）山實枝に滿ちて香し。寂寞として心印を傳へ。（五）無言も亦已に忘る。

（一）寺　（二）高く聳え、北に向ふ　（三）西方天竺に似たり　（四）水をすくひ、手に盈つ　（五）無言にして妙理を悟る。（達磨祖師いふ「内に心印を傳へて澄心に契し、外は袈裟を付して宗旨を定む」又、文殊云「文字語言あるなし、こ

天寒夢澤深。羊公碑尚在。讀罷一沾襟。

刑逸人に寄す

鄭常

羨君無外事。日與世情違。
地僻人難到。溪深鳥自飛。
儒衣荷葉老。野飯藥苗肥。
若問湖邊意。而今憶共歸。

羨む君が外事なきを。(一)日に世情と違ふ。地僻にして人到り難く。溪深うして鳥自ら飛ぶ。(二)儒衣荷葉老い。野飯藥苗肥ゆ。若し湖邊の意を問はば。而今(三)共に歸るを憶ふ。

(一)日々に俗情に遠ざかる　(二)儒者の著る青衣を作るべき荷葉老ゆ　(三)共に湖邊に歸隱したし

吳明徹の故壘(一)

劉長卿

古臺搖落後。秋日望鄉心。
古寺人來少。雲峯隔水深。
夕陽依舊壘。寒磬滿空林。
惆悵南朝事。長江獨至今。

(二)古臺搖落の後。秋日望鄉の心。古寺人の來ること少く。雲峯水を隔てて深し。夕陽舊壘に依り。寒磬空林に滿つ。(三)惆悵す南朝の事。(四)長江獨り今に至る。

(一)陳の將軍、軍を督して周を伐ち、周將王軌に擒へらる、後人壘址に就きて寺を建つ　(二)落葉の後、臺に登り故鄉を望む　(三)六朝の盛衰を悲しみ、吳將軍を弔ふ　(四)長江のみ、今に至るまで流る

日色冷二青松一。薄暮空潭曲。安禪制二毒龍一。

故友漢中尉。請爲二西蜀吟一。人家多種レ橘。風土愛レ彈レ琴。水向二昆明一闊。山通二大夏一深。理レ閑無二別事一。時寄一登臨。

友人蜀中に尉たるを送る　徐晶

(一)故友漢中の尉。(二)請ふ西蜀の吟をなさん。(三)人家多くは橘を植ゑ。風土琴を彈ずるを愛す。(四)水は昆明に向つて闊く。(五)山は大夏に通じて深し。閑を理して別事なくんば。(六)時に寄せよ一登臨。

(一)君、漢中(蜀)の尉となる　(二)蜀の事を詠じて送らん　(三)人家多く橘を種ゑ、風俗彈琴を好む　(四)水、西南夷昆明の滇池に連る　(五)山、西戎大夏(中天竺)に接す　(六)閑暇無事の時、登覽の興を報ぜよ

人事有二代謝一。往來成二古今一。江山留二勝迹一。我輩復登臨。水落魚梁淺。

諸子と峴山に登る　孟浩然

人事代謝あり。往來古今を成す。江山(一)勝迹を留め。我輩復た登臨す。水落ちて(二)魚梁淺く。天寒うして(三)夢澤深し。(四)羊公碑尙ほ在り。讀み罷んで一に襟を沾す。

(一)勝景古跡などをいふ　(二)魚を捕る梁(やな)　(三)雲夢澤　(四)なほ羊祜叔子の墮涙碑(前に注す)あり

九陌除書出。
尋レ僧問二海城一。
家從二中路一挈。
吏隔二數州一迎。
夜蚌侵二燈影一。
春禽雜二櫓聲一。
開レ圖知二異迹一。
思想石橋行。

不レ知二香積寺一。
數里入二雲峰一。
古路無二人迹一。
深山何處鐘。
泉聲咽二危石一。

董卿台州に赴くを送る　張　蠙

(一)九陌除書出で。僧を尋ねて海城を問ふ。(二)家は中路より挈へ。(三)吏は數州を隔てて迎ふ。(四)夜蚌燈影を侵し。春禽櫓聲に雜る。圖を開いて異迹を知る。(五)思想す石橋に行くを。

(一)朝廷より辭令書出づ　(二)台州(臨海郡)に赴く　(三)途中より家族を伴ひ、州吏遠く迎ふ　(四)蚌珠の光、燈火に添ふ　(五)天台山石橋に遊ぶならん

(一)前聯實に近し

(已前共に十一首)

香積寺を過ぐ　王　維

香積寺を知らず。數里雲峰に入る。古路人迹なし。深山何の處の鐘ぞ。泉聲危石に咽び。日色青松に冷かなり。薄暮空潭の曲。安禪毒龍を制す。

○唐詩選に出づ

縣舍江雲裏。
心閑境自偏。
家貧陶令菊。
月俸沈郎錢。
黃檗香山路。
青楓暮雨天。
時聞引二車騎一。
竹外有二銅泉一。

來レ朝當レ路日。
承レ詔改レ轅時。
出領二須句國一。
仍兼二少昊司一。
暖風抽二宿麥一。
清雨捲二歸旗一。
賴寄新珠玉。
長吟慰二我思一。

金華の王明府を送る　　韓翃

縣舍江雲の裏。心閑かにして境自ら偏なり。(一)家貧陶令が菊。(二)月俸沈郎が錢。(三)(四)黃檗香山の路。青楓暮雨の天。時に聞く車騎を引くを。(五)竹外銅泉あり。(六)

(一) 僻地に住み、心のどかなり (二) 陶淵明菊を東籬に種う (三) 沈約、婺州(金華)に官す、又、沈充小錢を鑄、沈郎錢といふ (四) 香山に黃檗(蘗木)榮ゆ (五) 車騎を率ゐて出遊す (六) 異苑に「婺州に五百人湖あり、吳の時軍出でて土を破り銅泉を得、之を致すれば水俄かに涸り五百人皆沒す、後湖となる」

張侍郎が馬尙書に酧ゆるに和す　　韓愈

朝に來つて路に當る日。詔を承けて轅を改むる時。(一)出でては須勾の國を領し。(二)仍ほ少昊の司を兼ぬ。暖風宿麥を抽き。清雨歸旗を捲く。(三)賴に寄す新珠玉。長吟して我が思を慰む。

(一) 朝廷にて要路に當り、又、詔を承けて地方に出づ (二) 鄆州(古の須勾)の守となり、刑部尙書を兼ぬ(少昊は秋帝、刑を司る) (三) 新しき詩を寄せらる

淒然雙樹下。
垂ㇾ涙遠公房。
燈續二生前火一。
爐添二沒後香一。
陰堦明二片雪一。
寒竹響二空廊一。
寂滅應ㇾ爲ㇾ樂。
塵心徒自傷。

青春三十餘。
衆藝盡無ㇾ如。
中散詩傳ㇾ畫。
將軍扇賣ㇾ書。
楚田晴下ㇾ雁。
江日暖多ㇾ魚。
惆悵空相送。
歡遊自ㇾ此疎。

(一)淒然たり雙樹の下。涙を垂る遠公の房。燈は生前の火を續ぎ。爐には沒後の香を添ふ。陰堦片雪明かに。寒竹空廊に響く。(二)寂滅應に樂を爲すべし。塵心徒に自ら傷む。

(一) 上人入寂し、哀悼の涙流る。涅槃經に「世尊、拘尸那城雙樹の間に入滅す」 (二) 寂滅爲樂の教あるも、なほ悼み悲しむ

曹椅を送る　　司空曙

(一)青春三十餘。衆藝盡く如くなし。(二)中散詩畫を傳へ。將軍扇書を賣る。楚田晴れて雁下り。江日暖かにして魚多し。惆悵して空しく相送る。(三)歡遊此れより疎ならん。

(一) 壯年三十餘、諸藝人に秀づ (二) 詩を善くし、又、書を善くす。晉書に「顧愷之、嘗に稽中散四言の詩を重んじ、因つて之が圖をつくる」又、沈約晉書に「王羲之右軍將軍たり、嘗て一老嫗が竹扇を持つを見、五字を扇上に書して曰ふ、たゞ王右軍之を書すといへと、嫗その言の如くし、人爭つて之を購ふ」 (三) 君去りて後、快く遊ぶこと少からん

細草綠二汀洲一。
王孫耐二薄遊一。
年華初冠帶。
文彩舊弓裘。
野渡花爭發。
春塘水亂流。
史君憐二小阮一。
應レ念二倚レ門愁一。

長安渭橋路。
行客別時心。
獻二賦温泉一畢。
無レ媒二魏闕深一。
黃鶯啼就レ馬。
白日暗歸レ林。
三十名未レ立。
君還惜二寸陰一。

細草汀洲に綠に。王孫薄遊するに耐へたり。年華初めて冠帶。(一)文彩舊弓裘。野渡花爭ひ發き。春塘水亂れ流る。史君小阮を憐むも。(二)應に門に倚るの愁を念ふべし。

(一) 年齡若く、文章は父の業を傳ふ。莊子に「良弓の子は必ず箕を爲るを學び、良冶の子は必ず裘を爲るを學ぶ」 (二) 史君、君(阮籍の姪、阮咸に比す)を愛するも、故鄕の母を忘るゝなかれ。戰國策に「王孫賈の母、賈に謂つて曰く、汝朝に出でて晩に來る吾則ち門に倚りて汝を望む」

章彝が下第せるを送る　綦毋潛

長安渭橋の路。行客別時の心。(一)賦を温泉に獻じ畢へて。魏闕の深きに媒するなし。黃鶯啼いて馬に就き。白日暗うして林に歸る。三十にして名未だ立たず。君還つて寸陰を惜しめ。(二)

(一) 賦を温泉宮(玄宗驪山の離宮)に獻ぜしも、終に朝に用ひられず (二) 時を惜しみ學に勉むべし

空寂寺に元上人を悼む　錢起

蘇耽佐レ郡時。
近出白雲司。
藥補ニ清羸疾一。
窻吟ニ絶妙詞一。
柳塘春水漫。
花塢夕陽遲。
欲レ識ニ懷レ君意一。
朝朝訪ニ檝師一。

蘇耽郡に佐たる時。(一)近ごろ出でて白雲の司たり。藥に(二)清羸の疾を補ひ。窻には絶妙の詞を吟ず。柳塘春水漫り。(三)花塢夕陽遲し。(四)君を懷ふの意を識らんと欲せば。朝朝檝師に訪へ。

(一)君（古人蘇耽に比す）郡守の佐となり、近く刑部の官に拜す　(二)清く痩する病　(三)花のつゝみに日永し　(四)いかに君を懷ふかは、毎朝往來の舟師に問ふべし

至弘上人に別る

最稱弘偃少。
早歲草茅居。
年老從ニ僧律一。
生知解ニ佛書一。
衲衣求ニ壞帛一。
野飯拾ニ春蔬一。
章句無レ求レ斷。
時中學有レ餘。

(一)最も稱す弘偃少。早歲草茅の居。年老いて僧律に從ひ。(二)生知にして佛書を解す。(三)衲衣壞帛を求め。野飯春蔬を拾ふ。(四)章句斷を求むるなく。(五)時中學餘あり。

(一)稀なる高僧にして、壯年より草廬を結ぶ　(二)天性智深く、よく佛者（經律論）に通ず　(三)破れたる帛（きぬ）を求め、僧衣を製す　(四)字句の解釋を事とせず。（不立文字の意）　(五)時に應じて道を行ひ、學德餘りあり。中庸に「君子時中」

王牧吉州に往き史君叔に謁するを送る

李嘉祐

程侯新出守。好日發行軍。拜命時人羨。能官聖主聞。江樓暗寒雨。山郭冷秋雲。竹馬諸童子。朝朝侍使君。

程侯新に出でて守たり。好日行軍を發す。命を拜して時人羨み。官を能くして聖主聞く。江樓寒雨暗く。山郭秋雲冷なり。竹馬の諸童子。朝朝使君を待たん。

㊀竹馬にのる童子も、日々君の赴任を待つべし

漢陽の即事　　儲光羲

楚國千里遠。孰知方寸違。春游歡有客。夕寢賦無衣。江水帶冰綠。桃花隨雨飛。九歌有深意。捐珮乃言歸。

楚國千里遠し。孰か方寸の違ふを知らん。春游客あるを歡び。夕寢衣なきを賦す。江水冰を帶びて綠に。桃花雨に隨つて飛ぶ。九歌深意あり。珮を捐てて乃ち言に歸らん。

㊀遠き楚に貶せられ、本意に違へるを悲しむ　㊁九歌（屈原の作）の深意に倣ひ、佩を棄てゝ歸りたし。九歌に「余が袂を江中に捐て、余が佩を澧浦に遺る」

劉員外寄せらるゝに酬ゆ　　嚴維

結レ茅遮二雨露一。
採レ藥給二晨昏一。
古樹藤纏殺。
春泉鹿過渾。
悠悠無二一事一。
不レ似レ屬二乾坤一。

逍遙短褐成。
一劍動二精靈一。
白晝夢二仙島一。
清晨禮二道經一。
黍苗侵二野徑一。
桑椹汚二閑庭一。
肯要レ爲レ鄰者。
西南太華青。

を採つて晨昏に給す。古樹藤纏ひて殺れ。春泉鹿過ぎて渾る。悠悠として一事なし。乾坤に屬するに似ず。

(一) 屋根に茅を葺く (二) 朝夕の食用とす (三) 俗累なく、天地の外にある如し

司空圖に寄す　僧 虚中

逍遙短褐成り。一劍精靈を動す。白晝仙島を夢み。淸晨道經に禮す。黍苗野徑を侵し。桑椹閑庭を汚す。肯て要せんや鄰を爲す者。西南に太華靑し。

(一) 閑居に短褐(短き毛衣)をまとふ (二) 天地精靈の氣を動かす。大戴記に「陽氣を精とし陰氣を靈とす」 (三) 晝仙境を夢みて眠る (四) 曉道經を誦し、神に禮す (五) 黍の苗、こみちに生じ、桑の實庭に落つ (六) 隣りに交はるものを要せず (七) 西南に太華山靑し。(友とすべし)

(已前共に八首)

(一) 隱逸閑野の趣をいふ

成州の程使君を送る　岑 參

靜依二禪客院一。
幽學二野人家一。
林晚鳥爭レ樹。
園春蝶護レ花。
東門有二閑地一。
誰種二邵平瓜一。

煙霞多放曠。
吟嘯是尋常。
猿共摘二山果一。
僧鄰住二石房一。
躡レ雲雙屐冷。
採レ藥一身香。
我憶相逢夜。
松潭月色涼。

見說來居レ此。
未三嘗離二洞門一。

の家を學ぶ。林晩れて鳥樹を爭ひ。園春にして蝶花を護る。東門に閑地あり。(四)誰か邵平が瓜を種ゑん。

(一)長安に落第す。(卞和の玉、前に注す)　(二)故鄉遠く、歸るを得ず　(三)都に禪寺に住み、田家の居をなす　(四)秦の邵平の如く、閑地を求めて隱れたし

山中高逸の人に寄す　(一)

孟貫

(二)煙霞多くは放曠。吟嘯是れ尋常。猿と共に山果を摘み。僧と鄰りて石房に住す。雲を躡んで雙屐冷かに。藥を採つて一身香し。我は憶ふ相逢ふ夜。松潭月色の涼しきを。

(一)世に隱れたる人　(二)山中の景をほしいまゝにし、常に吟咏を樂しむ

盧嶽の隱者

杜荀鶴

見說來つて此に居り。未だ嘗て洞門を離れずと。(一)茅を結んで雨露を遮り。藥

龜上半欹蓮。
屢入忘歸地。
長嗟俗事牽。

楚翁住秦塞。
昔事李輕車。
白社貧思橘。
青門老種瓜。
讀書三逕草。
沽酒一籬花。
更欲尋芝朮。
商山便寄家。

懷玉泣京華。
舊山歸路賒。

㊀竹の落葉を掃ひ、席を敷く ㊁蓮の葉に舟をつなぐ ㊂新にゑみし栗 ㊃半ば折れ傾ける蓮 ㊄屢々幽境に入るも、なほ俗事に煩ふを嘆く

灞東司馬の郊園　　許渾

(一)楚翁秦塞に住み。昔(二)李輕車に事ふ。(三)白社貧しうして橘を思ひ。青門老いて瓜を種う。(四)書を讀む三逕の草。酒を沽ふ一籬の花。(五)更に芝朮を尋ねんと欲せば。商山便ち家を寄せん。

㊀楚人司馬、今、秦に住む ㊁曾て將軍に從ふ。(李廣の弟蔡、輕車都尉となる) ㊂閑居に橘を思ひ、また瓜を種う。(白將軍、圃を洪州に築き白社と名く、又襄陽記に「李衡、橘千樹を種ゑ、死に臨み、兒を勸めて曰ふ、木奴千頭、亦用ふるに足ると」又、秦の邵平、老いて瓜を青門に種う) ㊃幽居に書を讀み、酒を樂しむ。(蔣詡竹下に三徑を開く、又、陶淵明東籬に菊を種ゑ、酒を樂しむ) ㊄更に仙藥を尋ね、山中に隱れんとす。(漢の四皓、初め秦の亂を避け、共に商洛山に入る)

下第して崇聖寺に寓居す

(一)玉を懷いて京華に泣き。(二)舊山歸路賒なり。(三)靜に禪客の院に依つて。幽に野人

自憐黄髮暮。
一倍惜二年華一。

欲レ究二先儒教一。
還過二支遁居一。
篠堦閑聽レ法。
竹寺獨看レ書。
向レ日荷新卷。
迎レ秋柳半疎。
風流有二佳句一。
不レ似二帶レ經鋤一。

回塘分二越水一。
古樹積二吳煙一。
掃レ竹催レ鋪レ席。
垂レ蘿待レ繋レ船。
鳥窺新罅栗。

子に「惠施多方、その書五車」（車五輛に積む程の意） ㈡ 園中の葵を煮、貧賓を迎ふ ㈢ 諸公竹を見つゝ我が家に到る ㈣ 春草の萠ゆるに先ち、雀、兒を養ふ ㈤ 年老い、殊に春を惜しむ

王正字が山寺に書を讀むを送る　李嘉祐

先儒の教を究めんと欲して。還た㈠支遁が居に過ぎる。㈡篠堦閑に法を聽き。竹寺獨り書を看る。日に向つて㈢荷新に卷き。秋を迎へて柳半ば疎なり。風流佳句あり。㈣經を帶びて鋤くに似ず。

㈠ 僧居を訪ふ ㈡ 法話を篠（しの）深き階邊に聞く ㈢ 蓮の卷葉新に出づ ㈣ 貧しくして讀書するものと異る。魏志に「常林性學を好み、諸生と經を帶びて鋤く」

秋日、徐氏の園林を過ぐ　包佶

回塘越水分れ。古樹吳煙積む。㈠竹を掃つて席を鋪くことを催し。㈡蘿を垂れて船を繋ぐを待つ。㈢鳥は窺ふ新罅の栗。㈣龜は上る半畝の蓮。㈤屢〻忘歸の地に入つて。長く嗟す俗事に牽かるゝを。

官卑長少レ事。
縣僻又無レ城。
未レ曉銜レ寒起。
迎レ春忍レ病行。
樹枝風掉軟。
菜甲土浮輕。
最好林間鶴。
今朝足二喜聲一。

松菊荒二三徑一。
圖書共二五車一。
烹レ葵邀二上客一。
看レ竹到二貧家一。
雀乳先二春草一。
鶯啼過二落花一。

新春

官卑うして長く事少く。(一)縣僻にして又城なし。未だ曉けざるに寒を銜いて起ち。春を迎へて病を忍んで行く。(二)樹枝風掉いて軟かに。菜甲土浮いて輕し。最も好し林間の鶴。今朝喜聲足る。

(已前共に七首)

(一) 僻地にして城をなさず　(二) 木々の風軟かに吹き、蔬菜に土輕く浮く。(凍の解けたる意)

(一) 中四句、對法を切にす

晩春、嚴少尹諸公の過ぎらるゝに答ふ　王維

(一)松菊三徑荒れ。圖書五車を共にす。(二)葵を烹て上客を邀へ。(三)竹を看て貧家に到る。(四)雀乳して春草に先ち。鶯啼いて落花を過ぐ。(五)自ら憐む黃髮の暮。一倍年華を惜しむことを。

(一) 三徑(庭のこみち)荒るゝに任せ、たゞ多くの圖書を藏す。陶淵明歸去來辭に「三徑荒に就き、松菊猶は存す」、莊

高亭賓客散。暑夜最相和。細汗凝レ衣集。微涼待レ扇過。風還池色定。月晩樹陰多。遙想隨レ行者。珊珊動ニ曉珂一。

塵中主印吏。誰遣レ有ニ高情一。趁レ暖簷前坐。尋レ芳樹底行。土融凝ニ野色一。氷敗滿ニ池聲一。漸覺春相泥。朝來睡不レ輕。

夏夜西亭の即事　耿緯

高亭賓客散じ。(一)暑夜最も相和す。細汗衣に凝つて集り。(二)微涼扇を待つて過ぐ。(三)風還つて池色定り。月晩れて樹陰多し。遙に想ふ行に隨ふ者。(四)珊珊として曉珂を動すを。

(一)暑夜の心靜なり　(二)微涼扇より生ず　(三)風止みて池靜に、月落ちて木蔭暗し　(四)宦途の人々、珂(たま)を鳴して早朝するを想ふ

庭春　姚合

(一)塵中主印の吏。誰か高情あらしむる。暖を趁うて簷前に坐し。芳を尋ねて樹底に行く。(二)土融けて野色凝り。氷敗れて池聲滿つ。(三)漸く覺ゆ春の相泥むを。朝來睡輕からず。

(一)俗吏に高情あらしむるは誰ぞ　(二)土柔かに野青く、氷解けて池水鳴る　(三)春の心地よく、朝の眠深し

白雲乖始願。滄海有微波。戀舊爭趍府。臨危欲負戈。春歸華殿暗。秋傍竹房多。耐可機心息。其如羽檄何。

登山自補屐。訪友不齎糧。坐歇青松晚。行吟白日長。人煙隔水見。草氣入林香。誰作招尋侶。清齋宿紫陽。

宣州使院に韋應物に別る　　劉長卿

(一)白雲始願に乖き。(二)滄海微波あり。(三)舊を戀うて爭うて府に趍り。危に臨んで戈を負はんと欲す。(四)春は華殿に歸つて暗く。秋は竹房に傍うて多し。(五)機心の息むべきに耐へたり。其れ羽檄を如何せん。

(一) 隠棲したき願にそむく (二) 世上なほ騒がし (三) 舊恩を懐ひて從軍し、戈を執りて戰はんとす (四) 春暮れて花殿暗く、竹房に秋涼多し (五) 俗念消えんとするも、檄書來りて軍府に召さる

陸澧夫、延陵に友を尋ぬるを送る　　皇甫冉

(一)山に登つて自ら屐を補ひ。友を訪うて糧を齎まず。坐しては歇ふ青松の晩。行ゝ吟ずれば白日長し。人煙水を隔てて見。草氣林に入つて香し。(二)誰か招尋の侶となつて。清齋紫陽に宿せん。

(一) 木屐（げた）をつくらふ。（晉の謝靈運山に遊ぶに木屐を著け、上るには前齒を去り、下るには後齒を去る） (二) 君を紫陽觀（延陵の道院）に招き、共に齋食するは誰ぞ

別路千餘里。
深恩重二百年一。
正悲西候日。
更動北梁篇。
野色籠二寒霧一。
山光斂二暮煙一。
終知難二再奉一。
懷レ德自潸然。
失路農爲レ業。
移レ家到二汝墳一。
獨愁常廢レ卷。
多病久離レ羣。
鳥雀垂二窓柳一。
虹蜺出二澗雲一。
山中無二外事一。
樵唱有レ時聞。

秋日王長史に別る(一)　王勃

別路千餘里。深恩百年重し。(二)正に悲む西候の日。更に動す北梁の篇。(三)野色寒霧籠め。山光暮煙斂る。(四)終に知る再び奉じ難きを。德を懷うて自ら潸然。

(一)王勃の叔父　(二)恩深く、生涯忘れ難し　(三)秋日、相別るゝを怨む。江淹の別賦に「北梁に訣(わか)れ永く辭す」　(四)再び從遊し難きを知り、恩德を思ひて泣く

汝墳の別業　祖詠

失路農を業とし。家を移して汝墳に到る。(一)獨愁へて常に卷を廢し。多病久しく羣を離る。鳥雀窓柳に垂れ。(二)虹蜺澗雲より出づ。山中に外事なく。樵唱時あつて聞く。

(一)愁へて讀書を廢し、病みて交際を絶つ　(二)澗(たに)の雲より虹たつ。筆談に「世に傳ふ、虹蜺溪澗に入りて水を飮むと、信に然り」

相逢惟道在。
誰不二共知一レ貧。
歸路分二殘雨一。
停レ舟別二故人一。
霜明松嶺曉。
花暗竹房春。
亦有二棲閑意一。
何年可レ寄レ身。

相逢うて惟道のみ在り。(一)誰か共に貧を知らざる。歸路殘雨を分ち。舟を停めて故人に別る。霜は明かなり松嶺の曉。花は暗し竹房の春。(二)亦棲閑の意あり。(三)何の年か身を寄すべき。

㊀逢ひて道を語るのみ、貧富は問ふ所にあらず　㊁余もまた閑居の志あり　㊂山に入るは何時ならんか

友人宜春に歸るを送る　張喬

落花兼二柳絮一。
無二處不一二紛紛一。
遠道空歸去。
流鶯獨自聞。
野橋喧レ碓水。
山郭入レ樓雲。
故里南陵曲。
秋期更送レ君。

落花と柳絮と。處として紛紛たらざるなし。遠道空しく歸り去り。流鶯獨自ら聞く。野橋碓に喧しき水。(一)山郭樓に入る雲。(二)故里南陵の曲。秋期更に君を送る。

㊀水碓（みづうす）喧し　㊁南陵（宜春に近し）に歸るゝ、秋は再び出京を送る。（應試のため）

（已前共に五首）
(一)

㊀三四句意相接續す

自說深居後。
鄰州亦不ㇾ行。

別離楊柳陌。
迢遞蜀門行。
若聽ニ清猿ー後。
應ㇾ多ニ白髮生ー。
虹蜺侵ニ棧道ー。
雨雪雜ニ江聲ー。
過ニ盡愁ㇾ人處ー。
煙花是錦城。

愁吟與ニ獨行ー。
何事不ㇾ關ㇾ情。
久立釣魚處。
惟聞啼鳥聲。
山蔬和ㇾ雨歇。
海樹入ㇾ籬生。
吾在ニ茲溪上ー。
懷ㇾ君恨不ㇾ平。

人の蜀に歸るを送る　馬戴

別離す楊柳の陌。(一)迢遞たり蜀門の行。若くは清猿を聽いて後。應に白髮の生ずる多かるべし。(二)虹蜺棧道を侵し。雨雪江聲を雜ふ。人を愁へしむる處を過ぎ盡せば。(三)煙花是れ錦城。

(一)蜀への路遠し　(二)棧道(かけはし)に虹たち、雨雪に水聲まじる　(三)錦官城に春景美し

周處士の故居を經　方干

(一)愁吟と獨行と。何事か情に關せざらん。久しく立つ釣魚の處。惟聞く啼鳥の聲。(二)山蔬雨に和して歇き。海樹籬に入つて生ず。吾この溪上に在つて。君を懷うて恨平ならず。

(一)愁吟し獨行し、心を傷めざるなし　(二)蔬菜、雨に打たれて無くなる

人の山に歸るを送る　石召

下レ馬虎溪時。
已到終嫌レ晚。
重遊預作レ期。
寺寒三伏雨。
松偃數朝枝。
翻譯如二曾見一。
白蓮開滿レ池。

辭レ僧下二水棚一。
因聽嶽鐘聲。
遠路獨歸レ寺。
幾時重到レ城。
風高寒木落。
雨絕夜堂淸。

め期を作す。(三)寺は寒し三伏の雨。松は偃す數朝の枝。(四)翻譯曾て見るが如し。白蓮開いて池に滿つ。

㊀廬山虎溪に來り、馬を下る　㊁來遊の遲かりしを悔い、再遊を期す　㊂三伏の雨寒く、松は數朝(齊、梁、陳、隋等)を經し枝を偃す。陰陽書に「夏至の後、第三庚日を初伏とし、第四庚を中伏とし、秋第一庚を末伏とす」　㊃白蓮開き、古人翻譯の時に似たり。廬山記に「謝靈運、東林に即き、涅槃經を翻す日、臺を鑿ち、蓮を池中に植う」

(已前共に二十首)(一)

㊀七八句、中聯を收拾す

僧の嶽に還るを送る　周賀

(一)僧を辭して水棚を下り。因つて聽く嶽鐘の聲。遠路獨り寺に歸り。幾時か重ねて城に到らん。風高うして寒木落ち。雨絕えて夜堂淸し。(二)自ら說く深居の後。鄰州も亦行かずと。

㊀僧を送りて水棚(はし)を下る時、山上の鐘聞ゆ　㊁山中に隱れ、隣國にも往來せずと

中間京洛塵。
倦レ行今白首。
歸臥已清晨。
坡暖冬生レ筍。
松涼夏健レ人。
更慚徵詔起。
避レ世迹非レ眞。

郊居謝二名利一。
何事最相親。
漸與論レ詩久。
皆知得レ句新。
川明虹照レ雨。
樹密鳥銜レ人。
應レ念從レ今去。
還來二嶽下一頻。

平生愛二山水一。

にして冬筍を生じ。松涼しうして夏人を健にす。(五)更に慚づ徵詔せられて起つ。世を避けて迹眞にあらざるを。

(一)山館の意。(時に中條山下に寓す)　(二)都に往來すること三十年、俗塵に奔走す　(三)白髮になり、官遊に倦む　(四)退隱して晩に臥し、早朝出仕の煩なし　(五)かつて徵されて官に就き、眞に世に隱れざりしを恥づ

華下に文涓を送る

(一)郊居名利を謝し。何事か最も相親む。(二)漸く與に詩を論ずること久し。皆知る句を得る新なるを。川明にして虹雨を照し。樹密にして鳥人を銜く。(三)應に念ふべし今より去つて。還た嶽下に來ることの頻なるを。

(一)名利を捨てて郊居し、殊に何事に親むか　(二)たゞ詩を論じ、句を作るのみ　(三)君今より去るも、また屢々こゝ(華岳の麓)に來らん

東林寺に游ぶ　黄滔

(一)平生山水を愛す。(二)馬より下る虎溪の時。(三)已に到つて終に晩きを嫌ひ。重游預

教妾若爲容。
風暖鳥聲碎。
日高花影重。
年年越溪女。
相憶採芙蓉。

一飯仍難受。
淹留已半年。
終期身可報。
不擬骨空鐫。
城晚風高角。
江春浪起船。
曾同棲止地。
獨去塞鴻前。

三十年來往。

(四)年年越溪の女。相憶ふ芙蓉を採ることを。

㊀美貌却つて身を誤り、宮人の妬を受く　㊁容貌によりて君寵を得がたく、粧を凝らすも詮なし　㊂鳥聲亂れ聞ゆ　㊃越溪の婦女、芙蓉を採りて樂むを憶ふ。（宮中にあるを悲む）

崔尙書を辭す　　李頻

(一)一飯仍ほ受け難し。淹留已に半年。(二)終に期す身の報ずべきを。擬せず骨の空しく鐫せんことを。城晚れて(三)風角を高うし。(四)江春にして浪船に起る。曾て同じく棲止せし地。(五)獨去る塞鴻の前。

㊀一飯の恩も容易ならず、況んや淹留半年なるをや　㊁高恩を骨に刻み、必ず之に報ゆべし　㊂風吹き角聲高し　㊃舟に乘れば、春水波たつ　㊄塞上の雁に先だちて去る

(一)下方　　司空圖

(一)三十年來往す。中間京洛の塵。(三)行に倦んで今白首。(四)歸臥して已に淸晨。坡暖か

又應三何處逢一。
流年莫三虚擲一。
華髪不三相容一。
野渡波搖レ月。
寒城雨翳レ鐘。
此心隨三去馬一。
迢遞過三重峯一。

南行無三俗侶一。
秋雁與三寒雲一。
野趣自多悵。
名香人共聞。
吳山中路斷。
潮水半江分。
此地登臨慣。
攄レ情一送レ君。

早被三嬋娟誤一。
欲レ粧臨レ鏡慵。
承レ恩不レ在レ貌。

相容れず。野渡波月を搖し。(三)寒城雨鐘を翳す。(四)此の心去馬に隨ひ。迢遞として重峯を過ぎん。

(一)又いづこかにて逢ふならん　(二)空しく歳月を過すなかれ、忽ち白髪となちん　(三)雨降り、鐘の音かすかなり　(四)余が心君に伴ひ、長き山路を過ぎ行かん

友の及第して浙東に歸るを送る

南行俗侶なし。秋雁と寒雲と。(一)野趣自ら多く悵ひ。名香人共に聞く。(二)吳山中路斷え。(三)潮水半江分る。此の地登臨して慣れ。情を攄べて一たび君を送る。

(一)野趣、心に悵ひ、名聲すでに天下に聞ゆ　(二)吳山に到り、道、中ごろより絶ゆ　(三)潮水分流す

○春宮　　杜荀鶴

(一)早く嬋娟に誤られ。粧はんと欲して鏡に臨んで慵し。(二)恩を承るは貌に在らず。妾をして若爲ぞ容らしむ。(三)風暖かにして鳥聲碎け。日高うして花影重る。

杜陵無二厚業一。
不レ得レ駐二車輪一。
重到二曾遊處一。
多非二舊主人一。
東風千里樹。
西日一洲蘋。
又渡二湘江一去。
湘江水復春。

正是花時節。
思レ君寢復興。
市沽終不レ醉。
春夢亦無レ憑。
嶽面懸二清雨一。
河心走二濁氷一。
東門一條路。
離恨正相仍。

道路本無レ限。

（一）杜陵厚業なし。車輪を駐むるを得ず。（二）重ねて曾遊の處に到れば。多くは舊主人にあらず。東風千里の樹。西日一洲の蘋。又湘江を渡り去れば。（三）湘江水復た春なり。

（一）杜陵（長安杜曲）に生業を得ず、久しく留り難し　（二）曾遊の地に來るも、すでに舊主人なし　（三）湘江に春深く、人事の變轉するに似ず

早春華下の同志に寄す（一）　裴説

正に是れ花の時節。君を思うて寢ねて復た興く。（二）市沽終に醉はず。春夢亦憑なし。嶽面清雨懸り。河心濁氷走る。（三）東門一條の路。離恨正に相仍る。

（一）華山の下　（二）別後、市上の酒に醉はず、春夜の夢もたよりなし　（三）長安東門の路（華山に通ず）を望み、別離の恨深し

途中孫璐に別る　方干

道路もと限なし。（一）又應に何の處にか逢ふべき。（二）流年虛しく擲つなかれ。華髮

猶坐二病中禪一。
深壁藏二燈影一。
空窗出二艾煙一。
已無二鄕土夢一。
起レ塔寺門前。

君此卜二行日一。
高堂應レ夢レ歸。
莫下將二和氏涙一。
滴中著老萊衣上。
嶽雨連レ河細。
田禽出レ麥飛。
到レ家調膳後。
吟好レ送二斜暉一。

㊀日本　㊁海遠く、歸路を絶つ　㊂死後の事を言はず、病中に坐禪す　㊃艾（もぐさ）の煙窓より出づ　㊄鄕土を思はず、一身を佛にさゝぐ。南史に「阿育王滅度の後、佛舍利を取り、鬼神を役し、七寶末を碎き、未だ一日一夜ならざるに、八萬四千塔を作る」

友人下第して歸覲するを送る　　劉得仁

君此に行日を卜す。㊀高堂應に歸るを夢むべし。㊁和氏が涙を將つて。老萊が衣に滴著するなかれ。嶽雨河に連つて細く。田禽麥を出でて飛ぶ。㊂家に到つて調膳の後。吟じて斜暉を送るに好し。

㊀母堂、君の歸るを待たん　㊁落第の涙に孝養の衣を濕すなかれ。江陵府志に「卞和、玉を楚の厲王に獻ず、王、玉尹をして之を相せしむ、曰く石なりと、和を以つて偽れりとなし、その左足を刖る、武王卽位す、また之を獻ず、又、石となし、その右足を刖る、共王卽位す、和、璞（あらたま）を抱いて荊山の下に哭す、王人をして問はしむ、答へて曰く、吾れ寶玉なれども之に題するに石を以てし、之に名づくるに詐を以てするを悲むと」（寃ありて落第せしに比す）　㊂孝養の後、閑吟して日を送るべし

南游して感あり　　于武陵

むるなかれ

杭州郡齋の南亭　姚　合

符印懸₂腰下₁。東山不ㇾ得ㇾ歸。獨行南北近。漸老往還稀。迸筍侵ㇾ窗長。鷺蟬出ㇾ樹飛。田田池上葉。長是使君衣。

(一)符印腰下に懸り。東山歸るを得ず。(二)獨行南北近きも。漸く老いて(三)往還稀なり。(四)迸筍窗を侵して長じ。鷺蟬樹を出でて飛ぶ。(五)田田たる池上の葉。(六)長く是れ使君の衣。

(一) 郡守となり、閑地に就くを得ず（漢文帝、郡守のために銅虎符竹拔符を作り、符を合して兵を發せしむ、又、晉の謝安、東山に隱れ、妓を攜へて遊ぶ）(二) 郡衙と亭と、南北相近し (三) 客の往來少し (四) 筍（たけのこ）伸びて窗に入る (五) 蓮の葉生ひ茂る (六) 長く衣となさんとす。楚辭に「芰荷を製し以て衣となす」（身を潔くする意）

(一)日東の病僧　項　斯

雲水絕₂歸路₁。來時風送ㇾ船。不ㇾ言₂身後事₁。

(二)雲水歸路を絕ち。來時風船を送る。(三)身後の事を言はず。猶ほ病中の禪に坐す。深壁燈影を藏し。(四)空窗艾煙を出す。(五)已に鄉土の夢なし。塔を起さん寺門の前。

本意宿二東林一。因聽二子賤琴一。
遙知大小朗。已斷二去來心一。
夜靜溪聲近。庭寒月色深。
寧知塵外意。定後更成レ吟。

（一）本意ふ東林に宿せんと。因つて子賤が琴を聽く。（二）遙かに知る大小の朗。已に去來の心を斷つを。夜靜かにして溪聲近く。庭寒うして月色深し。寧ぞ知らんや塵外の意。（三）定後更に吟を成さんとは。

（一）屢々二上人に謁せんとし、江淮間の下吏となる。（宓子賤の琴、前に注す）（二）二上人に俗念なし。傳燈錄に「惠朗禪師を大朗と號し、振朗禪師を小朗と號す」（二上人に比す）、金剛經に「過去未來現在心不可得」（三）禪定の後、共に吟咏せらるゝならん

鄭宥蜀に入るを送る

寧レ親西陟レ險。君去異二王陽一。
在レ世誰非レ客。還レ家即是鄕。
劍門千轉盡。巴水一支長。
請語二愁猿道一。無三煩促二淚行一。

（一）親を寧んじて西險を陟る。（二）君が去ること王陽に異なり。世に在つて誰か客にあらざる。家に還れば即ち是れ鄕。（三）劍門千轉盡き。巴水一支長し。（四）請ふ愁猿の道を語つて。煩しく淚行を促すなかれ。

（一）親を養はんとし、嶮路を越えて蜀に入る（二）事は王陽と異なり、孝心深きは却つて同じ。（漢の王陽、益州の刺史となり、九折阪に至り、嘆じて曰ふ、いかんぞ先人の遺體を奉じ、此の險に乘せんやと、因つて車を囘す）（三）大劍山の難所を越ゆれば、巴水（嘉陵江・濛江・小劍水）長く流る（四）蜀道の嶮（世路に比す）を語り、淚を總しまし

遊ㇾ呉還適ㇾ越。
來往任二風波一。
復送二王孫一去。
其如二芳草一何。
山明殘雪在。
潮滿夕陽多。
季子留二遺廟一。
停ㇾ舟試一過。

淮海風濤起。
江關幽思長。
同悲鵲遶ㇾ樹。
獨作雁隨ㇾ陽。
山晩雲和ㇾ雪。
天寒月照ㇾ霜。
由來濯ㇾ纓處。
漁父愛二滄浪一。

呉に遊び還た越に適く。來往風波に任す。(一)復王孫を送り去り。其れ芳草を如何。山明かにして殘雪在り。潮滿ちて夕陽多し。(二)季子遺廟を留む。舟を停めて試みに一たび過れ。

(一) また君を送り、芳草の青きを如何せん。(楚辭の語に依る) (二) 呉の公子季札の廟あり、舟を停めて弔ふべし

途中に權曙を送る　皇甫曾

淮海風濤起り。江關幽思長し。(一)同じく悲しむ鵲の樹を遶るを。(二)獨作す雁の陽に隨ふを。(三)山晩れて雲雪に和し。天寒うして月霜を照す。(四)由來纓を濯ふ處。漁父滄浪を愛す。

(一) 共によるべなきを悲しむ。曹孟德の詩に「月明かに星稀に、烏鵲南に飛ぶ、樹を遶ぐること三匝、枝の依るべきなし」(二) 君、獨り南方に行く。尙書注に「陽に隨ふの鳥、鴻雁の屬」(三) 雲、雪にまじる (四) 滄浪の水(漢陽沔口)あり、漁父と共に樂しむによし。楚辭に「漁父歌つて曰く、滄浪の水、清まば以て我が纓を洗ふべし」

普選二上人に酬ゆ　嚴維

早歲卽相知。
嗟君最後レ時。
青雲仍未レ達。
黑髮欲レ成レ絲。
小店關門樹。
長河華嶽祠。
弘農民吏待。
莫レ遣ニ馬行遲一。

(一)早歲より卽ち相知る。嗟す君が最も時に後るゝを。(二)青雲仍ほ未だ達せず。黑髮絲と成らんと欲す。小店關門の樹。(三)長河華嶽の祠。(四)弘農民吏待たん。(五)馬行をして遲からしむるなかれ。

㊀ 早くより知己となり、君が榮進の遲きを嘆く ㊁ 官位なほ卑きに、頭髮白からんとす ㊂ 黄河華山祠をめぐる ㊃ 弘農縣(虢州)の吏民君を待つならん ㊄ 馬を驅り速かに行くべし

(一)鄭蟻に別る　　郞士元

暮蟬不レ可レ聽。
落葉豈堪レ聞。
共是悲レ秋客。
那知此路分。
荒城背ニ流水一。
遠雁入ニ寒雲一。
陶令門前菊。
餘華可レ贈レ君。

暮蟬聽くべからず。落葉豈聞くに堪へんや。共に是れ秋を悲しむ客。那ぞ知らん此の路に分れんとは。荒城流水に背き。遠雁寒雲に入る。(二)陶令門前の菊。餘華君に贈るべし。

㊀ 左遷の途上に作る ㊁ 淵明遺愛の菊を贈り、節操を學ばんと十

韓司直を送る　　皇甫冉

還レ鄕服二綵衣一。
共言晨省日。
便是晝游歸。
春水經二梁宋一。
晴山入二海沂一。
莫レ愁二東路遠一。
四牡正騑騑。

三爲二百里宰一。
已過十餘年。
祇嘆官如レ舊。
旋聞邑屢遷。
魚鹽濱レ海利。
桑柘傍レ湖田。
到レ此安二民俗一。
琴堂又晏然。

して歸ると。春水梁宋を經。晴山海沂に入る。東路の遠きを愁ふるなかれ。(四)四牡正に騑騑たらん。

(一)高位に登り、青瑣門に出入す　(二)故鄕に歸り孝養を盡す。列女傳に「老萊子の親に奉ずるや、身に五色斑爛の衣を著く」　(三)父母の安否を問ひ、榮譽の歸鄕をなす。禮記に「人の子たる、昏に定して晨に省る」又唐の高祖、張士貴に虢州を授けて曰ふ「卿をして錦を著て晝游せしむ」と　(四)四馬、車を引き、速かに走るならん

(一)漂水の唐明府を送る　韋應物

(二)三たび百里の宰となつて。已に過ぐ十餘年。祇嘆ず官の舊の如くなるを。(三)旋つて聞く邑の屢〻遷るを。魚鹽海に濱する利。桑柘湖に傍ふ田。(四)此に到つて民俗を安んぜば。琴堂又晏然たらん。

(一)江寧郡漂水縣　(二)三たび縣宰となり、已に十餘年を經　(三)任地しばしば遷る　(四)よく漂水の民を安んぜば、治績擧り、心樂しかるべし。呂子春秋に「宓子賤、單父を治む、琴を彈じ、身、堂を下らずして治まる」

王錄事が虢州に赴くを送る　岑參

甸麥深藏レ雉。
淮苔淺露レ魚。
相思不二我會一。
明月幾盈虛。

歸心常共知。
歸路不二相隨一。
彼此無二依倚一。
東西又別離。
山雲含レ雨潤。
江樹逆レ潮欹。
莫レ戀二漁樵興一。
人生各有レ爲。

列位登二青瑣一。

㊀世亂れ遠く東西に別っ ㊁いづれは會合せんと思ひ、却つて一書信を寄せざりき ㊂王田の麥に、雉深く隱れ、淮水の苔に、魚淺くあらはる ㊃相思ふも會合の時なく、歲月空しく過ぐ

喩坦之睦州に歸るを送る　李頻

(一)歸心常に共に知る。歸路相隨はず。彼此依倚することなく。東西又別離す。山雲雨を含んで潤ひ。江樹潮に逆つて(二)欹つ。(三)漁樵の興を戀ふことなかれ。人生各〻爲すあり。

㊀共に故郷に歸りたきも、隨ひ行くを得ず ㊁不遇にして、又、東西に別る ㊂歸後、閑居することなく、再び有爲の材を試みよ

(已前共に四首)(一)

㊀三四、情思婉曲、句法相同じ

李給事徐州に歸り覲省するを送る　孫逖

(一)列位青瑣に登り。(二)鄕に還つて綵衣を服す。(三)共に言ふ晨省の日。便ち是れ晝游

孤燈寒照レ雨。深竹暗浮レ煙。更有二明朝恨一。離盃惜二共傳一。

同游二漆沮一後。已是十年餘。幾度曾相夢。何時定得レ書。月高城影盡。霜重柳條疏。且對二樽前酒一。千般想未レ如。

世道復何如。東西遠索居。長疑二即見一レ面。翻致二久無一レ書。

(一)老いを悲しみ、互に年を問ふ　(二)明日の別れを悲しみ、離杯を擧ぐることをためらふ

暢當に酬ゆ　耿湋

同じく(一)漆沮に游んで後。已に是れ十年餘。幾度か曾て相夢む。何の時か定めて書を得ん。(二)月高うして城影盡き。霜重うして柳條疏なり。且つ樽前の酒に對して。(三)千般想へども未だ如かず。

(一)雍州富平縣石川河　(二)月高く城明かなり　(三)種々に思ふも、昔日の樂しみに如かず

友人に寄す　張蠙

(一)世道復何如。東西遠く索居す。(二)長く即ち面を見るかと疑ひ。翻つて久しく書なきを致す。(三)甸麥深く雉を藏し。淮苔淺く魚を露はす。(四)相思ふも我と會せず。明月幾たびか盈虛する。

一忝二鄕書薦一。長安未レ得レ回。年光逐二渭水一。春色上二秦臺一。燕掠二平蕪一去。人銜二細雨一來。東風生二故里一。又過幾華開。

（一）一たび鄕書の薦を忝うし。長安未だ回るを得ず。（二）年光渭水を逐ひ。（三）春色秦臺に上る。燕は平蕪を掠めて去り。人は細雨を銜いて來る。（四）東風故里に生じ。又過ぐ幾たびか華の開くを。

（一）故鄕より推薦せられ、久しく長安に留る　（二）年月、渭水と共に去る　（三）都の樓臺に春色催す　（四）故鄕に東風吹き、花幾たびか開きしならん

（已前共に六首）

前虛後實（七言律に同じ）

（一）中四句、實事の景象を述べ、情思をいふ

雲陽館に韓外卿と宿別す　司空曙

故人江海別。幾度隔二山川一。乍見翻疑レ夢。相悲各問レ年。

故人江海の別。幾度か山川を隔つ。乍ち見て翻つて夢かと疑ひ。（一）相悲しんで各〻年を問ふ。孤燈寒うして雨を照し。深竹暗うして煙を浮ぶ。（二）更に明朝の恨あり。離盃共に傳へんことを惜しむ。

山中日南の僧に贈る(一)

張籍

獨向二雙峯一老。
松門閉二兩涯一。
翻レ經上二蕉葉一。
掛レ衲落二藤華一。
甃レ石新開レ井。
穿レ林自種レ茶。
時逢二海南客一。
蠻語問二誰家一。

(二)獨雙峯に向つて老い。松門兩涯を閉づ。(三)經を翻して蕉葉に上せ。(四)衲を掛けて藤華を落す。石を甃んで新に井を開き。林を穿つて自ら茶を種う。(五)時に海南の客に逢うて。蠻語誰が家をか問ふ。

(一) 驩州日南郡 (二) 五祖山雙峰に老い、松下の門の兩扉を閉づ (三) 經文を翻譯し、蕉葉にしるす (四) 僧衣を木に掛け、藤花を落す (五) 故鄕(日南)の人に逢ひ、蠻語にて、誰がことを問ふか

田家

章孝標

田家無二五行一。
水旱卜二蛙聲一。
牛犢乘レ春放。
兒孫候レ暖耕。
池塘煙未レ歇。
桑柘雨始晴。
歲晚香醪熟。
村村自送迎。

(一)田家五行なし。(二)水旱蛙聲を卜す。牛犢春に乘じて放ち。兒孫暖を候つて耕す。池塘煙未だ歇きず。桑柘雨初めて晴る。(三)歲晚香醪熟し。村村自ら送迎す。

● 豐年を祝す

(一) 農家に五行(木火土金水)の學なし (二) 蛙の鳴き方により、水害旱害を知る (三) 歲暮に新酒熟し、往來して

秦原の早望

潭影空二人心一。
萬籟此倶寂。
惟聞二鐘磬音一。

數里聞二寒水一。
山家少二四隣一。
怪禽啼二曠野一。
落日恐二行人一。
初月未レ終レ夕。
邊烽不レ過レ秦。
蕭條桑柘外。
煙火漸相親。

頭髮梳千下。
休レ粮帶二瘦容一。
養レ雛成二大鶴一。
種レ子作二高松一。
白石通宵煮。
寒泉盡日舂。
不三曾離二隱處一。
那得二世人逢一。

○唐詩選に出づ

暮に山村を過ぐ　賈島

數里寒水を聞く。山家四隣少なし。怪禽曠野に啼き。落日行人恐る。(一)初月未だ夕を終へず。(二)邊烽秦を過ぎず。蕭條たり桑柘の外。(三)煙火漸く相親しむ。

(一)日暮れざるに新月出づ　(二)戰亂この地に至らず　(三)村里の火漸く近づく

山中の道士

(一)落髮梳ること千下。粮を休めて瘦容を帶ぶ。雛を養つて大鶴となし。子を種ゑて高松となす。(二)白石通宵煮。(三)寒泉盡日舂く。(四)曾て隱處を離れず。那ぞ世人に逢ふことを得ん。

(一)しきりに頭髮を梳り、食を斷ち身瘦す。陶弘景、眞誥に「淸虛眞人云、頭を櫛り髮を理むるは、彌多なるを得んを欲す」(二)終夜白石を煮、粮をつくる。眞誥に「谷を斷ち山に入り、當に白石を煮るべし」(三)泉を引き、終日仙藥を搗く　(四)常に山中を出でず、世人に逢ふことなし

千樹葉皆飛。
南過ニ洞庭水一。
更應ニ消息稀一。

浩浩看レ華晨。
六街揚ニ遠塵一。
塵中一丈日。
誰是晏眠人。
御柳垂著レ水。
野鶯啼破レ春。
徒云多失レ意。
猶自惜レ離レ秦。

清晨入ニ古寺一。
初日照ニ高林一。
曲徑通ニ幽處一。
禪房華木深。
山光悅ニ鳥性一。

(一) 楚人、竹枝詞(絕句に注す)を歌ふ　(二) 故鄕の返書來らず、樹々皆落葉す

長安春日　　曹松

浩浩たり華を看る晨。(一)六街遠塵を揚ぐ。(二)塵中一丈の日。誰か是れ晏眠の人ぞ。御柳垂れて水に著き。(三)野鶯啼いて春を破る。(四)徒に云ふ多く意を失ふと。猶ほ自ら秦を離れんことを惜しむ。

(一) 禁街遙かに塵あがる　(二) 塵揚り日高き中に、眠を貪るは誰ぞ(自らいふ)　(三) 春深く、鶯亂れ啼く　(四) 失意のこと多きも、なほ長安を離るゝを惜しむ

(已前共に十首)

(一) 三四の句(二)、對して對せざるが如し(或は云、數字を用ふるものを列ぶ)

破山寺の後院に題す　　常建

清晨古寺に入れば。初日高林を照す。曲徑幽處に通じ。禪房華木深し。山光鳥性を悅ばしめ。潭影人心を空しうす。萬籟此に俱に寂たり。惟鐘磬の音を聞くのみ。

相思磬一聲。

喬尊師に贈る　張鴻

長忌時人識。
有レ家雲間深。
性惟耽ニ嗜酒ー。
貧不レ破ニ除琴ー。
靜鼓ニ三通齒ー。
頻湯ニ一味參ー。
知レ師最知レ我。
相引坐ニ檉陰ー。

長く忌む時人の識るを。家あり雲間深し。性は惟酒を耽嗜し。貧しけれども(一)琴を破除せず。(二)靜かに三通の齒を鼓し。頻りに一味の參を湯にす。知る師が最も我を知るを。(三)相引いて檉陰に坐せしむ。

(一) 琴を破り棄てず (二) 仙道を修め、靈藥(人參)を煎る。酉陽雜俎に「左齒相叩くを天鐘となし、右齒相叩くを天磬となし、中央上下相叩くを天鼓となす」、本草に「人參の上品、之を食へば年を長うす」 (三) 檉柳(柳の類、莖赤し)の下に坐せしむ

客中　于武陵

楚人歌ニ竹枝ー。
游子淚沾レ衣。
異國久爲レ客。
寒宵頻夢レ歸。
一封書未レ返。

(一)楚人竹枝を歌ひ。游子淚衣を沾す。異國久しく客となり。寒宵頻りに歸るを夢む。(二)一封書未だ返らず。千樹葉皆飛ぶ。南洞庭の水を過ぎば。更に消息稀なるべし。

唯應下執二杯酒一。暫食中漢江魚上。

何地避二春愁一。終年憶二舊遊一。一家千里外。百舌五更頭。客路偏逢レ雨。郷山不レ入レ樓。故園桃李月。伊水向レ東流。

千峯待二逋客一。香茗復叢生。採摘知二深處一。煙霞羨二獨行一。幽期山寺遠。野飯石泉清。寂寂然燈夜。

洛陽早春　　顧況

何の地にか春愁を避けん。終年舊遊を憶ふ。(一)一家千里の外。(二)百舌五更の頭。(三)客路遍に雨に逢ひ。(四)郷山樓に入らず。(五)故園桃李の月。伊水東に向つて流る。

(一)遠く家を離る　(二)百舌鳥(また信鳥)未明に鳴く　(三)客路に雨多し　(四)故郷の山、樓より見えず　(五)故郷の春を想ひ、伊水の東流するを歎む

(一)陸羽を送る　　皇甫曾

(二)千峯逋客を待ち。香茗復叢生す。(三)採摘深處を知り。煙霞獨行を羨む。(四)幽期山寺遠く。(五)野飯石泉清し。(六)寂寂たり然燈の夜。相思ふ磬一聲。

(一)竟陵の人、字は鴻漸、茶術に秀で茶經三篇を著す　(二)隱者を待ち、諸山の茶芽叢生す　(三)深山に茶を採り、煙霞の中に獨行す　(四)約を履み遠く山寺を尋ぬ　(五)飯を喫し、茶を煮、石上の泉清し　(六)燈下に磬聲を聞くを思ふ

伊洛晴二風塵一。
今日扁舟別。
倶爲二滄海人一。

憐君不レ得レ意。
況復柳條春。
爲レ客黃金盡。
還レ家白髮新。
五湖三畝宅。
萬里一歸人。
知レ爾不レ能レ薦。
羞レ稱二獻納臣一。

共有二髫年故一。
相逢萬里餘。
新春兩行淚。
故國一封書。
夏口帆初落。
潯陽雁正疎。

水に戰亂つゞく　(四) 舟にて別れ、ともに海上の人となる

丘爲落第して江東に歸るを送る　王維

憐む君が意を得ざるを。況や復た柳條の春なるをや。客となつて黃金盡き。家に還らば白髮新ならん。(一)五湖三畝の宅。萬里一歸の人。爾を知るも薦むる能はず。(二)獻納の臣と稱するを羞づ。

(一) 江東の地　(二) 獻納の官(尚書右丞)にあるを愧づ

岳州に司空曙に逢ふ　李端

共に(一)髫年の故あり。(二)相逢ふ萬里餘。新春兩行の淚。(三)故國一封の書。(四)夏口帆初めて落ち。潯陽雁正に疎なり。(五)唯應に杯酒を執つて。暫く漢江の魚を食ふべし。

(一) 共に幼時の親みあり。髫(小兒の垂れ髮)　(二) 萬里の他鄉に逢ふ　(三) 故鄉の書を得　(四) 岳州夏口に舟をとどむ　(五) 酒を飲み鯿魚を食ひ、共に愁を忘るべし。襄陽耆舊傳に「漢水の中に、鯿魚甚だ美なり」

寥落悲ニ前事一。支離笑ニ此身一。愁顏與ニ衰鬢一。明日又逢レ春。

㊀ 往事を思ひ、零落（おちぶれ）を愁しむ　㊁ 家を離るゝを笑ふ

擾擾倦ニ行役一。相逢陳蔡間。如何百年內。不レ見一人閑。對レ酒惜ニ餘景一。問レ程愁ニ亂山一。秋風萬里道。又出穆陵關。

汝南董校書に別る

㊀擾擾として行役に倦み。相逢ふ陳蔡の間。如何ぞ百年の內。見ず一人の閑なるを。㊁酒に對して餘景を惜しみ。㊂程を問うて亂山を愁ふ。秋風萬里の道。又出づ穆陵關。

㊀ 心忙しく公事の旅に倦む　㊁ 酒を酌み、日の傾くを惜しむ　㊂ 旅程を問ひ、山路の嶮を愁ふ

年年五湖上。厭見五湖春。長醉非レ關レ酒。多愁不レ爲レ貧。山川迷ニ道路一。

江上に張勸に別る

年年五湖の上。㊀厭ひ見る五湖の春。㊁長醉酒に關するにあらず。多愁貧のためにせず。山川道路迷ひ。㊂伊洛風塵暗し。㊃今日扁舟の別。倶に滄海の人となる。

㊀ 五湖の岸に住むも、春景を見るを厭ふ。（愁に堪へざる意）　㊁ 心亂るゝも、酒に醉へるにあらず　㊂ 伊水洛

今日新安郡。因レ君水更清。

高僧本姓竺。開士舊名林。一去春山裏。千峯不レ可レ尋。新年芳草遍。終日白雲深。欲上銜ニ微官一去上。懸知訝ニ此心一。

旅館誰相問。寒燈獨可レ親。一年將レ盡夜。萬里未レ歸人。

靈一上人に寄す

(一)高僧本姓は竺。開士舊名は林。(二)一たび去る春山の裏。千峯尋ぬべからず。新年芳草遍く。終日白雲深し。(三)微官に銜ひ去らんと欲す。懸に知る此の心を訝るを。

(一) 上人は、古の生法師(竺姓)、支遁(字は道林)等の如し (二) 春山千峯の中に遨遊し、居所定りなし (三) 余が官に就くを見、心に訝るならん

(已前共に八首)

(一) 四虚にして實に近し

除夜石頭驛に宿す　戴叔倫

旅館誰か相問はん。寒燈獨り親むべし。一年將に盡きんとする夜。萬里未だ歸らざる人。(一)寥落前事を悲み。(二)支離此の身を笑ふ。愁顏と衰鬢と。明日又春に逢はん。

西陵自落潮。
空城垂故柳。
舊業廢春苗。
閭里稀相見。
鶯花共寂寥。

一路經行處。
莓苔見履痕。
白雲依靜渚。
靑草閉閑門。
過雨看松色。
隨山到水源。
溪花與禪意。
相對亦忘言。

幽居蘿薜情。
高臥紀綱行。
鳥散秋鷹下。
人閑春草生。
冒嵐歸野寺。
收印出山城。

(一)歸舟を送る　(二)戰亂つゞき、舊時の農業を廢す

南溪の常道人の隱居を尋ぬ

一路經行の處。莓苔履痕を見る。(一)白雲靜渚に依り。靑草閑門を閉す。雨を過ぎて松色を看。山に隨つて水源に到る。(二)溪花と禪意と。相對して亦言を忘る。

(一)苔に下駄のあと殘る　(二)花を看て禪を悟り、無心無言に歸す

元錄事の所居に題す

(一)幽居蘿薜の情。(二)高臥して紀綱行はる。鳥散じて秋鷹下り。人閑にして春草生ず。(三)嵐を冒して野寺に歸り。印を收めて山城を出づ。(四)今日新安郡。君に因つて水更に淸し。

(一)錄事の官にあるも、居處は山林の如し　(二)閑居しつゝ法令よく行はる　(三)嵐氣を冒して寺に歸り、官印を藏めて城を出づ　(四)新安郡よく治り、水のいよ〳〵淸きに似たり

誰聽石上泉。
猿聲知二後夜一。
花發見二流年一。
杖錫閑來往。
無心到處禪。

鶴書猶未レ至。
那出二白雲一來。
舊路經レ年別。
寒潮每日回。
家空歸二海燕一。
人老發二江梅一。
最憶門前柳。
閑居手自栽。

越中初罷レ戰。
江上送二歸橈一。
南渡無二來客一。

心到る處禪なり。

㊀ 山を下られしは、春草萠ゆる頃なりき ㊁ 猿啼いて夜の深きを知り、花開いて年の過ぐるをさとる ㊂ 錫杖をつき、この地に往來す ㊃ 心空しく、何處にあるも皆禪なり

秦系に酧ゆ

(一)鶴書猶ほ未だ至らず。那ぞ白雲を出で來れる。(二)舊路年を經て別れ。寒潮每日回る。家空しうして海燕歸り。人老いて江梅發く。(三)最も憶ふ門前の柳。閑居して手自ら栽ゑしを。

㊀ 鶴頭書(篆書の一體、隱者を招く文)到らざるに、何故、山を出でられしか ㊁ 年久しく舊路に別れ、日々寒潮のみ回る ㊂ 舊居の門前に、自ら柳を植ゑしを思はん

朱放が、賊退く後、山陰に往くを送る

越中初て戰を罷め。(一)江上歸橈を送る。南渡來客なく。西陵自ら落潮。空城故柳垂れ。(二)舊業春苗を廢す。閭里相見ること稀なり。鶯花共に寂寥。

野人相問㆓姓㆒。
山鳥自呼㆑名。
去去獨吾樂。
無能愧㆓此生㆒。

鄉心新歲切。
天畔獨潸然。
老至居㆓人下㆒。
春歸在㆓客先㆒。
嶺猿同㆓旦暮㆒。
江柳共㆓風煙㆒。
已似㆓長沙傅㆒。
從㆑今又幾年。

故居何日下。
春草欲㆓芊芊㆒。
猶對㆓山中月㆒。

㊀山莊に歸り、俗事を忘る ㊁うしろ手に杖つき、山地の農業を見る ㊂花を看、水源に入る ㊃はと〻きず自ら名を呼ぶ（射豹） ㊄俗客は去れ ㊅無能にして、世に用なきを恥づ

(一)新年作

(二)鄉心新歲切なり。天畔獨潸然。(三)老至つて人の下に居り。(四)春歸つて客の先に在り。(五)嶺猿旦暮を同じうし。江柳風煙を共にす。(六)已に長沙の傅に似たり。今より又幾年ぞ。

㊀欽州謫居の作 ㊁春來り、都を懷ひて天涯に泣く ㊂年老いて人の下位にあり ㊃春のみ余に先んじて歸る ㊄嶺猿と共に朝夕を送り、江柳と共に春を迎ふ ㊅貶せられ、漢の賈誼（長沙王の傅）に似たり

鮑禪師龍山より至るを喜ぶ

劉長卿

(一)故居何の日か下りし。春草芊芊たらんと欲す。猶ほ山中の月に對して。誰か聽く石上の泉。(二)猿聲いて後夜を知り。花發いて流年を見る。(三)杖錫閑に來往す。(四)無

釣艇同₂琴酒₁。
良宵背₂水濱₁。
風波不レ起處。
星月盡隨レ身。
浦迴湘雲卷。
林香嶽氣春。
誰知此中興。
寧羨五湖人。

釣艇琴酒を同じうし。(一)良宵水濱に背く。風波起らざる處。星月盡く身に隨ふ。浦迴にして(二)湘雲巻き。(三)林香しうして嶽氣春なり。誰か知らんこの中の興。(四)寧ろ羨まんや五湖の人。

(一)岸を離れ、中流に棹す　(二)湘江の雲、巻き收まる　(三)山林近く、春の香りを送る　(四)五湖の范蠡を羨むに足らず

(已前共に八首)

四　虛　(七言律に同じ)

(一)五六の句法相類す

陸渾の山荘　宋之問

歸來物外情。
負レ杖閲₂巖耕₁。
源水看レ花入。
幽林採レ藥行。

(一)歸り來る物外の情。(二)杖を負うて巖耕を閲す。(三)源水花を看て入り。幽林藥を採つて行く。野人姓を相問ひ。(四)山鳥自ら名を呼ぶ。(五)去れ去れ獨吾樂まん。(六)無能此の生を愧づ。

失レ路荊溪上。
依レ仁忽暝投。
長橋今夜月。
陽羨古時州。
野燒明二山郭一。
寒更出二縣樓一。
先生能館レ我。
何事五湖遊。

昔賢懷二一飯一。
玆事已千秋。
古墓樵人識。
前朝楚水流。
渚蘋行客薦。
山木杜鵑愁。
春草年年綠。
王孫舊此遊。

路を失ふ荊溪の上。仁に依つて忽ち暝投す。(二)長橋今夜の月。陽羨古時の州。(一)野燒山郭に明かに。(三)寒更縣樓より出づ。(四)先生能く我を館す。何ぞ事とせん五湖の遊。

㊀仁者丘氏をたより、一夜の宿を乞ふ　㊁橋上に月出で、古の陽羨の地見ゆ　㊂縣樓に寒夜の更鼓（時の太鼓）鳴る　㊃君を尋ねて幽境に宿り、范蠡五湖の遊に勝る

漂母の墓(一)

劉長卿

昔賢一飯を懷ふ。(二)玆の事已に千秋。古墓樵人すら識り。(三)前朝楚水のみ流る。渚蘋行客薦め。山木杜鵑愁ふ。春草年年綠なり。(四)王孫舊此に遊ぶ。

㊀水中に絮（わた）を打つ賤女　㊁先賢一飯の恩に感ぜしも、すでに千年の昔となる。（漢の韓信、初め淮陰城下に釣る、漂母その飢ゑを憐み、飯を與ふ）　㊂前朝の遺物は、たゞ楚水流るゝのみ。（韓信後に楚王となり、漂母に百金を報ゆ）　㊃韓信曾てこゝに遊ぶ。（楚辭に「王孫遊んで歸らず、芳草生じて萋々たり」、漂母の語、「我王孫を憐んで食を進めしのみ、豈報を望まんや」）

湖中の閑夜

朱慶餘

山木女郎祠一。
別後同二明月一。
君應レ聽二子規一。

迢遞秦京道。
蒼茫歳暮天。
窮陰連二晦朔一。
積雪遍二山川一。
落雁迷二沙渚一。
飢烏噪二野田一。
客愁空佇立。
不レ見有二人煙一。

早行星尚在。
數里未二天明一。
不レ辨二雲林色一。
空聞二流水聲一。
月從二山上一落。
河入二斗間一横。
漸至二重門外一。
依稀見二洛城一。

酒(上客)といはる、身は、やがて果州金華山中の神女謝自然の祠の所に至らん ㊄ 別後、共に天上の月を見る

京に赴かんとし途中雪に遇ふ　孟浩然

(一)迢遞たり秦京の道。(二)蒼茫たり歳暮の天。(三)窮陰晦朔に連り。積雪山川に遍し。落雁沙渚に迷ひ。飢烏野田に噪ぐ。客愁へて空しく佇立す。見ず人煙あるを。

㊀ はるかなる貌 ㊁ かすかなる貌 ㊂ 窮冬の陰氣、月より月に連る。晦(みそか)、朔(ついたち)

早行　郭良

早行して星尚ほ在り。數里未だ天明ならず。(一)雲林の色を辨ぜず。空しく流水の聲を聞く。月は山上より落ち。(二)河は斗間に入つて横はる。漸く重門の外に至れば。(三)依稀として洛城を見る。

㊀ 林影明ならず ㊁ 銀河、北斗七星の間に横はる ㊂ 洛陽城かすかに見ゆ

荊溪館に宿し、丘義興に呈す　戴維

萬壑樹參レ天。
千山響二杜鵑一。
山中一夜雨。
樹杪百重泉。
漢女輸二賨布一。
巴人訟二芋田一。
文翁翻教授。
不三敢倚二先賢一。

褒斜不レ容レ幰。
之子去何之。
鳥道一千里。
猿聲十二時。
官橋祭酒客。

東川の李使君を送る（一）

萬壑樹天に參り。千山杜鵑響く。山中一夜の雨。（二）樹杪百重の泉。（三）漢女賨布を輸し。（四）巴人芋田を訟ふ。（五）文翁翻つて教授す。敢て先賢に倚らざらんや。

（一）劍南梓州（李氏、刺史となりて行く）（二）梢の水、泉の亂れ落つる如し（三）蜀の美女、みつぎの布を獻ず。（漢の時、蜀の民に令し、大人は布一疋小口には布二丈を納めしめ、名けて賨布といふ）（四）巴郡の民、來り芋田の事を說く。（蜀の卓氏、芋を臨邛に種ゑ富を得て僮千人を使ふ）（五）君自ら蜀人を教へ、前賢の遺意に從ふべし。（漢の文翁、蜀郡の守となり、俊才を擇びて京師に學ばしめ、又、學宮を市中に設け、諸生を從へて共に往來す）

楊長史が果州に赴くを送る（一）

褒斜幰を容れず。（二）この子去つて何にか之く。（三）鳥道一千里。猿聲十二時。（四）官橋祭酒の客。山木女郎の祠。（五）別後明月を同じうす。君應に子規を聽くべし。

（一）順慶府（二）褒斜谷狹く、車を通ぜず（三）輸路一千餘里、猿の聲絕ゆることなし（四）長安の官橋にて今祭

下國多二高趣一。
終年半是吟。
汐潮通二越分一。
部伍雜二蠻音一。
曉郭雲藏レ市。
春山鳥護レ林。
東遊雖レ未レ遂。
日日至二中心一。

(二)下國高趣多し。終年半ば是れ吟。(三)汐潮越分に通じ。部伍蠻音を雜ふ。曉郭雲市を藏し。春山鳥林を護る。(四)東遊未だ遂げずと雖も。日日中心に至る。

㊀古の越の地　㊁邊地は趣味多く、一年半ばは吟じ樂む。(政の閑なる意)　㊂汐潮越の分野に通じ、戍兵の語、蠻音を雜ふ　㊃今に一遊せざるも日々思を馳す

(已前共に一十五首)

㊀三四の句法相類す

崔員外と秋直す　　王維

建禮高秋夜。
承明候二曉過一。
九門寒漏徹。
萬井曙鐘多。
月迴藏二珠斗一。
雲銷出二絳河一。
更慚衰朽質。
南陌共鳴レ珂。

(一)建禮高秋の夜。承明曉の過ぐるを候つ。(二)九門寒漏徹し。萬井曙鐘多し。(三)月迴にして珠斗藏れ。雲銷えて絳河出づ。更に慚づ衰朽の質。(四)南陌共に珂を鳴らすことを。

㊀建禮門外の秋夜、承明廬に直し、曉を待つ　㊁寒夜明けんとし、禁街各處に曉鐘鳴る　㊂月照りて星滑え、雲霽れて銀河あらはる。漢志に「五星連珠の如し」　㊃共に玉珂を鳴らし、參内するを賦す。南陌(禁城の南門)

人迹板橋霜。
槲葉落山路。
枳花明驛墻。
因思杜陵夢。
鳧雁滿回塘。

天高淮泗白。
料子趣修程。
汲水疑山動。
揚帆覺岸行。
雲離京口樹。
雁入石頭城。
後夜分遙念。
諸峯霧露生。

ちしを。

㈠暁に征鐸(旅車の鈴)を鳴らし、途上に故郷を思ふ ㈡雞、茅店の月に鳴き、人跡(あしあと)板橋の霜に残る ㈢水松の葉落つ ㈣からたちの花開く ㈤故郷杜陵の夢 ㈥けり、かりの類、回塘(めぐり曲れるつゝみ)に満ち遊ぶ

㈠秋日、方干が上元に遊ぶを送る　曹松

㈡天高うして淮泗白し。㈢料る子が修程に趣くを。㈣水を汲んでは山動くかと疑ひ。㈤帆を揚げては岸の行くかと覺ゆ。㈥雲は離る京口の樹。雁は入る石頭城。㈦後夜遙念を分たば。諸峯霧露生ぜん。

㈠建康府上元縣 ㈡秋天高く、淮水泗水澄む ㈢君が長途に赴くを思ふ ㈣水中の山影うごく ㈤岸走る如く見ゆ ㈥雲と京口(潤州)の樹下を離れ、雁と石頭城(建康)に入る ㈦別後君を念ふも、諸山隔てて雲霧暗からん

㈠陸睦州に寄す　許棠

僧敲月下門。
過レ橋分ニ野色一。
移レ石動ニ雲根一。
暫去還來レ此。
幽期不レ負レ言。

一宿金山寺。
微茫水國分。
僧歸夜船月。
龍出曉堂雲。
樹影中流見。
鐘聲兩岸聞。
因悲在ニ城市一。
終日醉醺醺。

晨起動ニ征鐸一。
客行悲ニ故鄉一。
雞聲茅店月。

かず。

㊀隣家少なし　㊁池中の島樹に宿る　㊂月に閉せる門をたゝく　㊃橋を過ぐれば野景異なる　㊄石を移し動かす。（雲、石に生ず）　㊅去るもまた來り、風流の約に負かず

金山寺 (一)　張祜

一宿す金山寺。(二)微茫として水國分る。僧は歸る夜船の月。(三)龍は出づ曉堂の雲。樹影中流に見え。(四)鐘聲兩岸に聞ゆ。因つて悲む城市に在つて。(五)終日醉うて醺醺たるを。

㊀鎭江府、大江中の寺。圖經に「裴頭陀、山を開きて金を得」　㊁江上の國々、かすかに見ゆ　㊂曉堂に雲湧き、龍の出づるならん　㊃鐘聲兩岸に響く　㊄俗念醉ふが如きを悲しむ

商山早行　溫庭筠

(一)晨に起きて征鐸を動かす。客行故鄉を悲しむ。(二)雞聲茅店の月。人迹板橋の霜。(三)槲葉山路に落ち。(四)枳花驛墻に明かなり。因つて思ふ(五)杜陵の夢。(六)鳧雁回塘に滿

南山出レ竹青。
夜深斜舫月。
風定一池星。
島嶼無二人迹一。
菰蒲有二鶴翎一。
此中休便得。
何必泛二滄溟一。

詩境西南遠。
秋聲晝夜蛩。
人家連二水影一。
驛路在二山峯一。
溪靜雲生レ石。
天晴雪覆レ松。
我爲二公府一繫。
不レ得二此相從一。

閑居少二隣並一。
草徑入二荒園一。
鳥宿池中樹。

星。(四)島嶼人迹なく。(五)菰蒲鶴翎あり。(六)此の中休せば便ち得ん。何ぞ必ずしも滄溟に泛ばん。

(一)山陰縣、宣義里の池亭　(二)深夜の月斜に横ふ舟を照す　(三)風止み、星影池に滿つ　(四)池中の島に人迹なし　(五)菰蒲(こも、がま)の間に、鶴の羽落つ　(六)こゝに俗事を忘るれば足る、海に泛びて遁るゝ要なし

殷堯藩山南に遊ぶを送る　　姚合

(一)詩境西南遠し。秋聲晝夜の蛩。人家水影に連り。驛路山峯にあり。溪靜にして(二)雲石に生じ。天晴れて雪松を覆ふ。(三)我公府の爲に繫がれ。此に相從ふを得ず。

(一)西南遙かに詩境あり、蛩(秋虫)晝夜を分たず啼く　(三)身を官に繫がれ、君に從ひ遊ぶを得ず

李凝が幽居に題す　　賈島

(一)閑居隣並少なく。草徑荒園に入る。(二)鳥は宿す池中の樹。(三)僧は敲く月下の門。(四)橋を過ぎて野色分れ。(五)石を移して雲根動く。(六)暫く去つて還此に來る。幽期言に負

儒衣不レ稱レ身。
隴狐來試レ客。
沙鶻下欺レ人。
曉戍殘ニ烽火一。
晴原起ニ獵塵一。
邊戎莫ニ相忌一。
非ニ是霍家親一。

禪寂無塵地。
焚レ香話ニ所歸一。
樹搖ニ幽鳥夢一。
螢入ニ定僧衣一。
破月斜ニ天半一。
高河下レ露微。
翻令レ嫌ニ白日一。
動即與レ心違。

暮色遶ニ柯亭一。

下つて人を欺く。曉戍烽火殘り。晴原獵塵起る。(二)邊戎相忌むなかれ。(三)是れ霍家の親に非ず。

㊀蕭關の北に出づれば儒衣は身に適せず。(到る處兵戍の意) ㊁戎(えびす)は將軍を恐るゝなかれ ㊂將軍は霍去病(漢の驃姚將軍、族衛青と匈奴を破る)の一族にあらず。(たゞ射獵して武を錬るのみ)

秋夜僧院に宿す　劉得仁

禪寂無塵の地。香を焚いて(一)所歸を話る。樹は幽鳥の夢を搖し。螢は定僧の衣に入る。破月天半に斜に。(二)高河露を下して微なり。(三)翻つて白日を嫌はしむ。動もすれば即ち心と違ふ。

㊀歸依する佛道を語る ㊁露下り銀河かすかなり ㊂禪は夜によく、晝は俗念多きを嫌ふ

(一)宣義の池亭に宿す

暮色柯亭を遶る。南山竹を出でて青し。(二)夜は深し斜舫の月。(三)風は定る一池の

單車觸二火雲一。
野蕉依二戍客一。
廟竹映二湘君一。
夢渚巴山斷。
長沙楚路分。
一盃從レ別後。
風月不二相聞一。

楚地勞二行役一。
秦城罷二鼓鼙一。
舟移洞庭岸。
路入武陵溪。
江月隨二人影一。
山花趁二馬蹄一。
離魂將二別夢一。
先レ爾到二關西一。

得レ出二蕭關北一。

巴山斷え。長沙楚路分る。(五)一盃別れてより後。風月相聞かず。

㊀ 長安を懷ひつゝ、炎地に行く。齊書に「謝眺、隋王の文學となり、荊州に在り、世祖、勅して都に歸らしむ、道中に詩を作り、西府に寄す」 ㊁ 戍兵蕉樹の間に往來す ㊂ 斑竹の影、湘君廟に映ず。博物志に「洞庭山、帝の二女之に居り、涕下つて竹にそゝぐ、竹盡く斑なり」 ㊃ 巴山の脈、雲夢澤に到りて斷え、楚國の路、長沙に到りて分る ㊄ 別後、風に月に、消息を得難からん

裴侍御上都に歸るを送る　張謂

(一)楚地行役に勞し。秦城鼓鼙罷む。舟は移る洞庭の岸。路は入る武陵の溪。江月人影に隨ひ。山花馬蹄を趁ふ。(二)離魂別夢を將る。爾に先つて關西に到らん。

㊀ 楚に勤勞し、長安の戰亂(安祿山の亂)罷む ㊁ 別後の夢、君に先ちて關西(長安)に至らん

蕭關を過ぐ　張蠙

(一)蕭關の北に出づることを得て。儒衣身に稱はず。隴狐來つて客を試み。沙鶻

蒼茫對二夕暉一。
鶴集二松樹一遍。
人訪二華門一稀。
綠竹含二新粉一。
紅蓮落二故衣一。
渡頭燈火起。
處處採レ菱歸。

は華門を訪ふこと稀なり。（二）綠竹新粉を含み。紅蓮故衣を落す。（三）渡頭燈火起り。處處菱を採つて歸る。

（一）門に客少し。蕀（いばら）（二）若竹、新しき粉をつけ、蓮の葉、舊皮を脱す（三）渡頭に燈火見え、處々に菱を採りかへる

薦福寺衡岳師の房に題す　　韓翃

春城乞レ食還。
高論此中閑。
僧臘堦前樹。
禪心江上山。
疎簾看レ雪捲。
深戶映レ花關。
晚送二門人一去。
鐘聲杳靄間。

（一）春城食を乞うて還り。高論此中に閑なり。（二）僧臘堦前の樹。禪心江上の山。疎簾雪を看て捲き。深戶花に映じて關す。晚に門人を送り去る。（三）鐘聲杳靄の間。

（一）城中に托鉢して歸り、房中に高論す（二）臘長く階前の樹の如く、心靜に、江上の山に似たり（三）鐘の音、靄にひゞく

史澤長沙に之くを送る　　司空曙

謝朓懷二西府一。

（一）謝朓西府を懷ひ。單車火雲に觸る。（二）野蕉戍客に依り。（三）廟竹湘君に映ず。（四）夢渚

灞上柳枝黃。
壚頭酒正香。
春流飲ニ去馬一。
暮雨濕ニ行裝一。
驛路通ニ函谷一。
州城接ニ太行一。
覃懷人總喜。
別駕得ニ王祥一。

谷口來相訪。
空齋不レ見レ君。
澗花燃ニ暮雨一。
潭樹暖ニ春雲一。
門徑稀ニ人迹一。
簷峯下ニ鹿羣一。
衣裳與ニ枕席一。
山靄碧氛氳。

寂寞掩ニ柴扉一。

(一)灞上柳枝黃に。壚頭酒正に香し。春流去馬に飲ひ。暮雨行裝を濕す。(二)驛路函谷に通じ。(三)州城太行に接す。(四)覃懷人總べて喜ぶ。(五)別駕に王祥を得たるを。

㊀ 古の冀州覃懷の地　㊁ 灞陵(長安の東)の柳萌え、壚頭(土を累ね、甕を置く)に春酒香し　㊂ 函谷關に通ず　㊃ 太行山(懷州河內縣の北に起り、幽州に至る、凡そ十州に亙る)に接す　㊄ 懷州の民、別駕に賢才を得たるを喜ぶ。(晉の徐州の別駕王祥に比す)

高宮谷に鄭鄠に贈る

谷口來つて相訪ふ。空齋君を見ず。澗花暮雨に燃え。潭樹春雲に暖かなり。門徑人迹稀に。(一)簷峯鹿羣下る。(二)衣裳と枕席と。山靄碧氛氳。

㊀ 鹿の羣、軒近き山より下る　㊁ 衣裳も枕席も、靄青くたなびく

山居卽事　　王維

寂寞として柴扉を掩ひ。蒼茫として夕暉に對す。鶴は松樹に巢うて遍く。(一)人

春盡雨聲中。
鳥倦二江村路一。
花殘二野岸風一。
十年成二底事一。
羸馬厭二西東一。

重疊太古色。
濛濛花雨時。
好山行恐レ盡。
流水語相隨。
黒壤生二紅朮一。
黄猿領二白兒一。
因思石橋日。
曾與二道人一期。

馬西東を厭ふ。

㊀酒醒め、殊に故郷の遠さを思ふ ㊁長夜を過ぐ ㊂曉光林外に生じ、春色雨中に盡く ㊃鳥疲れ、花いたむ ㊄多年瘦馬に乘り、東西に客たるを悲しむ

春山　　僧貫休

(一)重疊たり太古の色。(二)濛濛たり花雨の時。(三)好山行々盡くるを恐れ。流水語つて相隨ふ。(四)黒壤紅朮を生じ。黄猿白兒を領す。(五)因て思ふ石橋の日。曾て道人と期せしを。

㊀春山重り、古色を帶ぶ ㊁花の雨暗し ㊂山景行く行く盡きんとし、溪流常に人に伴ふ ㊃黒土に紅朮(藥艸)を生じ、黄猿、白き兒を抱く ㊄天台の石橋に、道人と再會を約せしを憶ふ

(已前共に六首)
(一)
㊀七八の句、感傷を含む

(一)懷州の吳別駕を送る　　岑參

荷破葉猶青。
獨立棲レ沙鶴。
雙飛照レ水螢。
若爲寥落境。
仍値二酒初醒一。

寒潮落二遠汀一。
暝色入二柴扃一。
漏永沈沈靜。
燈孤的的青。
林風移二宿鳥一。
池雨定二流螢一。
盡夕成二愁絶一。
啼蛩莫レ近レ庭。

酒醒鄉關遠。
迢迢聽二漏終一。
曙分林影外。

の初めて醒むるに値ふ。

(一) 淋しき上に、酒さへ醒む

西陵の夜居　呉融

寒潮遠汀に落ち。(一)暝色柴扃に入る。(二)漏永うして沈沈として靜かに。(三)燈孤にして的的として青し。(四)林風宿鳥を移し。(五)池雨流螢を定む。(六)盡夕愁絶を成す。(七)啼蛩庭に近づく莫かれ。

(一) 暮色柴門に入る　(二) 夜靜かに長し　(三) 孤燈青く輝く　(四) 鳥驚き飛ぶ　(五) 螢靜かにやどる　(六) 終夜淋し　(七) 啼蟲庭に近づき、更に愁を增すなかれ

旅游春を傷む　李昌符

(一)酒醒めて鄉關遠し。(二)迢迢として漏の終るを聽く。(三)曙は分る林影の外。春は盡く雨聲の中。(四)鳥は江村の路に倦み。花は野岸の風に殘る。十年底事をか成す。(五)羸

杯香蕙草時。
好風能自至。
明月不レ須レ期。
秋水翻二荷影一。
清霜脆二柳枝一。
微官是何物。
許レ廢レ吟レ詩。

秦川朝望迥。
日出正東峯。
遠近山河淨。
透迤城闕重。
秋聲萬戸竹。
寒色五陵松。
客有二歸歟嘆一。
凄其霜露濃。

嫋嫋涼風動。
凄凄霜露零。
蘭衰花始白。

(三)秋水荷影を翻し。清霜柳枝を脆くす。微官是れ何物ぞ。(四)許 詩を吟ずるを廢すべけんや。

(一)蕙花（蘭の類、幹五六花）開き、酒杯また香し　(二)清風自然に吹き、明月期せずして來る　(三)蓮葉、秋水に搖る　(四)多少の吟味を廢し難し

秦川を望む　李頎

秦川朝望迥かなり。日は出づ正東の峯。遠近山河淨く。透迤として城闕重る。秋聲萬戸の竹。寒色五陵の松。客に歸歟の嘆あり。凄其として霜露濃かなり。

○唐詩選に出づ

池上　白居易

嫋嫋として涼風動き。凄凄として霜露零つ。蘭衰へて花始めて白く。荷破れて葉猶ほ青し。獨立つ沙に棲む鶴。雙飛ぶ水を照す螢。(一)若爲ぞ寥落の境。仍ほ酒

隔レ岸越山多。
古木叢二青靄一。
遙天浸二白波一。
下方城郭近。
鐘磬雜二笙歌一。

靜林溪路遠。
蕭帝有二遺蹤一。
水擊二羅浮磬一。
山鳴二于闐鐘一。
燈傳三世火。
樹老五株松。
無數煙霞色。
空聞昔臥龍。

客到衡門下。

る。

○ 唐詩選に出づ

靜林寺(一)

僧靈一

靜林溪路遠し。(二)蕭帝遺蹤あり。(三)水は羅浮の磬を擊ち。(四)山は于闐の鐘を鳴す。(五)燈は傳ふ三世の火。樹は老ゆ五株の松。(六)無數煙霞の色。空しく聞く昔臥龍。

㈠ 襄陽の寺 ㈡ 梁(蕭姓)の武帝の遺跡あり ㈢ 羅浮山の磬、自然に雨に鳴る ㈣ 于闐國の鐘、自然に風にひゞく ㈤ 三世長明の灯を傳へ、遺跡の松老ゆ。(秦始皇、雨を松下に避け、封じて五大夫となししに比す) ㈥ 煙景を看、空しく武帝の遊幸を想ふ。(劉備、臥龍孔明を訪ふに比す)

㈠ 中四句、景物を寫し、首尾呼應す

(已前共に三十四首)(二)

秋夜梁鍠文と宴す

錢起

客は到る衡門の下。(一)杯は香し蕙草の時。(二)好風能く自ら至り。明月期を須たず。

征棹復嘔啞。
高岫留殘照。
歸鴻背落霞。
魚依沙岸草。
蝶寄泝流槎。
共說干戈苦。
汀洲滅釣家。

野外登臨望。
蒼蒼煙景昏。
暖風醫病草。
甘雨洗荒村。
雲散天邊影。
潮回島上痕。
故人不可見。
倚杖役吟魂。

路自中峰上。
盤回出薜蘿。
到江吳地盡。

の草に依り。蝶は泝流の槎に寄る。共に說く干戈の苦を。(四)汀洲釣家滅す。

(一)戰後、舟に乘り、また瀟湘を溯す。嘔啞（櫓の聲）(二)夕日の光、高峯に殘り、歸雁、落霞（水にうつる夕燒け雲）に背き飛ぶ　(三)沙岸の草に魚集り、逆流の舟に蝶來る　(四)汀上に漁家を滅ず

春日野望　李中

野外登臨して望めば。蒼蒼として煙景昏し。暖風(一)病草を醫し。甘雨荒村を洗ふ。(二)雲は散ず天邊の影。(三)潮は回る島上の痕。故人見るべからず。杖に倚つて吟魂を役す。

(一)衰へし草をよみがへらす　(二)天に雲晴る　(三)島に潮退く

勝果寺　僧處默

路は中峰より上り。盤回して薜蘿を出づ。江に到つて吳地盡き。岸を隔てて越山多し。古木青靄を叢め。遙天白波に浸る。下方城郭近く。鐘磬笙歌に雜

秋萍滿二敗船一。
溜從二華頂一落。
樹與二赤城一連。
已有二求レ閑意一。
相期在二暮年一。

寒暄皆有レ景。
孤絶畫難レ形。
地拱二千尋嶮一。
天垂二四面青一。
晝燈籠二雁塔一。
夜景徹二漁汀一。
最愛僧房好。
波光滿二戸庭一。

瀟湘無事後。

に在り。

(一) 萍、破れ舟に滿つ (二) 水流華頂山（天台山の北六十里、最高處一萬丈）より落ち、樹木、赤城山（また燒山、石壁あり、霞の如く赤し）に連る (三) 老後、こゝに閑居すべし

(一)甘露寺　孫魴

(二)寒暄皆景あり。(三)孤絶畫けども形り難し。(四)地は千尋の嶮を拱し。天は四面の青を垂る。(五)晝燈雁塔に籠め。夜景漁汀に徹す。最も愛す僧房の好きを。(六)波光戸庭に滿つ。

(一) 北固山の寺、寶慶年中、丞相李德裕、建てて穆宗の冥福を祈る、時に甘露降る (二) 春夏（暄）秋冬（寒）の景皆宜し (三) 北固山孤絶の狀は、畫にも寫し難し (四) 高さ千尋の天險を擁し、青空四方に垂る (五) 塔内に晝の燈火を籠め、夜の聲、山麓の汀にひゞく (六) 大江の波光、戸庭のいづこよりも見ゆ

江行

(一)瀟湘無事の後。征棹復た嘔啞す。(二)高岫殘照を留め。歸鴻落霞に背く。(三)魚は沙岸

馬色經レ寒慘。
鵰聲帶レ晩悲。
將軍正閑暇。
留レ客換二歌辭一。

旅寓雖レ難レ定。
乘レ閑是勝遊。
碧雲蕭寺霽。
紅樹謝村秋。
戍鼓和レ潮暗。
船窻照レ島幽。
詩家多滯レ此。
風景似二相留一。

孤吟疎雨絕。
荒館亂峯前。
曉鷺棲二危石一。

(一) 隋の大業三年、長城を築く　(二) 三邊(東北西)の夷狄衰ふ　(三) 沙、小城の角をうづめ、野火古碑を燒く　(四) 寒氣を經て馬衰へ、日暮れてわし悲しむ　(五) 戰少く、將軍は歌詞を謳はすのみ

永嘉の崔道融に寄す

旅寓定め難しと雖も。閑に乘じて是に勝遊す。(一)碧雲蕭寺霽れ。(二)紅樹謝村秋なり。戍鼓潮に和して暗く。船窻島を照して幽なり。詩家多くは此に滯る。(三)風景相留むるに似たり。

(一) 雲、佛寺に霽る。(梁の時、寺毎に蕭(梁の姓)字を書せしむ)　(二) 紅葉、謝靈運(永嘉の太守)の故跡に麗し　(三) 好風景、詩人を留むるに似たり

靈溪館に泊す　　鄭巢

孤吟すれば疎雨絕ゆ。荒館亂峯の前。曉鷺危石に棲み。秋萍敗船に滿つ。溜は華頂より落ち。樹は赤城と連る。已に閑を求むる意あり。相期すること暮年

長安卻回日。松偃舊房前。

るは數千里、小なるも數十丈、」交州記に「犀は、毛家の如く、頸馬の如し、鼻上、頭上、額上に各々一角あり」 ㊂ 島々分れ、互に國をなす ㊃ 遠く離るゝも、同じき星を仰ぐ ㊄ 歸京の日、庭前の松に奇瑞あらん（玄奘、西域に行く時、房前の松枝西に偃し、歸る時、東に偃す）

圭峯秋後夜。亂葉落㆓寒虛㆒。四五百竿竹。二三千卷書。雲深猿盜㆑栗。雨霽螘沾㆑蔬。只隔㆓門前水㆒。如同萬里餘。

鄠北李生の舍

圭峯秋後の夜。(一)亂葉寒虛より落つ。四五百竿の竹。二三千卷の書。雲深うして猿栗を盜み。雨霽れて(二)螘蔬を沾す。(三)只門前の水を隔てて。如同す萬里餘。

㊀ 木葉亂れ、寒き空より落つ ㊁ 螘來り、蔬菜を汚すに任す ㊂ 門前一條の水を隔て雅俗の差異は千萬里に等し

萬里隋城在。三邊虜氣衰。沙塡孤障角。燒斷故關碑。

塞上

司空圖

(一)萬里隋城在り。(二)三邊虜氣衰ふ。(三)沙は塡つ孤障の角。燒は斷つ故關の碑。(四)馬色寒を經て慘み。鵰聲晩を帶びて悲しむ。(五)將軍正に閑暇なり。客を留めて歌辭を換ふ。

五仙騎二五羊一。
何代降二茲鄕一。
澗有二堯時韭一。
山餘二禹日粮一。
樓臺籠二海色一。
草樹發二天香一。
浩笑煙波裏。
浮レ溟興甚長。

(一)五仙五羊に騎つて。何の代にか茲の鄕に降りし。(二)澗に堯時の韭あり。(三)山に禹日の粮を餘す。樓臺海色を籠め。草樹天香を發す。(四)浩笑す煙波の裏。溟に浮んで興甚だ長し。

(一) 廣州の寺、澗に十六節の菖蒲を産す。南越志に「咸安中、姚成甫、一丈人と澗側に遇ふ、丈人曰く、この菖蒲は安期生の種えし所なりと」(二) 五仙人の降りしは何時ならん。寰宇記に「高固楚の相たり、五仙人あり、五色の羊に騎り、穀種を持ちて州人に遺る」。(安期生に比す)(三) 澗に菖蒲あり、山に藤根殘る。典術に「堯の時、天、精を庭に降し韭となし、白陰に感じて菖蒲となる」、南越志に、「大禹藤根を取りて粮となし、飢年には人々之を食ふ」(四) 煙波の中に大笑し、海上の仙境を訪ふに似たり

僧の南海に還るを送る　　李洞

春往二海南邊一。
秋聞二半夜蟬一。
鯨呑洗レ鉢水。
犀觸點レ燈船。
島嶼分二諸國一。
星河共二一天一。

(一)春海南の邊に往き。秋半夜の蟬を聞く。(二)鯨は呑む鉢を洗ふ水。犀は觸る燈を點ずる船。(三)島嶼諸國分れ。(四)星河一天を共にす。(五)長安卻回の日。松は偃さん舊房の前。

(一) 春、長安を出て、秋、南海に到る、地暖く、秋夜蟬鳴く (二) 海路に鯨住み、又犀出づ。古今注に「鮫魚の大な

樓臺聳ニ碧岑ー。
一徑入ニ湖心ー。
不レ雨山長潤。
無レ雲水自陰。
斷橋荒蘚合。
空院落花深。
猶憶西窗夜。
鐘聲出ニ北林ー。

(二)樓臺碧岑に聳え。一徑湖心に入る。雨らずして山長く潤ひ。雲なくして水自ら陰る。(三)斷橋荒蘚合し。空院落花深し。猶ほ憶ふ西窗の夜。鐘聲北林より出でしを。

㊀杭州の寺、錢塘の舊府を距る四里、湖中に獨立す　㊁寺の樓臺、碧岑に聳え、徑、湖水に通ず　㊂橋斷え、苔深し

惠山寺(一)

舊宅人何在。
空門客自過。
泉聲到レ池盡。
山色上レ樓多。
小洞穿ニ斜竹ー。
重堦夾ニ細莎ー。
慇懃望ニ城市ー。
雲外暮鐘和。

(二)舊宅人何にか在る。空門客自ら過ぐ。(三)泉聲池に到つて盡き。山色樓に上つて多し。(四)小洞斜竹を穿ち。重堦細莎に夾む。(五)慇懃に城市を望めば。雲外暮鐘和す。

㊀常州惠山、泉清く、陸羽の水品に天下第二の水とす　㊁寺荒れ、住僧なし　㊂泉鳴りて池に注ぎ、樓上に山多く見ゆ　㊃竹間に小洞を穿ち、塔邊に細莎(すげ)茂る　㊄山下の城市を望めば、暮鐘鳴り、心を澄ましむ

蒲澗寺の後の二巖に登る(一)

李羣玉

紅露驛邊樓。
杜宇呼レ名語。
巴江學レ字流。
不レ知煙雨夜。
何處夢二刀州一。

夢みん。

(一)碧樹雲にかくれ、驛頭に紅樓露る　(二)はとゝぎす自ら名を呼び、巴江の流、文字に似たり、博物志に、「杜宇啼いて苦しむ時は、自ら名を呼んで射豹といふ」、「巴州志に、「巴江の水、屈曲して巴字をなす」　(三)榮進の望みあらんを祈る。（夢に三刀更に一刀を益すの故事、絶句、「孫陶の嘉陵驛に宿す」參照）

(一)七里灘　許渾

天晩日沈沈。
孤舟繫二柳陰一。
江村平見レ寺。
山郭遠聞レ砧。
樹密猿聲響。
波澄雁影深。
榮華暫時事。
誰識二子陵心一。

天晩れて日沈沈。孤舟柳陰に繫ぐ。江村平かに寺を見。山郭遠く砧を聞く。樹密にして猿聲響き。波澄んで雁影深し。(二)榮華は暫時の事。(三)誰か子陵が心を識らん。

(一)嚴州の灘。俗に「有風七里、無風七十里」　(二)榮華は暫時の夢のみ　(三)嚴子陵の孤高を知るものなし。（漢の嚴光字は子陵、光武皇帝少時の友、後、召されども事へず、姓名を變じ、羊裘を被り、澤中に釣る、灘側にその遺址あり）

(一)孤山寺　張祜

沙淺浪痕交。
自笑無媒者。
逢人作解嘲。

上巳餘風景。
芳辰集遠坰。
湖光迷翡翠。
草色醉蜻蜓。
鳥弄桐花日。
魚翻穀雨萍。
從今留勝會。
誰看畫蘭亭。

蜀客本多愁。
今君是勝遊。
碧藏雲外樹。

㈠ 食事のため、暫く舟をとゞむ。榜（きづな）㈡ 沙に浪のあと殘る ㈢ 榮進に緣なき者 ㈣ 人に嘲られ、辯解の辭を賦すのみ。（漢揚雄、解嘲賦を作る）

三月五日、長沙の東湖に汎ぶ　張又新

㈠上巳風景を餘し。芳辰遠坰に集る。㈡湖光翡翠を迷はせ。草色蜻蜓を醉はしむ。㈢鳥は弄す桐花の日。魚は翻す穀雨の萍。今より勝會を留め。㈣誰か看ん蘭亭を畫くを。

㈠ 上巳（三月三日）の風景殘り、好季に林外に集る ㈡ 湖水長閑に、かはせみを迷はせ、草けむり、蜻蜓（とんぼ）を醉はしむ ㈢ 桐花の咲く日（暮春）に鳥囀り、穀雨（清明後十五日）の萍に魚戲る。月令に「季春に萍始めて生ず」㈣ 樂しさは王羲之蘭亭の會に勝るべし。（蘭亭修禊圖世に行はる）

人の蜀に入るを送る　李遠

蜀客本愁多し。今君こゝに勝遊す。㈠碧は藏る雲外の樹。紅は露る驛邊の樓。㈡杜宇名を呼びて語り。巴江字を學んで流る。知らず煙雨の夜。㈢何の處にか刀州を

江燕語危檣。山址北來固。潮頭西去長。年年此登眺。人事幾銷亡。

石頭城下泊。北固暝鐘初。汀鷺衝潮起。船窗過月虛。吳山侵越衆。隋柳入唐疎。日欲供調膳。辟來何府書。

江源南出永。野飯暫維梢。古戍懸漁網。空林露鳥巢。雪晴山脊現。

㈠二十四氣の一、五月の節　㈡梅雨の季　㈢晩晴に屋外飼養の蠶蓐をさらす　㈣山脈北より來り、要害をなす　㈤人事の變遷幾たびなるやを知らず

可久越中に歸るを送る　賈島

石頭城下の泊。㈠北固暝鐘の初。汀鷺潮を衝いて起ち。㈡船窗月を過ぎて虛し。㈢吳山越を侵して衆く。㈣隋柳唐に入つて疎なり。㈤日に調膳を供せんと欲す。㈥辟來らん何の府かの書。

㈠北固山に晩鐘鳴る時　㈡月さして船内空し　㈢吳の山脈多く越に入る　㈣隋代の柳、なほ殘るもの少し　㈤郷に歸り、老親を養はんとす　㈥いづれかの官府より、召徴の書來らん。（孝行の譽高き爲）

新安の江行　章八元

江源南より出でて永し。㈠野飯暫く梢を維ぐ。古戍魚網を懸け。空林鳥巢を露はす。雪晴れて山脊現れ。㈡沙淺うして浪痕交る。自ら笑ふ無媒の者。㈢人に逢うて解嘲を作る。

蝶飛秋草畦。
驛樓宮樹近。
疲馬再三嘶。

曾入㆓桃源路㆒。
桃源信少㆑雙。
洞霞飄㆓素練㆒。
壁蘚晝㆓陰窗㆒。
古木疑㆑撐㆑月。
危峰欲㆑墮㆑江。
自吟空向㆑寂。
誰與倒㆓秋缸㆒。

水國芒種後。
梅天風雨涼。
露蠶開㆓晩簇㆒。

田 ㊄ 呉の故郷の樹木

得日觀の東房（一）　李賀

曾て桃源の路に入る。（二）桃源信に雙び少し。（三）洞霞素練を飄し。壁蘚陰窗に畫く。古木月を撐ふるかと疑ひ。危峰江に墮ちんと欲す。（四）自ら吟じて空しく寂に向ふ。誰と與にか秋缸を倒さん。

㊀ 洪州武寧縣の觀、李賀歸郷の途、賊亂に逗ひてこゝに寓す ㊁ 觀の景すぐれ、天下に稀なり。（桃源に比し、亂を避くる意を含む） ㊂ 霞飄り白き練絹の如く、苔蒸し古畫の彩紋に似たり ㊃ 淋しく獨吟し、共に酒瓶を傾くるものなし

北固の晩眺　竇常

水國（一）芒種の後。（二）梅天風雨涼し。（三）露蠶晩簇を開き。江燕危檣に語る。（四）山址北より來つて固く。潮頭西に去つて長し。年年此に登眺す。（五）人事幾たびか銷亡する。

客衣今日薄。
寒氣近來饒。

月露發二光彩一。
此時方見レ秋。
夜深金氣應。
天靜火星流。
蟲響偏依レ井。
螢飛直過レ樓。
相知盡白首。
清景復追遊。

候吏立二沙際一。
田家連二竹溪一。
楓林社日鼓。
茅屋午時雞。
雀噪晩禾地。

に遥ちる

新秋、樂天に寄す　劉禹錫

月露光彩を發し。此時方に秋を見る。夜深うして金氣應じ。(一)天靜かにして火星(二)流る。蟲響いて偏に井に依り。螢飛んで直に樓を過ぐ。(三)相知盡く白首。清景復追遊せんや。

(一)夜涼しく金氣感應す。月令に「孟秋は盛德金に在り」 (二)空靜かに、大火心星西に流る (三)知人皆老い、清遊を共にし難し

秋日、客を送って潛水驛(一)に至る

候吏(二)沙際に立ち。田家竹溪に連る。楓林社日(三)の鼓。茅屋午時の雞。雀は噪ぐ晩(四)禾の地。蝶は飛ぶ秋草の畦。驛樓宮樹(五)近く。疲馬再三嘶く。

(一)杭州於潛縣の北 (二)驛吏、沙際に立ちて迎ふ (三)社日の祭の太鼓鳴る。(立秋後第五の戊の日) (四)晩稻の

政成堪二吏隱一。
免レ負二府公恩一。

茅屋住來久。
山深人閉レ門。
草生垂二井口一。
花落擁二籬根一。
入レ院將レ雛鳥。
攀レ蘿抱レ子猿。
曾逢二異人說一。
風景似二桃源一。

纔入二維揚郡一。
鄉關北路遙。
林藏初霽雨。
風退欲レ歸潮。
江火明二沙岸一。
雲帆礙二浦橋一。

隱るゝに堪ふ　(四) 長官の恩に負き徒に安逸を求むると異なる

溪南の書齋　　楊發

茅屋住みてより久し。山深うして人門を閉づ。草生じて井口に垂れ。花落ちて籬根を擁す。院に入る雛を將ゐる鳥。蘿を攀づ子を抱く猿。曾て(一)異人の說くに逢ふ。風景桃源に似たりと。

(一) 仙人の類

楊子の岸に泊す　　祖詠

(一)纔かに維揚郡に入れば。鄉關北路遙かなり。(二)林は藏す初めて霽るゝ雨。風は退く歸らんと欲する潮。江火沙岸に明かに。(三)雲帆浦橋に礙らる。客衣今日薄く。寒氣近來饒し。

(一) 楊郡に來り、故鄉遙かに北に隔たる　(二) 林に雨をとゞめ、風、引き潮を追ふ　(三) 帆影雲の如く、楊子橋

題レ詩招二茂宰一。
思爾欲レ辭レ官。

寂歷青山曉。
山行趣不レ稀。
野花成レ子落。
江燕引レ雛飛。
暗草薰二苔徑一。
晴楊拂二石磯一。
俗人猶語レ此。
余亦轉忘レ歸。

陶令之レ官去。
離愁慘二別魂一。
白煙連二海戍一。
紅葉近二淮村一。
遠浪搖二山郭一。
平蕪到二縣門一。

宰（縣官の美稱）裴氏を招く

山行　殷遙

寂歷たり青山の曉。(一)山行趣稀ならず。(二)野花子を成して落ち。江燕雛を引いて飛ぶ。暗草苔徑に薰じ。(三)晴楊石磯を拂ふ。俗人すら猶ほ此を語る。(四)余も亦轉歸るを忘る。

(一)山に遊び、趣深し　(二)花は散りて種子を結ぶ　(三)草茂り、徑にかをる　(四)俗人すら風景を語る

陸明府盱眙に之くを送る　崔峒

(一)陶令官に之き去る。離愁別魂を慘ましむ。白煙海戍に連り。紅葉淮村に近し。遠浪山郭を搖かし。(二)平蕪縣門に到る。(三)政成つて吏隱するに堪へたり。(四)府公の恩に負くことを免る。

(一)陸氏官に就き、盱眙に行く（陶淵明に比す）　(二)草平かに縣舍の門に連る。（訟少き意）　(三)俗務少く、官に

長沙卑暑地。
九月未レ成レ衣。

客厭巴南地。
鄕鄰劍北天。
江村片雨外。
野寺夕陽邊。
芋葉藏二山徑一。
蘆花間二渚田一。
舟行未レ可レ住。
乘レ月且須レ牽。

萬室邊レ江次。
孤城對レ海安。
朝霞晴作レ雨。
濕氣晚生レ寒。
苔色侵二衣桁一。
潮痕上二井欄一。

晚に五溪を發す(一)　　岑參

(二)客は厭ふ巴南の地。(三)鄕は鄰る劍北の天。江村片雨の外。野寺夕陽の邊。芋葉山(四)徑を藏し。蘆花渚田に間る。舟行未だ住るべからず。(五)月に乘じて且つ須く牽くべし。

〔一〕武陵五溪（西溪、辰溪、巫溪、武溪、沅溪）を發す　〔二〕三巴より南の地　〔三〕劍南より北の地　〔四〕芋の葉山間の徑を蔽ひ、蘆花水邊の田にまじる　〔五〕月に乘じ、舟を引かしむべし。（歸路を急ぐ意）

仲夏、江陰の官舍に裴明府に寄す　　李嘉祐

(一)萬室江に邊りて次し。孤城海に對して安し。(二)朝霞晴れて雨となり。濕氣晚に寒を生ず。(三)苔色衣桁を侵し。潮痕井欄に上る。(四)詩を題して茂宰を招く。思ふ爾が官を辭せんと欲するを。

〔一〕家々、水に傍ひて並ぶ　〔二〕朝霞めば雨降る　〔三〕衣架に苔蒸し、井欄に潮上る。（梅雨の候）　〔四〕詩を寄せ茂

松暝鶴飛回。
古砌碑横レ草。
陰廊畫雜レ苔。
禪宮亦消歇。
塵世轉堪レ哀。

客路青山外。
行舟綠水前。
潮平兩岸闊。
風正一帆懸。
海日生二殘夜一。
江春入二舊年一。
鄕書何處達。
歸雁洛陽邊。

晩景寒鴉集。
秋風旅雁歸。
水光浮レ日去。
霞彩映レ江飛。
洲白蘆花吐。
園紅柹葉稀。

に堪へたり。

㊀壁畫に苔蒸す　㊁佛寺すら荒廢す

(二)北固山下に次る　王灣

客路青山の外。行舟綠水の前。潮平かにして兩岸闊く。風正しうして一帆懸る。海日殘夜に生じ。江春舊年に入る。鄕書何の處にか達せん。歸雁洛陽の邊。

㊀唐詩選に出づ

(三)岳陽の晩景　張均

晩景寒鴉集り。秋風旅雁歸る。水光日を浮べて去り。霞彩江に映じて飛ぶ。洲白うして蘆花吐き。園紅にして柹葉稀なり。長沙卑暑の地。九月未だ衣を成さず。

○唐詩選に出づ

徙倚對二珠林一。雁塔風霜古。龍池歲月深。紺園澄二夕霽一。碧殿下二秋陰一。歸路烟霞晩。山蟬處處吟。

臘盡促二歸心一。行人及二華陰一。雲霞仙掌出。松柏古祠深。野渡氷生レ岸。寒川燒隔レ林。溫泉看漸近。宮樹晩沈沈。

黃葉前朝寺。無レ僧寒殿開。池晴龜出曝。

(四)紺園夕霽澄み。碧殿秋陰下る。歸路烟霞の晩。山蟬處處に吟ず。

(一)嵩山五乳峯の寺　(二)佛寺に遊び、吟じ且つ佇む。佛經に「黃金七寶地をなし、摩尼珠林をなす」(三)塔も九龍潭も年を經て古し。佛書に「西域に比丘あり、羣雁の飛ぶを見、乃ち曰ふ、食に充つべしと、雁卽ち地に墮つ、曰ふ、是れ雁王なり、食すべからずと、乃ち雁塔を立つ」(四)寺内に夕日澄み、佛殿に秋陰し

晩に華陰に至る(一)

皇甫曾

(二)臘盡きて歸心を促し。行人華陰に及ぶ。(三)雲霞仙掌より出で。(四)松柏古祠深し。野渡氷岸に生じ。(五)寒川燒と林を隔つ。(六)溫泉看て漸く近し。宮樹晩に沈沈。

(一)陝西東路華陰縣　(二)年暮れ、歸鄕の心を促す　(三)華山仙掌巖　(四)華山祠　(五)野燒の火が寒川を隔てて見ゆ　(六)驪山溫泉宮

廢せる寶慶寺を經

司空曙

黃葉前朝の寺。僧なくして寒殿開く。池晴れて龜出でて曝し。松暝うして鶴飛び回る。古砌碑草に橫り。(二)陰廊畫苔に雜る。(三)禪宮すら亦消歇す。塵世轉た哀しむ。

獨有宦游人。偏驚物候新。雲霞出海曙。梅柳渡江春。淑氣催黃鳥。晴光轉綠蘋。忽聞歌古調。歸思欲霑巾。

長歌遊寶地。

卷之三

五言律詩

四實（七言律に同じ）

（一）早春游望　杜審言

獨宦游の人あつて。偏に驚く物候の新たなるに。雲霞海を出でて曙け。梅柳江を渡つて春なり。淑氣黃鳥を催し。晴光綠蘋に轉ず。忽ち古調を歌ふを聞いて。歸思巾を沾さんと欲す。

(一) 唐詩選「晉陵の陸丞が早春の遊望に和す」に同じ

（二）少林寺に遊ぶ　沈佺期

長歌して寶地に遊び。徙倚として珠林に對す。雁塔風霜古り。龍地歲月深し。

呉王醉處十餘里。照レ野拂レ衣今正繁。經レ雨不下隨二山鳥一散上。倚レ風如下共二路人一言上。愁怜粉艷飄二歌席一。靜愛寒香撲二酒樽一。欲レ寄二所思一無二好信一。爲レ君惆悵又黄昏。

呉王醉ふ處十餘里。(一)野を照し衣を拂つて今正に繁し。雨を經て山鳥に隨つて散ぜじ。(二)風に倚つて路人と言ふが如し。愁へて怜む粉艶の歌席に飄るを。靜かに愛す寒香の酒樽を撲つを。(三)所思を寄せんと欲するも好信なく。(四)君がために惆悵して又黄昏。

㊀呉王醉遊の地に開く　㊁花、野を照し、香、衣を拂ふ　㊂君に一枝を送りたきも、好き便りなし。(越の使曾て梅花を梁王に贈る)　㊃愁へつゝ黄昏に立つ

（已前共に六首）

街にのぞみ、美しき車をあつむ　(四) 暮は柔き日を留め、麗しき花を酬る　(五) 樂を奏して觀賞し、年老い白髮の生ずるを知らず

香霞。鐘歌滿坐爭歡賞。肯信流年鬢有レ華。

似下共二東風一別有上レ因。絳羅高捲不レ勝レ春。若教レ解レ語應レ傾レ國。任是無情也動レ人。芍藥與レ君爲二近侍一。芙蓉何處避二芳塵一。可レ憐韓令功成後。辜二負穠華一過二此身一。

又　　羅隱

(一)東風と別に因あるに似たり。(二)絳羅高く捲いて春に勝へず。(三)若し語を解せしめば應に國を傾くべし。任是れ無情なるも也た人を動す。(四)芍藥君がために近侍となり。芙蓉何の處にか芳塵を避けん。(五)憐むべし韓令功成つて後。穠華に辜負して此の身を過すことを。

(一) 花美しく、春風と深き因縁ある如し　(二) 紅羅を捲いて花を賞し、春の麗しさに堪へず　(三) 牡丹語を解せばまさに傾國の美人たるべし、無情の花なるも、なほ人を動すに足る　(四) 芍藥は近臣たり、芙蓉(はす)も下風に立つべし。埤雅に「世に牡丹を花王、芍藥を花相と稱す」　(五) 韓弘退隱の後、穠艶の春に負き、一生を過ししを憫む。楊貴妃雖黃に「韓弘宣武を罷め、始めて長安の私第に至る、牡丹あり、命じて之を斷らしめて曰く、吾豈兒女の輩に傚はんやと」

梅　花

無レ鄰。烈火緋桃照レ地春。坐久好風休レ掩レ袂。夜來微雨已沾レ巾。敢同ニ俗態一期ニ靑眼一。似レ有ニ微詞動ニ絳唇一。盡日更無ニ鄕井念一。此時何必見ニ秦人一。

休れ。(二)夜來の微雨已に巾を沾す。(三)敢て俗態と靑眼を期せんや。(四)微詞の絳唇を動すあるに似たり。(五)盡日更に鄕井の念なし。(六)此の時何ぞ必ずしも秦人を見ん。

(一)風のどかに吹き、袂を飄すに至らず　(二)前夜の雨殘り、雫、巾をうるほす　(三)靑眼を喜ぶはなは俗なり。(晉の阮籍、己の好むものに逢へば靑眼をなす、桃の綠葉に比す)　(四)紅唇を動かし、ひそかに語るに似たり。國語に「桃李言はず、下自ら蹊を成す」　(五)終日俗念なし　(六)桃源の仙鄕を訪ふに及ばず。(秦の民世を遁れて桃源に入る)

牡丹　羅鄴

落ニ盡春紅一始見レ花。花時比屋事ニ豪奢一。買栽ニ池館一恐無レ地。看到ニ子孫一能幾家。門倚ニ長衢一攢ニ繡轂一。幄籠ニ輕日一護ニ

春紅を落し盡して始めて花を見る。(一)花時比屋豪奢を事とす。(二)買うて池館に栽うる恐らくは地無からんを。看て子孫に到るは能く幾家ぞ。(三)門長衢に倚つて繡轂を攢め。(四)幄輕日を籠めて香霞を護す。(五)鐘歌滿坐爭うて歡賞す。肯て信ぜんや流年鬢に華あるを。

(一)家毎に牡丹を賞し、奢を極む　(二)餘地なきまでに池館に種ろるも、子孫に傳へて看しむるは少し　(三)門は

鷓鴣　　鄭谷

暖戲二烟蕪一錦翼齊。品流應レ得近二山雞一。雨昏青草湖邊過。花落黄陵廟裏啼。遊子乍聞征袖濕。佳人纔唱翠眉低。相呼相喚湘江曲。苦竹叢深春日西。

(一)暖かにして烟蕪に戲れて錦翼齊し。(二)品流應に得べし山雞に近きを。(三)雨昏うして青草湖邊に過ぎ。花落ちて黄陵廟裏に啼く。(四)遊子乍ち聞いて征袖濕ひ。(五)佳人纔かに唱へて翠眉低る。(六)相呼び相喚ぶ湘江の曲。苦竹叢深うして春日西す。

(一)煙る春艸に戲れ、錦の如き翼を竝ふ　(二)その品、山雞(雉)に近し　(三)雨暗き青草湖邊に飛び、花落ちし黄陵廟(娥皇女英の廟)中に啼く　(四)旅人、聲を聞き涙袂を濕す。(その聲、行不得哥々と聞ゆ)　(五)佳人一曲(鷓鴣詞)を唱へ、眉をたれて愁ふ　(六)湘江のほとりに雌雄相呼び、苦竹茂り日傾く

緋桃　　唐彦謙

短墻荒圃四

短墻荒圃四に鄰なし。烈火の緋桃地を照す春。(一)坐久しうして好風に袂を掩ふ

苔遮㆒猶慰ㇾ意。若教㆓泥汚㆒更傷ㇾ心。臨ㇾ堦一盞悲㆓春酒㆒。明日池塘是綠陰。

㊀白く微めるもの　㊁紅く潤へるもの　㊂苔に留まるは幸に、泥に汙るゝはいたまし　㊃堦に臨み一杯の酒を酌みて悲しむ　㊄明日は綠陰池塘に滿たん

詠物（物の姿致を寫し、趣味を述ぶる格）

（已前共に四首）

崔少府の池の鷺　　雍陶

雙鷺應ㇾ憐水滿ㇾ池。風飄不ㇾ動頂絲垂。立當㆓青草㆒人先見。行傍㆓白蓮㆒魚未ㇾ知。一足獨拳寒雨裏。數聲相叫早秋時。林塘得ㇾ爾須ㇾ增ㇾ價。況與㆓詩家物色㆒宜。

雙鷺應に憐むべし水の池に滿つるを。㈠風飄れども動かず頂絲垂る。㈡立つて青草に當れば人先づ見。行いて白蓮に傍うも魚未だ知らず。㈢一足獨拳ぐ寒雨の裏。數聲相叫ぶ早秋の時。㈣林塘爾を得て須く價を增すべし。況や詩家の物色と宜しきをや。

㊀首を垂れ魚を窺ふ　㊁草に立てば、人目につき易く、白蓮花に傍へば、魚にも氣付かれず　㊂一足をかゝげ、寒雨の中を行く　㊃園林池塘も價を增すべし、況んや詩人に喜ばるゝをや

道院竹繁教ニ略洗ー。鳴レ琴酌レ酒看ニ扶疎ー。不レ圖結實來ニ雙鳳ー。且要長竿釣ニ巨魚ー。錦籜裁レ冠添ニ散逸ー。玉芽修レ饌稱ニ清虛ー。有レ時記得三天事。自向ニ琅玕節下ー書。

道院竹繁くして略洗さしむ。琴を鳴らし酒を酌んで扶疎を看る。(二)圖らず結實の雙鳳を來すを。且つ要す長竿の巨魚を釣るを。(三)錦籜冠を裁して散逸を添へ。(四)玉芽饌を修して清虛に稱ふ。(五)時あつて記得す三天の事。自ら琅玕節下に向つて書す。

(一)竹の枝葉を切りすかす　(二)瑞祥幸榮を求めず、たゞ釣魚の清遊を樂しむ。「韓詩外傳に「黃帝の時、鳳凰帝の東圃に上り帝の梧桐に集り、帝の竹實を食ふ」莊子に「任公子、大鉤を作り、會稽に蹲み、竿を東海に投じ、大魚を得」　(三)竹の皮の冠を作り散逸の姿を添ふ　(四)筍を食し、清虛の生活に適す　(五)竹筒に、道家三天（淸微天、禹餘天、大赤天）の事を記す。（琅玕は瑞璃の類、竹の青きに比す）

花を惜しむ

韓偓

皺白離情高處切。膩紅愁態靜中深。眼隨ニ片片ー沿レ流去。恨滿ニ枝枝ー被ニ雨淋ー。總得ニ

(一)皺白の離情高處に切に。(二)膩紅の愁態靜中に深し。眼は片片に隨ひて流に沿うて去り。恨は枝枝に滿ちて雨に淋がる。(三)總て苔の遮るを得ば猶ほ意を慰め。若し泥に汙さしめば更に心を傷ましめん。(四)堦に臨んで一盞春酒を悲しむ。(五)明日池塘是れ綠陰。

凍合關山道。今日分流漢使前。莫レ遣下行人照中容鬢上。恐驚憔悴入二新年一。

西陵に到らんと欲し、王行周に寄す　李紳

西陵沙岸回流急。船底黏レ沙去レ岸遙。驛吏遞呼催レ下レ纜。棹郎閑立道レ齊レ橈。猶瞻伍相青山廟。未レ見雙童白鶴橋。欲レ責三舟人無二次第一。自知貪レ酒過二春潮一。

西陵の沙岸回流急なり。船底沙に黏して岸を去ること遙かなり。(一)驛吏遞に呼んで纜を下せと催し。棹郎閑かに立つて橈を齊へよと道ふ。(二)猶ほ瞻る伍相の青山の廟。(三)未だ見ず雙童の白鶴橋。舟人の次第なきを責めんと欲すれば。(四)自ら知る酒を貪つて春潮を過ぐることを。

(一)船腹沙につき、岸なほ遠し　(二)岸上の驛吏纜(ともづな)を下して止れと呼び、船中の水夫櫂を揃へて出でよといふ　(三)伍子胥の青山廟(杭州胥山)を見、桓闓の白鶴橋(餘姚縣)を見ず。太平廣記に「桓闓陶弘景に事へ、辛勤すること十餘年、一旦二青童と白鶴とあり、空より下りて庭に集る、闓、天衣を著け、鶴に乘りて天に昇る」(四)醉ひて潮候(しほどき)を誤りしを知り、深く之を謝す

(一)竹を洗す　王貞白

徐福應レ無二物外遊一。莫レ怪楚吟偏斷レ骨。野烟蹤跡似二東周一。

ちん。史記に「李斯小吏となり、廁鼠を見るに、不潔を食ひ、人犬近けば數々驚く、倉中の鼠を觀るに、粟を食み大廡の下に居りて憂へず、斯嘆じて曰く、人の賢不肖亦なほ是の如きのみと、乃ち荀子に從つて學び、後秦に相たり」 ㈢ 廣異記に「徐福字は君房、始皇福をして男女三千人と海に入り神州を尋ねしむ、返らず」 ㈣ 深く哀吟するを怪しむなかれ ㈤ 秦の末路また東周に似たり

（已前共に九首）

（二）

結句（結末を振はしむる格）

㈠ 落句に新意を設け、前六句を結ぶ

綠楊著レ水草如レ烟。舊是胡兒飲馬泉。幾處吹レ笳明月夜。何人倚レ劍白雲天。從來

九原の飲馬泉を過ぐ　李益

綠楊水に著いて草烟の如し。舊是れ胡兒の飲馬泉。幾處か笳を吹く明月の夜。何人か劍に倚る白雲の天。從來凍合す關山の道。今日分流す漢使の前。行人をして容鬢を照さしむるなかれ。恐らくは驚かん憔悴して新年に入るに。

○ 唐詩選に出づ

安レ劉。附葬纍纍盡列侯。豐上舊居無二故里一。沛中原廟對二荒丘一。耳聞英主提二三尺一。眼見愚民盜二一抔一。千載豎儒騎二瘦馬一。渭城斜日重回レ頭。

沛中の原廟荒丘に對す。耳に聞く英主の三尺を提げしを。眼り見る愚民の一抔を盜むを。(六)千載の豎儒(五)瘦馬に騎り。渭城の斜日重ねて頭を回らす。

(一)漢高祖の陵、渭北にあり、長安を去る三十五里　(二)こゝに劉氏を葬る　(三)附葬せし諸侯の塚、纍々とつらなる　(四)高祖の故郷豐(秦の泗水)すでに存せず、沛(高祖兵を起したる地)の原廟もまた荒る。漢書に「叔孫通原廟を作らんと請ふ」注に「原は重なり、先づ廟ありて更に重ねて建つなり」　(五)高祖豪雄なりしも、世人すでに陵を荒せり。史記に「高祖曰く、吾布衣を以て三尺の劍を持し、天下を取る」又「張釋之曰く、他日愚民あり、長陵一抔の土を盜まば、將た何を以て之を罪せん」　(六)千歲の後、余は瘦馬に乘り、夕日に長陵を望む

咸陽　　韋莊

城邊人倚夕陽樓。樓上雲凝萬古愁。山色不レ知秦苑廢。水聲空傍二漢宮一流。李斯不下向二倉中一悟上。

城邊の人は倚る夕陽樓。樓上の雲は凝らす萬古の愁。(一)山色知らず秦苑の廢するを。(二)水聲空しく漢宮に傍うて流る。(三)李斯倉中に向つて悟らずんば。徐福物外に遊ぶなかるべし。(四)怪しむなかれ楚吟して偏に骨を斷つを。(五)野烟の蹤跡東周に似たり。

(一)秦亡び山のみ昔の如し　(二)漢宮荒れ水徒らに鳴る　(三)李斯秦に相たらずんば、始皇の豪華もなかりしな

是才。自レ古浮雲蔽二白日一。洗レ天風雨幾時來。

世を亂る ㈦ 小人亡び、世平かなるは何時ぞ

水流花謝兩無レ情。送二盡東風一過二楚城一。蝴蝶夢中家萬里。杜鵑枝上月三更。故園書動經レ年到。華髮春惟兩鬢生。自是不レ歸歸便得。五湖烟景有レ誰爭。

春夕旅懷　　崔塗

水流れ花謝して兩ながら情なし。(一)東風を送り盡して楚城を過ぐ。(二)蝴蝶夢中に家萬里。(三)杜鵑枝上に月三更。(四)故園の書は動もすれば年を經て到り。華髮の春は惟兩鬢に生ず。自ら是れ歸らず歸らば便ち得ん。(五)五湖の烟景誰あつてか爭はん。

㈠ 暮春に都を過ぐ ㈡ 夢に故郷の家に歸る。(莊子夢に蝴蝶となる) ㈢ ほとゝぎす、月夜三更の枝に鳴く ㈣ 故郷の音信、年を越えて來り、白髮兩鬢に生す ㈤ 五湖の風景を獨占すべし

長陵高闕此

(一)長陵　　唐彥謙

長陵の高闕此に(二)劉を安んず。(三)附葬纍纍として盡く列侯。(四)豐上の舊居故里なく。

來疎。閑看江雲思有餘。秋館池亭荷葉後。野人籬落荳花初。無愁自得山翁術。多病能忘太史書。聞說故園香稻熟。片帆歸去就鱸魚。

亭荷葉の後。野人の籬落荳花の初。(二)愁なうして自ら得ん山翁の術。病多くして能く忘る太史の書。(三)聞說故園香稻熟すと。(四)片帆歸り去つて鱸魚に就かん。

(一)蓮の葉池に枯るゝ後、豆の花籬に開く時　(二)仙術は、愁なくして始めて得べく、太史公の書(史記)は多病のために忘れ易し　(三)故郷に稻熟すと聞く　(四)舟に乘りて歸り、鱸魚のなますを味ひたし。(張翰の故事)

獨尋春色上高臺。三月皇州駕未回。幾處松筠燒後死。誰家桃李亂中開。姦邪用法元非法。唱和求才不

(一)漢南の春望　薛能

獨り春色を尋ねて高臺に上る。(二)三月皇州駕未だ回らず。(三)幾處の松筠ぞ燒後に死れ。(四)誰が家の桃李か亂中に開く。姦邪法を用ふるも元法にあらず。(五)唱和才を求むるも是れ才ならず。(六)古より浮雲白日を蔽ふ。(七)天を洗ふ風雨幾時か來らん。

(一)黄巣賊(僖宗康明年中)亂中の作　(二)天子蜀に幸し、今に還幸なし　(三)松竹、兵火に燒かるゝ如く、忠臣多く死す　(四)桃李、亂中に開く如く、小人時を得　(五)同氣相求むるも一人の眞才なし　(六)浮雲日を蔽ふ如く、小人

滿ㇾ床閑不ㇾ厭。陰符在ㇾ篋老羞ㇾ看。更憐童子宜ニ春服一。花裏尋ㇾ師到ニ杏壇一。

㈠雀、雛を伴ひ、藥草のかこひに來る　㈡仙書架に滿ち、閑居の意を慰む　㈢篋中に陰符（古書、黃帝、鬼谷子に受く）あるも、老いて讀むことを恥づ　㈣童子、春服を着け、花間に余を尋ね來る。莊子に「孔子杏壇の上に休す、弟子書を讀み　琴を鼓し曲を奏す」

慈恩の文郁上人に酧ゆ　賈島

袈裟影入ニ禁池一清。猶憶鄕山近ニ赤城一。籬落罅間寒蟹過。莓苔石上晩蛩行。期ㇾ登ニ野閣一閑應ㇾ甚。阻ニ宿幽房一疾未ㇾ平。聞說又尋ニ南嶽一去。無ㇾ端詩思忽然生。

㈠袈裟の影は禁池に入って清し。猶ほ憶ふ鄕山の赤城に近きを。㈡籬落の罅間に寒蟹過ぎ。莓苔の石上に晩蛩行く。㈢野閣に登らんと期して閑應に甚だしかるべし。幽房に阻宿して疾未だ平かならず。㈣聞說又南嶽を尋ね去ると。端なく詩思忽然として生ず。

㈠袈裟の影寺内の禁池に映じて清し　㈡籬の隙に瘦せ蟹走り、苔蒸す石に晩蛩（秋虫）行く　㈢閑甚だしく、上人閣に登り、疾未だ癒えず、余は幽房に臥す　㈣近く南嶽（赤城）に遊ぶと聞き、覺えず詩思を生ず

江亭秋霽　李郢

碧天涼冷雁

碧天涼冷として雁來ると疎なり。閑かに江雲を看て思ひ餘あり。㈠秋館の池

火遲。蒸ㇾ藜炊ㇾ黍餉二東菑一。漠漠水田飛二白鷺一。陰陰夏木囀二黄鸝一。山中習靜觀二朝槿一。松下清齋折二露葵一。野老與ㇾ人爭ㇾ席罷。海鷗何事更相疑。

陰陰たる夏木黄鸝囀る。(四)山中の習靜朝槿を觀。(五)松下の清齋露葵を折る。(六)野老は人と席を爭ひ罷む。(七)海鷗何事ぞ更に相疑ふ。

㊀王維の別墅。(水、舍下を廻り、竹洲花塢あり) ㊁空林に雨深く、炊煙あがること遲し ㊂農家にてあかざを蒸しきびを炊き耕作の人におくる ㊃山中に靜居し、人生のはかなきを觀ず。爾雅に「槿花は朝に生じ夕に隕つ」 ㊄松下に露葵を採り、齋食の料とす ㊅野老來りて席を爭ふに任す ㊆海鷗余を疑ひ、機心ありとなすかなれ

石門の春暮

錢起

自笑鄙夫多二野性一。貧居數畝半臨ㇾ湍。溪雲雜ㇾ雨來二茅屋一。山雀將ㇾ雛傍二藥欄一。仙籙

自ら笑ふ鄙夫の野性多きを。貧居數畝半ば湍に臨む。溪雲雨を雜へて茅屋に來り。(一)山雀雛を將ゐて藥欄に傍ふ。(二)仙籙床に滿ち閑にして厭はず。(三)陰符篋に在り老いて看るを羞づ。(四)更に憐む童子の春服に宜しく。花裏に師を尋ねて杏壇に到るを。

古多傷レ別。此際哀吟幾不レ勝。

秋風落葉正堪レ悲。黃菊殘花欲レ待レ誰。水近偏逢寒氣早。山深長見日光遲。愁中卜レ命看二周易一。夢裏招レ魂誦二楚詞一。自笑不レ如二湘浦鴈一。飛來卻是北歸時。

積雨空林烟

㊀ 句々情を說いて斷えず、蠶の絲を吐く如し

感懷　　劉長卿

秋風落葉正に悲しむに堪へたり。黃菊の殘花誰を待たんと欲す。水近うして偏に逢ふ寒氣の早きに。(一)山深うして長へに見る日光の遲きを。(二)愁中命を卜して周易を看。夢裏魂を招いて楚詞を誦す。(三)自ら笑ふ湘浦の鴈に如かざるを。飛び來るは卻つて是れ北に歸る時。

㊀ 山深く、日を見ること遲し ㊁ 易を見て運命を卜し、楚辭を讀みて、魂魄を招く。楚辭宋玉の招魂に「帝、巫陽に告げて曰く、人あり下に在り、我之を輔けんと欲す、魂魄離散す、汝筮して之を與へよ」 ㊂ 瀟湘の雁、また北に歸るに如かず。（謫居を悲しむ意）

(一)輞川の積雨　　王維

(二)積雨空林烟火遲し。(三)藜を蒸し黍を炊いで東菑に餉す。漠漠たる水田白鷺飛び。

寒夜漱二雲芽淨一。雪壞晴梳二石髮香一。自拂二烟霞一安二筆格一。獨開二封檢一試二砂床一。莫レ言洞府能招レ隱。會輾二飈輪一見二玉皇一。

獨封檢を開いて砂床を試む。言ふなかれ洞府能く隱を招くと。(四)會々飈輪を輾つて玉皇に見えん。

㊀舟夕陽に背いて去り、茅山の三峯七眞堂を拜す ㊁寒くして雲芽淨く、雪崩れて苔香し。(雲芽は茶也、或はいふ雲根(石)の誤ならんと) ㊂煙を拂つて筆架を置き、祕匣を開いて丹砂をしらぶ ㊃洞府(仙境)に招かるるのみならず、車輪を風に輾らせ、太淸宮の玉皇に見えん

蒲津の河亭　　唐彦謙

宿雨淸秋霽景澄。廣庭高樹更晨興。烟横博望乘レ槎水。日上文王避レ雨陵。孤棹夷猶期二獨往一。曲欄愁絕每長凭。思レ鄕懷レ古多傷レ別。此際哀吟幾不レ勝。

宿雨淸秋霽景澄み。廣庭の高樹更に晨に興く。(一)烟は横ふ博望が槎に乘ずる水。日は上る文王が雨を避くる陵。(二)孤棹夷猶して獨往を期し。曲欄愁絕して每に長へに凭る。鄕を思ひ古を懷うて多く別を傷む。此際哀吟して幾ど勝へず。

㊀煙黃河に横はり、日、殽の南陵に上る ㊁孤舟、ためらひて進まず

(已前共に七首)

虬鬢憔悴羽林郎。曾入二甘泉一侍二武皇一。鵰沒二夜雲一知二御苑一。馬隨二春仗一識二天香一。五湖歸去孤舟月。六國平來兩鬢霜。惟有二桓伊江上笛一。臥吹二三弄一送二斜陽一。

一片輕帆背二夕陽一。望二三峯一拜七眞堂。天

江上に王將軍に逢ふ

(一)虬鬢憔悴す羽林郎。(二)曾て甘泉に入つて武皇に侍す。(三)鵰は夜雲に沒して御苑を知り。(四)馬は春仗に隨つて天香を識る。(五)五湖歸り去る孤舟の月。六國平げ來る兩鬢の霜。(六)惟桓伊が江上の笛のみあつて。臥して三弄を吹いて斜陽を送る。

㊀羽林郎の勇姿衰ふ。漢書注に「天に羽林星あり、喩へば林木の盛、羽翼鷙擊の意の如し、故に武官に名つく」。虬鬢(みづちの如く長きひげ) ㊁曾て禁中に入り、天子に仕ふ ㊂夜獵の鵰(たか)高く飛ぶも御苑を知りて歸り來る ㊃馬儀仗に隨ひ、常に御香に慣る。(將軍の盛時) ㊄越の范蠡、功成りて五湖に泛び、秦の王翦、六國(齊趙韓魏燕楚)を平げて頭髮白し。(將軍の退隱) ㊅將軍閑地に就き、江上に優遊す。(晉の桓伊、征西將軍たり、王徽之江上に過ひ、その善く笛を吹くを聞き、一曲奏せんことを請ふ、伊馬を下り、三弄(三たび吹く)して去る)

皮日休が茅山の廣文を酬ゆるに和す　陸龜蒙

一片の輕帆夕陽に背く。三峯を望み拜す七眞堂。(一)天寒うして夜雲芽の淨きに(二)漱ぎ。雪壞れて晴に石髮の香しきに梳る。(三)自ら烟霞を拂つて筆格を安んじ。

鬼趫跳惟一足。峽猿哀怨過二三聲一。帆開青草湖中去。衣濕黃梅雨裏行。別後雙魚定難レ覓。近來潮不レ到二溢城一。

村橋西路雪初晴。雲暖沙乾馬足輕。寒澗渡頭芳草色。新梅嶺上鷓鴣聲。郵亭已送二征車發一。山館誰將二候火一迎。落日千峰轉迢遞。知君回レ首望二高城一。

に行く。(五)別後雙魚は定めて覓め難からん。(六)近來潮は溢城に到らず。

(一)事毎に余を愁へしむ (二)嶺南山中に怪物あり、一脚にて跳ね飛ぶ (三)峽中に猿悲しみ三聲を過ぎて人の腸を斷つ (四)舟を青草湖に進め、梅雨に衣を濕して行く (五)別後消息を得難からん (六)溢城(江州、白居易の謫地)に潮通ぜず、鯉魚も來らざればなり。古詩に「客西北より來り、我に雙鯉魚を遺る、童を喚んで鯉魚を烹しむれば、中に尺素の書あり」

劉谷を送る

村橋の西路雪初めて晴る。雲暖かに沙乾いて馬足輕し。寒澗の渡頭芳草の色。新梅の嶺上鷓鴣の聲。(一)郵亭已に征車の發するを送り。(二)山館誰か候火を將つて迎ふ。(三)落日千峰轉た迢遞たり。(四)知る君が首を回らして高城を望むを。

(一)郵亭の長、馬に車を牽かせて送る (二)山館の守護、松明を把りて迎ふ (三)山重り道遠し (四)首を回し、長安を望むなるらん

簪レ星曳レ月下二蓬壺一。曾見東皐種二白楡一。六甲威靈藏二瑞檢一。五龍雷電遶二霜都一。唯教二鵠探一丹丘信。不レ使二人窺一太乙爐。聞說葛陂風浪惡。許下騎二靑鹿一從上行無。

年年漸見南方物。事事堪レ傷北客情。山

(一)星を簪にし月を曳いて蓬壺を下る。(二)曾て見る東皐に白楡を種ゑしことを。(三)六甲の威靈瑞檢に藏め。(四)五龍の雷電霜都を遶る。(五)唯鵠をして探らしむ丹丘の信。(六)人をして窺はしめず太乙の爐。(七)聞説葛陂風浪惡しと。(八)靑鹿に騎つて行に從ふことを許さんや無や。

(一)星をかざし、月を佩び、蓬萊方壺の仙山を下る　(二)東天に白楡星を種う　(三)六神を匣中に藏む。老君六甲符に「丁卯神司馬卿、丁丑神趙子玉、丁酉亥神張之通、丁神藏文公、丁未神石叔通、丁巳神崔石卿」　(四)五龍雷電仙壇をめぐり護る　(五)鶴に仙界丹丘の消息を探らしむ　(六)太乙丹を錬る仙爐を祕し、人に知らしめず　(七)龍に乘り葛陂の風浪を超ゆと聞く　(八)余が從遊を許すや否や。神仙傳に「壺公費長房に竹一竿を遣り、竹に乘じ地を縮めて歸らしむ、後竹を葛陂に投ず、竹化して龍となる」列仙傳に「鹿の一千年なるを蒼鹿といふ」又「蘇耽職して常に鹿に騎り、險絕の處に遇へば皆超越す、之を問へば答へて曰く、龍なり」

客の湖南に之くを送る

白居易

年年漸く見る南方の物。(一)事事傷ましむるに堪へたり北客の情。(二)山鬼趫跳して惟一足。(三)峽猿哀怨して三聲を過ぐ。(四)帆開けて靑草湖中に去り。夜濕うて黃梅雨裏

對ㇾ客閑雲一片情。早晩塵埃得二休去一。且將二書劍一事二先生一。

野寺昏鐘山正陰。亂藤高竹水聲深。田夫就ㇾ餉還依ㇾ草。野雉驚飛不ㇾ過ㇾ林。齋沐暫思同二靜室一。淸羸已覺助二禪心一。寂寞日長誰問ㇾ疾。料君惟取二古方一尋。

雲の如く淡し ㊄ 早晩世を遁れ、君に從ひ遊ばんとす

（已前共に七首）

㊀ 前賓の語輕く、後賓の情思重し

李端が病中に寄せらるゝに酧ゆ　盧綸

（一）野寺の昏鐘山正に陰る。亂藤高竹水聲深し。（二）田夫餉に就いて還た草に依り。野雉驚き飛んで林を過らず。（三）齋沐暫く思ふ靜室を同じうせんことを。（四）淸羸已に覺ゆ禪心を助くるを。（五）寂寞日長うして誰か疾を問はん。（六）料る君が惟古方を取つて尋ねんことを。

㊀ 晩鐘鳴り、山すでに暗し ㊁ 農夫、草に坐して食す ㊂ 身を淨め、君と靜居を共にしたし ㊃ 體瘦せ、參禪の心を助く ㊄ 日長きも病を問ふものなし ㊅ 獨り、醫書に就き古方を尋ぬるならん

道士に贈る　楮　戴

爵士。宮牆依舊壓層崖。弩臺雨壊逢金鏃、香徑泥銷露玉釵。硯沼祇留山鳥浴、屧廊空信野華埋。姑蘇麋鹿眞閑事、須爲當時一愴懷。

に逢ひ。香徑泥に銷して玉釵を露はす。(三)硯沼祇留む山鳥の浴するを。(四)屧廊空しく信す野華の埋むるに。(五)姑蘇の麋鹿は眞に閑事。(六)須く當時の爲に一に懷を愴ましむべし。(七)

㊀ 美人(西施)すでに歿し、館娃宮なほ崖上に聳ゆ ㊁ 弩臺雨に壊れ、地中よりやじり出づ ㊂ 採香徑荒れ宮女の玉かざし露はる ㊃ 靈巖山の硯沼に、鳥來り浴するのみ ㊄ 響屧廊(圖經に「楩梓の木板を地に藉き、西施行けば則ち鳴る」)廢れ、野花亂れ埋むに任す ㊅ 吳亡び、伍子胥の諫も効なかりき。(伍子胥王を諫むる語「臣恐らくは麋鹿の姑蘇に遊ぶを見ん」 ㊆ 當時を懷ひ心に悲しむ

方干の隱居　　李山甫

咬咬嘎嘎水禽聲、露洗松陰滿院淸。溪畔印沙多鶴跡、檻前題竹有僧名。問人遠岫千重意。

咬咬嘎嘎たり水禽の聲。露松陰を洗つて滿院淸し。溪畔沙に印して鶴跡多く。(一)檻前竹に題して僧名あり。(二)人に問ふ遠岫千重の意。(三)客に對す閑雲一片の情。(四)早晩塵埃に休し去るを得て。(五)且つ書劍を將つて先生に事へん。

㊀ 沙鶴の跡多し ㊁ 僧來り、名を竹に記す ㊂ 主人に向ひ山中の幽趣を問ふ ㊃ 客なる余に對し、心、

惜ㇾ聲。東洛池臺怨ㇾ抛擲ー。移文非ㇾ久會應ㇾ成。

に蜂去り、公程に後るゝを恐る。(官驛の人に喩ふ) ㊃ 人は芍藥の美を愛し、鶯は柳に啼きつゞく ㊄ 久しく洛陽の邸に入らず、人に譏らるゝことあらん。(周彦倫、詔に應じて鍾山を出て、海鹽縣の令となる、再び山下を過るに當り、孔稚圭、北山移文を作りて之を譏る)

晏安寺

李紳

寺深ニ松桂ー無ニ塵事ー。地接ニ荒郊ー帶ニ夕陽ー。啼鳥歇時山寂寂。野華殘處月蒼蒼。碧紗凝ㇾ豔開ニ金像ー。清梵銷ㇾ聲閉ニ竹房ー。丘隴漸平連ニ茂草ー。九原何處不ニ心傷ー。

寺に松桂深うして塵事なく。地荒郊に接して夕陽を帶ぶ。啼鳥歇む時山寂寂。野花殘る處月蒼蒼。(一)碧紗豔を凝らして金像開き。(二)清梵聲を銷して竹房閉づ。(三)丘隴漸く平かにして茂草に連り。(四)九原何の處か心傷まざらん。

㊀ 碧紗美しく、中に黄金佛あり ㊁ 讀經の聲絶え、竹間の僧房閉づ ㊂ 陵墓廢れ、草のみ茂る ㊃ 死者九原(地下)の魂も、悲傷せざるものなからん

館娃宮

皮日休

豔骨已成ニ蘭

(一)豔骨已に蘭麝の土となり。宮墻舊に依つて層崖を壓し。(二)弩臺雨に壞れて金鏃

寒梅雲際溶溶雪水來。夢渚草長迷二楚望一。夷陵土黑有二秦灰一。巴人淚應二猿聲一落。蜀客船從二鳥道一回。十二碧峰何處所。永安宮外是荒臺。

し。(三)夷陵土黑うして秦灰あり。巴人の淚は猿聲に應じて落ち。(四)蜀客の船は鳥道より回る。(五)十二碧峰は何處の所ぞ。永安宮外是れ荒臺。

(一)雪解の水、遠き山中より來る　(二)雲夢澤に草長じ、楚地の眺めを妨ぐ　(三)夷陵の土黑く、秦代戰役の灰殘る　(四)蜀の舟、險阻を過ぎて歸る　(五)巫山の十二峰見えず、永安宮(蜀の昭烈王崩ず)荒る

春日閑坐

官曹崇重難二頻入一。第宅清閑且獨行。堦蟻相逢如二偶語一。園蜂速去恐レ違レ程。人於二紅藥一偏憐レ色。鶯到二垂楊一不レ

(一)官曹崇重にして頻に入り難し。(二)第宅清閑にして且つ獨り行く。(三)堦蟻相逢うて偶語するが如く。園蜂速かに去つて程に違ふを恐る。人は紅藥に於て偏に色を憐み。(四)鶯は垂楊に到つて聲を惜しまず。(五)東洛の池臺は抛擲を怨む。移文久しきにあらず會ず應に成るべし。

(一)官衙嚴にして妄りに入り難し　(二)私邸に歸り、獨清閑を樂しむ　(三)堦邊に蟻集ひ、人の對話する如く、園中

魚網求二鮮食一。何處人烟事二火耕一。昨日已嘗村酒熟。一杯思下與二孟嘉一傾上。

早春鼇厔に歸り、耿湋李端に寄す　盧綸

野日初晴麥隴分。竹園村巷鹿成ㇾ羣。萬家廢井生二新草一。一樹繁華對二古墳一。引ㇾ水忽驚冰滿ㇾ澗。向ㇾ田空見石和ㇾ雲。可ㇾ憐荒歲青山下。惟有二松枝一好ㇾ寄ㇾ君。

(一)野日初めて晴れて麥隴分る。竹園村巷鹿羣を成す。萬家の廢井新草を生じ。(二)一樹の繁華古墳に對す。水を引いて忽ち驚く冰の澗に滿つるを。(三)田に向つて空しく見る石の雲に和するを。憐むべし荒歲青山の下。(四)惟松枝のみあつて君に寄するに好し。

㊀ 亂後の野晴れ、麥隴明かに見ゆ　㊁ 一樹の花繁く古き墓に對す　㊂ 田荒れ、石に雲起るのみ　㊃ 君に寄すべきものは、たゞ松枝のみ。（暗に節操をいふ）

松滋渡より峽中を望む　劉禹錫

渡頭輕雨灑二

渡頭の輕雨寒梅に灑ぎ。(一)雲際溶溶として雪水來る。(二)夢渚草長うして楚望を迷は

暗迷香蜚絕。繚垣秋斷草煙深。前朝舊物東流在。猶爲年年下二翠岑一。

なり、心を再霖鈴に傷ましむ、唐百官志に「尚舍行幸を奉御し、三部帳を設け、その外蔽は城を排す」楊妃外傳に「玄宗蜀に幸し、霖雨旬に渉る、道に鈴聲を聞き、その聲を採んで雨霖鈴の曲を作る」㈣宮を繞る垣壞れ、秋草の色煙の如く深し　㈤東流の水のみ、昔のまゝに山より下る

（已前共に四首）(一)

㈠前虛の中に故事を用ふ

前實後虛（前聯に景物を敍し後聯に情思を述ぶる格）

春山道中孟侍御に寄す　張南史

春來游子傷二歸路一。時有三白雲邀二獨行一。水流亂赴石潭響。華發不レ知山樹名。誰家

春來遊子歸路を傷む。(一)時に白雲の獨行を邀ふるあり。水流亂れ赴いて石潭響き。華發いて知らず山樹の名。誰が家の魚網ぞ鮮食を求め。何の處の人烟ぞ火(二)耕を事とす。昨日已に嘗む村酒の熟せるを。(三)一杯孟嘉と傾けんことを思ふ。

㈠歸路の悲しさを傷む　㈡陸稻を耕す　㈢君と一杯を傾けたし（桓溫の參軍孟嘉に比す）

悵望春襟鬱未レ開。重臨二鸚鵡一益堪レ哀。曹瞞尙不レ能レ容レ物。黄祖何曾解レ愛レ才。幽島暖聞二燕鴈去一。曉江晴覺二蜀波來一。誰人正得二風濤便一。一點征帆萬里回。

古殿春殘綠野陰。上皇曾此去二泥金一。三城帳屬昇平夢。一曲鈴關悵望心。苑路

（二）悵望すれば春襟鬱として未だ開かず。（三）重ねて鸚鵡に臨んで益〻哀しむに堪へたり。曹瞞尙ほ物を容るゝ能はず。黄祖何ぞ曾て解く才を愛しまん。幽島暖かにして（四）燕鴈の去るを聞き。曉江晴れて蜀波の來るを覺ゆ。（五）誰人か正に風濤の便を得て。一點の征帆萬里より回らん。

㊀ 禰衡の殺されし地。漢書に「禰衡剛傲にして物を慢る、曹操之を怒り送つて劉表に與ふ、後に表を侮る、表、江夏の太守黄祖に送りて之を殺さしむ」 ㊁ 旅中春色を眺め愁を催し心鬱ぐ ㊂ 再び鸚鵡洲を望み、益々悲しむ ㊃ 曹操（小字は阿瞞）人を容れず、黄祖また才を愛せず ㊄ 誰か風波の便を得、還へ長安に至らん。（謫居を悲しむ意）

（一）繡嶺宮

古殿春殘る綠野の陰。（二）上皇曾て此に泥金を去つ。三城の帳は屬す昇平の夢。（三）一曲の鈴は關る悵望の心。苑路暗に迷うて香輦絶え。（四）繚垣秋斷えて草煙深し。（五）前朝の舊物は東流在り。猶ほ爲に年年翠岑より下る。

㊀ 絶句同題の注參照 ㊁ 玄宗、曾て封禪の儀を修むこ（地に玉牒を藏め、金泥にて塗る） ㊂ 榮華も一場の夢と

意須同賞。子著囊盛幾日傳。

曾於青史見遺文。今日飄零過古墳。詞客有靈應識我。霸才無主始憐君。石麟埋沒藏春草。銅雀淒涼起暮雲。莫怪臨風倍惆悵。欲將書劍學從軍。

る」國史補に「紙の舊き者は蜀の金花魚子」(八) 曲を讀みて花を惜ひ、ともに東山の春を賞せんとす (九) 又、賞を囊に盛り、植ゑて永く傳へんと欲す。王羲之來禽帖に「日給藤子は、皆囊に盛るを佳とす、函封するものは多く生ぜず」

陳琳の墓(一)　　溫庭筠

曾て青史に於て遺文を見る。今日飄零して古墳を過ぐ。(二)詞客靈あらば應に我を識るべし。(三)霸才主なく始めて君を憐む。(四)石麟埋沒して春草に藏れ。(五)銅雀淒涼として暮雲を起す。怪しむなかれ風に臨んで倍〻惆悵するを。(六)書劍を將つて從軍を學ばんと欲す。

(一) 字は孔璋、廣陵の人、魏の武帝、才を愛して司空となし、數々厚賜を加ふ (二) 詩人(陳琳)靈あらば、よく余を知るべし (三) 雄志を抱いて天下に知己なく、君を慕ふこと深し (四) 石刻の麒麟、塚の春草に埋る (五) 武帝の銅雀臺に暮雲淋しく起る (六) 君に做ひ、書劍を携へて從軍せんとす

鸚鵡洲の眺望(一)　　崔塗

山戲晚不二歸
去一。高塔晴來
獨自登。林下
聽レ經秋苑鹿。
溪邊掃レ葉夕
陽僧。吟餘卻
起雙峯念。曾
看庵西瀑布
冰。

珠履行臺擁二
附蟬一。外郎高
步似二神仙一。陳
詞今見唐風
盛。從事遙瞻
魏國賢。擲地
好辭凌二綵筆一。
浣華春水賦二
魚牋一。東山芳

掃ふ夕陽の僧。吟餘卻つて起す雙峯の念。(三)曾て看る庵西瀑布の冰。

❶ 慈恩寺の塔に題す ❷ 人生煩しく、一も成就することなし ❸ 曾て韶州の雙峯寺に登り、瀑布の冰を見しを念ふ

(已前共に九首)(二)

❶ 前虛、情思の中に景物を述べ、後實直に景物を言ひ、結句、情思を述ぶ

都城肅員外、(一)海棠花を寄せらる　羊士諤

(二)珠履行臺附蟬を擁す。(三)外郎高步神仙に似たり。(四)陳詞今見る唐風の盛なるを。(五)從事遙かに瞻る魏國の賢。(六)擲地の好辭綵筆を凌ぎ。(七)浣華の春水魚牋に賦く。(八)東山の芳意須らく同じく賞すべし。(九)子を著け囊に盛つて幾日か傳へん。

❶ 海棠花の曲の意。(肅一本に蕭とあり) ❷ 珠履を著けし人々、貴人を擁す。漢儀に「侍中の冠、蟬をつけて文とす」 ❸ 員外郎の風姿すぐれ、神仙に似たり ❹ 曲詞に、唐代詩風の盛なるを見る ❺ 從事(肅員外)の才藻、魏の建安七子に擬す ❻ 巧妙なる辭句、古人の彩筆に勝る。(晉の孫綽、賦を作り、范榮期に示していふ、「卿試に地に擲て、當に金聲を作すべし」) ❼ 詩箋美しく、春水をつくく。梁益記に「浣花溪の居人、多く彩箋を造

秋賦春還計盡違。自知身是拙レ求レ知。惟思曠海無二休日一。卻喜孤舟似二去時一。連レ浦一程兼二汴宋一。夾レ堤千柳雜二唐隋一。從來此恨皆前達。敢負二吾君一作二楚詞一。

往事悠悠成二浩歎一。浮生擾擾意何能。故

永城驛に題す

薛能

(一)秋賦春還つて計盡く違ふ。(二)自ら知る身は是れ知を求むるに拙きを。(三)惟思ふ曠海休する日なからんや。(四)卻つて喜ぶ孤舟去る時に似たるを。(五)浦に連る一程汴宋を兼ね。(六)堤を夾む千柳唐隋を雜ふ。(七)從來此の恨皆前達。(八)敢へて吾君に負いて楚詞を作らんや。

㊀ 昨秋の試驗に落第し、春に到りて歸る　㊁ 朝廷に知己を求むるに拙し　㊂ 河流海に注いで休まず、余も他日の榮達を期す　㊃ 孤舟去年の如き、、身の潔白なるを喜ぶ　㊄ 舟、汴州宋州を過ぐ　㊅ 隋の柳、唐の柳にまじる　㊆ 先輩にも、皆落第の恨ありき　㊇ 天子に背き不平を詩賦に述べざるべし。史記に「屈原の死後、楚に宋玉・景差の徒あり、皆賦を以て稱せらる」故に世に楚詞を傳ふ」

(一)慈恩の偶題

鄭谷

往事悠悠として浩歎を成す。(二)浮生擾擾として竟に何ぞ能くせん。故山歳晩れて歸り去らず。高塔晴れ來つて獨自ら登る。林下經を聽く秋苑の鹿。溪邊葉を

曙流。漢家宮闕動ニ高秋一。殘星數點雁橫レ塞。長笛一聲人倚レ樓。紫豔半開籬菊淨。紅衣落盡渚蓮愁。鱸魚正美不ニ歸去一。空戴ニ南冠一學ニ楚囚一。

横たはり。長笛一聲人樓に倚る。紫艶半ば開いて籬菊淨く。(二)紅衣落ち盡して渚蓮愁ふ。鱸魚正に美なれども歸り去らず。(三)空しく南冠を戴いて楚囚を學ぶ。

(一)雲淋しく曙に流れ、禁城に秋高し　(二)紅蓮の花落ち、葉傷む　(三)南地より來り、長安に留りて不遇を歎ず

山寺に宿す　　項斯

栗葉重重覆ニ翠微一。黃昏溪上語人稀。月明古寺客初到。風度閑門僧未レ歸。山菓經レ霜多自落。水螢穿レ竹不レ停レ飛。中宵能得ニ幾時睡一。又被三鐘聲催ニ著衣一。

栗葉重重として翠微を覆ひ。黃昏溪上語る人稀なり。月明かにして古寺客初めて到り。風度つて閑門僧未だ歸らず。山菓霜を經て多くは自ら落ち。(一)水螢竹を穿つて飛ぶを停めず。中宵能く幾時か睡るを得ん。(二)又鐘聲に著衣を催さる。

(一)溪上の螢竹間を飛びて止まず　(二)曉鐘の聲

汀月寒生古石樓。心憶懸帆身未遂。謝公此地昔年遊。

六朝文物草連空。天淡雲開今古同。鳥去鳥來山色裏。人歌人哭水聲中。深秋簾幕千家雨。落日樓臺一笛風。惆悵無因見范蠡。參差煙樹五湖東。

り、蟋蟀（きり〴〵す）の聲のみ聞ゆ ㊂ 舟に乘りて遊ばんとするも、未だ志を得ず ㊃ この地に謝安の昔遊を羨む

宣州開元寺の水閣に題す　杜牧

（一）六朝の文物草空に連る。（二）天淡く雲開けて今古同じ。鳥去り鳥來る山色の裏。人歌ひ人哭す水聲の中。深秋簾幕千家の雨。落日樓臺一笛の風。（三）惆悵す范蠡を見るに因なきを。（四）參差たる煙樹五湖の東。

㊀ 六朝の文華跡なく、秋草空に連る ㊁ 天と雲とのみ、古來變ることなし ㊂ 功成り身退きし范蠡を見ず ㊃ 五湖の東に横はり、參差（高さの揃はぬ貌）たるのみ。國語に「范蠡遂に輕舟に乘じ、五湖に泛ぶ」

雲物凄涼拂

長安秋夕　趙嘏

（一）雲物凄涼として曙を拂つて流れ。漢家の宮闕高秋に動く。殘星數點雁塞に

尋訪。洞裏朝レ元去不レ逢。看レ院只留雙白鶴。入レ門唯見一靑松。藥爐有レ火丹應レ伏。雲碓無レ人水自春。欲レ問參同契中事。未レ知何日得二相從一。

峯前峯後寺新秋。絕頂高窻見二沃州一。人在二定中一聞二蟋蟀一。鶴曾棲處掛二獼猴一。山鐘夜度空江水。

む雙白鶴。門に入れば唯見る一靑松。藥爐火あり丹應に伏すべし。(三)雲碓人なくして水自ら舂く。(四)問はんと欲す參同契中の事。未だ知らず何の日か相從ふを得ん。

(一) 道士、玄元李老君に朝し、逢ふことを得ず (二) 藥爐に火あり、丹砂を埋め燒くならん (三) 水、碓(うす)を打ち、自然に雲母(きらゝ)を搗く。自注に、「廬山に雲母多く水碓を以て搗く、俗に呼んで雲碓といふ」 (四) 道家の祕事を問ひたきも、從遊し得るは何時ならんか。神仙傳に、「魏伯陽、古文の龍虎上經を得、その象を約し、參同契を作る」

(一)早秋天竺靈隱寺に寄題す　　賈島

峯前峯後寺新に秋なり。絕頂の高窻沃州を見る。(二)人定中に在つて蟋蟀を聞き。鶴曾て棲む處獼猴を掛く。山鐘夜渡る空江の水。汀月寒生ず古石樓。(三)心に懸帆を憶うて身未だ遂げず。(四)謝公此の地昔年遊ぶ。

(一) 圖經に「杭州靈山の陰　北澗の陽、即ち靈隱寺、靈山の南　南澗の陽、即ち天竺寺」と見ゆ (二) 僧、禪定に入

郢東回レ首。滿耳蛙聲正夕陽。

㊀ 三四句、情思をいひ、景物に近し

愁心一倍長二離憂一。夜思千里戀二舊遊一。秦地故人成二遠夢一。楚天多雨在二孤舟一。諸溪近レ海潮皆應。獨樹邊レ淮葉盡流。別恨轉深何處寫。前程惟有一登樓。

淮浦に宿し司空曙に寄す　李端

愁心一倍離憂を長ず。夜思千里舊遊を戀ふ。(一)秦地の故人遠夢と成り。楚天の多雨に孤舟に在り。(二)諸溪海に近うして潮皆應じ。獨樹淮に邊うて葉盡く流る。別恨轉た深し何の處にか寫さん。(三)前程惟有り一登樓。

㊀ 夢に長安の故人を見る　㊁ 海潮の滿干に應じ、溪水に深淺を生ず　㊂ 古の王粲に倣ひ、登樓賦を作らんとす

郡中乞レ假來

郭道士を尋ねて遇はず　白居易

郡中假を乞ひて來つて尋訪す。(一)洞裏元に朝して去つて逢はず。院を看れば只留

水長天隨ニ逐
客ー。荒城極浦
足ニ寒雲ー。山從ニ
建業ー千峰出。
江到ニ潯陽ー九
派分。借問督
郵纔弱冠。府中年少不レ如レ君。

問す督郵纔かに弱冠。府中の年少君に如かず。

(一) 雁聲悲しく、聞くに堪へず (二) 逐客(錄事)の行く處に江水窮りなし (三) 荒城極浦に寒雲深し (四) 潯陽に至り江水九分す、(烏白江・蚌江・烏江・嘉靡江・畎江・源江・廩江・提江・菌江) (五) 饒州府に人多きも、錄事の如き若きものなし。白氏六帖に「州の主簿、郡の郵督は、並に今の錄事參軍なり」

清明の日友人と玉塘莊に遊ぶ　來鵬

幾宿ニ春山ー共ニ
陸郎ー。清明時
節好風光。細ニ
穿綠荇ー船頭
滑。碎ニ踏殘華ー
屐齒香。風急
嶺雲飄ニ迴野ー。
雨餘田水落ニ
芳塘ー。不レ堪吟

幾たびか春山に宿して陸郎(一)と共にす。清明の時節好風光。綠荇を細穿して船頭滑かに。殘花を碎踏して屐齒香し。風急にして嶺雲迴野(二)に飄り。雨餘の田水芳塘(三)より落つ。堪へず吟じ罷みて東に首を回すに。滿耳の蛙聲正に夕陽。

(一) 陸姓の人。(陸機に比す) (二) 遥かなる野 (三) 芳艸の堤

(巳前共に二首)

春初一臥到二秋深一。不レ見紅芳與二綠陰一。窗下展レ書難二久讀一。池邊扶レ杖欲二閑吟一。藕穿二平地一生二荷葉一。笋過二東家一作二竹林一。在レ舍渾如二遠鄉客一。詩僧酒伴鎮相尋。

北人南去雪紛紛。雁過二汀洲一不レ可レ聞。積

病起　來鵬

春初一たび臥して秋の深きに到る。(一)見ず紅芳と綠陰と。窗下書を展べて久しく讀み難く。池邊杖に扶けられて閑に吟ぜんと欲す。(二)藕は平地を穿つて荷葉を生じ。(三)笋は東家を過ぎて竹林を作す。(四)舍に在つて渾て遠鄉の客の如し。詩僧酒伴鎮に相尋ぬ。

(一)花と綠陰との景を見ず　(二)蓮の葉平地に生ず　(三)竹の根伸び、筍東隣に生ず　(四)風景一變し、遠地に客たるに似たり

(巳前共に六首)

(一)結句に情を述ぶ

李錄事、饒州に赴くを送る　皇甫冉

北人南に去つて雪紛紛。(一)雁汀洲を過ぎて聞くべからず。積水長天(二)逐客に隨ひ。(三)荒城極浦寒雲足る。山は建業より千峯出で。(四)江は潯陽に至つて九派分る。(五)借

林梢一多二碎滴一。松生二石底一足二旁枝一。明朝却欲レ歸二城市一。問二我來期一總不レ知。

㊀ 紫芝を求めて山に來り、久しく留めらろ ㊁ 泉そゝぎ、樹に雫多し ㊂ 松、石に生じ、横枝繁し ㊃ 再遊の時を期すべからず

嶺水爭分路轉迷。桄榔椰葉暗二蠻溪一。愁レ衝二毒霧一逢二蛇草一。畏レ落二沙蟲一避二燕泥一。五月畬田收二火米一。三更津吏報二潮雞一。不レ堪二腸斷思レ鄕處一。紅槿華中越鳥啼。

嶺南道中

李德裕

(一)嶺水爭ひ分れて路轉た迷ふ。桄榔椰葉蠻溪暗し。毒霧を衝かんことを愁へて(二)蛇草に逢ひ。(三)沙蟲に落ちんことを畏れて(四)燕泥を避く。(五)五月畬田火米を收め。(六)三更津吏潮雞を報ず。腸斷に堪へず鄕を思ふ處。(七)紅槿華中(八)越鳥啼く。

㊀ 嶺水分流し、路に迷ひ易し ㊁ 蛇草、蛇を殺し、又人を害す ㊂ 毒蟲、蛇の鱗中に潜む ㊃ 毒蟲、燕巣の泥に生す ㊄ 氣候暑く、五月陸稲を收む ㊅ 夜三更、津吏滿潮を報ず。異物志に「移風縣に潮雞あり、潮長ずれば則ち鳴く」 ㊆ 紅きむくげ ㊇ 鷓鴣

遠別悠悠白髮新。江潭何處是通津。潮聲偏懼初來客。海味惟甘久住人。漠漠煙光漁浦晚。青青草色定山春。汀洲更有二南回雁一。亂起聯翩北向レ秦。

遠別悠悠として白髮新なり。江潭何れの處か是れ通津。潮聲偏に懼れしむ初來の客。(一)海味惟甘んず久住の人。漠漠たる煙光漁浦の晚。青青たる草色定山の春。(二)汀洲更に南回の雁あり。亂起聯翩として北秦に向はん。

(一) 海郷の食味異なり、久住の人のみ慣る (二) 江上に歸雁あり、北、長安に向ふならん。(余に音信を傳へよ)

友人に送別す　　姚合

獨向二山中一覓二紫芝一。山人勾引住多時。摘レ花浸レ酒春愁盡。燒レ竹煎レ茶夜臥遲。泉落二

(一)獨り山中に向つて紫芝を覓む。山人勾引して住ること多時なり。花を摘み酒に浸して春愁盡き。竹を燒き茶を煎て夜臥すこと遲し。(二)泉林梢より落ちて碎滴多く。(三)松石底より生じて旁枝足る。明朝却つて城市に歸らんと欲す。(四)我が來期を問へども總べて知らず。

社日辭レ巢去。菊爲二重陽一冒レ雨開。淺薄將レ何稱二獻納一。臨レ岐終日獨徘徊。

㊀ 嵩山の僧、茅山の道士も往來し、詩を留め書を寄す　㊁ 秋社の日　㊂ 才薄く、獻納の任(補闕拾遺)に堪へ難し　㊃ 官を辭し難く、獨り心に愁ふ

乘如禪師蕭居士が嵩丘の蘭若を過ぐ　王維

無著天親弟與レ兄。嵩丘蘭若一峯晴。食隨二鳴磬一巢鳥下。行踏二空林一落葉聲。迸水定侵二香案一濕。雨華應下共二石床一平上。深洞長松何所レ有。儼然天竺古先生。

無著天親弟と兄と。嵩丘の蘭若一峯晴る。食は鳴磬に隨つて巢鳥下り。行く〳〵空林を踏めば落葉聲る。迸水は定めて香案を侵して濕さん。雨華は應に石床と平かなるべし。深洞の長松何のある所ぞ。儼然たり天竺の古先生。

○唐詩選に出づ

友人江南に遊ぶを送る　耿湋

漠漠秦雲淡淡天。新年景象入㆓中年㆒。情多最恨花無ㇾ語。愁破方知酒有ㇾ權。苔色滿ㇾ牆思㆓故第㆒。雨聲入ㇾ夜憶㆓春田㆒。衰遲自喜添㆓詩學㆒。更把㆓前題㆒改㆓數聯㆒。

閑看㆓秋水㆒心無事。坐對㆓寒松㆒手自栽。廬嶽高僧留ㇾ偈別。茅山道士寄ㇾ書來。燕知㆓

漠漠たる秦雲淡淡たる天。新年の景象中年に入る。情多くして最も恨む花に語なきを。愁(二)破れて方に知る酒に權あり。苔色(三)牆に滿ちて故第を思ひ。雨聲夜に入つて春田(四)を憶ふ。衰遲(五)自ら喜ぶ詩學を添ふるを。更に前題を把つて數聯を改む。

㊀ 五十歲(百歲の半の意)　㊁ 愁破れ、酒に權威あるを覺ゆ　㊂ 古き邸第の榮華を憶ふ　㊃ 故鄕の春田を憶ふ　㊄ 老後、詩學を勉め、舊稿を取りて數聯を改む

(已前共に十首)
(二)

㊀ 前聯は情にして婉麗に、後聯は景にして感興に富む

秋日東郊の作　　皇甫冉

閑に秋水を看て心無事なり。坐して寒松に對して手自ら栽う。(一)廬嶽の高僧偈を留めて別れ。茅山の道士書を寄せて來る。燕は社日(二)を知つて巢を辭して去り。菊は重陽のために雨を冒して開く。淺薄(三)何を將つてか獻納と稱せん。岐(四)に臨んで終日獨徘徊す。

漸香鄰舍粥。榆煙將ㇾ變舊爐灰。玉樓春暖笙歌夜。肯信愁腸日九回。

「寒食日、大麥粥を煮、杏仁を研いで酪となし、餳(あめ)を以て之に沃ぐ」㊂榆柳の火を作り、舊火に換ふ。(唐詩選七絶、寒食の注參照)㊃長安富貴の人、我が愁の深さを知らず

江際　　鄭谷

杳杳漁舟破ニ瞑烟一。疎疎蘆葦舊江天。那堪流落逢ニ搖落一。可ㇾ得潸然是偶然。萬頃白波迷ニ宿鷺一。一林黃葉送ニ秋蟬一。兵車未ㇾ息年華促。早晚閑吟向ニ滻川一。

(一)杳杳たる漁舟瞑烟を破る。(二)疎疎たる蘆葦舊江の天。(三)那ぞ堪へん流落して搖落に逢ふに。得べけんや潸然として是れ偶然なるを。萬頃の白波宿鷺を迷はせ。一林の黃葉秋蟬を送る。(四)兵車未だ息まず年華促る。(五)早晚閑吟して滻川に向はん。

㊀漁舟遙かに、暗き煙を衝く㊁古き江上に蘆葦まばらなり㊂流寓して秋に逢ひ、涙の落つるも偶然にあらず㊃戰亂止まず、吾も漸く老ゆ(或は年も暮れんとす)㊄早晚滻川(京兆府)に住み、閑吟せんと欲す

(一)中年

閑遊。誰共芳樽話唱酬。鄉夢有レ時生二枕上一。客情終日在二眉頭一。雲拖二雨脚一連レ天去。樹夾二河聲一遶レ郡流。回レ首帝京歸未レ得。不レ堪吟倚二夕陽樓一。

生じ。客情終日眉頭に在り。(三)雲は雨脚を拖いて天に連つて去り。(四)樹は河聲を夾んで郡を遶つて流る。(五)首を回せども帝京に歸ること未だ得ず。堪へず吟じて夕陽樓に倚るに。

(一)飾りなき琴　(二)時に故鄉を夢む　(三)客愁多く、常に眉を顰む　(四)雲、雨を降しつゝ去る　(五)河流郡を繞り、木の間に鳴る

一百五日又欲レ來。梨華梅華參差開。行人自笑不二歸去一。瘦馬獨吟眞可レ哀。杏酪

春日長安の卽事

崔魯

(一)一百五日又來らんと欲す。梨華梅華參差として開く。行人自ら笑ふ歸り去らざるを。瘦馬獨吟す眞に哀むべし。(二)杏酪漸く香し鄰舍の粥。(三)楡煙將に變ぜんとす舊爐の灰。(四)玉樓春暖かなり笙歌の夜。肯て信ぜんや愁腸日に九回することを。

(一)荊楚歲時記に「冬節を去る一百五日(冬至の後百五日目)卽ち疾風甚雨あり、之を寒食といふ」　(二)玉燭寶典に

船飛。江邊道路多二苔蘚一。塵土無レ由得レ上レ衣。

「進士、下第し、退いて業に肄ふ、之を過夏といひ、業（所作の文）を執りて出づ之を秋卷といふ」㊁塵衣を汚さず、君の心の淸きが如し

旅館に懐を書す

劉　滄

忽看庭樹換二風煙一。兄弟飄零寄二海邊一。客計倦レ行分陝路。家貧休レ種汶陽田。雲低二遠塞一鳴二寒雁一。雨歇二空山一噪二暮蟬一。落葉蟲絲滿二窗戶一。秋堂獨坐思悠然。

(一)忽ち看る庭樹の風煙を換ふるを。兄弟飄零して海邊に寄る。客計行くに倦む(二)分陝の路。(三)家貧しうして種うるを休む汶陽の田。雲は遠塞に低れて寒雁鳴き。雨は空山に歇んで暮蟬噪ぐ。落葉蟲絲(四)窗戶に滿つ。秋堂獨坐して思悠然。

㊀秋來り風景變る　㊁陝州の路。（周の初、境を分ち、周公陝以東を、召公陝以西を主る）　㊂古の齊の地　㊃蜘蛛の絲

潁州の客舍

姚　揆

素琴孤劍尙

(一)素琴孤劍尙ほ閑遊す。誰と共にか芳樽話つて唱酬せん。(二)鄕夢時あつて枕上に

幽居悄悄何人到。落日清涼滿二樹梢一。新句有レ時愁裏得。古方無レ效病來拋。荒簷數蝶懸二蛛網一。空屋孤螢入二燕巢一。獨臥二南窗一秋色晩。一庭紅葉掩二衡茅一。

幽居悄悄として何人か到らん。落日清涼として樹梢に滿つ。新句時あつて愁裏に得。(一)古方效なくして病來拋つ。荒簷の數蝶蛛網に懸り。空屋の孤螢燕巢に入る。獨南窗に臥す秋色の晩。一庭の紅葉衡茅を掩ふ。(二)

(一) 古き藥方効なく、病中に棄つ　(二) 衡門茅屋

崔約下第して楊州に歸るを送る　姚合

滿座詩人吟送レ酒。離城此會亦應レ稀。春風下第時稱レ屈。秋卷呈レ親自束歸。日晩山華當レ馬落。天陰水鳥傍レ

滿座の詩人吟じて酒を送る。離城此の會亦應に稀なるべし。(一)春風下第して時に屈と稱し。(二)秋卷親に呈せんとして自ら束ねて歸る。日晩れて山華馬に當つて落ち。天陰つて水鳥船に傍うて飛ぶ。江邊の道路苔蘚多し。(三)塵土由なし衣に上るを得るに。

(一) 唐史鄭薫傳に「對策して宦官論を極論す、試官皆畏れて之を取らず、物論翕然として屈と稱す」 (二) 鑑言に

將二簿領一到二君家一。

榮辱升沈影與レ身。世情誰是舊雷陳。惟應三鮑叔偏憐二レ我。自保曾參不レ殺レ人。山入二白樓一沙苑暮。潮生二滄海一野塘春。老逢二佳景一惟惆悵。兩地各傷無限神。

れば年を延ぶ、根は蔓びて水に入る、飲む者必ず壽を長うす」㈥ 本草に「光明砂火、之を芙蓉沙といふ」（うずみ火にて錬る）㈦ 吏役に煩され、簿領（官府の文書）を携へ、君が家に出入するを恥づ

樂天に寄す　元稹

㈠榮辱升沈影と身と。㈡世情誰か是れ舊雷陳。㈢惟應に鮑叔偏に我を憐むべし。㈣自ら保す曾參の人を殺さざるを。山は白樓に入る沙苑の暮。㈤潮は滄海に生ず野塘の春。老いて㈥佳景に逢うて惆悵す。兩地各〻傷ましむ無限の神。

㈠ 浮沈定りなく、相伴ふは影と身とのみ ㈡ 亦情の厚きこと、雷義、陳仲の如きは誰ぞ ㈢ 君は余が寃罪を憐むならん。（時に同州に謫せらる）。管仲の語「我を知るものは鮑叔」（唐詩選七古、貧交行の註參照）、又、史記に「甘茂、秦王に謂つて曰く、昔曾參、ともに姓名を同うするものあり、人を殺す、人その母に告ぐ、母曰く、吾が子は人を殺さずと、又頃にして一人來り、頃あつてまた一人來る。その母杼を投じて走る。それ曾參の賢を以てしその母も之を信ず、然れども三人なれば則ち母懼ると」㈣ 同州の樓、令狐楚賦を作り、上に刻す ㈤ 杭州（樂天の謫所）海に接す ㈥ 風景佳なるも、共に心を傷ましむ

秋居病中　雍陶

後上。豈料光生二
腐草餘一。建水
風煙收二客涙一。
杜陵華竹夢二
郊居一。勞レ君故
有二詩人贈一。欲レ
報二瓊瑤一愧レ不レ
如。

今春扶レ病移二
滄海一。幾度承レ
恩對二白華一。送レ
客屢聞簷外
鵲。消レ愁已辨
酒中蛇。瓶收二
枸杞懸泉水一。
鼎鍊芙蓉伏
火砂。誤入二塵
埃一牽二吏役一。羞

如かざるを愧づ。

㊀ 詔下り、罪を赦さる。(後趙の石虎、詔書に五色紙を用ひ、木鳳の口に啣ましむ) ㊁ 心すでに寒灰の如く、腐草螢となるを思はざりき。(赦免を喜ぶ意) ㊂ 謫所建水に涙をとゞめ、故鄉杜陵の郊居を夢む ㊃ 慰問の詩を贈られ、之に報ゆる才なきを愧づ。詩に「我に投ずるに木桃を以てし、之に報いるに瓊瑤(たま)を以てす」

竇拾遺病に臥し寄せらるゝに答ふ　　包佶

(一)今春病を扶けて滄海に移り。幾度か恩を承けて白華に對す。(二)客を送つて屢〻聞く簷外の鵲。(三)(四)愁を消して已に辨ず酒中の蛇。(五)瓶には枸杞懸泉の水を收めて。(六)鼎には鍊る芙蓉伏火の砂。(七)誤つて塵埃に入つて吏役に牽かる。羞らくは簿領を將つて君が家に到りしを。

㊀ 今春病みて閑地を求む ㊁ 屢〻詔を拜し、白華殿に上る ㊂ 病輕く、客を送迎す。(古言に、烏鵲噪いて行人至る) ㊃ 病愁消ゆ。晉書樂廣傳に「廣親客あり、久しく來らず、廣之を問ふ、答へて曰く、前に酒を賜ふを蒙り、杯中に蛇影ありて疾むと、時に廳壁に弓あり、漆調ふ、弓影ならんと、乃ち酒を前處に置き、問うて曰く、見るありや否や、答へて曰く、前の如しと、乃ち所以を告ぐ、客豁然として頓に愈ゆ」 ㊄ 本草に「枸杞、之を服す

廣陵堤上昔離居。帆轉二瀟湘一萬里餘。楚澤病時無二鵩鳥一。越鄕歸去有二鱸魚一。潮生二水國一蒹葭響。雨過二山城一橘柚疎。聞說攜レ琴兼載レ酒。邑人爭識馬相如。

（一）廣陵堤上昔離居す。帆は瀟湘に轉ず萬里餘。（二）楚澤病む時鵩鳥なく。越鄕歸り去つて鱸魚あり。潮水國に生じて蒹葭響き。（三）雨山城を過ぎて橘柚疎なり。（四）聞說琴を攜へ兼て酒を載すと。邑人爭でか識らん馬相如。

㊀ 嘗て廣陵堤上に別れ遠く瀟湘に去る ㊁ 楚澤（瀟湘）に病みしも、また故郷越に歸る。（前首、鵩鳥の注參照）又、晉の張翰齊王の掾となり、秋風の起るを見、故鄕松江の蓴羹鱸膾を思ひ、官を棄てて東に歸る ㊂ 橘柚茂る（疎は扶疎の疎） ㊃ 琴酒を攜へ出遊するも、君が文才を知るものなし。（司馬相如に比す）

（已前共に七首）

張芬が赦後に寄せらるゝに酧ゆ　　司空曙

㊀ 舊注に「前虛の二句、體面實を帶びて情思老古に、後實の二句、景意實を着けて體面流麗なり」

紫鳳朝啣五色書。陽春忽布網羅除。已將下心變二寒灰一

（一）紫鳳朝より啣む五色の書。陽春忽ち布いて網羅除く。（二）已に心の寒灰に變ずる後を將つて。豈料らんや光の腐草の餘に生ぜんとは。（三）建水の風煙客淚を收め。杜陵の華竹郊居を夢む。（四）君を勞して故に詩人の贈あり。瓊瑤に報いんと欲して

夕陽江上浩㆓
煙波㆒。行人遙
起廣陵思。古
渡月明聞㆓棹
歌㆒。

死酬㆓知己㆒道
終全。波暖孤
冰且自堅。鵩
上㆓承塵㆒纔一
日。鶴歸㆓華表㆒
已千年。風吹㆓
藥蔓㆒迷㆓樵徑㆒。
雨暗㆓蘆花㆒失㆓
釣船㆒。四尺孤
墳何處是。闔
閭城外草連㆑
天。

く、その跡をとゞめず ㊂ 江都の宮中に美人歿す ㊃ 怨魂東風に入り、芳草となる ㊄ 廣陵（揚州）の昔を偲び、月夜の棹歌に、水調歌（煬帝作る）を偲ぶ

故の丁補闕の郊居を過ぐ　許渾

（一）死して知己に酬い道終に全し。（二）波暖かにして孤冰且つ自ら堅し。（三）鵩承塵に上つて纔かに一日。（四）鶴華表に歸つて已に千年。（五）風藥蔓を吹いて樵徑に迷ひ。（六）雨蘆花に暗うして釣船を失ふ。（七）四尺の孤墳何の處か是なる。闔閭城外草天に連る。

㊀ 死して知己に酬い、士道全し ㊁ 孤氷堅く暖波に解けざるに似たり ㊂ 搜神記に「長安張氏の廬室に、鵩（梟に似たる鳥）あり床に上る、張氏祝して曰く、禍をなさば即ち承塵（なげし）に上れ、福をなさば即ち我が懐に入れと」（賈誼、長沙にあり、鵩、舍に入り、後一日にして死す）㊃ 續搜神記に「遼東華表（とりゐ）の柱上に鶴あり、人々言つて曰く、鳥あり鳥あり丁令威、仙を學ぶ千年今始めて歸る」㊄ 藥草に風吹き樵逕明かならず ㊅ 蘆花に水暗く、釣船を見失ふ ㊆ 丁氏の墓は何處ならん

蕭兵曹に贈る　李嘉祐

荻灰。呉王此地有ニ樓臺一。千年事往人何在。半夜月明潮自來。白鳥影從ニ江樹一沒。清猿聲入ニ楚雲一哀。停レ車日晩薦ニ蘋藻一。風靜寒塘花正開。

半夜月明かにして潮自ら來る。(三)白鳥の影は江樹に從つて沒し。清猿の聲は楚雲に入つて哀し。車を停めて日晩(四)蘋藻を薦むれば。風靜かにして寒塘花正に開く。

㊀ 呉地志に「姑蘇の南、太湖の北にあり　呉王闔閭の遊ぶところ」 ㊁ 野火に燒かれて空原となり、蘆荻の灰のみ殘る ㊂ 白鷗の影、紅樹の間に出沒す ㊃ 呉王の墓を祭る。左傳に「蘋蘩薀藻の菜、鬼神に進むべし」

(一)煬帝の行宮

此地曾經翠輦過。浮雲流水竟如何。香銷ニ南國一美人盡。怨入ニ東風一芳草多。殘柳宮前空ニ露葉一。

此の地曾て經たり翠輦の過ぐるを。(二)浮雲流水竟に如何。(三)香は南國に銷して美人盡き。(四)怨は東風に入つて芳草多し。殘柳宮前に露葉空しく。夕陽江上に煙波浩たり。(五)行人遙かに起す廣陵の思。古渡月明にして棹歌を聞く。

㊀ 隋煬帝汴河を開き、舟を泛べて江都に遊ぶ、項昇、新宮の圖を進め、帝卽いて營造す ㊁ 浮雲の如く、流水の如

平田渺渺獨傷レ春。那堪回二首長洲苑一烽火年年報二虜塵一。

僧と舊を話す　　劉滄

巾舃同レ時下二翠微一。舊遊因レ話事多違。南朝古寺幾僧在。西嶺空林惟鳥歸。莎徑晩煙凝二竹塢一。石池春水染二苔衣一。此時相見又相別。即是關河朔雁飛。

巾舃(一)時を同じうして翠微を下る。舊遊話るに因つて事多く違ふ(二)。南朝の古寺幾僧か在る。西嶺の空林惟鳥歸る。莎徑の晩煙竹塢(三)に凝り。石池の春水苔衣を染(四)む。此の時相見て又相別る。即ち是れ關河朔雁飛ぶ(五)。

(一) 僧俗ともに山を下る。巾（づきん）、舃（くつ）　(二) 諸事豫期に違ふを悲む　(三) 竹のつゝみ　(四) 苔を濕し、緑深からしむ　(五) 北地の雁飛ぶ

長洲懷古(一)

野燒空原盡

野燒(二)空原盡く荻灰。吳王此の地に樓臺あり。千年事往いて人何にか在る。

昔人已乘白雲去。此地空餘黄鶴樓。黄鶴一去不復返。白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。芳草萋萋鸚鵡洲。日暮郷關何處是。煙波江上使人愁。

昔人已に白雲に乘じて去る。此の地空しく餘す黄鶴樓。黄鶴一たび去つて復た返らず。白雲千載空しく悠悠。晴川歷歷たり漢陽の樹。芳草萋萋たり鸚鵡洲。日暮郷關何の處か是なる。煙波江上人をして愁へしむ。

○唐詩選に出づ

南浦菰蒲覆白蘋。東呉黎庶逐黄巾。野棠自發空流水。江燕初歸不見人。遠樹依依如送客。

蘇臺より望亭驛に至る、人家盡く空し　李嘉祐

南浦の菰蒲白蘋を覆ひ。(一)東呉の黎庶黄巾を逐ふ。野棠自ら發いて空しく水に流れ。江燕初めて歸つて人を見ず。(二)遠樹依依として客を送るが如く。平田渺渺として獨春を傷む。那ぞ堪へんや(三)首を長洲の苑に回すに。(四)烽火年年虜塵を報ず。

(一) 東呉蘇州の民、皆賊となる。(漢靈帝の中平元年、鉅鹿の張角自ら黄天と號し、その部下三十六萬人皆黄巾を著け、白を同じうして叛亂す) (二) 情を含む貌 (三) 呉王闔閭の遺跡 (四) 烽火(のろし)賊の來るを報ず

雨滌煙鋤傴二破籬一。紺芽紅甲雨三畦。藥名却笑桐君少。年紀翻嫌竹祖低。白石淨敲蒸レ朮火。清泉閑洗種レ花泥。怪來昨日休二持鉢一。一尺雕胡似二掌齊一。

(一)雨に滌ぎ煙に鋤いて破籬に傴す。紺芽紅甲兩三畦。(二)藥名却つて笑ふ桐君の少きを。(三)年紀翻つて嫌ふ竹祖の低きを。(四)白石淨く敲く朮を蒸す火。清泉閑に洗ふ花を種うる泥。(五)怪み來る昨日持鉢を休むるを。一尺の雕胡掌の齊しきに似たり。

(一) 煙雨の籬邊に栽培し、紺甲の嫩芽生ず (二) 藥艸の種類桐君の記錄より多し。(歙州の人、常に藥を採り、廬を桐樹の下に結び、桐を姓とし、桐君藥錄を著す) (三) 上人の齡、竹祖より老ゆ。(隴西の封君達、水銀を服し、百餘年にして鄕に歸るに、若きこと二十許の如し、常に青牛に乘り、路上に死するものあれば竹管中の藥を以て之を救ふ、人呼んで竹祖といふ) (四) 石を敲き、朮(藥名)を蒸す火を作る (五) 托鉢を止められしは何かと見れば、雕胡(菰米)熟し、大さ掌の如きに因る

(已前共に九首)

前虛後實(一)

(前聯に情思をいひ、後聯に景物を敍する格)

(一) 肩聯に虛實を兼ぬ

黃鶴樓

崔顥

夜寒初共守ニ庚申一。近來聞説燒レ丹處。玉洞桃花萬樹春。

ば母即ち飛來る、母血を以て錢八十一文に塗り、子血をも錢八十一文に塗り、物を市ふ毎に、或は先づ母錢を用ひ、或は先づ子錢を用ふ、皆また飛歸り、循環已むなし」㊂ 年老い、齡を歎ふるに煩し ㊃ 洛中記異に「道士程紫霄夜、太乙觀に會し、師を拱し、庚申を守る」（庚申待）㊄ 仙丹を燒く處に、萬樹の桃花開き、洞中の春色深しと聞く

湘中に友人を送る　李頻

中流欲レ暮見ニ湘煙一。岸葦無レ窮接ニ楚田一。去雁遠銜雲夢雪。離人獨上洞庭船。風波盡日依レ山轉。星漢通宵向レ水連。零落梅花過ニ殘臘一。故園歸去醉ニ新年一。

中流暮れんと欲して湘煙を見る。岸葦窮なくして楚田に接す。去雁遠く銜む雲夢の雪。(一)離人獨り上る洞庭の船。風波盡日山に依つて轉じ。(二)星漢通宵水に向つて連る。(三)零落せる梅花殘臘を過ぎ。(四)故園に歸り去つて新年に醉はん。(五)

㊀ 雲夢澤の雪 ㊁ 山勢により、風波終日旋轉す ㊂ 羣星の影、終夜湖水に連る ㊃ 梅花落ち歳暮る ㊄ 故郷に歸り、新年の酒に醉はん

元達上人藥を種う　皮日休

洲路。多在二青松白石間一。海岸夜中常見レ日。仙宮深處却無レ山。犬隨レ鶴去遊二諸洞一。龍作レ人來問二大還一。今日偶聞塵外事。朝簪未レ擲復何顏。

貰レ酒攜レ琴訪レ我頻。始知城市有二閑人一。君臣藥在寧憂レ病。子母錢成豈患レ貧。年長毎勞推二甲子一。

宮深き處却つて山なし。（三）犬は鶴に隨ひ去つて諸洞に遊び。龍は人と作り來つて大還を問ふ。（四）今日偶〻聞く塵外の事。朝簪未だ擲たず復何の顏ぞ。

㊀ 十洲記に「東海の東にあり、上に聖芝靈艸あり」 ㊁ 島夷志に「琉球に大崎山あり 夜半に之に登れば、暘谷に日出で、紅光天を燭す」 ㊂ 犬も從遊し、龍も來りて仙術を問ふ。（漢の淮南王劉安、仙去し、鼎に藥を餘す、雞犬之を舐め、亦上昇することを得、又、晉の孫思邈、終南山に隱る、時に大旱し、西域の僧雨を昆明池に祈る、凡そ七日にして池水を縮むるもの數尺、龍化して老人となり、孫の所に至りて救を求む、孫乃ち大還の術を授く、池水漲り、龍また生くるを得たり） ㊃ 今日仙界の事を聞き、長く官途にあるを恥づ

王山人に贈る　　許渾

酒を貰り琴を攜へて我を訪ふと頻なり。始めて知る城市に閑人あるを。（一）君臣藥在り寧ぞ病を憂へん。（二）子母錢成つて豈貧を患へん。（三）年長けて每に勞す甲子を推すを。夜寒うして初めて共に庚申を守る。（四）近來聞說丹を燒く處。（五）玉洞の桃花萬樹春なりと。

㊀ 本草に「藥に君、臣、佐、使あり」 ㊁ 搜神記に「青蚨 蟬に似て稍々大、子を草間に生じ、蠶の如し、その子を取れ

江涵秋影雁初飛。與客携壺上翠微。人世難逢開口笑。菊花須挿滿頭歸。但將酩酊酬佳節。不用登臨怨落暉。古往今來只如此。牛山何必獨沾衣。

先生自說瀛

九日齊山に高きに登る(一)　杜牧

(二)江秋影を涵して雁初めて飛ぶ。客と壺(三)を携へて翠微に上る。人世逢ひ難し口(四)を開いて笑ふに。菊花須らく滿頭に挿んで歸るべし。但銘酊を將つて佳節に酬い。用ひず登臨して落暉(五)を怨むを。(六)古往今來只此の如し。(七)牛山何ぞ必しも獨衣を沾さん。

(一) 王哲齊山記に「山、五十餘峯あり、その高さ等し、故に齊山といふ」 (二) 秋江、山影を涵す (三) 酒壺を携へ (四) 快く笑ふこと少し。莊子に「一月の間、口を開いて笑ふもの、正に幾日もなし」 (五) 夕日 (六) 古今を通じて此の如し (七) たゞ牛山にのみ泣くべきにあらず。列子に「齊の景公牛山に遊び、その國城に臨み、流涕して曰く、美なる哉國や、何若ぞ、此を去てゝ死せんと」

王尊師に贈る　姚合

先生自ら說く瀛洲(一)の路。多く青松白石の間に在り。(二)海岸夜中に常に日を見。仙

轉數程淹二驛騎一。楚曾三戸少二人煙一。看レ春又過清明節。算レ老重經癸巳年。幸得三杜山當二郡舍一。在レ朝長詠卜居篇。

に杜山の郡舍に當るを得たり。(七)朝に在つて長く詠ず卜居の篇。

(一) 橙柳の嫩葉　(二) 遠くつゞく　(三) 江流數轉し、驛騎をとゞむ　(四) 楚の淋しきこと昔の如し。南公の語に「楚三戸と雖も、秦を亡すものは必ず楚ならん」　(五) 年老い、再び癸巳（みづのとみ）の年を過ぐ　(六) 杜山、郡舍に對して聳ゆ　(七) 在朝の時より、常に卜居の宿望ありき、卜居篇は屈原か作くる所なり

鳳有二高梧一鶴有レ松。偶來二江外一寄二行蹤一。花枝滿レ院空啼鳥。塵榻無レ人憶二臥龍一。心想夜閑惟足レ夢。眼看二春盡一不二相逢一。何時最是思レ君處。月入二斜窗一曉寺鐘。

鄂州嚴澗の宅に寓す　元稹

鳳に高梧あり鶴に松あり。偶〻(一)江外に來つて行蹤を寄す。(二)花枝院に滿ちて空しく啼鳥。塵榻人なうして(三)臥龍を憶ふ。心に想ふ夜閑にして惟夢るに足ると。眼春の盡くるを看て相逢はず。何の時か最も是れ君を思ふ處。月は斜窓に入る曉寺の鐘。

(一) 江上に寄寓す　(二) 花　庭上に開き、鳥空しく啼く　(三) 嚴澗を憶ふ。(臥龍孔明に比す)

雲開遠見漢陽城。猶是孤帆一日程。估客晝眠知浪靜。舟人夜語覺潮生。三湘愁鬢逢秋色。萬里歸心對月明。舊業已隨征戰盡。更堪江上鼓鼙聲。

晩に鄂州に次す　盧綸

雲開いて遠く見る漢陽城。(一)猶ほ是孤帆一日程。估客晝眠つて浪の靜なるを知(二)り。舟人夜語つて潮の生ずるを覺ゆ。(三)三湘の愁鬢秋色に逢ひ。(四)萬里の歸心月明に對す。(五)舊業已に征戰に隨つて盡く。更に堪へんや江上鼓鼙の聲

(一)漢陽城遙に見ゆるも、なほ一日の舟程を隔つ　(二)船中の商人　(三)愁ひつゝ、三湘(湘潭、湘郷、湘源)の秋に逢ふ　(四)月に對し、萬里歸郷の心を動す　(五)戰亂のために、舊業空しく、江上に兵鼓を聞くに堪へず

杏花楡莢曉風前。雲際離離上峽船。江

武陵に赴かんとし、寒食に松滋渡に次る　竇常

(一)杏花楡莢曉風の前。雲際離離たり(二)峽に上る船。(三)江轉ずる數程驛騎を淹め。(四)楚曾て三戸人煙少なり。春を看て又過ぐ清明の節。(五)老を算へて重ねて經癸巳の年。(六)幸

陵松柏雨蕭蕭。

この児すでに三たび我を株を籍めりと」(七) 又「帝五歳の時、長公主、抱いて膝に置き、女の阿嬌を指して好きやと問ふ、帝答へて曰ふ、もし阿嬌を得ば當に金屋を作りて貯ふべしと」(八) 蘇武匈奴より歸れば、武帝すでに崩じ、茂陵の松柏に雨淋しく降る

(已前共に五首)(二)

(一) 中間に故事を用ふ

早秋京口の旅泊

李嘉祐

移レ家避レ寇逐二行舟一。厭レ見南徐江水流。呉地征徭非二舊日一。秣陵凋弊不レ宜レ秋。千家閉レ戸無二砧杵一。七夕何人望二斗牛一。惟有二同時驄馬客一。偏題二尺牘一問二窮愁一。

(一)家を移し寇を避けて行舟を逐ふ。(二)見るを厭ふ南徐江水の流るゝを。(三)呉地の征徭舊日にあらず。(四)秣陵の凋弊秋に宜しからず。千家戸を閉ぢて砧杵なく。七夕何人か斗牛を望まん。(五)惟同時驄馬の客のみあつて。偏に尺牘に題して窮愁を問ふ。

(一) 寇を避け舟に乘る (二) 南徐の水を見るに堪へず (三) 課役重く、呉に舊時の繁盛なし (四) 秣陵(金陵)衰へ秋最荒る (五) 僚友たりし蔣侍御、書を寄せて窮愁を問ふ。(漢の侍御史桓典、毎に驄馬に騎る)

細腰宮裏北人過。此聲腸斷非二今日一。香灺燈光奈レ爾何。

漢家天馬出二蒲梢一。苜蓿榴花遍二近郊一。內苑只知銜二鳳觜一。屬車無三復挿二雞翹一。玉桃偸得憐二方朔一。金屋粧成貯二阿嬌一。誰料蘇卿老歸レ國。茂

て妓樂をなし、時々臺に上り、吾が西陵の墓田を望めと」、又、拾遺記に「周の穆王、黄金碧玉篭に御す」、「王、西王母と瑤池に會し、歌謡して歸るを忘る、諸侯遂に叛す」 ㊁ 美人の薄命を憐む。靑塚（漢の王昭君の墓、南雁こゝに至りて歸る）。細腰（楚王、細腰を好み、宮人餓死するもの多し） ㊂ この聲を聞き常に斷腸の思あり ㊃ 香燼き燈暗き夜は戀殊に深し

（一）茂陵

（二）漢家の天馬蒲梢より出づ。（三）苜蓿榴花近郊に遍し。（四）內苑只知る鳳觜を銜むことを。（五）屬車復雞翹を挿むなし。（六）玉桃偸み得て方朔を憐み。（七）金屋粧成つて阿嬌を貯ふ。（八）誰か料らん蘇卿が老いて國に歸り。茂陵の松栢雨蕭蕭たらんとは。

㊀ 漢の武帝の陵 ㊁ 武帝の得たる大宛の馬。西域傳賛に「蒲梢は龍文魚目汗血の馬」 ㊂ 漢書に「大宛の馬苜蓿を嗜む、張騫千金を持して宛馬を請ひ、苜蓿を采り、歸りて之を離宮別館に種う」、又、陸機の書に「張騫外國に使し、塗林の安石榴の種を得」 ㊃ 仙傳拾遺に「武帝天漢三年西王母、使を遣し靈膠二兩を獻ぜしむ、帝、虎を華林苑に射、弩弦斷つ、使者口に膠一分を濡し、之を續ぐ」、又、十洲記に「麟角鳳觜を煮て膠となせば斷絃を續ぐべし」 ㊄ 帝微行を好み、出遊に屬車雞翹（鸞旗）なし ㊅ 漢武故事に「西王母降り、靈桃七枚を出し、東方朔を指して曰ふ

魚鳥猶疑畏二
簡書一。風雲長
爲護二儲胥一。徒
令三上將揮二神
筆一。終見降王
走二傳車一。管樂
有レ才終不レ忝。
關張無レ命欲二
何如一。他年錦
里經二祠廟一。梁
甫吟成恨有レ
餘。

斂レ笑凝レ眸意
欲レ歌。高雲不レ
動碧嵯峨。銅
臺罷レ望歸二何
處一。玉輦忘レ還
事幾多。青塚
路邊南雁盡。

魚鳥猶ほ疑ふ簡書を畏るゝかと。(三)風雲長く爲に儲胥を護す。(四)徒に上將をして神筆を揮はじめ。終に見る降王の傳車を走らすを。(五)管樂才あつて終に忝めず。關張命なし何如せんと欲す。(六)他年錦里に祠廟を經ば。梁甫吟成つて恨餘あらん。

(一)和州綿谷縣、諸葛亮孔明軍を駐めし地　(二)號令嚴明、魚鳥も之を恐れしならん　(三)風雲なほ陣營の地を護る　(四)孔明必勝を期し、こゝに神策を揮ひしも、蜀王終に魏に降る　(五)管仲樂毅の才ありしも、關羽張飛（蜀の勇將）非命に終りしを如何せん　(六)他日錦官城に孔明廟を經ば、その好める梁甫吟をなし、遺憾深からん

歌を聞く

笑を斂め眸を凝して意歌はんと欲す。(一)高雲動かず碧嵯峨たり。(二)銅臺望を罷めて何の處にか歸る。玉輦還るを忘る事幾多ぞ。(三)青塚路邊南雁盡き。細腰宮裏北人過ぐ。(四)此の聲腸斷ゆ今日にあらず。(五)香灺燈光爾を奈何。

(一)列子に「撫節悲歌すれば、聲、林木を振はし、響、行雲をとゞむ」。碧嵯峨（雲の碧く高き貌）　(二)生死離別を悲しむ、陸機　魏の武帝を弔ふ文に「魏武、遺令して曰く、吾が婕妤妓人、皆銅雀臺中に著き、月の朔と望とには帳に向つ

海外徒聞更九州。他生未レ卜此生休。空聞虎旅鳴二宵柝一。無三復雞人報二曉籌一。此日六軍同駐レ馬。當時七夕笑二牽牛一。如何四紀爲二天子一。不レ及盧家有二莫愁一。

海外徒に聞く更に九州と。(一)他生は未だトせず此の生は休す。空しく聞く虎旅の宵柝を鳴らすを。(二)復雞人の曉籌を報ずるなし。(三)此の日六軍同じく馬を駐め。(四)當時七夕牽牛を笑ふ。(五)如何ぞ四紀の天子となつて。(六)及ばず盧家に莫愁あるに。

㊀ 天寶十四年、安祿山反す、玄宗楊貴妃等と蜀に幸し、馬嵬に至る、將士飢ゑ疲れ皆憤る、左龍武大將軍陳玄禮等天下の計を以て國忠を誅す、六軍馬を駐めて發せず、上、高力士をして故を問はしむ、答へていふ、賊本なほ在り、願くは陛下恩を割き法を正せと、帝、已むを得ずして妃と訣る、力士之を路祠の堂下に縊り、紫茵を以て尸をつゝみ、道旁にうづむ ㊁ 貴妃の靈、海外にありといふも信じ難し。自注に「鄒衍云、九州の外更に九州ありと」仙傳拾遺に「楊妃死す、帝、楊什伍を行在に召して考せしむ、三日夜に至り、奏して曰く、人寰の中十州三島の内之を求めて得ず、後、東海の上蓬萊の頂に於て妃を見る、什伍に謂つて曰く、この後一紀にして當に相見るべし、願くは聖體を保ち、憶念することなかれと」 ㊂ 後生は知らず、今生にては永訣せり ㊃ 警衞の兵 ㊄ 牽牛織女の歡び、たゞ一夜にとゞまるを笑ふ。楊妃の傳に「七月牛女の夕(七夕)、夜半妃、獨上(玄宗)に侍す、上肩に凭り密誓していふ、願くは世世生生、夫婦とならんと」 ㊅ 在位四十四年(約四紀、一紀は十二年)の天子も、盧家の少婦、偕老の樂み長きに如かず。梁武帝の河中之水歌に「洛陽の女子名は莫愁、十五嫁して盧家の婦となる」

籌筆驛(一)

紫泉宮殿鎖二煙霞一。欲下取二蕪城一作中帝家上。玉璽不レ緣レ歸二日角一。錦帆應三是到二天涯一。于レ今腐草無二螢火一。終古垂楊有二暮鴉一。地下若逢二陳後主一。豈宜三重問二後庭花一。

(一)隋宮　李商隱

(二)紫泉の宮殿煙霞に鎖さる。蕪城を取つて帝家と作さんと欲す。(三)玉璽日角に歸するに緣らずんば。錦帆應に是れ天涯に到るべし。(四)今に腐草に螢火なく。終古垂楊に暮鴉あり。(五)地下若し陳の後主に逢はば。豈重ねて後庭花を問ふべけんや。

(一)隋煬帝大業元年、長安より江都に至るまで、離宮四十餘所を置く　(二)煬帝、紫泉宮より南に幸し、蕪城に都せんとす　(三)もし唐の太宗(龍顏日角の相)に亡されずば、御舟は天涯までも到りしならん。南部烟花錄に「煬帝龍舟に御し、蕭妃鳳舸に乘る、錦帆綵纜」　(四)今は螢火の豪遊なく、御堤の垂楊に暮鴉の聲のみ淋し。(煬帝、景陽宮に於て螢火數斛を徵し、夜出でて之を放つ、光、山谷に滿つ)　(五)地下にて陳の後主に逢はば、末路の同じかりしを恥づるならん。倒籃記に「帝嘗て吳公臺下に行き、恍惚として陳の後主に遇ふ、帝張麗華に請ひ玉樹後庭花を舞はしむ、後主曰く、每に張妃と臨春閣に遊り、璧月詞を作る、未だ終らず、韓擒虎萬騎を領し、直來擁入するを見、便ち今日に至れり、始め謂へらく、殿下の治、堯舜の上に在らんと、今日またこゝに逸遊す、曩日何ぞ卿せらるゝの深きやと、帝之を叱すれば見えず」

(一)馬嵬

聾無二消息一。風雨惟知長二綠苔一。

獨把二一杯一山館中。每レ驚二時節一恨二飄蓬一。侵レ堦草色連朝雨。滿レ地梨花昨夜風。蜀魄啼來春寂寞。楚魂吟後月朦朧。分明記得還レ家夢。徐孺宅前湖水東。

寒食(一)

來鵬

獨り一杯を把る山館の中。(二)時節に驚く每に飄蓬を恨む。堦を侵す草色連朝の雨。地に滿つる梨花昨夜の風。(三)蜀魄啼き來つて春寂寞。(四)楚魂吟じて後月朦朧。(五)分明に記得す家に還る夢。徐孺が宅前湖水の東。

(一) 唐詩選韓翃の絶句、寒食の注參照 (二) 季節の移り易きに驚き、流寓の身を恨む (三) 杜鵑（蜀望帝の魂）(四) また亡魂（楚懷王の靈と稱せらる、鳥）(五) 家は、東漢徐孺子（名は穉）の故居に近く、洪州東湖の東にあり

四虛

（已前共に三首）(一)

(一) 舊注に「第一聯及第四聯は輕婉、第二聯は重大、第三聯は稍々輕くして鉄に至る」

晉雲山皆北向。二陵風雨自レ東來。關門令尹誰能識。河上仙翁去不レ回。且欲下近尋二彭澤宰一。陶然一醉中菊花杯上。

且つ近く彭澤の宰を尋ねて。陶然として一たび菊花の杯に醉はんと欲す。

○唐詩選に出づ

叢臺　李遠

有レ客新從二趙地一回。自言曾上二古叢臺一。雲遮二襄國一天邊去。樹繞二漳河一地裏來。絃管變成二山鳥一哢。綺羅留作二野花一開。金輿玉

客あり新に趙の地より回る。自ら言ふ曾て古叢臺に上ると。(一)雲は襄國を遮つて天邊に去り。樹は漳河を繞つて地裏より來る。(二)絃管は變じて山鳥となつて哢き。綺羅は留つて野花となつて開く。金輿玉輦消息なし。風雨惟知る綠苔を長ぜしむるを。

(一) 磁州　東北二里、趙の武靈王築く、趙・後趙・北齊曾て、に都す　(二) 春秋の邢國、漢、邢州を置き、後襄國郡となす　(三) 鳥と野花とに、管絃綺羅の名殘を留む

關山迢遞古交州。歲晏憐君走レ馬遊。謝氏海邊逢二姹女一。越王潭上見二青牛一。嵩臺月照啼猿樹。石室煙涵古桂秋。回二望長安一五千里。刺桐花下莫二淹留一。

漢文皇帝有二高臺一。此日登臨曙色開。三

關山迢遞たり古交州。(一)歲晏れて憐む君が馬を走せて遊ぶを。謝氏海邊姹女に逢ひ。(二)越王潭上靑牛を見る。(三)嵩臺月は照す啼猿の樹。(四)石室煙は涵す古桂の秋。(五)長安を回望すれば五千里。(六)刺桐花下に淹留するなかれ。

(一) 古の百粤の地　(二) 發蒙記に「謝端、海上に於て大螺を得、中に美女あり、曰く、我は天漢中の白水素女なり。天、卿が貧なるを矜み、我をして卿が妻たらしむと」　(三) 南越志に「昔越王建德、木を伐つて舡となし童男女三十を以て之を牽かしむ、既にして人と舡と倶に潭に墮つ、時に舡に附いて督進を唱喚する聲あるを聞く、靑牛あり、馳回して舡を牽くを見る、蓋し神靈の至るなり」　(四) 又、「高要に竦石あり、廣さ六十餘丈、高さ二百仞、土人之を嵩臺といふ」　(五) 又、「高要石室は南北の二門なり、狀人功の若し、意ふに仙都ならん」　(六) 遠く長安を離れ長く南地に留るなかれ。晉安海物異名記に「刺桐はその花丹、枝幹に刺あり、花幹に附いて生じ、側敷して掌の如し、海南に產す」

九日仙臺に登り劉明府に呈す

崔　曙

漢文皇帝高臺あり。此の日登臨すれば曙色開く。三晉の雲山皆北に向ひ。二陵の風雨東より來る。關門の令尹誰か能く識らん。河上の仙翁去つて回らず。

年齡五十、瑟の絃數に等し ㊀ 瑟を見、若かりし時を思ふ ㊁ 曾て心に迷多く、又、怨み深かりき（莊子夢に蝴蝶となり、望帝の怨魂、杜鵑に化す）㊂ 人生の哀樂定りなし、海中の月に鮮珠涙を含む如く（哀）、藍田山の春に美玉烟を生ずる如し（樂）㊃ 追憶するまでもなく、曾て悵然自失したりき

月明珠有レ涙。藍田日暖玉生レ烟。此情可レ待レ成二追憶一。只是當時已惘然。

江亭春霽　　李郢

江蘺漠漠荇田田。江上雲亭霽景鮮。蜀客帆檣背二歸燕一。楚山花木怨二啼鵑一。春風掩映千門柳。晩色凄涼萬井烟。金磬冷冷水南寺。上方臺殿翠微連。

江蘺漠漠として荇田田。江上の雲亭霽景鮮なり。(一)蜀客の帆檣歸燕に背き。楚山の花木啼鵑怨む。春風掩映す千門の柳。(二)晩色凄涼たり萬井の烟。金磬冷冷たり水南の寺。(三)上方の臺殿翠微連る。

㊀ 蜀の舟、北に歸り、燕南に去る ㊁ 市井萬家の烟 ㊂ 臺殿高く、山の翠（みどり）に連る

(一)人の嶺南に之くを送る

門西。塵起二春風一滿二御堤一。黃帕蓋レ鞍呈了馬。紅羅纏レ頂鬪回雞。館松枝重墻頭出。渠柳條長水面齊。惟有二敎坊南草色一。古城陰處冷凄凄。

了る馬。(三)紅羅頂に纏ふ鬪ひ回る雞。館松枝重うして墻頭より出で。渠柳條長うして水面に齊し。(四)惟敎坊南草の色のみあつて。古城陰處に冷にして凄凄。

(一)禁城五門（皇門・庫門・雉門・應門・路門）の西に、春風御堤の塵を吹く (二)獻ぜし馬の鞍に黃ろ帕（きぬ）を懸く (三)鬪ひ歸る雞の頂に紅き羅（うすもの）を纏ふ。（玄宗、鬪雞戲を喜ぶ） (四)敎坊（開元の初、蓬萊宮の側に建て、歌舞を敎ふ）の南に草茂り、春景甚だ淋し

(一)錦瑟　　　李商隱

錦瑟無レ端五十絃。一絃一柱思二華年一。莊生曉夢迷二蝴蝶一。望帝春心託二杜鵑一。滄海

錦瑟端なし五十絃。(二)一絃一柱華年を思ふ。(三)莊生の曉夢蝴蝶に迷ひ。(四)望帝の春心杜鵑に託す。(五)滄海月明にして珠に涙あり。藍田日暖にして玉烟を生ず。(六)此の情追憶を成すを待つべけんや。只是れ當時已に惘然。

(一)彩紋錦の如き瑟。古今樂志に「琴瑟の器たる、その絃五十、その柱（ぢ）之に如く、その聲、適、怨、淸、和」(二)

(一)西塞山

劉禹錫

西晉樓船下₂益州₁。金陵王氣漠然收。千尋鐵鎖沈₂江底₁。一片降旗出₂石頭₁。人世幾回傷₂往事₁。山形依レ舊枕₂寒流₁。今逢₂四海爲レ家日₁。故壘蕭蕭蘆荻秋。

(二)西晉の樓船益州より下り。金陵の王氣漠然として收る。(三)千尋の鐵鎖江底に沈み。一片の降旗石頭を出づ。人世幾回か往事を傷み。山形舊に依つて寒流に枕む。(四)今四海家となる日に逢うて。故壘蕭蕭たり蘆荻の秋。

(一) 一に金陵懷古に作る (二) 晉の王濬益州の刺史となり武帝の命を受け、大船連舫を作りて吳を攻む (三) 吳、江磧要害の處に於て鐵鎖を以て横に之を截ち、錐を植ぐ、濬大炬を作り、油を灌いで之を燒き、流に順ひ、たゞちに石頭城に入る、吳王孫皓面縛して櫬を輿し、軍門に詣りて降る (四) 四海一統の日に逢ひ、金陵の古壘に蘆荻淋しく鳴る

(巳前共に六首)(一)

(一) 起結の體相似る

早春五門の西望

王建

百官朝下五

(一)百官朝より下る五門の西。塵は春風に起つて御堤に滿つ。(二)黃帕鞍を蓋ふ呈し

閶城。水國春寒陰復晴。細雨濕レ衣看不レ見。閑花落レ地聽無レ聲。日斜江上孤帆影。草綠湖南萬里情。東道若逢二相識問一。青袍今已誤二儒生一。

も見えず。閑花地に落ちて聽けども聲なし。日は斜なり江上孤帆の影。草は綠なり湖南萬里の情。東道若し相識の問ふに逢はば。靑袍今已に儒生を誤ると。

㊀ 吳エ闔閭の城　㊁ 儒生となりて朝に仕へ、一生を誤りたりと告げよ

嗟君此別意何如。駐レ馬銜レ盃問二謫居一。巫峽啼猿數行淚。衡陽歸雁幾封書。靑楓江上秋天遠。白帝城邊古木疎。聖代祇今多二雨露一。暫時分レ手莫二躊躇一。

王李二少府が潭峽に貶せらるゝを送る

嗟す君が此の別意何如。馬を駐め盃を銜んで謫居を問ふ。巫峽の啼猿數行の淚。衡陽の歸雁幾封の書。靑楓江上秋天遠く。白帝城邊古木疎なり。聖代祇今雨露多し。暫時手を分つも躊躇することなかれ。

○唐詩選に出づ

聞レ逐二樵夫一閑看レ棊、忽逢二人世一是秦時。開レ雲種レ玉嫌二山淺一。渡レ海傳レ書怪二鶴遲一。陰洞石幢微有レ字。古壇松樹半無レ枝。煩レ君遠示青嚢錄。願得二相從一一問レ師。

春風倚レ棹闔

暢當が嵩山に麻道士を尋ねて寄せらるゝに酬ゆ　盧綸

(一)聞く樵夫を逐うて閑に棊を看ると。忽ち人世に逢ふ是れ秦時。(二)(三)雲を開き玉を種ゑて山の淺きを嫌ひ。海を渡り書を傳へて鶴の遲きを怪む。(四)陰洞の石幢微に字あり。(五)古壇の松樹半ば枝なし。(六)君を煩して遠く示す青嚢錄。願くは相從ふを得て一たび師に問はん。

(一) 道士を尋ね、仙境に遊ぶと聞く。晉の王質の故事を引く (二) 桃源の故事を引く (三) 仙道に不可思議の事多し。捜神記に「王雍伯、義漿(はどこし酒)を致し行人に饋る、一人あり、飲みをはりて懐中より石子一升を出し、之に與へて曰く、此を種ゑば好玉を生ぜんと、後、双璧を得」又、古詩に「華表の鶴柱鶴信を得」 (四) 玄獄洞の石幢(はたの如き石)にかすかに文字を刻す (五) 壇上の松老い、枝半ば枯る (六) 示されし道書につき、山に入り、師に問はんと欲す。郭璞傳に「郭公青嚢中の書九卷を以て璞に與ふ、後、門人趙載を竊む、未だ讀むに及ばず、火焚く」

呉中、嚴士元に別る

春風棹に倚る(一)闔閭城。水國春寒うして陰りて復晴る。細雨衣を濕して看れど

絳幘雞人送二曉籌一。尙衣方進翠雲裘。九天閶闔開二宮殿一。萬國衣冠拜二冕旒一。日色乍臨二仙掌一動。香烟欲下傍二袞龍一浮上。朝罷須レ裁二五色詔一。珮聲歸向鳳池頭。

絳幘の雞人曉籌を送る。尙衣方に進む翠雲裘。九天の閶闔宮殿を開き。萬國の衣冠冕旒を拜す。日色乍ち仙掌に臨んで動き。香烟袞龍に傍うて浮ばんと欲す。朝罷んで須く五色の詔を裁すべし。珮聲歸つて向ふ鳳池の頭。

○唐詩選に出づ

又　　岑參

雞鳴二紫陌一曙光寒。鶯囀二皇州一春色闌。金闕曉鐘開二萬戶一。玉階仙仗擁二千官一。花迎二劍佩一星初落。柳拂二旌旗一露未レ乾。獨有二鳳凰池上客一。陽春一曲和皆難。

雞紫陌に鳴いて曙光寒し。鶯皇州に囀じて春色闌なり。金闕の曉鐘萬戶を開き。玉階の仙仗千官を擁す。花は劍佩を迎へて星初めて落ち。柳は旌旗を拂つて露未だ乾かず。獨り鳳凰池上の客あつて。陽春の一曲和すること皆難し。

○唐詩選に出づ

自喧。不獨凄涼眼前事。咸陽一火便成原。

て原野となる

未明先見海底日。良久遠雞方報晨。古樹含風常帶雨。寒巖四月始知春。中天氣爽星河近。下界時豐雷雨均。前後登臨思無盡。年年改換往來人。

龍泉寺の絶頂　方干

(一)未だ明けざるに先づ見る海底の日。良久しうして遠雞方に晨を報ず。古樹風を含みて常に雨を帶び。寒巖四月始めて(二)春を知る。中天氣爽にして星河近く。下界時豐にして雷雨(三)均し。前後登臨して思盡くることなし。(四)年年改め換ふ往來の人。

㊀未明に海上の日の出を見る　㊁花始めて開く　㊂風雨よく調ふ　㊃年々往來の人を換へ、浮生のはかなきを感ず

(已前共に十四首)

㊀舊注「蟻絲の九曲を穿つ如く曲折すと雖も其の意透徹す」

(一)賈至が大明宮に早朝するに和す　王維

晩雞。水平舟靜浪聲齊。高林帶レ雨楊梅熟。曲岸籠レ雲謝豹啼。二女廟荒宮樹老。九疑山碧楚天低。湘南自レ古多二離怨一。莫下動二哀吟一易中慘悽上。

帯びて(二)楊梅熟し。曲岸雲を籠めて(三)謝豹啼く。(四)二女廟荒れて宮樹老い。九疑山碧にして楚天低し。湘南古より離怨多し。哀吟を動かして慘悽し易からしむるなかれ。

(一)浪靜かなり　(二)やまもゝ　(三)ほとゝぎす　(四)黃陵廟

廢宅

吳融

風飄二碧瓦一雨摧レ垣。却有二鄰人一爲鎖レ門。幾樹好花閑二白晝一。滿庭荒草易二黃昏一。放魚池涸蛙爭聚。棲燕梁空雀

風碧瓦を飄して雨垣を摧く。却つて鄰人あつて爲に門を鎖す。(一)幾樹の好花白晝に閑に。滿庭の荒草黃昏なり易し。放魚池涸れて蛙爭ひ聚り。棲燕梁空うして雀自ら喧し。(二)獨凄涼たる眼前の事のみならず。(三)咸陽の一火便ち原となる。

(一)花開くも看る人なく、草茂りて晝も小暗し　(二)衰亡の恨は是のみならず　(三)咸陽(秦の都)も項羽に燒かれ

夜燈。風景蒼蒼多少恨。寒山半出白雲層。

黄陵廟(一)　　李羣玉

小孤洲北浦雲邊。二女明粧共儼然。野廟向江春寂寂。古碑無字草芊芊。東風近墓吹芳芷。落日深山哭杜鵑。猶似含嚬望巡狩。九疑如黛隔湘川。

小孤洲の北浦雲の邊。二女の明粧(二)共に儼然。野廟江に向つて春寂寂。古碑字な(三)くして草芊芊。東風墓に近くして芳芷(四)を吹き。落日山深くして杜鵑哭く。猶ほ嚬(五)を含んで巡狩を望むに似たり。九疑(六)黛の如くして湘川を隔つ。

(一) 岳州湘陰縣の北八十里、湘水の旁、舜の二妃（娥皇・女英）を祀る　(二) 二妃の像おごそかなり　(三) 古碑（晉の太康九年立つ）の文字磨滅し、春草生ひ茂る　(四) 水邊の香艸。楚辭に「沅に芷あり、澧に蘭あり、公子を思ひ、未だ敢て言はず」　(五) 二妃の眉黛、愁を含みて舜の巡狩を望見するに似たり。舜南 狩す、二妃慕ひて丘州に赴く、未だ至らずして舜は蒼梧野に崩ず、二妃悲みて湘水に投ず　(六) 九疑山黛（まゆずみ）の如し

晩に湘源縣に歌ふ　　張泌

煙郭遙聞向

煙郭遙に聞く晩に向はんとする雞。水平に舟靜にして浪聲齊し。(一) 高林雨を

容寛。靈物蜿蜒黒處蟠。松葉正秋琴韻響。菱花初曉鏡光寒。雲收星月浮二山殿一。雨過風雷繞二石壇一。仙客不レ歸龍亦去。稻畦長滿此池乾。

韻響き。(四)菱花初めて曉けて鏡光寒し。雲收つて星月山殿に浮び。雨過ぎて風雷石壇を繞る。(五)仙客歸らず龍亦去り。稻畦長く滿ちて此の池乾く。

㊀ 梁道士の故居 ㊁ 龍うねり、深き水底に蟠る ㊂ 秋に入り、松聲琴の如し ㊃ 菱の花咲き、池水鏡に似たり ㊄ 道士歸らず龍もまた去り、池乾いて稻田となる

絶二過此地一無窮事。一望淒然感二廢興一。渭水故都秦二世。咸陽秋草漢諸陵。天空絶塞聞二邊雁一。葉盡孤村見二

咸陽懷古

此の地を經過して(一)無窮の事あり。一望淒然として廢興を感ず。(二)渭水の故都は秦の二世。咸陽の秋草は漢の諸陵。天空うして絶塞邊雁を聞き。葉盡きて孤村夜燈を見る。(三)風景蒼蒼たり多少の恨。寒山半ば出づ白雲層。

㊀ 感慨窮りなし ㊁ 渭水秦二世の故都をめぐり、秋草漢の諸陵（覇陵、杜陵、高陵、長陵、安陵、茂陵等）に茂る ㊂ 風景寂しく、寒山半ば雲より現る

綠蕪ㇾ秦苑夕。蟬鳴二黃葉一漢宮秋。行人莫レ問當年事。故國東來渭水流。

鄕心迢遞宦情微。吏散尋レ幽竟二落暉一。林下草腥巢鷺宿。洞前雲濕雨龍歸。鐘隨二野艇一回二孤棹一。鼓絕二山城一掩二半扉一。今夜西齋好二風月一。一瓢春酒莫二相違一。

晩に東郭よりし一二の遊侶を留む

(一)鄕心迢遞として宦情微なり。(二)吏散じ幽を尋ねて落暉を竟ふ。林下草腥くして巢鷺宿し。洞前雲濕うて(三)雨龍歸る。(四)鐘野艇に隨つて孤棹を回し。鼓山城に絕えて半扉を掩ふ。今夜西齋風月好し。(五)一瓢の春酒相違ふことなかれ。

(一) 懷鄕の心深く、官途の情薄し　(二) 公事終り、幽趣を尋ね夕景に步す　(三) 雨を降らす龍歸る　(四) 暮鐘鳴り舟を返す　(五) 一瓢の春酒を酌み共に樂みたし

西巖泉落水

(一)飛泉觀の宿 龍池に題す

西巖泉落ちて水容寬し。(二)萬物蜿蜒として黑處に蟠る。(三)松葉正に秋にして琴

玉樹歌殘王氣終。景陽兵合戍樓空。楸梧遠近千官塚。禾黍高低六代宮。石燕拂レ雲晴亦雨。江豚吹レ浪夜還風。英雄一去豪華盡。惟有二青山一似二洛中一。

一上二高城一萬里愁。蒹葭楊柳似二汀洲一。溪雲初起日沈レ閣。山雨欲レ來風滿レ樓。鳥下二

玉樹歌殘つて王氣終る。(二)景陽兵合して戍樓空し。(三)楸梧遠近千官の塚。(四)禾黍高低六代の宮。(五)石燕雲を拂つて晴れて亦雨ふり。(六)江豚浪を吹いて夜還た風。英雄一たび去つて豪華盡き。(七)惟青山あつて洛中に似たり。

(一) 六朝（吳・東晉・宋・齊・梁・陳）の故都 (二) 玉樹後庭華の曲殘り、王氣すでに盡く (三) 景陽宮（陳後主縛に就く）に隋兵入る (四) ひ、ちぎ、きり、諸宮の墓に茂り、きびの類、六朝の宮趾に生ず (五) 零陵にある石。湘州記に「雨に逢へば則ち飛ぶ」 (六) 猪に似、水に棲む獸。本草に「鼻もて聲をなし、海上に出沒す、舟人之を候ひ、大風雨を知る」 (七) 青山の形勢のみ長く帝都たるに足る

(一)咸陽城の東樓

一たび高城に上れば萬里の愁あり。(二)蒹葭楊柳汀洲に似たり。溪雲初めて起つて日閣に沈み。山雨來らんと欲して風樓に滿つ。鳥は綠蕪に下る秦苑の夕。蟬は黃葉に鳴く漢宮の秋。(三)行人問ふことなかれ當年の事。(四)故國東に來つて渭水流る。

(一) 秦漢の故都 (二) あし、やなぎ茂り、水邊の地に似たり (三) 昔時の繁華を說くなかれ (四) 故都に渭水の東流するのみ

寢園無レ主野棠開。百年便作二萬年計一。巖畔古碑空綠苔。

禾黍離離半野蒿。昔人城レ此豈知レ勞。水聲東去市朝變。山勢北來宮殿高。鴉噪二暮雲一歸二故堞一。雁迷二寒雨一下二空濠一。可レ憐緱嶺登仙子。猶自吹レ笙醉二碧桃一。

宮の礎殘り草生ひ茂る　(四)　廟に主なくからなしの花開く　(五)　生前に子孫萬年の榮を圖む　(六)　國亡び、古碑空しく苔に鎖さる

(一)洛陽城

(二)禾黍離離として半は野蒿。(三)昔人此に城いて豈勞を知らんや。(四)水聲東に去つて市朝變じ。(五)山勢北より來つて宮殿高し。鴉暮雲に噪いで(六)故堞に歸り。雁寒雨に迷うて(七)空濠に下る。(八)憐むべし緱嶺の登仙子。猶ほ自ら笙を吹いて碧桃に醉ふ。

(一)　史記に「周成王七年、將に成周を營み、洛邑に居らんとし、召公をして先づ宅を相せしむ、三月周公洛に至り、工を興し城を築く」　(二)　黍(きび)穗を垂れ、野草と雜る　(三)　周公之に築きし時、民、勞を忘れ役に服す　(四)　黄河東流し、朝廷(東周、後漢、元、魏等)屢々變る　(五)　遠山北より來り、宮殿(迷樓、綺樓等)空しく高し　(六)　女牆(ひめがき)に歸る　(七)　空しき隍(ほり)に下る　(八)　緱子山(洛陽にあり)の仙人(周の靈王の太子晉)のみ笙を吹いて遊ぶならん。王子年拾遺記に「磅礴山、扶桑を去ること五萬里、上に桃樹千圍あり、花皆青黑色」

(二)金陵

危樓高架泬寥天。上相閑登立二綵旄一。樹色到レ京三百里。河流歸レ漢幾千年。晴峯聳レ日當二周道一。秋穀垂レ花滿二舜田一。雲路何人見二高志一。最看西面赤欄前。

危樓高く架す(二)泬寥たる天。上相閑に登つて(三)綵旄を立つ。(四)樹色京に到る三百里。河流漢に歸す幾千年。(五)晴峯日に聳えて周道に當り。(六)秋穀花を垂れて舜田に滿つ。(七)雲路何人か高志を見はす。(八)最も看る西面赤欄の前。

(一) 河中府の樓前に中條山あり、下、黄河に臨む (二) 廣き空 (三) 彩旄。禮に、「大夫旄を建つ」 (四) 樹の影遠く長安につゞき、黄河長く中國を流る (五) 中條山晴れ、平坦なる道に傍ふ。詩に「周道砥の如し」 (六) 稻の花咲き、穂を堯代の田に垂る。輿地廣記に「河中府河東縣故の蒲坂、舜の都なり」 (七) 雲を摩する高樓に上り、王政輔佐の志を見すは誰ぞ (八) 西方赤欄の前に長安の帝居を望む

凌歊臺(一)　　許渾

宋祖凌歊樂未レ回。三千歌舞宿二層臺一。湘潭雲盡暮山出。巴蜀雪消春水來。行殿有レ基荒薺合。

宋祖凌歊に樂んで未だ回らず。(二)三千の歌舞層臺に宿す。湘潭雲盡きて暮山出で。巴蜀雪消えて春水來る。(三)行殿基あつて荒薺合し。(四)寢園主なくして野棠開く。(五)百年便ち萬年の計をなす。(六)巖畔の古碑空しく綠苔。

(一) 圖經に「大平州北黄山上にあり、宋の武帝、南遊して之に登り、且離宮を建つ」 (二) 歌舞の美人三千人 (三) 離

洞幽。何用別尋二方外一去。人間亦自有二丹丘一。

雨香雲淡覺二微和一。誰送二春深一入二棹歌一。萱近二北堂一穿レ土早。柳偏二東面一受レ風多。湖添二水色一消二殘雪一。江送二潮頭一湧二漫波一。同受二新年一不二同賞一。無レ由レ縮レ地欲二如何一。

樂天が早春に寄せらるゝに和す　元稹

雨香しく雲淡くして微和を覺ゆ。誰か(一)春深を送つて棹歌に入る。(二)萱北堂に近うして土を穿つこと早く。(三)柳東面に偏して風を受くること多し。湖水色を添へて殘雪消え。江潮頭を送つて漫波湧く。同じく新年を受けて同じく賞せず。(四)地を縮むるに由なし如何せんと欲する。

(一)溫情春の如き詩を贈らる　(二)萱草早く芽生ず。詩に「いづくんぞ萱草を得、こゝに之を背に樹えん、」注に「背は北堂なり、萱は忘憂草なり」(樂天杭州にあるに比す)　(三)柳、東方にかたより、多く風を受く(自ら浙東にあるに比す)　(四)地を近づけ、屢々往來し難きを悲しむ、神仙傳に「壺公、費長房に一符を遺り、能く地脈を縮めしむ」

趙相公が鸛雀樓に登るに和す(一)　殷堯藩

仙臺初見五
城樓。風物淒
淒宿雨收。山
色遙連秦樹
晚。砧聲近報
漢宮秋。疎松
影落空壇淨。
細草春香小

卷之二

七言律詩

四實（中二聯實事實境を述ぶる格）

同じく仙遊觀に題す(一)　　韓翃

仙臺(二)初めて見る五城樓。風物(三)淒淒として宿雨收る。山色遙かに連る秦樹の晚。砧聲近く報ず漢宮の秋。疎松影落ちて空壇淨く。細草春香しうして小洞幽なり。(四)何ぞ用ひん別に方外を尋ね去ることを。(五)人間亦自ら丹丘あり。

(一)長安西山にあり、漢の文帝築きて河上公を詔む　(二)崑崙山の五城十二樓（西王母の居）に似たり　(三)風景淋しく、宿雨止む　(四)別に仙鄕を尋ぬる要なし　(五)この地また丹丘（[illegible]夜常明不死の地）に似たり

湘中老人讀二黃老一。手援二紫藟一坐二碧草一。春至不レ知湘水深。日暮忘卻巴陵道。

春草萋萋春水綠。野棠開盡飄二香玉一。繡嶺宮前鶴髮翁。猶唱開元太平曲。

君山（一）

湘中の老人黃老（二）を讀み。手に紫藟を援つて碧草に坐す。（三）春至つて知らず湘水の深きことを。日暮忘卻す巴陵の道。（四）

（一）此詩作者未詳。荊州圖經に「湖君湘夫人の遊ぶところ、」郡志に「狀十二螺髻の如し、」北夢瑣言に「湘江北流し、岳陽に至り、蜀江に達す、夏深の後、蜀江漲つて湘波を遏住し、溢れて洞庭湖となる、凡そ數百里、君山宛然として水中に在り、秋水歸り、この山また陸に居る」（二）黃帝老子の術（三）紫藟（つた）を手にし、青艸に坐す。（紫は道家の色）（四）巴陵（岳州の地、羿、巴蛇を殺すところ）の道を忘る。（無心にして萬事を忘るの意）

繡嶺宮（一）　李洞

春草萋萋として春水綠なり。（二）野棠開き盡して香玉を飄す。繡嶺宮前鶴髮の翁。（三）猶ほ唱ふ開元太平の曲。

（一）陝州峽石縣、開元中、玄宗遊幸の宮（二）野生の海棠（三）白髮の翁あり、なほ當時の曲をうたふ

還渉。茅屋斜連隔ニ松葉一。主人聞ㇾ語未ㇾ開ㇾ門。繞ㇾ籬野菜飛ニ黄蝶一。

南州溽暑醉如ㇾ酒。隱ㇾ几熟眠開ニ北牖一。日午獨覺無ニ餘聲一。山童隔ㇾ竹敲ニ茶臼一。

清溪道士人不ㇾ識。上ㇾ天下ㇾ天鶴一隻。洞門深鎖碧窓寒。滴ㇾ露研ㇾ朱點ニ周易一。

いて未だ門を開かず。籬を遶る野菜に黄蝶飛ぶ。

(一) 山路に渉ひ、また行く

夏晝の偶作　柳宗元

南州の溽暑(一)醉うて酒の如し。几に隱り熟眠して北牖(二)を開く。日午獨り覺めて餘聲なし。山童竹を隔てて茶臼を敲く。

(一) 溽暑く、酒に醉へるが如し　(二) まど

歩虚詞(一)　高駢

清溪(二)の道士人識らず。天に上り天より下る(三)鶴一隻。洞門深く鎖して碧窓寒し。露を滴らし朱を研いて周易を點す。

(一) 異苑に「陳思王、漁山に遊び、空裏に誦經の聲有り、清遠寥亮たるを聞く、音を解する者をして寫さしめ、神仙の聲となす、道士之に倣ひ、歩虚を作る」　(二) 荊州記に「臨淮縣に清溪山あり、山東に泉あり、泉側に道士の舍あり」　(三) 鶴に乘り、天に往來す

用憑レ欄苦回レ
首。故郷七十
五長亭。

營州少年愛ニ
原野ー。狐裘蒙
茸獵ニ城下ー。虜
酒千鍾不レ醉レ
人。胡兒十歲
能騎レ馬。

獨訪ニ山家ー歇

(一) 黄州西安郡　(二) 角の聲　(三) 日光かすかに波に動く　(四) 故郷遠く、欄に凭りて望むも詮なし。六帖に「短亭五里、長亭十里」

（已前共に七首）

側體　（仄韻を用ふる格）

(一)營州歌　高適

營州の少年原野を愛し。(二)狐裘蒙茸として城下に獵す。(三)虜酒千鍾人を醉はしめず。胡兒十歲にして能く馬に騎る。

(一) 河北道柳城郡　(二) 狐のかはごろもの毛亂る　(三) 胡酒千杯を飲むも醉はず

山家　長孫佐輔

(一)獨山家を訪うて歇ひて還た涉る。茅屋斜に連つて松葉を隔つ。主人語を聞

宦情羈思共
悽悽。春半如レ
秋意轉迷。山
城過雨百花
盡。榕葉滿庭
鶯亂啼。

道士夜誦蘂
珠經。白鶴下
繞二香烟一聽。夜
深經盡人上レ
鶴。天風吹入
秋冥冥。

鳴軋江樓角
一聲。微陽瀲
灔落二寒汀一。不レ

宦情羈思共に悽悽。(二)春半秋の如く意轉迷ふ。山城の過雨に百花盡き。(三)榕葉滿庭鶯亂れ啼く。

(一)憲宗元和十年、宗元貶せられ柳州の刺史となる　(二)春か秋かと疑ふ　(三)つるあかう(南地に榮ゆる大樹、初め葛の如く、木に縁りて長じ、後、枝より根を生じ、地に垂れて柱の如し)

楊鍊師に贈る　　鮑溶

道士夜誦す蘂珠經。(一)白鶴下つて香烟を遶つて聽く。夜深け(二)經盡きて人鶴に上り。天風吹いて入る(三)秋の冥冥。

(一)に黄庭經　(二)經を讀み止む　(三)秋空に入る

齊安の城樓に題す(一)　　杜牧

(二)鳴軋たり江樓の角一聲。(三)微陽瀲灔として寒汀に落つ。(四)用ひず欄に憑つて苦に首を回らすことを。故鄕七十五長亭。

舟自横。

悵ニ望南徐一登ニ北固一。迢遙西塞限ニ東關一。落日臨レ川問ニ音信一。寒潮惟帶ニ夕陽一還。

野火燒レ枝水洗レ根。數圍枯朽半心存。應四是無三機承ニ雨露一。卻將ニ春色一寄ニ苔痕一。

張繼に酬ゆ(一)　皇甫冉

(二)南徐を悵望して北固に登れば。(三)迢遙たる西塞東關を限る。(四)落日川に臨んで音信を問へば。寒潮惟夕陽を帶びて還る。

(一)本集の題序に「懿孫（張繼）は余の舊好なり、武昌に賦役して六言を以て贈はる、今七言を以て酬答す」、張繼の六言に「京口の情人別久しく、揚州の估客事疎なり、潮は潯陽に到つて歸り去り、相思、書を通ずるに所なし」　(二)北固山に登り、南徐州をいたみ望む　(三)西塞山、東關の地を限り、眼界を遮る　(四)夕日の河上に音信を待つ

河邊の枯木　長孫佐輔

野火枝を燒いて水根を洗ひ。(一)數圍枯朽して半心存す。(二)應に是れ機の雨露を承くるなかるべし。(三)卻つて春色を將つて苔痕に寄す。

(一)大幹、半ば枯朽す　(二)雨露に榮ゆるはたらきなし　(三)附着せる苔のみ、春を迎へて青し

柳州二月(一)　柳宗元

百花原頭望二京師一。黃河水流無二盡時一。秋天曠野行人絕。馬首西來知是誰。

獨憐幽草澗邊生。上有二黃鸝深樹鳴一。春潮帶レ雨晚來急。野渡無レ人

拗體（聲律に拘らず、奇句を用ふる格）

旅望　李頎

百花原頭に京師を望めば。黃河水流れて盡くる時なし。秋天曠野行人絕え。馬首西より來るは知りぬ是れ誰ぞ。

○唐詩選に出づ

滁州西澗　韋應物

獨り憐む幽草の澗邊に生ずるを。上に黃鸝の深樹に鳴くあり。春潮雨を帶びて晚來急なり。野渡人なうして舟自ら橫ふ。

(一)水ある谷　(二)うぐひす　(三)春雨溪流を增す

村樹色昏二殘雨一。遠寺鐘聲帶二夕陽一。

浮雲不下共二此山一齊上。山靄蒼蒼望轉迷。曉月暫飛千樹裏。秋河隔在數峰西。

蓬萊闕下是天家。上路新回白鼻騧。急管晝催平樂酒。春衣夜泊杜陵花。

㊀ 進士の試驗に落第し、河中に歸る ㊁ 天寶年間、安祿山の叛掛

石邑山中に宿す　韓翃

浮雲もこの山と齊しからず。山靄蒼蒼として望み轉た迷ふ。曉月暫く飛ぶ千樹の裏。秋河隔てて在り數峰の西。

○ 唐詩選に出づ

張千牛に贈る(一)

蓬萊闕下是れ天家。上路新に回る(二)白鼻騧。(三)急管晝催す平樂の酒。春衣夜宿す杜陵の花。

㊀ 禁衞の官。職林に「唐、大將軍一人、左右千牛備身各々十二人を置く」 ㊁ 鼻白き栗毛の馬 ㊂ 笛騷しく、晝は平樂館の酒に醉ひ、春衣美しく夜は杜陵(萬年縣の東北)の花に眠る

(已前共に五首)

杏園。寥寥一
犬吠二桃源一。落
花芳草無二尋
處一。萬壑千峰
獨閉レ門。

廣武城邊逢二
暮春一。汶陽歸
客涙沾レ巾。落
花寂寂鳴レ山
鳥。楊柳青青
渡レ水人。

出レ關愁レ暮一
沾レ裳。滿野蓬
生古戰場。孤

處なく。萬壑千峰獨り門を閉す。

(一) 神仙傳に「董奉廬山に居り、日に人のために病を治し、敢て錢を取らず、重き病癒ゆるものには杏五株を植ゑしめ、輕き者には一株を栽ゑしむ、此の如くすること數年、計十萬餘株、鬱然として林を爲す」(幽居に比す) (二) 武陵、源、(前に出づ) (三) 落花芳草の景を尋ねず、山中に門を閉ぢて住む

寒食汜上(一)　王維

(二)廣武城邊暮春に逢ひ。(三)汶陽の歸客涙巾を沾す。落花寂寂たり山に鳴く鳥。楊柳青青たり(四)水を渡る人。

(一) 汜水のほとり (二) 三皇山上の城 (三) 兗州泰符縣 (四) 王維自ら云ふ

從弟と同じく(一)下第して關を出づ　盧綸

關を出で暮るゝを愁へて一に裳を沾す。滿野蓬生ず(二)古戰場。孤村の樹色殘雨に昏く。遠寺の鐘聲夕陽を帶ぶ。

間無ㇾ限丹青手。一段傷心畫不ㇾ成。

㊀曾て浮雲の暮れ行くを見、今、夕日に秋聲の起るを聞く ㊁世に畫工多きも、深き愁を畫き得ざらん。(六朝の滅亡を弔ふ)

春

明月斷魂清靄靄。平蕪歸路綠迢迢。人生莫ㇾ遣ニ頭如ㇾ雪。縱得ニ春風一亦不ㇾ消。

明月斷魂淸うして靄靄。(一)平蕪の歸路綠にして(二)迢迢。(三)人生頭をして雪の如くならしむるなかれ。縱春風を得るも亦消えず。

㊀淸く靄なり ㊁綠にして遙かなり ㊂頭の雪(白髮)は春來るも消えず

(已前共に六首)

後對 (末二句を對せしむる格)

鄭山人の居るところを過ぐ　劉長卿

寂寂孤鶯啼ニ

寂寂として孤鶯(一)杏園に啼き。寥寥として一犬(二)桃源に吠ゆ。(三)落花芳草尋ぬるに

一溪烟。

村邊紫豆華垂次。岸上紅梨葉戰初。莫レ怪烟中重回レ首。酒旗青紵一行書。

風散二古陂一驚二宿雁一。月臨二荒戍一起二啼鴉一。不レ堪二吟斷一無二人見一。時復寒燈落二一花一。

曾伴二浮雲一歸二晩色一。猶陪二落日一泛二秋聲一。世

江南　　陸龜蒙

村邊の紫豆華の垂るゝ次いで。岸上の紅梨葉の戰ぐ初。怪む莫れ烟中に重ねて首を回らすを。(一)酒旗の青紵一行の書。(二)

(一) 顧る　(二) 青きからむしの布の酒旗に書きし一行の字

旅夕　　高蟾

風古陂(一)に散じて宿雁を驚かし。月荒戍(二)に臨んで啼鴉を起す。吟斷するに堪へず人の見るなし。時に復た寒燈(三)一花を落す。

(一) 古きつゝみ　(二) 荒れたる堡壘(とりで)　(三) てうじ

金陵の晩眺

曾て浮雲の晩色に歸するに伴ひ。猶は落日に秋聲を泛ぶるに陪す。(一)世間限なし(二)丹青の手。一段の傷心畫けども成らず。

登登山路何
時盡。決決溪
泉到處聞。風
動二葉聲一山犬
吠。一家松火
隔二秋雲一。

滿庭詩景飄二
紅葉一。繞レ砌琴
聲滴二暗泉一。門
外晩晴秋色
老。蕭條寒玉

（巳前共に十一首）

㊀何れも皆奪胎換骨の體。或は曰ふ翻案の法也と

前對（接句に虛實兩體を備へ、前二句を對せしむる格）

山店　盧綸

登登（一）山路何の時にか盡きん。決決（二）たる溪泉到る處に聞ゆ。風は葉聲を動して山犬吠え。一家の松火（三）秋雲を隔つ。

㊀登り登る　㊁流れて滯らず　㊂松明（たいまつ）

韋處士の郊居　雍陶

滿庭の詩景紅葉飄り。（一）砌を繞る琴聲暗泉滴る。門外の晩晴秋色老ゆ。（二）蕭條たる寒玉一溪の烟。

㊀泉の聲琴の如く、砌（みぎり）をめぐる　㊁竹林しく、烟、溪をこむ。寒玉（竹。一說に烟色）

席。不レ問二蒼生一
問二鬼神一。

虢國夫人承二
主恩一。平明騎レ
馬入二金門一。卻
嫌脂粉汚二顔
色一。淡掃二蛾眉一
朝二至尊一。

山屐經過滿
徑蹤。隔レ溪遙
見夕陽舂。當
時諸葛成二何
事一。只合三終レ身
作二臥龍一。

室（未央前殿の正室）に坐して釐（祭肉）を受く、因つて鬼神の事を問ふ、誼つぶさに道ひて半夜に至る ㊁ 民を治むる道を問はず、たゞ鬼神のことを問へり。（賢才の用を誤りし意）

集靈臺　張祜

虢國夫人主恩を承け。平明馬に騎つて金門に入る。卻つて嫌ふ脂粉の顏色を汚すことを。淡く蛾眉を掃つて至尊に朝す。

○ 唐詩選の虢夫人に同じ

嘉陵の後溪に遊ぶ　薛能

（一）山屐經過す滿徑の蹤。溪を隔てて遙かに見る夕陽の舂くを。（二）當時の諸葛は何事をか成す。（三）只まさに身を終ふるまで臥龍と作るべし。

㊀ 山行の屐（げた）を穿ち、こみちを過ぐ ㊁ 諸葛孔明は何事をなししか ㊂ 隆中に隱れ、安らかに身を終へしに如かず。（孔明初め草廬に隱る、徐庶稱して臥龍といふ）

烟籠ニ寒水ー月籠レ沙。夜泊ニ秦淮ー近ニ酒家ー。商女不レ知亡國恨。隔レ江猶唱後庭花。

青雀西飛竟未レ回。君王長在集靈臺。侍臣最有ニ相如渇ー。不レ賜金莖露一杯。

宣室求レ賢訪ニ逐臣ー。賈生才調更無レ倫。可レ憐夜半虚前レ席

烟寒水を籠めて月沙を籠む。夜秦淮に泊して酒家に近し。(一)商女は知らす亡國の恨。江を隔てて猶ほ唱ふ後庭花。(二)

(一) 妓女　(二) 玉樹後庭の曲（陳の後主、宮女千餘人を擇び、習ひ歌はしめしもの）

漢宮　李商隱

青雀西に飛んで竟に未だ回らず。君王長く在り集靈臺。侍臣最も相如の渴あり。賜はず金莖の露一杯。

○唐詩選に出づ

賈生(一)

(二)宣室賢を求めて逐臣を訪ふ。賈生が才調更に倫なし。憐むべし夜半虛しく席を前めて。(三)蒼生を問はず鬼神を問ふ。

(一) 漢の賈誼　(二) 賈誼始め謫せられて長沙の傅となり、議餘にして帝之を思ひ、徵されて入つて見ゆ、帝まさに宣

灰未ㇾ冷山東
亂。劉項元來
不ㇾ讀ㇾ書。

折戟沈ㇾ沙鐵
半銷。自將二磨
洗一認二前朝一。東
風不下與二周郎一
便上。銅雀春深
鎖二二喬一。

㊀ 始皇三十四年、李斯上書していふ、今の諸生は今を師とせず古を學びて當世をそしり、黔首（人民）を惑亂す、臣請ふ、史官秦記にあらざるものは、皆之を燒き、天下詩書百家の語を藏するものあらば、皆守尉に詣らしめて之を雜燒せんと、始皇之を從ふ。坑（あな）㊁ 焚書の烟消え、古帝王の道すたる ㊂ 要害空しく始皇の宮をめぐる。（祖は始、龍は帝王の象）㊃ 陳勝亂を山東に起す。（項羽劉邦ついて起る）㊄ 劉邦（漢高祖）いふ「馬上いづくんぞ詩書を用ひん」項羽いふ「書は姓名を記すに足るのみ」

赤壁（一）　杜牧

（二）折戟沙に沈んで鐵半ば銷す。自ら（三）磨洗を將つて前朝を認む。（四）東風周郎がために便ぜずんば。銅雀春深うして二喬を鎖さん。

㊀ 鄂州江夏蒲圻の西。吳周瑜傳に「瑜、曹（曹操）と赤壁に遇ふ、曹公北岸にあり瑜南岸にあり、瑜の將黃蓋船を以て薪を積み、北船を燒く、東南風急なり、北船燒け盡し、曹公敗走す」㊁ 折れたる戟、沙に埋れ、鐵氣半ば消ゆ ㊂ 磨き洗ひ、當時の苦戰を想ふ ㊃ 東風周瑜を助けざれば、吳敗れ、二喬は銅雀臺（曹操美人を置きし臺）に捕はれしならん。周瑜傳に「瑜年二十四、吳中呼んで周郎となす、孫策、皖を攻め、喬玄の二女を得、皆國色なり、策、大喬を納れ、瑜小喬を納る」

秦淮

滿地霜蕪葉下レ枝。幾回吟斷四愁詩。漢家若欲レ論二封禪一。須レ及相如未レ病時。

竹帛烟消帝業虛。關河空鎖祖龍居。坑

以て法せらる、余西遁してその舊廬(山陽)の地を經、鄰人に笛を吹く者あり、曩昔宴遊の好を追思し、音に感じて歎ず」

冬夜寓懷、王翰林に寄す　竇庠

(一)滿地の霜蕪葉枝を下る。(二)幾回か吟じ斷ゆ四愁の詩。(三)漢家若し封禪を論ぜんと欲せば。須らく及ぶべし相如が未だ病まざる時。

(一)草に霜置き、黃葉落つ　(二)四愁の詩(張衡の作)を吟じ、不遇を嘆ず　(三)任用の遠ならんを歎む。(漢の司馬相如病篤き時、天子使を遣し、その書を取らしむ、相如すでに死し、家に遺書なし、妻曰く、長卿(相如)未だ死せざる時、書一卷を爲りて曰く、使ありて來り求めば、之を奏せよと、封禪の事を言へり、以て天子に奏す)。(殷命も死後にては詮なし)

(一)焚書坑　章碣

(二)竹帛烟消えて帝業虛し。(三)關河空しく鎖す祖龍の居。(三)坑灰未だ冷かならざるに(四)山東亂る。(三)劉項元來書を讀まず。

宵分獨坐到二天明一。又策二羸驂一信レ脚行。毎日除書雖レ滿レ紙。不三曾聞二有介推名一。

（一）宵分より獨坐して天明に到る。（二）又羸驂に策つて脚に信せて行く。（三）毎日除書紙に滿つと雖も。曾て聞かず介推の名あることを。

㈠夜半　㈡疲れし馬　㈢除書（任官の辭令書）日毎に出づるも、余が名の記されしことなし。左傳に「介子推（晉の文公の臣）祿を言はず、祿も亦及ばず」

奉誠園に笛を聞く（一）

竇牟

曾絶二朱纓一吐二錦茵一。欲下拔二荒草一訪中遺塵上。秋風忽灑西園淚。滿目山陽笛裏人。

（二）曾て朱纓を絶つて錦茵に吐す。荒草を拔いて遺塵を訪はんと欲す。（三）秋風忽ち西園の涙を灑ぐ。滿目山陽笛裏の人。

㈠北平郡王、馬燧の舊宅。唐史に「馬燧の子暢、第中の大杏を以て竇文場に餉す、文場以て德宗に進む、德宗未だ嘗て見ず、之を怪み、中使をして杏樹を封ぜしむ、暢倶に宅を進め、奉誠園と爲す」㈡寬仁大度にして、よく余を容れたり。司馬彪戰略に「楚の莊王羣臣に酒を賜ふ、日暮れ燭滅す、客に美人の衣を引くものあり、美人その纓を絶ち、王に告げ火を把りて纓を絶つ者を視しむ、王曰く、今已に飲む、纓を絶たざるものは懽ばずと、羣臣百官皆纓を絶つ、然る後、火を出せり」又「漢の丙吉の御史、醉うて車上に嘔す、曹吏白して之を斥けんとす、吉曰く、ただ之を忍べ、丞相の車茵を汚すに過ぎざるのみと」㈢秋風淋しき園に、笛を聽き涙を流す。魏志に「陳思王、西園を鄴に置き、諸才子と夜遊して詩を賦す」、又、晉の向秀、思舊賦序に「余、嵆康呂安と居止相近し、後、各々事を

去。畫欄紅紫
鬪二樗蒲一。

望水尋山二
里餘。竹林斜
到地僊居。秋
光何處堪消
日。玄晏先生
滿架書。

ならんとす。十洲記に「碧海中の樹、長さ千尺、一千餘圍、兩幹根を同じうし、更に相依倚す、是を以て扶桑と名づく」㊂杏花壇に去り、紅紫欄をめぐる中に、樗蒲(博戯の一種)を鬪はして遊び給へ

用　事（故事を用ふる格）

（已前共に十五首）(一)

㊀一句呼び二句應じ、三句開き四句合す

秋日員太祝の林園を過ぐ　　李　涉

水を望み山を尋ぬること二里餘。竹林斜に到る地僊の居。(一)秋光何の處にか日を消すに堪へたる。玄晏先生滿架の書。(二)

㊀仙經に「上士は形を擧げ虛に昇る、之を天仙といふ、中士は名山に遊ぶ、之を地仙とふ」㊁晉の皇甫謐、玄晏先生と稱す、二十にして學を好み、典籍を耽玩し寢食を忘る、人呼んで書淫といふ。(員氏に比す)

長安の作

名珪似レ玉淨
無レ瑕。美譽芳
聲有二數車一。莫下
放二燄光一高二
丈上。來年燒殺
杏園花。

少將二風月一怨二
平湖一。見盡扶
桑水到レ枯。相二
約杏花壇上一

市に歸らずといふ

魏三十七に贈る　　李羣玉

(一)名珪玉に似て淨うして瑕なし。美譽芳聲數車あり。(二)燄光を放つ高きこと二丈ならしむることなかれ。來年燒殺せん杏園の花。

(一) 才德、珪(たま)の瑕なき如く、名聲すでに高し (二) 頭上の光燄を高からしむるなかれ、明年、杏園の花を燒くことあらん。唐遺史に「江淮間の術士、姓は吳、宏詞に赴くものあり之に謁す、術士曰く、公の頭上の燄光、高さ二丈なり、必ず高第に登らんと」、又、秦中記に、「唐の進士、先づ杏園(曲江にあり)に初會す、之を探華の宴といふ、少俊三人を以て探華使となし、遍く名園に遊ばしむ、若し他人名花を折り得ば、則ち上三人罰せらる」

(一)湘妃廟

(二)少く風月を將つて平湖を怨む。見盡くさんとす扶桑水の枯るゝに到るを。(三)杏花壇上に相約し去つて。畫欄の紅紫樗蒲を鬭はさん。

(一) 舜の二妃娥皇女英(湘水に沈んで死す)の廟 (二) 洞庭の風月に、怨み盡きず、扶桑碧海の水も、化して桑田と

清時有レ味是無能。閑愛二孤雲一靜愛レ僧。欲下把二一麾一江海去上。樂遊原上望二昭陵一。

廣文遺韻留二樗散一。雞犬圖書共一船。自說江湖不歸事。阻レ風中レ酒過二年年一。

を、君王恩未だ報らず、零落して中路に在り」

將に吳興に赴かんとし、樂遊原に登る　杜牧

清時味あるは是れ無能。(一)閑には孤雲を愛し靜には僧を愛す。(二)一麾を把つて江海に去らんと欲し。樂遊原上に昭陵を望む。

(一) 雲の如く僧の如く、無心無爲なるをよしとす。(暗に不遇を嘆く) (二) 刺史の麾(はた)を把り、湖州(吳興の地、太湖に近し)に赴かんとし、樂遊原に昭陵(太宗を葬る)を望む。(賢主を憶ふ意)

鄭瓘協律(一)

(二)廣文の遺韻樗散を留む。(三)雞犬圖書共に一船。自ら說く江湖不歸の事。(四)風に阻てられ酒に中てられて年年を過ぐと。

(一) 廣文館博士鄭虔の孫 (二) 君に祖父の遺風あり、才あれども用ひられず。杜甫、鄭虔に贈る詩に「鄭公樗散鬢絲を成し、酒後嘗て稱す老畫師と」又、莊子に「吾に大木あり、人之を樗といふ、曲轅櫟社、その大、牛を蔽ふ、匠石曰く、散木(無用の材)なりと」 (三) 船に雞犬圖書を積み、江湖に淸遊す (四) 風に妨げられ、又、酒に中り、年々城

燕鴻。松月三年別二遠公一。無レ限心中不平事。一宵清話又成レ空。

清話に又空と成る。

(一)南北に流寓す　(二)上人に別る　(三)一夜の清話に心中の不平を忘る

鶴林寺に題す

終日昏昏醉夢間。忽聞二春盡一強登レ山。因下過二竹院一逢レ僧話上。又得浮生半日閑。

(一)終日昏昏たり醉夢の間。忽ち春の盡くるを聞いて強ひて山に登る。(二)竹院に過りて僧に逢うて話るに因つて。又得たり浮生半日の閑。

(一)潤州黄鶴山の寺、もと竹林寺といふ　(二)終日名利に奔走す　(三)竹院に僧と語り、半日の清閑を得

宮詞　　李商隠

君恩如二水向レ東流一。得レ寵憂レ移失レ寵愁。莫下向二樽前一奏中花落上。涼風只在二殿西頭一。

君恩は水の東に向つて流るゝが如し。(一)寵を得ては移らんを憂へ寵を失つては愁ふ。(二)樽前に向つて花落を奏することなかれ。(三)涼風は只殿の西頭に在り。

(一)寵の他に移らんことを憂ふ　(二)梅花落の曲を歌ふなかれ。その詞に「念ふ爾が零落して風飈を逐ふを、徒に霜華あつて霜質なし」　(三)涼風已に近く、君寵漸く衰ふ。班婕妤の賦に「切に恐る涼風至り、我が玉階の樹を吹く

曾隨二織女一渡二天河一。記得雲間第一歌。休レ唱貞元供奉曲。當時朝士已無レ多。

籬外涓涓澗水流。槿花半照夕陽收。欲下題二名字一知中相訪上。又恐芭蕉不レ耐レ秋。

南隨二越鳥一北

舊宮人穆氏の歌を聽く

曾て織女に隨つて天河を渡る。(一)記得す雲間第一の歌。(二)唱ふることを休めよ貞元供奉の曲。(三)當時の朝士已に多きことなし。(四)

(一) 曾て皇后(織女)に隨ひ、宮中(銀河)に奉仕す　(二) 歌に巧に宮中第一と稱せらる　(三) 貞元(德宗の年號)供奉の曲を唱ふるなかれ　(四) 當時の朝臣多く死し、歌意を解するものなし

隱者を訪うて遇はず　竇鞏

籬外涓涓として澗水流れ。(一)槿花半ば照して夕陽收る。(二)名字を題して相訪ふことを知らしめんと欲す。又恐る芭蕉の秋に耐へざらんを。

(一) むくげの花　(二) 名を芭蕉に書き殘したきも、秋風に破れんことを恐る

重ねて文上人の院を過ぐ　李涉

(一)南は越鳥に隨ひ北は燕鴻。松月三年(二)遠公に別る。(三)限なし心中不平の事。一宵の

水紋珍簟思悠悠。千里佳期一夕休。從レ是無レ心レ愛二良夜一。任他明月下二西樓一。

日出三竿春霧消。江頭蜀客繫二蘭橈一。欲レ寄二狂夫一書一紙。家住成都萬里橋。

情を寫す(一)

李　益

(二)水紋の珍簟思ひ悠悠。(三)千里の佳期一夕にして休む。是れより良夜を愛するに心なし。任他明月の西樓に下ることを。

(一) 亡姫霍小玉を悼む　(二) 水紋の模様ある簟(たかむしろ)　(三) 相逢ふ約

竹枝詞(一)

劉禹錫

(二)日出でて三竿春霧消え。江頭の蜀客蘭橈を繫ぐ。(三)狂夫に寄せんと欲す書一紙。家は住す成都の萬里橋。

(一) 禹錫竹枝詞の引に「余、建平に來る、里中の兒女竹枝を聯歌し、以て節に赴く(竹枝と呼び歌の拍子を取る)含思宛轉、淇澳の艷あり、故に余、竹枝辭を作る」又、唐書禹錫傳に「禹錫朗州の司馬に貶せらる、州、夜郎に接し、諸夷の風俗陋なること甚だし、家々巫鬼を喜び、祠毎に竹枝を歌ひ、鼓吹徘徊し、その聲傖儜なり、禹錫謂ふ、屈原沅湘の間に居り九歌を作り、楚人をして神を迭迎せしむと、乃ちその聲により、竹枝詞十餘篇を作る、是に於て、武陵の里俚悉く之を歌ふ」　(二) 日高く霧晴れ、蜀人、舟を繫ぐ　(三) 良人、家に歸らず、成都萬里橋のほとりに在りと聞けり、書信をこの舟に託したし

來詩思淸二人
骨一。門對二寒流一
雪滿レ山。

江流如レ箭月
如レ弓。行二盡三
湘一數夜中。無レ
奈子規知レ向レ
蜀。一聲聲似
怨二春風一。

一見二淸容一愜二
素聞一。有レ人傳
是紫陽君。來
時玉女裁二春
服一。剪破湘山
幾片雲。

㊀九日勤め、一日休む　㊁詩思淸く、俗情を忘る

湘江夜汎　　熊孺登

江流箭の如く月弓の如し。㊀三湘を行き盡す數夜の中。㊁奈ともするなし子規の蜀に向ふを知ることを。一聲聲は似たり春風を怨むるに。

㊀灕湘、沅湘、蒸湘　㊁ほとゝぎす、余が蜀に向ふを知り、春を怨む如く啼く。成都記に「蜀の望帝死して鳥となり、杜鵑(子規に同じ)と名づく、聲低うして怨む」

侯山人に贈る

㊀一たび淸容を見て素聞に愜ふ。人あり傳ふ是れ紫陽君と。㊁來る時玉女春服を裁し。剪破す湘山幾片の雲。

㊀姿淸く　曾て傳聞せしに違はず、紫陽眞人の流かと思はる。大茅君傳に「紫陽の左公大極仙伯、山玄卿、周紫山、皆紫陽眞人と號す」　㊁君來る時、玉女は湘山の雲を剪り、縫ひて春衣となししなん

從二建業城邊一過。蔓草寒煙鎖二六朝一。

孤舟相訪至二天涯一。萬轉雲山路更賒。欲下拂二柴門一迎中遠客上。青苔紅葉滿二貧家一。

九日驅馳一日閑。尋レ君不レ遇又空還。怪

㊀染めしもの、描きしものの乾かざる如し　㊁冷かなる氣を飛ばし、又、はるかに澄む　㊂烟寒く草はびこり、六朝の古跡を鎖す

（已前共に一十九首(一)）

李穆に酧ゆ　劉長卿

㊀第三句第一字に虚字を用ひ、第四句之に應ず

孤舟(一)相訪うて天涯に至る。萬轉(二)の雲山路更に賒かなり。柴門を拂つて遠客を迎へんと欲すれば。青苔黄葉貧家に滿つ。

㊀余を遠地（歙州）に訪ふ　㊁山影しばしば移り動く

休日人を訪うて遇はず　韋應物

九日(一)驅馳して一日閑なり。君を尋ねて遇はず又空しく還る。怪しみ來る詩思(二)の人骨を淸うすることを。門は寒流に對し雪は山に滿つ。

碧空。年年長
是惹二春風一爭
知天上無二人
住一。亦有二春愁
鶴髮翁一。

蓮華峯下得二
佳名一。雲褐相
兼上二鶴翎一。須下
是古壇秋霽
後。靜焚二香炷一
禮中寒星上。

染不レ成レ乾畫
未レ消。霏霏拂
拂又迢迢曾

住むなきことを。(三)亦春愁鶴髮の翁あらん。

(一)自注に「故病未だ平かならず、厭々として田舍中に臥す、農夫釆耜を以て相話し、夜分も睡られず、百端懷を興し、思緒々緒なし、因りて四句の詩を作り、三十絶を累ぬ」 (二)かげろふ (三)天上に春愁深き老人あり、白髮を下界に落すならん

(一)華陽巾

蓮華峯下に佳名を得たり。(二)雲褐相兼ねて鶴翎に上る。須らく是れ古壇秋霽るゝ後。(三)靜かに香炷を焚いて寒星を禮すべし。

(一)華陽の道士韋節の作りし巾、陶淵明、蓮華峰(華山)下に用ふ (二)雲を描ける褐を著、華陽巾をかむり、鶴に乘りて飛行す (三)祭壇に香を炷き、寒星を拜するならん。(華山に千葉蓮華あり、之を服すれば羽化すといふ)

秋色　吳融

(一)染めて乾くことを成さず畫いて未だ消えず。(二)霏霏拂拂として又迢迢。曾て建業城邊より過ぐれば。(三)蔓草寒煙六朝を鎖せり。

館娃宮畔千年寺。水闊雲多客到稀。聞說春來倍惆悵。百花深處一僧歸。

和風烟雨九重城。夾路春陰十萬營。唯向邊頭不堪望。一株憔悴少人行。

數尺遊絲墮

館娃宮畔千年の寺。(一)水闊く雲多くして客到ること稀なり。聞説春來倍〻惆悵(二)すと。百花深き處一僧歸る。

(一)蘇州城の西二十四里、もと秀峯寺といふ、呉王別苑の跡、洞庭七十二峰に面し、太湖三萬六千頃に臨む　(二)衰へをいたむ

柳枝(一)　薛能

風に和する烟雨九重城。(二)路を夾む春陰十萬の營。(三)惟邊頭に向つて望むに堪へず。(四)一株憔悴して人行少なり。

(一)もと十首の一　(二)帝城の柳風靜かに雨煙る　(三)軍營の柳、春陰路を夾みて濃し　(四)邊塞の柳、一株秋に瘦せ、行人の影稀なり

自遣(一)　陸龜蒙

數尺の遊絲(二)碧空より墮つ。年年長く是れ春風に惹かる。爭か知らん天上に人の

一閑人。

千秋佳節名空在。承露絲囊世已無。唯有紫苔偏稱意。年年因雨上金鋪。

沅水羅紋海燕回。柳條牽恨到荊臺。定知行路春愁裏。故郢城邊見落梅。

(一)勤政樓を過ぐ　杜牧

(二)千秋の佳節名空しく在り。承露の絲囊世已になし。(三)唯紫苔あつて偏に意に稱ひ。(四)年年雨に因つて金鋪に上る。

㊀ 玄宗、二樓を宮西に置き、西を華萼相輝の樓といひ、東を勤政本務の樓といふ ㊁ 千秋節（玄宗生誕の日）の名空しく殘り、拜賀の事（王公以下、鏡及び承露囊を獻ず）すでに廢す ㊂ 苔のみ思ふまゝに滋る ㊃ 雨のために、金鋪（門扉の粧飾）に生ず

客を送る　李羣玉

沅水の羅紋(一)海燕回り。柳條恨を牽いて(二)荊臺に到る。定めて知る行路春愁の裏。(三)故郢城邊に落梅を見んことを。

㊀ 綾の如き水紋 ㊁ 江陵府の臺 ㊂ 江陵縣（楚の郢の地）の界の城

(一)靈巖寺　趙嘏

山青。曲几焚
香對二石屏一。記
得去年春雨
後。燕泥時汚
太玄經。

時に汚す太玄經。

㊀ 屛風の如き石崖 ㊁ 巣燕泥を落し、几上の太玄經（漢の揚雄の著）を汚す

樹頭樹底覓二
殘紅一。一片西
飛一片東。自
是桃花貪レ結レ
子。錯教三人恨二
五更風一。

宮詞　　王建

樹頭樹底に殘紅を覓む。一片は西に飛び一片は東す。(一)自ら是れ桃花子を結ぶことを貪り。(二)錯つて人をして五更の風を恨みしむ。

㊀ 桃花實を結ぶことを貪る。（宮人、皇子を産まんことを爭ふ） ㊁ 花空しく散り、五更の風を恨む。（宮人寵を失ひ、容色また衰ふ）

水生風熟布
帆新。只見二公
程一不レ見レ春。應レ
被二百花撩亂
笑一。比來天地

役に祗り風に遇ひ湘中の春色に謝す　　熊孺登

水生じ(一)風熟して布帆新なり。只公程を見て春を見ず。(二)應に百花の撩亂たるに笑はるべし。(三)比來天地の一閑人。

㊀ 湘江に春水生じ、布帆を順風に揚ぐ ㊁ 公役忙しく、自由に春を賞するを得ず ㊂ 近頃までは、天地の閑人と稱せし身なるに

青油幕下白雲邊。日日空山夜夜泉。聞說小齋多野意。枳花陰裏麝香眠。

白髮宮娃不解悲。滿頭猶自插花枝。曾緣玉貌君王寵。準擬人看似舊時。

松杉風外亂

襄陽の章孝標に寄す　雍陶

青油幕下白雲の邊。(一) 日日の空山夜夜の泉。(二) 聞說小齋野意多しと。(三) 枳花陰裏に麝香眠らん。

(一) 將軍の帷幕(青油絲にて作る)に參し、白雲の動くほとりに在り　(二) 日々山を看、夜々泉を聽く　(三) からたちの花蔭に麝香(鹿の一種)來り眠る

舊宮人　劉得仁

白髮の宮娃悲を解せず。(一) 滿頭猶ほ自ら花枝を插む。(二) 曾て玉貌君王の寵せしに緣つて。準擬す人の看て舊時に似んことを。

(一) 老宮人悲しみを知らず、白髮に花枝を插む　(二) 容貌美しく、かつて寵を得しにより、今なほ一顧を希へり

小樓　儲嗣宗

松杉風外亂山青し。曲几香を焚いて石屏に對す。(一) 記得す去年春雨の後、燕泥

燕。年年飛入二未央一棲上。

峭壁蒼蒼苦色新。無二風情一景自勝レ春。不レ知何樹幽崖裏。臘月開レ花似二北人一。

一旦悲歡見二孟光一。十年辛苦伴二滄浪一。不レ知筆硯緣二封事一。猶問傭書日幾行。

に入るならん。古詩に「願はくは雙飛燕となつて、泥を啣んで君室に入らん」

(一)春秋峡を過ぐ　劉言史

(二)峭壁蒼蒼として苦色新なり。風情なきの景も自ら春に勝れり。知らず何の樹ぞ(二)幽崖の裏。(三)臘月花を開いて北人に似す。

㊀彭城汴泗二水の交流する處　㊁高き切岸　㊂十二月すでに花を開き、北地(趙)の余に示す。(南地の暖かなる處)

(一)初めて諫司に入り家室の至るを喜ぶ　竇羣

一旦の悲歡孟光を見る。(二)十年の辛苦滄浪に伴ふ。(三)知らず筆硯の封事に緣ること(四)を。猶ほ問ふ傭書日に幾行と。

㊀德宗の朝、左拾遺となり、供奉諷諫を司る　㊁故郷より妻(漢の梁鴻の妻孟光に比す)來り、喜悲の情を交ふ　㊂多年艱難を共にし、隱遁の生活に伴ふ　㊃封事(密奏の書)を認めつゝあるを見、傭書(筆耕)日に幾行なりやと問へり。(貧苦の習を脫せざる意)

武帝祈レ靈太乙壇。新豐樹色遶二千官一。那知今夜長生殿。獨閉二空山月影寒一。

罷レ釣歸來不レ繫レ船。江村月落正堪レ眠。縱然一夜風吹去。只在二蘆花淺水邊一。

幾多紅粉委二黃泥一。野鳥如レ歌又似レ啼。應レ有下春魂化爲レ

武帝靈を祈る太乙壇。新豐の樹色千官を遶る。那ぞ知らん今夜長生殿。獨空山月影の寒きに閉さんとは。

○唐詩選に出づ

江村卽事　司空曙

釣を罷め歸り來つて船を繫がず。江村月落ちて正に眠るに堪へたり。縱然一夜(一)風吹き去るも。(二)只蘆花淺水の邊にあらん。

(一)風吹き舟流る　(二)あしの花

(一)宮人斜　雍裕之

(二)幾多の紅粉黃泥に委す。野鳥歌ふが如く又啼くに似たり。(三)應に春魂の化して燕となり。年年飛んで未央に入つて棲むあるべし。

(一)長安宮牆の外三里の地、宮嬪を葬る處　(二)幾多の美人黃土に葬らる　(三)美人の魂、燕に化し、年々未央宮

獨在二異鄕一爲二異客一。每レ逢二佳節一倍思レ親。遙知兄弟登レ高處。遍插二茱萸一少二一人一。

水邊楊柳赤欄橋。洞裏神仙碧玉簫。近得二麻姑書信一不。潯陽江上不レ通レ潮。

九日山東の兄弟を懷ふ　王維

獨り異鄕に在つて異客となり。佳節に逢ふ每に倍〻親を思ふ。遙かに知る兄弟高きに登る處。遍く茱萸を插みて一人を少くことを。

○唐詩選に出づ

葉道士の山房　顧況

水邊の楊柳(一)赤欄橋。(二)洞裏の神仙碧玉簫。(三)近ごろ麻姑が書信を得るや不や。(四)潯陽江上潮を通ぜず。

(一) 朱塗の欄ある橋 (二) 葉道士碧玉の簫を吹く (三) 仙女麻姑の書信ありしや否や。麻姑壇記に「王方平、蔡經の家を過ぎ、人をして麻姑と相聞せしむ、頃あり、人來つて曰く、麻姑再拜して見ざる已に五百年と、俄かにして麻姑至る、卽ち是、年十八九許の好女子」 (四) 潯陽江に潮を通ぜず、書信も來らざるべし

昭應に宿す

來兼恐無二尋處一。落日風吹鼓子花。

烏紗巾上是青天。檢束酬レ知四十年。誰料平生臂レ鷹手。挑レ燈自送二佛前錢一。

年老心閑無二外事一。麻衣草坐亦容レ身。相逢盡道休レ官去。林下何曾見二一人一。

(一)遂州長江縣にあり　(二)久しく歎く　(三)再來の日には、墓もすでになかるべし　(四)野の花の一種

修史亭(一)　　司空圖

烏紗巾上是れ青天。(二)檢束して知に酬ゆ四十年。誰か料らん平生鷹を臂にせし手。(三)燈を挑げて自ら佛前の錢を送らんとは。

(一)司空圖山居記に「乃ち大悲像を刻み、亭をその右に構へて擬綸と曰ひ、その右亭を修史といふ」　(二)頭上に青天を戴く如く、官に就き知己に酬ゆること四十年　(三)山中に燈火をかゝげ、人のまゐる錢を觀音佛の前に送る

韋丹に答ふ　　僧　靈徹

年老い心閑にして外事なし。麻衣草坐亦身を容る。相逢うて盡く道ふ官を休め去らんと。林下何ぞ曾て一人を見ん。

(一)人々退隱の本意を語るも、林下に一人の隱者なし。(言行同じからざる意)

(已前共に十一首)

(二)三句喚ばざるも四句その意を用ふ

李白題レ詩水
西寺。古木回
巖樓閣風。半
醒半醉遊三
日。紅白花開
烟雨中。

野水晴山雪
後時。獨行二村
路一更相思。無レ
因下一向二溪橋一
醉上。處處寒梅
映二酒旗一。

水遶二荒墳一縣
路斜。耕人訝
我久咨嗟。重

李白詩を題す水西寺。(一)古木回巖樓閣の風。(二)半醒半醉遊ぶこと三日。紅白花開く烟雨の中。

(一)宣州涇縣の寺。李白の詩に曰ふ「天宮水西寺、雲脚東閣を照す、清湍回溪に鳴り、綠水飛閣を繞る」(二)木古く巖めぐり、樓閣に風吹く

友に寄す　　李羣玉

野水晴山雪後の時。獨村路を行いて更に相思ふ。(一)一たび溪橋に向つて醉ふに因なし。處處の寒梅酒旗に映ず。

(一)風景好きも、醉を買ふ心なし

賈島の墓を經(一)　　鄭谷

水は荒墳を遶つて縣路斜なり。耕人訝る我が久しく咨嗟するを。(二)(三)重來兼ねて恐る尋ぬるに處なからんを。落日風吹く(四)鼓子の花。

何說得天壇上。萬里無レ雲月正中。

洛陽城裏見ニ秋風一。欲レ作ニ家書一意萬重。復恐怱怱說不レ盡。行人臨レ發又開レ封。

長州苑外草蕭蕭。卻算ニ遊程一歲月遙。唯有ニ別時今不レ忘。暮烟秋雨過ニ楓橋一。

(一) 仙家の宮殿。黃庭經注に「絳陽の殿蕊珠の宮あり」 (二) 如何にして清き趣を說き得ん

秋思　張籍

洛陽城裏秋風を見る。(一)家書を作らんと欲して意萬重。(二)復た恐る怱怱として說き盡さざらんことを。(三)行人發するに臨んで又封を開く。

(一) 家に送る書を作り、千萬無量の思あり (二) 筆に任せて認め、文意の盡さざるを恐る (三) 使の發するに臨み又封を開きて讀む

吳中の馮秀才を懷ふ　杜牧

長州苑外草蕭蕭。(一)卻つて遊程を算ふれば歲月遙かなり。(二)唯別時の今に忘れざるあり。暮烟秋雨に楓橋を過ぎしを。

(一) 曾遊を憶へば、すでに久しき昔となる (二) 今なほ別時の光景を忘れず

昔遊を念ふ

客。莫下引二世人一
相逐來上。

簷前朝暮雨
添レ華。八十呉
僧飯二熟麻一。入レ
定幾時還出レ
定。不レ知巣燕
汚二袈裟一。

掃レ石焚レ香禮二
碧空。露華偏
濕藥珠宮。如

知るを要す桃を窃む客は、定めて是れ會稽の人ならん」と ㊂ 洞中に桃花を看、何時人間に歸るべきか ㊂ 君心して去り、世人をして來らしむるなかれ。桃花源記に「武陵の人、魚を捕へて溪を行き忽ち桃花の岸を夾むを見る、男女の著衣悉く外人の如くして黃髮怡然として樂しむ、停ること數日にして去る、後、太守、人をして隨ひ行かしむれども復た見ることを得ず」

明慧上人の房に題す　秦系

簷前朝暮に雨華を添へ。八十の呉僧熟麻を飯す。(一)(二)定に入つて幾時か還た定を出でん。知らず巣燕の袈裟を汚すことを。

㊀ 呉の僧、年八十、麻を炊ぎて食とす。本草に「一に巨勝、狀、狗蝨の如し、莖方たり、之を服すれば身を輕うして老いず」 ㊁ 禪定に入り、巣燕糞を落し袈裟を汚すを知らず

許鍊師に寄す　戎昱

石を掃ひ香を焚いて碧空を禮す。(一)露華偏に濕す藥珠宮。(二)如何ぞ說き得ん天壇の上。萬里雲なうして月正に中す。

澤國江山入二
戰圖一。生民何
計樂二樵蘇一。憑レ
君莫レ話封侯
事。一將功成
萬骨枯。

(一)澤國の江山戰圖に入る。(二)生民何の計あつてか樵蘇を樂しまん。(三)君に憑る話るなかれ封侯の事。(四)一將功成つて萬骨枯る。

(一) 僖宗乾符六年。(黃巢賊江淮を亂す) (二) 江淮の山河戰地となり、人民生計に安んぜず。樵蘇(薪を採り、草を刈る) (三) 君にたのむどうか戰功により榮進することを語るなかれ (四) 一將功を成し、萬卒命を失ふ

(已前共に四首)(一)

(一) 君の字を用ひ、詩意を强む

虛接 (第三句に虛語卽ち情思の語を置き、前後に接續せしむる格)

洞裏春情花
正開。看レ花出レ
洞幾時回。慇
懃好去武陵

(一)伏翼の西洞に人を送る　陳羽

洞裏の春情花正に開く。(二)花を看洞を出でて幾時か回らん。(三)慇懃に好し去れ武陵の客。世人を引いて相逐ひ來らしむるなかれ。

(一) また小桃源といふ、曾て一銅碑を拾ふものあり、詩を鐫りて曰ふ「綽約として去つて眞に朝す、仙籟萬木の春、

酒。西出二陽關一
無二故人一。

三月正當三
十日。風光別二
我苦吟身一。共レ
君今夜不レ須レ
睡。未レ到二曉鐘一
猶是春。

江上春風留二
客舟一。無レ窮歸
思滿二東流一。與レ
君盡日閑臨レ
水。貪二看飛華一
忘二卻愁一。

三疊の曲といふ ㊁ 咸縣の東北、もとの杜郵 ㊂ 燉煌郡壽昌縣の西の關門

三月晦日劉評事に贈る　賈島

三月正に當る三十日。風光我が苦吟の身に別る。(一)君と今夜睡ることを須ひず。未だ曉鐘に到らざれば猶ほ是れ春。

㊀ 終夜睡らず、春を賞すべし

武昌に風に阻まる　方澤

江上の春風客舟を留め。窮なき歸思東流に滿つ。(一)君と盡日閑かに水に臨み。(二)飛華を貪り看て愁を忘卻す。

㊀ 同舟の人 ㊁ 落花の景を見、僅かに愁を忘る

(一)己亥の歲　曹松

老。閑看人間得意人。

魂歸冥漠魄歸泉。只住人間十五年。昨日施僧裙帶上。斷腸猶繫琵琶絃。

渭城朝雨浥輕塵。客舎青青柳色新。勸君更盡一杯

見る。（名利の心全くなしとの意）

亡妓を悼む　朱褒

（一）魂は冥漠に歸し魄は泉に歸す。只人間に住すること十五年。（二）昨日僧に施す裙帶の上。斷腸猶ほ繫く琵琶の絃。

（一）禮記に「魂氣天に歸し、體魄地に復す」（二）楊氏喪儀に「人死して七日、則ち亡者の衣物を僧に施す」

（已前共に十八首）

（一）第三句、明朝、今日等の語を用ひ詩意を一轉す

元二が安西に使するを送る（一）　王維

（二）渭城の朝雨輕塵を浥す。客舎青青として柳色新なり。君に勸む更に盡せ一杯の酒。（三）西のかた陽關を出づれば故人なからん。

（一）渭城の地、都護府を置く、後人此曲を以てこの詩を歌ひ、陽關曲といふ、又第二句以下各句を疊ね唱へ、陽關

節去蜂愁蝶不レ知。曉庭還繞折殘枝。自緣ニ今日人心別一。未ニ必秋香一夜衰一。

邵平瓜地接ニ吾廬一。穀雨乾時偶自鋤。昨日春風欺ニ不在一。就レ床吹落讀殘書。

逐レ隊隨レ行二十春。曲江池畔避ニ車塵一。如今贏得將ニ衰

(一)節去り蜂愁へて蝶知らず。曉庭還た繞る折殘の枝。自ら今日人心の別なるに緣る。未だ必ずしも(二)秋香一夜に衰へず。

(一) 重陽の節過ぐ　(二) 菊の香、一夜に衰へしにはあらず

老圃堂　　薛能

邵平が瓜地吾が廬に接し。(二)穀雨乾く時偶ゝ自ら鋤く。昨日(三)春風不在を欺いて。床に就いて吹き落す讀殘の書。

(一) 故の秦の東陵侯、秦破れて布衣となり、瓜を城東に種う　(二) もみ種を浸す頃の雨　(三) 春風不在の間に吹く

偶興　　羅隱

(一)隊を逐ひ行に隨ふ二十春。曲江池畔車塵を避く。(三)如今贏ち得たり衰老を將つて。閑に看る人間得意の人。

(一) 科擧に應じ、及第せざること二十年　(二) 常に貴人の車塵を避く　(三) 今すでに老い、靜かに世上得意の人を

共一樓。

觥船一棹百分空。十歳青春不レ負レ公。今日鬢絲禪榻畔。茶烟輕颺落花風。

門前不レ改舊山河。破レ虜曾輕馬伏波。今日獨經二歌舞地一。古槐疎冷夕陽多。

それ益州に臨むならん)

醉後僧院に題す　杜牧

(一)觥船一棹百分空し。(二)十歳の青春公に負かず。今日(三)鬢絲禪榻の畔。茶烟輕く颺る落花の風。

(一)杯中の酒を飲干し、一滴を餘さず　(二)青春十年心のまゝに樂しむ　(三)老いて禪榻により、茶の烟輕くあがる

汾陽の舊宅を經(一)　趙嘏

(二)門前改めず舊山河。(三)虜を破つて曾て輕んず馬伏波。今日獨歌舞の地を經れば。(四)古槐疎冷にして夕陽多し。

(一)汾陽王郭子儀　(二)門前の山河昔の如きも、郭氏の宅はすでに荒れたり　(三)曾て賊(安祿山史思明吐蕃等)を平らげ、漢の伏波將軍(馬援)の功にも勝りき　(四)古き槐(ゑんじゆ)疎しく、夕日遍く照す

十日の菊　鄭谷

遠客悠悠任二病身一。誰家池上又逢レ春。明年各自東西去。此地看レ花是別人。

行二過險棧一出二褒斜一。出二盡平川一似レ到レ家。無レ限客愁今日散。馬頭初見米囊花。

離思茫茫正値レ秋。每レ因二風景一却生レ愁。今宵難レ作刀州夢。月色江聲

(一)遠客悠悠として病身に任す。誰が家の池上にか又春に逢はん。明年各自に東西に去らば。この地に(二)花を看るは是れ別人。

(一)久しく客となり、病を抱く　(二)花を看るものは、他人ならん

西に歸つて斜谷を出づ　　雍陶

(一)險棧を行き過ぎて褒斜を出づ。平川を出で盡せば家に到るに似たり。限なき客愁は今日散じ。(二)馬頭初めて見る米囊花。

(一)險しき棧道を過ぎ、褒斜谷を出づ　(二)馬前に芥子(けし)の花開く

嘉陵驛に宿す

(一)離思茫茫として正に秋に値ふ。(二)風景に因る毎に却つて愁を生ず。(三)今宵作し難し刀州の夢。月色江聲共に一樓。

(一)故郷を懷ふこと深し　(二)好風景を見、却つて愁を生ず　(三)月と水聲と樓に滿ち、故郷益州を夢み難し。(晉の王濬、夢に三刀を屋梁に掛け、須臾にして又一刀を益す、李毅曰ふ、三刀は州の字なり、又一刀を益すは、明府

朝試上ニ高枝一採。不レ覺傾翻仙鶴巢。

㊀酒を釀し長壽の藥とす ㊁松花を服する法を知らず ㊂忽ち嵩陽道士に教へらる ㊃覺えず鶴の巣をくつがへす

孟寂を哀む　張籍

曲江院裏題レ名處。十九人中最少年。今日風光君不レ見。杏花零落寺門前。

曲江院裏名を題する處。十九人中最も少年。今日風光君見えず。杏花零落す寺門の前。

㊀名を慈恩寺の塔に題せし時、十九人中の最少年なりき。唐進士登科記に「孟寂乃ち中書舍高郢の取る所、その年進士十七人、博學宏詞二人」 ㊁君すでに歿し杏花寺門の前に散る

眼を患ふ

三年患レ眼今年較。免下與ニ風光一便隔上生。昨日韓家後園裏。看レ花猶自未ニ分明一。

三年眼を患へて今年較ゆ。風光と便ち生を隔つるを免る。昨日韓家後園の裏。花を看て猶ほ自ら未だ分明ならず。

㊀生涯、物を見ざる不幸を免る ㊁韓退之の家

春に感ず

芊芊峭壁攢峰千萬重○他日期レ君何處好○寒流石上一株松○

休レ遣三玲瓏唱二我辭一○我辭多是寄レ君詩○明朝又向二江頭一別○月落潮平是去時○

擬レ服二松華一無レ處レ學○嵩陽道士忽相敎○今

寒流石上一株の松。

(一)草茂る　(二)險しき崖、集れる峯　(三)他日再會の地は寒流石上に孤松秀づる處ならん

重ねて商玲瓏に贈り兼ねて樂天に寄す(一)　元稹

玲瓏をして我が辭を唱へしむるを休めよ。(二)我が辭多くは是れ君に寄するの詩。(三)明朝又江頭に向つて別るれば。月落ち潮平かならん是れ去る時。

(一)餘杭の歌者　(二)余が詩、君(樂天)に寄するもの多く聲調甚だ悲し。(樂天謫せられて江州にあり)　(三)月落ち潮平かなる時、玲瓏が舟遠く去るべし

松華を採る(一)　姚合

(二)松華を服せんと擬して學ぶところなし。(三)嵩陽の道士忽ち相敎ふ。今朝試に高枝に上つて採れば。(四)覺えず傾翻す仙鶴の巢。

是白雲。

君去春山誰共遊。鳥啼花落水空流。如今送レ別臨二溪水一。他日相思來二水頭一。

知逐二征南一冠二楚材一。遠勞二書信一到二陽臺一。明朝若上二君山一望。一道巴江自レ此來。

相逢之處草

王永を送る　劉商

君去らば春山誰と共にか遊ばん。鳥啼き花落ちて水空しく流る。(一)如今別を送つて溪水に臨めり。(二)他日相思ひて水頭に來らん。

㊀今日君を溪上に送る　㊁他日君を憶ひ、また獨こゝに來らん

楊八副使が湖南に赴いて寄せらるゝに酬ゆ　劉禹錫

(一)知りぬ征南を逐うて楚材に冠たるを。(二)遠く書信を勞して陽臺に到らしむ。(三)明朝若し君山に上つて望まば。一道の巴江此より來らん。

㊀征南の正使に隨ひ、楚地第一の人材たらん　㊁遙かに書信を寄せ、陽臺(禹錫謫居の地)に到る　㊂明朝君山(洞庭湖の山)より望まば、巴江この地より流れ行くを見ん

鄭三が山に遊ぶに逢ふ　盧仝

相逢ふの處草(一)茸茸たり。(二)峭壁攢峰千萬重。(三)他日君に期す何の處か好からん。

荷忽被二微風
觸一。瀉下清香
露一杯。

湖上新正逢二
故人一。情深應レ
不レ咲二家貧一。明
朝別後門還
掩。脩竹千竿
一老身。

淸夜沈沈此
送レ君。陰蛩切切
不レ堪レ聞。歸
舟明日毘陵
道。回レ首姑蘇

㈠郊外のつゝみ　㈡魚躍らざるも荷左右に動く　㈢蓮の卷葉に微風吹き、香しき露をこぼす

（已前共に九首）

㈠三四句錯綜し、前二句に應ず

歲初皇甫侍御の至るを喜ぶ　　嚴維

湖上の新正㈠故人に逢ふ。情深うして應に家の貧しきを咲はざるべし。明朝別後門還た掩はば。㈡脩竹千竿一老身。

㈠新年　㈡脩竹（長き竹）千竿、老いたる余に伴ふ

魏十六を送る　　皇甫冉

淸夜沈沈として此に君を送る。陰蛩切切として聞くに堪へず。歸舟明日毘陵の道。首を回せば姑蘇は是れ白雲。

○唐詩選に出づ。但唐詩選には「淸夜」を「秋夜」に作る。

粱肥。豚穽雞塒半掩レ扉。桑柘影斜秋社散。家家扶二得醉人一歸。

水闊風驚去路危。孤舟欲レ上更遲遲。鶴羣長遶三珠樹。不下借二閑人一隻一騎上。

侵レ曉乘レ涼偶獨來。不レ因二魚躍一見二萍開一。捲

家家醉人(四)を扶け得て歸る。

(一) 豐年祭の日（立秋後第五の戊の日） (二) 豚のあな、雞のねぐら (三) 桑の影斜に（日傾き）祭終る (四) 醉ひし人を扶け、家々に歸る

(一)河西より山に歸る　　司空圖

水闊く風驚いて去路危し。孤舟に上らんと欲して更に遲遲(二)たり。鶴羣長く遶る三珠樹(三)。閑人に一隻を借して騎らしめず。(四)

(一) 官を辭し中條山に歸る (二) 暫くためらふ (三) 珠を葉とする仙樹 (四) 余に一隻を借し、他郷に到るを得しめず

(一)野塘　　韓偓

曉を侵し涼に乘じて偶〻獨り來る。魚の躍るに因らざるも萍(二)の開くを見る。(三)捲荷忽ち微風に觸れられて。瀉下す清香の露一杯。

獨看レ松。

秋月斜明虚白堂。寒蛩唧唧樹蒼蒼。江風徹レ曉不レ得レ寐。二十五聲秋點長。

雨前初見花間葉。雨後兼無二葉底花一。蛺蝶飛來過レ牆去。卻疑春色在二隣家一。

鵝湖山下稻

虚白堂に宿す　李郢

秋月斜に明かなり虚白堂。寒蛩唧唧として樹蒼蒼。(一)江風曉に徹して寐ることを得ず。(二)二十五聲秋點長し。

(一) 江風淋しく、終夜眠るを得ず　(二) 秋夜長し（一更五點、一夜二十五點）

晴景　王駕

雨前には初めて見る花間の葉。雨後には兼ねて葉底の花なし。蛺蝶飛び來つて牆を過ぎて去る。(一)卻つて疑ふ春色は隣家に在るかと。

(一) 花なは隣家にありやと疑はしむ

社日

鵝湖山下稻粱肥えたり。(二)豚穽雞塒半ば扉を掩ふ。(三)桑柘影斜にして秋社散じ。

玉流。騷人遙駐木蘭舟。春風無限瀟湘意。欲レ採二蘋花一不二自由一。

遠別二秦城一萬里游。亂山高下入二商州一。關門不レ鎖寒溪水。一夜潺湲送二客愁一。

宿雨初收草木濃。羣鴉飛散下堂鐘。長廊無レ事僧歸レ院。盡日門前

を採らんと欲するも自由ならず。

(一)柳州にある時の作　(二)柳州の山　(三)風流なる曹侍御、美しき舟をとゞむ　(四)瀟湘春遊の思限りなし　(五)蘋花を採りて獻ぜんとするも、謫居の身にして自由ならず。左傳に「蘋蘩蘊藻、王公に羞すべし」

武關に宿す　李涉

遠く秦城に別れて萬里に游び。(一)亂山高下商州に入る。(二)關門は鎖さず寒溪の水。(三)一夜潺湲として客愁を送る。(四)

(一)長安に別る　(二)山中の險路を越え商州に入る　(三)關門は溪をとゞめず　(四)終夜鳴り響き客愁を送り來る

開聖寺に題す

宿雨初めて收り草木濃かなり。(一)羣鴉飛び散ず下堂の鐘。(二)長廊事なくして僧院に歸り。(三)盡日門前に獨り松を看る。

(一)草木の綠濃し　(二)齋(とき)了り、諸僧、堂を下る鐘　(三)日の暮るゝまで

玉帛徵レ賢楚客稀。猿啼相送武陵歸。潮頭望入二桃花一去。一片春帆帶レ雨飛。

野人自愛山中宿。況是葛洪丹井西。庭前有二箇長松樹一。夜半子規來上啼。

破額山前碧

(一)玉帛賢を徵して(二)楚客稀なり。猿啼相送つて(三)武陵より歸る。(四)潮頭の望は桃花に入つて去り。一片の春帆雨を帶びて飛ぶ。

(一)天子禮を厚うし賢士を召す　(二)楚の人才、次第に少し　(三)武陵より都に歸る　(四)岸より望めば、春帆桃花に隱れ、雨中に去る

(一)（已前共に五首）

(一)第四句實事をいひ、前の三句に應ず

山中　　顧況

野人自ら愛す山中の宿。況んや是れ(一)葛洪丹井の西なるをや。庭前に箇の長松樹あり。夜半に(二)子規來り上つて啼く。

(一)昔の葛洪丹砂を煉りし井　(二)ほとゝぎす鳴く

(一)曹侍御象縣を過ぎて寄せらるゝに酬ゆ　　柳宗元

(二)破額山前碧玉の流。(三)騷人遙かに駐む木蘭舟。(四)春風限りなし瀟湘の意。(五)蘋花

鑰御收金鎖
合。月明花落
又黄昏。

溶溶漾漾白
鷗飛。緑淨春
深好染衣。南
去北來人自
老。夕陽長送
釣船歸。

離別河邊綰二
柳條。千山萬
水玉人遙。月
明記得相尋
處城鎖東風
十五橋。

㊀ 監宮（宮女を掌る老女）に牽ゐられ後宮を出づ　㊁ 天子に朝するも、寵恩すでに薄し　㊂ 歸りて門を鎖し、淋しく黄昏を送る。鑰（門の錠）

漢江（かんかう）

溶溶漾漾（ようようやうやう）(一)として白鷗（はくおう）飛び。緑淨（みどりきよ）く春深うして衣を染むべし(二)。南に去り北に來つて人自ら老ゆ(三)。夕陽長く送る釣船（てうせん）の歸るを。

㊀ 水盛ち動く貌　㊁ 衣を染むる程に青し　㊂ 釣船の歸るを見送り、生活の安らかなるを羨む

維楊（ゐやう）の故人（こじん）に寄す　張喬

離別（りべつ）河邊に柳條を綰（わが）ぬ。千山萬水玉人（ぎよくじん）遙（はる）かなり(一)。月明かにして記し得たり(二)相尋ぬる處。城は鎖（とざ）す東風の十五橋。

㊀ 一別の後、千山萬水を隔つ。南史に「謝晦・謝混、風流江左第一たり、宋の武帝曰ふ、一時に頓に兩玉人ありと」　㊁ 曾て君を尋ねし時、城門すでに鎖し、春風十五橋に吹く

友人の上都（じやうと）に之（ゆ）くに逢ふ　僧法振

多情。還到二春時一別恨生。倚レ杜尋思倍惆悵。一場春夢不二分明一。

莫レ怪頻過二有レ酒家一。多情長是惜二年華一。春風堪レ賞還堪レ恨。纔見二開花一又落花。

監宮引出暫開レ門。隨レ例須レ朝不二是恩一。銀

思すれば倍々惆悵す。(一)一場の春夢は分明ならず。

㊀ 風月の趣ゆたかなるも、君と遠く離るゝを悲しむ ㊁ 楽しき夢も、覚めての後は明かならず

(已前共に八首)(二)

㊀ 一二句、事の大抵を述べ、三句直ちに其事をあらはし、四句を喚び起す

南隣の花園に過ぎる　雍陶

怪むなかれ頻りに酒ある家に過ぎるを。多情長く是れ(一)年華を惜しむ。春風は賞するに堪へ還た恨むるに堪へたり。(二)纔かに開花を見てまた落花。

㊀ 春を惜しむ ㊁ 花を咲かせ、また花を散らす

宮詞　杜牧

(一)監宮引き出して暫く門を開く。(二)例に隨つて須らく朝すべきも是れ恩ならず。(三)銀鑰卻つて収めて金鎖合し。月明かに花落ちて又黄昏。

雪漲レ溪。

遠上二寒山一石徑斜。白雲生處有二人家一。停レ車坐愛楓林晚。霜葉紅二於二月花一。

大道本來無二所染一。白雲那得レ有二心期一。遠公獨刻蓮花漏。猶向二山中一禮二六時一。

酷憐風月爲

山行

遠く寒山に上れば石徑斜なり。(一) 白雲生ずる處に人家あり。車を停めて坐に愛す楓林の晚。霜葉は二月の花よりも紅なり。(二)

(一) 石のこみち　(二) 楓葉霜に染み、仲春の花より紅し

山僧に寄す　張喬

大道は本來所染なし。(一) 白雲那ぞ心期あるを得ん。遠公獨り刻む蓮花漏、(二) 猶ほ山中に向つて六時を禮す。

(一) 佛道は、心に染著なきを貴ぶ、白雲の無心に去來する如し　(二) 君(慧遠に比す)は、蓮花漏(十二銅葉、蓮花形をなす漏器)を刻み、晝夜六時、たゞ山中に佛を拜す

人に寄す　張佖

酷だ(一) 憐む風月の爲に多情なるを。還た春時に到つて別恨生ず。柱に倚つて尋

目前。一身憔悴對レ花眠。黄金用盡教ニ歌舞。留ニ與他人一樂ニ少年一。

酒幔高樓一百家。宮前楊柳寺前花。內園分ニ得溫湯水一。二月中旬已進レ瓜。

松寺曾同ニ一鶴一棲。夜深臺殿月高低。何人爲倚ニ東樓柱一。正是千山

て歌舞を教へ。他人に留與して少年を樂しましむ。

㊀花（美妓）に對して眠るも、昔の如き樂しみなし　㊁黄金を用ひ、妓に歌舞を教へしも、今は他人に與へ、少年を樂しましむ

華清宮　　王建

(一)酒幔高樓一百家。宮前の楊柳寺前の花。(二)內園溫湯の水を分ち得て。二月中旬已に瓜を進む。

㊀多くの樓に酒宴の幕を帳り、花柳美し。風俗通に「尚書御史の止るところ、皆、寺といふ」　㊁內園に溫泉を引き、二月中旬に、すでに熟瓜を進めしむ

宣州開元寺　　杜牧

(一)松寺曾て一鶴と棲む。夜深けて臺殿月高低。(二)何人か爲に東樓の柱に倚らん。正に是れ千山雪溪に漲る。

㊀松淋しき開元寺に、曾て妓を携へて棲みき　㊁今は伴ふものなく、獨り千山の雪景を看る

漫漫雙袖龍鍾涙不乾。馬上相逢無紙筆。憑君傳語報平安。

官柳青青匹馬嘶。回風暮雨入銅鞮。佳期別有春山裏。應是人參五葉齊。

萬事傷心在

し。君に憑つて傳語す平安を報ぜよ。

○ 唐詩選に出づ

客の上黨に之くを送る　　韓翃

(一)官柳青青として匹馬嘶き。(二)回風暮雨銅鞮に入る。(三)佳期は別に春山の裏に在り。應に是れ人參五葉齊しかるべし。

(一) 官道の柳青く、馬いなゝく　(二) 風雨飄るゝ夕、銅鞮縣(潞州)に入る　(三) 春山に人參を採り、離情を養ふならん。本草に「人參、上黨に生ず、含んで走る者は喘がず」又圖經に「初め生じて小なる者は一莖兩葉、深く四椏を生じ、各五葉あり、狀、人に類す、兩莖土に入つて脚の如く、兩小莖下に垂れて手の如し、中に一身あり、首に五葉あり、人の髮あるに象る」又、「參葉は齊しきを得難し」

病中に妓を遣る　　司空曙

萬事心を傷むること目前に在り。(一)一身憔悴して花に對して眠る。(二)黄金用ひ盡し

花落江隄簇暖烟。雨餘草色遠相連。香輪莫輾青青破。留與遊人一醉眠。

曉紅輕拆露香新。獨立空山冷笑春。春意自知無主惜。恣風吹逐馬蹄塵。

故園東望路

花落ちて江隄暖烟簇り。雨餘の草色遠く相連る。(二)香輪青青を輾り破ることなかれ。(三)遊人に留與して一醉眠せしめん。

(一) 李綽歳時記に「上巳、宴を曲江に賜ふ、都人江頭に禊飲し、青草を踏む」 (二) 貴人の駕、青草をきしり去るなかれ (三) 遊人をとゞめ、緩かに醉眠せしめたし、

山路に花を見る　崔魯

曉紅輕く拆いて露香新なり。(一)獨り空山に立つて春を冷笑す。(二)春意自ら主の惜しむことなきを知つて。(三)恣に風吹いて逐ふ馬蹄の塵。

(一) 花淋しく、冷笑するに似たり (二) 來り看るものなきを知る (三) 隨意に風に散り、馬蹄の塵を逐ふ

(一)(已前共に六首)

(一) 第三句虛字(及ばず、憐むに似たり、敢てせず、亦是れ、輾るなかれ、自ら知る)を用ひ、前後の句を斡旋す

京に入る使に逢ふ　岑參

故園東に望めば路漫漫。雙袖龍鍾として涙乾かず。馬上に相逢うて紙筆な

色似レ憐歌舞地。年年先發館娃宮。

閑向二江邊一採二白蘋一。還隨二女伴一賽二江神一。衆中不二敢分明語一。暗擲二金錢卜二遠人一。

山上有レ山歸不レ得。湘江暮雨鷓鴣飛。蘼蕪亦是王孫草。莫下送二春香一入中客衣上。

(一) 水煙淋し　(二) 靈岩寺山の下、西施蘭を採る　(三) 西施の宮

江南意 (一)　于鵠

閑に江邊に向つて白蘋を採り。還た女伴に隨つて江神に賽す。(二)衆中に敢て分明に語らず。(三)暗に金錢を擲つて遠人を卜す。

(一) 樂府題　(二) 明かに春を語らず　(三) ひそかに金錢を拋ち、旅中の人の安否を卜ふ

閨情 (一)　孟遲

(二)山上山あり歸り得ず。湘江の暮雨に(三)鷓鴣飛ぶ。(四)蘼蕪も亦是れ王孫草ならば。(五)春香を送つて客衣に入るゝことなかれ。

(一) 旅中の夫を思ふ　(二) 家を出でてなほ歸らず。(山に山を重ね出の字となる)　(三) 鷓鴣淋しく飛ぶならん。(聲、行不得(行き得ず)と聞ゆ)　(四) 蘼蕪はまた當歸(まさに歸るべし)といふも、なほ春艸の一種なり　(五) 香を良人の衣に入れ、歸るを忘れしむるなかれ、楚辭に「王孫遊んで歸らず。春草生じて萋々たり」

曲江の春草 (一)　鄭谷

少難。沙中彈レ舌授二降龍一。五天到日應二頭白一。月落長安半夜鐘。

奉二帚平明一金殿開。且將二團扇一共徘徊。玉顏不レ及寒鴉色。猶帶二昭陽日影一來。

吳王舊國水烟空。香徑無レ人蘭葉紅。春

し。月は落つ長安半夜の鐘。

(一) 道遥く、艱難多からん。(長安西門より、天竺迦毘羅城まで十萬八千里) (二) 途上に經文を唱へ、毒龍を調伏すべし。(玄奘三藏、かつて梵語心經を念じ、流沙の龍に授く) (三) 五天竺(東西南北中)に到る日、頭髮白からん

長信秋詞(一)　王昌齡

帚(二)を平明に奉じて金殿開く。且(三)く團扇を將つて共に徘徊す。玉顏は及ばず寒鴉の色。猶ほ昭陽の日影を帶び來るに。

(一) 唐詩選の絶句、婕妤怨、西宮秋怨參照 (二) 婕妤の賦に「供養を東宮に奉じ、長信の末流に托す、洒掃を帷幄に供し、永く終死するを期となす」。平明(夜あけ) (三) また、團扇歌に「常に恐る秋節至り、涼飆炎熱を奪ふを、篋笥の中に棄捐せられて、恩情中道にして絶ゆ」

吳城の覽古　陳羽

吳王の舊國(一)水烟空しく。香徑(二)人なうして蘭葉紅なり。春色は憐むに似たり歌舞の地。年年先づ發く館娃宮(三)。

柳塘烟起日西斜。竹浦風回雁弄沙。煬帝春遊古城在。壞宮芳草滿二人家一。

隋宮　鮑溶

柳塘烟起つて日西に斜なり。竹浦風回つて雁沙を弄す。（一）煬帝の春遊古城在り。（二）壞宮の芳草人家に滿つ。（三）

（一）汴河の堤。（煬帝柳を植う）（二）長安より煬州まで、離宮五十餘所（三）宮殿壞れ、春草人家につゞき滿つ

玉樓傾側粉牆空。重疊青山遶二故宮一。武帝去來紅袖盡。野花黃蝶領二春風一。

綺紬宮（一）　王建

玉樓傾側して粉牆空し。（二）重疊たる青山故宮を遶る。（三）武帝去つてより紅袖盡き。野花黃蝶春風を領す。

（一）驪山の宮、玄宗嘗て行幸す（二）樓傾き、白壁崩る（三）玄宗崩じ、美人も死す

十萬里程多

三藏の西域に歸るを送る　李洞

十萬里程多少の難。（一）沙中舌を彈じて降龍に授く。（二）五天到る日應に頭白かるべ（三）

山處處行應ㇾ好。一月看ㇾ花到二幾峯一。

草暖沙長望二去舟一。微茫烟浪向二巴丘一。沅湘寂寂春歸盡。水綠蘋香人自愁。

柳短莎長溪水流。雨微烟暝立二溪頭一。寒鴉閃閃前山去。杜曲黃昏獨自愁。

㈠李渉の弟、嵩岳少室山に住み、少室山人と號す　㈡つゝじの花　㈢講筵を報ずる鐘　㈣春一ケ月の間

南荘春晩　　李羣玉

草暖かに沙長くして去舟を望めば。微茫たる烟浪巴丘に向ふ。沅湘寂寂として春歸り盡き。水綠に蘋香しうして人自ら愁へん。

㈠煙れる波に舟を泛べ、巴陵に向ふ　㈡春暮る　㈢かたばみも

長溪の秋思　　唐彥謙

柳短く莎長うして溪水流る。雨微かに烟暝うして溪頭に立つ。寒鴉閃閃として前山に去り。杜曲黃昏獨り自ら愁ふ。

㈠はますげ(水邊に生ず)　㈡ひらめき飛ぶ　㈢長安、韋曲につゞく

(已前共に五首)

㈠第三句、疊字(茫茫、寂寂、處處、閃閃)を用ふ

天書遠召滄浪客、幾度臨レ岐病未レ能。江海茫茫春欲レ遍。行人一騎發ニ金陵一。

天書遠く召す滄浪の客。(二)幾度か岐に臨んで病んで未だ能はず。(三)江海茫茫として春遍からんと欲す。(四)行人一騎金陵を發す。

(一)詔下り、遠く謫客（自らいふ）を召す　(二)幾度か旅程に上らんとし、病によりて果さず　(三)江海に春遍く、何また軽し　(四)金陵（建康府）を發し、都に歸る

張道士の山居に題す　秦系

盤石垂蘿只是家。回レ頭猶看五枝花。松間寂寂無ニ烟火一。應レ服朝來一片霞。

(一)盤石垂蘿只是れ家。頭を回して猶ほ看る五枝の花。(二)松間寂寂として烟火なし。(三)應に服すべし朝來一片の霞。

(一)石平かに、蘿（つた）垂る、處を家とし、仙花まさに咲く。山海經に「玉賢山の木、その花五衛」(二)物を煮るべき火氣もなく、霞のみを吸ふならん。列仙傳に「春は朝霞を食し、夏は沆瀣（つゆ）を食す」

(一)李渤に寄す　張籍

五渡溪頭躑躅紅、嵩陽寺裏講時鐘。春

五渡溪頭(二)躑躅紅なり。嵩陽寺裏(三)講時の鐘。春山處處行いて應に好かるべし。(四)一月花を看て幾峰にか到る。

故國無心渡二海潮一。老禪方丈倚二中條一。夜深雨絶松堂靜。一點山螢照二寂寥一。

月華星彩坐來收。嶽色江聲暗結レ愁。半夜燈前十年事。一時和レ雨到二心頭一。

日東の鑒禪師に贈る(一)　鄭谷

(二)故國無心にして海潮を渡り。(三)老禪の方丈中條に倚る。夜深け雨絶えて松堂靜かなり。一點の山螢寂寥を照す。

(一)日本の僧。(傳詳かならず)　(二)無心に國を去り、海を渡り來る　(三)中條山の禪室に住む

旅懷　杜荀鶴

(一)月華星彩坐來收り。嶽色江聲暗に愁を結ぶ。(二)半夜燈前十年の事。一時雨に和して心頭に到る。

(一)月も星も忽ち暗く、山水哀を催す　(二)多年辛苦の感、雨につれ、一時に胸に迫る

(已前共に七首)(一)

(一)第三句、天象時節(日晩、海暮、秋來、半夜等)をいふ

朱拾遺に別るゝに寄す　劉長卿

紫烟衣上繡二春雲一。清隱山書小篆文。明月在レ天將二鳳管一。夜深吹向二玉晨君一。

五柳先生本在レ山。偶然爲レ客落二人間一。秋來見レ月多二歸思一。自起開レ籠放二白鷴一。

楊鍊師に贈る（一）　鮑溶

（二）紫烟衣上に春雲を繡ふ。（三）清隱の山書小篆の文。（四）明月天に在り鳳管を將つて。夜深けて吹いて玉晨君に向ふ。

㊀唐六典に「道士行を修め、德高く思精しきものを鍊師といふ」㊁紫衣に春雲を繡ふ　㊂清隱書（九霄中宮にありといふ道書）は、小篆の文にて記せるならん　㊃月夜更闌けて後、鳳管（ふえ）を吹き、その神玉晨君（又玉宸君に作る）に獻ずるならん。律曆志に「黃帝、竹を解谷に取り、之を吹きて鳳鳴を聽く、雄鳴六、雌鳴また六」

孫明府の舊山を懷ふに和す（一）　雍陶

（二）五柳先生本山に在り。偶然客となつて人間に落つ。秋來月を見て歸思多し。（三）自ら起つて籠を開いて白鷴を放つ。

㊀縣令　㊁もと山中の人なるも、たまたま人間に來り住む。（五柳先生は陶淵明に比す）　㊂籠に畜しむ白鷴（雉に似て白く、尾長し）を見、放ちて山に歸らしむ

晩江南望二江
北一。寒鴉飛盡
水悠悠。

春城無三處不二
飛花一。寒食東
風御柳斜。日
暮漢宮傳二蠟
燭一。青烟散入
五侯家。

愁雲漠漠草
離離。太掖勾
陳處處疑。薄
暮毀垣春雨
裏。殘花猶發
萬年枝。

(一) 心友兩地に別れ、秋を悲しむ

寒食　　韓翃

春城處として飛花ならざるはなし。寒食東風御柳斜なり。日暮漢宮より蠟燭を傳ふれば。青烟は散じて入る五侯の家。

○唐詩選に出づ

(一)上陽宮　　竇庠

(二)愁雲漠漠として草離離たり。太掖勾陳處處に疑ふ。薄暮毀垣春雨の裏。(三)殘花猶ほ發く萬年の枝。

(一) 洛陽禁苑の東、洛水に臨み、長廊一里に亙る　(二) 風光荒涼として太掖池も勾陳宮も所在明かならず　(三) 冬青樹(もちのき)に、殘花淋しく開く、方勺伯宅編に「徽宗畫學を興し、嘗て諸生を試み、萬年地上太平雀を以て題となす、程に中るものなし、或人、密かに中貴人に扣く、答へて曰く、枝萬年は冬青樹なり、太平雀は頻伽鳥なりと」

問。阿對泉頭
一布衣。

水自潺湲日
自斜。盡無二雞
犬一有二鳴鵶一。千
村萬落如二寒
食一。不レ見二人烟一
空見レ花。

丹陽郭裏送二
行舟一。一別心
知兩地秋。日

を問はば、阿對泉頭の一布衣(無位無官の人)なりと答へよ

尤溪道中　韓偓

(一)水は自ら潺湲日は自ら斜なり。盡く雞犬なくして(二)鳴鵶あり。(三)千村萬落寒食の如し。(四)人烟を見ずして空しく花を見る。

(一)水清く流る　(二)鵶のみ鳴く　(三)多くの村落、寒食の節(春末、淸明前二日、人家火を禁じ、一切煮炙の食を用ひず)の如し　(四)炊煙上らず、花のみ淋しげに咲く

(巳前共に二十四首)

(一)

(一)第三句第四句を喚び起す

丹陽に韋參軍を送る　嚴維

丹陽郭裏に行舟を送る。(一)一別すれば心知兩地の秋。日暮れて江南より江北を望めば。寒鴉飛び盡して水悠悠。

朝冠蓋皆陵墓。十里宜春下苑花。

花飛蝶駭不(レ)愁(レ)人。水殿雲廊別置(レ)春。曉日靚粧千騎女。白櫻桃下紫綸巾。

六載抽(レ)毫侍(二)禁闈(一)可(レ)堪(二)衰病(一)決然歸。五陵年少如相

㈠ 西京雜記に「京城龍華寺の南に流水屈曲し、曲江といふ、秦の時に宜春苑となり、漢に樂遊苑となる」 ㈡ 杏花桃花、夕榮の雲より赤し ㈢ 樂遊廟（漢宣帝建つ）すでに廢れ、春のみ昔のまゝなり ㈣ 漢代の貴人皆沒し、宜春下苑の花のみ開く

㈠鄴宮　　陸龜蒙

花飛び蝶駭いて人を愁へしめず。㈡水殿雲廊別に春を置く。㈢曉日靚粧す千騎の女。白櫻桃下の紫綸巾。

㈠ 趙の石季龍の奢侈を詠ず ㈡ 花飛び盡すも宮中には不斷の春あり ㈢ 曉粧せる美人千騎、曉に紫綸巾を著け、白櫻桃の樹下にあり

閿鄉に居を卜す　　吳融

㈠六載毫を抽いて禁闈に侍す。㈡衰病に堪ふべけんや決然として歸る。㈢五陵の年少如し相問はば。阿對泉頭の一布衣。

㈠ 文筆を持し、禁中に仕ふること六年 ㈡ 病に堪へず、官を辭して歸る ㈢ 五陵（長安）の少年もし余が消息

天寶年中事二玉皇一。曾將二新曲一教二寧王一。鈿蟬金雁皆零落。一曲伊州淚萬行。

欲レ寫二愁腸一愧二不才一。多情練漉已低摧。窮郊二月初離別。獨倚二寒村一嗅二野梅一。

杏豔桃嬌奪二晩霞一。樂遊無レ廟有二年華一。漢

(二)天寶年中玉皇に事へ。(三)曾て新曲を將つて寧王に敎ふ。(四)鈿蟬金雁皆零落し。(五)一曲の伊州に淚萬行。

一 十三絃の箏、瑟に似て短し　二 玄宗皇帝に事ふ　三 玄宗皇帝の兄　四 鈿蟬(箏のかざり)金雁(箏のかざり)散り失せ、長き年月を經　五 伊州(箏曲の名)を唱ふるを聞き、昔を思ひて淚流る

韋曲(一)

唐彥謙

愁腸を寫さんと欲するも不才を愧づ。(二)多情練漉して已に低摧す。(三)窮郊二月初て離別し。獨寒村に倚つて野梅を嗅ぐ。

一 漢の未央殿のあと、唐代に繁華を極め、後村落となる　二 練(ねりぎぬ)の水を漉さざる如く、心いたづらに傷む　三 韋曲を離れんとし、獨り梅花をかざして悲しむ。(王羲之、晉の梅を愛へ、終日、花を摘り、香を嗅ぐ)

曲江春望(一)

杏豔桃嬌晩霞を奪ふ。(二)樂遊廟なくして年華有り。(三)漢朝の冠蓋は皆陵墓。十里の宜春下苑の花。

院燒レ燈如二白
日一。沈香火底
坐吹レ笙。

銀燭秋光冷二
畫屏一。輕羅小
扇撲二流螢一。玉
階夜色涼如レ
水。臥看牽牛
織女星。

澧水橋西小
路斜。日高猶
未レ到二君家一。村
園門巷多相
似。處處春風
枳殼花。

勢比二凌敲宋

㊀ 金吾の官、除夜に、追儺（をにやらひ、禁中の惡鬼を祓ふ）に出づるもの〻名を奏す ㊁ 追儺の童子、赤き衣袴を著け、四隊に分れて宮中をめぐる ㊂ 美人沈香を焚き、笙を吹きて坐す

銀燭秋光畫屛冷かなり。㊀輕羅の小扇流螢を撲つ。玉階の夜色涼しうして水の如し。㊁臥して看る牽牛織女の星。

㊀ 美人、うすぎぬの團扇を持ち、さ迷ひ來る螢を撲つ ㊁ 牽牛織女の二星を眺め、君寵の衰へしを悲しむ

城西に友人の別墅を訪ふ　雍陶

澧水橋西小路斜なり。日高うして猶ほ未だ君が家に到らず。㊀村園門巷多くは相似たり。㊁處處の春風枳殼の花。

㊀ 家々の趣、よく似たり ㊁ 春風吹き、枳殼（からたち）の花咲く

貴池縣の亭子　杜牧

㊀勢は凌敲宋武の臺に比し。分明に百里遠帆開く。㊁蜀江の雪浪西江に滿ち。强

漸稀。斷猿今夕讓レ沾レ衣。雲埋ニ老樹一空山裏。彷ニ彿千聲一一度飛。

を埋む空山の裏。(四)千聲に彷彿として一度飛ぶ。

(一) ほとゝぎす。華陽風俗記に「春到れば則ち鳴き、聞くもの別離の苦あり」 (二) 楚地の春暮れ、鳴くこと次第に少し (三) 聲、猿よりも愁し。(梁の簡文帝の語「巴東三峡長く、猿鳴く三聲、涙、裳を沾す」) (四) 山谷に反響し、一聲も千聲に聞ゆ

長慶春(一)　徐凝

山頭水色薄籠レ烟。遠客新愁長慶年。身上五勞仍病レ酒。夭桃窗下背レ花眠。

山頭の水色薄く烟を籠む。遠客新に愁ふ長慶の年。(二)身上の五勞仍ほ酒を病み。(三)夭桃窗下に花に背いて眠る。

(一) 穆宗の年號 (二) 愁のために五臟を勞らし、また酒のために健康を害す (三) 桃咲く窓に、花をも看ずして眠る

宮詞 二首　王建

金吾除夜進ニ儺名一。畫袴朱衣四隊行。院

(一)金吾除夜儺名を進め。(二)畫袴朱衣四隊行る。院院燈を焼いて白日の如し。(三)沈香火底に坐して笙を吹く。

風二月淮陰郡。惟見棠梨一樹花。

十二峰頭月欲レ低。空舲灘上子規啼。孤舟一夜東歸客。泣向二春風一憶二建溪一。

楚塞餘春聽

(一) 官位昇り若耶(越の地)に向ふ。(後漢の郭賀、荊州の刺史たる時、百姓歌ひて曰ふ、厥の徳仁明郭喬卿と、帝三公の服を賜ひ、賀をして襜(とばり)を去り冕(かむり)を露はし、百姓をして見しめて以て有徳を彰す)、又、續會記に「太守常に春を以て縣をめぐり、農桑を勸課し、絶乏を賑救す」 (二) 楚の民、徳を慕ひ、家を移して從はんとす (三) 棠梨(りんご)の花咲き、長く盛徳を思はしむ。陸機草木疏に「昔、召公訟を棠樹の下に聽く、民その徳を思ひ、その樹を伐らず」

竹枝詞(一)　李渉

(二)十二峰頭月低れんと欲し。(三)空舲灘上に子規啼く。孤舟一夜東歸の客。泣いて春風に向つて建溪(四)を憶ふ。

(一) 地方の風俗を歌ふ詞 (二) 夔州巫山縣の山 (三) 歸州三峽の灘 (四) 建寧府の川、武夷山より出づ。(李渉謫居の地)

香山館に子規を聽く(一)　竇常

(二)楚塞の餘春に聽くこと漸く稀なり。(三)斷猿今夕衣を沾すことを讓る。雲は老樹

盧橘花開楓葉衰。出レ門何處望二京師一。沅湘日夜東流去。不下爲二愁人一住上少時。

舊事仙人白兎公。掉レ風歸去又乘レ風。柴門流水依然在。一路寒山萬木中。

露レ冕行レ春向二若耶一。野人懷レ惠欲レ移レ家。東

(一)盧橘花開いて楓葉衰ふ。門を出でて何の處にか京師を望まん。(二)沅湘は日夜東流し去つて。愁人のために住ること少時もせず。

㊀ 大さ柑の如く、酢あり、夏熟す　㊁ 沅湘の水、日夜、東(都の方向)に流れ、人を愁へしむ

齊山人を送る　韓翃

(一)舊事ふ仙人の白兎公。(二)頭を掉つて歸り去つて又風に乘ず。(三)柴門流水依然として在り。一路寒山萬木の中。

㊀ もと仙人白兎公(赤松子の師、常に白兎に乘り、人間に往來す)に從ふ　㊁ 再び人間を去り、風に乘りて山に歸る　㊂ 幽居昔のまゝにあり、山中に一路を通ず

元史君楚より越に移るを送る　劉商

(一)冕を露し春に行つて若耶に向ふ。(二)野人惠に懷いて家を移さんと欲す。東風二月淮陰郡。(三)惟見る棠梨一樹の花。

頭箕踞長松下。白眼看他世上人。

月落烏啼霜滿レ天。江楓漁火對ニ愁眠一。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到ニ客船一。

日日河邊見ニ水流一。傷レ春未レ已復悲レ秋。山中舊宅無ニ人住一。來ニ往風塵一共白頭。

○唐詩選に出づ

楓橋夜泊　　張繼

月落ち烏啼いて霜天に滿ち。江楓漁火愁眠に對す。姑蘇城外の寒山寺。夜半の鐘聲は客船に到る。

○ 唐詩選に出づ

殷亮に贈る　　戴叔倫

日日河邊に水の流るゝを見る。(一)春を傷むこと未だ已まずして復た秋を悲しむ。山中の舊宅は人の住するなし。(二)風塵に來往して共に白頭。

(一) 光陰流水の如し　(二) 共に塵世に老ゆ

湘南の即事

朝四百八十寺。多少樓臺烟雨中

故園今在灞陵西。江畔逢君醉不迷。小弟鄰莊尙漁獵。一封書寄數行啼。

綠樹重陰蓋四鄰。靑苔日厚自無塵。科

㊀ 六朝（江南建業に都す）の寺寺　㊁ 多くの樓臺、烟雨の中に見ゆ

（已前共に三首）

㊀ 第三句、數字（二十五絃、十二街、四百八十寺）を用ふ

李浦京に之くに別る　王昌齡

故園今灞陵の西に在り。(二)江畔君に逢うて醉へども迷はず。(三)小弟は鄰莊に尙ほ漁獵せん。(四)一封の書は寄す數行の啼。

㊀ 長安の東七十里、漢文帝の陵　㊁ 醉へども愁を忘れ難し　㊂ 弟は漁獵に耽り、放逸に暮すならん　㊃ 一書を託す、中には數行の涙を含めり

崔處士の林亭に題す　王維

綠樹の重陰四鄰を蓋ふ。靑苔日に厚うして自ら塵なし。科頭にして箕踞す長松の下。白眼にして看る他の世上の人。

瀟湘何事等閑回。水碧沙明兩岸苔。二十五絃彈二夜月一。不レ勝二清怨一却飛來。

僧房逢著欵冬花。出レ寺吟行日已斜。十二街中春雪遍。馬蹄今去入二誰家一。

千里鶯啼綠映レ紅。水村山郭酒旗風。南

瀟湘より何事ぞ等閑に回る。水碧に沙明かなり兩岸の苔。二十五絃夜月に彈ぜば。清怨に勝へずして却つて飛び來らん。

○唐詩選に出づ

賈島に逢ふ　張籍

(一)僧房逢著す欵冬花。寺を出でて吟行すれば日已に斜なり。(二)十二街中春雪遍し。(三)馬蹄今去つて誰が家にか入らん。

(一)寺にて逢ひ、つはぶきの花咲く　(二)春の雪、街に積む。鮑昭の詩に「京城十二街」　(三)馬を進め、遊ぶべき家もなし

江南春　杜牧

千里鶯啼いて綠紅に映ず。水村山郭酒旗の風。(一)南朝四百八十寺。(二)多少の樓臺烟雨の中。

金殿當頭紫閣重。僊人掌上玉芙蓉。太平天子朝元日。五色雲車駕二六龍一。

自是三千第一名。內家叢裏獨分明。芙蓉殿上中元日。水拍二銀盤一弄二化生一。

(一)金殿當頭紫閣重なる。(二)僊人掌上の玉芙蓉。(三)太平の天子朝元の日。(四)五色の雲車六龍に駕す。

㊀ 宮殿重なり、紫閣(老子を祀る)高く聳ゆ ㊁ 金仙人の掌に承露盤を置く ㊂ 天子玄元皇帝に朝する日 ㊃ 雲氣を畫ける車に乘り、六頭の駿馬に牽かしむ。郊祀志に「文成言ふ、上、神に通ぜんと欲せば、宮室被服、神に象るにあらざれば神至らずと、乃ち雲氣を畫ける車を作り、甲丙戊庚壬の日、各々その色を以て之に駕す」

呉姬　薛能

(一)自ら是れ三千第一の名。(二)內家叢裏に獨り分明。(三)芙蓉殿上中元の日。水は銀盤を拍つて化生を弄す。

㊀ 宮中第一と、せられ、容色衆に勝る。崔令欽敎坊記に「妓女、宜春院に入るもの、之を內人といひ、その家、敎坊にあるもの、之を內家人といふ」 ㊁ 中元の日、化生戲をなし、帝寵の深さを誇る。歲時記事に「七夕、俗に蠟を以て嬰兒の形を作り、水中に浮べて以て戲となし、婦人、子に宜しきの祥と爲す、之を化生といふ」

(已前共に三首)(一)

㊀ 第三の句相類し、且つ宮中の事をいふ

歸雁　錢起

行盡江南數十程。曉風殘月入二華清一。朝元閣上西風急。都入二長楊一作二雨聲一。

三體詩　卷之一

七言絶句

實接（第三句に實事實を述べ、前後に接續せしむる格）

(一)華清宮　　杜常

(二)行盡す江南の數十程。曉風殘月華清に入る。(三)朝元閣上西風急なり。(四)都て長楊に入つて雨聲と作る。

㊀驪山溫泉宮、玄宗の天寶六年改めて華清宮と名づく。明皇雜錄に「毎年冬十月こゝに行幸し、明年春に至つて宮闕に還る、去郎(歸るも來るも)貴妃と輦を同じうす」㊁江南の長途を行き盡し、曉に華清宮に入る ㊂玄元皇帝(老子)を祀れる殿閣 ㊃西風急に長楊樹(やなぎ)に入り、雨の如く鳴る

宮詞　　王建

虎溪閑月引相過。帶レ雪松枝掛二薜蘿一。無レ限青山行欲レ盡。白雲深處老僧多。

(一)虎溪の閑月引いて相過ぐ。(二)雪を帶ぶる松枝薜蘿を掛く。(三)限なき青山は行く〻盡きんと欲す。(四)白雲深き處に老僧多し。

(一) 虎溪を照すしづかなる月に引かれ、この山中に來る。廬山記に「廬山東林三門の内に溪あり、虎溪と名づく、昔の慧遠、廬山に住し、人を送るも虎溪を過ぎず、嘗て陶淵明陸修靜を送りて覺えず之を過ぎ、三人相顧みて笑ふ、世に之を虎溪の三笑と稱す」 (二) 雪つもる松の枝に薜蘿(つたかづら)掛れり (三) 限りなき青山の路も、今すでに行き盡さんとす (四) 白雲深き處に僧院あり、高德の老僧多く住めり

唐詩選 終

秋染ニ棠梨一葉半紅。荊州東望草平レ空。誰知孤官天涯意。微雨瀟瀟古驛中。

寒塞無レ因レ見ニ落梅一。胡人吹入ニ笛聲一來。勞勞亭上春應レ度。夜夜城南戰未レ回。

疎陵驛に宿す　王周

秋は棠梨(一)を染めて葉半ば紅なり。(二)荊州東に望めば草空に平かなり。誰か知らん孤官天涯の意。(三)微雨瀟瀟たり古驛の中。

㊀ りんご　㊁ 東方荊州を望めば、草茫々として空に接す　㊂ 微雨瀟瀟として疎陵驛にそゝぎ、凄涼の情に堪へず

塞下曲　釋皓然

(一)寒塞落梅を見るに因なし。胡人吹いて笛聲に入れ來る。(二)勞勞亭上春應に度るべし。(三)夜夜城南に戰つて未だ回らず。

㊀ 塞地寒く、梅花の落つるを見難しと聞けるに、胡人は之を笛曲に入れて吹き來る。(落梅花の曲)　㊁ 輿地志に「秣陵縣の新亭、勞勞亭と名づく、行人分袂の處」　㊂ 夜々邊城の南に戰ひ、故郷に歸るを得ず

僧院　釋靈一

一年始有二一年春一。百歳曾無二百歳人一。能向二花前一幾回醉。十千沽レ酒莫レ辭レ貧。

一月主人笑幾回。相逢相値且銜レ杯。眼看春色如二流水一。今日殘花昨日開。

城東の莊に宴す　崔敏童

(一)一年始めて一年の春有り。百歳曾て百歳の人なし。(二)能く花前に向つて幾回か醉はん。十千酒を沽つて貧を辭することなかれ。

(一)年々に春は有れどもよく百歳の春を迎ふる人はなし　(二)花前に醉ふことよく幾回ぞ、一斗十千錢の美酒を買ひ、家の貧しきことを云ふなかれ

同前に和し奉る　崔惠童

(一)一月主人笑ふこと幾回ぞ。相逢ひ相値うて且く杯を銜む。(二)眼に看る春色の流るる水の如きを。今月の殘花は昨日開けり。

(一)前題の詩に和す　(二)莊子に「人、病瘦死喪憂患を除きては、その中、口を開いて笑ふもの一月の中四五日に過ぎざるのみ」　(三)春は水の流れ去る如く、今日の殘花は昨日始めて美しく開きしものなり、光陰の移り易きこと此の如し、生前よろしく觀樂すべし

八月霜飛柳遍黃。蓬根吹斷雁南翔。隴頭流水關山月。泣上二龍堆一望二故鄉一。

朔風吹レ雪透二刀瘢一。飲レ馬長城窟更寒。夜半火來知レ有レ敵。一時齊保賀蘭山。

李秀才が邊庭の四時怨に和す　　盧弼

八月霜飛んで柳遍く黃に。蓬根吹き斷えて雁南に翔る。(一)隴頭の流水關山の月。(二)泣いて龍堆に上つて故鄉を望む。

(一) 隴頭の流水を見、關山の月を眺む。三秦記に「隴堆は天水郡に在り、上に水ありて四方に注下せり、隴頭水と名づく」(二) 更に白龍堆に上り、故鄉を望みて悲しむ

又

(一)朔風雪を吹いて刀瘢に透る。(二)馬に飲へば長城の窟更に寒し。夜半火來つて敵あるを知り。(三)一時齊しく保つ賀蘭山。

(一) 北風雪を吹き戰士の刀瘢(刀きず)にしみ入る (二) 水經注に「長城の下に往々泉窟あり、馬に飲ふべし、之を問へば、皆秦の築城の卒、水を取りし處なりと、冬深くその寒冽を益す」(三) 夜來、烽火(のろし)あがりて敵軍の襲來を報じ、全軍一時に賀蘭山の要害を守る。陘陽圖記に「賀蘭山は縣西九十三里にあり、今の寧夏衛の地、山草白きもの多く、遙かに望めば、靑白駁(まだら)する如し、北人駁を呼んで賀蘭となす」

花落時。

秋葉風吹黃颯颯。晴雲日照白鱗鱗。歸來得ㇾ問二茱萸女一。今日登高醉二幾人一。

西施昔日浣紗津。石上青苔思二殺人一。一去二姑蘇一不二復返一。岸傍桃李爲ㇾ誰春。

九日の宴　張諤

秋葉風吹いて黃颯颯。(一)晴雲日照して白鱗鱗。(二)歸來茱萸の女に問ふを得たり。今日登高幾人をか醉はしめしと。

(一) 白雲魚鱗の如し　(二) 宴より歸り、茱萸を頭に插む女に問ふ、今日佳節の登高に幾人か快く醉ひたるやと。(己の快からざる意)

西施石　樓穎

西施昔日浣紗の津。(一)石上の青苔人を思殺せしむ。(二)一たび姑蘇に去つて(三)復た返らず。岸傍の桃李は誰が爲にか春なる。

(一) 孔臯會稽記に「土城山邊に石あり、云ふ是れ西施紗を浣ぐ石なり」と、又、楊升菴文集に「此れ砧(きぬた)となし、以て紗を浣ふものなり」と。(西施の事は前に註す)　(二) 浣紗石に苔蒸し、人をして昔日を思はしむ　(三) 吳王夫差の宮殿

草城中春不レ入。黄花戍上雁長飛。

孤城夕對ニ戍樓一開。迴合青冥萬仞山。明鏡不レ須生ニ白髮一。風沙自解老ニ紅顏一。

五原春色舊來遲。二月垂楊未レ掛レ絲。即今河畔氷開日。正是長安

㊀少年の紅顏、胡地金微山の征戍に老ゆ　㊁多年甲冑して沙漠に臥す　㊂白草城に春來らず、黄花戍上に雁長く飛ぶ。（氣候の寒きこと）

又

(一)孤城夕に戍樓に對して閒なり。(二)迴合す青冥萬仞の山。(三)明鏡須ひず白髮を生ずるを。風沙自ら解く紅顏を老いしむるを。

㊀孤城、戍樓に對し、夕景甚だ淋し　㊁青空を凌ぐ高山、四面をめぐる　㊂白髮生ずるはいふまでもなく、風沙を吹き卷き、容易に紅顏の少年を老いしむ

邊詞　張敬忠

(一)五原の春色舊來遲く。二月垂楊未だ絲を掛けず。(二)即今河畔冰開く日。正に是れ長安花落つる時。

㊀北地五原塞には、春の來ること昔より遲し　㊁この地にて河畔の氷解くる日は、長安にて花の落つる頃なり

報習家多置
酒夜來風雪
過レ江寒。

月明星稀霜
滿レ野。氈車夜
宿陰山下。漢
家自レ失二李將
軍一。單于公然
來牧レ馬。

紅顏歲歲老二
金微一。沙磧年
年臥二鐵衣一。白

(一)隴西嶓冢上に出で襄陽東南の大別山に至りて揚子江に入る　(二)峴山には昔の羊祜の墮涙碑あり、その人すでに去り、歲また暮れんとす　(三)峴山の南、習家池は、往時晉名士の宴遊せしところと聞く、余も亦一醉し、江上夜來の寒氣を消したし。晉書に「山簡襄陽を領し、たゞ酒にこれ耽る、習氏の園池あり、簡これ園池に出でて遨遊する毎に、多く池上に之き、酒を置いて輒ち醉ふ」

胡笳曲

月明かに星稀にして霜野に滿つ。(一)氈車夜宿す陰山の下。(二)漢家李將軍を失ひしより。單于公然來つて馬を牧す。

(一)氈を帷(とばり)とする胡兵の車　(二)李將軍の如き雄將を失ひしより、單于の兵公然と我が領土に來り、馬を牧して憚る色なし

塞上曲二首

王烈

(一)紅顏歲歲金微に老い。(二)沙磧年年鐵衣に臥す。(三)白草城中に春入らず。黃花戍上に雁長に飛ぶ。

水河邊青艸合。黑山峯外陣雲開。

無定河邊暮笛聲。赫連臺畔旅人情。函關歸路千餘里。一夕秋風白髮生。

襄陽好向峴亭看。人物蕭條屬歲闌。爲

㊀ 樂苑に「蓋し嘉運の製する所、雙帶子、[illegible]羅縫、水鼓子と皆絶句、邊戍行旅の懷を述ぶ」 ㊁ 雕弓（赤、青に塗りたる弓）と白羽の矢 ㊂ 夕暮には牛羊また下り來り、胡兵の動滅し難きに似たり ㊃ 蓼水の邊には秋草茂り、黑山の外に陣雲晴れ、征戍は長く撤し難し

雜詩　　陳祐

（一）無定河邊暮笛の聲。（二）赫連臺畔旅人の情。（三）函關の歸路千餘里。一夕秋風に白髮生ず。

㊀ 延安府にあり、沙潰れ、流急に、深淺定らず、故に名づく ㊁ 晉時、夏主赫連勃々の臺 ㊂ 函谷關の歸路遠く、一夕の秋風に、愁しみ極つて白髮生ず

初めて漢江（一）を過ぐ　　無名氏

襄陽好し峴亭に向つて看るに。（二）人物蕭條として歲闌に屬す。（三）爲に報ず習家多く置酒すと。夜來風雪江を過ぎて寒し。

荒西。隴上明星高復低。孤山幾處看二烽火一。戰士連レ營候二鼓鼙一。

朔風吹レ葉雁門秋。萬里烟塵昏二戍樓一。征馬長思青海上。胡笳夜聽隴山頭。

雕弓白羽獵初回。薄夜牛羊復下來。夢

士營を連ねて鼓鼙を候ふ。

㊀ 唐詩品彙に「唐曲水調歌凡そ十一疊、一首を以て一疊となす、前五疊を歌となし、後六疊を入破となす」㊁ 沙漠の夕日、果しも知れぬ西に沈み、隴山には、明星の影高くまた低し ㊂ 孤山邊に烽火（のろし）幾處もあがり、將士陣營を連ねて鼓鼙の鳴るを待つ。（鼙は馬上の鼓、進軍の合）

涼州歌第二疊

（一）朔風葉を吹く雁門の秋。萬里の烟塵戍樓に昏し。（二）征馬長く思ふ青海の上。胡笳夜聽く隴山の頭。

㊀ 開天傳信記に「涼州より之を言へば、東北は雁門、西北は青海、西南は隴山、各地みな營あり」㊁ 征馬に跨り、長く故郷を思ふ

水鼓子第一曲（一）

（二）雕弓白羽獵して初めて回れば。（三）薄夜牛羊復た下り來る。（四）夢水河邊青艸合し。黑山峯外陣雲開く。

晴烟漠漠柳
毿毿。不ㇾ那二離
情一酒半酣。更
把二玉鞭一雲外
指。斷ㇾ腸春色
在二江南一。

（一）晴烟漠漠柳毿毿。（二）離情を那ともせず酒半ば酣なり。（三）更に玉鞭を把つて雲外に指す。（四）腸を斷つ春色江南に在り。

㊀晴烟淡く罩め、柳絲亂れ動く　㊁宴、半ばを過ぎ、別離の情に堪へず　㊂良人馬に鞭ち遠く去る　㊃妾は江南に留り、春景を望み、斷腸の思をなす

宮詞　　李建勳

宮門長閉舞
衣閒。略識君
王鬢已斑。卻
羨落花春不ㇾ
管。御溝流得
到二人間一。

（一）宮門長く閉ぢて舞衣閒なり。（二）略識る君王鬢已に斑なるを。（三）卻つて羨む落花は春管せず。御溝に流れ得て人間に到るを。

㊀行幸なく、宮門長く閉し、舞衣を著ること稀なり　㊁君王も年すでに老い、白髪まだらに在すべし　㊂宮中に一生を送るを悲しみ、御溝の落花自由に人間に流れ出づるを羨む

（一）水調歌第一疊　　張子容

平沙落日大

（一）平沙落日大荒の西。（二）隴上の明星高く復た低し。（三）孤山幾處か烽火を看る。戰

塞上聲。

紫宸朝罷綴二鵷鸞一。丹鳳樓前駐レ馬看。唯有二終南山色在一。清明依レ舊滿二長安一。

草遮二回磴一絶二鳴鑾一。雲樹深深碧殿寒。明月自來還自去。更無三人倚二玉欄干一。

朝より退き終南山を望む(一)　李拯

(二)紫宸朝罷んで鵷鸞を綴り。丹鳳樓前馬を駐めて看る。(三)唯終南山色の在るありて。清明舊に依つて長安に滿つ。

㊀ 僖宗の朝、長安再び亂れ、舊時の盛觀なきを悲しむ　㊁ 百官列を正して退朝する途に、馬を丹鳳樓（大明宮南端の門）の前にとゞめ、附近の景を看る　㊂ 長安の春景舊時に似たるものは、たゞ終南山の翠色あるのみ

華清宮　崔魯

草は回磴(一)を遮つて鳴鑾(二)絶え。雲樹深深として碧殿寒し。(三)明月は自ら來り還た自ら去る。更に人の玉欄干に倚るなし

㊀ 石を敷きたる阪路　㊁ 御車の鈴　㊂ たゞ明月去來し凄涼の景を照すのみ、今は玉欄干に倚る人なし。（玄宗楊貴妃をいふ）

古別離　韋莊

輦不レ來春欲レ盡。空留二鶯語一到二黃昏一。

柳色參差掩二畫樓一。曉鶯啼送滿宮愁。年年花落無二人見一。空逐二春泉一出二御溝一。

一曲涼州金石淸。邊風蕭颯動二江城一。坐中有下老二沙場一客上。橫笛休レ吹

㊀曲名　㊁漢の陳皇后の居　㊂嫩綠雨露に霑ひし如く、美人寵幸を受けたり　㊃今は天子の行幸なく、永き日の暮るゝまで、たゞ鶯の啼くを聞くのみ

宮怨　　司馬禮

柳色參差として畫樓を掩ふ。㊀曉鶯啼き送る滿宮の愁。㊁年年花落ちて人の見るなし。空しく春泉を逐うて御溝を出づ。㊂

㊀長短入り交りたる貌　㊁曉鶯の聲に宮中の美人皆愁を催す　㊂落花流水に隨ひ、御溝を出でて人間に到り、美人は一生を宮中に老ゆ

邊將を宴す　　張喬

一曲の涼州金石淸し。㊀邊風蕭颯として江城を動かす。坐中沙場に老いたる客あり。㊁横笛吹くことを休めよ塞上の聲。

㊀涼州曲に和し、金石(鐘と磬)の聲淸し　㊁席上に沙場征戰の老將あり、笛を吹いて塞上の曲を奏し、深く愁傷せしむるなかれ

似去年。

館娃宮外鄴城西。遠映征帆近拂堤。繫得王孫歸意切。不關春艸綠萋萋。

枝枝交影鎖長門。嫩色曾霑雨露恩。鳳

に越、方に關を出でゝ横水驛に相過ふ、姬因つて痛哭し、信宿して卒し、遂に横水の陽に葬る、この詩は蓋し鄉に歸り樓に上つて作れるならん」と ㊀ 愁思極りなし ㊁ 風景のみ前年のまゝなり

楊柳枝　　温庭筠

(一)館娃宮外(二)鄴城の西。(三)遠きは征帆に映じ近きは堤を拂ふ。(四)王孫歸意の切なるを繫ぎ得て。關らず春艸の綠萋萋たるに。

㊀ 呉王夫差の宮 ㊁ 魏の武帝の都 ㊂ 楊柳の綠、征帆に映じ、また堤を拂ふ ㊃ たゞ芳草の萋々たるのみならず、楊柳の綠も、また王孫の歸意を繫ぎ留め、長くこゝに遊ばしむ。楚辭に「王孫遊んで歸らず、春草生じて萋萋たり」

(一)折楊柳　　段成式

枝枝影を交へて(二)長門を鎖す。(三)嫩色曾て霑ふ雨露の恩。(四)鳳輦來らず春盡きんと欲し。空しく鶯語を留めて黃昏に到る。

琪樹西風枕簟秋。楚雲湘水憶ニ同遊一。高歌一曲掩ニ明鏡一。昨日少年今白頭。

獨上ニ江樓一思渺然。月光如レ水水連レ天。同來翫レ月人何處。風景依稀

園の令たり、既にして病み、茂陵に家居し、渇を患ひて卒す）

秋思　許渾

（一）琪樹の西風枕簟の秋。楚雲湘水同遊を憶ふ。（二）高歌一曲明鏡を掩ふ。昨日は少年今は白頭。

㊀ 美しき庭樹に西風吹き入り、枕簟（たかむしろ）に秋を生ぜり ㊁ 一曲の高歌を唱へ鏡を掩ひて見ず、昨日の少年は、今すでに白髪の翁となれり

（一）江樓に感を書す　趙嘏

獨江樓に上つて思（二）渺然。月光水の如く水天に連なる。同じく來つて月を翫ぶ人何の處ぞ。（三）風景依稀として去年に似たり。

㊀ 才子傳に「趙、浙江に家す、美姫あり、計を偕にし京に入るに及び、留めて母に侍せしむ、中元鶴林寺に遊ぶに會ひ、浙帥に奪ひ歸らる、明年、趙、及第し自ら傷みて詩を賦せり、帥之を聞いて姬を送りて長安に入らしむ、時

君問二歸期一未レ有レ期。巴山夜雨漲二秋池一。何當下共翦二西窗燭一。卻話中巴山夜雨時上。

嵩雲秦樹久離居。雙鯉迢迢一紙書。休レ問梁園舊賓客。茂陵秋雨病相如。

夜雨北に寄す（一）

（二）君は歸期を問へども未だ期あらず。巴山の夜雨秋池に漲る。（三）何か當に共に西窗の燭を翦つて。卻つて巴山夜雨の時を話すべき。

㊀ 客中、北地長安にある内人に贈る ㊁ 内人書を寄せて歸期を問ふも、余が歸期はなほ豫め定め難し ㊂ 何時かは家に歸り、共に西窗の燭を剪りつゝ、巴山の夜雨、孤客を愁へしめし今夜の情懷を語らん

令狐郎中に寄す（一）

（二）嵩雲秦樹久しく離居す。雙鯉迢迢たり一紙の書。（三）問ふことを休めよ梁園舊賓客。茂陵の秋雨病相如。

㊀ 令狐楚の子綯。商隱始め令狐楚の信任を受け、その卒するに及び、また王茂元の從事となる、綯因つて深く之を惡む ㊁ 河陽嵩嶽の地と、秦地長安の都とに離居し、一紙の書信すら容易に通じ難し。古詩に「客遠方より來り、我に雙鯉魚を遺る。童を呼んで鯉を烹れば、中に尺素の書あり。」迢々（路遙かなる貌） ㊂ 余が今日の窮境は茂陵の司馬相如に似たり、幸に憐みを垂れ給へ。（相如、梁に遊んで孝王の賓客となり、後、漢武の世に事へて孝文

趙女乘レ春上ニ畫樓ニ。一聲歌發滿城秋。無レ端更唱關山曲。不ニ是征人ー亦淚流。

青雀西飛竟未レ回。君王長在ニ集靈臺ニ。侍臣最有ニ相如渴ニ。不レ賜金莖露一杯。

趙女(二)春に乘じて畫樓に上る。一聲歌發す滿城の秋。(三)端なく更に唱ふ關山の曲。是れ征人ならざるも亦淚流る。

㊀ 樂府題 ㊁ 美しく春に乘じて畫樓に上り、哀歌一聲城中秋の如く愁し ㊂ 更に關山征戍の曲を唱へ、征人ならざるも皆淚を垂る

漢宮詞(一)　李商隱

(二)青雀西に飛んで竟に未だ回らず。(三)君王長に集靈臺に在り。(四)侍臣最も相如の渴あり。(五)賜はず金莖の露一杯。

㊀ 漢宮のことに擬して當時の諸帝方士の術を喜べるを諷し、自ら司馬相如にたとふ ㊁ 漢武故事に「七月七日武帝承華殿に潔齋す、忽ち青鳥あり西より來る、東方朔曰く、これ西王母の將に來り下らんとするなりと、暫くありて王母果して至る、去るに及び帝に約するに三年の後復た來るべきを以てす、後竟に來らず」 ㊂ 甘泉宮集靈臺に、武帝長く王母を望む ㊃ 侍臣司馬相如、口吃にしてよく書を著す、常に消渴（せうかち）の病あり ㊄ 武帝建章宮に金莖を起し、玉露を承けて不死の藥となししも、病める相如にはその一杯を賜ふことなく、武帝もまた、之を服して仙壽を得たるを聞かず

虢國夫人承ニ主恩一。平明騎レ馬入ニ宮門一。卻嫌脂粉汚ニ顔色一。淡掃ニ蛾眉一朝ニ至尊一。

虢國夫人主恩を承け。平明馬に騎つて宮門に入る。卻つて嫌ふ(二)脂粉の顔色を汚すを。(三)淡く蛾眉を掃つて至尊に朝す。

(一) 楊貴妃の三姉皆才色あり、玄宗常に呼んで姨となし、宮掖に出入せしめ、並に恩澤を承け、韓・虢・秦の三國夫人に封ぜらる、虢國夫人最も放誕を以て聞え、常に驄馬に乘りて禁に入り、容光殊艶、朱粉を施さず、多く素面にして朝す (二) 臙脂(べに)をさし白粉をつく (三) 薄く眉をひく

(一)桑乾を度る　賈島

客舍幷州已十霜。歸心日夜憶ニ咸陽一。無レ端更渡ニ桑乾水一。卻望ニ幷州一是故鄕。

(二)客舍幷州已に十霜。歸心日夜咸陽を憶ふ。(三)端なく更に桑乾の水を渡つて。卻つて幷州を望めば是れ故鄕。

(一) 順天府桑乾河、俗に渾河といふ (二) 幷州に客たること十年、日夜故鄕の咸陽を憶へり (三) 今、端なくも更に桑乾河を渡らんとするに及び、幷州却つて故鄕の感あり、懷しさに堪へず。端なく(不意といふに近し)

(一)成德樂　王表

亭亭孤月照ニ行舟ー。寂寂長江萬里流。鄉國不ㇾ知何處是。雲山漫漫使ニ人愁ー。

雨淋鈴夜卻歸ㇾ秦。猶是張徽一曲新。長說上皇垂ㇾ淚教。月明南內更無ㇾ人。

亭亭たる孤月行舟を照す。寂寂たる長江萬里の流。鄉國知らず何の處か是なる。(二)雲山漫漫として人をして愁へしむ。

㊀ 樂府商調曲 ㊁ 高き貌 ㊂ 雲重なる山遠く連り、望鄉の念に堪へざらしむ

(一)雨淋鈴

雨淋鈴の夜卻つて(二)秦に歸る。猶ほ是れ張徽一曲新なり。(三)長く說く上皇淚を垂れて教ふるを。月明かにして南內更に人なし。

㊀ 曲名、「明皇別錄に、玄宗蜀に幸し、狹斜谷に入る、時に霖雨旬に彌り、棧道中に鈴聲の山と相應ずるを聞く、帝すでに貴妃を悼み、因つて其聲を採りて雨淋鈴の曲を作り以て恨を寄す、時に梨園の樂工張徽よく觱栗を吹き、扈從して蜀に至る、帝其の曲を以て之に授く、至德中、車駕長安に歸るに及んで復華清宮に幸す、從官嬪御、皆舊人にあらず、帝因つて望京樓に於て張徽を召し出し、この曲を奏せしめ、覺えず悽愴流涕す」云々 ㊁ 長安 ㊂ 長く昔の悲哀を說くも、月明の南內(興慶宮)にはすでに人なく、寂寥の感殊に深し。上皇(玄宗)

(一)虢夫人

想₌像精靈₋欲レ見難。通津一去水漫漫。空餘₌千載凌レ霜色₋。長與₌澄潭₋白日寒。

殘燈無レ焔影幢幢。此夕聞君謫₌九江₋。垂レ死病中驚坐起。暗風吹レ雨入₌寒窗₋。

延平の劍潭に題す（一）　歐陽詹

（二）精靈を想像して見んと欲すること難し。通津一たび去つて水漫漫。（三）空しく千載霜を凌ぐの色を餘して。長く澄潭と白日寒し。

（一）晉の雷煥、豐城の石函中に得たる龍泉・太阿の二劍、水中に入り龍に化し去れりと傳ふる古跡　（二）寶劍の靈氣を想像すれども見ることすでに難く、津中に龍と化し去りし後は、たゞ水の漫々と流るゝのみ　（三）千載の後も、凜々霜を凌ぐ光を潭水にとゞめ、白日これが爲に寒し

白樂天江州の司馬に左降せらると聞く　元稹

殘燈焔なくして影幢幢（一）。此夕聞く君が九江に謫せらるゝを（二）。死に垂たる病中に驚いて坐起すれば。暗風雨を吹いて寒窗に入る。

（一）暗き貌　（二）前に註す、江州の地

胡渭州（一）　張祜

限。莫レ教三長袖倚二闌干一。

かれ。（美人に託し、自ら悲しみを述ぶ）

樓に登る

槐柳蕭疎繞二郡城一。夜添二山雨一作二江聲一。秋風南陌無二車馬一。獨上二高樓一故國情。

（一）槐柳蕭疎として郡城を繞り。夜山雨を添へて江聲を作す。（二）秋風南陌車馬なし。獨り高樓に上る故國の情。

（一）槐（ゑんじゆ）と柳の葉落つる聲に、夜の山雨加はり、江河の水聲に似たり（二）秋風淋しき南陌に、車馬往來の客絶え、獨り樓に上りて故郷を懷ふ

浩初上人仙人山に登らんと欲し貽らるゝに酬ゆ　柳宗元

珠樹玲瓏隔二翠微一。病來方外事多違。仙山不レ屬二分レ符客一。一任凌レ空錫杖飛。

（一）珠樹玲瓏として翠微を隔つ。（二）病來方外事多く違ふ。（三）仙山は符を分つの客に屬せず。一任す空を淩いで錫杖の飛ぶに。

（一）翠微（やま）を隔て、珠の如く美しき樹あり（二）臥病以來、風流の遊びも、多く意に任せず（三）仙山は、余の如き俗吏の領し得べきにあらず、上人のみ自由に登攀するに任せん。高僧傳に「神僧あり、錫を飛ばし空を淩いで行く」

名恥レ計ニ擒生
數一。直斬ニ樓蘭一
報ニ國恩一。

(一)太原府代州、雁門關　(二)飛び亂るゝ鏃　(三)生擒（いけどり）の數により、功名の多少を爭ふが如きは恥なり、たゞ樓蘭王を斬り國恩に報いんのみ

秋閨思

碧窗斜月靄ニ
深輝一。愁聽ニ寒
螿一淚濕レ衣。夢
裏分明見ニ關
塞一。不レ知何路
向ニ金微一。

(一)碧窗の斜月深輝靄たり。(二)寒螿を愁へ聽いて淚衣を濕す。(三)夢裏分明に關塞を見る。知らず何の路か金微に向ふを。

(一)碧紗を張りし窓に月影傾き、深くさし入る光、明かならず　(二)秋蟲、こほろぎの類　(三)金微山にて夫に逢ひしが、そこへは何れの路より向ひしにや、夢なれば明かならず。一統誌に「外男耀兵金微山獲を夫ること五千餘里、竇憲兵を遣し、北匈奴をこゝに破る」

郡中の卽事　羊士諤

紅衣落盡暗
香殘。葉上秋
光白露寒。越
女含レ情已無レ

(一)紅衣落ち盡して暗香殘る。葉上の秋光白露寒し。(二)越女情を含んで已に限なし。長袖をして闌干に倚らしむることなかれ。

(一)紅蓮の花　(二)越女（美人の義）はすでに無限の怨を含めり、長袖をひいて欄干に倚り、凄涼の景を看しむるな

液池。新花低發上林枝。年光到處皆堪レ賞。春色人間總未レ知。

たり。春色人間總て未だ知らず。

(一) 太液池に歸雁高く飛び、上林苑に花低く咲く (二) 禁苑の春は此の如きも、衆民はすべて知ることを得ず

塞下曲二首

三戍二漁陽一再度レ遼。騂弓在レ臂箭横レ腰。匈奴似レ欲レ知二名姓一。休下傍二陰山一更射上レ鵰。

三たび漁陽を戍り再び遼を度る。(一)騂弓臂に在り箭腰に横たふ。(二)匈奴名姓を知らんと欲するに似たり。陰山に傍うて更に鵰を射ることを休よ。

(一) 騂弓（赤牛角を飾とする弓）を臂に掛け、箭を腰に横へ、老將獵裝して敵地に入らんとす (二) 匈奴の兵は君が姓名を知らんとするものの如し、射鵰の妙技をあらはし、英雄たることを看破せらるゝなかれ。（漢の李廣、陰山に鵰（わし）を射る）

又

朔雪飄飄開二雁門一。平沙歷亂捲二蓬根一。功

朔雪飄飄として雁門開き。(一)平沙歷亂として蓬根を捲く。(二)功名擒生の數を計ることを恥づ。直に樓蘭を斬つて國恩に報いん。

府東山餘妓在。重將ニ歌舞一送ニ歸君一。

悠悠風旆遶ニ山川一。山驛空濛雨作レ烟。路半ニ嘉陵一頭已白。蜀門西更上ニ青天一。

回雁高飛太

(一)君が蜀に之くは、司馬相如の如く、光輝ある任官なれば、涙を流し、悲傷するに及ばず。相如傳に「上乃ち相如を拜して中郎將となし、節を建てて往いて使せしむ、副使するもの、王然于、壺充、呂越人、四子の傳を馳す」云々、註に「四馬高足を高傳となし、四馬中足を馳傳となし、四馬下足を乘傳となす」(二)余が舊府東山には、なほ歌妓の殘れるものあり、歌舞せしめて君が榮歸を送らん。(東山に晉謝祠あり、昔の謝安かつて妓を携へて遊びしところ)

(一)嘉陵驛

悠悠たる風旆山川を遶る。山驛空濛として雨烟と作る。(三)路嘉陵に半にして(二)頭已に白く。(四)蜀門西更に青天に上る。

(一)劍南節度使に任に赴く途上の作 (二)道遠く、旆(旗のさき二つに切れ、燕尾の如きもの)を風に靡かせ、山川を繞りて行く (三)嘉陵にて路漸く半ばなるに、頭髮すでに白し (四)西、劍閣の地を望めば、青天に上る如く遠し

漢苑行

張仲素

(一)回雁高く飛ぶ太液の池。新花低く發く上林の枝。(三)年光到る處皆賞するに堪へ

鳳林關裏水東流。白草黃楡六十秋。邊將皆承主恩澤。無㆕人解㆔道取㆓涼州㆒。

中庭地白樹棲ㇾ鴉。冷露無ㇾ聲濕㆓桂花㆒。今夜月明人盡望。不ㇾ知秋思在㆓誰家㆒。

相如擁ㇾ傳有㆓光輝㆒。何事闌干淚濕ㇾ衣。舊

鳳林關裏水東に流る。白草黃楡六十秋。邊將皆承く主の恩澤。人の涼州を取るを解道するなし。

(一) 臨洮鳳林關、黃河を隔てて涼州に接す (二) 玄宗涼州を開拓せしより、草白く楡(にれ)黃に、六十秋を經、また吐番に奪はる (三) 邊將みな天恩を受けながら、涼州を奪ひ返さんといふものなく、空しく日を送る

十五夜月を望む　王建

中庭地白うして樹鴉を棲ましむ。冷露聲なくして桂花を濕す。今夜月明かにして人盡く望む。知らず秋思は誰が家に在る。

(一) 木犀の花 (二) 秋に感じ愁を催すは誰ぞ

盧起居を送る　武元衡

相如傳を擁して光輝あり。何事ぞ闌干として淚衣を濕す。舊府東山餘妓在り。重ねて歌舞を將つて君が歸るを送らん。

泥燕子爭歸ㇾ
舍。獨自狂夫
不ㇾ憶ㇾ家。

紫陌紅塵拂ㇾ
面來。無ㇾ人不ㇾ
道ㇾ看ㇾ花回。玄
都觀裏桃千
樹。盡是劉郎
去後栽。

(一) 教坊の曲名、詞に必ず浪沙の二字を用ひ、征人思婦の情を述ぶ、劉夢得白居易二家に作あるといふ (二) 武昌城の南、鸚鵡洲のほとりに、浪沙をうごかす (三) 燕は巣に歸り、雌雄雙棲するも、無情の良人は旅にありて家を思はず

朗州より京に至り戲に花を看る諸君に贈る (一)

紫陌の紅塵面を拂つて來る。人の花を看て回ると道はざるなし。(二)玄都觀裏桃千樹。盡く是れ劉郎去後に栽う。

(一) 憲宗貞元二十一年、禹錫朗州の刺史に貶せられ、居ること十年にして還る、時に朱雀街の玄都觀に道士あり、手づから仙桃を植ゑ、花、觀に滿ちて紅霞の如し、禹錫因つてこの詩を作り、又、連州の刺史に貶せらる (二) 紫街の紅塵面を拂ち、人々みな花を看てかへる (三) 玄都觀に千樹の桃花あり、みな我が貶せられし後に栽ゑしものなり。(觀を朝廷にたとへ、桃を新貴の後輩に比す、劉郎は自ら云ふ、續齊諧記に「漢明帝の時、剡縣の劉晨、天台山に入りて藥を採り、遂に路に迷ひて仙女の居に留ること半年、家に歸れば、すでに七代の子孫を易ふ」とあるに本づく)

涼州詞　張籍

水濱。數株楊柳不勝春。晩來風起花如雪。飛入宮墻不見人。

二十餘年別帝京。重聞天樂不勝情。舊人唯有何戡在。更與殷勤唱渭城。

鸚鵡洲頭浪颭沙。青樓春望日將斜。銜

で宮墻に入つて人を見ず。

㈠原作九章の一、柳を借り隋の滅亡を詠ず ㈡柳青く、春色の濃かなるに堪へず

(一)歌者何戡に與ふ

(一)二十餘年帝京に別る。重ねて天樂を聞いて情に勝へず。(二)舊人唯何戡の在るありて。更に與に殷勤に渭城を唱ふ。

㈠宮中に仕へし樂工 ㈡二十餘年前、都にて別れしが、今また宮中の歌樂を聞き、悲しみに堪へず ㈢舊き知己はたゞ何戡あるのみ、余がために心を籠めて渭城曲（王維送別の詩、「渭城の朝雨輕塵を浥す、客舍青々として柳色新なり、君に勸む更に盡せ一杯の酒、西陽關を出づれば故人なからん」又、陽關三疊の曲）を唱ふ

(一)浪淘沙詞

(二)鸚鵡洲頭浪沙を颭す。青樓春望めば日將に斜ならんとす。(三)泥を銜む燕子爭つて舍に歸る。獨自ら狂夫家を憶はず。

回樂峰前沙
似レ雪。受降城
外月如レ霜。不レ
知何處吹二蘆
管一。一夜征人
盡望レ鄉。

天山雪後海
風寒。横笛偏
吹行路難。磧
裏征人三十
萬。一時回レ首
月中看。

煬帝行宮汴

(一)回樂峰前沙雪に似たり。受降城外月霜の如し。知らず何れの處か(三)蘆管を吹く。一夜征人盡く鄉を望む。

❶ 漢の、帝塞外に受降城を置く、唐に到りて增して三城となし、相距ること各々四百里 ❷ 山西大同府の西五百里 ❸ 胡笳、蘆葉を卷いて作る

軍に從つて北征す

(一)天山雪後海風寒し。(二)横笛偏に吹く行路難。(三)磧裏の征人三十萬。一時首を回らして月中に看る。

❶ 天山に雪降り、青海に風寒し ❷ 古樂府須路六曲の一 ❸ 沙漠中の軍士三十萬(多數の意)一時に首を廻らし、月下に茫然たり

(一)楊柳枝詞　劉禹錫

煬帝の行宮汴水の濱。(一)數株の楊柳春に勝へず。晩來風起つて花雪の如し。飛ん

汴水東流無レ限春。隋家宮闕已成レ塵。行人莫下上二長堤一望上。風起楊花愁二殺人一。

邊霜昨夜墮二關楡一。吹レ角當城片月孤。無レ限塞鴻飛不レ度。秋風吹入小單于。

（一）汴水東に流る限なき春。（二）隋家の宮闕已に塵となる。行人長堤に上つて望むことなかれ。（三）風起つて楊花人を愁殺す。

（一）隋の煬帝の鑿ちし河、板渚より淮海に至り、河畔道を築き柳を樹ゑ、名づけて隋堤といふ、長さ千三百里、離宮四十餘所を置く（二）汴水東流し、春は昔に異ならず（三）楊風に飛び、人をして愁へに堪へざらしむ。（隋の滅亡にたとふ、隋は楊姓）

曉角を聽く

（一）邊霜昨夜關楡に墮つ。角を吹いて當城片月孤なり。（二）限なき塞鴻飛び度らず。秋風吹き入る小單于。

（一）漢書に「蒙恬秦のために胡を侵し、數千里を辟く、河を以て境となし、石を累ねて城となし、楡（にれ）を樹ゑて塞となす」（二）塞上の雁羣は角聲を聽いて敢て飛び渡り去らず、秋風一時に單于の地に吹き入る。（單于はもと胡の酋長の稱、角の曲名に大單于小單于あり）

夜、（一）受降城に登り笛を聞く

半夜回レ舟入二楚郷一。月明山水共蒼蒼。孤猿更叫秋風裏。不二是愁人一亦斷腸。

一官何幸得レ同レ時。十載無レ媒獨見レ遺。今日莫レ論腰下組。請君看取鬢邊絲。

夜、袁江を發し李潁川劉侍郎に寄す　戴叔倫

半夜舟を回して楚郷に入る。月明かにして山水共に蒼蒼。孤猿更に叫ぶ秋風の裏。（一）是れ愁人ならざるも亦斷腸。

（一）猿聲を聞けば、愁人ならざるも腸を斷つ、遷謫の客は云ふまでもなし

楊侍御に寄す　包何

（一）一官何の幸ぞ時を同じうするを得たる。十載媒なくして獨遺さる。今日論ずるなかれ（二）腰下の組。請ふ君看取せよ（三）鬢邊の絲。

（一）同時に官を拜せしも、多年榮進の媒（なかだち）をなす人なく、ひとり散職に取殘さる　（二）腰にまとへる印綬（官位を表す）　（三）白髮

（一）汴河曲　李益

夜斷腸人不レ見。起ニ行殘月一影徘徊。

武帝祈レ靈太乙壇。新豐樹色繞二千官一。那知今夜長生殿獨閉二空山月影寒一。

青艸湖邊日色低。黄茅瘴裏鷓鴣啼。丈夫飄蕩今如レ此。一曲長歌楚水西。

(一)夢覺めて後　(二)起つて殘月の下に歩し、我が影と共に徘徊す

昭應に宿す (一)

(二)武帝靈を祈る太乙壇。新豐の樹色千官を繞る。(三)那ぞ知らん今夜長生殿。獨空山月影の寒きに閉さんとは。

(一)玄宗の天寶七年、會昌を改めて昭應となす、舊の新豐の地　(二)漢の武帝壇を築き、天帝太乙を祭りし如く、玄宗驪山の朝元閣に老子を祭り、新豐の樹間に千官列をなして扈從せり　(三)長生殿(朝元閣の齋殿、玄宗楊貴妃と女牛二星を指して密誓せし處)は今すでに廢れ、空しく山月の寒き中に閉せり

湖中

(一)青艸湖邊日色低れ。(二)黄茅瘴裏鷓鴣啼く。丈夫(三)飄蕩今此の如し。一曲の長歌楚水の西

(一)洞庭の南、青草湖に日傾く　(二)南土の惡氣、夏には青草瘴といひ、秋には黄茅瘴といふ　(三)所定めず飄泊す

有ニ夜猿知ニ客
恨一。嶧陽溪路
第三聲。

月落烏啼霜
滿レ天。江楓漁
火對ニ愁眠一。姑
蘇城外寒山
寺夜半鐘聲
到ニ客船一。

故園黃葉滿ニ
青苔一。夢後城
頭曉角哀。此

㊀ 嘗て宣城刺史の門客となり、その恩を報いざるに刺史すでに歿せり ㊁ 郢州の嶧陽溪。古樂府に「猿鳴三聲、涙裳を霑す」

楓橋夜泊　　張繼

㈠月落ち烏啼いて霜天に滿つ。㈡江楓漁火愁眠に對す。㈢姑蘇城外の寒山寺。夜半の鐘聲客船に到る。

㊀ 蘇州府城の西七里にあり、山に面し、水に臨み、南北に往來するもの必ず之を經。舊、封橋に作る ㊁ 月落ち烏啼き霜氣天に滿ちたり、すでに曉かと疑はる ㊂ 江岸楓樹のほとりに漁火ありて、孤客の眠に對せり、客は愁によりて熟眠し得ず、夜の明け難きに苦しむ ㊃ 姑蘇城外寒山寺の鐘聲、たま〳〵船に聞ゆ、指折り數ふればなは是れ夜半

角を聽いて歸るを思ふ　　顧況

故園の黃葉青苔に滿たん。㈡夢後の城頭曉角哀しむ。此夜斷腸して人見えず。㈢殘月に起行して影徘徊す。

楚雲。江花亂
點雪紛紛。春
風落日誰相
見。青翰舟中
有二鄂君一。

浮雲不下共二此
山一齊上。山靄蒼
蒼望轉迷。曉
月暫飛千樹
裏。秋河隔在二
數峰西一。

幾人同入謝
宣城。未レ及レ酬レ
恩隔二死生一。唯

鄂君あらん。

(一)刺史 (二)江頭の千家楚地の雲を帶び、江花雪の如く亂れ散る (三)青雀を畫ける舟に、客美しく、古への鄂君の如くならん。説苑に「楚王の母弟鄂君子晳、舟を新波の中に泛ぶ、青翰に乘じ翠蓋を張り、鐘鼓の音を會す、越人楫を擁して歌うて曰く、今夕何の夕ぞ、舟を中流に放つ、今日何の日ぞ、王子と舟を同じうするを得」云々

石邑山中に宿す

(一)浮雲も此山と齊しからず。山靄蒼蒼として望轉迷ふ。(二)曉月暫く飛ぶ千樹の裏。秋河は隔てて數峰の西にあり。

(一)山勢雲より高く、靄こめて四方の眺望を妨ぐ (二)曉月千樹の中に隱見し、銀河の影、數峰の西にある如く近し

劉侍郎を送る　李端

(一)幾人か同じく入る謝宣城。未だ恩を酬ゆるに及ばずして死生を隔つ。唯夜猿の客恨を知るあり。(二)嶧陽の溪路に第三聲。

飄蓬。明月淸樽祇暫同。南望二千山一如二黛色一。愁君客路在二其中一。

色の如し。(四)愁ふ君が客路其中にあることを。

㊀ 心淋しき遊子の身は、風に飄へる蓬の如し ㊁ 明月の夜、暫く共に酒を酌み、わかれを述ぶ ㊂ 南方には千山黛(まゆずみ)の如くに靑し ㊃ 君は行路をその中にとり、いかに嶮阻に苦しむならんか

(一)寒食　　韓翃

春城無三處不二飛花一。寒食東風御柳斜。日暮漢宮傳二蠟燭一。靑烟散入五侯家。

春城處として飛花ならざるはなし。寒食東風御柳斜なり。(二)日暮れて漢宮より(三)蠟燭を傳ふれば。靑烟散じて入る五侯の家。

㊀ 冬至を去ること百五日、疾風甚雨あり、士民皆煙火を禁ずるを例とす、淸明の日に至り、楡柳の火を取り、百官に新火を賜ふ ㊁ 城中には花の散らざる處なく、御苑の柳は、風を受けて斜に靡く ㊂ 夕暮に、宮中より蠟火を傳へられ、靑き煙は散つて權貴近臣の家に入る。(後漢の桓帝、宦官單超等五人を封じ、五侯と稱す)

客の鄂州に(一)知たるを送る

江口千家帶二

(一)江口の千家楚雲を帶ぶ。江花亂點して雪紛紛。春風落日誰か相見る。(二)靑翰舟中

秋夜沈沈此
送レ君。陰蟲切
切不レ堪レ聞。歸
舟明日毘陵
道。回レ首姑蘇
是白雲。

淒淒遊子苦ニ

卷之八

七言絶句

魏十六が(一)蘇州に還るを送る　皇甫冉

(二)秋夜沈沈として此に君を送る。(三)陰蟲切切として聞くに堪へず。(四)歸舟明日毘陵の道。首を回さば姑蘇は是れ白雲ならん。

(一) 古への姑蘇の地　(二) 秋夜寂寥の中に君を送る　(三) 草陰の蟲、聲しげくして哀なり　(四) 君が歸舟明・毘陵の地を過ぐる時、首を廻し見ば、姑蘇山は白雲の中にあらん

曾山別を送る

(一)淒淒たる遊子飄蓬に苦しむ。(二)明月青樽祇暫く同じうす。(三)南千山を望めば黛

踏閣攀林恨
不同。楚雲滄
海思無窮。數
家砧杵秋山
下。一郡荊榛
寒雨中。

廣陵三月花
正開。花裏逢
君醉一廻。南
北相過殊不
遠。暮潮歸去
早潮來。

(一)閣を踏み林を攀ぢて同じうせざるを恨む。楚雲滄海思窮なし。(二)數家の砧杵秋山の下。一郡の荊榛寒雨の中。

(一) 高閣に登り山林に遊ぶことを共にせず、空しく楚國の雲水を望み、愁極りなし (二) 山下に數家の砧杵（きぬた）鳴り、一郡の荊榛（ばら）に寒雨そゝぎて淋し

柳郎中が春日揚州に歸り南郭に別れらるゝの作に酬ゆ

(一)廣陵三月花正に開かば。花裏君に逢うて醉うこと一廻せん。(二)南北相過ぐる殊に遠からず。暮潮に歸り去つて早潮に來る。

(一) 廣陵（揚州の地）の花時に君が尋ね、花下に一醉したし (二) こゝと揚州とは南北の距離も遠からず、朝夕の潮に隨ひ、相往來するも容易ならん。（韋應物、時に蘇州の刺史たり）

送二馬蹄一。

宜陽城下草萋萋。澗水東流復向レ西。芳樹無レ人花自落。春山一路鳥空啼。

瀟湘何事等閑回。水碧沙明兩岸苔。二十五絃彈二夜月一。不レ勝二清怨一卻飛來。

春行興を寄す　李華

(一)宜陽城下草萋萋。澗水東に流れて復た西に向ふ。(二)芳樹人無うして花自ら落ち。春山一路鳥空しく啼く。

㊀河南府宜陽縣　㊁花自ら落ちて來り遊ぶ人もなく、鳥のみ空しく啼けり

歸雁　錢起

(一)瀟湘より何事ぞ等閑に回る。(二)水碧に沙明かなり兩岸の苔。(三)二十五絃夜月に彈ぜば。清怨に勝へずして卻つて飛び來らん。

㊀雁は何故に、心なく北に歸るか　㊁瀟湘は水碧く沙明かに兩岸の苔美しき處なるに　㊂湘君の靈、二十五絃の瑟を月下に彈じ、その音清怨聞くに堪へずして、ために飛び去るならんか。來は助詞也。史記の封禪書に「昔、泰帝素女をして五十絃の瑟を鼓せしむ、その聲悲しうして殆んど聞くに禁へず、因つて破つて二十五絃となさしむ」と、又、琴曲に歸雁操あり

樓に登り王卿に寄す　韋應物

漢關。朔雲邊月滿二西山一。更催二飛將一追二驕虜一。莫レ遣二沙場匹馬還一。

猿啼客散暮江頭。人自傷レ心水自流。同作二逐臣一君更遠。青山萬里一孤舟。

萬里辭レ家事二鼓鼙一。金陵驛路楚雲西。江春不レ肯レ留二行客一。艸色青青

沙場匹馬をして還らしむるなかれ。

㊀杜甫「嚴武が軍中の早秋に和し奉る」の絶句參照 ㊁北地に雲と月と物淒く、胡兒入寇す ㊂飛將軍李廣の如き名將に命じ、驕虜（勢おごれる胡兵）を沙漠に追ひ、馬一匹たりとも生還せしむるなかれ

重ねて裴郎中が吉州に貶せらるゝを送る　劉長卿

猿啼いて客散ず暮江の頭。人は自ら心を傷ましめ水は自ら流る。㊀同じく逐臣となつて君更に遠し。青山萬里一孤舟

㊀二客相別る ㊁朝廷より逐ひ斥けられし人。（長卿も潘州南巴の尉に貶せらる）

李判官が潤州の行營に之くを送る

萬里家を辭して㊀鼓鼙を事とす。㊁金陵の驛路楚雲の西。㊂江春肯て行客を留めず。艸色青青馬蹄を送る。

㊀軍旅を事とす。（鼙は馬上にて打つ鼓） ㊁金陵驛を經、楚地の西に出づ ㊂江上の春景は客を留めず、却つて之を送るに似たり

承レ恩借獵小平津。使レ氣常遊中貴人。一擲千金渾是膽。家無二四壁一不レ知レ貧。

茨菰葉爛別二西灣一。蓮子花開猶未レ還。妾夢不レ離江上水。人傳郎在二鳳凰山一。

昨夜秋風入二

(一)恩を受けて借獵す小平津。氣を使うて常に遊ぶ中貴の人。(二)一擲千金渾て是れ膽。家に四壁なくして貧を知らず。

㊀命を受けて小平津（天子の獵場）に獵し、常に意氣を鼓し、宮中の貴人に交る　㊁一擲千金の豪遊に膽氣身に滿ち、家には四壁なきも、少しも貧を患へず

江南行　　張潮

(一)茨菰葉爛れて西灣に別れ。(二)蓮子花開いて猶ほ未だ還らず。(三)妾が夢は離れず江上の水。人は傳ふ郎は鳳凰山に在りと。

㊀水艸、夏、白花を開き、秋に至りて葉爛れ破る　㊁還の實　㊂妾が夢は江上の水を離れず日夜郎を戀ひ慕へるに、人ありて、郎は今、鳳凰山（杭州府の山）にありと云へり。（鳳と凰との如く夫が他の女と同棲するを危む意）

(一)軍城の早秋　　嚴武

昨夜秋風漢關に入り。(二)朔雲邊月西山に滿つ。(三)更に飛將を催して驕虜を追ひ。

笛何須怨二楊柳一。春光不レ度玉門關。

薊庭蕭瑟故人稀。何處登レ高且送レ歸。今日暫同芳菊酒。明朝應レ作二斷蓬飛一。

綿綿漏鼓洛陽城。客舍平居絕二送迎一。逢レ君買レ酒因成レ醉。醉後焉知世上情。

(一) 前に註す (二) 地勢黃河に沿ひて高まり、次第に白雲の中に入る (三) 孤城淋しく萬仭の山に在る (四) 羌胡の笛は折楊柳の哀曲を吹くの要なし (五) 玉門關外には、春も來らず、柳もなく、殊に淋しき處なり

九日送別

(一)薊庭蕭瑟として故人稀なり。何の處か高きに登つて且つ歸るを送る。今日暫く同じうす芳菊の酒。(二)明朝應に斷蓬の飛ぶを作すべし。

(一) 薊門に同じ (二) 明朝は斷蓬の飛ぶ如く、互に離散すべし

洛陽の客舍に祖詠に逢ひ留宴す　蔡希叔

(一)綿綿たる漏鼓洛陽城。(二)客舍平居送迎を絕す。君に逢ひ酒を買つて因つて醉を成す。(三)醉後焉んぞ知らん世上の情。

(一) 洛陽城に漏鼓(時の太鼓)の聲長し (二) 客舍に留り平生交友の送迎を斷つ (三) 醉うて世上の忿を忘る

少年行　吳象之

黄金。黄金不レ多交不レ深。縦令然諾暫相許。終是悠悠行路心。

故人行役向ニ邊州一。匹馬今朝不ニ少留一。長路關山何日盡。滿堂絲竹爲レ君愁。

黄河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌

相許すも。終に是れ悠悠たる行路の心。

(一)旅寓する家の壁　(二)たとひ事を諾ひ心を許すも、利欲盡くる時は、交情の薄きこと路人の如し

人の河源(一)に使するを送る

故人行役して邊州に向ふ。匹馬今朝少くも留らず。長路關山何れの日か盡きん。(二)滿堂の絲竹君が爲に愁ふ。

(一)黄河の水源。西域傳に「河に兩源あり、一は葱嶺に出で一は于闐に出づ、于闐は南山の上に在り、その河北流して葱嶺河と合し、下、蒲昌海に注ぐ、玉門陽關を去る三百餘里、隋の煬帝初めて郡を置く」(二)盛に絲竹の樂を奏するも君が遠行を愁へてその聲哀し

(一)涼州詞

王之渙

(二)黄河遠く上る白雲の間。(三)一片の孤城萬仞の山。(四)羌笛何ぞ須ひん楊柳を怨むるを。(五)春光度らず玉門關。

自開。朝看飛鳥暮飛還。寄書河上神明宰、羨爾城頭姑射山。

江邊楓落菊花黄。少長登高一望鄕。九日陶家雖載酒、三年楚客已霑裳。

世人結交須

河上神明の宰。羨爾す城頭の姑射山。(四)

(一) 河東の令韓鵬 (二) 心靜かなれば外物もまた靜かなり、朝に鳥の飛び去るを見、暮に鳥の飛び還るを見、その自然を樂しむ (三) 書を河東の縣宰に寄せ、その居處の好きを羨む。晉書に「陸雲俊偉の令たり、一縣稱して神明となす、官を去るに百姓之を思ひ、形像を圖畫して縣社に配食す」 (四) 河東臨汾縣の山、莊子に「藐姑射の山に神人あり居る、肌膚氷雪の如く綽約として處子(處女)の如し」

九日　　崔國輔

江邊楓落ちて菊花黄なり。(一)少長高きに登つて一に鄕を望む。(二)九日陶家酒を載すと雖も。三年楚客已に裳を霑す。

(一) 長幼相伴ひ、高地に登りて故鄕を望む (二) 陶淵明の幽居の如く、たとへ酒を送る人ありとも、この愁を破り難し

(一)長安主人の壁に題す　　張謂

世人交を結ぶに黄金を須ふ。黄金多からざれば交深からず。(二)縱令然諾して暫く

十里黄雲白日曛。北風吹レ雁雪紛紛。莫レ愁前路無二知己一。天下誰人不レ識レ君。

十里の黄雲白日曛ず。北風雁を吹いて雪紛紛。愁ふることなかれ前路知己なきことを。(二)天下誰人か君を識らざらん。

(一) 琴工董庭蘭（宰相房琯に用ひらる）。唐史に「數々賕謝を通じ、有司のために劾治せられ、房公此に由つて罷め去らる」 (二) 天下の人、君が藝に秀て、心に汚なきを知らざるものなし

杜十四が江南に之くを送る　　孟浩然

荊呉相接水爲レ鄕。君去春江正淼茫。日暮孤舟何處泊。天涯一望斷二人腸一。

(一)荊呉相接して水鄕となる。君去つて春江正に淼茫たり。日暮孤舟何の處にか泊する。(二)天涯一望人の腸を斷たん。

(一) 荊（古の楚）、淼茫（水の廣き貌） (二) 故鄕を思ひ、腸を斷つ

(一)韓鵬に寄す　　李頎

爲レ政心閑物

政を爲して(二)心閑なれば物自ら閑なり。朝に看し飛鳥暮に飛び還る。(三)書を寄す

更防秋。

旅館寒燈獨
不眠。客心何
事轉淒然。故
鄉今夜思千
里。霜鬢明朝
又一年。

雪淨胡天牧
馬還。月明羌
笛戍樓間。借
問梅花何處
落。風吹一夜
滿關山。

里渤海に入る」㈡ 哥舒翰の軍鐵嶺のほとりに横行し、西、邏逤城を看て之を攻破し戰功多し ㈢ 青海の地、我が有に歸し、將に馬に飲はんとす ㈣ 黃河一帶、また胡兵を防ぐ要なからん。(胡兵は、每秋天高く馬肥ゆる候に來り寇す、故に秋を防ぐといふ)

除夜作

旅館の寒燈獨り眠らず。客心何事ぞ轉た(一)悽然。(二)故鄉今夜思千里。霜鬢明朝又一年。

㈠ 年盡くる夜 ㈡ 淋しき貌 ㈢ 故鄉にては今夜邊地の余を思はん、白髮霜の如く、明朝また年を加ふるなり

塞上に笛を吹くを聞く

雪淨うして胡天馬を牧して還る。月明かなり羌笛戍樓の間。(一)借問す梅花は何の處にか落つ。風吹いて一夜關山に滿つ。

㈠ 笛に落梅花の曲あり。風吹いて、その聲關山に滿ちひろがる

(二)董大に別る

離別情。

雨歇楊林東渡頭。永和三日盪輕舟。故人家在桃花岸。直到門前溪水流。

鐵馬橫行鐵嶺頭。西看邏逤取封侯。青海只今將飲馬。黃河不用

三日李九の莊を尋ぬ

雨は歇む楊林東渡の頭。(一)永和三日輕舟を盪かす。(二)故人の家は桃花の岸にあり。直に到る門前溪水の流。

(一) 晉の永和九年三月三日、王羲之客を會稽山陰の蘭亭に會し、禊事(みそぎ)を修む、その記に「此の地崇山峻嶺茂林修竹あり、又清流激湍あり、左右に映帶す、引いて以て流觴の曲水となし、其間に列坐す」云々、この故事ある日、舟を楊林渡に浮べ、李九の莊を訪ふ (二) 莊は桃花咲き亂るゝ岸にあり、流に沿ひ門前まで漕ぎ行かれ、曲水の興に似たり

(一)九曲詞　高適

(一)鐵馬橫行す鐵嶺の頭。(二)西邏逤を看て封侯を取る。(三)青海只今將に馬に飲はんとす。(四)黃河用ひず更に秋を防ぐことを。

(一) 玄宗の時哥舒翰黃河源頭の地を收め、其地を以て隴西郡を置く。河圖絳象に「黃河は水九たび曲がり、長さ九千

戰。兵氣銷爲日月光。

北海陰風動地來。明君祠上望龍堆。髑髏盡是長城卒。日暮沙場飛作灰。

花映垂楊漢水清。微風林裏一枝輕。即今江北還如此。愁殺江南

消えて日月光を增し、天子の威德いよいよ遍し

二

北海の陰風地を動し來る。(一)明君祠上に龍堆を望む。(二)髑髏盡く是れ長城の卒。日暮沙場に飛んで灰と作る

㊀漢の美人王昭君を祀る。王昭君は齊國王襄の女、年十七にして漢の元帝に獻ぜらる、會々匈奴使を遣して一女子を請ふ、帝謂ふ、後宮單于に至らんとするものは起てと、昭君喟然として歎じ、席を越えて起つ、乃ち單于に賜ふ　㊁長城の戍卒は盡く髑髏となり、更に灰となりて風に飛ぶ。史記に「秦の始皇長城を築き以て胡を防ぐ、西、臨洮より遼東に至る、長さ千里」

宇文六を送る

花は垂楊に映じて漢水淸く。(一)微風林裏一枝輕し。(二)即今江北還た此の如し。愁殺す江南離別の情。

㊀林に微風吹き、一枝の花輕く散る　㊁江北の好風景即今此の如し、君の江南に行くを送り、別離の情に堪へず

日南湖采二薇
蕨一。何人爲覓
鄭瓜州。

湖月林風相
與清。殘尊下レ
馬復同傾。久
拚野鶴如二雙
鬢一。遮莫隣雞
下二五更一。

玉帛朝回望二
帝鄕一。烏孫歸
去不レ稱レ王。天
涯靜處無二征

㊀ 原作十二首の一、鄭審を憶ふ ㊁ 故園といふ如し、秦の時、邵平瓜を長安の青門に植う、杜甫の少陵その地に近し ㊂ 今に夔州の南湖に來り、薇蕨（わらびの類）を採りて食ふのみ ㊃ 誰か瓜州の鄭氏を尋ね、この悄を語り與るゝ者ぞ

書堂の飮既に夜にして復李尙書を邀へ馬より下つて月下に賦す(一)

湖月林風相與に淸し。殘尊馬より下つて復同じく傾く。(二)久しく拚つ野鶴の雙鬢の如くなるを。遮莫隣雞の五更に下ることを。

㊀ 胡侍御の書堂の會飮 ㊁ 頭髮鶴の如く白きを意とせず、共に酒を飮み、隣雞曉を告ぐるに任す

塞下曲　常建

(一)玉帛朝回して帝鄕を望む。烏孫歸り去つて王と稱せず。天涯靜かなる處征戰なし。(二)兵氣は銷して日月の光となる

㊀ 烏孫王來朝し、帝闕の壯觀を望み、歸國の後謹みて王と稱せず。玉帛（玉ときぬと、貢獻の品をいふ） ㊁ 兵氣

感激一人。

秋風嫋嫋動二高旌一。玉張分レ弓射二虜營一。已收二滴博雲間戍一。欲レ奪蓬婆雪外城。

一辭二故國一十經レ秋。毎レ見二秋瓜一憶二故丘一。今

輕裘肥馬の士、誰か君の滿腹に感激し、今日の急を救ふものぞ

嚴武が軍城の早秋に和し奉る（一）

秋風嫋嫋として高旌を動かし。（二）玉張弓を分つて虜營を射る。（三）已に滴博雲間の戍を收めて。（四）奪はんと欲す蓬婆雪外の城。

（一）代宗の廣德二年、蜀の節度使嚴武、吐蕃の七萬衆を破り、當狗城を拔き、地を拓くこと數百里、十月直に吐蕃の鹽井城を陷れ、師全捷を奏す、杜甫時に幕中に參謀たり　（二）風、物を動す貌　（三）將軍の營より弓矢を諸將に分ち、胡兵を征す　（四）已に滴博嶺（西山に接す）雲間の高戍を占領し、機に乘じ、蓬婆山（又蓬婆山、吐蕃大雪山の異稱）以外の諸城をも奪はんとす

問を解く（一）

一たび故國を辭してより十たび秋を經。（二）秋瓜を見る毎に故丘を憶ふ。（三）今日南湖薇蕨を采る。（四）何人か爲に覓む鄭瓜州。

住二人間一。

錦城絲管日紛紛。半入二江風一半入レ雲。此曲祇應二天上有一。人間能得二幾回聞一。

鄭子將レ行罷二使臣一。囊無二一物獻二尊親一。江山路遠羈離日。裘馬誰爲二

地に來り、人間の風景を賞しては如何

(一)花卿に贈る　　杜甫

(一)錦城の絲管日に紛紛。半は江風に入り半は雲に入る。(三)此曲祇應に天上に有るべし。人間能く幾回か聞くことを得ん。

㊀ 姓は花、名は敬定、劍南の節度使たり、段子璋反せし時、崔光遠、敬定を率ゐて討ちて之を斬る、敬定功を恃みて大に掠め、之に由つて擢用せられざりき、詩は敬定管絃の奢を極むるを諷す ㊁ 錦官城の管絃日に賑ひ、騒、錦江の風に入り、又、天上の雲に入る ㊂ 此の如き樂は、たゞ天上界に聽くべく、人間界にては、容易に聽くことを得ず。(禁中の樂曲に近しの意)

重ねて鄭鍊に贈る

(一)鄭子將に行かんとして使臣を罷む。囊に一物の尊親に獻ずるなし。江山路遠し(二)羈離の日。(三)裘馬誰か感激を爲す人ぞ。

㊀ 鄭子郡縣の官を罷め、歸鄕せんとするに、親に獻ずべき少しの貯もなし ㊁ 官を離れ、旅程に就く日 ㊂

火山五月行人少○看君馬去疾如鳥○都使行營太白西○角聲一動胡天曉○

（一）火山五月行人少なり。看る君が馬去つて疾きこと鳥の如くなるを。（二）都使の行營太白の西。角聲一たび動く胡天の曉。

（一）火州吐魯番の山　（二）節度使の行營極めて遠く、太白星の西かと思はる

山房の春事

梁園日暮亂飛鴉○極目蕭條三兩家○庭樹不知人去盡○春來還發舊時花○

（一）梁園日暮る亂飛の鴉。極目蕭條たり三兩家。庭樹は知らず人去り盡くること（二）を。春來還た發く舊時の花。

（一）梁の孝王の園　（二）孝王

孫山人に寄す　儲光羲

新林二月孤舟還○水滿清江花滿山○借問故園隱君子○時時來往

（一）新林二月孤舟還る。水は滿江に滿ち花は山に滿つ。（二）借問す故園の隱君子。（三）時時來往して人間に住するかと。

（一）新林浦（南京應天府の西南二十里）に、二月孫山人の孤舟歸る　（二）同郷の隱君（孫山人）に問ふ　（三）時々この

君九月交河北。雪裏題レ詩淚滿レ衣。

㊀孤馬に騎り、西域より歸る　㊁長安を去る八千里、吐魯番の西

西向ニ輪臺一萬里餘。也知鄉信日應レ疎。隴山鸚鵡能言語。爲報家人數寄レ書。

北庭に赴き隴を度り家を思ふ

西輪臺に向ふ萬里餘。也知る鄕信の日に應に疎なるべきを。隴山の鸚鵡能く言語す。爲に報ぜよ家人數〻書を寄せよと。

㊀西域北庭、大都護府に屬し、靜塞軍あり　㊁漢書地理志に「隴山に鸚鵡多し、狀鶚の如く、赤羽赤嘴、人舌にしてよく言ふ」

酒泉太守能劍舞。高堂置酒夜擊レ鼓。胡笳一曲斷ニ人腸一。坐客相看淚如レ雨。

酒泉の太守の席上に醉後の作

酒泉の太守能く劍舞す。高堂置酒して夜鼓を擊つ。胡笳一曲人の腸を斷ち。坐客相看て淚雨の如し。

㊀漢酒泉郡を置き、隋、郡を廢して肅州を置く、西北の地　㊁蓋し曲中に安祿山の亂を憤る意を寓せる也

劉判官が磧西に赴くを送る

到ㇾ天。辭ㇾ家見二月兩回圓一。今夜不ㇾ知何處宿。平沙萬里絶二人烟一。

西原驛路掛二城頭一。客散江亭雨未ㇾ休。君去試看汾水上。白雲猶似二漢時秋一。

匹馬西來天外歸。揚ㇾ鞭只共ㇾ鳥爭ㇾ飛。送ㇾ

る。今夜知らず何れの處にか宿するを。(三)平沙萬里人烟を絶つ。

(一) 火州瀚海の地、皆沙石、深きこと三尺、大風の時は行く者人馬を失ふ (二) 馬を馳せて西に來り、路遥く天に達せんとす、家を出でてより二回の滿月を見たり (三) 平沙萬里、人家なし

虢州後亭に李判官使して晉絳に赴くを送る

秋の字を得たり

(一)西原の驛路城頭に掛る。客散じて江亭雨未だ休まず。(二)君去つて試に看よ汾水の上。白雲は猶ほ漢時の秋に似ん。

(一) 西原(虢州西原城)の驛路城に傍ひ、次第に高まる (二) 漢の武帝汾水に宴し、秋風辭を作る、中にいふ「秋風起つて白雲飛ぶ」、又いふ「歡樂極つて哀情多し」 (三) 君去る時、白雲舊時の如く、感慨極めて深からん

人の京に還るを送る

(一)匹馬西來天外より歸る。鞭を揚げて只鳥と共に飛ぶを爭ふ。君を送る九月交(二)河の北。雪裏詩を題して淚衣に滿つ。

東去二長安一萬里餘。故人那惜一行書。玉關西望腸堪レ斷。況復明朝是歲除。

故園東望路漫漫雙袖龍鍾淚不レ乾。馬上相逢無二紙筆一。憑レ君傳語報二平安一。

走レ馬西來欲レ

玉關より長安の李主簿に寄す

東長安を去る萬里餘。故人那ぞ惜しむ一行の書。玉關より西に望めば腸斷つに堪へたり。況んや復た明朝は是れ歳除。

(一) 故人李主簿、消息を惜しむ勿れ　(二) 明朝にて一年盡く

京に入る使に逢ふ

故園東に望めば路漫漫。雙袖龍鍾として淚乾かず。馬上に相逢ふも紙筆なし。君に憑つて傳語す平安を報ぜよ。

(一) 淚流るゝ貌　(二) 都に到らば、余平安にして旅途にありしと告げよ

磧中作

馬を走らせて西來天に到らんと欲し。家を辭してより月の兩回圓かなるを見

日落轅門鼓角鳴。千羣面縛出二蕃城一。洗二兵魚海一雲迎レ陣。秣二馬龍堆一月照レ營。

苜蓿烽邊逢二立春一。葫蘆河上涙沾レ巾。閨中只是空相憶。不レ見沙場愁二殺人一。

降し、封じて海西侯となす、貳師はもと大宛城の名）

其　二

日落ちて（一）轅門鼓角鳴る。（二）千羣面縛して蕃城を出づ。（三）兵を魚海に洗へば雲陣を迎へ。馬に龍堆に秣へば月營を照す。

（一）軍門　（二）羣虜降伏　（三）魚海に兵器を洗へば、雲陣前に起り、龍堆に馬に秣へば、明月軍營を照す

苜蓿烽より家人に寄す

（一）苜蓿烽邊立春に逢ひ。（二）葫蘆河上涙巾を沾す。（三）閨中只是れ空しく相憶ふ。見ず沙場の人を愁殺するを。

（一）玉門關外五烽の一。唐三藏西域記に「西域の地、塞上に驛亭なく、又山徑なし、たゞ烽火を以て候となす」（二）西域記に「上狹く下廣し、故に名づく、流急にして渡るべからず、上に玉門關を置く」（三）閨中の婦女はたゞ徒に余を憶ふのみ、沙場荒涼の景、かくまで人を愁へしむるを知らず

路漫漫。

江路東連千里潮。青雲北望紫微遙。莫道巴陵湖水濶。長沙南畔更蕭條。

漢將承恩西破戎。捷書先奏未央宮。天子預開麟閣待。祇今誰數貳師功。

岳陽樓に重ねて王八員外の長沙に貶せらるゝを宴別す

(一)江路東に連る千里の潮。青雲北に望めば紫微遙かなり。(二)道ふ莫れ巴陵湖水濶しと。長沙南畔更に蕭條。

㊀揚子江の舟路、東千里の潮につゞき、青空を北に望めば、長安の帝居遙かにして見えず　㊁巴陵洞庭の水、闊くして愁へ易しといふなかれ、南岸長沙に至らば、更に淋しきに堪へざらん

(一)封大夫播仙を破る凱歌二首　岑參

(二)漢將恩を受けて西戎を破る。捷書先づ奏す未央宮。(三)天子預め麟閣を開いて待つ。(四)祇今誰か數へん貳師の功。

㊀玄宗天寶十年、高仙芝を以て安西四鎭の節度使となす、仙芝乃ち封太夫常清を署して判官となし、大に吐蕃勃律王及びその屬二十餘國を破る、播仙は吐蕃部落の城邑、岑參從つて封が幕を佐く　㊁封太夫播仙の戎（えびす）を破り、捷書を朝に奏す　㊂天子豫め麒麟閣を開き、勇將の凱旋を待つ　㊃今日、貳師將軍（漢の李廣）の功を稱するものなし、封太夫の功は遙かに之に勝れり。（漢の太初元年李廣利大宛城を擊ち、名馬を取りて歸る、帝之を

陽城上聞二吹笛一。能使三春心滿二洞庭一。

楓岸紛紛落葉多。洞庭秋水晩來波。乘レ興輕舟無二近遠一。白雲明月弔二湘娥一。

雪晴雲散北風寒。楚水呉山道路難。今日送レ君須レ盡レ醉。明朝相憶

(一) 歸雁北に飛びて青空に入る　(二) 笛聲遷客の春愁を誘ひ、洞庭湖に滿たしむ。（限なきをいふ）

初めて巴陵に至り(一)李十二白と同じく洞庭湖に泛ぶ

(一)楓岸紛紛として落葉多し。洞庭の秋水晩來波つ。(二)興に乘じて輕舟近遠なし。白雲明月湘娥を弔ふ。

(一) 前の李白洞庭湖の七絶參照　(二) 楚辭に「洞庭波立ち木葉下る」　(三) 興に乘じて遠近に漕ぎ廻れば、白雲明月の影、湘君の靈を弔ふに似たり。（李白「知らず何の處か湘君を弔はん」といふに應ず）

(一)李侍郎が常州に赴くを送る

雪晴れ雲散じて北風寒し。(二)楚水呉山道路難からん。今日君を送る須く醉を盡すべし。(三)明朝相憶ふも路漫漫。

(一) 李白の族、名は曄　(二) 楚の山、呉の水、前途定めて困難なるべし　(三) 道路遙かに隔る

色黄。桃花歷亂李花香。春風不ニ爲吹レ愁去。春日偏能惹レ恨長。

紅粉當レ壚弱柳垂。金花臘酒解ニ酴醾。笙歌日暮能留レ客。醉殺長安輕薄兒。

日長風煖柳青青。北雁歸飛入ニ窅冥。岳

偏に能く恨を惹いて長し。

㈠樂府題 ㈡花咲き亂るゝ貌 ㈢春風は愁を吹き散さず、春日は恨と共に長し

二

(一)紅粉壚に當つて弱柳垂る。(二)金花の臘酒酴醾を解く。(三)笙歌日暮れて能く客を留め。醉殺す長安の輕薄兒。

㈠紅粉を粧へる美人酒亭に居り、柳青々と垂る。壚(土を築き酒甕を置く處) ㈡蜀地に酴醾花多く、取つて酒を造り、醸成の後、臘月(しはす)之を閉藏し、春に至りて封を解く、金花色を成す ㈢笙歌の聲、日暮るゝまで客を留め、長安の遊蕩兒を樂ましむ

西亭春望

日長く風煖かにして柳青青。(一)北雁歸り飛んで窅冥に入る。(二)岳陽城上吹笛を聞く。能く春心をして洞庭に滿たしむ。

欲下逐二將軍一取中
右賢上。沙場走レ
馬向二居延一。遙
知漢使蕭關
外。愁見孤城
落日邊。

楊柳渡頭行
客稀。罟師盪レ
槳向二臨圻一。唯
有三相思似二春
色一。江南江北
送二君歸一。

草色青青柳

(一)將軍を逐うて右賢を取らんと欲し。沙場に馬を走らしめて居延に向ふ。(二)遙かに知る漢使蕭關の外。愁へ見る孤城落日の邊。

㊀ 將軍の跡を逐ひ、匈奴の右賢王を擒にせんとし、馬を走らせ、塞外居延に向ふ ㊁ 蕭關外に至り、居延の孤城を日の落つる邊に望み、愁思深かるべし

沈子福が江南に之くを送る

楊柳渡頭行客稀なり。(一)罟師槳を盪して臨圻に向ふ。(二)唯相思の春色に似たるあつて。江南江北君が歸るを送る。

㊀ 漁師槳(かい)を動かし、舟を岸邊に近く。罟(あみ)、圻(きし) ㊁ 江南江北、春色君が歸路に滿ち、隈なき相思の情に似たり

(一)春思二首　　賈至

草色青青柳色黃なり。(二)桃花歷亂李花香し。(三)春風爲に愁を吹き去らず。春日

獨在二異鄕一爲二
異客一。每レ逢二佳
節一倍思レ親。遙
知兄弟登レ高
處。遍插二茱萸一
少二一人一。

綠樹重陰蓋二
四隣一。青苔日
厚自無レ塵。科
頭箕踞長松
下。白眼看佗
世上人。

九月九日山中の兄弟を憶ふ（一）

獨り異鄕に在つて異客となり。佳節に逢ふ每に倍〻親を思ふ。（二）遙かに知る兄弟高きに登る處。遍く茱萸を插みて一人を少くことを。

（一）王維孝悌を以て聞ゆ、十七歲の時この詩を作る　（二）兄弟皆茱萸（前に註す）を挿みて健康を祈り、余の在らざるを悲しまん

盧員外象と崔處士興宗の林亭を過ぐ

綠樹の重陰四隣を蓋ふ。青苔日に厚うして自ら塵なし。（一）科頭にして（二）箕踞す長松の下。白眼にして（三）看る佗の世上の人。

（一）巾幘を用ひず、頭を露す　（二）箕の形に兩足を伸べて坐る　（三）一說に佗を助語とし、「看佗す」と訓ず

韋評事を送る

到二荊門一上二三峽一。莫下將二孤月一對中猿愁上。

莫レ道秋江離別難。舟船明日是長安。吳姬緩舞留レ君醉。隨意青楓白露寒。

出身仕レ漢羽林郎。初隨二驃騎一戰二漁陽一。孰知不下向二邊庭一苦上。縱死猶聞二俠骨香一。

（一）武陵五溪の一　（二）月に對して哀猿を聞き、客愁を添ふることとなしとせず、共にこゝに留るに如かず

重ねて李評事に別る

（一）道ふ莫れ秋江離別難しと。舟船明日是れ長安。（二）吳姬緩舞して君を留めて醉はしむ。隨意なれ青楓白露の寒き。

（一）別を惜みてためらふなかれ、舟は明日長安に到らん　（二）吳の美妓緩舞して醉興を助く、青楓白露江上に寒きもまゝよ

少年行　　王維

（一）出身漢に仕ふ羽林郎。初め驃騎に隨つて漁陽に戰ふ。孰れか知らん邊庭に向つて苦しまず。（二）縱ひ死すとも猶ほ俠骨の香しきを聞く。

（一）少年朝に仕へて羽林の兵となり、驃騎將軍（霍去病）の如き名將に從ひ、漁陽（安祿山兵を擧げし地）に戰ふ　（二）假令、市井の間に死すとも、俠名は千歲に香しきを得べし、空しく邊境の戰場に苦しみ、無名の鬼となるなかれ

津頭雲雨暗ニ
湘山。遷客離
憂楚地顏。遙
送ニ扁舟ー安陸
郡。天邊何處
穆陵關。

津頭の雲雨湘山(一)暗し。遷客の離憂楚地の顏(二)。遙かに扁舟を送る安陸郡(三)。天邊何れの處か穆陵關。

(一) 洞庭湖中にあり、又君山といふ (二) 遷客離愁を帶び、楚の屈原の顏容に似たり (三) 唐の安州、今の安陸に近し、その界に穆陵關あり

魏二を送別す

醉別江樓橘
柚香。江風引レ
雨入レ船涼。憶
君遙在ニ湘山
月ー。愁ニ聽淸猿ー
夢裏長。

醉別江樓橘柚香し。江風雨を引いて船に入つて涼し。憶ふ君が遙かに湘山(一)の月に在つて。(二)淸猿を愁へ聽いて夢裏に長からんことを。

(一) 前に註す (二) 睡中に猿聲を聞き、悲哀深からん

・盧溪人(一)に別る

武陵溪口駐ニ
扁舟。溪水隨レ
君向レ北流。行

武陵溪口扁舟を駐む。溪水君に隨つて北に流る。行いて荆門に到つて三峽に上らば。(二)孤月を將つて猿愁に對するなからんや。

梁園秋竹古
時烟。城外風
悲欲暮天。萬
乘旌旗何處
在。平臺賓客
有誰憐。

寒雨連江夜
入呉。平明送
客楚山孤。洛
陽親友如相
問。一片氷心
在玉壺。

(一)梁園の秋竹古時の烟。城外風悲しむ暮れんと欲する天。(二)萬乘の旌旗何の處にか在る。(三)平臺の賓客誰あつてか(四)憐まん。

(一)梁の孝王の苑、東に修竹林あり、古時の風景を想はしむ　(二)孝王漢の竇太后の愛子を以て特に天子の旌旗を賜ひ、出入萬騎東西に馳騁す　(三)孝王平臺に四方の豪傑を招き、山東游說の士、召に應ぜざるものなく、司馬相如、枚乘等、皆その中にありき　(四)今は孝王なし、たとへ俊傑の士あるも、誰か之を憐むものぞ。(暗に自ら不遇を嘆ず)

芙蓉樓に辛漸を送る

(一)寒雨江に連つて夜呉に入る。平明客を送つて楚山孤なり。(二)洛陽の親友如し相問はば。一片の氷心玉壺に在り。

(一)江上に寒雨降りそゝぐ中を、昨夜呉の地に入り、今晩芙蓉樓に送別す、君去る後、楚山の影如何に淋しからん
(二)洛陽の親友、もし近狀を問はば、余が心は「淸きこと玉壺の氷の如し」(鮑參軍の句)と告げよ

薛大が安陸に赴くを送る

萬里愁。

青海長雲暗ニ雪山一。孤城遙望玉門關。黃沙百戰穿ニ金甲一。不レ破ニ樓蘭一終不レ還。

秦時明月漢時關。萬里長征人未レ還。但使ニ龍城飛將在一。不レ教ニ胡馬度ニ陰山一。

二

青海の長雲(一)雪山暗く。孤城遙かに望む玉門關。(二)黃沙百戰金甲を穿つ。(三)樓蘭を破らずんば終に還らず。

(一) 天山の別名、夏冬雪を見る (二) 黃沙(沙漠)の中に百戰し、金甲を穿つ(鎧を著る) (三) 西域傳に「鄯善國、もと樓蘭と名づけ、王、扜泥城に治す、陽關を去る千六百里、前漢の傅介子、曾てその國に至り、王と飲み、壯士をして之を刺殺さしめ、首を持して還つて闕に至る」

三

(一)秦時の明月漢時の關。萬里長征して人未だ還らず。(二)但龍城に飛將をして在らしめば。胡馬をして陰山を度らしめじ。

(一) 邊境に明月關あり、秦漢以來兵をこゝに出し、今なほ長征す (二) もし漢の飛將軍李廣の如き名將あらば、胡馬陰山を越えて中國に侵入するの憂なからん、今はその人なきを悲しむ

梁苑

色。悔レ教三夫婿
覓二封侯一。

白草原頭望二
京師一。黄河水
流無二盡時一。秋
天曠野行人
絶。馬首東來
知是誰。

烽火城西百
尺樓。黄昏獨
坐海風秋。更
吹二羌笛一關山
月。無レ那金閨

翠樓（青樓に同じ）に登る ㊁ 忽ち陌頭の楊柳を見て青春歡樂の歡びを思ひ、その封侯を覓め、軍に從ふを止めざりしを悔ゆ

（一）出塞行

（一）白草原頭京師を望めば。黄河水流れて盡くる時なし。（三）秋天曠野行人絶え。馬首東より來るは知りぬ是れ誰ぞ。

㊀ 樂府題、橫吹曲の一 ㊁ 枯草白き廣原に立ち、遥に京師を望めば、黄河の流れ傾りなきを看るのみ ㊂ 秋天廣野の中に、孤騎東より來れるは誰ぞ、他に行人なし、余たゞ獨來れるなり

從軍行三首

（一）烽火城西百尺樓。黄昏獨坐す海風の秋。（二）更に羌笛を吹く關山の月。那ともするなし金閨萬里の愁。

㊀ 城西百尺の城樓に烽火を望み、獨夕暮に坐す、青海の秋風淋し ㊁ 羌笛「關山月」の曲を奏するを聞き、遠く家を離れし愁に堪へず

照二西宮一知二夜飲一。分明複道奉レ恩時。

白馬金鞍從二武皇一。旌旗十萬宿二長楊一。樓頭少婦鳴レ箏坐。遙見飛塵入二建章一。

閨中少婦不レ知レ愁。春日凝レ粧上二翠樓一。忽見二陌頭楊柳

㊀ もと三首の一、詩意前に同じ ㊁ 君王の行幸を夢み、覺めて眞僞を疑ひ、眞に身の薄命なりや否やを惑ふ
㊂ 燎火(かゞり)西宮を照すを見、なほ明に寵を複道に受けし時を憶ふ、夢の如く又現の如し

青樓曲 (一)

(二)白馬金鞍武皇に從ふ。旌旗十萬長楊に宿す。(三)樓頭の少婦箏を鳴して坐す。遙かに見る飛塵の建章に入るを。

㊀ 樂府題、宮苑十九の一 ㊁ 白馬金鞍の少年、天子の遊幸に扈從し、旌旗飛颭に翻り、長楊宮に宿衛す。(唐仲言曰ふ、玄宗の行幸は大約漢武と相類す、凡そ唐人の詩、武皇といふものは皆玄宗を借稱するなり) ㊂ 青樓の少婦、箏(こと)を鳴して坐すれば、萬騎遙に塵を飛ばし、天子建章宮に還幸し給ふ、意中の少年はその列中にあり

閨怨

(一)閨中の少婦愁を知らず。春日粧を凝らして翠樓に上る。(二)忽ち陌頭楊柳の色を見て。悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めしめしを。

㊀ 閨中の少婦は始め愁を知らず、たゞ夫婿の功を立てて家に歸り、富貴を極むるを思へるのみ、春日粧を凝し、

抱二雲和一深見レ月。朧朧樹色隱二昭陽一。

(一) 樂府題、怨曲二十五曲の一、班寵を失へる情を詠ず (二) 斜に雲和の瑟を抱き、簾内より月を望む。鄭玄周禮の註に「雲和はもと山の名、地良材を產し、瑟となせば其聲清亮なり」 (三) 樹影もぼろに昭陽宮を籠め、美人趙飛燕寵を受けて其中にあり

芙蓉不レ及美人粧。水殿風來珠翠香。卻恨含レ情掩二秋扇一。空懸二明月一待二君王一。

西宮秋怨 (一)

(二)芙蓉も及はず美人の粧。水殿風來つて珠翠香し。(三)卻つて恨む情を含んで秋扇を掩ひ。空しく明月を懸けて君王を待つことを。

(一) 前に同じ (二) 蓮花の美しさも、班婕粉粧の姿に如かず、水殿に風來り、珠翠（首飾りの玉と翠羽）香を吹く (三) 情を含みて顏に秋扇を蔽ひ、明月の如く、淨き心にて君王を待つ。(班婕に秋扇賦あり、自ら團扇の秋に捨てらるゝに比す。又長門賦に「明月を懸けて以て相照らす」)

眞成薄命久尋思。夢見二君王一覺後疑。火

長信秋詞 (一)

眞成の薄命か久しく尋思す。(二)夢に君王を見て覺めて後疑ふ。(三)火は西宮を照して夜飲を知る。分明なり複道恩を奉ずる時。

夜曲中聞ニ折柳一。何人不レ起故園情。

昨夜風開露井桃。未央前殿月輪高。平陽歌舞新承レ寵。簾外春寒賜ニ錦袍一。

西宮夜靜百花香。欲レ捲ニ朱簾一春恨長。斜

㊀何處にて吹くとも知らず、笛聲春風に散り、洛陽城に滿つ　㊁折楊柳の曲を聞き、懷鄕の情を起さざるものなし

春宮曲（一）

王昌齡

（二）昨夜風開く露井の桃。未央の前殿月輪高し。（三）平陽の歌舞新に寵を承け。簾外春寒うして錦袍を賜ふ。

㊀樂府題、宮苑十九曲の一　㊁昨夜風吹いて露井（屋根なき井）の桃花開き、未央殿に月高く、天子遊宴せり　㊂美しき歌伎、新に寵幸を得、簾外の春寒に錦の袍（うはぎ）を賜へり。（漢の武帝、平陽公主の第に幸し、謳者衛子夫の美を愛し、召し入れて宮中に侍せしめ、後立てて皇后とす、衛皇后是なり、因りて比す）

西宮春怨（一）

西宮夜靜かにして百花香し。朱簾を捲かんと欲して春恨長し。（二）斜に雲和を抱いて深く月を見る。（三）朧朧たる樹色昭陽隱たり。

呉歸。義士還レ家盡錦衣。宮女如レ花滿ニ春殿一。只今惟有ニ鷓鴣飛一。

一爲ニ遷客一去ニ長沙一。西望ニ長安一不レ見レ家。黄鶴樓中吹ニ玉笛一。江城五月落梅花。

誰家玉笛暗飛レ聲。散入ニ春風一滿ニ洛城一。此

滿ちしも。只今惟鷓鴣の飛ぶあり。

(一)越王勾踐呉王夫差を亡して歸り、忠義の士、みな錦衣を着、榮爵を加へらる　(二)勾踐は豪奢を極め、美女春殿に滿ちたりしも、榮華は夢の如く、今は鷓鴣の淋しげに飛べるのみ。古今註に「鷓鴣は常に日に向ひて飛び、霜露を畏る、早晩稀に出づ、鳴く聲頗る悲し」と。南方の鳥

史郎中欽と黄鶴樓上の吹笛を聽く

(一)一たび遷客となつて長沙に去る。西のかた長安を望めども家を見ず。(二)黄鶴樓中玉笛を吹く。江城五月落梅花。

(一)共に遷謫の客となり、南方長沙に向ふ　(二)笛に落梅花の曲あり、黄鶴樓中に吹き、客愁殊に深し

春夜洛城に笛を聞く

(一)誰が家の玉笛ぞ暗に聲を飛ばす。散じて春風に入つて洛城に滿つ。(二)此の夜曲中に折柳を聞く。何人か起さざらん故園の情。

樹空。布帆無レ恙掛二秋風一。此行不レ爲二鱸魚膾一。自愛二名山一入二剡中一。

ず。自ら名山を愛して剡中に入る。

㊀ 霜降りて城門の江樹落葉せり、布帆を秋風に張り、安らかにその間を下る ㊁ この行は、呉中に鱸魚の膾(すずきのなます)を味はん爲にあらず、名山水を愛し、剡縣の中に入らんとするなり。(張翰鱸膾の故事前に註す、剡縣は會稽に屬し、勝景多し)

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不レ勝レ春。只今惟有二西江月一。曾照呉王宮裏人。

蘇臺の覽古(一)

(二)舊苑荒臺楊柳新なり。(三)菱歌の清唱春に勝へず。(四)只今惟西江の月のみあつて。曾て照す呉王宮裏の人。

㊀ 呉王闔閭夫差二世の姑蘇臺 ㊁ 苑舊り臺荒れ、古の壯觀なく、柳の綠のみ年々に新し ㊂ 呉女菱(ひし)を採りつゝ歌ふ聲、春ながら荒涼の感に堪へず ㊃ 今はたゞ西江の月のみありて、曾て宮中幾多の美人を照しき。(衛萬が七言古詩參照)

越王勾踐破レ

越中懷古

(一)越王勾踐呉を破つて歸る。義士家に還つて盡く錦衣。(二)宮女花の如く春殿に

天門中斷楚江開。碧水東流至北廻。兩岸青山相對出。孤帆一片日邊來。

朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。

霜落荊門江

(一)天門中斷えて楚江開く。碧水東に流れて北に至つて廻る。(二)兩岸の青山は相對して出で。孤帆一片日邊より來る。

㊀太平府當塗縣の西南博望山と梁山と水を夾んで相對し、恰も門の如し、因て天門といふ、東流の楚水山に隨つて北折し、門を過ぎて流漸く廣まり開く　㊁兩岸に青山對立し、孤帆その間を下り恰も天上より落ち來れる如し

早く白帝城を發す

(一)朝に辭す白帝彩雲の間。千里の江陵一日に還る。(二)兩岸の猿聲は啼いて住らず。輕舟已に過ぐ萬重の山。

㊀蜀の白帝城を雲美しき曉に發し、千里の舟路、暮に江陵の地に到る　㊁兩岸に猿啼いて悽愴を極め、その聲未だ絶えざる中に、輕舟すでに萬重の山間を過ぎたり。水經注に「巫峽の沿岸、晴初霜旦、林寒く澗肅たるに至る毎に、高猿あり長嘯す、屬引淒異にして空谷響を傳へ、哀囀久しうして絶ゆ」

秋荊門を下る

(一)霜落ちて荊門江樹空し。布帆恙なく秋風に掛る。(二)此の行は鱸魚の鱠の爲なら

故人西辭二黃鶴樓一。烟花三月下二揚州一。孤帆遠影碧空盡。惟見長江天際流。

洞庭西望楚江分。水盡南天不レ見レ雲。日落長沙秋色遠。不レ知何處弔二湘君一。

故人西、黄鶴樓を辭して。(一)烟花三月揚州に下る。(二)孤帆遠影碧空に盡く。惟見る長江の天際に流るゝを。

(一) 烟花の景のどけき三月、船にて揚州に下る (二) 孤帆の影は、遙に青空に入るが如く消え、長江の水のみ天に連りて遠く流る

族叔刑部侍郎曄、及び中書舍人賈至に陪して洞庭湖に遊ぶ

(一)洞庭西に望めば楚江分る。水盡きて南天に雲を見ず。(二)日落ちて長沙秋色遠し。知らず何の處にか湘君を弔はん。

(一) 西に望めば、楚江分流し、湖水の盡くる處は、南天空濶にして雲だになし (二) 夕日の中に、長沙の秋色遠く澄み、何處に湘君を弔はんか、廟のある處を知らず。古列女傳に「有虞(舜帝)の二妃は帝堯の二女なり、長を娥皇といひ、次を女英といふ、舜方を陟り、蒼梧に死し、二妃江湘の間に死す、俗に之を湘君といふ」

天門山を望む

劍閣重關蜀北門。上皇歸馬若レ雲屯。少帝長安開二紫極一。雙懸二日月一照二乾坤一。

劍閣重ねて關す蜀の北門。上皇の歸馬雲の若く屯す。少帝長安に紫極を開き。日月を雙べ懸けて乾坤を照す。

(一) 十首の末章に當る (二) 上皇の還幸により、劍閣(蜀北門の要害)再び閉し、扈從の車馬の士、雲霞にたむろせり (三) 少帝(肅宗)は長安に卽位し給ひ、上皇の威德と共に、日月並び懸り、天下に照臨するに似たり

王昌齡、龍標の尉に左遷せらると聞き遙に此の寄あり

楊花落盡子規啼。聞道龍標過二五溪一。我寄二愁心一與二明月一。隨レ風直到夜郎西。

楊花落ち盡して子規啼く。聞道龍標五溪を過ぐと。我愁心を寄せて明月に與ふ。風に隨つて直に到らん夜郎の西。

(一) 楊花(やなぎの花)落ち盡し、子規(ほとゝぎす)啼く (二) 龍標の路は、武陵五溪(雄溪・樠溪・西溪・無溪・辰溪)を過ぐと聞く (三) 余は深き愁を月に託せんとす、風に隨ひ、夜郎の西(龍標)に到り得るものは、たゞ月あるのみ。南蠻傳に「西南の君長十を以て數ふ、夜郎最も大なり、犍爲の屬國」

黄鶴樓、孟浩然が廣陵に之くを送る

發ニ清溪一向ニ三
峽一。思レ君不レ見
下ニ渝州一。

誰道君王行
路難。六龍西
幸萬人歡。地
轉ニ錦江一成ニ渭
水一。天廻ニ玉壘一
作ニ長安一。

㊀ 峨眉山（嘉州にあり、山形眉に似る）半輪の秋月、平江の水にうつり、閃き流る ㊁ 夜、舟に乘りて清溪驛を辭し、三峽（巴峽・明月峽・巫峽）に向ふに、兩岸山高く、月を見るを得ず、終に渝州（四川重慶府）に下れり、（蛾眉、蛾眉と音相通じ、暗に或る一人を懷ふ）

(一)上皇南京に西巡する歌二首

(二)誰か道ふ君王行路難しと。六龍西に幸して萬人歡ぶ。(三)地は錦江を轉じて渭水をなし。天は玉壘を廻らして長安を作す。

㊀ 天寶十五年六月、安祿山の兵潼關に入り、己亥、京師を陷る、帝（玄宗）出でて蜀に幸す、七月庚辰蜀郡に次す、八月癸巳、皇太子皇帝の位に靈武に卽き、帝を尊んで上皇天帝と曰ふ、至德二年十月十月丁巳、皇帝京師を復す、癸亥、太子太師韋見素をして上皇を蜀郡に迎へしむ、十二月丙午、上皇蜀郡より至る、戊午大赦し、蜀郡を以て京と爲す、その長安の南に位する故なり、もと十首あり、この篇は第四首に當る ㊁ 蜀道險しくして行き難しといふも、上皇巡行して萬民歡び、蹕路極めて安らかなりき。（天子は六馬に駕す、龍は名馬） ㊂ この地に錦江ありて渭水に比すべく、玉壘山めぐりて、長安の形勢に似たり、殆んど京洛の巡幸に異らざりき

(一)二

名花傾國兩相歡。常得君王帶ㇾ笑看。解ニ釋春風無限恨一。沈香亭北倚ニ闌干一。

名花傾國兩ながら相歡ぶ。常に得たり君王の笑を帶びて看ることを。(一)春風無限の恨を解釋して。沈香亭北闌干に倚る。

(一) 春風吹き散み無限の恨も釋け、沈香亭北の欄干に、名花と貴妃と相倚りて艷を爭ふ。開元天寶遺事に「帝曰ふ獨り萱艸の憂を忘るゝのみならず、この花も亦能く憂を銷す」

客中行

蘭陵美酒鬱金香。玉椀盛來琥珀光。但使ニ主人能醉ㇾ客。不ㇾ知何處是他鄕。

蘭陵の美酒(一)鬱金香。玉椀盛り來る琥珀の光。(二)但主人をして能く客を醉はしめば。知らず何の處か是れ他鄕。

(一) 秬黍に一醸し、鬱金香艸の煮汁を和す、黄に透け、美しきこと琥珀の如し　(二) 宿舍の主人、よく余を醉はしむれば、何時しか他鄕にあるをも忘る。(醉はざれば客に堪へずの意)

峨眉山月の歌

峨眉山月半輪秋。影入ニ平羌江水一流。夜

(一)峨眉山月半輪の秋。影は平羌江水に入つて流る。(二)夜淸溪を發して三峽に向ふ。君を思へども見ず渝州に下る。

想レ容。春風拂レ檻露華濃。若非ニ羣玉山頭見一。會向ニ瑤臺月下一逢。

一枝濃艷露凝レ香。雲雨巫山枉斷腸。借問漢宮誰得レ似。可憐飛燕倚ニ新粧一。

玉山頭に見るにあらずんば。會ず瑤臺月下に向つて逢はん。

㊀ 玄宗の朝、牡丹を興慶池の東沈香亭の前に植ゑ、花正に開く時、帝楊貴妃と共に遊び、梨園の弟子の尤なるものを選みて宴樂を張る、樂人李龜年將に歌はんとするに當り、帝曰く、名花を賞し妃子に對す、いづくんぞ舊樂を用ふることをせんやと、遂に龜年に命じ、金花箋を持し、翰林供奉李白に宣賜し、立どころに清平調三章を進めしむ ㊁ 雲は貴妃の衣裳の如く、花は貴妃の容姿は似たり、春風檻（花を護るてすり）を拂ひ、露濃に牡丹開くその美しさは羣玉山の仙郷か、瑤臺の月下かに見るを得べく、到底人間界のものにはあらず。山海經に「羣玉山は西王母の居るところ」又離騷に「瑤臺の偃蹇を望み、有娀の佚女を見る」

二

（一）一枝濃艷露香を凝らす。雲雨巫山枉げて斷腸。（二）借問す漢宮誰か似るを得たる。可憐の飛燕新粧に倚る。

㊀ 貴妃の美は、一枝濃艷の牡丹の露を帶ぶる如く、天子の寵幸は秦の襄王巫山の仙女を愛せしが如し ㊁ もし似たる者を漢宮に求めば、成帝の妃趙飛燕新に粉粧せる艷姿あるのみ

三

聞道神仙不レ
可レ接。心隨ニ湖
水一共悠悠。

葡萄美酒夜
光杯。欲レ飲琵琶
琶馬上催。醉
臥ニ沙場一君莫レ
笑。古來征戰
幾人回。

雲想ニ衣裳一花

㊀岳州巴陵郡巴陵縣、羿巴蛇を殺し、骨積んで陵をなす處、又一說に古巴子の陵。洞庭湖の秋景一望の中に收まる ㊁王子年拾遺記に「洞庭山、水上に浮ぶ、下に金堂あり、數百間、玉女之に居る」 ㊂神仙は俗人と交らず容易に接し難しと聞けり ㊃君、仙化の後は再び相見ゆることを得じ、惜別の心は湖水と共に渺か遙し

涼州詞（一）

王翰

（二）葡萄の美酒夜光の杯。飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す。（三）醉うて沙場に臥す君笑ふことなかれ。古來征戰幾人か回る。

㊀開元中、西涼の都督郭知運の採進せる曲、王翰その聲に依りて作る ㊁葡萄の美酒を夜光の玉杯に盛り、飲まんとすれば、胡人馬上に琵琶を奏せり。（琵琶はもと胡地の樂、手を推して前に向ふを琵といひ、手を反して後に向ふを琶といふ） ㊂醉うて萬事を忘れ沙場に臥すを笑ふなかれ、邊地征戰の士は古來家に歸り得るもの少く、運命も知るべきのみ

清平調詞三首（一）

李白

（二）雲には衣裳を想ひ花には容を想ふ。春風檻を拂うて露華濃かなり。（三）若し群

墳塋。萬古千秋對二洛城一。城中日夕歌鐘起。山上唯聞松柏聲。

羽客笙歌此地違。離筵數處白雲飛。蓬萊闕下長相憶。桐柏山頭去不レ歸。

巴陵一望洞庭秋。日見孤峰水上浮。道

松柏の聲。

(一)洛陽城北の墓地　(二)歌樂の音

司馬道士が天台に遊ぶを送る　宋之問

(一)羽客の笙歌此地に違ひ。離筵數處に白雲飛ぶ。(二)蓬萊闕下長く相憶ふも。桐柏(三)山頭去つて歸らず。

(一)司馬承禎字は子微、天台山に隱れ、自ら白雲子と號し、仙術に長ず、中宗の朝頻りに召せども起たず、睿宗に至り、大に道教を尊ぶ、是に於て始めて山を出でて京に朝し、幾もなく、また辭して山に歸る　(二)羽化行空の術ある司馬道士は、また長安を去り、送別の筵に、白雲處々に飛べり。(道士音律に精し、因つて笙歌といふ)　(三)天子は永く仙客を憶ふも、道士は桐柏山(天台の別名)に去り、再び都に歸らざるべし

梁六を送る　張說

(一)巴陵一望洞庭の秋。日に見る孤(二)峰の水上に浮ぶを。(三)聞く道神仙接すべからずと。(四)心は湖水に隨つて共に悠悠。

作二使君一。

銅臺宮觀委二灰塵一。魏主園陵漳水濱。即今西望猶堪レ思。況復當時歌舞人。

北邙山上列二

古樂府陌上桑にある秦氏の女、邑人千乘王仁に嫁し、桑を採りて蠶を養ふ、王仁の主趙王來り、挑めども聽かず、その夫を稱揚し「東方千餘騎、夫婿上頭に居る」と云ひ堅く之を拒む (四) 余も亦他家の嫡婦を慕ひ、趙王が羅敷に挑みし如く、馬上の美人に戲れんとす、君許さるゝや否や。陌上桑に「使君南より來り、五馬立ちて踟躕す」

銅雀臺(一)　　劉廷琦

(二)銅臺の宮觀灰塵に委す。魏主の園陵漳水の濱。即今西に望んで猶ほ思ふに堪へたり。(三)況んや復た當時歌舞の人をや。

(一) 魏の武帝の臺殿、常に宮人歌妓を置く (二) 銅雀臺は灰塵となりて跡を止めず、武帝の陵墓のみ漳水のほとりにあり (三) 武帝將に死せんとする時、遺令して曰ふ、吾が伎人は皆銅雀臺に居り、六尺の床を臺上に設け、繐帳を懸けて吾が靈位とし、朝晡に脯糒の屬を供ふべし、月朝及び十五日には即ち帳に向つて伎を奏せよ、又時々雀臺の上に上り、吾が西陵の墓田を望めと

邙山　　沈佺期

(一)北邙山上墳塋列り。萬古千秋洛城に對す。城中日夕歌鐘(二)起り。山上唯聞く

水北流一。

知君書記本翩翩。爲許從レ戎赴二朔邊一。紅粉樓中應レ計レ日。燕支山下莫レ經レ年。

紅粉青蛾映二楚雲。桃花馬上石榴裙。羅敷獨向二東方一去。謾學二他家一

の愁を催すのみ

蘇綰　書記に贈る

(一)知りぬ君が書記本翩翩。(二)爲に許す戎に從つて朔邊に赴くことを。(三)紅粉樓中應に日を計ふべし。燕支山下に年を經ることなかれ。

㊀朔方節度使の掌書記。魏の文帝の書に「元瑜書記翩々」註に「美しき貌」㊁從軍して北地に行くを許さる ㊂粧樓中の人は、日を數へて君の歸るを待つならん、燕支山下に留り、空しく歲月を費すなかれ。(山に紅藍を產し、臙脂となすべし、暗・その地の美女に押るゝなかれとの意を寓す)

戲に趙使君の美人に贈る

(一)紅粉青蛾楚雲に映ず。(二)桃花馬上の石榴裙。(三)羅敷獨東方に向つて去る。(四)謾に他家を學んで使君と作らん。

㊀紅粉青娥の粧美しく、巫山の神女朝雲に似たり。大業拾遺記に「隋の煬帝の宮女、爭つて長娥(長き眉)を描き、司宮、日に螺子黛五斛を給す、娥子綠と號す」㊁桃花馬(黃白雜毛の馬)に乘り、石榴花の如き紅き裾を曳く ㊂

九月九日望鄉臺。他席他鄉送レ客杯。人情已厭ニ南中苦一。鴻雁那從ニ北地一來。

遲日園林悲ニ昔遊一。今春花鳥作ニ邊愁一。獨憐京國人南竄。不レ似ニ湘江

卷之七

七言絶句

(一)蜀中九日　王勃

九月九日望鄉臺。(二)他席他鄉客を送るの杯。(三)人情已に南中の苦を厭ふ。鴻雁那ぞ(四)北地より來る。

(一) 斥けられて蜀にある時の作　(二) 成都の北、隋の蜀王秀築く　(三) 他郷の宴席に客を送る杯を擧ぐ　(四) 長安の地

(一)湘江を渡る　杜審言

(二)遲日園林昔遊を悲み。(三)今春花鳥邊愁を作す。獨り憐む京國の人南竄せられて。湘江の水の北流するに似ざるを。

(一) 北流二千里、長沙に至り、洞庭湖に入る　(二) 永き春の日、園林に遊びし昔を憶ふ　(三) 今春は花も鳥も邊土

不レ得レ到ニ遼西一。

北斗七星高。
哥舒夜帶レ刀。
至レ今窺ニ牧馬一。
不三敢過ニ臨洮一。

偶來ニ松樹下一。
高レ枕石頭眠。
山中無ニ暦日一。
寒盡不レ知レ年。

㊀曉に黄鶯を起し、花枝上に啼かしむるなかれ ㊁啼く時は妾が夢を醒し、良人を慕ひて遼西に行くを得ざらしむ

(一)哥舒歌

西鄙の人

北斗七星高し。哥舒夜刀を帶ぶ。今に至るまで牧馬を窺ふも。敢て(二)臨洮に過ぎらず。

㊀通鑑に「天寶十二年、哥舒翰を以て河西の節度使を兼ねしめ、同十四年、副元帥となす、積石軍、毎歳麥熟すれば杜蕃輙ち來つて之を刈る、哥舒翰兵をその側に伏せ、虜至つて之を夾擊す、是より敢て復來らず」と。西鄙の人因つて之を歌ふ ㊁陝西の地、萬里の長城の起點

人に答ふ

太上隱者

(一)偶々松樹の下に來つて。枕を高うして石頭に眠る。(二)山中暦日なし。寒盡れども年を知らず。

㊀偶々松下に來り、廬を結びて安らかに石邊に眠る ㊁山中には暦なく、寒さ盡くるも、年の新なるを知らず

漢國山河在。
秦陵草樹深。
暮雲千里色。
無二處不一ㇾ傷ㇾ心。

聞道黃花戍。
頻年不ㇾ解ㇾ兵。
可ㇾ憐閨裏月。
偏照二漢家營一。

打二起黃鶯兒一。
莫ㇾ敎二枝上啼一。
啼時驚二妾夢一。

(一)漢國山河あり。秦陵草樹深し。(二)暮雲千里の色。處として心を傷ましめざるなし。

㊀漢の山河は昔の如きも、秦王の陵墓は草樹深く茂る ㊁暮雲千里の遠きに眺め、心を傷めざる處なし。(亦、唐室の衰微を歎く)

(一)伊州歌二首　　無名氏

聞說(二)黃花戍。頻年兵を解かずと。(三)憐むべし閨裏の月。偏に漢家の營を照す。

㊀西北の邊 、伊吾の地、隋の末內屬し、伊吾郡を置く、唐の貞觀四年、更にその地を割ちて西伊州となす ㊁北平郡の地、白狼・紫蒙・昌黎等、十二戍壘の一 ㊂妾が空閨を照す月は、亦漢家營上の將をも照さん、良人の懷しさよ

又

(一)黃鶯兒を打起して。枝上に啼かしむるなかれ。(二)啼く時妾が夢を驚かして。遼西に到るを得ざらしむ。

無二復侍臣知一。

勸レ君金屈巵。
滿酌不レ須レ辭。
花發多二風雨一。
人生足二別離一。

落日五湖遊。
烟波處處愁。
浮沈千古事。
誰與問二東流一。

㊀ 文宗の大和九年、宦者仇子良、神策中尉となる、十一月、鄭注王涯等、之を誅せんとして、却つて殺さる、自後、殺生除拜、皆中尉に決し、天子すら預り知ることを得ず ㊁ 遊幸少く、輦路には秋草を生じ、上林苑に花咲き滿つるも、昔の如き樂みなし ㊂ 高處に上り、感慨極りなきも、侍臣すらよく知るものなし

酒を勸む　于武陵

君に勸む金屈の巵(一)。滿酌辭すべからず。花發いて風雨多く(二)。人生別離足る。

㊀ 金の把手(とつて)ある盃 ㊁ 花に雨多く、人生に別離多し、花あり友ある時、醉ひて歡を盡し給へ

秋日湖上　薛瑩

落日五湖に遊ぶ(一)。烟波處處愁ふ。浮沈千古の事(二)。誰と與に東流に問はん。

㊀ 蘇州太湖(前に註す) ㊁ 世に變りなきは、東流の水あるのみ、誰と共に古來の盛衰を問はんか。(唐室の衰微を愁む)

慈恩塔に題す　荊叔

郎今到二何處一。
不レ恨二歸來遲一。
莫下向二臨邛一去上。

松下問二童子一。
言師採レ藥去。
只在二此山中一。
雲深不レ知レ處。

輦路生二秋草一。
上林花滿レ枝。
憑レ高何限意。

(三)臨邛に向つて去ることなかれ。

(一)樂府題、別離十九曲の一　(二)史記に「卓文君は蜀郡臨邛の富人卓王孫の女、新に寡し、音を好む、司馬相如卓氏に飲むに及び、琴心を以て之を挑む、文君心悦んで之を好し、夜亡げて相如に奔る、相如與に馳せて成都に歸れば、家徒に四壁立つのみ」と。君も亦遠地に行きて美人を見、他心を生じ給ふなかれ

隱者を尋ねて遇はず　賈島

松下童子に問へば。(一)言ふ師は藥を採つて去ると。(二)只此の山中に在らん。雲深うして處を知らず。

(一)師の隱者は藥を採りに行かれしといふ　(二)山中には雲深く籠め、その所在を知り難し

宮中題(一)　文宗皇帝

(二)輦路秋草を生じ。上林花枝に滿つ。(三)高きに憑る何限の意。復た侍臣の知るなし。

西北是融州。

何處秋風至。
蕭蕭送雁羣。
朝來入庭樹。
孤客最先聞。

馬嘶白日暮。
劍鳴秋氣來。
我心渺無際。
河上空徘徊。

欲別牽郎衣。

秋風引（一）　劉禹錫

何の處か秋風至る。蕭蕭として雁羣を送る。（二）朝來庭樹に入り。（三）孤客最も先づ聞く。

（一）曲といふに近し　（二）秋風庭樹に入りて鳴る　（三）孤客愁多く、人に先ちて秋聲を聞く

鞏路感懷　呂溫

馬嘶いて白日暮れ。（一）劍鳴つて秋氣來る。（二）我が心渺として際なし。河上空しく徘徊す。

（一）秋風吹き來り、腰間の劍、金氣に感じ鳴る　（二）我が愁極りなし

（一）古別離　孟郊

別れんと欲して郎が衣を牽く。郎今何れの處にか到る。歸來の遲きを恨みず。

沅湘流不レ盡。
屈子怨何深。
日暮秋風起。
蕭蕭楓樹林。

小苑鶯歌歇。
長門蝶舞多。
眼看春又去。
翠輦不ニ曾過一。

荒山秋日午。
獨上意悠悠。
如何望レ鄕處。

(一)沅湘流れて盡きず。屈子怨何ぞ深き。日暮秋風起り。(二)蕭蕭たり楓樹林。

㊀ 長沙にありて、楚の三閭大夫屈原を祀る。史記に「屈原は楚と同姓なり、博聞強志なり、懷王屈原をして[illegible]の令たらしむ、上官大夫之を奪はんと欲す、屈原與へず、因つて之を讒し、王之を疏んず、故に憂愁幽思して離騷を作る、頃襄王怒つて之を遷す、乃ち懷沙賦を作り、自ら汨羅に投じて死す」 ㊁ 沅・湘の流今に盡きず、屈原の怨は水と共に深し ㊂ 日暮秋風起る時、楓樹の林、淋しげに鳴る。離騷に「湛々たる江水、上に楓あり」

(一)思君恩　令狐楚

(一)小苑鶯歌歇み。(二)長門蝶舞多し。(三)眼看る春又去ることを。翠輦曾て過らず。

㊀ 樂府題 ㊁ 芙蓉小苑 ㊂ 漢の陳皇后退居の宮 ㊃ 春すでに去るも、天子の翠輦（鳳形をなし、飾るに翠羽を以てす）過ぎり給はず、容顏の衰ふるを悲む

柳州蛾山に登る(一)　柳宗元

荒山秋日午なり。獨上つて意悠悠。如何ぞ鄕を望む處。(二)西北是れ融州。

㊀ 蛾山に作る、柳州府城の西 ㊁ 近き融州の見ゆるのみ、故鄕の遙きを悲む

知レ有二前期在一。
難レ分此夜中。
無下將二故人酒一。
不上及二石尤風一。

前期(一)の在るあるを知れども。分れ難し此の夜の中。故人の酒を將つて。石尤風(二)に及ばずとするなかれ。

㊀ 君に豫期の旅程あり、强ひて留め難きも、今夜の中に別るゝに忍びず ㊁ 願くは、我酒の力を以て石尤風（舟行を妨ぐる逆風）に及ばずとせず、留りて歡を盡し給へ。江湖紀聞に「昔、石氏の女あり、嫁して尤郎の婦となり、情好甚篤し、尤、商となりて遠行す、妻之を阻むるも從はず、終に出でて久しく歸らず、妻之を憶うて病み、死するに臨み、長嘆して曰く、吾れその行を阻むる能はず、以て此に至れるを恨む、今商旅にして遠行するものあらば、吾當に大風となり、天下の婦人のために之を阻むべきなりと、自後、商旅の船を發するに打頭の逆風に遇へば、則ち謂つて石尤風といふ」

幽州　　李益

征戍在二桑乾一。
年年薊水寒。
殷勤驛西路。
此去向二長安一。

征戍桑乾(一)にあり。年年薊水寒し。殷勤(二)にす驛西の路。此より去つて長安に向ふ。

㊀ 桑乾河附近の原 ㊁ 心深く驛西の路を望む、故郷長安に通ずる路なり。殷勤は慇懃に同じ

三閭廟(一)　　戴叔倫

返照入閭巷。
憂來誰共語。
古道少人行。
秋風動禾黍。

月黑雁飛高。
單于遠遁逃。
欲將輕騎逐。
大雪滿弓刀。

何か遊ぶことを得んや、余が生命の短きを怕る

秋日　　耿湋

返照閭巷に入る。憂へ來つて誰と共にか語らん。古道人行少なり。秋風禾黍を動かす。

一 村の小路　二 古道に人の往來少く、秋風禾黍(きびの類)を動かすのみ、戰後の景荒涼たり

張僕射塞下曲に和す　　盧綸

月黑うして雁飛ぶこと高し。單于遠く遁逃す。輕騎を將つて逐はんと欲すれば。大雪弓刀に滿つ。

一 征戍十五曲の一　二 單于(匈奴酋長の稱)戰破れて遠く逃ぐ　三 輕鋭の騎を率ゐて逐はんとすれば、大雪俄かに弓刀に滿つ

盧秦卿に別る　　司空曙

林中觀レ易罷。
溪上對レ鷗閑。
楚俗饒二詞客一。
何人最往還。

花枝出二建章一。
鳳管發二昭陽一。
借問承レ恩者。
雙蛾幾許長。

歲月人間促。
烟霞此地多。
慇懃竹林寺。
更得二幾回過一。

林中(一)易を觀罷んで、溪上鷗に對して閑ならん。(二)楚俗詞客饒し。何人か最も往還する。

(一)易書　(二)古の詩人、屈原・宋玉等、皆楚に出づ

婕妤怨　皇甫冉

(一)花枝建章を出で。鳳管昭陽に發す。借問す恩を承くる者。(二)雙蛾幾許か長き。

(一)花枝、建章宮の外に出で、鳳鳴に似たる笙、昭陽宮(趙飛燕の居)に起り、皆の宴樂酣なり　(二)恩寵を承くる人は、雙の蛾眉を如何に長く畫けるにや

竹林寺に題す　朱放

(一)歲月人間促り。烟霞此の地に多し。(二)慇懃にす竹林寺。(三)更に幾回か過ぐることを得ん。

(一)人生、歲月の過ぐること早く、此の地には烟霞の幽景多し　(二)深く心を竹林寺にとどむ　(三)この後た幾

遠聽二江上笛一。
臨レ觴一送レ君。
還愁獨宿夜。
更向二郡齋一聞。

故園渺何處。
歸思方悠哉。
淮南秋雨夜。
高齋聞二雁來一。

江笛を聽き陸侍御を送る

遠く江上の笛を聽き。觴に臨んで㈠一に君を送る。㈡還つて愁ふ獨宿の夜。更に郡齋に向つて聞かんことを。

㈠送別の杯をあげ、君を送る ㈡この後、獨り郡齋(郡守の私居)に宿し、笛聲を聞かんことを怕る、今夜の悲を思ひ起すべければなり

雁を聞く

故園渺として何れの處ぞ。歸思正に悠なるかな。㈠淮南秋雨の夜。㈡高齋雁の來るを聞く。

㈠淮水の南、揚州の地 ㈡高樓に同じ

李澣に答ふ

相逢劇孟家。
寸心言不レ盡
前路日將レ斜。

とす。

◯蓊趙、悲歌の士に似たる余は、漢の俠客劇孟の如き者に逢ひ、其家に遊ぶ ◯心中の事を語り盡さざるに、前途に日暮れんとし、身は漸く老ゆるに似たり

咫尺愁二風雨一。
匡廬不レ可レ登。
祇疑雲霧窟。
猶有二六朝僧一。

江行無題

咫尺風雨を愁へ。匡廬登るべからず。祇疑ふ雲霧の窟。猶ほ六朝の僧あるかと。

◯風雨に妨げられ、近き廬山に登るを得ず ◯山上なる雲霧深き巖窟に、六朝の僧(惠遠・支遁など)なほ住めるかと思はるゝのみ。

懷レ君屬二秋夜一。
散歩咏二涼天一。
山空松子落。
幽人應レ未レ眠。

秋夜丘二十二員外に寄す

韋應物

君を懷うて秋夜に屬す。散歩涼天に咏ず。山空しうして松子落つ。幽人應に未だ眠らざるべし。

◯松の實 ◯世を遁れ、閑居する人、丘二十二員外

渺渺戍烟孤。
茫茫塞艸枯。
隴頭那用閉。
萬里不防胡。

絶漠大軍還。
平沙獨戍閒。
空留一片石。
萬古在燕山。

燕趙悲歌士。

平蕃曲二首　劉長卿

(一)渺渺として戍烟孤なり。茫茫として塞艸枯る。(二)隴頭那ぞ閉づることを用ひん。萬里胡を防がず。

㊀ 樂府題、胡を平げて、凱旋するを歌ふ ㊁ 廣き沙漠に戍營の烟淋しく、塞(とりで)の邊に寒草枯る ㊂ この後は隴山の諸關を閉すに及ばず、胡兵已に平ぎ、萬里防禦の要なければなり

其二

(一)絶漠大軍還る。平沙獨戍閒なり。(二)空しく一片の石を留めて。萬古燕山に在り。

㊀ 遠き沙漠より大軍歸り、戍營稀にして淋し ㊁ たゞ一片の石を留めて永く燕然山にあるのみ(後漢の竇憲、車騎將軍となり、北單于を破りて燕然山に登り、石に刻みて功を勒し、漢の威德を紀し、班固をして銘を作らしむ)

俠者に逢ふ　錢起

(一)燕趙悲歌の士。相逢ふ劇孟の家。(二)寸心言ひ盡さざるに。前路日將に斜ならん

冷艷全欺レ雪。
餘香乍入レ衣。
春風且莫レ定。
吹向二玉階一飛。

綿連滻川迴。
杳渺鴉路深。
彭澤興不レ淺。
臨レ風動二歸心一。

（一）左掖の梨花　　丘爲

冷艷全く雪を欺き。餘香乍ち衣に入る。（二）春風且つ定るなく。吹いて玉階に向つて飛ぶ。

（一）宣政殿左側の門　（二）春風吹き定らず、梨花を玉階に飛ばす。（蓋し眼前の光景によつて近侍を望むの思を寓す）

九日元魯山北城に登り留別するに陪す（一）　　蕭穎士

（二）綿連として滻川廻かに。杳渺として鴉路深し。（三）彭澤興淺からず。風に臨んで歸心を動かす。

（一）元德秀字は紫芝、河南の人、家貧にして魯山の令たらんことを求め、任期滿ちて歸るに、笥に一縑を餘すのみ、決然として柴車に駕して去る、天下その行を高しとし、之を名云はずして、たゞ元魯山と稱す　（二）滻川の水遙かにつゞき流れ、鴉路はてしなく遠し。（漢の光武北河朔に走り、汝州の境に到りて路を失ふ、時に鴉あり、馬前に導き、始めて達するを得たり、故に名づけて鴉路と稱す）　（三）彭澤の令陶淵明に似たる元魯山が、風景を慕ひ、歸郷の途に上る

終南陰嶺秀。
積雪浮雲端。
林表明二霽色一。
城中増二暮寒一。

（一）終南陰嶺秀づ。積雪浮雲の端。（二）林表霽色明かなり。城中暮寒を增す。

㊀ 終南の陰嶺（山の北面）高く聳え、山上の積雪浮雲のほとりにあり ㊁ 林外には晴霽明かなるも、長安城中には暮寒を增す。（殘雪の候）

相を罷むる作　李適之

避レ賢初罷レ相。
樂レ聖且銜レ杯。
爲問門前客。
今朝幾箇來。

（一）賢を避けて初めて相を罷め。聖を樂しんで且つ杯を銜む。（二）爲に問ふ門前の客。今朝幾箇か來る。

㊀ 七言古詩飲中八仙歌、左相が日興の一節參照 ㊁ 今朝は幾人の客あらんか、恐らくは寂しかるべし

五叔京に入るを送り奉り兼ねて綦毋三に寄す　李頎

陰雲帶二殘日一。
悵レ別此何時。
欲レ望二黄山道一。
無レ由レ見二所思一。

陰雲殘日を帶び。別を悵む此れ何の時ぞ。（一）黄山の道を望まんと欲すれども。（二）所思を見るに由なし。

㊀ 京兆槐里縣、綦氏の在るところ ㊁ 思慕する綦氏

渭水東流去。
何時到雍州。
憑添兩行涙。
寄向故園流。

白日依山盡。
黃河入海流。
欲窮千里目。
更上一層樓。

(一)渭水を見て(二)秦川を思ふ

渭水東流し去る。何の時か(三)雍州に到らん。(四)憑つて兩行の涙を添へて。寄せて故園に向つて流さん。

(一)隴西首陽の鳥鼠山より出で、東流して長安の京兆に至り、黃河に合流す　(二)長安の川　(三)長安の地　(四)兩眼の涙を渭水に添へ、故鄕長安の地に送らん

(一)鸛鵲樓に登る　王之渙

白日山に依つて盡き。黃河海に入つて流る。(二)千里の目を窮めんと欲して。更に(三)一層樓に上る。

(一)平陽府蒲州城にありて、鸛鵲(水鳥)の形を屋上に置く、東南に中條山あり　(二)日は看る〳〵山に入り、黃河は遠く海に注ぐ　(三)樓上に千里の大景を眺めんとし、更に一層の高處に上る

終南餘雪を望む　祖詠

る所以のものは、綈袍戀々、故人の意ある 以てのみ」と ㊂ すでに天下の士、秦の宰相たるを知らず、却って綈衣無官の舊范叔となして見る

田家春望

出レ門何所レ見。
春色滿二平蕪一。
可レ歎無二知己一。
高陽一酒徒。

門を出でて何の見る所ぞ。(一)春色平蕪に滿つ。歎ずべし知己なきを。(二)高陽の一酒徒。

㊀ 春色、平濶なる草原に滿つ ㊁ 史記に「酈食其、初め沛公を見んと欲す、公儒生なるを以て見ず、酈生劍を按じて曰く、吾は高陽の酒徒なり、儒生にあらず、沛公之を見る」と。余も亦之に類せり

行軍九日長安の故園を思ふ

岑参

強欲二登レ高去一。
無二人送レ酒來一。
遙憐故園菊。
應下傍二戰場一開上。

(一)強ひて高きに登り去らんと欲するに。人の酒を送り來るなし。(二)遙かに憐む故園の菊。應に戰場に傍うて開くべし。

㊀ 重陽の例により、高處に登りて遊ばんとするも、淵明閑居の如く、酒を送り與ふる人なし ㊁ 故園の菊は、今、戰亂の中に咲くならんと遙に憶ひて憐む

君家住ニ何處一。
妾住在ニ橫塘一。
停レ船暫借問。
或恐是同鄉。

(一)君が家何の處に住す。妾住して橫塘に在り。(二)船を停めて暫く借問す。(三)或は恐る是れ同鄉。

㊀ 樂府遺聲に「長干行は、都邑三十四曲の一、長干の婦女、賈客を留め、媚を賣るを事とし、舟を以て家となす」 ㊁ 君は何處の人ならんか、妾が家は彼處に橫ふ塘（つゝみ）にあり ㊂ 船をとゞめて問ふ、君と同鄉ならんやも知れず。（巧に親みを求むる詞）

詠史(一)　高適

尙有ニ綈袍贈一。
應レ憐ニ范叔寒一。
不レ知ニ天下士一。
猶爲ニ布衣看一。

(二)尙ほ綈袍の贈あり。應に范叔の寒を憐むべし。(三)天下の士なるを知らず。猶ほ布衣の看を作す。

㊀ 史上の人物事實等を詠ず ㊁ 史記に「范雎字は叔、先に、魏の中大夫須賈に事ふ、賈齊に使し、雎從ふ、齊王雎の辯口を聞き、金十斤を賜ふ、賈、雎が國の陰事を以て齊に告ぐるを疑ひ、歸つて其相魏齊に語る、齊大に怒り、雎を笞擊す、雎佯り死し、亡匿して姓名を更へ、張祿といひ、秦に入り昭王に說く、昭王拜して相となす、賈秦に使す、雎微行して賈を見る、賈意に之を哀み、留めて共に飲食して曰く、范叔、一寒（貧困）此の如きかと、綈袍（綿入のどてら）を取りて之に贈る、雎因つて賈のために御して秦の相門に入る、雎まづ入り、待つことやゝ久し、門下に問うて大に驚き、自ら賣らるゝを知り、肉袒膝行して死を請ふ、雎曰く、汝が罪三あり、然れども死なきを得

不レ知二松林事一。
但有二麏麚跡一。

萬國尚戎馬。
故園今若何。
昔歸相識少。
早已戰場多。

江碧鳥逾白。
山青花欲レ然。
今春看又過。
何日是歸年。

をじか・めじかの足跡を見るのみ

復た愁ふ　杜甫

（一）萬國尚ほ戎馬。故園今若何。（二）昔歸りしとき相識少く。早く已に戰場多し。

（一）諸國なほ戰へり、故郷は今如何ならん　（二）曾て歸りし時すら、知人すでに少く、戰場のみ多かりき、況んや今日をや

絶句

江碧にして鳥逾ゝ白く。（一）山青うして花然えんと欲す。今春看ゝ又過ぐ。（二）何の日か是れ歸年。

（一）山青く、花の赤きこと火の燃ゆる如し　（二）故郷に歸るは何時ならんか

（一）長干行　崔顥

仗レ劍行ニ千里一。
微軀敢一言。
曾爲ニ大梁客一。
不レ負ニ信陵恩一。

(一)劍を仗いて千里に行く。微軀敢て一言せん。(二)曾て大梁の客となり。信陵の恩に負かず。

㊀劍を仗いて、千里に行くに臨み、余は敢て一言せんとす　㊁君が門下に客たりし身は、この後高恩に負くことあらじ。(魏　大梁に都し、公子信陵君、食客三千人、田太守に比す)

結レ廬古城下。
時登古城上。
古城非ニ疇昔一。
今人自來往。

(一)孟城坳　裴迪

盧を結ぶ古城の下。時に登る古城の上。(二)古城疇昔にあらず。今人自ら來往す。

㊀王維輞川別業二十景の一、孟城の跡の凹地　㊁古城、昔と異り、人の往來するに任す

日夕見ニ寒山一。
便爲ニ獨往客一。

(一)鹿柴

(二)日夕寒山を見。便ち獨往の客となる。(三)松林の事を知らず。(四)但麏麚の跡あり。

㊀同じく二十景の一　㊁日夜寒山を見んため、獨、輞川を過ぐ　㊂松林の中は如何なる處なるを知らず　㊃

含レ情無二片言一。

㊀前に同じ　㊁鞭を鳴して酒亭に入り、美服を着て娼家に遊ぶ　㊂娼婦の心倣り、一時に百萬錢を費すも、ただ情を含みて迎ふるのみ、客を喜ばすべき片言もなし

一雁過二連營一。
繁霜覆二古城一。
胡笳在二何處一。
半夜起二邊聲一。

關山月（一）

一雁連營を過ぎ。繁霜古城を覆ふ。（二）胡笳何れの處にか在る。（三）半夜邊聲を起す。

㊀樂府題、鼓角横吹曲の一　㊁胡笳を吹くは何處ならん　㊂夜半邊境の聲をなし、悲哀の情に堪へず

映レ門淮水綠。
留レ騎主人心。
明月隨二良掾一。
春潮夜夜深。

郭司倉を送る　王昌齡

門に映じて淮水綠なり。（一）騎を留む主人の心。（二）明月良掾に隨ひ。（三）春潮夜夜深し。

㊀騎馬の郭氏を留むるは、惜別の情深きためなり　㊁月は、良掾（よき官屬）郭氏に隨ひ、到る處に照すならん　㊂淮水の春潮、、夜々余の愁とともに深し

武陵の田太守に答ふ

洛陽訪＝才子＿。江嶺作＝流人＿。聞說梅花早。何如＝此地春＿。

洛陽に才子を訪へば。江嶺に流人となる。(二)聞説梅花早しと。何ぞ此の地の春に如かん。

(一)袁拾遺　(二)江嶺の地は氣候暖く、梅花早しと聞けども洛陽の春には如かざるべし。南康記に「太庾嶺梅多くして先づ發す」

(一)洛陽道、呂四郎中に獻ず　儲光義

大道直如レ髮。春日佳氣多。五陵貴公子。雙雙鳴＝玉珂＿。

(二)大道直うして髪の如く。春日佳氣多し。五陵の貴公子。(三)雙雙玉珂を鳴らす。

(一)樂府題、李延年、横吹二十八曲の一　(二)詩經小雅に「綢直髮の如し」註に「密直の義」　(三)並び進む馬、珂(轡の玉飾り)を鳴らす

(一)長安道

鳴鞭過＝酒肆＿。袨服遊＝倡門＿。百萬一時盡。

(二)鳴鞭酒肆に過ぎり。袨服倡門に遊ぶ。(三)百萬一時に盡すも。情を含んで片言なし。

遣二卻珊瑚鞭一。
白馬驕不レ行。
章臺折二楊柳一。
春日路傍情。

遊人五陵去。
寶劍直千金。
分レ手脫相贈。
平生一片心。

春眠不レ覺レ曉。
處處聞二啼鳥一。
夜來風雨聲。
花落知多少。

（一）珊瑚の鞭を遣卻して。白馬驕つて行かず。（二）章臺楊柳を折る。春日路傍の情。

㈠ 珊瑚の鞭を遺し、白馬躍りて進まず ㈡ 章臺花柳の巷に、柳枝を折りて鞭に代ふ

朱大秦に入るを送る　孟浩然

（一）遊人五陵に去る。寶劍直千金。（二）手を分つとき脫して相贈る。平生一片の心。

㈠ 長安繁華の地にして、俠客多し ㈡ 別に臨み、腰間、寶劍を脫し贈る、平生親交の心はこの劍に籠りたり

春曉

（一）春眠曉を覺えず。處處啼鳥を聞く。（二）夜來風雨の聲。花落つること知りぬ多少ぞ。

㈠ 春眠を貪りて曉を知らず、覺むれば處々に啼る鳥あり ㈡ 昨夜風雨の聲を聞けり、落花定めて多かるべし

洛陽に袁拾遺を訪うて遇はず

空山不レ見レ人。
但聞二人語響一。
返景入二深林一。
復照青苔上。

獨坐幽篁裏。
彈レ琴復長嘯。
深林人不レ知。
明月來相照。

長信宮中草。
年年愁處生。
時侵二珠履跡一。
不レ使二玉階行一。

空山人を見ず。但た人語の響を聞く。(二)返景深林に入り。復た照す青苔の上。

(一) 鹿を飼ふ園柵、王維輞川別業二十景の一 (二) 夕日の光深林に入り、青苔の上を照すのみ、四境幽邃なり

竹里館

(二)獨坐す幽篁の裏。琴を彈じて復長嘯す。(三)深林人知らず。明月來つて相照す。

(一) 同じく二十景の一 (二) 竹林の中に獨坐し、琴を彈じ、また、うそぶく (三) 林深くして人の往來なく、明月の來り照すのみ

長信草　　崔國輔

(一)長信宮中の草。年年愁處に生ず。(二)時に珠履の跡を侵して。玉階に行かしめず。

(一) 班婕妤の長信宮中の草 (二) 草茂りて、天子行幸の跡を沒し、玉階に進むべき道もなし。珠履（珠の飾りある

少年行

怪來妝閣閉。
朝下不ニ相迎一。
總向ニ春園裏一。
花間笑語聲。

已見ニ寒梅發一。
復聞ニ啼鳥聲一。
愁心視ニ春草一。
畏下向ニ玉階一生上。

(一)班婕妤

(二)怪來妝閣閉ぢ。朝より下つて相迎へず。總て春園の裏に向ふも。(三)花間笑語の聲のみ。

㊀ 漢宮の美人、班姫、初め成帝の愛幸を受けしが、趙飛燕寵を得るに及び、長信宮に退きて、その妬みを避く ㊁ 常に粧閣を閉ぢ、朝見を了へて歸るも、人を迎へ入るゝことなし ㊂ たまたま春園に遊ぶとも、強ひて花間に笑語するのみ、寵を爭はんとする心なし

雜詩

(一)已に寒梅の發くを見。復啼鳥の聲を聞く。(二)愁心春草を視。玉階に向つて生ぜんことを畏る。

㊀ 寒梅開き、鳥鳴きて、春は空しく過ぐ ㊁ 君王の行幸なく、草の玉階に生ぜんことを恐るゝのみ

(一)鹿柴

只有二敬亭山一。

㊀衆鳥も孤雲も皆飛び去り、山上極めて靜なり ㊁日夕相看て厭かざるものは、余と敬亭山とあるのみ

京兆の韋參軍が東陽に量移せらるゝを見る(一)

潮水還歸レ海。
流人卻到レ呉。
相逢問二愁苦一。
涙盡日南珠。

(二)潮水還つて海に歸し。流人卻つて呉に到る。相逢うて愁苦を問へば。(三)涙は盡く日南の珠。

㊀始め閩海の地驩州に謫せられ、後東呉の地、婺州東陽郡に移さる ㊁潮の海に歸る如く、流人も歸朝を許さるべきに、韋氏は今僅に呉に到れり ㊂逢うて愁苦如何と問へば、涙は流盡せりといふのみ。洞冥記に「日南(閩海の地)の人長七尺、象に乘りて海底に入り、寶物を鮫人の宅に求めて涙珠を得たり、卽ち鮫人泣く所の珠なり」

(一)臨高臺、黎拾遺昕を送る　王維

相送臨二高臺一。
川原杳何極。
日暮飛鳥還。
行人去不レ息。

相送つて高臺に臨めば。(二)川原杳として何ぞ極らん。日暮飛鳥還り。(三)行人去つて息はず。

㊀樂府題、漢の鐃歌十八曲の一 ㊁遙にして極りなし ㊂道程遠く、行人息ふことなし

美人捲珠簾。
深坐顰蛾眉。
但見涙痕濕。
不知心恨誰。

白髪三千丈。
縁愁似箇長。
不知明鏡裏。
何處得秋霜。

衆鳥高飛盡。
孤雲獨去閑。
相看兩不厭。

美人珠簾を捲き。(二)深坐して蛾眉を顰む。(三)但涙痕の濕ふを見る。知らず心誰をか恨むる。

(一)樂府題　(二)美人の眉、形蛾の鬚の如し　(三)涙に袖の濕ふを見るのみ、誰を怨めりとも知らず

秋浦歌(一)

(二)白髪三千丈。愁に縁つて箇の似く長し。(三)知らず明鏡の裏。何の處より秋霜を得たる。

(一)李白謫せられて宣城に來り、秋浦の歌十七首を作る、この首はその第十四首にあたる　(二)白髪極めて長し　(三)鏡中には、何處より霜の降りしにや、白く見ゆる事よ

獨り敬亭山に坐す

(一)衆鳥高く飛び盡し。孤雲獨り去つて閑なり。(二)相看て兩ながら厭はざるは。只敬亭山有るのみ。

邊地鶯花少。
年來未レ覺レ新。
美人天上落。
龍塞始應レ春。

牀前看二月光一。
疑是地上霜。
擧レ頭望二山月一。
低レ頭思二故鄕一。

の怨みを知る人なし

洛陽の李少府と永樂公主(一)の蕃に入るを觀る　孫逖

邊地鶯花少し。年來れども未だ新なるを覺えず。(二)美人天上より落つ。龍塞始めて應に春なるべし。

(一) 玄宗皇帝の開元三年、契丹の首領、李失活、その種落を率ゐて歸伏す、乃ち封じて松漠郡王となし、楊氏の女を永樂公主に封じ、之に賜嫁す　(二) 美人(永樂公主)都より下り、龍城の邊塞は、始めて春を知るなるべし

靜夜思(一)　李白

(二)牀前月光を看る。疑ふらくは是れ地上の霜。頭を擧げて山月を望み。頭を低れて故鄕を懷ふ。

(一) 樂府題、客思を述ぶ　(二) 月光白く地に流れ、始めは霜かと疑はる

怨情(一)

北風吹二白雲一。
萬里渡二河汾一。
心緒逢二搖落一。
秋聲不レ可レ聞。

客心爭二日月一。
來往預期レ程。
秋風不二相待一。
先至洛陽城。

宿昔青雲志。
蹉跎白髮年。
誰知明鏡裏。
形影自相憐。

(一)北風白雲を吹き。萬里河汾を渡る。(二)心緒搖落に逢ひ。秋聲聞くべからず。

(一) 漢の武帝、樓船を汾上に浮べ、歌ひて云ふ「秋風起つて白雲飛揚し、草木黄落して雁南に歸る」と。今その古跡を過ぐ (二) たま〳〵木葉の落つるに逢ひ、心傷み、その聲を聞くに堪へず

蜀道期に後る　　張説

(一)客心日月を爭ひ。來往預め程を期す。(二)秋風相待たず。先づ至る洛陽城。

(一) 客路に日月を惜み、往復の行程を豫期せしが (二) 蜀道の險に多くの日を費し、秋風のみ、余に先んじて洛陽城に入る

鏡を照して白髮を見る　　張九齡

(一)宿昔青雲の志。蹉跎す白髮の年。(二)誰か知らん明鏡の裏。形影自ら相憐まんとは。

(一) かつて榮達を望みしも、事、志と違ひ、白髮の年になりたり (二) 我が形と、鏡中の影、互に老を憐むのみ、と

に擢用せられざるを惜む

子夜春歌（一）　郭振

陌頭楊柳枝。已被二春風吹一。妾心正斷絶。君懷那得レ知。

陌頭楊柳の枝。已に春風に吹かる。妾が心正に斷絶す。（二）君が懷那ぞ知ることを得ん。

（一）五言古詩、李白の子夜吳歌參照　（二）遠く離れて、君が心を知り難し、他心を生じ給ふな

南樓望　盧僎

去レ國三巴遠。登レ樓萬里春。傷レ心江上客。不二是故鄉人一。

（一）國を去つて三巴遠し。樓に登る萬里の春。（二）心を傷ましむ江上の客。是れ故鄉の人ならず。

（一）國を去りて、遠く三巴に來り、樓に上りて、萬里の春景を見る。（三巴は蜀の地、閬・白、二水東西に流れ、三曲して巴字をなす）　（二）江上に往來する客多きも、故鄉の人は一人もなし、獨、悲みに堪へず

汾上秋に驚く　蘇頲

比すべし　㊂　趙氏朝に用ひられず、舊任の其府に歸るを送るに、明月の光滿川に滿ちたり、月は璧の如く、璧は人の如し

此地別燕丹。
壯士髮衝冠。
昔時人已沒。
今日水猶寒。

漢庭榮巧宦。
雲閣薄邊功。
可憐驄馬使。
白首爲誰雄。

易水送別（一）

駱賓王

此の地燕丹に別る。壯士髮冠を衝く。（二）昔時人已に沒し。今日水猶ほ寒し。

㊀　壯士徐敬業を送る　㊁　燕の太子丹、壯士荊軻をして秦王を刺さしめんとし、諸賓客を會し、皆白衣冠して之を易水に送る、歌うて曰ふ、風蕭々として易水寒し、壯士一たび去つてまた還らずと、慷慨の士、皆目を瞋らし、髮盡く上つて冠を衝く　㊂　昔人已に歿するも、易水なほ寒く、悲壯の感に堪へざらしむ

喬侍御に贈る

陳子昂

（一）漢庭巧宦榮え。雲閣邊功を薄んず。（二）憐むべし驄馬の使。白首誰が爲にか雄なる。

㊀　東觀漢記に「永平中、顯宗前世の功臣を追感し、二十八將を南宮の雲臺に畫く」と。今日の朝廷には唯佞利口の官宦榮え、將士邊境の戰功を重んぜず　㊁　君（驄馬の御史桓典に比す）は白髮の年まで誰が爲に雄壯なるにや、今

主人不二相識一。偶坐爲二林泉一。莫二謾愁レ沽レ酒。囊中自有レ錢。

趙氏連城璧。由來天下傳。送三君還二舊府一。明月滿二前川一。

巻之六

五言絶句

袁氏の別業に題す　賀知章

(一)主人相識らず。偶坐林泉の爲なり。(二)謾に酒を沽ふことを愁ふるなかれ。囊中自ら錢あり。

(一) 主人袁氏と交際なきも、來りて對坐するは、顧辟疆の如く、美しき庭園あるに因れり。世説に「王子敬、會稽より呉を經、顧辟疆に名園ありと聞き、先づ主人を知らず、徑ちに其家に往き、指麾好惡、旁に人なきが如し」(二) 酒を買ひ饗せらるゝ心配には及ばず、余が囊中にも錢ありて、隨意に求め得べきなり

夜趙縦を送る　楊炯

(一)趙氏連城の璧。由來天下に傳ふ。(二)君が舊府に還るを送れば。明月前川に滿つ。

(一) 昔、趙に卞和氏の名璧あり、秦王十五城を連ねて之に易へんとし、名、天下に傳はりたり、趙氏の才德は之に

天仗宵嚴建二羽旄一。春雲送レ色曉雞號。金爐香動螭頭暗。玉佩聲來雉尾高。戎服上趨承二北極一。儒冠列侍映二東曹一。太平時節身難レ遇。郎署何須笑二二毛一。

(一)(二)天仗宵嚴にして羽旄を建つ。春雲色を送つて曉雞號ぶ。(三)金爐香動いて螭頭暗く。(四)玉佩聲來つて雉尾高し。(五)戎服上り趨つて北極を承け。儒冠列り侍して東曹に映ず。(六)太平の時節身遇ひ難し。郎署何ぞ須ひん二毛を笑ふことを。(七)

(一) 元旦の朝儀 (二) 前夜より殿に儀仗を整へて、羽旄(前に註す)を樹て、春雲殿に、曉雞鳴く (三) 金爐に香烟立ち昇りて、殿階の螭頭暗し。漢書に「殿階の欄楯、螭(龍に似て角なし、あま龍)を刻し飾となす」 (四) 天子出御の玉佩響きて、雉尾扇高くあがる (五) 武官は北面の位地につき、文官は東曹に列侍し、光彩相映ず (六) 太平の世には官位却つて進み難きものなり、余が郎署の微官に滞りて、毛髪の黒白相交るを笑ふなかれ。(時に、部郎中たり、時に不遇を歎ず) (七) 「笑」の字一に「嘆」に作る

使前。莫レ遣三行人照二容鬢一。恐驚三憔悴入二新年一。

城上高樓接二大荒一。海天愁思正茫茫。驚風亂颭芙蓉水。密雨斜侵薜荔牆。嶺樹重遮二千里目一。江流曲似二九廻腸一。共來百粵文身地。猶自音書滯二一鄉一。

彈來を防ぎしが、今日は氷もすでに解け、飲馬泉は朝使余の前に分流せり、胡兵はまた來るべきなり ㊃ 泉の水は行人の姿をうつす勿れ、瘦せ衰へつゝ新年を迎へしに驚かん

柳州の城樓に登り漳汀封連四州の刺史に寄す(一)　　柳宗元

(二)城上の高樓大荒に接す。海天の愁思正に茫茫。(三)驚風亂れ颭す芙蓉の水。密雨斜に侵す薜荔の牆。(四)嶺樹重りて千里の目を遮り。江流曲つて九廻の腸に似たり。(五)共に來る百粵文身の地。猶ほ自ら文書一鄉に滯る。

㊀ 漳州の韓泰、汀州の韓曄、封州の陳諫、連州の劉禹錫（宗元時に柳州の刺史たり） ㊁ 城上の高樓、廣漠の境に接し、海天遠く愁極りなし ㊂ 烈しき風、芙蓉（蓮花）の水を吹き動かし、濃かなる雨、薜荔（蔦の類）の牆を濶す ㊃ 嶺樹茂りて、四州を眺めんとする目を遮り、江流屈曲して、愁に因りて九廻する腸に似たり。司馬遷、任安に報ずる書に「腸一日にして九廻す」 ㊄ 四君と共に越の蠻地に來りしも、各々一鄉に滯り、音書すら通じ難し。百粵（部落多く、統一し難きに因りていふ）文身、（身にほりものす）

庫部盧四兄曹長が元日の朝廻に和し奉る(一)　　韓愈

被二秋風教一レ憶鱠。更聞寒雨勸二飛觴一。歸心莫レ問三江水。旅服從レ沾九日霜。醉裏欲レ尋二騎馬路一。蕭條是處有二垂楊一。

綠楊著レ水草如レ烟。舊是胡兒飮馬泉。幾處吹レ笳明月夜。何人倚レ劍白雲天。從來凍合關山道。今日分流漢

に從す九日の霜。(四)醉裏歸馬の路を尋ねんと欲すれば。蕭條として是處垂楊あり。

(一) 風流同心の友、一日ゆるやかに會し、竹深く境靜に、蘚徑の名園に似たる地に對坐す（五言絶句、第一首の註參照） (二) 晉の張翰字は季鷹、惠帝の時に、齊王の司馬東曹掾たり、秋風の起るを見て、故鄕吳中の菰菜蓴羹鱸魚の鱠（すゞきのなます）を思ひて止まず、遂に駕を命じて歸れり、余も故鄕戀しきに更に寒雨降りそゝぎ杯を飛ばし醉を盡すことを勸む (三) 張翰嘗て同郡の顧榮に向ひ、去るを求むるの意を語りしに 顧榮其の手を執りて曰く、我も亦子と南山の蕨を採り、三江（松江）の水を飲まんのみと、今日はこの意を捨て、九日の霜旅衣を潤すに任せて醉はん (四) 醉中馬に騎り歸路を尋ぬれば、柳林しげに枝を垂れ、何とはなしに悲し

鹽州に胡兒の飮馬泉を過ぐ (一)　　李　益

綠楊水に著いて草烟の如し。舊是れ胡兒の飮馬泉。幾處か笳を吹く明月の夜。(二)何人か劍に倚る白雲の天。(三)從來凍合す關山の道。(四)今日分流す漢使の前。行人をして容鬢を照さしむるなかれ。恐らくは憔悴して新年に入るに驚かん。

(一) 唐志に「鹽州はもとの鹽泉、秦に九原といひ、漢に五原郡に改む、貞觀二年州を置く、鹽州城北に飮馬泉あり、胡人馬にこゝに飮ましむ」 (二) 綠楊の綠、水に著き、草、烟の如くかすむ (三) 秋夜月明かなる時には、處々に胡兵の笳聲を聞きしが、何人か劍に倚りて征討せしにや、今はその影を見ず (四) 冬は關山の道も凍合し、ために胡兵の

不レ窮。更憶雙峯最高頂。此心期下與二故人一同上。

東風吹レ雨過二青山一。卻望二千門一艸色閒。家在二夢中一何日到。春來二江上一幾人還。川原繚繞浮雲外。宮闕參差落照間。誰念爲レ儒逢二世難一。獨將二衰髩一客二秦關一。

同人永日自相將深竹閒園偶二辟疆一。已

君が遊賞の心正に我と同じかるべく、從つてこの想像は誤なかるべしと信ず

長安の春望　盧綸

東風雨を吹いて青山を過ぐ。(一)卻つて千門を望めば艸色閒なり。家は夢中に在つて何の日か到らん。春は江上に來つて幾人か還る。(三)川原繚繞す浮雲の外。宮闕參差たり落照の間。(四)誰か念はん儒となつて世難に逢ひ。獨衰髩を將つて秦關に客たらんとは。

(一)諸門淋しく草色たゞ青し　(二)夢中の家には、何時到り得べきか、春は江上に來るも、故郷に歸る人は稀なり　(三)川原廣く、浮雲の外につゞき繞り、禁闕の影夕日の中に高く低し　(四)儒生となりて戰亂(天寶末年の亂)に逢ひ、白髮の年まで都に客たらんとは思はざりき

陸勝が宅に秋雨の中に韻を探る　張南史

(一)同人永日自ら相將る。深竹閒園辟疆に偶す。(二)已に秋風に鱠を憶はしめらる。更に聞く寒雨の飛觴を勸むるを。(三)歸心問ふことなかれ三江の水。旅服沾す

夾レ水蒼山路向レ東。東南山豁大河通。寒樹依微遠天外。夕陽明滅亂流中。孤村幾處臨二伊岸一。一雁初晴下二朔風一。爲報二洛橋遊宦侶一。扁舟不レ繫與レ心同。

石林精舍武溪東。夜叩二禪扉一謁二遠公一。月在二上方一諸品靜。心持二半偈一萬緣空。蒼苔古道行應レ遍。落木寒泉聽

(一)水を夾む蒼山路東に向へば。東南山豁かにして大河通ず。(二)寒樹依微たり遠天の外。夕陽明滅す亂流の中。(三)孤村幾處か伊岸に臨み。一雁初めて晴れて朔風に下る。(四)爲に洛橋遊宦の侶に報ぜよ。扁舟繫がざるは心と同じと。

(一)青山の間を舟にて東に下れば、東南は山開け黃河廣く流る (二)寒樹の影遠くかすかに見え、夕日の光、亂流の中に閃く (三)伊水の岸には、處々に孤村あり、空晴れて一雁北風に吹かれ下る (四)雁は、余の爲めに洛陽の僚友に告げよ、扁舟の黃河に浮べるは、漂泊定りなき余が心に似たりと

錢起が秋夜靈臺寺に宿して寄せらるゝに贈る　郎士元

(一)石林の精舍武溪の東。夜禪扉を叩いて遠公に謁す。(二)月は上方に在つて諸品靜かに。心半偈を持して萬緣空し。(三)蒼苔の古道行くこと應に遍かるべし。落木寒泉聽いて窮らず。(四)更に憶ふ雙峯の最高頂。此の心故人と同じきを期す。

(一)石林の靈臺寺也、武溪(古の虎溪)の東にあり、夜禪扉を叩きて惠遠の如き高僧に謁す (二)月は上方界に輝きて、靜に山中の諸物を照し、心に短き偈文(詩をいふ)を思ひて俗念すべて消ゆ (三)君は苔の古道を行き盡し、落葉寒泉の聲、耳に斷えざるべし (四)余が心は更に山上の二峰の遊を憶ふ、憶ふに君も山上二峰の頂に登るならん、

雨中深。陽和不レ散窮途恨。霄漢長懸捧日心。獻賦十年猶未レ遇。羞將白髮對華簪。

紫微晴雪帶恩光。繞レ仗偏隨鴛鷺行。長信月留寧避レ曉。宜春花滿不レ飛レ香。獨看積素凝清禁。已覺輕寒讓太陽。題柱盛名兼絕唱。風流誰繼漢田郎。

る中に綠深し ㈢ 春なるも、窮途不遇の恨消えず、天子に仕へ恩遇を求むる心久し ㈣ 賦頌を奉りてよりすでに十年を經るに、なほ今に任用せられず、頭髮白くなりて華簪（高官の髮飾り）の君に對するを耻づ。（暗に推薦を求む）

王員外が晴雪に早朝するに和す

㈠紫微の晴雪恩光を帶び。㈡仗を繞つて偏に隨ふ鴛鷺の行。㈢長信月留つて寧んぞ曉を避けん。宜春花滿ちて香を飛ばさず。㈣獨り看る積素の清禁に凝るを。已に覺ゆ輕寒の太陽に讓るを。㈤題柱の盛名は絕唱を兼ねて。風流誰か繼ぐ漢の田郎。

㈠ 禁庭に雪晴れ、天子の恩光を帶ぶ ㈡ 儀仗をめぐり鴛鷺（百官）早朝の列に隨ふ ㈢ 長信宮には、月光殘りて曉にも消えず、宜春苑には、花咲き滿ちて香なし。（雪） ㈣ 雪は禁庭に凝り積るも、寒さは太陽にまけ、次第に薄らぐ心地す ㈤ 天子題柱の譽と、巧妙なる詩篇とにより、風流の名、漢の田鳳に繼ぐものは誰ぞ

府縣の僚友に寄す　　　韋應物

鞏洛より舟行して黃河に入る卽事

留射虎亂。南方實有未招魂。

風急天高猿嘯哀。渚清沙白鳥飛廻。無邊落木蕭蕭下。不盡長江滾滾來。萬里悲秋常作客。百年多病獨登臺。艱難苦恨繁霜鬢。潦倒新停濁酒杯。

二月黃鸝飛上林。春城紫禁曉陰陰。長樂鐘聲花外盡。龍池柳色

高きに登る

風急に天高うして猿嘯哀し。渚清く沙白うして鳥飛び廻る。無邊の落木蕭蕭として下り。不盡の長江滾滾として來る。萬里悲秋常に客となり。百年多病獨臺に登る。艱難苦恨す繁霜の鬢。潦倒新に停む濁酒の杯。

(一) 落葉ははてしなく、淋しく鳴り、長江の水は間斷なく流れ來る (二) 艱難のために繁霜の如く白きを恨む

(三) 潦倒(老衰して力なし)として濁酒の杯をとどめて登る

闕下裴舍人に贈る　錢起

二月黃鸝上林に飛び。春城紫禁曉陰陰。長樂の鐘聲は花外に盡き。龍池の柳色雨中に深し。陽和散せず窮途の恨。霄漢長く懸く日を捧ぐる心。賦を獻じてより十年猶ほ未だ遇せられず。羞づらくは白髮を將つて華簪に對することを。

(一) 仲春二月に黃鸝上林苑に飛び、禁城の曉は曇りたり (二) 長樂宮の鐘は、花咲く中に響絕え、龍池の柳は雨上

雪霽二寒宵一。五更鼓角聲悲壯。三峽星河影動搖。野哭千家聞二戰伐一。夷歌幾處起二漁樵一。臥龍躍馬終黃土。人事音書漫寂寥。

影動搖す。(五)野哭千家戰伐を聞き。夷歌幾處か漁樵に起る。(六)臥龍躍馬終に黃土。人事音書漫に寂寥。

㊀ 夔州巫峽に臨める西閣の夜 ㊁ 歳暮れて日短し ㊂ 天涯の夔州に風雪止み、寒空霽れ渡る ㊃ 軍營には五更の鼓角、悲しげに冴え、三峽(西峽・巴峽・巫峽)の星影は河水に搖れて動く。(漢の東方朔星辰の動搖するを見、民勞の應とす) ㊄ 諸氏苦しみて野に死者を哭し、漁夫樵夫は諸處に夷(えびす)の歌をうたふ。(吐蕃の侵入をいふ) ㊅ 臥龍孔明も公孫述も忠臣も逆臣も皆死して黃土となり、世の有樣も淋しくなり、故人の音信も次第に稀なり。蜀都賦に「公孫馬を躍らせて帝と稱す」

楚王宮北正黃昏。白帝城西過雨痕。返照入レ江飜二石壁一。歸雲擁レ樹失二山村一。衰年病レ肺惟高レ枕。絶塞愁レ時早閉レ門。不レ可二久

返照

(一)楚王の宮北正に黃昏。白帝城西過雨の痕。(二)返照江に入つて石壁飜り。歸雲樹を擁して山村失ふ。衰年肺を病んで惟枕を高うし。絶塞時を愁へて早く門を閉づ。(三)久しく豺虎の亂に留るべからず。(四)南方實に未だ招かざる魂あり。

㊀ 楚の襄王の高唐觀暮れ、白帝城に驟雨の痕(あと)をとどむ ㊁ 夕日水面に輝きて岸の石壁に照り返り、歸雲林を蔽ひて、山村の影を見失ふ ㊂ 豺狼の荒るゝ如き戰亂の中には長く留り難し ㊃ 南方に來りてより、心勞くこと多く、魂も身に添はず

湖滿地一漁翁。

吹レ笛秋山風月清。誰家巧作斷腸聲風飄ニ律呂ー相和切。月傍ニ關山ー幾處明。胡騎中宵堪ニ北走ー。武陵一曲想ニ南征ー。故園楊柳今搖落。何得ニ愁中卻盡生ー。

歲暮陰陽催ニ短景ー。天涯風

笛を吹く

笛を吹いて秋山風月淸し。(一)誰が家か巧に作す斷腸の聲。(二)風は律呂を飄して相和すること切に。月は關山に傍うて幾處か明かなる。(三)胡騎中宵北走するに堪へたり。(四)武陵一曲南征を想ふ。(五)故園の楊柳は今搖落せん。何ぞ愁中に卻つて盡く生ずるを得たる。

(一)「客中の月夜に笛聲を聞けば、人をして斷腸せしむ」(晉の阮籍の語)　(二)風に笛聲を飄して律呂の調を合せ、月は關山幾處にも明かなり。(關山月の曲)　(三)晉の劉琨、胡騎に圍まれし時、半夜月に乘じて胡笳を吹きしに、賊みな流涕して故鄕を憶ひ、遂に圍を解いて去る　(四)漢の馬援、武陵蠻を征する時、門生爰寄生といふものよく笛を吹くと聞き、歌を作りて之に和し、武陵深曲といふ　(五)故鄕の柳は今落葉する時なるに、笛聲を聞けば愁中に却つて綠の生ずるを覺ゆ。(折楊柳の曲)

(一)閣夜

(二)歲暮陰陽短景を催し。(三)天涯の風雪寒宵霽る。(四)五更の鼓角聲悲壯に。三峽の星河

莖霄漢間。西
望瑤池降二王
母一。東來紫氣
滿二函關一。雲移二
雉尾一開二宮扇一。
日繞二龍鱗一識二
聖顏一。一臥滄
江驚二歲晚一。幾
回青瑣點二朝
班一。

昆明池水漢
時功。武帝旌
旗在二眼中一。織
女機絲虛二夜
月一。石鯨鱗甲
動二秋風一。波漂二
菰米一沈雲黑。
露冷二蓮房一墜
粉紅。關塞極
天惟鳥道。江

の紫氣函關に滿つ。(三)雲は雉尾に移つて宮扇を開き。日は龍鱗を繞つて聖顏を識る。(四)一臥滄江歲晚に驚く。幾回か青瑣朝班に點ぜしに。

(一) 蓬萊宮(大明宮)は南山に對し、承露盤の金莖、空に聳ゆ (二) 崑崙山の瑤池に西王母降りし如く、天子楊貴妃を伴ひて溫泉宮に幸し、紫氣東より來りて函谷關を過ぎし如く、聖祖老子、永昌街に靈符を下す (三) 彩雲の移り動く如く、雉尾扇(雉の尾を珥めて作り、宮殿の左右に設く)左右に開き、日光は御衣袞龍の金鱗に輝き、恭しく天顏を拜す (四) 蜀に來り、江上に流寓して歲も暮れたり、曾ては靑瑣門に出入し、廷臣の列に加はりしに

四

(一)昆明池水漢時の功。武帝の旌旗眼中に在り。(二)織女の機絲夜月に虛しく。(三)石鯨の鱗甲秋風に動く。(四)波は菰米を漂はして沈雲黑く。露は蓮房に冷かにして墜粉紅なり。(五)關塞極天惟鳥道。江湖滿地一漁翁。

(一) 昆明池は漢代に鑿たれ、水戰練習の旗、なほ眼に見ゆる樣なり (二) 銀河の織女機を織るに象れる石あり、月影淋しく照せり (三) 又、鯨に象れる石あり、秋風淋しく鱗甲(うろこ)を動かす (四) 菰米(こもの實)波に漂ひて沈める雲の黑き如く、蓮房に露冷く、紅の花衰へ落つ (五) 流寓して高山多きこの遠地に來り、身は恰も漁翁の舟の泛々定住なきに似たり

園心。寒衣處處催ニ刀尺ー。白帝城高急ニ暮砧ー。

何處の家にても寒衣を縫ひ初め、白帝城高き邊に、暮の砧(きぬた)忙しげに聞ゆ。刀尺(剪刀と尺度と)

二

千家山郭靜ニ朝暉ー。日日江樓坐ニ翠微ー。信宿漁人還泛泛。清秋燕子故飛飛。匡衡抗レ疏功名薄。劉向傳レ經心事違。同學少年多不レ賤五陵衣馬自輕肥。

(一)千家山郭朝暉靜かなり。日日江樓翠微に坐す。(三)信宿の漁人還た泛泛。清秋の燕子故ほ飛飛。(四)匡衡疏を抗げて功名薄く。(五)劉向經を傳へて心事違ふ。(六)同學の少年多くは賤しからず。五陵の衣馬自ら輕肥。

(一)千戸程ある山上の郭　(二)山の青綠色　(三)宿泊せる漁舟また動き始め、清秋の燕子なほ飛び廻る、余の流寓定所なきに似たり　(四)漢の元帝即位の初に、匡衡、天變の異に因りて上疏し、政治の得失を論ず、余も宰相房琯のために上書せしが、帝意に逆ひて功名成り難し　(五)漢の宣帝の初に劉向五經を石渠閣に校せり、余も文學の臣なれども、事心と違ひ官を退く　(六)嘗て學を同じうせし少年は、多く富榮の地位を得、長安五陵の地にて肥馬に乘り輕衣を着、豐かなる生活をなす

三

蓬萊宮闕對ニ南山ー。承露金

(一)蓬萊の宮闕南山に對す。承露金莖霄漢の間。(三)西望すれば瑤池王母降り。東來

客心。萬方多難此登臨。錦江春色來天地。玉壘浮雲變古今。北極朝廷終不改。西山寇盜莫相侵。可憐後主還祠廟。日暮聊爲梁甫吟。

玉露凋傷楓樹林。巫山巫峽氣蕭森。江間波浪兼天湧。塞上風雲接地陰。叢菊再開他日淚。孤舟一繫故

色天地に來り。玉壘の浮雲古今變ず。(三)北極の朝廷は終に改まらず。西山の寇盜相侵すなかれ。(四)憐むべし後主還た廟に祠らる。日暮聊か爲す梁甫の吟。

(一)萬方多難(吐蕃入寇し、賊猖獗を極む)の中に、ひとり樓に登りて見る (二)錦江(蜀、錦官城外)の春は、去年の如く天地に來りしも、玉壘山(成都府灌縣の西北)の浮雲は、古今盛衰の變を現はす (三)朝廷は北極星の如く、長く動き改まるものにあらず、西山吐蕃の賊妄りに侵入を企つるなかれ (四)樓に近く、蜀の後主劉禪の廟あり、日暮に梁甫吟(又梁父吟に作る、古歌の題目)をなし、忠臣孔明の如き英雄出で、偉功を當代に立てんことを望む。蜀誌に「諸葛亮(孔明)躬ら隴に耕し、好んで梁甫吟をなす」

秋興四首(一)

(二)玉露凋傷す楓樹林。巫山巫峽氣蕭森。(三)江間の波浪は天を兼ねて湧き。塞上の風雲は地に接して陰る。(四)叢菊兩び開く他日の淚。孤舟一に繫ぐ故園の心。(五)寒衣處處刀尺を催し。白帝城高うして暮砧急なり。

(一)杜甫、夔州にあり時事に感じ、帝京を望みて作る八首あり (二)露下りて、楓樹林しぼみ傷み、巫山(夔州にあり、連山七百里)も巫峽もすべて物淋し (三)巫峽には波浪天を打ちて湧き、塞上には胡軍侵入し風雲地を掩ひて暗し (四)叢生せる菊花は再び開き、淚をそゝぐこと去年の如く、孤舟を夔州に繫ぎ、故鄉を思ふ心深し (五)

遠從千澗落。
玉山高竝兩峰寒。
明年此會知誰健。
醉把茱萸仔細看。

(一) 老いて秋に逢ひ、强ひて心を寛げたく、崔氏の莊に會飮す　(二) 短き髮の露はるゝを耻ぢ、傍人に請ひて冠を正さしむ。(昔の桓溫、龍山重陽の宴に、參軍孟嘉、帽を風に吹き落さる)　(三) 多くの澗流、流れ來りて藍水となり、玉を産する藍田山は、華岳の二峯(太室・小室)と並びて寒し　(四) 醉ひ乍ら茱萸を眺め、余が老衰せるを悲しむ。(重陽に茱萸を帶ぶれば、災厄疾病を攘ふといふ)

(一)野望

西山白雪三城戍。南浦清江萬里橋。海內風塵諸弟隔。天涯涕淚一身遙。惟將遲暮供多病。未有涓埃答聖朝。跨馬出郊時極目。不堪人事日蕭條。

(二)西山の白雪三城の戍。(三)南浦の清江萬里橋。(四)海內の風塵諸弟隔て。天涯の涕涙一身遙かなり。(五)惟遲暮を將つて多病に供し。未だ涓埃の聖朝に答ふるあらず。(六)馬に跨つて郊に出でて時に目を極むれば。堪へず人事の日に蕭條たるに。

(一) 又「望野」に作る　(二) 蜀の成都府の西、雪嶺なる三城(維・松・保)の征戍　(三) 蜀郡大城の南の橋　(四) 戰亂のために親族分離し、余は天涯遙かに蜀に來り、ひとり涙を流す　(五) 老生涯を多病の中に送り、天子に報ゆる功は塵ほどもなし。涓(水一滴)　(六) 郊原に出でて目の限り眺むれば、人事日に淋しく愁に堪へず

樓に登る

花近高樓傷

花は高樓に近うして客心を傷ましむ。(一)萬方多難にして此に登臨す。(二)錦江の春

送夔龍一集ニ鳳池。

苑外江頭坐不レ歸。水晶宮殿轉霏微。桃花細逐ニ楊花一落。黃鳥時兼ニ白鳥一飛。縱飲久拚人共棄。懶朝眞與レ世相違。吏情更覺滄洲遠。老大徒傷未レ拂衣。

老去悲秋强自寬。興來今日盡ニ君歡一。羞將ニ短髮一還吹レ帽。笑倩ニ旁人一爲正レ冠。藍水

曲江酒に對す

(一)苑外江頭坐して歸らず。水晶宮殿轉霏微たり。(二)桃花細かに楊花を逐うて落ち。黃鳥時に白鳥を兼ねて飛ぶ。(三)縱飲久しく拚つ人共に棄つるを。懶朝眞に世と相違ふ。(四)吏情更に覺ゆ滄洲の遠きを。老大徒に傷んで未だ衣を拂はず。

(一) 芙蓉苑の外、曲江の邊に宿りて歸らず、美しき宮殿は暮に近し　(二) 桃花と柳花と亂れて落ち、黃鶯と白鷺と共に飛ぶ　(三) ほしいまゝに酒を飲みて、人の己を棄つるをも顧みず、出仕も懶く、世人が榮達を望む心と違へり　(四) 官吏となりて心煩しく、日に仙鄕と遠ざかるやうに覺え、老年を悲しみながら、今に退隱することを得ず

九日藍田崔氏の莊

(一)老い去つて悲秋强ひて自ら寬うし。興來つて今日君が歡を盡す。(二)羞づ短髮を將つて還帽を吹かるゝを。笑つて旁人を倩うて爲に冠を正さしむ。(三)藍水遠く千澗より落ち。玉山高く兩峯に竝んで寒し。明年此の會知る誰か健ならん。(四)醉うて茱萸を把つて仔細に看る。

曉赤羽旗。宮艸菲菲承二委珮一。爐烟細細駐二遊絲一。雲近二蓬萊一常五色。雪殘二鳷鵲一亦多時。侍臣緩步歸二靑瑣一。退食從容出每遲。

戸外昭容紫袖垂。雙二瞻御座一引二朝儀一。香飄二合殿一春風轉。花覆二千宮一淑景移。晝漏稀レ聞高閣報。天顏有レ喜近臣知。宮中每三出歸二東省一。會二

細として遊絲を駐む。雲は蓬萊に近うして常に五色。雪は鳷鵲に殘つて亦多時なり。(六)侍臣緩步して靑瑣に歸る。退食從容として出づること每に遲し。

(一)含元殿の北、大明宮の中、天子出御して朝政を視る處 (二)門下省 (三)禁門に、日光黄金の牓(たてふだ)を射、春殿の晴氣、朱雀を畫ける旗に匂ふ (四)艸芳しく、地に引く裝束の裾を承け、香爐の烟、遊絲(かげろふ)をとゞむる如し (五)五色の瑞雲は常に蓬萊の帝居にたなびき、鳷鵲(鳥の名)の形せる殿瓦に、雪殘ること久し (六)侍臣の余は、晩に靑瑣門の左掖に歸り、心長閑けく、歩み緩かに退出す

紫宸殿退朝の口號

(一)戸外の昭容紫袖垂れ、御座を雙び瞻て朝儀を引く。(二)香は合殿に飄つて春風轉じ。花は千宮を覆うて淑景移る。(三)晝漏聞くこと稀にして高閣に報じ。(四)天顏喜あり近臣知る。(五)宮中出でて東省に歸る每に。夔龍を會送して鳳池に集まる。

(一)戸外には昭容(女官)二人の紫袖垂れ、出御を待ち、御座を並び見て、朝儀拜謁の人を導く (二)春風吹きて御爐の香氣滿殿に飄り、時刻移りて、花の影次第に諸宮を覆ふ (三)外廷の晝漏は殿内に聞ゆること稀く、高閣にて別に時を報ず (四)天顏には喜びの色を湛へ給ひ、近臣の余は、よく之を拜し知れり (五)殿上より、東、門下省に退きて後、中書省に集まる宰相(舜の二臣、夔・龍に比す)を送り、後に各々分散す

晩茫茫發二旅愁一。
春山無レ伴獨相求。伐木丁丁山更幽。澗道餘寒歷二氷雪一。石門斜日到二林丘一。不レ貪夜識二金銀氣一。遠レ害朝看二麋鹿遊一。乘レ興杳然迷二出處一。對レ君疑是泛二虛舟一。
天門日射黃金榜。春殿晴

(一)張氏の隱居に題す　杜甫

春山伴無うして獨相求むれば。伐木丁丁として山更に幽なり。(三)澗道の餘寒に(二)氷雪を經。石門の斜日に林丘に到る。(四)貪らずして夜に金銀の氣を識り。(五)害を遠けて朝に麋鹿の遊を看る。(六)興に乘じて杳然として出處に迷ふ。(七)君に對して疑ふらくは是れ虛舟を泛ぶるかと。

(一) 名は叔明、山東の徂徠山に隱る、竹溪六逸の一 (二) 友を求めて、ひとり春山の路を行けば、樵夫伐木の聲、丁丁と聞え、山中更に靜かなり (三) 餘寒の澗道(たにみち)に氷雪の間を過ぎ、隱居の石門に夕日さす頃、その林丘に到る (四) 張氏は無慾の人なるゆゑ、夜は自然と山中に昇る金銀の鑛氣を知る (五) 世の禍害に遠ざかりて、朝は麋鹿の遊びを見るを樂しむ。麋(おほしか) (六) 興深くして世事を忘れ、歸路にも迷ふ程なり (七) 恰も空舟に乘り、水に泛べる如く、百念執著する所なし

(一)宣政殿の退朝晩に(二)左掖を出づ

(三)天門日射る黃金榜。春殿晴れ曛ず赤羽旗。(四)宮艸菲菲として委珮を承け。爐烟細

來函谷愁中月。歸去磻溪夢裏山。簾前春色應須惜。世上浮名好是閒。西望鄉關腸欲斷。對君衫袖淚痕斑。

江上巍巍萬歲樓。不知經歷幾千秋。年年喜見山長在。日日悲看水獨流。猿狖何曾離暮嶺。鸕鷀空自泛寒洲。誰堪登望雲烟裏。向

れ閑ならん。西のかた鄉關を望めば腸斷えんと欲す。(五)君に對して衫袖淚痕斑す。

(一) 花の色濃紅なり　(二) 美しく飾りたる亭　(三) こゝに來りて函谷關の月を愁中に眺めしが、今は夢にも忘れざりし磻溪の山に歸る　(四) 簾前に暮れ行く春は惜しむべきも、世上の浮名は棄てゝ顧みぬがよし　(五) 君を送りて、淚痕まだらに衣袖に沁む

萬歲樓(一)

王昌齡

(二)江上巍巍たり萬歲樓。(三)知らず經歷幾千秋ぞ。(四)年年喜び見る山の長へに在るを。日日悲しみ看る水獨り流るゝを。(五)猿狖何ぞ曾て暮嶺を離れん。鸕鷀空しく自ら寒洲に泛ぶ。(六)誰か登望するに堪へん雲烟の裏。晩に向つて茫茫として旅愁を發す。

(一) 鎭江府城の西南の樓、昔の刺史王恭建つ　(二) 江上に萬歲樓高く聳え　(三) 幾千年を經たるを知らず　(四) 山は長へに在りて安居定住の趣を見、水は獨り流れて羇旅流寓の相をなす　(五) 猿・狖(猿の屬、猨に似たり)は住所に安んじて淋しき山を離れず、鸕鷀(水鳥)は漂流して空しく寒洲に泛べり　(六) 樓に登り、雲烟の中に眺望するに堪へず、旅愁極まりなし

滅時。爲報使君多泛レ菊。更將二絃管一醉二東籬一。

回風度雨渭城西。細草新花踏作レ泥。秦女峰頭雪未レ盡。胡公陂上日初低。愁レ窺二白髮一羞二微祿一。悔レ別二青山一憶二舊溪一。聞道輞川多二勝事一。玉壺春酒正堪レ攜。

柳嚲鶯嬌花復殷。紅亭綠酒送二君還一。到

宣ぶる日は、胡敵滅亡の時なるべし　(四) 重陽なれば、菊花を酒にひたし、管絃を聞きつゝ、醉を盡し給へ。(晉の陶淵明菊を東籬の下に採る)

首春渭西の郊行に藍田張二主簿に呈す

(一)回風度雨渭城の西。細草新花踏んで泥となる。(二)秦女峰頭雪未だ盡きず。(三)胡公陂上日初めて低る。白髮を窺ふを愁へて微祿を羞ぢ。青山に別れしを悔いて(四)舊溪を憶ふ。(五)聞道輞川勝事多しと。玉壺の春酒正に攜ふるに堪へたり。

(一) 風吹き、雨降る　(二) 藍田縣の境の山　(三) 鄠縣にあるつゝみ、傍に處忠胡公の廟あり　(四) 故鄉の溪流を憶ふ　(五) 輞川(藍田縣西南の勝地)は世を離れて樂み多しと聞く、共に酒を携へて遊びたし

暮春虢州の東亭に李司馬が扶風別廬に歸るを送る

柳嚲れ鶯嬌びて(一)花また殷たり。(二)紅亭の綠酒君が還るを送る。(三)到來函谷愁中の月。歸去磻溪夢裏の山。(四)簾前の春色應に須らく惜しむべし。世上の浮名好し是

西掖重雲開二曙暉一。北山疎雨點二朝衣一。千門柳色連二青瑣一。三殿花香入二紫微一。平明端レ笏陪二鵷列一。薄暮垂レ鞭信レ馬歸。官拙自悲頭白盡。不レ如巖下偃二荊扉一。

西掖の重雲曙暉を開き。(一)北山の疎雨朝衣に點ず。千門の柳色青瑣に連り。(二)三殿の花香紫微に入る。平明笏を端して鵷列に陪し。(三)薄暮鞭を垂れて馬に信せて歸る。官拙くして自ら悲しむ頭の白盡するを。(四)如かず巖下に荊扉に偃さんには。

(一) 西掖中書省に曙光雲を漏れ、まばらなる雨、北山より來りて早朝の衣冠にかゝる (二) 禁城の諸門に柳萌えて青の扉につゞき、殿前の花香風に隨ひて御座に入る (三) 曉には、笏(しやく)を正しく執りて百官の列に加はり、暮には鞭を垂れ、馬に任せて淋しく歸る (四) 仕官の術拙く、頭髮盡く白きを悲しむ、むしろ巖下に荊扉(いばらの扉)を結び、その中に隱棲するに如かず

九日使君の席に衛中丞が長水に赴かるゝを餞し奉る

節使橫行西出レ師。鳴レ弓擐レ甲羽林兒。臺上霜威凌二草木一。軍中殺氣傍二旌旗一。預知漢將宣レ威日。正是胡塵欲レ

(一)節使橫行して西師を出す。弓を鳴らし甲を擐く羽林の兒。(二)臺上の霜威草木を凌ぎ。軍中の殺氣旌旗に傍ふ。(三)預め知る漢將威を宣ぶる日。正に是れ胡塵滅せんと欲する時。(四)爲に報ず使君多く菊を泛べて。更に絃管を將つて東籬に醉へと。

(一) 朝使衛中丞は節を賜ひて勢威盛に西征し、壯年の軍士、弓を鳴し、甲を著けて從軍す。(漢の武帝、軍に從ひ事に死せるものの子を取り羽林官とし、教ふるに五兵を以てす、羽は羽翼、擊殺の意、林は林木の盛なるに取る) (二) 霜氣草木を枯らす如く、御史臺の權威胡兵を懼れしめ、殺伐の氣は旌旗に添ひ滿つ (三) 軍將衛中丞の威を戰場に

擁二千官一。花迎二劍佩一星初落。柳拂二旗旌一露未レ乾。獨有二鳳皇池上客一。陽春一曲和皆難。

長安雪後似二春歸。積レ素凝レ華連二曙輝一。色借二玉珂一迷二曉騎一。光添二銀燭一晃二朝衣一。西山落月臨二天仗一。北闕晴雲捧二禁闈一。聞道仙郎歌二白雪一。由來此曲和人稀。

(一) 雞鳴いて禁街に曉光寒く、鶯囀りて、帝京に春色深し (二) 曉鐘に禁中の諸門開き、玉階の儀仗朝儀の諸官をめぐる (三) 花の影諸官を迎ふる時、空の星初めて消え、柳の枝は旌旗を拂ひて、なほ曉の露に濕ふ (四) 鳳凰池上(中書省)に賈至舍人あり、詩の巧妙なること陽春白雪の曲の如く、何人も之に唱和し難し。宋玉の對問に「客郢中に歌ふものあり、その始め下里巴人といふや國中屬して和するもの數百人、その陽春白雪といふや國中屬して和するもの數十人、是そのいよ〳〵高うして、その和するものいよ〳〵少きなり」

祠部王員外が雪後早朝の卽事に和す

長安雪後春の歸るに似たり。(一)素を積み華を凝して曙輝に連る。(二)色は玉珂に借りて曉騎に迷ひ。光は銀燭に添うて朝衣に晃かなり。(三)西山の落月天仗に臨み。北闕の晴雲禁闈を捧ぐ。(四)聞道仙郎白雪を歌ふと。由來此の曲和する人稀なり。

(一) 白色を積み、光を凝し、曉の輝きに映ず (二) 玉珂(馬の飾り)白くして雪と見分け難く、雪の光銀燭に添ひて早朝の衣を照す (三) 西山の落月儀仗を照すかと疑ひ、北闕の晴雲、禁門に棚引く如し (四) 仙郎王員外は巧妙なる詩を賦し、陽春白雪に比すべしと聞く、その調高尚にして和し得るもの少からん

西掖省の卽事

高館張燈酒復淸。夜鐘殘月雁歸聲。只言啼鳥堪求侶。無那春風欲送行。黃河曲裏沙爲岸。白馬津邊柳向城。莫怨他鄕暫離別。知君到處有逢迎。

高館燈を張つて酒復た淸し。(一)夜鐘殘月雁の歸る聲。只言ふ啼鳥侶を求むるに堪へたりと。那ともするなし春風に行を送らんと欲するを。(二)黃河曲裏沙岸となり。白馬津邊柳城に向ふ。他鄕暫く離別するを怨むるなかれ。知る君が到る處に逢迎あらん。

(一)常に君と親しみ、黃鳥友を求むる情に似たるに、今夜半の鐘に雁聲を聞き春風に行を送るを悲しむ。詩經に「伐木丁々たり、鳥鳴いて嚶々たり、幽谷より出て、喬木に遷る、嚶として其れ鳴く、其の友を求むる聲」(二)黃河の曲(クマ)なる處に沙積みて岸となり、白馬津の邊に、柳、城に向ひて靡く (三)學才に富む君は到る處に歡迎せられ、慰めも多かるべし

賈至舍人大明宮に早朝するの作に和す　岑參

雞鳴紫陌曙光寒。鶯囀皇州春色闌。金闕曉鐘開萬戶。玉階仙仗

(一)鷄鳴いて紫陌曙光寒く。鶯囀じて皇州春色闌なり。(二)金闕の曉鐘萬戶を開き。玉階の仙仗千官を擁す。(三)花は劍佩を迎へて星初めて落ち。柳は旌旗を拂つて露未だ乾かず。(四)獨鳳凰池上の客あつて。陽春の一曲和すること皆難し。

山中愁ニ日晩ー。孤舟江上畏ニ春寒ー。由來此貨稱レ難レ得。多恐君王不レ忍レ看。

嗟君此別意何如。駐レ馬銜レ杯問ニ謫居ー。巫峽啼猿數行淚。衡陽歸雁幾封書。青楓江上秋天遠。白帝城邊古木疎。聖代卽今多ニ雨露ー。暫時分レ手莫ニ躊躇ー。

漢の時、馬援を伏波將軍とし、韓說を横海將軍とし、天子壇に上りて南征の將に拜す ㊂ 越人は已に歸服し、自ら珊瑚樹を貢せんとせり、特に獬豸冠の侍御史を勞し、行きて徵發するに及ばず ㊃ 馬は日暮の山中になやみ、舟は春寒の江上を渡り、貢物の運搬は困難なるべし ㊄ 南方の珍貨は古へより得難しといへり、天子は衆民の勞苦を思ひ、之を看給ふに忍びざるべし。(暗に徵貢の謂なきを諷す)

李少府峽中に貶せられ王少府長沙に貶せらるるを送る

高適

嗟す君がこの別意何如。馬を駐め杯を銜んで謫居を問ふ。(一)巫峽の啼猿數行の淚。(二)衡陽の歸雁幾封の書。(三)青楓江上秋天遠く。白帝城邊古木疎なり。(四)聖代今雨露多し。暫時手を分つも躊躇することなかれ。

㊀ 李少府巫峽に向ひ、猿聲に數行の淚を落すならん ㊁ 王少府長沙に向ひ、衡陽回雁峯の雁に、幾封の書を託し得んか ㊂ 長沙には青楓江に秋天廣く、峽中には白帝城に木葉疎ならん ㊃ 今日の聖代には帝恩雨露の如く遍く、程なく召還せらるべし、暫くの別れに悲しみためらふことなかれ

夜韋司士に別る

西施謾道浣ニ春紗ー。碧玉今時鬬ニ麗華ー。眉黛奪將萱草色。紅裙妬殺石榴花。新歌一曲令ニ人艷ー。醉舞雙眸斂レ鬟斜。誰道五絲能續レ命。却令ニ今日死ニ君家ー。

(一)西施漫に道ふ春紗を浣ふと。(二)碧玉今時麗華を鬪はす。(三)眉黛奪ひ將す萱草の色。紅裙妬殺す石榴花。新歌(四)一曲人をして艷せしめ。醉舞雙眸鬟を斂めて斜なり。(五)誰か道ふ五絲能く命を續ぐと。却つて今日君が家に死せしむ。

㊀世人みだりに西施(曾て紗を苧蘿溪に洗ふ)の美を稱するも、この舞妓の美しきには如かざるべし ㊁碧玉(汝南王の寵姬)をして今日に在らしめば、この舞妓と美しさを爭ふべし ㊂眉黛(まゆずみ)靑く、萱草の色を凌ぎ、紅裙麗しく石榴(ざくろ)の花に勝る ㊃一曲の新歌を唱ふれば、人をして恍惚たらしめ、雙眸(左右のひとみ)美しく、醉舞しつゝ鬟のほつれ毛を繕ふ ㊄風俗通に「五月五日、五綵の絲を以て臂に繫くれば、人をして瘟を病まざらしむ、因つて續命縷と名づく」と。されど、余は舞妓を見て心惱み、今日君が家に死なんかと思はる

杜侍御貢物を送る戲に贈る　張謂

銅柱朱崖道路難。伏波橫海舊登レ壇。越人自貢珊瑚樹。漢使何勞獬豸冠。疲馬

(一)銅柱朱崖道路難し。(二)伏波橫海舊壇に登る。(三)越人自ら貢す珊瑚樹。漢使何ぞ勞せん獬豸冠。(四)疲馬は山中に日の晩るゝを愁へ。孤舟は江上に春の寒きを畏る。(五)由來此貨得難しと稱す。多に恐る君王の看るに忍びざらんことを。

㊀交趾朱崖の地は南海に瀕し、道路殊に嶮惡なり。(後漢の馬援南征して交趾に到り、銅標を建て界を標す) ㊁

海畔雲山擁ニ薊城ー。小少雖レ非ニ投筆吏ー。論レ功還欲レ請ニ長纓ー。

漢文皇帝有ニ高臺ー。此日登臨曙色開。三晉雲山皆北向。二陵風雨自レ東來。關門令尹誰能識。河上仙翁去不レ回。且欲下近尋ニ彭澤宰ー。陶然共醉中菊花杯上。

俊傑ならざるも、朝命により、終軍の如き殊功を立てんと欲す。（長纓は、五言古詩、魏徵の詩に註す）

九日仙臺に登り劉明府に呈す（一）

崔署

（二）漢文皇帝高臺あり。此の日登臨して曙色開く。（三）三晉の雲山は皆北に向ひ。（四）二陵の風雨東より來る。（五）關門の令尹誰かよく識らん。河上の仙翁去つて回らず。（六）且つ近く彭澤の宰を尋ねて。陶然として共に菊花の杯に醉はんと欲す。

（一）重陽の日、河南鄂州の望仙臺に上り、劉明府に贈る。賓退錄に「漢人、縣令を明府と稱す」（二）漢の文帝の望仙臺に上れば、曉色廣く開く。列仙傳に「河上公、漢文帝の時、廬を河の濱に結ぶ、帝、老子を讀み、解せざる處あり、因つて其の庵に幸し、車を下つて稽首す、公、素書老子章句二篇を授け、遂に所在を失ふ、帝、臺を築き、之を望祭す」（三）古の韓・魏・趙の地、晉の三卿分ちて領す（四）左傳に「殽に二陵あり、南陵は夏后皐の墓、北陵は文王風雨を避けし所」（五）函谷關の令尹喜は、老子に從ひて後消息なく、河上の仙翁は、文帝に老子經を授けて後、何處へか去りて歸り來らず、神仙と雖も、長生し難きを知るべきなり（六）近く劉明府を尋ね、共に會飮せんとす。晉書に「陶潛字は淵明、彭澤の宰たり、後、印綬を解き歸り去る、嘗て、九日に酒なし、籬邊の叢中に坐し、菊を摘んで把に滿つ、之を久しうして、白衣の人至るを見る、太守王弘酒を送れるなり」と。劉明府に比す

五日に妓を看る

萬楚

依。
物在人亡無二見期一。閑庭繫レ馬不レ勝レ悲。窗前綠竹生二空地一。門外青山似二舊時一。悵望青天鳴二墜葉一。巑岏枯柳宿二寒鴟一。憶レ君涙落東流水。歲歲花開知爲レ誰。

燕臺一去客心驚。笙鼓喧喧漢將營。萬里寒光生二積雪一。三邊曙色動二危旌一。沙場烽火侵二胡月一。

物在り人亡くして見るの期なし。閑庭馬を繫いで悲に勝へず。窗前の綠竹空地に生じ。(二)門外の青山舊時に似たり。(三)悵望すれば青天墜葉鳴り。巑岏たる枯柳寒鴟宿す。(四)君を憶うて涙落つ東流の水。歲歲花開くは知りぬ誰が爲ぞ。

(一)盧司勳員外の歿後の邸を過ぎ、悲みを述ぶ。(鳴るは翻すの誤ならん)(二)門外の青山は主人在世の時に變らず (三)落葉空に翻りて鳴り、高き枯柳に鴟(ふくろう)寒げに棲む (四)東流の水の如く、歸らざる君を憶ひて泣く

薊門を望む　祖詠

(一)燕臺一たび去つて客心驚く。笙鼓喧喧たり漢將の營。萬里の寒光積雪に生じ。(二)三邊の曙色危旌に動く。(三)沙場の烽火胡月を侵し。海畔の雲山薊城を擁す。(四)少小より投筆の吏にあらずと雖も。功を論じて還た長纓を請はんと欲す。

(一)燕臺(薊門の地、昭王の黃金臺)に來りて心驚くこと多く將軍の營に簫鼓喧しく鳴る (二)三邊(東南北の邊塞)の曉光高き旌にさし初む (三)沙漠の烽火は胡地の月影を侵し、北海の雲山は薊州城を擁む (四)余は班超の如き

發二金錢一供二御府一。晝看三仙液注二離宮一。千巖曙雪旗門上。十月寒花輦路中。不レ覩聲名與二文物一。自傷留滯去二關東一。

花宮仙梵遠微微。月隱二高城一鐘漏稀。夜動二霜林一驚二落葉一。曉聞天籟發二淸機一。蕭條已入二寒空一靜。颯沓仍隨二秋雨一飛。始覺浮生無二住著一。頓令三心地欲二歸

の寒花輦路の中。(四)覩ず聲名と文物と。自ら傷む留滯して關東に去ることを。

(一)君は、大司農(穀貨調度を司る)に官して、驪山の行幸に供奉し職權盛なるべし (二)年々人民の金錢を徴して御府に納め、日々、仙液(溫泉)の離宮に注ぎ入るを見る (三)千巖の曉雪は旗纛る離宮に輝き、十月の寒花は行幸の路を飾る (四)余は行幸の盛儀を拜するを得ず、遠く關東に滯留するを悲しむ

瑩公の禪房に宿し梵を聞く

(一)花宮の仙梵遠くして微微たり。月は高城に隱れて鐘漏稀なり。(二)夜霜林に動いて落葉かと驚き。曉に聞く天籟の淸機を發するを。(三)蕭條として已に寒空に入つて靜かに。颯沓として仍ほ秋雨に隨つて飛ぶ。(四)始めて覺ゆ浮世住著なきを。頓に心地をして歸依せんと欲せしむ。

(一)蓮花宮(寺)の讀經の聲、遠くかすかに聞ゆ (二)聲、霜林に傳りて落葉かと驚かれ、曉には自然の音樂の如く、淸淨の心機を動かさしむ (三)俄に淋しくなりて寒空の中に消え入り、又、颯りて高く、秋雨に和する如く聞ゆ (四)經聲を聞きて、始めて世の便なきを觀じ、佛に歸依したき心生ず

(一)盧五の舊居に贈る

草深。此外俗塵都不レ染。唯餘二玄度一得二相尋一。

新加二大邑一綬仍黃。近與二單車一向二洛陽一。顧眄一過丞相府。風流三接令公香。南川粳稻花侵レ縣。西嶺雲霞色滿レ堂。共道進レ賢蒙二上賞一。看君幾歲作二臺郎一。

知君官屬二大司農一。詔幸二驪山一職事雄。歲

棊む)の如き高士のみ、僅に尋ね遊ぶことを得べし。(暗に自らいふ)

綦毋三に寄す

新に大邑を如へて綬仍ほ黃なり。(一)近く單車と洛陽に向ふ。(二)顧眄一たび過ぐ丞相府。風流三たび接す令公の香。(三)南川の粳稻花縣を侵し。西嶺の雲霞色堂に滿つ。(四)共に道ふ賢を進むれば上賞を蒙ると。(五)看ん君が幾歲か臺郎と作るを。

(一)君は大邑洛陽縣の尉に轉ぜしも、なほ地方の屬吏たるを免れず。漢制に「丞尉の官は銅印黃綬」(二)近日、單車(飾りなき一つの車)に乘り、任地に向はんとす (三)洛陽の丞相府に到らば、必ず大官の眷顧を受け、又、風流の才により、屢々中書令にも接するならん。(魏の中書令荀彧性薰香を好み、その座三日香し、時人稱して令公香といふ) (四)治績擧り、南川地方の稻花は縣內に咲き滿ち、西方山嶺の雲霞は廳堂の眺めに入るべし (五)人々皆いふ「賢を進むれば上賞を蒙る」(漢高帝の語)と、幾歲かの後には、君は臺省の郎官に擧げらるべし

李回を送る

(一)知る君が官大司農に屬するを。詔して驪山に幸して職事雄なり。(二)歲々金錢を發して御府に供し。晝は仙液の離宮に注ぐを看る。(三)千巖(の)曙雪旗門の上。十月

河陽。草色新年發二建章一。秦地立春傳二太史一。漢宮題柱憶二仙郎一。歸鴻欲レ度千門雪。侍女新添五夜香。早晚薦二雄文似者一。故人今已賦二長楊一。

題柱仙郎を憶ふ。歸鴻度らんと欲す千門の雪。侍女新に添ふ五夜の香。(四)早晚雄が文似たる者を薦めん。(三)故人今已に長楊を賦す。

(一)氷、解け流るゝ十二月に、河陽を發し、建章宮に草靑む頃都に入る (二)秦地長安に春立つ日、盧氏尙書郎に拜せしを憶ふ。月令に「立春に先つ三日、太史入つて天子に謁し、某日の立春なるを奏す」又漢靈帝、尙書郎田鳳を賞し、その名を殿柱に記す (三)歸雁、雪殘る宮禁の空を過ぎ、宿直五更の夜に、侍史の官女香を焚きて朝衣を薰ず (四)盧氏は早晚余を薦め與るゝならんか、余に苦心の作篇ありて、天子に獻ずるに足れりと信ず、漢書に「成帝の時、客に揚雄が文、相如に似たりと薦むるものあり」揚雄、長楊賦を作る

遠公遁跡廬山岑。開士幽居祇樹林。片石孤雲窺二色相一。淸池皓月照二禪心一。指二揮如意一天花落。坐二臥閑房一春

璿公の山池に題す

(一)遠公遁跡す廬山の岑。開士幽居す祇樹の林。(二)片石孤雲色相を窺ひ。淸池皓月禪心を照す。(三)如意を指揮して天花落ち。閑房に坐臥して春草深し。(四)此の外俗塵都べて染まず。唯玄度を餘して相尋ぬるを得しむ。

(一)晉の惠遠世を遁れし廬山の如く、又、佛幽居の祇樹林に似たり (二)ただ雲と石とに色相(いろかたち)を見、池水と明月と、共に禪心を照して澄む (三)禪機動きて如意を揮ふ時、天界より花降り、禪機息みて房室に臥する時、地上に草深く茂る (四)この淸境は俗人の往來することを許さず、たゞ玄度(晉の高士、常に僧支遁と往來し、禪を

積翠來。御柳遙隨二天仗一發。林花不レ待二晩風一開。已知聖澤深無レ限。更喜年芳入二睿才一。

朝聞遊子唱二離歌一。昨夜微霜初度レ河。鴻雁不レ堪二愁裏聽一。雲山況是客中過。關城曙色催レ寒近。御苑砧聲向レ晩多。莫四是長安行樂處。空令三歲月易二蹉跎一。

流澌臘月下二

（一）別館習春閣に陽和の氣催し、三宮（蓬萊・興慶・望春）行幸の路鳳凰鑾（閣道）に移り進む　（二）雲歸れて北の紫闕に陰氣散じ、雨歇んで終南山の積翠眺めに入る　（三）御道の柳儀仗の過ぐる邊に芽ぐむ　（四）春芽、御製に入りしを喜ぶ

魏萬が京に之くを送る　　李頎

朝に聞く遊子離歌を唱ふるを。（一）昨夜微霜初めて河を度る。鴻雁は愁裏に聽くに堪へず。雲山況んや是れ客中に過ぐるをや。關城の曙色寒を催すこと近く。（二）御苑の砧聲晩に向つて多からん。（三）是れ長安行樂の處。空しく歲月をして蹉跎し易からしむる莫れ。

（一）昨夜微霜の中に黃河を渡り、この地に來る　（二）長安は夜に入りて砧聲多く、客懷淋しからん　（三）長安は遊樂に便なる處なるも、空しく歲月を過し、前途を誤ることなかれ

盧司勳員外に寄す

（一）流澌臘月河陽を下り。草色新年建章に發す。（二）秦地の立春太史より傳へ。漢宮の

無著天親弟與レ兄。嵩丘蘭若一峯晴。食隨二鳴磬一巢烏下。行踏二空林一落葉聲。迸水定浸二香案一濕。雨花應下共二石牀一平上。深洞長松何所レ有。儼然天竺古先生。

(一)無著天親弟と兄と。嵩丘の蘭若一峯晴る。(二)食は鳴磬に隨つて巢烏下り。行く空林を踏めば落葉聲る。(三)迸水定めて香案を浸して濕し。雨花應に石牀と平かなるべし。(四)深洞の長松何の有る所ぞ。儼然たり天竺の古先生。

(一) 天竺の無著大士と天親菩薩との如く、禪師と居士とは法門の兄弟なり (二) 磬を聞き、木に巢へる鳥、餌を求めに下る (三) 道力に依りて、水迸りて香爐の案(つくゑ)を濕し、花散り積りて石の牀(こしかけ)と平かになるべし。(梁僧誌公寳積寺に水なきに因り錫を地に卓けば泉涌くこと數尺、又、釋迦如來說法の時、天自ら花を雨らす) (四) 深洞の中には、長松のみ、たゞ佛如來嚴かに在すのみ

聖製蓬萊より興慶に向ふ閣道中留春雨中春望の作に和し奉る應制

李憕

別館春還淑氣催。三宮路轉鳳凰臺。雲飛北闕輕陰散。雨歇南山

(一)別館春還つて淑氣催す。三宮路轉ず鳳凰臺。(二)雲飛んで北闕輕陰散じ。雨歇んで南山積翠來る。(三)御柳遙に天仗に隨つて發し。林花晚風を待たずして開く。已に知る聖澤深うして限なきを。(四)更に喜ぶ年芳の睿才に入るを。

笑二彈冠一。艸色全經二細雨一濕。花枝欲レ動春風寒。世事浮雲何足レ問。不レ如高臥且加レ餐。

を加ふるに。

㊀白髪の年まで交際せし友も、利のためには劔に手をかけて爭ふ ㊁朱門高貴の先達は、後進の者が冠の塵をはじき、任官の命を待つを笑ふ ㊂世上の富貴は、はかなきこと浮雲の如く、深く係むべきにあらず、退隱して食を進め、身を健にするに如かざるなり

郭給事に酬ゆ

洞門高閣靄二餘暉一。桃李陰陰柳絮飛。禁裏疏鐘官舍晩。省中啼鳥吏人稀。晨搖二玉佩一趨二金殿一。夕奉二天書一拜二瑣闈一。強欲レ從レ君無レ那レ老。將下因二臥病一解中朝衣上。

(一)洞門高閣餘暉に靄たり。桃李陰陰として柳絮飛ぶ。禁裏の疎鐘官舍晩れ。省中の啼鳥吏人稀なり。晨に玉佩を搖して金殿に趨り。(二)夕に天書を奉じて瑣闈に拜す。(三)強ひて君に從はんと欲するに老を那ともするなし。將に臥病に因つて朝衣を解かんとす。

㊀洞門（門と門と相向へるもの）高閣夕日にかすむ ㊁詔を奉じ、青瑣門に入りて宿直す ㊂君に從ひて勤務したきも、老年意の如くならず、病によりて官を辭せんとす

乘如禪師蕭居士が嵩丘の蘭若を過ぐ

芙蓉闕下會二千官一。紫禁朱櫻出二上蘭一。纔是寢園春薦後。非レ關御苑鳥銜殘。歸鞍競帶青絲籠。中使頻傾赤玉盤。飽食不レ須レ愁二內熱一。大官還有二蔗漿寒一。

(一)芙蓉闕下に千官を會し。紫禁の朱櫻上蘭より出づ。(二)纔かに是れ寢園春薦むる後。(三)闕るにあらず御苑鳥銜み殘すに。(四)歸鞍競ひ帶ぶ青絲籠。中使頻に傾く赤玉盤。(五)飽食して內熱を愁ふるを須ひず。大官還た蔗漿の寒きあり。

(一) 李綽の歲時記に「四月一日、內苑より櫻桃を寢廟に進め、薦め訖りて百官に頒賜す、各々差あり」と、又、本草に「櫻桃樹甚だ高からず、春初花を開き、繁英雪の如し、葉、圓に尖及び細齒あり、子を結ぶ一枝數十顆、三月に熟す」 (二) 芙蓉苑の宮殿に千官を會して櫻桃を賜ふ、その朱櫻桃は、苑內の上蘭觀より出でしものなり (三) 初めて祖廟に進められしものにて、御苑に鳥の啄み殘せしものにはあらず (四) 諸官の歸鞍には青絲を飾れる籠を結び付け、中に櫻桃あり、中使(班賜を司る官)はなほ琉璃盆を傾けて頻に櫻桃を頒つ (五) 櫻桃を多食して、發熱すとも愁ふるに足らず、大官(大膳職)には冷き甘蔗汁ありてよく之を治すべし

酒を酌みて裴迪に與ふ

酌レ酒與レ君君自寬。人情翻覆似二波瀾一。白首相知猶按レ劍。朱門先達

酒を酌みて君に與ふ君自ら寬うせよ。人情の翻覆波瀾に似たり。(一)白首の相知もなほ劍を按じ。(二)朱門の先達は彈冠を笑ふ。艸色全く細雨を經て濕ひ。花枝動かんと欲して春風寒し。(三)世事は浮雲何ぞ問ふに足らん。如かず高臥して且つ餐

君一。

渭水自縈二秦塞一曲。黄山舊繞二漢宮一斜。鑾輿迥出千門柳。閣道廻看上苑花。雲裏帝城雙鳳闕。雨中春樹萬人家。爲下乘二陽氣一行中時令上。不三是宸遊玩二物華一。

に置き、衆民喜びて飲む。(北斗は枡の形)　(五) 樽前に宴し、舜帝五絃の琴を弾じ、南薫の詩を歌ふに似たり　(六) 天意、奇瑞を下し、民意帝運の隆昌を祈り、共に千秋萬歳を壽ぐ

聖製蓬萊より興慶に向ふ閣道中の留春雨中春望の作に和し奉る應制 (一)

渭水自ら秦塞を縈つて曲り。(二)黄山舊漢宮を繞らして斜なり。鑾輿迥に出づ千門の柳。閣道廻し看る上苑の花。(三)雲裏の帝城雙鳳闕。(四)雨中の春樹萬人家。(五)陽氣に乘じて時令を行はんが爲なり。是れ宸遊の物華を玩ぶにあらず。

(一) 留春閣　(二) 漢の武帝の上林苑、北、黄山を繞り、廣袤三百里、離宮六十所といふ　(三) 鑾輿諸門の柳の上に露はれ、首を回らせば、上林苑に花美し　(四) 雲中の禁城に鳳闕(門側の樓)並び聳え、雨ふる春樹の間に人家多く見ゆ　(五) 禮記月令に「立春の日、天子自ら春を東郊に迎へ、德を布き、令を行ふ」と。今次の行幸は徒に遊樂を事とし、春景を玩ばるゝ爲にはあらず。(暗に諷諫の意を含む)

勅して百官に櫻桃を賜ふ (一)

繞。碧澗翻從二玉殿一來。新豐樹裏行人度。小苑城邊獵騎回。聞說甘泉能獻ㇾ賦。懸知獨有二子雲才一。

欲ㇾ笑周文謌ㇾ燕ㇾ鎬。還輕漢武樂ㇾ橫ㇾ汾。豈知玉殿生二三秀一。詎有三銅池出二五雲一。陌上堯尊傾二北斗一。樓前舜樂動二南薰一。共歡天意同二人意一。萬歲千秋奉二聖

㈠ 天子の離宮、露盤祠に接し、秦川の地に、半ば夕陽輝く ㈡ 青山に行幸の赤旗を樹て列ね、溫泉の水碧き川となりて宮殿より流れ來る ㈢ 新豐の樹間に衆人往來し、芙蓉苑のほとりに獵騎歸る ㈣ 章主簿の文才は揚子雲（漢の揚雄）に比すべく、羣臣の中にて、ひとり、甘泉賦に劣らざる名篇を獻じたりと聞く

大同殿に玉芝を生じ龍池の上に慶雲あり百官共に觀聖恩便ち燕樂を賜ふ敢て卽事を書す

㈠笑はんと欲す周文の鎬に燕するを謌ふを。還た輕んず漢武の汾に橫ふを樂むを。㈢豈知らんや玉殿三秀を生ずるを。詎ぞ銅池に五雲を出すことあらん。㈣陌上の堯尊北斗を傾け。㈤樓前の舜樂南薰を動す。㈥共に歡ぶ天意人意に同じきことを。萬歲千秋聖君に奉ぜん。

㈠ 舊唐書に「天寶七載三月、大同殿（龍池の上、興慶宮の正殿）の柱に玉芝を産す」又、宋書に「慶雲五色なるものは太平の應なり」 ㈡ 周の文王鎬池に宴し、漢武帝、汾水に舟を橫へしも、共に今日の盛宴に及ばず ㈢ 玉殿に三秀の靈芝を生じ、池に五色の慶雲を出すことは、周文漢武共に知らざりし所なり。楚辭に「三秀を山間に採る」註に「芝草なり」又、漢宣帝の元年、金芝九莖、函德殿の銅池中に産す ㈣ 堯帝の如く、天子酒を賜ひて街衢

波ニ鳳池上。朝
朝染レ翰侍ニ君
王ニ。

絳幘雞人報ニ
曉籌ヲ。尙衣方
進翠雲裘。九
天閶闔開ニ宮
殿ヲ。萬國衣冠
拜ニ冕旒ヲ。日色
纔臨ニ仙掌ニ動。
香烟欲下傍ニ袞
龍ニ浮上。朝罷須レ
裁ニ五色詔ヲ。珮
聲歸到鳳池
頭。

漢主離宮接ニ
露臺ニ。秦川一
半夕陽開。青
山盡是朱旗

賈至舍人大明宮に早朝するの作に和す　王維

(一)絳幘の雞人曉籌を報ず。尙衣方に進む翠雲裘。(二)九天の閶闔宮殿を開き。萬國の衣冠冕旒を拜す。(三)日色纔に仙掌に臨んで動き。香烟袞龍に傍うて浮ばんと欲す。(四)朝罷んで須らく五色の詔を裁すべし。珮聲歸り到る鳳池の頭。

(一)絳幘(赤き巾冠)を著け雞に象れる衞士、曉刻を報じ、調度の官、翠雲を織へる御服を進む (二)閶闔(大門)開けて、宮殿に朝會の時刻來り、吐蕃回紇等の外使も共に天子を拜す (三)日は、承露盤の仙人掌にさし初め、香煙は袞龍(輪になりたる龍)を畫ける御衣に漂ふ (四)朝儀終りて後、詔書を艸するために、佩玉を鳴らしつゝ中書省に歸り(後趙の石虎、詔書に五色紙を用ひ、木鳳の口に銜ましむ)

太常韋主簿五郎が溫泉の寓目に和す

(一)漢主の離宮露臺に接し。秦川一半夕陽開く。(二)青山盡く是れ朱旗繞り。碧澗翻つて玉殿より來り。(三)新豐樹裏行人度り。小苑城邊獵騎回る。(四)聞說甘泉能く賦を獻ずと。懸に知る獨子雲の才あることを。

成二古丘一。三山半落青天外。二水中分白鷺洲。總爲二浮雲能蔽一レ日。長安不レ見使二人愁一。

銀燭朝レ天紫陌長。禁城春色曉蒼蒼。千條弱柳垂二青瑣一。百囀流鶯遶二建章一。劍佩聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香。共沐二恩

㊀ 六朝（吳・東晉・宋・齊・梁・陳）の舊都、城の東南に鳳凰臺あり、宋の元嘉年中、三鳥あり來つてこゝに飛び、文彩五色、音聲諧和せりといふ ㊁ 吳宮の花樹芳草は、こみちの塵に埋れ、晉代衣冠の貴人は、すでに死して古丘（墳墓）となる ㊂ 雲中の句容三峰は、青天より落ちし如くに下半を露し、秦淮の流は、二分して白鷺洲を繞る。史正碑に「秦淮の源、句容深水兩山の間に出て、合流して金陵に至り、分れて二支となり、一は城に入り、一は城外を遶り、共に一洲を夾む、白鷺といふ」 ㊃ 浮雲日を蔽ふために、長安の都も見えず、人をして愁深からしむ。（佞人天子の聰明を蔽ひ、爲めに身は讒に遇ひ、朝を退けられしをいふ）

大明宮に早朝し兩省(一)の僚友に呈す　　賈至

(二)銀燭天に朝して紫陌長し。禁城の春色曉蒼蒼。(三)千條の弱柳青瑣に垂れ。百囀の流鶯建章を繞る。(四)劍佩聲は隨ふ玉墀の步。衣冠身は惹く御爐の香。(五)共に恩波に沐す鳳池の上。朝朝翰を染めて君王に侍す。

㊀ 中書、門下の兩省 ㊁ 未明に燭を執りて出仕するに、禁街長く、禁城に曉霧青く籠む ㊂ 柔なる柳、千條の綠を青瑣門に垂れ、流鶯（あちらこちらに飛ぶ鶯）百囀して建章宮をめぐる ㊃ 玉墀（殿前の地）を步むにつれて劍鳴り佩玉響き、衣冠束帶の身に御爐の香氣を帶ぶ ㊄ 天恩を鳳凰池上の中書省に受け、毎朝詔書を艸して君王に侍す

岧嶢太華俯二咸京一。天外三峯削不レ成。武帝祠前雲欲レ散。仙人掌上雨初晴。河山北枕二秦關一險。驛路西連二漢畤一平。借問路傍名利客。無レ如三此處學二長生一。

鳳皇臺上鳳皇遊。鳳去臺空江自流。吳宮花草埋二幽徑一。晉代衣冠

行〻華陰を經

(一)岧嶢たる太華咸京に俯す。(二)天外の三峯削れども成らず。(三)武帝祠前雲散ぜんと欲し。(四)仙人掌上雨初めて晴る。河山北(五)秦關に枕んで嶮しく。(六)驛路西漢畤に連つて平かなり。(七)借問す路傍名利の客。此處長生を學ぶに如くはなからん。

㊀太華山高く聳え咸陽の都に俯す　㊁天に接する三峯（蓮花・毛女・松檜）は、人工にて削るとも、此の如く險峻なり難し　㊂漢の武帝の建てし巨靈の祠　㊃仙掌巖（山中の絕壁掌狀をなせるもの）　㊄函谷關　㊅漢武帝の建てし祠壇　㊆路上、名利に奔走する客は、この山に入り、長生不死の術を學ぶに如かざるべし。（仙人茅濛、華山にて道を修め、雲に乘りて昇天すと傳ふ）

(一)金陵の鳳皇臺に登る　李白

鳳皇臺上鳳皇遊ぶ。鳳去り臺空しうして江自ら流る。(二)吳宮の花草幽徑に埋れ。晉代の衣冠古丘と成る。(三)三山半ば落つ青天の外。二水中分す白鷺洲。(四)總て浮雲の能く日を蔽ふが爲に。長安見えず人をして愁へしむ。

邊淑氣迎二芳草一。林下輕風待二落梅一。秋憲府中高唱入。春卿署裏和歌來。共言東閣招レ賢地。自有二西征作賦才一。

東閣賢を招くの地。自ら西征作賦の才ありと。

㊀ 河邊の草、春の氣を迎へて香り、林下の梅花、晩風を待ちて落つ ㊁ 秋憲府（御史府）に巧妙なる詩を送り、春卿署（禮部の署）諸公より和韻來る ㊂ 東閣丞相府は賢士を招く處なれば、才藻に富む君は必ず榮進の路を開かるべし。（晉の潘岳、長安の令となり、西征賦を作るに比す）

黃鶴樓（一）　崔顥

昔人已乘二黃鶴一去。此地空餘黃鶴樓。黃鶴一去不二復返一。白雲千載空悠悠。晴川歷歷漢陽樹。芳艸萋萋鸚鵡洲。日暮鄉關何處是。煙波江上使二人愁一。

昔人已に黃鶴に乘りて去る。此の地空しく餘す黃鶴樓。黃鶴一たび去つて復た返らず。白雲千載空しく悠悠。晴川歷歷たり（二）漢陽の樹。芳艸萋萋たり鸚鵡洲。（三）日暮鄉關何れの處か是なる。煙波江上人をして愁へしむ。

㊀ 武昌黃鶴山の麓、黃鶴磯の側にあり、漢江に臨む、蜀の費禕、仙となり、黃鶴に乘り、こゝに來り憩ふ、又、嘗て一仙人あり、辛氏の酒樓に憩ひ、一黃鶴を壁に畫き酒債に充つ、坐する者手を拍つて舞へば黃鶴も節に應じて舞ふ、故に衆人錢を費して之を觀、十年許にして辛氏鉅萬の富を累ぬ、後、かの仙人到り、笛を取つて吹けば黃鶴飛んで仙人の側に至り、仙人之に跨りて去る ㊁ 河水の晴るゝ處に漢陽縣の樹木明かに見え、鸚鵡洲（禰衡、魏の黃口祖に殺されし地、衡、嘗て鸚鵡賦を作る）に草青く茂る ㊂ 日暮に故鄉を望めども見えず、波煙る江上の景は、常に人を愁へしむ

輿出二紫微一。織女橋邊烏鵲起。仙人樓上鳳凰飛。流風入レ座飄二歌扇一。瀑水當レ階濺二舞衣一。今日還同下犯二牛斗一。乘レ槎共泛二海潮一歸上。

仙人樓上鳳凰飛ぶ。(三)流風座に入つて歌扇を飄し。瀑水階に當つて舞衣に濺ぐ。(四)今日還た牛斗を犯して。槎に乘じ共に海潮に泛び歸るに同じ。

(一)銀河支機石のことは昔より傳へ聞き居しが、金輿行幸の兩莊は、それにも劣らぬ、美しき跡なり、博物誌に「人あり、銀河に遡り、一石を得、歸りて蜀の嚴君平に問ふ、君平曰く、是れ、織女の支機石なりと」(二)銀河織女の橋に烏鵲(かさゝぎ)起ち、蕭史弄玉の樓上に鳳凰飛ぶ、公主の樓臺は之に似たり (三)流るゝ如き風、座に入りて歌扇を吹き飄し、庭中の瀑水、舞衣に濺ぎかゝる (四)銀河に到り、牽牛織女二星の座を犯し、舟に乘りて歸るに同じ

左司張員外が洛より使して京に入り中路先づ長安に赴きて立春日に逢ひ韋侍御及び諸公に贈るに和す

孫逖

忽視二雲間數雁廻一。更逢二山上一花開一。河

忽ち雲間數雁の廻るを觀。更に山上一花の開くに逢ふ。(一)河邊の淑氣芳草を迎へ。林下の輕風落梅を待つ。(二)秋憲府中高唱入り。春卿署裏和歌來る。(三)共に言ふ

銅龍曉闢問レ安廻。金輅春遊博望開。渭水晴光搖二草樹一。終南佳氣入二樓臺一。招レ賢已從商山老。託レ乘還徵鄴下才。臣在二東南一獨留滯。忻逢二睿藻日邊來一。

傳聞銀漢支機石、復見金

春日苑を出でて矚目するに和し奉る應令（一）　賈曾

（二）銅龍曉に闢いて安を問うて廻り。（三）金輅春遊して博望開く。（四）渭水の晴光草樹に搖き。終南佳氣樓臺に入る。（五）賢を招いて已に從ふ商山の老。（六）乘に託して還た徵す鄴下の才。（七）臣は東南に在つて獨り留滯す。忻ぶ睿藻の日邊より來るに逢ふを。

（一）太子の命によりて賦す　（二）東宮、天子、安否を問うて歸る（東宮の門、樓上に銅龍あり）　（三）金輅（太子の車）に乘り、御苑に春遊す（博望は漢代戾太子の苑、借りていふ）　（四）渭水快晴の光、草樹に滿ち動く　（五）賢者を招き、商山四皓（東園公、綺里季、夏黃公、用里先生）の如きものを從ふ（四皓、漢高祖の太子を佐く）　（六）車に載せ、鄴下七子（孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、應瑒、劉楨）の如き詩人を徵す。（魏の文帝太子たりし時、歷々亡子を徵す）　（七）太子の詩、長安より來るを喜ぶ、晉の明帝曾て太子に問ひて曰く、日と長安と孰れか遠き、太子答へて曰く、長安近し、人の日邊より來るを聞かずと

初春太平公主の南莊に幸するに和し奉る應制　李邕

（一）傳へ聞く銀漢の支機石。復た見る金輿の紫微を出づるを。（二）織女橋邊烏鵲起ち。

質，香臺豈是世中情。雲間東嶺千重出。樹裏南湖一片明。若使巣由同此意。不將羅薜易簪纓。

清都衆木總榮芬。傳道孤松最出羣。名接天庭多景色。氣連宮闕借氛氳。懸池的的停華露。偃蓋重重拂瑞雲。不惜流膏助仙鼎。願將楨幹捧明君。

(一) 山靜かに佛道を求むる心生じ、谷深く鳥の聲のみ聞ゆ (二) 禪宗寺院等は、高く塵外にあるを常とし、世間塵俗の情を交ふべからず (三) 樹間より、南方の澄湖明かに見ゆ (四) 余をして、始より古隱者巣父、許由の如き心を持ちしめば、山中の生活を捨て、朝に仕へざりしならん。(朝に仕へ、貶謫せられしを悔ゆ)。蘿薜(つたの類、即ち隱者の服)、簪纓(かざしと冠のひもと、即ち朝服)

遙かに蔡起居の偃松篇に同じうす(一)

(二)清都の衆木總て榮芬。傳へ道ふ孤松最も羣を出づと。(三)名は天庭に接して景色多く。氣は宮闕に連つて氛氳を借る。(四)池に懸つて的的として華露を停め。蓋を偃せて重重として瑞雲を拂ふ。(五)惜まず流膏の仙鼎を助くることを。願くは楨幹を將つて明君に捧ぜん。

(一) 枝、笠の如く四方に張りたる松 (二) 都の樹木、榮え茂る中に、孤松殊に秀づと聞く(蔡氏の德に比す) (三) 影、紫庭に接して景色すぐれ、宮闕の佳氣を借りてにはやかなりき(蔡氏の榮達に比す) (四) 池に臨み、光り[illegible]露をとゞめ、笠をふせたる如き影、重りて瑞雲を拂ふ。(蔡氏の詞藻に比す) (五) 天子仙藥の[illegible]を鍊[illegible]たる、膏(あぶら)を採り、器に入るゝも惜し氣なく、更に棟梁の材となり、聖明の君に捧げ奉らんと。(蔡氏の忠節に比す)

驛平陽館。不レ羨乘二槎雲漢邊一。
去歲荊南梅似レ雪。今年薊北雪如レ梅。共知人事何嘗定。且喜年華去復來。邊鎭戍歌連日動。京城燎火徹レ明開。遙遙西向二長安日一。願上南山壽一杯。
空山寂歷道心生。虛谷迢遙野鳥聲。禪室由來雲外

幽州新歲の作　　張説

去歲(一)荊南梅雪に似たり。今年(二)薊北雪梅の如し。(三)共に知る人事何ぞ嘗て定らん。且つ喜ぶ年華の去つて復た來るを。邊鎭の戍歌は連日動き。(四)京城の燎火は明に徹して開く。(五)遙遙として西長安の日に向ひ。願くは上らん南山の壽一杯。

(一)荊楚の南　(二)北境幽州　(三)南に去り北に來り、人事定りなき中に、また新年に逢ふを喜ぶ　(四)禁中新年の夜に燎火(かゞり)を焚き、晩まで輝く　(五)長安の日(天子)に向ひ、萬歲を祈り、祝杯を奉らん

灉湖の山寺

(一)空山寂歷として道心生ず。虛谷迢遙たり野鳥の聲。(二)禪室由來雲外の賞。香臺豈是れ世中の情ならん。雲間の東嶺千重出で。(三)樹裏の南湖一片明かなり。(四)若し巢由と此の意を同じうせしめば。蘿薜を將つて簪纓に易へじ。

可レ憐。更逢二晴日一柳含レ烟。宮中下見南山盡。城上平臨北斗懸。細草偏承回輦處。飛花故落舞觴前。宸遊對レ此歡無レ極。鳥弄二歌聲一雜二管絃一。

る南山の盡くるを。城上平臨す北斗の懸るに。(四)細草偏に承く回輦の處。飛花故に落つ舞觴の前。宸遊此に對して歡 極なし。(五)鳥は歌聲を弄して管絃に雜る。

(一)長安の東、滻水の西、隋の文帝築く　(二)面白し　(三)宮高く、南山を眼下に看盡し、北斗星を平かに臨む　(四)草軟かに、御輦の車輪を承け、花散りて、酒杯を取り交す前に落つ　(五)鳥も歌ひて、饗宴の樂に和す

初春太平公主の南莊に幸するに和し奉る應制

主第山門起二灞川一。宸遊風景入二初年一。鳳皇樓下交二天仗一。烏鵲橋頭敞二御筵一。往往花間逢二綵石一。時時竹裏見二紅泉一。今朝扈

主第山門(一)灞川に起り。宸遊の風景初年に入る。(二)鳳皇樓下天仗を交へ。(三)烏鵲橋頭御筵敞かなり。往往花間に綵石に逢ひ。(四)時時竹裏に紅泉を見る。(五)今朝扈蹕す平陽館。(六)羨まず槎に雲漢の邊に乘ずるを。

(一)山麓の門　(二)初春　(三)蕭史弄玉の鳳凰樓に似たる下に、儀仗を列ね、銀河の烏鵲橋に似たる邊に、御宴ははればれしく開く　(四)彩ある美しき石　(五)花に映りて紅なる泉　(六)平陽館(漢武帝の姉、平陽公主の館)に似たる南莊に扈從し、古人、舟に乘り銀河に到りし樂に同じ

水樹千重入二御筵一。宴樂已深魚藻詠。承レ恩更欲レ奏二甘泉一。

駸駸羽騎歷二城池一。帝女樓臺向レ晩披。露灑二旌旗一雲外出。風廻二巖岫一雨中移。當レ軒半落天河水。遶レ徑全低月樹枝。簫鼓宸遊陪レ宴日。和鳴雙鳳喜二來儀一。

東望二望春一春

迎ふるが如し。幌（四）幕にて圍みたる舍殿）㊅ 水邊の樹木、茂り重なり、その影御筵にさし入る ㊆ 宴樂深く詩を作りて天子の高議を祝す、魚藻（鎬池の宴に諸侯文王を頌せし詩篇）㊇ 深き天恩に感じ、更に甘泉賦（漢成帝、甘泉に遊幸の時、揚雄の奉りし賦）の如き名篇を奉りたし

宴に安樂公主の新宅に侍す應制

蘇頲

（一）駸駸たる羽騎城池を歷。帝女の樓臺晩に向つて披く。露は旌旗に灑いで雲外に出で。（二）風は巖岫を廻つて雨中に移る。（三）軒に當つて半ば落つ天河の水。（四）徑を遶つて全く低る月樹の枝。簫鼓宸遊宴に陪する日。（五）和鳴の雙鳳來儀を喜ぶ。

㊀ 馬の進む貌 ㊁ 弓箭を帶ぶる騎士 ㊂ 風吹きめぐり、雲中の巖岫、あちらに現れ、こちらに隱る ㊃ 雨後の銀河半ば軒にかゝり、月中の桂樹の枝、地に垂るゝかと疑はる。（公主を、銀河の織女、月界の嫦娥に比す）㊄ 和鳴する雙鳳の如く、公主夫妻、御宴に侍するを喜ぶ。尚書に「鳳あり來儀す」

春日望春宮に幸するに和し奉る應制（一）

東望春を望めば春憐むべし。（二）更に晴日に逢うて柳烟を含む。（三）宮中下し見

天長地闊嶺頭分。去レ國離レ家見二白雲一。洛浦風光何所レ似。崇山瘴癘不レ堪レ聞。南浮二漲海一人何處。北望二衡陽一雁幾羣。兩地江山萬餘里。何時重謁二聖明君一。

(一)天長く地闊うして嶺頭に分れ。國を去り家を離れて白雲を見る。(二)洛浦の風光何の似たる所ぞ。(三)崇山の瘴癘聞くに堪へず。(四)南　漲海に浮んで人何の處ぞ。(五)北衡陽を望んで雁幾羣。兩地の江山萬餘里。何の時か重ねて聖明の君に謁せん。

(一)南嶺のほとりにて路分れ、各々異る配所に向ふ　(二)雲地淋しく、長安洛水の風景に似るものなし　(三)崇山の惡疫の氣は聞くさへ恐ろし　(四)漲海(交州東南の海)に泛びし杜審言は、今、何處にあるならんか　(五)、北方の衡陽には、幾羣の鴻雁飛び來りしならんか、雁は衡陽より北に歸り、人は更に遠く南す

興慶池に宴に侍す應制(一)

韋元旦

滄池漭流帝城邊。殊勝昆明鑿二漢年一。夾レ岸旌旗疏二輦道一。中流簫鼓振二樓船一。雲峯四起迎二宸幄一。

(二)滄池漭流たり帝城の邊。(三)殊に勝れり昆明漢年に鑿つに。(四)岸を夾む旌旗輦道を疏ち。中流の簫鼓樓船に振ふ。(五)雲峯四に起つて宸幄を迎へ。(六)水樹千重御筵に入る。(七)宴樂已に深うして魚藻詠ず。(八)恩を承けて更に甘泉を奏せんと欲す。

(一)滄池に同じ　(二)池、深く廣く帝城に接す　(三)瑞氣によりて自然に成りし池なれば、漢の世に、人工を費して鑿ちし昆明池に勝る　(四)旗影によりて、樹間に行幸の路あるを知る　(五)雲のたなびく峰、四面に峙ち、御遊を

中難レ可レ到。自憐深院得二徊翔一。

南方歸去再生レ天。內殿今年異二昔年一。見闢二乾坤一新定レ位。看題二日月一更高懸。行隨二香輦登仙路一。坐近二爐烟講法筵一。自喜深恩陪二侍從一。兩朝長在二聖人前一。

唐の福運を祈る ㈣ 晉の支遁は、剡東岇山を愛して隱れんとし、この院の如き清淨の佛域を知らざりき ㈤ 天竺の疊摩(だるま)は、長き海路を渡り來りしも、この院の如き弘法の便多き地を知らざりき ㈥ 經聲止む時、天子の玉音を聞き、佛前の鑪香、帝座の御香に接す ㈦ 天子に扈從し、修佛の席に列するを喜ぶ

再び道場(一)に入り事を紀す應制

(二)南方より歸り去つて再び天に生ず。內殿今年昔年に異なり。(三)見に乾坤を闢いて新に位を定め。(四)看〻日月を題して更に高く懸く。行いては(五)香輦登仙の路に隨ひ。坐しては爐烟講法の筵に近づく。(六)自ら喜ぶ深恩侍從に陪して。兩朝長に聖人の前にあることを。

㈠ 紅樓院 ㈡ 南方の謫地より歸り、再び朝に仕ふ ㈢ 中宗、則天武后の亂を鎭め、新に卽位せらる ㈣ 宸筆の扁額、日月の如くに高く懸る ㈤ 行幸の帝駕に從ひ、講法供養の筵に列す ㈥ 武后・中宗の兩朝に仕へ、長く聖天子の前にあるを喜ぶ

遙かに杜員外審言嶺を過ぐるに同じうす

出盡如鳴鳳嶺。池成不讓飲龍川。粧樓翠幌教春住。舞閣金鋪借日懸。敬從乘輿來此地。稱觴獻壽樂鈞天。

紅樓疑見白毫光。寺逼宸居福盛唐。支遁愛山情謾切。曇摩泛海路空長。經聲夜息聞天語。鑪氣晨飄接御香。誰謂此

を借りて懸る。(五)乘輿に敬從して此の地に來り。觴を稱げ壽を獻じて鈞天を樂む。

(一) 中宗の女、武崇訓に下嫁し、光艶天下を動かす、太平七公主と、皆、府を開き、臨川長公主の宅を奪ひて第となす、この時天子親幸し、近臣を宴す (二) 安樂公主、神仙の樂事を好み、別業美しく、天上銀河の邊かと思はる (三) 庭上に山聳え、簫史弄玉笙を吹きし鳴鳳嶺の如く、美しき池成り、黑龍來り飲みし渭水に劣らず (四) 粧樓に翠のとばりを張り、公主の艶姿春の如く若やぎ、舞樂の閣、黃金の飾りを懸け、日を受けて輝く (五) 天子に扈從し、壽杯を獻じ、鈞天の妙樂(天帝の樂)を樂しみ聽く

(一)紅樓院の應制

(二)紅樓疑ひ見る白毫光。(三)寺宸居に逼つて盛唐を福す。(四)支遁山を愛して情謾に切に。(五)曇摩海に泛んで路空しく長し。經聲夜息んで天語を聞き。鑪氣晨に飄つ(六)て御香に接す。(七)誰か謂ふ此中到るべきこと難しと。自ら憐む(八)深院に徊翔するを得たるを。

(一) 長安の嘉猷觀にあり、則天武后の時、內廷の佛事を修す (二) 紅樓に入れば、不思議にも如來の白毫光照せり。法華經に「爾時、佛、眉間の白毫相光を放ち、東方萬八千世界を照し、周遍せざるなし」 (三) 寺、宸居に近く、

龍池躍龍龍已飛。龍德先ㇾ天天不ㇾ違。池開二天漢一分二黃道一。龍向二天門一入二紫微一。邸第樓臺多二氣色一。君王鳧雁有二光輝一。爲報寰中百川水。來二朝此地一莫二東歸一。

皇家貴主好二神仙一。別業初開雲漢邊。山

龍池龍躍つて(一)龍已に飛ぶ。(二)龍德天に先つて天違はず。(三)池は天漢を開いて黃道より分れ。(四)龍は天門に向つて紫微に入る。(五)邸第樓臺氣色多く。(六)君王の鳧雁光輝あり。(七)爲に報ず寰中百川の水。此地に來朝して東歸することなかれ。

㈠ 曾て、長安隆慶坊の南に民家の漏井あり、忽ち湧いて小池となり、廣さ十數畝に至り、常に雲氣ありて散ぜず、或時黃龍その中に游泳するを見たり、後、ますます廣まりて大池となり、中宗の世遂に號して龍池といふ、玄宗即位以前の邸第その側にあり、即位の後、改めて離宮となし、興慶宮と名づけ、詞臣に命じて龍池樂章十篇を作らしむ、この篇は其の一なり　㈡ 龍飛んで天に登りし如く、玄宗帝位に即く　㈢ 龍の奇瑞、即位に先つて現れ、天命之に違はず　㈣ 銀河の水・黃道(日のめぐる路)より分れ落ち、遂に龍池となりしならん　㈤ 龍登りて天帝の紫微宮に入りし如く、玄宗は、池邊の邸第より出でて帝位に即く　㈥ 池邊の樓臺、離宮となりて、壯觀を添へ、池中の鳧雁も光榮多し　㈦ 天下の諸川は皆、龍池に來り注ぎ、東に流れ去るなかれ。(天下の民心、玄宗に歸服するを祈る意) 尚書大傳に「大水小水、東流して海に歸す」

宴に安樂公主の新宅に侍す應制(一)

皇家の貴主神仙を好む。別業初めて開く雲漢の邊。(二)山出でて盡く鳴鳳の嶺の如く。池成つて讓らず飮龍の川。(三)粧樓翠幌春をして住まらしめ。(四)舞閣金鋪日

盧家少婦鬱金堂。海燕雙棲玳瑁梁。九月寒砧催二木葉一。十月征戍憶二遼陽一。白狼河北音書斷。丹鳳城南秋夜長。誰爲含レ愁獨不見。更教三明月照二流黃一。

巻之五

七言律詩

(一)古意

沈佺期

(二)盧家の少婦(三)鬱金堂。(四)海燕雙棲す玳瑁の梁。(五)九月寒砧木葉を催し。十月征戍遼陽を憶ふ。(六)白狼河北音書斷え。(七)丹鳳城南秋夜長し。(八)誰か爲に愁を含む獨不見。(九)更に明月をして流黃を照さしむ。

(一) 古樂府の意に倣ひ、空閨を守る少婦の情を述ぶ (二) 梁の武帝の河水之中歌に「洛陽の女兒名は莫愁、年十三能く綺を織り、十四桑を採る陌南の路、十五嫁して盧家の婦となる」と 愁を知らざりし少婦の意 (三) 鬱金香を塗りこめたる堂 (四) 雌雄の海燕、瑇瑁を飾りし梁に棲む (五) 秋寒く、砧(きぬた)鳴り、木葉散り初む (六) 良人は白狼河北の邊塞にありて音信斷ゆ (七) 丹鳳城南(長安)に空閨を守り、秋夜長し (八) 樂曲の名 (獨居、夫に見えざる義) (九) 良人歸らず、たゞ月にのみ流黃錦(臥床の敷物)を照さしむるを悲しむ

(一)龍池篇

漂泊來二千里一。
謳歌滿二百城一。
漢家尊二太守一。
魯國重二諸生一。
俗變二人難レ理一。
江傳二水至清一。
船經二危石一住。
路入二亂山一行。
老得二滄洲趣一。
春傷二白首情一。
嘗聞馬南郡。
門下有二康成一。

鄭說が欽州に之き薛侍郎に謁するを送る

(一)漂泊して千里に來り。(二)謳歌百城に滿つ。漢家太守を尊び。(三)魯國諸生を重んず。俗は人の理め難きを變じ。江は水の至清を傳ふ。船は危石を經て住り。路は亂山に入つて行く。老いて(四)滄洲の(五)趣を得。春は白首の情を傷む。(六)嘗て聞く馬南郡。門下に康成ありと。

(一)鄭說漂泊し、千里の路を欽州に行く (二)太守薛侍郎と謳歌する聲、多くの城に滿つ (三)古の魯の如く、薛侍郎は學者を重んず (四)文選序に「新安（欽州の地）の江水至つて清し」と、薛侍郎の政に似たり (五)君欽州に行かば、仙鄉滄洲の趣あらん、余は君に別れ、白髮老年の悄悲し (六)後漢南郡の太守馬融の門下に、鄭玄字は康成の如き學者ありき、君また薛侍郎の門に寄り、名聲共に揚るならん

香撲使臣衣。
入レ徑迷二馳道一。
分レ行接二禁闈一。
何當下扈二仙蹕一。
攀折奉中恩輝上。

不三敢淮南臥一。
來趨二漢將營一。
受レ辭瞻二左鉞一。
扶レ疾拜二前旌一。
井稅鶉衣樂。
壺漿鶴髮迎。
水歸餘二斷岸一。
烽至掩二孤城一。
晚日當二千騎一。
秋風合二五兵一。
孔璋才素健。
早晚檄書成。

心天子に歸服す (六) 春露の頃、枝若やぎ出で、秋霜の頃、果實肥え熟す (七) 樹影行人の笠にうつり、果實の香、使者の衣を撲つ (八) 路に沿ひて、馳道まで生ひ茂り、列をなして、禁門までつゞく (九) 他日行幸に扈從し、果樹の枝を折り、深き恩輝を謝し奉るべし

行營呂侍御に酬ゆ　劉長卿

(一)敢て淮南に臥せず。來つて漢將の營に趨る。辭を受けて左鉞を瞻、疾を扶けて(二)前旌を拜す。(三)井稅鶉衣樂しみ。(四)壺漿鶴髮迎ふ。(五)水歸つて斷岸を餘し。烽至つて孤城を掩ふ。晚日千騎に當り。(六)秋風五兵を合す。(七)孔璋才素健なり。早晚檄書成らん。

(一) 任地を出でて、將軍の營に赴く。史記に「汲黯東海の太守となり、多病にして閨閤の中に臥し、出でざる歳餘、東海大に治る、後、淮陽の太守となる、上曰く顧ふに淮陽の吏民相得ず、吾たゞ君の重臥して之を治むるを得しめん」 (二) 命を受け、病を押して軍營に入る。左鉞(將營の左方に植つる斧)、前旌(前軍のはた) (三) 周代井田の法の如く、租稅輕く、鶉衣(つゞれ衣)の賤民悅ぶ (四) 壺漿(壺に入れたる飲物)を捧げ、白髮の老者も將軍を迎ふ (五) 洪水退きて、跡を斷崖にとゞめ、賊軍烽火をあげ、城中俄かに騷ぐ (六) 五種の兵器(矛・戟・弓・劍・戈)を列ねて陣を張る (七) 呂侍御は文才雄健なれば、魏の陳琳(字は孔璋)の如く、やがてよき檄文成らん

惟德自成レ隣。
池照窗陰晩。
杯香藥味春。
欄前花覆レ地。
竹外鳥窺レ人。
何必桃源裏。
深居作二隱淪一。

聖德周二天壤一。
韶華滿二帝畿一。
九重承二渙汗一。
千里樹二芳菲一。
陝塞餘陰薄。
關河舊色微。
發生和氣動。
封植衆心歸。
春露條應レ弱。
秋霜果定肥。
影移行子蓋。

㈠田野の別業に天子の近臣あり　㈡知人を會し宴を開き、平素の親交に負かず　㈢古俗四季に薪火を改め、春は清明（寒食の翌日）に至り、楡柳の火を用ふ　㈣論語に「君子文を以て友を會す」又「德は孤ならず、必ず鄰あり」　㈤窗下の池、夕日に照り、杯酒藥草を交へて香し　㈥必ずしも武陵桃源の仙郷に隱るゝに及ばず、この別業にあれば、塵世を忘るゝことを得

使を奉じて兩京路の果樹を種うるを巡檢し（一）事畢つて秦に入る因つて詠歌す

鄭審

聖德天壤に周く。（二）韶華帝畿に滿つ。（三）九重渙汗を承け。千里芳菲を樹う。陝塞（四）餘陰薄く。關河舊色微なり。發生和氣動き。（五）封植衆心歸す。（六）春露條應に弱かるべし。秋霜果定めて肥えん。（七）影は移る行子の蓋。香は撲つ使臣の衣。（八）徑に入つて馳道に迷ひ。行を分つて禁闈に接す。（九）何か當に仙蹕に扈して。攀折恩輝を奉ずべき。

㈠洛陽長安兩都の路　㈡春光畿甸の地に滿つ　㈢詔を奉じ、千里の路に果樹を植う。渙汗（流るゝ汗、天子の詔、一たび出づれば、反らざる汗の如し）　㈣餘陰（春に殘る冬の陰氣）舊色（舊臘の寒色）　㈤果樹を栽培し、衆

奮託含香署。雲霄何足難。

亭高出鳥外。客到與雲齊。樹點千家小。天圍萬嶺低。殘虹挂陝北。急雨過關西。酒榼緣青壁。瓜田傍綠溪。微官何足道。愛客且相攜。唯有鄉園處。依依望不迷。

田家復近臣。行樂不違親。霽日園林好。清明烟火新。以文常會友。

早秋諸子と虢州の西亭に登りて觀眺す　岑參

(一)亭高うして鳥外に出で。客到つて雲と齊し。樹點じて千家小く。天圍んで萬嶺低し。(二)殘虹陝北に挂り。急雨關西を過ぐ。(三)酒榼青壁に緣り。瓜田綠溪に傍ふ。(四)微官何ぞ道ふに足らん。愛客且く相攜ふ。(五)唯鄉園の處あり。依依として望迷はず。

(一)西亭、飛鳥の上に聳え、雲と高さを等しくす　(二)虹、陝州の北にかゝり、急雨函谷關の西を過ぐ　(三)酒榼(すひづつ)を携へ、斷崖を攀ぢ上れば、溪邊に瓜の熟せる畑あり　(四)官位の卑きは嘆くに足らず　(五)眺望の中に故鄉の地あり、心深く之を見詰む

清明司勳劉郎中の別業に宴す　祖詠

(一)田家復た近臣。(二)行樂親に違はず。霽日園林好く。(三)清明烟火新なり。(四)文を以て常に友を會し。惟れ德自ら隣を成す。(五)池は照す窗陰の晚。杯は香し藥味の春。欄前花地を覆ひ。竹外鳥人を窺ふ。(六)何ぞ必ずしも桃源の裏。深居隱淪を作さん。

翠柏深留レ景。
紅梨迥得レ霜。
風筝吹二玉柱一。
露井凍二銀床一。
身退卑二周室一。
經傳拱二漢皇一。
谷神如不レ死。
養レ拙更何鄕。

を註し、學者をして之を習はしむ 一二 畫家に先輩多き中に、呉道子は古今獨歩なり 一三 萬物を集めて筆端に移し、妙技、宮壁に生動す 一四 畫中の五帝袞龍の御衣をつらね、千官北の下に並ぶ 一五 帝冠きら〳〵しく、旗影、風に飛揚する如し 一六 翠柏日光を籠め、紅梨高く霜に染む 一七 廟檐の風鈴、氷柱に鳴り響く 一八 露井(無屋の井)に銀床(銀を鏤めたる轆轤)凍る 一九 老子、周に仕へ、官卑しきも、道德經は後に傳はり、漢の文帝を禮拜せしむ。(文帝、敎を河上公に受く) 二〇 神靈永劫に滅せずとせば、今は何處に留り給ふならんか、拙を養ふはその敎旨なりとするも、この壯麗なる廟を捨て給ふことあらじ

雪華滿二高閣一。
苔色上二勾欄一。
藥艸空階靜。
梧桐返照寒。
淸吟可レ愈レ疾。
攜レ手暫同歡。
墜葉和二金磬一。
饑烏鳴二露盤一。
伊流惜二東別一。
灞水向レ西看。

聖善閣に裴迪が京に入るを送る　李頎

(一)雪華高閣に滿ち。苔色勾欄に上る。藥艸空階靜かに。梧桐返照寒し。(二)淸吟疾を愈すべく。手を攜へて暫く同歡す。(三)墜葉金磬に和し。饑烏露盤に鳴く。(四)伊流東別を惜しみ。灞水西に向つて看る。(五)舊含香の署に託す。雲霄何ぞ難んずるに足らん。

一 雪、聖善閣に滿ち、苔の色、曲欄にうつる 二 巧妙の詩を誦すれば、疾を忘るべし 三 落葉の響、金磬に和し、饑烏、露盤(塔の九輪の頂にあり)鳴く 四 東、伊水の岸(洛陽)にて別れを惜しみ、西、灞水の方(長安)へ行くを送る 五 曾て尚書郎たりし人なれば、再び高官に就くも難事にあらざるべし

配レ極玄都閟。
憑レ高禁籞長。
守祧嚴二具禮一。
掌節鎭二非常一。
碧瓦初寒外。
金莖一氣旁。
山河扶二繡戸一。
日月近二雕梁一。
仙李盤根大。
猗蘭奕葉光。
世家遺二舊史一。
道德付二今王一。
畫手看二先輩一。
呉生遠擅場。
森羅移二地軸一。
妙絶動二宮牆一。
五聖聯二龍袞一。
千官列二鴈行一。
冕旒倶秀發。
旌旆盡飛揚。

(四)極に配して玄都閟ぢ。(五)高きに憑つて禁籞長し。(六)守祧具禮を嚴にし。(七)掌節非常を鎭す。(八)碧瓦初寒の外。金莖一氣の旁。(九)山河繡戸を扶け。日月雕梁に近し。(一〇)仙李盤根大に。猗蘭奕葉光る。(一一)世家舊史に遺し。道德今王に付す。畫手先輩を看る。呉生遠く擅場。(一二)森羅地軸を移し。妙絶宮牆に動く。(一四)五聖龍袞を聯ね。千官鴈行を列す。(一五)冕旒倶に秀發。旌旆盡く飛揚す。(一六)翠柏深く景を留め。紅梨過かに霜を得。(一七)風筝玉柱を吹き。(一八)露井銀床凍る。(一九)身退いて周室に卑しく。經傳へて漢皇を拱せしむ。(二〇)谷神如し死せずんば。拙を養ふ更に何の郷ぞ。

(一)通鑑書に「高宗乾封元年、車駕亳州に幸し、老君(老子)の廟に詣り追尊して玄元皇帝となす」 (二)朱景元の名畫錄に「呉道玄、字は道之、人物佛像草木山水等を畫くに皆世に冠絶す、國朝第一、明皇、その名を知り、召し入れて供奉せしむ」 (三)高祖・太宗・高宗・中宗・睿宗の五帝 (四)老子を北極星に配し神廟深く閉す (五)山に迫り、竹柏長し (六)守祧(祖廟を守る官)祭祀を嚴にす (七)掌節(神符を司る官)神寶を傳へ、國家の非常を警む (八)廟の碧瓦、初寒の中に聳え、承露盤の金莖、廟と高さを等しくす (九)山河、錦繡の戸をめぐる (一〇)李の根の大なる如く、李姓老子の裔榮え、唐室に世々光輝多し。(猗蘭は漢の武帝の生れし宮殿、借りて用ふ) (一一)舊史、史記に、世家に老子を載せざるも道德經の教旨は天子によりて廣まれり 封演聞見記に「開元二十一年玄宗親ら道德經

白波吹粉壁。
石嶂插雕梁。
直訝杉松冷。
兼疑菱荇香。
雪雲虛點綴。
沙艸得微茫。
嶺雁隨毫末。
川霓飲練光。
霏紅洲蕊亂。
拂黛石蘿長。
暗谷非關雨。
丹楓不爲霜。
秋城玄圃外。
景物洞庭傍。
繪事功殊絕。幽襟興激昂。從來謝太傅。丘壑道難忘。

に訝る杉松の冷なるを。(四)兼ねて疑ふ菱荇香しきかと。(五)雪雲虛しく點綴し。沙艸微茫を得たり。(六)嶺雁毫末に隨ひ。川霓練光に飲む。(七)紅を霏して洲蕊亂れ。黛を拂うて石蘿長し。(八)暗谷雨に關るにあらず。丹楓霜の爲ならず。(九)秋城玄圃の外。景物洞庭の傍。(一〇)繪事功殊絕。幽襟興激昂す。(一一)從來謝太傅。丘壑道忘れ難し。

(一)蜀の山と水と、廟宇の壁に畫く　(二)沱水中座に近く、岷山堂北につゞく　(三)白壁に波噴き、彫りたる梁に山聳ゆ　(四)菱(ひし)荇(一名接余、水草)の類、香氣を吹く如く　(五)雪げの雲散點し、沙草かすかにつゞく　(六)山に雁列小さく、虹霓川に飲む如し。毫末(筆の先)練光(絹のつや)　(七)洲に咲く花、紅く散り、石にまとふ蘿(つた)青黛色を引く　(八)谷は雨のために暗きにあらず、楓も霜のために赤きにあらず、皆、筆の技巧なり　(九)秋の城、玄圃(崑崙山中の仙郷)かと思はれ、風景、洞庭湖附近の如し　(一〇)繪畫巧にして眞の山水の如く、幽情強く動く　(一一)晉の謝安は、青山幽谷の樂を忘れず、殷鄭公も亦然り

冬日洛城の北に(二)玄元皇帝の廟に謁す

(一)廟に吳道子が畫ける(三)五聖の圖あり

此身醒復醉。
乘レ興卽爲レ家。

雄都尤壯麗。
望レ幸欻威神。
地利西通レ蜀。
天文北照レ秦。
風烟含二越鳥一。
舟楫控二吳人一。
未レ枉二周王駕一。
終期二漢武巡一。
甲兵分二聖旨一。
居守付二宗臣一。
早發二雲臺仗一。
恩波起二涸鱗一。

沱水臨二中座一。
岷山赴二北堂一。

府と定む

(一)江陵に幸を望む

(二)雄都尤も壯麗。幸を望めば欻ち威神。地利西蜀に通じ。(三)天文北秦を照す。(四)風烟越鳥を含み。舟楫吳人を控く。未だ周王の駕を枉げず。(五)終に漢武の巡を期す。甲兵聖旨を分ち。(六)居守宗臣に付す。(七)早く雲臺の仗を發して。恩波涸鱗を起せ。

(一) 肅宗上元元年、荊州を江陵府となし、更に南都と名づく、廣德三年、代宗行幸の儀あり (二) 江陵の大都壯麗を極め、行幸を望みて、盛儀忽ち增す (三) 天上の鶉火星、北方秦の分野を照す (四) 越國の鳥も來り飛び、吳人の舟も往來す (五) 天子、終には巡遊あらんを期す (六) 甲兵、天子の命を受け、重臣この地を守る。(衛伯玉、江陵の尹に拜し、御史大夫を兼ぬ) (七) 早く儀仗を整へて行幸し、水を離れし魚の如く、饑渇に苦しむ者を救ひ給へ。雲臺(武具を納むる庫)

嚴鄭公廳事が岷山沱江の圖を觀奉る(一)

(二)沱水中座に臨み。岷山北堂に赴く。(三)白波粉壁に吹き。青嶂雕梁に插む。直

此生何太勞。窮愁但有骨。羣盜尙如毛。吾舅惜分手。使君寒贈袍。沙頭暮黃鶴。失侶亦哀號。

苔徑臨江竹。茅簷覆地花。別來頻甲子。歸到忽春華。倚杖看孤石。傾壺就淺沙。遠鷗浮水靜。輕燕受風斜。世路雖多梗。吾生亦有涯。

號す。

㊀ 別杯を嘉陵江の舟中に擧ぐ ㊁ 會合の樂しみは久しからずして盡き、人生は苦しみのみ多し ㊂ 困窮の愁のために、余は痩せて骨のみになり、天下には盜賊毛の如く多し。(當時、吐蕃の叛亂をなし、杜甫、避けて閬州に寄寓す) ㊃ 吾が族十一舅は別れを惜しみ、王太守は餞別の袍(うはぎ)を贈らる ㊄ 日暮に、江沙の上に黃鶴あり、友を失ひて悲鳴し、余が哀愁極りなきに似たり

春歸(一)

(二)苔徑江に臨む竹。茅簷地を覆ふ花。(三)別來頻に甲子。歸り到れば忽ち春華。杖に倚つて孤石を看。(四)壺を傾けて淺沙に就く。遠鷗水に浮んで靜かに。輕燕風を受けて斜なり。(五)世路梗ると多しと雖も。吾生も亦涯あり。(六)此の身醒めて復た醉ひ。興に乘じて卽ち家と爲す。

㊀ 春、蜀の浣花草堂に歸る ㊁ 苔のこみち、江上の竹間に通じ、茅簷(茅ぶきの軒)の花、地に散り敷く ㊂ 草堂に別れし後、甲子(歲月)頻りに過ぎ、歸り來りて、また春に逢ふ ㊃ 酒を傾け、水邊の沙地に遊ぶ ㊄ 世亂れて通路塞がり、吾が生涯にも限あり、故鄉(襄陽)に歸り得る望なし ㊅ 醒めて又醉ひ、浣花草堂を暫くの住

草昧英雄起。
謳歌暦數歸。
風塵三尺劍。
社稷一戎衣。
翼亮貞二文德一。
丕承戢二武威一。
聖圖天廣大。
宗祀日光輝。
陵寢盤二空曲一。
熊羆守二翠微一。
再窺二松柏路一。
還見二五雲飛一。

萬壑樹聲滿。
千崖秋氣高。
浮舟出二郡郭一。
別酒寄二江濤一。
良會不二復久一。

(一)草昧英雄起り。(二)謳歌暦數歸す。(三)風塵三尺の劍。社稷一戎衣。(四)翼亮文德を貞し。丕承武威を戢む。(五)聖圖天廣大。宗祀日に光輝。(六)陵寢空曲に盤り。熊羆翠微を守る。(七)再び松柏の路を窺へば、還た五雲の飛ぶを見る。

(一)亂世に英雄太宗起る (二)萬民その德を謳歌し、天子の運命之に歸したり (三)劍を提げて騷亂を平げ、軍衣を著けて唐の社稷(國家)を開く (四)太祖を翼亮(輔佐)して德を盛にし、帝位を丕承(繼承)して戰を止む (五)聖主のはかりごとは天の如く廣大なり (六)陵寢(みさゝぎ)は山の空地に盤り、熊羆の如き猛士之を守護せり。翠微(山の青色) (七)再び松柏の道を過ぎ、廟を拜すれば、天下平に五色の瑞雲飛べり。(時に安祿山の亂平ぎ、唐朝舊に復す)

王閬州の筵に十一舅別を惜むの作に酬い奉る

萬壑樹聲滿ち。千崖秋氣高し。浮舟郡郭を出で。(一)別酒江濤に寄す。(二)良會復た久しからず。此の生何ぞ太だ勞せる。(三)窮愁但骨あり。羣盜尙ほ毛の如し。(四)吾が舅手を分つことを惜しみ。使君寒うして袍を贈る。(五)沙頭の暮黃鶴。侶を失うて亦哀

日月繼二高衢一。
文物多レ師レ古。
朝廷半老儒。
直詞寧戮辱。
賢路不二崎嶇一。
往者災猶降。
蒼生喘未レ蘇。
指揮安二率土一。
盪滌撫二洪爐一。
壯士悲二陵邑一。
幽人拜二鼎湖一。
玉衣晨自擧。
鐵馬汗常趨。
松柏瞻二虛殿一。
塵沙立二暝途一。
寂寥開國日。
流恨滿二山隅一。

(一二)壯士陵邑を悲み。幽人鼎湖を拜す。(一三)玉衣晨に自ら擧り。(一四)鐵馬汗して常に趨る。(一五)松柏虛殿を瞻。塵沙暝途に立つ。(一六)寂寥たり開國の日。流恨山隅に滿つ。

(一) 唐の太宗の陵 (二) 六朝の世、凡庸の天子相繼いで立ち、人民疲弊す (三) 羣雄起り、隋の煬帝の罪を問ふ。(獨夫は匹夫に同じ、卑しめていふ) (四) 書生の讖言あたり、虎狼の如き秦の舊都(長安)を平定す 唐書に「太宗四歳の時、書生あり之を見て曰く、龍鳳の資、天日の表、其の幾んど冠する、必ず能く世を濟ひ民を安んぜんと」 (五) 太宗太祖父子の讓位は、堯帝の禪讓よりも尊し (六) 神明の如き功業は、禹王の謨(はかりごと)に劣らず (七) 駿馬の如き豪傑、時を得て太宗に從ひ、日月天路に輝く如く、天下に君臨せり (八) 多く古制に由りて禮樂を定め、朝臣は半ば虞世南の如き老儒なりき (九) よく諫を納れ、魏徵の如き直言の人も咎を蒙ることなく、賢臣の進路安らかなりき (一〇) 先に安祿山の亂起り、人民は今猶ほ疲弊せり (一一) 太宗の如き英雄あらば一指揮の下に大亂を平げ、天下を安んずべし。洪鑪(天地)盪滌(洗ひ淨む) (一二) 壯士幽人、皆昭陵を過ぎて悲しみ拜す。(鼎湖は、黃帝龍に乘り、天に昇りし地、天子の陵をいふ) (一三) 漢の末、王莽帝位を奪ひし時、哀帝の御衣、匣中より出でて殿上に立てり、太宗の靈も、亦此の如き怪異を現すならん (一四) 六朝の時、蕭猷益州の刺史となり、叛亂に遇ひて楚王廟に祈るに、一鐵騎あり、東より來り、俄かにして又數百騎あり、風の如くに飛び去る、乃ち廟中を見れば土偶皆濕ひ、汗ばめるものの如かしりきといふ、昭陵の鐵馬も、亦太宗の靈を乘せ常に戰場に走るならん (一五) 松柏の中に靈廟の靈殿を見、塵沙の間に小暗き路に立つ (一六) 唐朝開國の日を思へば、氣運衰へ、恨極りなし

重ねて昭陵を經

白露先レ時降。
清川思不レ窮。
江湖仍塞上。
舟楫在二軍中一。
舞換臨レ津樹。
歌饒向レ晩風。
夕陽連二積水一。
邊色滿二秋空一。
乘レ興宜レ投レ轄。
邀レ歡莫レ避レ驄。
誰憐持二弱羽一。
猶欲レ伴二鵷鴻一。

(二)白露時に先つて降り。清川思窮らず。(三)江湖仍ほ塞上。舟楫軍中に在り。(四)舞は換ふ津に臨める樹。歌は饒し晩に向へる風。夕陽積水に連り。邊色秋空に滿つ。(五)興に乘じて宜しく轄を投ずべし。歡を邀へて驄を避くることなかれ。(六)誰か憐む弱羽を持して。猶ほ鵷鴻に伴はんと欲するを。

(一)涼州(西域の塞地)にあり、高く池亭を架し、威を藩落(えびす)に示す　(二)白露早く下り、水上の興深し　(三)江湖舟遊の興を塞上に催し悲喜相交る　(四)妓女、舟と共に舞ひ廻り、岸樹の影移り動く如く、晩風の中に歌聲盛に起る　(五)陳遵、轄を井に投ぜし如く、永く宴を張り、御史(驄馬の相與に比す)の威を憚れず、十分に歡を盡すべし　(六)小禽、弱羽を持し、大鳥鵷鴻に伴ふ如く、微賤の余は廷臣賓侍御に從ひ、光榮の深きを喜ぶ

行昭陵に次す(一)　　杜甫

舊俗疲二庸主一。
羣雄問二獨夫一。
讖歸龍鳳質。
威定虎狼都。
天屬尊二堯典一。
神功協二禹謨一。
風雲隨二絕足一。

(二)舊俗庸主に疲れ。(三)羣雄獨夫を問ふ。(四)讖は歸す龍鳳の質。威は定む虎狼の都。(五)天屬堯典より尊く。(六)神功禹謨に協ふ。(七)風雲絕足に隨ひ。日月高衢に繼ぐ。(八)文物多く古を師とし。朝廷半ば老儒。(九)直詞寧ぞ戮辱せられんや。賢路嶮嶇たらず。(一〇)往者災猶ほ降り。蒼生喘未だ蘇せず。(一一)指揮率土を安んじ。盪滌洪鑪を撫す。

川暝欲二安之一。
嶺外資二雄鎭一。
朝端寵二節旄一。
月卿臨二幕府一。
星使出二詞曹一。
海對二羊城一闊。
山連二象郡一高。
風霜驅二瘴癘一。
忠信涉二波濤一。
別恨隨二流水一。
交情脫二寶刀一。
有レ才無レ不レ適。
行矣莫二徒勞一。

欲しく歌ふ　(八)渚宮（楚の襄王の離宮）の古跡は何處ならんか、日暮れ、川暝く、前途も明かならず

柴司戸が劉卿の判官に充てられ嶺外に之くを送る　高適

(一)嶺外雄鎭に資り。朝端節旄を寵す。(二)月卿幕府に臨み。星使詞曹より出づ。(三)海は羊城に對して闊く。山は象郡に連つて高し。(四)風霜瘴癘を驅り。忠信波濤を涉る。(五)別恨流水に隨ひ。交情寶刀を脫す。(六)才あれば適はざるなし。行け徒に勞するなからん。

(一)嶺外廣州の政は、優かなる鎭臺の力を要し、朝廷は命を劉卿に下せり。節旄（犛牛尾を竹に著く、柄の長さ八尺、使者の信）(二)月卿（高位の文官）の劉氏は、幕府將軍の居に臨み、星使柴司戸は翰林より出でゝ判官となる(三)海闊くして、五羊城に對し、山高くして、象郡（柳州の古名）に連る(四)風霜の如き威は惡氣を驅り、忠信の心は波濤を冒して行く(五)別離の恨は流水と盡きず、交情深く、寶刀を脫して贈る(六)才あれば何事にも適せざる所なく、遊行するも徒勞にはあらざるべし、必ず偉功を樹つるならん

竇侍御に陪して靈雲池に泛ぶ(一)

滄浪吾有ㇾ曲。
寄入二棹歌聲一。

放溜下二松滋一。
登ㇾ舟命二楫師一。
寧忘二經濟日一。
不ㇾ憚二沍寒時一。
洗ㇾ幘豈獨古。
濯ㇾ纓良在ㇾ茲。
政成人自理。
機息鳥無ㇾ疑。
雲物凝二孤嶼一。
江山辨二四維一。
晩來風稍緊。
冬至日行遲。
獵響驚二雲夢一。
漁歌激二楚辭一。
渚宮何處是。

滄浪曲(楚辭に、漁父歌ひて曰く、滄浪の水、清まば以て我が纓を洗ふべし、滄浪の水濁らば以て我が足を濯ふべし)の如く、余にその地を詠みし詩あり、歌ひて棹歌(ふなうた)に入れ、君が行を送らんと欲す

張丞相に陪し松滋江より東して渚宮に泊す　孟浩然

(一)放溜松滋に下る。舟に登つて楫師に命ず。(二)寧ぞ經濟の日を忘れんや。沍寒の時を憚らず。(三)幘を洗ふは豈獨り古のみならん。(四)纓を濯ふは良に玆に在り。(五)政成つて人自ら理り。機息んで鳥疑ふなし。(六)雲物孤嶼に凝り。江山四維を辨ず。晩來風稍緊しく。冬至日行くこと遲し。(七)獵響雲夢を驚かし。漁歌楚辭を激す。(八)渚宮何の處か是なる。川暝うして安にか之かんと欲する。

(一) 放溜(江上水を溜へ、閘を開けば一時に奔注するもの)松滋江に下り、楫師に命じ、舟を出す (二) 張丞相、天下經濟の重職にありしを忘れず、貶せられるゝも、松柏の綠、沍寒の時を憚らざる如し (三) 高士傳に「楚の狂士陸通、松間に高臥し、以て靈氣を受く、幘(巾冠)を松頂に挂く、鶴あり銜んで水濱に去る、通之を洗ひ、因つて鶴と同じく去る」と、此の如き狂士は、古のみならず、今なほ余の如きものあり (四) 滄浪の水はこの地に近く、隱棲の曲情を養ふべし (五) 張丞相の政成りて、衆民よく治まり、余の機心息みて、無心の鳥も馴れ親しむ (六) 孤島に雲烟寒く、江山の影に依りて天地四隅の方位を辨ず (七) 射獵の響、雲夢澤に騒ぎ、漁夫は、楚辭滄浪の曲を

主人孤島中。
別離方異域。
音信若爲通。

黄鶴西樓月。
長江萬里情。
春風三十度。
空憶武昌城。
送㆑爾難㆑爲㆑別。
銜㆑杯惜未㆑傾。
湖連㆓張㆑樂地㆒。
山逐㆓泛㆑舟行㆒。
諸謂㆓楚人重㆒。
詩傳㆓謝朓淸㆒。

驅し、竟に安南に漂泊す、幾もなく亦唐に入る、肅宗左散騎常侍安南都護に擢て、更に新羅の使に附し、書を寄す、官北海郡開國公に至り、大暦五年唐に卒す、年七十、潞州大都督を贈らる」 ㈡ 海洋極りなく、東に日本あるを知り難し ㈢ 天地九州の中、最も遠きは何處ならんか、萬里の航路は空を履んで行くが如し ㈣ たゞ日輪を目標とし、歸帆風に任せて進むのみ ㈤ 鰲(大鼈)海に浮びて黒き背を空に映し、大魚の眼、赤く波を照らす ㈥ 十洲記に「扶桑、碧海中にあり、樹の長さ數千丈、一千餘圍」と、日本はその附近ならん、君は歸りて孤島の中に住むなり ㈦ 別後、異域の人となり、如何にして音信を通ずべきか

儲邕武昌に之くを送る　李白

㈠黄鶴西樓の月。長江萬里の情。㈡春風三十度。空しく憶ふ武昌城。爾を送つて別を爲し難し。杯を銜みて惜しんで未だ傾けず。㈢湖は樂を張る地に連り。山は舟を泛ぶる行を逐ふ。㈣諸は楚人の重を謂ひ。詩は謝朓が淸を傳ふ。㈤滄浪吾曲あり。寄せて櫂歌の聲に入る。

㈠ 武昌城の西南に黄鶴樓あり、西樓に登りて月を見、萬里の長江を望まば、その情如何に壯快ならんか ㈡ 余は三十年來、武昌の勝を憶ひ、今に遊覽することを得ず ㈢ 洞庭湖は黄帝咸池の樂を張りし野に連り、岸上に山多く、舟行の客を逐ふ如し ㈣ 武昌の地には俠客季布(前に註す)詩人謝朓(前に註す)の如き人物ありき ㈤ 滄

驛路飛泉灑。
關門落照深。
野花開二古戍一。
行客響二空林一。
板屋春多レ雨。
山城晝欲レ陰。
丹泉通二虢略一。
白羽抵二荊岑一。
若見二西山爽一。
應レ知二黃綺心一。

積水不レ可レ極。
安知滄海東。
九州何處遠。
萬里若レ乘レ空。
向レ國惟看レ日。
歸帆但信レ風。
鰲身映レ天黑。
魚眼射レ波紅。
鄉國扶桑外。

に開き。行客空林に響く。板屋春雨多く。山城晝陰らんと欲す。(一)丹泉虢略に通じ。白羽荊岑に抵る。(二)若し西山の爽を見ば。應に黃綺の心を知るべし。(三)

(一) 商洛山、楚鄧の地に連る (二) 丹水、虢州の界に通じ、白羽山、荊楚の山と對す (三) 西、商洛山の爽氣を觀ば、古賢人の如く隱棲の心を生ずべし、(漢の初、夏黃公、綺里季、東園公、甪里先生、この山に隱る、商山の四皓といふ)

祕書晁監が日本に還るを送る (一)

積水極むべからず。(二)安ぞ知らん滄海の東。九州何の處か遠き。(三)萬里空に乘ずるが若し。國に向つて惟日を看。(四)歸帆但風に信す。鰲身天に映じて黑く。(五)魚眼波を射て紅なり。(六)鄉國扶桑の外。主人孤島の中。(七)別離して方に異域。音信若爲か通ぜん。

(一) 大日本史、安倍仲麿本傳に「元正帝の靈龜二年遣唐使多治比の縣守に從つて唐に入る、年十六、留學して名を朝衡と改め、詩を以て鳴る、李白、魏萬、王維と善し、玄、肅、代三朝に仕へ、祕書監に拜し、檢校に遷り、左補闕を歷、天寶十二年、聘使淸河に從つて歸る、客となる凡三十八年、仲麿海に浮んで月を見、卽ち三笠山の歌を作る、風

玉乘迎二大客一。
金節送二諸侯一。
祖席傾二三省一。
褰帷向二九州一。
楊花飛二上路一。
槐色蔭二通溝一。
來預二鈞天樂一。
歸分二漢主憂一。
宸章類二河漢一。
垂レ象滿二中州一。
商山包二楚鄧一。
積翠藹沈沈。

三省を傾け。(六)褰帷九州に向ふ。(七)楊花上路に飛び。槐色通溝に蔭す。(八)來つて鈞天の樂に預り。(九)歸つて漢主の憂を分つ。(一〇)宸章河漢に類し。象を垂れて中州に滿つ。

(一) 地方を治むる都督刺史等の入朝せるもの (二) 四海萬國唐の帝室を尊む。(周に比す) (三) 衣冠せる朝集使、冕旒(冠)を著けたる天子を拜す (四) 天子の玉車、諸侯を郊外に迎へ、又金節(わりふ)を授け、その歸るを送る (五) 送別の席に三省(尙書、中書、門下)の諸官皆集る (六) 朝集使、九州(天下)各地に向ふ。後漢書に「賈琮字は孟堅、冀州の刺史となる、琮の部に之くに及び、車に升つて言つて曰く、刺史は當に遠視廣聽し、美惡を糾察すべし、何ぞ反つて帷裳を垂れ、自ら掩塞するあらんやと、御者に命じ之を褰げしむ」 (七) 楊花(やなぎの花)禁街に飛び、槐(えんじゆ)の蔭、御溝を蔽ふ (八) 晉の趙簡子、夢に上帝の居に遊び、鈞天廣樂を聞きし如く、朝集使、皆禁庭に出づ (九) 各々任に歸り、天子の憂を以て己の憂とし、善政を布かんとす (一〇) 御製の詩は銀河の如く、天下到る處に傳り、諸侯萬民仰ぎ見ざるものなし

李太守上洛に赴くを送る

(一)商山楚鄧を包ね。積翠靄として沈沈。驛路飛泉灑ぎ。關門落照深し。野花古戍

為レ奏ニ薰琴一倡。
仍題ニ瑤劍一名。
聞レ風六郡勇。
計レ日五戎平。
山甫歸應レ疾。
留侯功復成。
歌鐘旋可レ望。
枕席豈難レ行。
四牡何時入。
吾君聽ニ履聲一。

萬國仰ニ宗周一。
衣冠拜ニ冕旒一。

(一)天子の重臣、戰に從事す (二)朝廷の謀は、胡を平げ、兵を休むるに在り (三)天は三公の位を授け、蕭國公一人の力は、萬里の長城に匹敵す (四)朔南に戰止み、征旗河右に向ふ (五)恩賜朝廷より下り、華やかに都を出づ (六)原野濕地の邊境に帝意を宣達せんとす (七)天子に送別の御製あり、舜帝、五絃の琴を彈じ、南薰の詩を歌へる如く、又、寶劍を賜り、寵遇甚だ厚し。後漢書に「祭彤尚書令となり、鄧禹陳寵と同時に才能を以て稱せらる、肅宗賜ふに寶劍を以てせしは唯此三人のみ、特に寶劍を以て自ら其名を手署す」 (八)威風を聞き、北方六郡(金城、隴西、天水、安定、北地、上郡)の人勇み、五種の胡族(匈奴、[illegible]、[illegible]、單于、白屋)も日ならずして平がん (九)周の仲山甫、宣王の命を受け、齊に城きて疾く歸りし如く、又、留侯(張良)漢の高祖を輔け、天下に王たらしめし如く、蕭國公も大功を成すべし (一〇)晉の悼公鄭を伐ちし時、鄭、女樂と歌鐘とを納れ、悼公、半を魏絳に賜ひし如く、蕭國公も厚賞を受くべし (一一)邊境平ぎ、席上を行く如くに安からん (一二)凱旋の後、天子の信任いよいよ厚かるべし。四牡(詩の小雅の篇、天子使臣を勞ふ) (一三)漢の鄭崇、數々哀帝を諫め、帝に見ゆる毎に、革履を著けたり、帝笑つて曰く、我鄭尚書の履聲を知ると

聖製暮春朝集使郡に歸るを送るに和し奉る應制 (一)

王　維

(二)萬國宗周を仰ぎ。(三)衣冠冕旒を拜す。(四)玉乘大客を迎へ。金節諸侯を送る。(五)祖席

顧レ己慙二華省一。
欣君震二遠戎一。
明時獨匪レ報。
常欲レ退二微躬一。

宗臣事二有征一。
廟算在レ休レ兵。
天與二三台座一。
人當二萬里城一。
朔南方偃レ革。
河右暫揚レ旌。
寵賜從二仙禁一。
光華出二帝京一。
山川勤二遠略一。
原隰軫二皇情一。

り。（漢の御史、斧を持ち、出でて盜賊を捕ふ）㊂ 敵來りて戰起り、邊境に胡軍を驅り盪さんとす ㊃ 使者隨山の月を見つゝ過ぎ、征旗、風に靡きて黃河をめぐる ㊄ 忽ち兼金（倍額の價ある金）に比すべき詩を贈らる ㊅ たゞ馬に秣ひ戰に臨む功のみならず、文才も勝れたる人なり ㊆ 塞外蒲昌海に胡塵消え、名聲は御史柏臺の中に滿つ ㊇ 余が徒に高官を汚すを恥ぢ、君が武威遠境に震ふを欣ぶ ㊈ 余は聖朝に仕へて報ゆる所なく、常に官を辭し、身を退けんと欲す

聖製尙書燕國公說朔方軍に赴くを送るに和し奉る

（一）宗臣有征を事とし。（二）廟算兵を休むるに在り。（三）天は三台の座を與へ、人は萬里の城に當る。（四）朔南方に革を偃せ。河右暫く旌を揚ぐ。（五）寵賜仙禁よりし。光華帝京を出づ。（六）山川遠略を勤め。原隰皇情を軫す。（七）爲に薰琴の倡を奏し。仍ほ瑤劍の名を題す。（八）風を聞いて六郡勇み。日を計へて五戎平ぐ。（九）山甫歸ること應に疾かるべし。（一〇）留侯功復た成る。歌鐘旋望むべし。（一一）枕席豈行き難からんや。（一二）四牡何の時か入つて。（一三）吾が君履聲を聽かん。

聲華大國寶。
夙夜侍臣心。
逸興乘高閣。
雄飛在禁林。
寧思竊抃者。
情發爲知音。

石室先鳴者。
金門待制同。
操刀常願割。
持斧竟稱雄。
應敵兵初起。
緣邊虜欲空。
使車經隴月。
征旆繞河風。
忽枉兼金訊。
非徒秣馬功。
氣清蒲海曲。
聲滿柏臺中。

樓の陰につゞきて暗し　（六）他日（詩を贈られし日）に至り君が宿直せられしことを知れり　（七）君が文名は國の寶となり、晝夜の忠勤は侍臣たるものの眞心をあらはす　（八）興に乘じて、禁中に詩を作り、才識衆に勝れたり　（九）詩を見て唱和の情起るも、君が如き知音あるに因るなり。抃つ（音樂を聞き、手を打ち拍子を取ること、唱和に比す）

趙二侍御史西軍兩省の舊寮に贈るの作に酬ゆ

（一）石室先鳴の者。金門制を待つこと同じ。（二）刀を操つて常に割かんことを願ひ。斧を持して竟に雄と稱す。（三）敵に應じて兵初めて起り。邊に緣つて虜空しからんと欲す。（四）使車隴月を經。征旆河風を繞る。（五）忽ち枉ぐ兼金の訊。（六）徒に馬に秣ふの功のみにあらず。（七）氣は淸む蒲海の曲。聲は滿つ柏臺の中。（八）己を顧れば華省を塵し。欣ぶ君が遠戎に震ふことを。（九）明時獨報ゆるあらず。常に微躬を退けんと欲す。

（一）御史中、早く名を成せし君は、余と同年の進士にて、共に詔を金馬門に待ちき。漢制に「天子の祕書を蘭臺の石室に藏し、御史中丞に守らしむ」　（二）刀を執り物を割く如く、政に手腕を揮はんとし、遂に御史の雄者となれ

河津會二日月一。
天仗役二風雷一。
東顧重關盡。
西馳萬國陪。
還聞股肱郡。
元首咏二康哉一。

未央鐘漏晩。
仙宇靄沈沈。
武衞千廬合。
嚴扃萬戸深。
左掖知二天近一。
南窗見二月臨一。
樹搖金掌露。
庭接玉樓陰。
他日聞更直。
中宵屬二所欽一。

つて喩にあらず」と、蒲關はその古跡にあたる ㊁ 黄帝、道を廣成子に問ひし如く、天子華山に幸し、鳳駕をこゝに廻らす ㊂ 華山の仙掌巖に瑞雲美しくたなびく ㊃ 御舟の安らかなること、禹王江を濟る時、黄龍出でて舟を追ひし如く、又、人民仙氣に感ずること、老子函谷關を過ぎ、令尹喜、東來の紫氣を認むる如し ㊄ 河津に日月を畫ける旗翻り、儀仗の壯なること、風雲雷霆を驅使する威あり ㊅ 東を顧れば、諸關を過ぎ盡し、西、長安に向ふ鹵簿に、外藩諸郡の使者扈從す ㊆ 蒲關の要地を度り、天子、諸事の安らかなるを詠ず、漢の文帝の詔に、「河東は我が股肱の郡」と、又尙書皐陶の賡歌に「元首明なるかな、股肱良なるかな、庶事康なるかな」

許給事直夜諸公に簡するに和す(一)

未央鐘漏の晩。(二)仙宇靄として沈沈。(三)武衞千廬合し。嚴扃萬戸深し。(四)左掖天の近きを知り。南窗月の臨むを見る。(五)樹は搖す金掌の露。庭は接す玉樓の陰。(六)他日聞く更直の。中宵所欽に屬せしを。(七)聲華大國の寶。夙夜侍臣の心。(八)逸興高閣に乘じ。雄飛禁林に在り。(九)寧思はんや竊に抃つ者。情發するは知音の爲なり。

㊀ 詩を作りて贈られしに和す ㊁ 未央殿に暮鐘鳴り、皇居小暗く靜なり ㊂ 守衞の武官、諸舍に屯し、萬戸堅く閉さる ㊃ 左掖(門下省)は帝座に近く、南窓に月を見る ㊄ 樹に搖るゝは金仙人掌上の露か、禁庭は、殿

西嶽鎭㆓皇京㆒。
中峯入㆓太淸㆒。
玉鑾重嶺應。
緹騎薄雲迎。
白日懸㆓高掌㆒。
寒空映㆓削成㆒。
軒遊會㆑神處。
漢幸望㆑仙情。
舊廟靑林古。
新碑綠字生。
羣臣願封㆑岱。
廻㆑駕勒㆓鴻名㆒。

魏武中流處。
軒皇問㆑道廻。
長堤春樹發。
高掌曙雲開。
龍負㆓王舟㆒度。
人占㆓仙氣㆒來。

(一)(二)西嶽皇京を鎭し。中峯太淸に入る。(三)玉鑾重嶺應じ。緹騎薄雲迎ふ。(四)白日高掌に懸り。(五)寒空削成に映ず。(六)軒遊神に會する處。漢幸仙を望む情。舊廟靑林古り。(七)新碑綠字生く。(八)羣臣願くは岱に封じて。駕を廻して鴻名を勒せんことを。

(一)御製に同じ　(二)西方の華嶽(太華山)皇城を鎭護し、三峯の中、中峰高く空に入る　(三)御車のすゞの音、重疊せる山に響き、薄雲、先驅の兵(丹黃色の服を著く)を迎ふ　(四)華山の上に五指あり、下より望めば掌形をなし、仙掌巖といふ　(五)四面嶮しく、斷崖絕壁削り成せる如し　(六)黃帝軒轅氏、こゝに遊びて神に會し、又、漢の武帝、望仙宮を作りて祈禱せし情を思ふ　(七)新しき華山碑の文字綠漆にて埋め、生氣多し　(八)羣臣、更に岱嶽に幸し、封禪の儀を修め、鴻名を留められんことを希ふ

聖製早く蒲關を度るに和し奉る　張九齡

(一)魏武中流の處。(二)軒皇道を問うて廻る。長堤春樹發し。(三)高掌曙雲開く。(四)龍は王舟を負うて度り。人は仙氣の來るを占ふ。(五)河津日月を會し。天仗風雷を役す。(六)東顧重關盡き。西馳萬國陪す。(七)還つて聞く股肱の郡。元首康哉を詠ずと。

(一)魏の武侯、西河に浮び、その臣吳起に向つて曰く「美なる哉山河の固、これ魏國の寶なり」と、吳起曰く、「德に在

有地接二龜沙一。
中朝任二虎牙一。
然明方改レ俗。
去病不レ爲レ家。
將禮登レ壇盛。
軍容出レ塞華。
朔風搖二漢鼓一。
邊月思二胡笳一。
旗合無レ邀レ正。
冠危有レ觸レ邪。
當レ看勞旋日。
及二此御溝花一。

(一)同じく楊將軍が原州都督御史中丞を兼ぬるを餞す　蘇頲

(二)有地龜沙に接し。中朝虎牙に任す。(三)然明方に俗を改め。去病家を爲さず。將禮壇に登つて盛に。軍容塞を出でて華かなり。(五)朔風漢鼓を搖し。邊月胡笳を思ふ。(六)旗合して正を邀ふるなく。(七)冠危うして邪に觸るゝあり。(八)當に看るべし勞旋の日。此の御溝の花に及ばん。

(一) 人人と宴を張り楊將軍官を兼ね、北地に行くを送る (二) 右地(匈奴の界、原州)は龜玆、流沙の地に接し、楊氏都督となる。(漢、田順を以て虎牙將軍となす) (三) 楊氏の功績は、漢の張奐字は然明が、武威太守となり、民を化し俗を改めし如く、又、忠勤深きは、武帝、霍去病のために邸宅を營まんとせし時、「匈奴未だ滅ぼさず、何ぞ家を用ひん」と辭せし如し (四) 壇を築き、將軍任命の禮盛に、軍行華かに塞を出づ (五) 北風に軍鼓を鳴らし、月夜胡笳を吹く功を思ふ。(劉越石の故事、前に註す) (六) 陣容整ひ、胡兵敵し難し 孫子に「正々の旗を邀ふるなかれ、堂々の陣を擊つなかれ」 (七) 御史の獬豸冠高く、邪を見れば直に奏す (八) 將軍の凱旋を勞ふ日、禁城御溝の花、正に開かん

(一)聖製途に華嶽を經るに和し奉る　張說

暗投空欲報。
下調不成章。

候曉踰閩嶂。
乘春望越臺。
宿雲鵬際落。
殘月蚌中開。
薜荔搖青氣。
桄榔翳碧苔。
桂香多露裛。
石響細泉迴。
抱葉玄猿嘯。
銜花翡翠來。
南中雖可悅。
北思日悠哉。
鬢髮俄成素。
丹心已作灰。
何當首歸路。
行剪故園萊。

禁中靜かにして鐘聲響き、更遲く、時の過ぐるを長く感ず　(七) 曉の銀河、武庫の上に垂れ、流火心星、文昌殿の角を西下す　(八) 宿直中、光榮重く、秋涼に乘じ、詩藻いよ〳〵妙なり　(九) 明珠を暗夜に投ずる如く、巧妙の詩を贈られ、和せんとするも、調拙くして格に合せず

早く始興江の口を發し虛氏村に至る作

曉を候うて閩嶂を踰え。(一)春に乘じて越臺を望む。(二)宿雲鵬際に落ち。殘月蚌中に開く。(三)薜荔青氣を搖し。桄榔碧苔を翳ふ。桂香しうして多露裛し。石響いて細泉回る。(四)葉を抱いて玄猿嘯き。花を銜んで翡翠來る。南中悅ぶべしと雖も。(五)北思日に悠なるかな。(六)鬢髮俄に素と成り。(七)丹心已に灰と作る。(八)何か當に歸路に首つて。行〻故園の萊を翦るべき。

(一) 漢の初、南越王趙陀築く　(二) 前夜よりの雲、遼遠たる地に落ち、殘月水に沈む（鵬の翼、垂天の雲の如く、一たび搏てば九萬里を飛ぶ、又、蚌の殼、明珠を含み、光、月に似たり）　(三) 薜荔（蔓草の類）、桄榔（棕櫚の屬）　(四) 玄猿（黑き猿）、翡翠（かはせみ）　(五) 北歸を望む心、日に限なし　(六) 鬢髮、愁のために白し　(七) 赤心破れ碎き、火燃えて灰となる如し　(八) 何時歸りて故園の萊（若しくして食に供す）を剪り、安居を得べきか

魚、武帝の夢に入り鉤を去らんことを求む、明日、帝池上に大魚の索を銜むものを見、乃ち鉤を去りて之を放つ、間三日、帝復池濱に遊び、明珠一雙を得、帝曰く、豈昔魚の報いるならんかと」

清論滿二朝陽一。
高才拜二夕郎一。
還從二避レ馬路一。
來接二珥レ貂行一。
寵就黃扉日。
威廻白簡霜。
柏臺遷レ鳥茂。
蘭署得レ人芳。
禁靜鐘初徹。
更疎漏更長。
曉河低二武庫一。
流火度二文昌一。
寓直光輝重。
乘レ秋藻翰揚。

姚給事が寓直の作に和す

(一)清論朝陽に滿ち。高才夕郎に拜す。(二)還つて馬を避くる路より。來つて貂を珥む行に接す。(三)寵は就く黃扉の日。(四)威は廻る白簡の霜。(五)柏臺烏を遷して茂り。蘭署人を得て芳し。(六)禁靜かにして鐘初めて徹し。更疎にして漏更に長し。(七)曉河武庫に低れ。流火文昌を度る。(八)寓直光輝重く。秋に乘じて藻翰揚る。(九)暗投空しく報いんと欲すれども。下調章を成さず。

(一) 清論高才の譽、朝廷に滿ち、給事黃門の榮職に拜す。(給事黃門は日暮に靑瑣門に入りて直す、故に夕郎といふ) (二) 侍御史より、給事黃門に遷る。(後漢の桓典、侍御史たりし時、正を執りて回避する所なし、常に驄馬に乘る、京師畏憚し、之がために語つて曰く、行々且つ止り、驄馬の御史を避けよと、又、侍中の冠は貂の尾を飾とす) (三) 黃扉(黃門)に上り、日の如き天寵を受く (四) 侍御史たりし時は、威權、甚だ重かりき。(御史の彈文は、白簡に書し、その威風霜に象る)に (五) 柏臺(御史臺)より烏の如くに昇遷し、蘭署(秘書省)はよき人材を得たり (六)

春豫靈池會。
滄波帳殿開。
舟凌二石鯨一度。
槎拂二斗牛一迴。
節晦蓂全落。
春遲柳暗催。
象溟看二浴景一。
燒劫辨二沈灰一。
鎬飲周文樂。
汾歌漢武才。
不レ愁二明月盡一。
自有二夜珠來一。

晦日昆明池に幸したまふに和し奉る應制(一)

(二)春豫靈池の會。滄波帳殿開く。(三)舟は石鯨を凌いで度り。槎は斗牛を拂つて廻る。(四)節晦うして蓂全く落ち。春遲うして柳暗に催す。(五)象溟浴景を看。燒劫沈灰を辨ず。(六)鎬飲周文の樂。汾歌漢武の才。(七)明月の盡くるを愁へず。自ら夜珠の來るあらん。

(一) 禁中上林苑の池、漢の武帝鑿つ (二) 靈池に春遊し、水際に帳殿開く。豫(よろこぶ) (三) 西京雜記に「昆明池、石を刻して鯨魚となし、雷雨到る每に魚常に鳴吼し、鬣尾皆動く」と、又、石鯨の側に、牽牛織女の形を刻む (四) 晦日にて蓂葉全く落ち、春淺きも柳すでに靑む。史記帝王世紀に「帝堯の時、草あり、階を夾みて生ず、每月朔日一莢を生じ、月半に至りて十五莢を生ず、十六日の後に至り、日に一莢を落し、月晦に至りて盡く、之を蓂莢と名づく」 (五) 海に象る池に、日の出の景を觀、池底に、太古の灰あるを認む。祖庭事苑に「漢武帝初めて昆明池を鑿ち、底に黑灰を得、帝東方朔に問ふ、朔曰く、西域の梵人及竺法蘭に問ふべしと、蘭至る、答へて曰く、世界終盡する時、劫火洞燒せり、これ劫燒の餘灰なり」 (六) 周の文王、鎬に都し、羣臣に宴を賜ふ、又、漢の武帝、汾陰の后土の祠に幸し、秋風の辭を作りて歌ふ、今日の幸遊は之に似たり (七) 晦日月なきを愁へず、皇德により、夜珠自ら來り、月に代りて照すならん。三秦記に「昆明池中に神池あり、白鹿原に通ず、原人魚を釣り、綸絶えて去る、

紛從二霄漢一回上。
千春奉二休曆一。
分禁喜二趨陪一。

漢王未レ息レ戰。
蕭相乃營レ宮。
壯麗一朝盡。
威靈千載空。
皇明悵二前跡一。
置酒宴二羣公一。
寒輕綵仗外。
春發幔城中。
樂思廻二斜日一。
歌詞繼二大風一。
今朝天子貴。
不レ假二叔孫通一。

受けて表を草す、中書郎鍾會、爲にその五字を改む、王大に賞して曰ふ、眞に王佐の才なりと、韋舍人の文學も亦之に劣らず ㈥ 長く聖代に仕へ、曆署異なるも、同じく早朝するを喜ぶ

長安の故城(一)未央宮に幸したまふに和し奉る應制　宋之問

漢王未だ戰を息めず。(二)蕭相乃ち宮を營む。(三)壯麗一朝にして盡き。威靈千載空し。(四)皇明前跡を悵み。置酒羣公を宴す。(五)寒は輕し綵仗の外。春は發す幔城の中。(六)樂思斜日を廻らし。(七)歌詞大風を繼ぐ。(八)今朝天子の貴き。叔孫通を假らず。

㈠ 西安府の西、もと秦の離宮、漢の高祖に至り、都をこゝに遷す ㈡ 丞相蕭何、命を受けて宮殿を營む ㈢ 宮殿の壯麗は忽ち滅し、漢王の威靈長く亡ぶ ㈣ 聖天子前代の遺跡を憐み、諸公を會して、宴を備す ㈤ 色絲を飾りし儀仗に寒氣輕く、幔幕を張りし行在に春光催す ㈥ 漢の魯陽公、戰酣なる時、戟を揮ひて夕日を招きし如く、皇上の威靈に依り、今日の宴樂を長からしめ給へ ㈦ 漢の高祖沛宮に幸し、大風の歌を作りし如く、今日も雄大なる御製を拜せり ㈧ 饗宴の諸公はよく禮に習ひ上を尊べり、漢の高祖の如く、叔孫通の力を假り、その非禮を矯正するの要なし。史記に「漢の初、悉く、秦の苛儀法を去り、簡易となす、羣臣酒を飲み功を爭ひ、醉へば或は妄呼し、劍を拔き柱を擊つ、高帝之を厭ふ、叔孫通、朝儀を起し、諸侯王以下、震肅せざるなし、帝曰く、吾乃ち今日皇帝の貴きを知ると」

開ㇾ窗月露微。
小池殘暑退。
高樹蚤涼歸。
冠劍無二時釋一。
軒車待ㇾ漏飛。
明朝題二漢柱一。
三署有二光輝一。

閶闔連ㇾ雲起。
巖廊拂ㇾ霧開。
玉珂龍影度。
珠履雁行來。
長樂宵鐘盡。
明光曉奏催。
一經傳二舊德一。
五字擢二英材一。
儼若下神仙去。

光輝あらん。

(一) 並に命を拜し、神仙門内の尚書省に上り、終夜、崇禮、建禮二門の中に宿直す (二) 大官より夜の食膳を供せられ、女侍史二人、朝衣を護りて香を薫ず (三) 幕を捲けば、天の川の影さし入る (四) 高樹風に鳴り、涼氣すでに催せり (五) 終夜、冠劍を釋かず、曉刻を待ち、軒車（大官の車）に乘りて急ぎ出仕す (六) 漢の田鳳、尚書郎たりし時、靈帝その名を殿柱に題し、威儀の正しきを稱せらる、君も亦明朝嘉賞せられ、光榮を三署（尚書・中書・門下）に流すことあらん

韋舍人と早朝す（二）

閶闔雲に連つて起り。巖廊霧を拂つて開く。(三)玉珂龍影度り。珠履雁行來る。(四)長樂宵鐘盡き。明光曉奏催す。(五)一經舊德を傳へ。五字英材を擢んづ。儼として神仙去り。紛として霄漢より回るが若し。(六)千春休曆を奉じ。分禁趨陪を喜ぶ。

(一) 早曉出仕す (二) 禁門高く雲に連なり、諸殿の御扉、霧を押し排ひ開く (三) 珂（たま）鳴りて、宿衛を進め、百司珠履を穿ちて朝す (四) 長樂宮に夜の鐘聲止み、明光殿に奏事の議始まる (五) 漢の韋賢の子玄成、經學に精通し、父に繼ぎて相位に登る、時人曰く、子に黄金滿籯を遺すは一經を教ふるに如かずと、以て的の繼承、其の命を

朔氣捲二戎衣一。
雨雪關山暗。
風霜草木稀。
胡兵戰欲レ盡。
漢卒尙重レ圍。
雲淨妖星落。
秋高塞馬肥。
據レ鞍雄劍動。
搖レ筆羽書飛。
輿駕還二京邑一。
朋遊滿二帝畿一。
方期來獻レ凱。
歌舞共二春暉一。

並命登二仙閣一。
通宵直二禮闈一。
大官供二宿膳一。
侍史護二朝衣一。
卷レ幔天河入。

(三)雲淨うして妖星落ち。秋高うして塞馬肥ゆ。鞍に據つて雄劍動き。(四)筆を搖がして羽書飛ぶ。(五)輿駕京邑に還り。朋遊帝畿に滿つ。(六)方に期す來つて凱を獻じて。歌舞春暉を共にせんと。

(一)君は南城の征戍に在りて未だ歸らず　(二)北風軍衣を吹き捲く　(三)雲晴れ、妖星落ちて、戰止まんとし、秋天高く、塞地の馬肥ゆ　(四)筆を揮ひ、羽書を作りて捷を奏す。羽書(文を長二尺の木簡に書し、雉羽を插む)　(五)中宗の鸞輿長安に還幸せられ、朋友帝都に滿つ　(六)君が凱旋の日を待ち、歌舞の樂しみを共にすべし。春暉(春光、天恩の二意を兼ぬ)。

蘇員外味玄が夏晩の寓直に省中より贈らるゝに酬ゆ　沈佺期

(一)並に命ぜられて仙閣に登り。通宵禮闈に直す。(二)大官宿膳を供し。侍史朝衣を護す。(三)幔を卷けば天河入り。窗を開けば月露微なり。小池殘暑退き、(四)高樹蚤涼歸る。(五)冠劍時に釋くことなく。軒車漏を待つて飛ぶ。(六)明朝漢柱に題せば。三署

秣レ馬臨二荒甸一。
登レ高覽二舊都一。
猶悲墮涙碣。
尙想臥龍圖。
城邑遙分レ楚。
山川半入レ吳。
丘陵徒自出。
賢聖幾凋枯。
野樹蒼烟斷。
津樓晚氣孤。
誰知萬里客。
懷レ古正踟躕。

馬に秣うて(二)荒甸に臨み。高きに登つて舊都を覽る。(三)猶ほ悲しむ墮涙の碣。(四)尙ほ想ふ臥龍の圖。(五)城邑遙かに楚を分ち。山川半ば吳に入る。(六)丘陵徒らに自ら出で。賢聖幾んど凋枯す。(七)野樹蒼烟斷え。津樓晚氣孤なり。誰か知らん萬里の客。(八)古を懷うて正に踟躕せんとは。

(一) 襄陽の山、古の荊州に屬す (二) 荒服に同じ、古荊蠻と稱す (三) 晉の羊祜、荊州の都督たりし時、常に峴山の風景を愛し、登りて宴を開きて遊ぶ、後人碑を立ててその德を紀し、見るもの流涕せざるはなし、杜預因つて墮涙の碑と名づく。碣(圓形の碑) (四) 臥龍孔明、かつて八陣圖を作る (五) 楚の城邑も明かに見え、山川の望廣く、眼界の半ばは吳の地に屬せり (六) 丘陵には墳墓徒らに多く、古の聖賢はみな沒せり (七) 津口の樓に晚景淋し (八) 感深く、ためらひて進むを得ず

北地寒應レ苦。
南城戍不レ歸。
邊聲亂二羌笛一。

蘇味道に贈る　杜審言

北地寒應に苦しかるべし。(一)南城戍歸らず。邊聲羌笛亂れ。(二)朔氣戎衣を捲く。雨雪關山暗く。風霜草木稀なり。胡兵戰つて盡きんと欲し。漢卒尙ほ圍を重ぬ。

樹宿摶レ風鳥。
池潛縱レ壑魚。
寧知天子貴。
尙憶二武侯廬一。

日落滄江晚。
停レ橈問二土風一。
城臨巴子國。
臺沒漢王宮。
荒服仍周甸。
深山尙禹功。
巖懸靑壁斷。
地險碧流通。
古木生二雲際一。
歸帆出二霧中一。
川途去無レ限。
客思坐何窮。

萬里」又、古頌に「沛乎として巨魚の壑に縱なるが如し」（並に韋氏の人物に比す）㊁今日の行幸は、蜀王劉備、武侯（孔明）の廬を訪ひし如く、何人も思ひ設けざりし所なり

白帝城懷古（一）

陳子昂

日は落つ滄江の晚。(二)橈を停めて土風を問ふ。(三)城は臨む巴子の國。臺は沒す漢王の宮。(四)荒服仍ほ周甸。深山尙ほ禹功。(五)巖懸つて靑壁斷え。地險にして碧流通ず。古木雲際に生じ。歸帆霧中より出づ。(六)川途去つて限なし。客思坐に何ぞ窮らん。

㊀ 漢の公孫述、自ら白帝と號し、城きて據るところ、山に據り江を抱し、三峽の嶮に臨む ㊁ 橈（櫂の短きもの）をとゞめ、土地の有樣を見る ㊂ 城は周代の巴子國に臨み、漢王の永安宮はすでに無し ㊃ 今の荒服は、周代の甸服に屬し、深山に、禹王治水の功跡を見る ㊄ 巖石突き出て、靑崖、壁を削りしが如し ㊅ 江路遠き離く、客中の愁も窮りなし

峴山懷古（一）

南洛師臣契。
東巖王佐居。
幽情遺紱冕。
宸眷屬樵漁。
制下峒山蹕。
恩回灞水輿。
松門駐旌蓋。
薜幄引簪裾。
石磴平黄陸。
烟樓半紫虛。
雲霞仙路近。
琴酒俗塵疎。
喬木千齡外。
懸泉百丈餘。
崖深經鍊藥。
穴古舊藏書。

韋嗣立が山莊に幸したまふに和し奉る應制　李嶠

（一）南洛師臣の契。（二）東巖王佐の居。（三）幽情紱冕を遺れ。宸眷樵漁を屬る。制は下る（四）峒山の蹕。（五）恩は回る灞水の輿。（六）松門旌蓋を駐め。薜幄簪裾を引く。（七）石磴黄陸に平かに。烟樓紫虛に半なり。雲霞仙路近く。琴酒俗塵疎なり。（八）喬木千齡の外。懸泉百丈餘。（九）崖深うして藥を鍊ることを經。穴古りて舊しく書を藏す。（一〇）樹には宿す風に搏つ鳥。池には潛む谿に縱なる魚。（一一）寧んぞ知らんや天子の貴。尚ほ武侯が廬を憶はんとは。

（一）長安の南、洛陽の地に、韋氏師臣として貴ばる（二）東、驪山に近く、帝王補佐の人、韋氏の別莊あり（三）山中の情静かに、紱冕（朝服）の貴さを忘れ、天子親ら樵漁の狀を叡覧す（四）黄帝、崆峒山に廣成子を尋ねし如く、行幸の詔下る（五）恩命下り、駕は灞水（驪山の麓を流る）を廻る（六）松門に旌蓋（はた、きぬがさ）を駐め、薜幄（つたの類）の中に簪裾の諸官衛を引く（七）石階を登れば庭園平かに、烟こむる樓、半ば空中にあり（八）喬木は千年以上を經、瀧の高さは百丈に餘る（九）崖深く仙人藥を鍊りしかと思はれ、巖穴古く、神人、藏書の跡に似たり（一〇）樹には大鳥宿し、池には大魚潛む。莊子に「鵬の南冥に遷るや、水擊三千里、扶搖（天上の風）に搏つて上るもの九

振鷺纔飛日。
遷鶯遠聽聞。
明光共待レ漏。
清覽各披レ雲。
喜レ得二廊廟擧一。
嗟レ爲二臺閣分一。
故林懷二柏悅一。
新握阻二蘭薰一。
冠去神羊影。
車迎瑞雉羣。
遠從二南斗外一。
遙望二列星文一。

廣に在りて崔馬二御史並びに相臺(一)に登ると聞く　蘇味道

(二)振鷺纔かに飛ぶ日。(三)遷鶯遠く聽聞す。(四)明光共に漏を待ち。(五)清覽各〻雲を披く。(六)廊廟の擧を得るを喜び。臺閣の分を爲すを嗟す。(七)故林柏悅を懷ひ。(八)新握蘭薰を阻つ。(九)冠は去る神羊の影。車は迎ふ瑞雉の羣。(一〇)遠く南斗の外より。遙かに列星の文を望む。

(一) 門下・中書・尚書三省の併稱 (二) 鵷鷺に同じ、百官出仕の日 (三) 二氏の昇進を遠地にて聞く。詩經に「伐木丁々たり、鳥鳴いて嚶々たり、幽谷より出でて喬木に遷る」 (四) 明光殿に出仕の刻限を待つ。漏(水時計) (五) 晉の樂廣、尙書郞となりし時、衞瓘之を見て云ふ「雲霧を披いて青天を見るが如し」と、二氏の聲望も、亦之に似たるべし (六) 二氏の昇進を喜び、余が、遠く臺閣を離るゝを嘆く (七) もとの御史臺に、栢樹の如き淸操を懷ふ。(御史の府中に栢樹を植う) (八) 遠く隔り、新しき榮進を見るを得ず。漢官儀に「尙書郞、文書を作り草を起すを主り、香を懷にし蘭を握りて丹墀の下に趨走す」 (九) 御史の神羊冠(又、獬豸冠)を去りて、相臺に入る。蕭廣濟孝子傳に「蕭芝至孝なり、尙書郞に除せらる、雉數十頭あり、飲啄止宿し、上直に當れば送つて岐路に至り、下直して門に入るに及べば、車前に飛鳴す」 (一〇) 遠き南地より列星に似たる二氏の光榮を想ふ

虜地寒膠折。
邊城夜柝聞。
兵符關二帝闕一。
天策動二將軍一。
塞靜胡笳徹。
沙明楚練分。
風旗翻二翼影一。
霜劍轉二龍文一。
白羽搖如レ月。
青山斷若レ雲。
煙疎疑レ卷レ幔。
塵滅似レ銷レ氛。
投レ筆懷二班業一。
臨レ戎想二顧勳一。
還應下雪二漢恥一。
持レ此報中明君上。

溫城に宿して軍營を望む

（一）虜地寒膠折れ。邊城夜柝聞ゆ。（二）兵符帝闕に關し。（三）天策將軍を動かす。（四）塞靜かにして胡笳徹し。沙明かにして楚練分る。（五）風旗翼影を翻し。霜劍龍文を轉ず。（六）白羽搖いて月の如く。青山斷えて雲の若し。（七）煙疎にして幔を卷くかと疑ひ。塵滅して氛を銷すに似たり。（八）筆を投じて班業を懷ひ。戎に臨んで顧勳を想ふ。（九）還つて應に漢の恥を雪いで。此を持して明君に報ずべし。

㈠塞地寒く膠（にかは）も折れ、邊城に夜警の柝聞ゆ　㈡兵符を將軍に授け、軍を出すことは、すべて廟堂の議に本づく　㈢天子の畫策、將軍を移動し、邊境を守らしむ　㈣胡笳の聲悲しく響き、白練の軍衣分明に見ゆ　㈤風に飜く旗、鳥の翔る如く、白刃の劍、龍紋の轉ずるに似たり　㈥將軍の白羽扇（指揮に用ふ）は動いて月の如く、青山の影は、陣營に中斷せられて雲の如し　㈦煙疎れて幕を捲く如く、塵消きて殺氣消え失せんとす、殺氣もやがて止むべし　㈧筆を投じて漢の班超の偉業（前に詳す）を懷ひ、軍營に臨み、昔の顧榮の勳功を思ふ　晉書顧榮傳に「惠帝の時、周玘、顧榮及び甘卓・紀瞻等と謀り、兵を起して陳敏を攻む、橋を燒して舟を南岸に斂む、敏、萬餘人を率ゐて出で、渡るを得ず、榮遂に羽扇を以てす、其衆潰散し、事平いで吳に還る」　㈨胡兵を平げて漢軍敗北の恥を雪ぎ、聖明の君に報いん

鷲嶺鬱岧嶢。
龍宮鎖寂寥。
樓觀二滄海日一。
門對二浙江潮一。
桂子月中落。
天香雲外飄。
捫レ蘿登レ塔遠。
刳レ木取レ泉遙。
霜薄花更發。
冰輕葉互凋。
夙齡尙二遐異一。
披對滌二煩囂一。
待レ入二天台路一。
看余渡二石橋一。

鷲嶺鬱として岧嶢。(二)龍宮鎖して寂寥。(三)樓には滄海の日を觀。(四)門は浙江の潮に對す。(五)桂子月中より落ち。(六)天香雲外に飄る。蘿を捫つて塔に登ること遠く。(七)木を刳めて泉を取ること遙かなり。霜薄うして花更〻發き。(八)冰輕うして葉互に凋む。夙齡遐異を尙び。(九)披對煩囂を滌ふ。(一〇)天台の路に入るを待つて。看よ余が石橋を渡るを。

(一) 一統誌に「寺、杭州の武林山にあり、晉の咸和中初めて建つ、是より先、西僧慧理、靈隱天竺兩山の間に登り、歎じて曰く、これは天竺靈鷲山の小嶺なり、知らず何を以て飛び來ると、因りて庵を結び名づけて靈隱といひ、其峯に命じて飛來といふ」 (二) 山高き貌 (三) 法華經に「文殊娑竭羅龍宮より出づ」と斷借りて寺の義とす (四) 寺、東に向ひ、樓に滄海の日の出を觀る (五) 漁隱叢話に「海潮の來る皆漸あり、たゞ浙江の潮濤至るや、常に山岳の如く、雷電の如く、氷岸横飛し、雪崖傍射し、奔騰膨激す」 (六) 桂樹の實、月中より落つる如く、香氣雲外に傳り動く。酉陽雜俎に「月中に桂あり、高さ五百丈、下に一人あり、常に之を斫り、樹創隨つて合ふ、其姓は吳、名は剛、西河の人、仙を學んで過あり、謫せられて樹を伐らしめらる」 (七) 木を刳りて筧となし、遙かに水を引く (八) 氷輕く、一葉落つれば一葉代り生ず (九) 少年より靈地を慕ひ貴び、來りて心をくつろげ、塵世の煩を忘る (一〇) 余が天台山の路に入り、石橋を渡りて、俗念を斷滅するを見よ。啓蒙記註に「天台山の石橋は、路徑尺に滿たず、長さ數十步、步至つて滑かなり、下深淵に臨む、惟その身を忘れ、然る後よく濟るもの佛果を得」

天將下三宮。
星門列五戎。
坐謀資廟略。
飛檄佇文雄。
赤土流星劍。
烏號明月弓。
秋陰生蜀道。
殺氣繞湟中。
風雨何年別。
琴樽此日同。
離亭不可望。
溝水自西東。

巻之四

五言排律

劉校書が軍に従ふを送る　楊炯

(一)天將三宮より下り。星門五戎を列ね。(二)坐謀廟略を資け。(三)飛檄文雄を佇つ。(四)赤土流星の劍。烏號明月の弓。(五)秋陰蜀道に生じ。殺氣湟中に繞る。(六)風雨何の年までの別ぞ。琴樽此の日同じうす。(七)離亭望むべからず。溝水自ら西東。

㊀將軍、命を拜して三宮(明堂・辟雍・靈臺)を下り、軍門に五種の兵器(戈・殳・戟・酋矛・夷矛)を立て列ぬ。
(將軍を天上の將軍星に比す) ㊁劉校書參謀となり、廟堂の戦略を資く ㊂將軍檄を飛ばし、文筆の雄才(劉校書)を待つ ㊃赤土にて磨き、光、流星の如き劍、黒漆にて塗り滿月の如く張る弓 ㊄蜀道に秋陰を生じ、湟中(隴西の地)に殺氣滿ち、胡軍漸く侵入す ㊅雨に風に、何時まで別るゝ事ならん、琴と酒とを具へ、今日しばらく宴飲す ㊆離亭の外を眺むるに堪へず、溝水東西に分流し、我等二人の相別るゝに似たり

(一)靈隠寺　駱賓王

盤回出二薜蘿一。
到レ江呉地盡。
隔レ岸越山多。
古木叢二青靄一。
遙天浸二白波一。
下方城郭近。
鐘磬雜二笙歌一。

山多し。(三)古木青靄に叢り。遙天白波浸る。下方城郭近し。(四)鐘磬笙歌に雜る。

(一) 路回り、薜蘿(つたかづら)の間をくゞり上る　(二) 錢塘江にて呉の地盡き、對岸に楚の山高し　(三) 古木靄の中に茂り、遙空、江の白波に浸る　(四) 寺の鐘聲、笙歌の聲と入り亂る

逢レ君穆陵路。
西馬向二桑乾一。
楚國蒼山古。
幽州白日寒。
城池百戰後。
耆舊幾家殘。
處處蓬蒿偏。
歸人掩レ涙看。

山色遠含レ空。
蒼茫澤國東。
海明先見レ日。
江白迴聞レ風。
鳥道高原去。
人煙小徑通。
那知舊遺逸。
不レ在二五湖中一。

路自二中峯一上。

君に逢ふ穆陵の路。西馬桑乾に向ふ。楚國蒼山古り。幽州白日寒し。(三)城池百戰の後。耆舊幾家か殘る。(四)處處蓬蒿偏く。歸人涙を掩うて看る。

(一)楚の北境　(二)薊州漁陽郡。安祿山兵を擧げし地　(三)戰後に城池荒れ、殘れる知人も少かるべし。曲禮に、六十を耆といふ　(四)諸處に雜草茂る

松汀驛に題す　張祜

(一)山色遠く空を含む。蒼茫たり澤國の東。海明けて先づ日を見。江白うして迴かに風を聞く。(二)鳥道高原に去り。人煙小徑通ず。(三)那ぞ知らん舊遺逸。五湖の中に在らざることを。

(一)山色、遠空に接し、水郷の東、霞みわたる　(二)鳥のみ通ふ險所を越え、高原に出づれば、人家ありて小徑（こみち）通ず　(三)古き隱者、五湖の地に棲むも多からん

聖果寺　釋處默

路は中峯より上り。(一)盤回して薜蘿を出づ。(二)江に到つて吳地盡き。岸を隔て越

岧嶢試一臨。
虜騎附城陰。
不辨風塵色。
安知天地心。
門開邊月近。
戰苦陣雲深。
旦夕更樓上。
遙聞橫笛音。

晩景寒鴉集。
秋風旅雁歸。
水光浮日出。
霞彩映江飛。
洲白蘆花吐。
園紅柹葉稀。
長沙卑濕地。
九月未成衣。

（一）岧嶢試に一臨すれば。虜騎城陰に附く。（二）風塵の色を辨ぜず。安んぞ天地の心を知らん。門開いて邊月近く。（三）戰苦しんで陣雲深し。（四）旦夕更樓の上。遙かに横笛の音を聞く。

（一）山の高處に上り見れば、賊兵城際まで逼る　（二）戰の勝敗は豫め辨へ難く、天意は敵味方何れを助くるかを知らず　（三）苦戰の中に陣雲深し　（四）斥候の人更る〳〵登りて四方を伺望する樓

岳陽の晩景　　張均

晩景寒鴉集り。秋風旅雁歸る。（一）水光日を浮べて出で。霞彩江に映じて飛ぶ。洲白うして蘆花吐き。園紅にして柹葉稀なり。（二）長沙卑濕の地。九月未だ衣を成さず。

（一）水光、夕日を浮べて輝き、夕燒の雲、湖水に映りて飛ぶ　（二）長沙の地は卑く濕氣多き處なるに、九月になれども寒衣を得ず、謫居のはかなさを愍しむ

（一）穆陵關の北にて人の（二）漁陽に歸るに逢ふ　　劉長卿

清晨入二古寺一。
初日照二高林一。
曲徑通二幽處一。
禪房花木深。
山光悅二鳥性一。
潭影空二人心一。
萬籟此俱寂。
惟聞二鐘磬音一。

清晨古寺に入れば。初日高林を照す。曲徑幽處に通じ。(一)禪房花木深し。(二)山光鳥性を悅ばしめ。潭影人心を空しうす。(三)萬籟此に俱に寂たり。惟鐘磬の音を聞くのみ。

(一)禪房に、花咲く樹木深く茂る　(二)山美しく、鳥悅び遊び、潭水淨く心の塵を洗ふ　(三)物音すべて絶え、鐘聲の音のみ聞ゆ

揚子江を渡る　丁仙芝

桂楫中流望。
空波兩岸明。
林開揚子驛。
山出潤州城。
海盡邊音靜。
江寒朔吹生。
更聞楓葉下。
淅瀝度二秋聲一。

(一)桂楫中流に望めば。空波兩岸明かなり。(二)林は開く揚子驛。山は出す潤州城。(三)海盡きて邊音靜かに。江寒うして朔吹生ず。更に聞く楓葉下つて。(四)淅瀝として秋聲度るを。

(一)桂楫(美しきかぢ)を操り、中流より望めば、浪靜かに兩岸の景明なり　(二)揚子驛(瓜步鎭の別名)林の隙より見え、潤州城(鎭江府の別名)山の間より現る　(三)海に至りて邊聲絶え、江寒く北風生ず　(四)木葉の鳴る貌

笛を聞く　張巡

能令ニ出塞飛一。
聽臨ニ關月一苦。
清入ニ海風一微。
三奏高樓曉。
胡人掩レ涙歸。

胡人涙を掩うて歸る。

㊀樂府題 ㊁城南に虜軍集り、一夜の中に幾重にも圍む ㊂金笳の聲長く引き、出塞の聲を四方に飛ばす。晉書に「劉疇、嘗て亂を塢壁に避け、賈胡百數、之を害せんと欲す、疇、懼るゝ色なく、笳を援じて之を吹き、出塞入塞の聲をなし、以て游客の思を動かす、是に於て、羣胡皆涙を垂れて去る」㊃關月の中に冴え聞え、又、海風に入りて微かに清し（關山月、海風の曲）㊄晉の劉琨、晉陽に在り胡騎に圍まるゝこと數重、乃ち月に乘じて樓に上り、清嘯す、賊之を聞いて皆悽然たり、中夜胡笳を奏す、賊又流涕す、曉に向つて又之を吹く、賊幷に圍を解いて走る

八月洞庭秋。
瀟湘水北流。
還レ家萬里夢。
爲レ客五更愁。
不レ用レ開ニ書帙一。
偏宜レ上ニ酒樓一。
故人京洛滿。
何日復同遊。

王徵君と洞庭に懷あり(一)　張謂

八月洞庭の秋。瀟湘水北に流る。(二)家に還る萬里の夢。客となる五更の愁。書帙を開くを用ひず。(三)偏に宜しく酒樓に上るべし。故人京洛に滿つ。何の日か復た同じく遊ばん。

㊀天子に徵さるゝも、官に就かざる人の稱 ㊁瀟、湘二水、北流して洞庭湖に注ぐ。（水を見て北方長安を憶ふ）

㊂讀書する心もなく、たゞ酒樓に上り、醉に心を紛らすがよし

破山寺の後禪院　常建

秦川朝望迴。日出正東峯。遠近山河淨。透迤城闕重。秋聲萬戸竹。寒色五陵松。客有歸歟歎。淒其霜露濃。

香刹夜忘歸。松淸古殿扉。燈明方丈室。珠繫比丘衣。白日傳心淨。青蓮喩法微。天花落不盡。處處鳥啣飛。

城南虜已合。一夜幾重圍。自有金笳引。

秦川朝望迴かなり。日は出づ正東の峯。遠近山河淨く。(一)逶迤として城闕重る。秋聲萬戸の竹。寒色五陵の松。(二)客に歸歟の歎あり。(三)淒其として霜露濃かなり。

(一)城闕長く連る　(二)故郷を望んで歎く。歸歟（歸らんか）　(三)物淋しき貌

龍興寺に宿す　　綦毋潛

(一)香刹夜歸るを忘る。松は淸し古殿の扉。(二)燈は明かなり方丈の室。珠は繫ぐ比丘の衣。(三)白日傳心淨く。青蓮喩法微なり。(四)天花落ちて盡さず。處處鳥啣んで飛ぶ。

(一)寺に遊び、夜に入るも歸らず　(二)僧室に燈火明るく、僧衣に珠數かゝる　(三)佛心を傳へて、白日の如く淨く、佛は青蓮に喩へられ、教義微妙なり　(四)花散りて止まず、天女の曼陀羅花の如く、鳥銜み飛び、迦陵頻迦に似たり

(一)胡笳曲　　王昌齡

(二)城南虜已に合し。一夜幾重か圍む。(三)自ら金笳の引あり。能く出塞なして飛ばしむ。(四)聽は關月に臨んで苦しく。淸は海風に入つて微なり。(五)三奏高樓の曉。

楚山不レ可レ極。
歸路但蕭條。
海色晴看レ雨。
江聲夜聽レ潮。
劍留二南斗一近。
書寄二北風一遙。
爲報空潭橘。
無レ媒レ寄二洛橋一。

（一）楚山極むべからず。歸路但蕭條たり。（二）海色晴れて雨を看。江聲夜潮を聽く。（三）劍は南斗に留めて近く。書は北風に寄せて遙かなり。（四）爲に報ず空潭の橘。洛橋に寄するに媒なし。

（一）楚の山路、行けども盡きず　（二）海晴れて又雨降り、揚子江に夜の潮を聞く　（三）劍を帶びて江南に留り、北風に託して遙かに書を寄す　（四）江南の橘を都に送りたきも、媒（なかだち）なきことを報ず。（自ら喩へ、都に歸り難しの意）

蘇氏の別業

別業居二幽處一。
到來生二隱心一。
南山當二戶牖一。
灃水映二園林一。
竹覆經レ冬雪。
庭昏未レ夕陰。
寥寥人境外。
閑坐聽二春禽一。

（一）別業幽處に居し。到來隱心を生ず。南山戶牖に當り。灃水園林に映ず。（二）竹は覆ふ冬を經る雪。庭は昏し未だ夕ならざる陰。寥寥たる人境の外。閑坐して春禽を聽く。

（一）靜かなる地に別莊あり、自然に隱棲の心を生ず　（二）未だ夕ならざるに庭すでに昏し

秦川を望む

李頎

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。呉楚東南坼。乾坤日夜浮。
親朋無一字。老病有孤舟。戎馬關山北。憑軒涕泗流。

客路青山外。行舟綠水前。潮平兩岸闊。風正一帆懸。
海日生殘夜。江春入舊年。鄉書何處達。歸雁洛陽邊。

(二)昔聞く洞庭の水。今上る岳陽樓。(三)呉楚東南に坼け。乾坤日夜に浮ぶ。(四)親朋一字なく。老病孤舟あり。(五)戎馬關山の北。軒に憑つて涕泗流る。

(一)岳州府城西門の樓　(二)洞庭湖の勝は昔より聞きしが、今、岳陽樓に上り、始めて大景を窺ふを得たり　(三)湖廣く、呉楚の二國東南に劃け坼けたる如く見え、乾坤すべてのもの、日夜水上に浮ぶに似たり　(四)親朋離散し、一字の消息なく、孤舟のみ、老病の余に伴ふ　(五)關山の北、蜀地の戰亂を憶ひ、軒欄に凭りて涙流る

(一)北固山下に次る　　王灣

客路青山の外。行舟綠水の前。潮平かにして兩岸闊く。風正うして一帆懸る。(二)海日殘夜に生じ。江春舊年に入る。(三)鄉書何の處にか達せん。歸雁洛陽の邊。

(一)鎮江府の北、揚子江に臨み、懸崖數十丈、形險固なるに因りて名づく　(二)海闊く五更の夜に日の出を觀、地暖く、寒冬すでに春を催す　(三)歸雁を見て洛陽を憶ひ、郷信の達し難きを悲しむ

江南旅情　　祖詠

星隨二平野一闊。
月湧二大江一流。
名豈文章著。
官因二老病一休。
飄飄何所レ似。
天地一沙鷗。

依レ沙宿二舸船一。
石瀨月娟娟。
風吹春燈亂。
江鳴夜雨懸。
晨鐘雲外濕。
勝地石堂偏。
柔艣輕鷗外。
含レ悽覺二汝賢一。

る。(三)名は豈文章をもて著れんや。官は老病に因つて休す。(四)飄飄何の似たる所ぞ。天地の一沙鷗。

㊀孤泊の夜の舟に檣高し ㊁野の闊きにつれ、空の星もひろびろと見ゆ ㊂名聲は詩文に依りて著るべきにあらず、官職は老病のために辭したり ㊃飄々たる我に似たるものは、天地間たゞ沙鷗のあるのみ。

船夔州に下らんとし郭に宿す、雨濕して岸に上るを得ず王十二判官に別る

(一)沙に依つて舸船に宿す。(二)石瀨月娟娟たり。(三)風吹いて春燈亂れ。江鳴つて夜雨懸る。晨鐘雲外に濕ひ。(四)勝地石堂偏る。(五)柔艣輕鷗の外。悽を含んで汝の賢を覺ゆ。

㊀沙岸に傍ひて、舸船(大なる船)に宿る ㊁石上を流るゝ水に月光美し ㊂風につれ、船の春燈搖れ、水鳴りて、夜雨降りそゝぐ ㊃石堂は勝地なるも、土地偏りて行くを得ず ㊄暁に鷗の遊ぶ江中に漕ぎ出て、悲を含み、汝、王判官の賢德を憶ふ

(一)岳陽樓に登る

にして去る」と、畫中の孤獨はそれに似たり 四 人生は多くの煩累に引かれ、何處に行かば、塵より脱れ出づるを得んか。(仙郷を望む)

禹廟（一）

禹廟空山裏。
秋風落日斜。
荒庭垂橘柚。
古屋畫龍蛇。
雲氣生虚壁。
江聲走白沙。
早知乘四載。
疏鑿控三巴。

禹廟空山の裏。秋風落日斜なり。荒庭橘柚垂れ。(二)古屋龍蛇を畫く。雲氣虚壁に生じ。江聲白沙に走る。(三)早く知る四載に乘じて。(四)疏鑿三巴を控くことを。

一 忠州臨江縣にあり、堯の時、洪水横流し、天下に氾る、堯獨へ舜を擧げ、舜、禹をして九河を疏かしむ 二 荒庭に橘柚(たちばな、ゆず)の實垂れ下り、古き屋壁に龍蛇を畫く。(尚書禹貢に「その包は橘柚」又、孟子に「龍蛇を驅り、之を菹に放つ」) 三 泯江の水、白沙を押し流しつゝ走る 四 早年より、禹王四載の乘物を用ひ、巴東の峽を疏鑿し、三巴の水を下流に控きしことを知りしが、今實境に臨み、深くその聖功を憶ふ。史記、禹本紀に「陸行には車に乘り、水行には舟に乘り、泥行には橇に乘り、山行には樺に乘る」又一統志に「巴江は、四川重慶府城の東北にあり、閬水と白水と合し、曲折すること三回、故に名づく」

旅夜書懷

細草微風岸。
危檣獨夜舟。

細草微風の岸。(一)危檣獨夜の舟。(二)星は平野に隨つて闊く。月は大江に湧いて流

浩劫因二王造一。
平臺訪二古遊一。
綵雲蕭史駐。
文字魯恭留。
宮闕通二羣帝一。
乾坤到二十洲一。
人傳有二笙鶴一。
時過二北山頭一。

方丈渾連レ水。
天台總映レ雲。
人間長見レ畫。
老去恨二空聞一。
范蠡舟偏小。
王喬鶴不レ羣。
此生隨二萬物一。
何處出二塵氛一。

(一)浩劫王造に因る。(二)平臺古遊を訪ふ。(三)綵雲蕭史駐り。(四)文字魯恭留る。(五)宮闕羣帝に通じ。(六)乾坤十洲に到る。(七)人は傳ふ笙鶴あつて。時に北山の頭を過ぐと。

(一) 浩劫の世(昔の義)滕王築く (二) 梁の孝王の平臺に似、昔時の遊びを憶ふ (三) 綵雲あり、仙人蕭史駐るごとし (四) 滕王の筆跡殘る(魯の恭王に比す) (五) 觀高く、天上の諸神と通ず (六) 景廣く、海中十洲の仙山も見ゆべし (七) 時に仙人あり、鶴に乘り、笙を吹き、北方の山嶺を過ぐといふ

李固請司馬が題せる山水の圖を觀る (一)

(二)方丈渾て水に連り。天台總て雲に映ず。(三)人間長く畫を見。老い去つて空しく聞くを恨む。(四)范蠡舟偏に小に。(五)王喬鶴羣せず。(六)此の生萬物に隨ふ。何の處か塵氛を出でん。

(一) 仙鄕山水の圖 (二) 仙島方丈は水にかこまれ、天台山は高く雲に映ず (三) 人間はたゞ仙境の畫を見るのみ、仙境に到るを得ず、年老い空しく長生の樂を聞くを恨む (四) 吳越春秋に「范蠡越王を佐けて吳を滅し、會稽の恥を雪ぐ、功成り身退き、扁舟に乘り、五湖に泛ぶ」と、畫中の小舟はそれに似たり (五) 列仙傳に「王子喬、好んで笙を吹き、鳳鳴をなす、道人浮丘公接つて嵩山に上る、三十餘年の後、之を山上に求む、桓良を見て曰く、我家に告げ、七月七日、我を緱子山頭に待たしめよと、期に至り、果して白鶴に乘りて來り、手を擧げて時人に謝し、數日

何年顧虎頭。
滿壁畫二滄洲一。
赤日石林氣。
青天江海流。
錫飛常近レ鶴。
杯渡不レ驚レ鷗。
似下得二廬山路一。
眞隨二惠遠一遊上。

玄武禪師の屋壁に題す

何の年か顧虎頭。滿壁滄洲を畫く。赤日石林の氣。青天江海の流。錫飛んで常に鶴に近く。杯渡つて鷗を驚さず。廬山の路を得て。眞に惠遠に隨つて遊ぶに似たり。

（一）昔の顧愷之、幼字は虎頭、禪師の屋壁に仙鄕滄洲の圖を畫く（二）日光赤く、石林に瑞氣昇り、青天晴く、江海の流につゞく（三）禪師常に畫中の鶴に近く遊ぶ。高僧傳に、梁の僧誌公、白鶴道人と共に、舒州潛山に居らんと欲し、道人は鶴の止る處を以て記となし、誌公は錫の止る所を以て記となす、已にして鶴先づ飛び去り、麓に至り將に止らんとす、忽ち空中飛錫の聲を聞き、誌公の錫遂に山麓に止る、各々以て處を識り、室を築いて居る（四）禪師常に畫中の鷗に伴ひ遊ぶ。杯渡は高僧傳に見えたる僧說也、其略に曰く、「杯渡は其の名姓を知らず、嘗て木杯を浮べて水を渡りしより其名あり、渡、北方に於て一家に寄宿す、家に一金像あり、渡竊んで將に去らんとす、家主覺つて之を追ふ、渡の徐行するを見、馬を走らせて逐へども及ばず、孟津河に至り、渡、木杯を水に浮べ、之に憑つて河を渡る、風棹を假るなく、輕疾飛ぶが如し（五）禪師と共に圖畫を見れば、廬山の路を登り、高僧慧遠と遊ぶに似たり。廬山記に、「遠法師廬阜に居ること三十餘年、影は山を出でず、跡は俗に入らず」

玉臺觀

鳳林戈未レ休。
魚海路常難。
候火雲峰峻。
懸軍幕井乾。
風連二西極一動。
月過二北庭一寒。
故老思二飛將一。
何時議二築壇一。

帶甲滿二天地一。
胡爲君遠行。
親朋盡一哭。
鞍馬去二孤城一。
草木歲月晚。
關河霜雪淸。
別離已昨日。
因見古人情。

(一)鳳林戈未だ休まず。魚海路常に難し。(二)候火雲峰峻く。懸軍幕井乾く。(三)風は西極に連つて動き。月は北庭を過ぎて寒し。(四)故老飛將を思ふ。何の時か築壇を議せん。

㈠鳳林關、魚海縣、吐蕃の侵入休まず、進軍困難なり ㈡候火揚る處に、雲つく峰鋭く、深く敵地に入りし軍、幕井（軍用の井）涸れて苦しむ ㈢西極、北庭（吐蕃の屬地）に風吹き月冴ゆ ㈣故老、皆、漢の李廣の如き良將を望む、朝廷には何時任命の評議あらんか。史記韓信傳に「是に於て齋戒して壇場を設け、禮を具へ、拜して大將となす」

(一)送遠

(二)帶甲天地に滿つ。胡爲ぞ君遠行する。(三)親朋盡く一哭。鞍馬孤城を去る。草木歲月晚れ。關河霜雪淸し。(四)別離已に昨日。因つて見る古人の情。

㈠別後、遠地の人に贈る ㈡甲冑の兵天下に滿つ ㈢親友集りて共に哭き、君は鞍馬に騎りて孤城を去る ㈣別れしは昨日の事なり、古人作詩の情をも想ひ知らる。梁の江淹の詩に「別離昨日の如し」

鋒稜瘦骨成。
竹批雙耳峻。
風入四蹄輕。
所向無空闊。
眞堪託死生。
驍騰有如此。
萬里可橫行。

花隱掖垣暮。
啾啾棲鳥過。
星臨萬戸動。
月傍九霄多。
不寢聽金鑰。
因風憶玉珂。
明朝有封事。
數問夜如何。

所空闊なく。眞に死生を託するに堪へたり。驍騰此の如くなるあり。萬里橫行すべし。

(一)西域大宛國の名馬、肉瘦せ筋骨かどかどし (二)左右の耳、竹をそぎたる如く尖り、走れば蹄輕く、脚下に風を生ず (三)空闊の地にも忽ち達し、戰に臨み、死生を託するに足る (四)名馬の驍騰(躍り跳ぬ)此の如し、萬里も自由に驅馳すべし

春左省に宿す

(一)花は隱る掖垣の暮。啾啾として棲鳥過ぐ。(二)星は萬戸に臨んで動き。月は九霄に傍うて多し。(三)寢ねずして金鑰を聽き。風に因つて玉珂を憶ふ。(四)明朝封事あり。數々問ふ夜如何と。

(一)門下省の廊、日暮れて暗きに、巣に歸る鳥啾々と鳴き過ぐ (二)星、諸所の戸(入口)に臨み、月、宮中に照り渡る (三)夜間眠らず禁門の開くを待ち、風の吹くにも、玉珂(佩玉)の響を憶ふ (四)明朝密奏の事あり、屢々時刻を問ひ、終夜心を緩めず。漢官儀に「密奏は皀囊(黑きふくろ)もて封じ、人をして知らしめず、故に封事といふ」

秦州雜詩

牀頭一壺酒。能更幾回眠。

東郡趨レ庭日。南樓縱レ目初。浮雲連二海岱一。平野入二青徐一。孤嶂秦碑在。荒城魯殿餘。從來多二古意一。臨眺獨躊躇。

胡馬大宛名。

に「張旭酒を嗜み、大醉する毎に呼叫狂走し、乃ち筆を下し、或は頭を墨に濡して書す、既にして醒め、自ら視て神とし、復得べからずとなす」㊃ 醉後の語は狂人に近し ㊄ 白髪老年を意に介せず、神仙逍遥の樂は目前に在り

(一)兗州城樓に上る

杜甫

(二)東郡庭に趨る日。南樓目を縱にする初。(三)浮雲海岱に連り。平野青徐に入る。(四)孤嶂秦碑在り。荒城魯殿餘る。(五)從來古意多し。臨眺して獨り躊躇す。

㊀ 古の魯の地、杜甫の父閑、この州の司馬たり ㊁ 東郡(兗州)にて父に事ふる日、南樓に登り風景を見る。論語に「孔子獨立てり、鯉(孔子の子)趨つて庭を過ぐ」㊂ 浮雲、東海泰山に連り、平野、青州・徐州につゞく ㊃ 孤嶂(一つの山)に秦代の碑あり、荒城に魯の靈光殿殘る。史記に「始皇二十八年、始皇東郡縣に行き、鄒嶧山に登り石を立て、魯の諸儒生と議し、石に刻して秦德を頌せしむ」又、王延壽魯の靈光殿賦に「殿もと景帝の子魯の共王の立つるところ、漢の中微に遭ひ、未央・建章悉く墮ちしも、靈光殿巋然として猶は存す」㊄ 古來、遺跡に富み、感慨多し、たやすく樓を下り得ず

房兵曹の胡馬

(一)胡馬大宛の名。鋒稜瘦骨成る。(二)竹批いで雙耳峻く。風入つて四蹄輕し。(三)向ふ

驅レ馬薊門北。
北風邊馬哀。
蒼茫遠山口。
豁達胡天開。
五將已深入。
前軍止半廻。
誰憐不レ得レ意。
長劍獨歸來。

世上漫相識。
此翁殊不レ然。
興來書自聖。
醉後語尤顚。
白髮老閑事。
青雲在二目前一。

㊀薊北より歸る

馬を驅る薊門の北。北風邊馬哀しむ。㊁蒼茫たり遠山の口。豁達として胡天開く。五將已に深く入り。㊂前軍たゞ半廻る。誰か憐まん意を得ずして。獨歸り來るを。

㊀ 哥舒翰に從ひて北征し、戰利あらずして歸る　㊁ 遠山の口かすみ渡り、胡國の天廣く開く　㊂ 先鋒の諸將深く入りて破れ、生還するもの前軍の半に過ぎず。(漢の宣帝の本始二年、田廣明・范明友等、五將を遣し、匈奴に侵入せしめしに比す)

㊀醉後張九旭に贈る

㊁世上漫に相識る。此の翁殊に然らず。㊂興來つて書自ら聖なり。㊃醉後語尤も顚す。㊄白髮老いて閑事。青雲目前に在り。牀頭一壺の酒。更に能く幾回か眠る。

㊀ 七言古詩、飲中八仙歌、張旭の條參照　㊁ 世人は妄りに知己となるも、この翁は獨り然らず　㊂ 唐書文藝傳

謫去君無レ恨。
閩中我舊過。
大都秋雁少。
只是夜猿多。
東路雲山合。
南天瘴癘和。
自當レ逢二雨露一。
行矣愼二風波一。

西馬行將レ夕。
征途去轉難。
不レ知二邊地別一。
祇訝客衣單。
溪冷泉聲苦。
山空木葉乾。
莫レ言關塞極。
雨雪尙漫漫。

鄭侍御閩中に謫せらるゝを送る(一)

謫せられて去るも君恨むるなかれ。閩中我舊過れり。(二)大都秋雁少く。只是れ夜猿多し。東路雲山合し。(三)南天瘴癘和す。(四)自ら當に雨露に逢ふべし。行けや風波を愼め。

(一) 福建省福州、周時七閩の地、唐閩州を置く (二) 思ふに雁少く、夜猿の聲のみ多からん、大都(十中七八) (三) 秋になり、南方に瘴疫和ぐ (四) 雨露の如き君恩に逢ひ、やがて召還せらるべし、風波に注意し、自愛して行き給へかし

清夷軍に使して居庸に入る

西馬行ゝ將に夕ならんとす。(一)征途去つて轉難し。(二)邊地の別なるを知らず。祇訝る客衣の單なるを。溪冷かにして泉聲苦しみ。(三)山空うして木葉乾く。(四)言ふなかれ關塞極ると。雨雪なほ漫漫たり。

(一) 路險しく、馬を進め難し (二) 邊地の氣候中國と異るを知らず、客衣薄きかと疑はる (三) 山淋しく、木葉枯れ乾く (四) 關塞の地はこゝに極ると云ふなかれ、なほ清夷軍に遠く、雨雪いよゝ降りそゝげり

高閣逼二諸天一。
登臨近二日邊一。
晴開萬井樹。
愁看五陵烟。
檻外低二秦嶺一。
牕中小二渭川一。
早知二清淨理一。
常願レ奉二金仙一。

(一)高閣諸天に逼る。(二)登臨日邊に近し。(三)晴れて開く萬井の樹。愁へ看る五陵の烟。(四)檻外秦嶺低く。牕中渭川小なり。(五)早く清淨の理を知り。常に金仙に奉ぜんことを願ふ。

(一) 閣高く天空（諸天の字は佛語に出る）に逼る (二) 閣頂に登れば日に近し（兼ねて帝城に近し） (三) 日晴れて市街の樹木美しく、漢五帝の陵を愁へ望む (四) 檻外に秦嶺（終南山）低く、窓に渭水小さく見ゆ (五) 早くより信心清淨の理を知り、如來に仕へんことを願へり。（佛書に因縁九十一劫、身みな金色、故に佛を金仙と稱す）

征馬向二邊州一。
蕭蕭嘶未レ休。
思深常帶レ別。
聲斷爲レ兼レ秋。
岐路風將レ遠。
關山月共愁。
贈レ君從レ此去。
何日大刀頭。

劉評事が朔方(一)判官に充てらるゝを送り 征馬の嘶くを賦し得たり

高適

征馬邊州に向ひ。蕭蕭として嘶いて未だ休まず。(二)思深うして常に別を帶ぶ。聲斷ゆるは秋を兼ぬるが爲なり。(三)岐路風將に遠からんとし。關山月共に愁ふ。君に贈る此れより去らば。(四)何の日か大刀頭。

(一) 夏州朔方軍 (二) 別離の悲しみを帶び、秋聲を含みて嘶き斷ゆ (三) 別路に風吹きて嘶く聲を傳へ、關山月（笛曲に名）と共に淋し (四) 君遠く去り、歸り來るは何時ならんか（大刀頭は刀端の環、環の音還と通ず）

花明五嶺春。
此鄉多二寶玉一。
愼勿レ厭二清貧一。

聯步趨二丹陛一。
分曹限二紫微一。
曉隨二天仗一入。
暮惹二御香一歸。
白髮悲二花落一。
青雲羨二鳥飛一。
聖朝無二闕事一。
自覺二諫書稀一。

㈠官を擇ばず遠く南海に行くは、家に老親あり孝養せんが爲なり　㈡南海の地、蜃氣樓多く現れ、鮫人雜り棲む。博物志に鮫人あり水居して魚の如し、織績を廢せず、時に出でて邑里に來さ、泣く時は、涙珠をなす　㈢三山（番・禺・堯）の雨に海暗く、五嶺（大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽）の春に花明かなり　㈣南海は寶玉の產多し、愼みて清貧を守り、利慾の念に動さるゝなかれ

㈠左省の杜拾遺に寄す

聯步して丹陛に趨り。分曹紫微を限る。㈡曉には天仗に隨つて入り。暮には御香を惹いて歸る。㈢白髮花の落つるを悲しみ。青雲鳥の飛ぶを羨む。㈣聖朝に闕事なし。自ら諫書の稀なるを覺ゆ。㈤

㈠門下省の杜甫拾遺に寄す　㈡同朝に仕へ、步を聯ねて丹陛（朱塗の御階）に趨るも、余は紫微省（中書省の異稱）に屬し妄りに往來するを得ず　㈢朝に儀仗（劍戟の總稱）の列に隨つて入り、暮に御座の香氣を帶びて歸る　㈣老年白髮に落花を愁しみ、青空高く飛ぶ鳥を羨む。青雲（塵世の外、また高き官位）　㈤聖明の朝には政に遺漏なく、諫書を奉ることも少し。（暗に進言用ひられ難しの意を寓す）

總持閣に登る

長河落日圓。
蕭關逢㆓候騎㆒。
都護在㆓燕然㆒。

風勁角弓鳴。
將軍獵㆓渭城㆒。
草枯鷹眼疾。
雪盡馬蹄輕。
忽過㆓新豐市㆒。
還歸㆓細柳營㆒。
回㆓看射㆑鵰處㆒。
千里暮雲平。

不㆑擇㆓南州尉㆒。
高堂有㆓老親㆒。
樓臺重㆓蜃氣㆒。
邑里雜㆓鮫人㆒。
海暗三山雨。

大沙漠に一條の煙直く、長流に夕日の影圓し　(四) 蕭關にて斥候の騎士に逢へば、都護將軍は、燕然山にありといふ、前途はなほ遙かなり。

獵を觀る

風勁うして角弓(一)鳴り。將軍渭城(二)に獵す。艸枯れて(三)鷹眼疾く。雪盡きて馬蹄輕し。忽ち新豐の市を過ぎて。還た細柳の營に歸る。(四)鵰を射し處を回看すれば。千里暮雲平かなり。

(一) 獸角を飾れる弓　(二) もと秦の咸陽の居城　(三) 草枯れ鷹は鋭く鳥を見出し、雪消え馬蹄の進退自由なり　(四) 鵰を射獵せし處を顧れば、暮雲平に廣く鎖む。鵰(わし)を射る(精射の義)

張子南海に尉たるを送る　岑參

(一)南州の尉たるを擇ばざるは。高堂老親あればなり。樓臺蜃氣重り。邑里鮫人(二)雜る。(三)海は暗し三山の雨。花は明かなり五嶺の春。(四)此鄕寶玉多し。愼んで淸貧を厭ふことなかれ。

鐃吹喧二京口一。
風波下二洞庭一。
赭圻將赤岸。
擊レ汰復揚レ舲。
日落江湖白。
潮來天地青。
明珠歸二合浦一。
應レ逐二使臣星一。

單車欲レ問レ邊。
屬國過二居延一。
征蓬出二漢塞一。
歸雁入二胡天一。
大漠孤烟直。

刑桂州を送る

鐃吹京口に喧しく。(一)風波洞庭を下る。(二)赭圻と赤岸と。汰を撃ち復た舲を揚ぐ。(三)日落ちて江湖白く。潮來つて天地青し。(四)明珠合浦に歸る。應に使臣の星を逐ふべし。

(一) 送別の鐃（どら）笛の音、京口驛に喧しく、風波に乘じ洞庭湖を下る (二) 波を打ち、舲（窓ある舟）を進め、赭圻赤岸の諸地を經 (三) 日傾きて湖水白く、潮湧きて天地青く煙る (四) 後漢の孟嘗、合浦（桂州の地）の太守となる、郡はもと穀實を產せず、海に珠寶を產す、前の太守貪穢なりしに依り、珠移つて交趾の界に行けり、孟嘗官に到り廉潔にして良政を布くに及び、珠また還り來り、商貨流通すと、又、後漢の李郃、河圖占星（うらなひ）を善くし、二使星の益州の分野に向ふを見、朝使の至るを知ると、君が任に赴く日も亦此の如き奇瑞あらん

使して塞上に至る

單車邊を問はんと欲す。屬國居延を過ぐ。(一)征蓬漢塞を出で。歸雁胡天に入る。(二)大漠孤烟直く。長河落日圓かなり。(三)蕭關候騎に逢ふ。(四)都護燕然に在り。

(一) 單身邊塞を尋ねんとし、屬國の居延川を過ぐ (二) 飛蓬の如く中國の塞を出て、歸雁と共に胡地に入る (三)

不レ識二陽關路一。
新從二定遠侯一。
黄雲斷二春色一。
畫角起二邊愁一。
瀚海經年別。
交河出レ塞流。
須レ令二外國使一。
知レ飲二月支頭一。

陽關の路を識らず。(二)新に定遠侯に從ふ。(三)黄雲春色断え。畫角邊愁起る。(四)瀚海經年の別。交河塞を出でて流る。(五)須く外國の使をして。月支の頭に飲むことを知らしむべし。

(一)將軍に屬し、軍事を裁決する官 (二)定遠侯の如き將軍に從ひ、始めて外征す。(後漢の班超西域を征し、五十餘國を平げ、定遠侯に封ぜらる) (三)雪げの雲黄にして春の光なく、畫角(模様ある喇叭形の笛)の聲に邊愁起る (四)瀚海(また北海)の地遠く、年を重ぬる別れとなり、交河の水塞外に流る (五)漢書匈奴傳に「元帝車騎都尉韓昌、光祿大夫張猛をして匈奴と盟はしめ、老上單于破る所の月支王の頭を飲器とし、共に飲ましむ」と。君また外國に向ひ、武威を示すこと斯の如くなれ

絶域陽關道。
胡沙與二塞塵一。
三春時有レ雁。
萬里少二行人一。
苜蓿隨二天馬一。
蒲萄逐二漢臣一。
當レ令二外國懼一。
不三敢覓二和親一。

劉司直が安西に赴くを送る

絶域陽關の路。胡沙と塞塵と。(一)三春時に雁あり。萬里行人少なり。(二)苜蓿天馬に隨ひ。蒲萄漢臣を逐ふ。(三)當に外國をして懼れしむべし。敢て和親を覓めず。

(一)胡地寒きが故に三春の候も、雁のまれにうろつけるあり (二)漢の李廣利將軍、大宛を征し、馬・葡萄・苜蓿の種を取りて歸る、君の凱旋する時、亦之に似るものあらん (三)君威武を振ひ、外國を懼れしむべし、講和を求むるなかれ

古木無人逕。深山何處鐘。
泉聲咽危石。日色冷青松。
薄暮空潭曲。安禪制毒龍。

竹逕從初地。蓮峰出化城。
窗中三楚盡。林外九江平。
嫩草承趺坐。長松響梵聲。
空居法雲外。觀世得無生。

危石に咽び。日色青松に冷かなり。(三)薄暮空潭の曲。安禪毒龍を制す。

(一) 雍錄に「寺、長安南山子午谷の北にあり」 (二) 泉走りて、崖の石に咽び、日冷かに青松を照らす (三) 薄暮空潭のほとりに座禪し、諸煩惱を斷滅す。法苑珠林に「西方に不可依山あり、其寒、冬夏積雪、山中に池ありて毒龍之に居る、昔、五百の商人池側に止宿す、龍怒つて商人を仇殺す、槃陀王之を聞き、位を捨て、子と烏場國に向ひ、婆羅門呪を學ぶ、四年の中に普くその術を得、乃ち復、王位に卽き、池に就いて龍を呪ふ、龍化して人と爲り、悔化して王に向ふ、王乃ち之を捨つ」と、又、大智度論に、「大力の毒龍あり、眼を以て人を視れば弱者卽ち死す、氣を以て人に噓けば、强者亦死す」と。(龍を煩惱に喩ふ)

辨覺寺に登る

(一)竹逕初地よりし。蓮峰化城を出す。(二)窗中三楚盡き。林外九江平かなり。(三)嫩草趺坐を承け。長松梵聲響く。(四)空居法雲の外。世を觀じて無生を得たり。

(一) 竹の生えたる逕(こみち)より登れば、蓮峯の頂に寺あり(菩薩十地の第一著歩を初地といふ、借りて登山口の意) (二) 窗に三楚の地を望み、林外に九江(洞庭湖)の水平、かなり (三) 草軟く坐禪の敷物となり、誦經の聲、高き松に響く (四) 雲外清淨の地に人生を觀じ、寂滅無生の法理を悟る。(菩薩第十地を法雲地といふ、借りて山頂雲中の意)

平淡然判官を送る(一)

戸外一峰秀。
階前衆壑深。
夕陽連二雨足一。
空翠落二庭陰一。
看二取蓮花淨一。
方知不染心。

太乙近二天都一。
連山到二海隅一。
白雲廻レ望合。
靑靄入レ看無。
分野中峰變。
陰晴衆壑殊。
欲下投二人處一宿上。
隔レ水問二樵夫一。

不レ知二香積寺一。
數里入二雲峰一。

陽雨足連なり。空翠庭陰に落つ。(三)蓮花の淨を看取して。方に知る不染の心。

(一) 義公禪を修め、堂宇を築き淋しき林に依る (二) 驟雨の中に夕日さし、翠氣庭かげに滿つ (三) 蓮花の淨を見、汚に染まぬ心を想ふ

終南山　　王維

(一)太乙天都に近く。連山海隅に到る。(二)白雲望を廻せば合し。靑靄看に入れば無し。(三)分野中峰變じ。(四)陰晴衆壑殊なり。(五)人處に投じて宿せんと欲し。水を隔てて樵夫に問ふ。

(一) 太乙峰(終南山の別名)高く聳え、山脈東に走る (二) 振り返る間に、白雲、峰を罩め、眺むれば、靑靄消えてなし (三) 中峰を境に、南北、分野(星のやどりによる地の區劃)を異にす (四) 多くの壑(たに)、或は晴れ、或は陰る (五) 人家に宿りたく、溪流を隔てて樵夫に其所在を問ふ

(一)香積寺に過る

香積寺を知らず。數里雲峰に入る。古木人逕なく。深山何の處の鐘ぞ。(二)泉聲

臨レ風懷ニ謝公一。

八月湖水平。
涵レ虛混ニ太淸一。
氣蒸雲夢澤。
波撼岳陽城。
欲レ濟無ニ舟楫一。
端居耻ニ聖明一。
坐觀ニ垂釣者一。
徒有ニ羨レ魚情一。

義公習ニ禪寂一。
結レ宇依ニ空林一。

㊄ 北樓に登り、風景を眺めつゝ、謝公を懷ふを知る人なからん

洞庭に臨む(一)

孟浩然

八月湖水平かなり。(二)虛を涵して太淸に混ず。(三)氣は蒸す雲夢澤。波は撼す岳陽城。(四)濟らんと欲すれども舟楫なく。端居して聖明に耻づ。(五)坐に垂釣の者を觀て。徒に魚を羨む情あり。

㊀ 岳州府巴陵縣にあり、西、荊江と合し、東、靑草湖と連なる、橫亙七八百里、雲夢その傍にあり ㊁ 虛空をひたし、蒼天に連なる ㊂ 水氣、雲夢澤に蒸し、波、岳州府城を打ち搖かす ㊃ 渡らんとするも舟なき如く、任官の便を得ず、無爲に日を送り、聖明の君に愧づ ㊄ 垂釣の人を見、魚欲しと思ふ如く、徒に官職を望むのみ。古言「淵に臨んで魚を羨まんよりは、退いて網を結ぶに如かず」

義公が禪房に題す

(一)義公禪寂を習ひ。宇を結んで空林に依る。戶外一峰秀で。階前衆壑深し。(二)夕

見說蠶叢路。
崎嶇不レ易レ行。
山從二人面一起。
雲傍二馬頭一生。
芳樹籠二秦棧一。
春流遶二蜀城一。
升沈應二已定一。
不三必問二君平一。

江城如二畫裏一。
山曉望二晴空一。
雨水夾二明鏡一。
雙橋落二彩虹一。
人烟寒二橘柚一。
秋色老二梧桐一。
誰念北樓上。

(一)見説蠶叢の路。崎嶇として行き易からず。(二)山は人面より起り。雲は馬頭に傍うて生ず。(三)芳樹秦棧を籠め。春流蜀城を遶る。(四)升沈應に已に定まるべし。必ずしも君平に問はず。

(一)蜀の路、險しくして行き難し。（蠶叢は蜀の古帝王の名）(二)山險しく、人面を摩る如く峙つ (三)花樹、秦の棧(かけはし)を籠め、春流、蜀の錦官城を繞る (四)人生の運命はすでに定まれり、賣卜の君平に問ふを要せず。前漢の嚴遵字は君平、蜀郡の人、身を修め自ら保ち、成都市に卜筮す、百錢を得れば自ら養ふに足る、則ち肆を閉ぢ簾を下して老子を授く

秋宣城の謝朓が北樓に登る (一)

(二)江城畫裏の如し。山曉けて晴空を望む。(三)兩水明鏡を夾み。雙橋彩虹落つ。(四)人烟橘柚寒く。秋色梧桐老ゆ。(五)誰か念はん北樓の上。風に臨んで謝公を懷はんとは。

(一)六朝齊の詩人、宣城の内史たり、世に謝宣城といふ (二)江上の城、畫にある如し (三)宛・句の二溪、城を繞りて鏡の如く、鳳皇・濟川の二橋彩虹の落ちたるに似たり (四)人家に橘柚寒げに黄み、秋闌けて梧桐老ゆ

燕支黃葉落。
妾望自登ㇾ臺。
海上碧雲斷。
單于秋色來。
胡兵沙塞合。
漢使玉關回。
征客無二歸日一。
空悲蕙草摧。

青山橫二北郭一。
白水遶二東城一。
此地一爲ㇾ別。
孤蓬萬里征。
浮雲遊子意。
落日故人情。
揮ㇾ手自ㇾ茲去。
蕭蕭班馬鳴。

(一)燕支黃葉落つらん。妾望んで自ら臺に登る。(三)海上碧雲斷え。單于秋色來る。(四)胡兵沙塞に合し。漢使玉關より回る。征客歸る日なし。(五)空しく悲しむ蕙草の摧くるを。

㊀樂府題　㊁塞外燕支山　㊂海上路遠く、碧雲の影絕え、秋色胡地より來る　㊃胡軍龍沙塞を合圍し、朝使和議成らずして歸る　㊄蕙（香草）の秋風に凋む如く、妾の顏色衰ふるを悲しむ

友人を送る

青山北郭に橫り。白水東城を繞る。此の地一たび別を爲して。(一)孤蓬萬里に征く。(二)浮雲遊子の意。落日故人の情。(三)手を揮つてこれより去らば。蕭蕭として班馬鳴かん。

㊀蓬枯れて風に飛ぶ如く、萬里の地に行く　㊁遊子の心は浮雲の如く定まらず、故人の情は夕日の中に淋し　㊂君去らば馬も悲しみ鳴くならん。班（わかる）

友人の蜀に入るを送る

卒あり、思へらく、これ天牛なり、能く金を便せしむと、蜀王以て然りとし、卒千人を發し、壯丁の力あるもの五人をして牛を拽き道を披かしむ、後、秦その路に隨つて蜀を伐つ」 (六) 茂れる樹間に旗めぐり動き、山雲馬を拂ひ來る (七) 英主、時を得るは盛徳人を傾くるに由る、嶮岨は恃むべきにあらず (八) 晉書に「張載字は孟陽、博學にして文章あり、大康の初、蜀に至り父を省し、路劍閣を經、載、蜀人、險を恃み亂をなすを以て、因つて銘を著して之を誡む、益州の刺史張敏見て之を奇とし、遂ち表してその文を上る、武帝、劍閣山に鐫らしむ」と。余亦劍閣を經るも張載の才藻なきを愧づ

塞下曲（一）　李白

塞虜乘秋下。
天兵出漢家。
將軍分虎竹。
戰士臥龍沙。
邊月隨弓影。
胡霜拂劍花。
玉關殊未入。
少婦莫長嗟。

塞虜秋に乘じて下り。天兵漢家を出づ。將軍虎竹を分ち。（二）戰士龍沙に臥す。（三）邊月弓影に隨ひ。胡霜劍花を拂ふ。（四）玉關殊に未だ入らず。少婦長嗟する莫からんや。

（一）樂府題、征戍十五曲の一 （二）將軍符を賜ひて出征し、戰士、龍沙堆の沙漠に陣す。漢書文帝紀に、銅虎符竹使符、各々一半を分かち、左を京に留め、右を將軍に賜ふ」 （三）邊境の月、弓の如く、劍光霜に似たり （四）軍士外に戰ひ、玉門關内に入るものなし、空閨の少婦夜々怨しみ嗟くならん

秋思（一）

香閣東山下。
烟花象外幽。
懸燈千嶂夕。
卷幔五湖秋。
畫壁餘鴻雁。
紗窗宿斗牛。
更疑天路近。
夢與白雲遊。

劍閣横雲峻。
鑾輿出狩回。
翠屏千仞合。
丹嶂五丁開。
灌木縈旗轉。
仙雲拂馬來。
乘時方在德。
嗟爾勒銘才。

香閣東山の下。(一)烟花象外に幽かなり。燈を懸く千嶂の夕。(二)幔を卷く五湖の秋。(三)畫壁鴻雁を餘し。紗窗斗牛を宿す。更に疑ふ天路近きかと。夢に白雲と遊ぶ。

(一)寺、東山の麓にあり、風景俗界を離れて靜かなり　(二)幔(とばり)を捲き五湖(蘇州太湖の別名)の秋景を望む　(三)壁上に鴻雁の畫を留め、紗窗に斗星・牛星の影を宿す

蜀に幸し西のかた劍門に至る(一)

玄宗皇帝

(二)劍閣雲に横つて峻しく。(三)鑾輿出狩して回る。(四)翠屏千仞合し。(五)丹嶂五丁開く。(六)灌木旗を縈つて轉じ。仙雲馬を拂つて來る。(七)時に乘ずるは方に德に在り。(八)嗟爾す銘を勒するの才。

(一)天寶十四年、安祿山長安を陷れ、唐室殆んど危し、玄宗亂を避けて蜀に幸し、車を回して劍門に次る　(二)一統志に「劍州の北三十里にあり、兩岸峻拔、石を鑿ち閣を架し棧道を作る、連山嶮絶、之を劍閣といふ」　(三)天子、行幸して回る　(四)翠屏の如く、千仞の山重なる　(五)丹嶂(土石赤き山)嶮しき中に、一路を通ず。蜀王本紀に「秦の惠王蜀を伐たんと欲し、乃ち五石牛を刻し、金を其後に置く、其後蜀人之を見、以て牛能く金を便すとなす、養

舊館分江口。
淒然望落暉。
相逢傳旅食。
臨別換征衣。
昔記山川是。
今傷人代非。
往來皆此路。
生死不同歸。

涼風吹夜雨。
蕭瑟動寒林。
正有高堂宴。
能忘遲暮心。
軍中宜劍舞。
塞上重笳音。
不作邊城將。
誰知恩遇深。

（一）舊館分江の口。淒然として落暉を望む。相逢うて旅食を傳へ。別に臨んで征衣を換ふ。（四）昔記す山川の是なることを。今傷む人代の非なるを。（五）往來皆此路。生死歸を同じうせず。

（一）岳州の謫居より歸る　（二）河水分るゝ處に舊時の館あり　（三）曾て逢ひし時、高六、旅食を傳送し、換ふべき征衣を贈り與れたり　（四）山川昔の如きも、高六はすでに亡し　（五）往復の路のみ同じく、生死の運を同じうせず

幽州の夜飲（一）

涼風夜雨を吹き。蕭瑟として寒林を動す。（二）正に高堂の宴あり。能く遲暮の心を忘る。軍中宜しく劍舞すべし。（三）塞上笳音を重んず。（四）邊城の將とならずんば。誰か知らん恩遇の深きことを。

（一）北平の地、說、貶せられて都督たり　（二）高堂の宴により、老年衰邁の限なき憾を忘る　（三）邊塞の地、笳音を貴び、宴席にも吹奏す　（四）邊將となり、諸將士の厚遇を受け、天子恩遇の深きを知る

雲門寺の閣に宿す

孫逖

東壁圖書府。
西園翰墨林。
誦レ詩聞二國政一。
講レ易見二天心一。
位竊二和羹重一。
恩叨二醉酒深一。
載歌春興曲。
情竭爲二知音一。

墨に止る、史・玉、鳳に乘じて仙去す」(暗に公主夫妻に比す) 五 煙、適かに北渚を罩む

恩勅あつて麗正殿の書院に宴を賜ふ應制　　張説

(一)林の字を得たり

(二)東壁圖書の府。西園翰墨の林。(三)詩を誦して國政を聞き。易を講じて天心を見る。(四)位は和羹の重きを竊み。恩は醉酒の深きを叨にす。(五)載ち歌ふ春興の曲。情竭すは知音の爲なり。

一 韻字を採り、林の字にあたる。(第二句、西園翰墨の林と用ふ) 二 麗正殿に翰林の諸學士を集む。天文志に「東・壁二星は文籍を象る、天下圖書の府なり」又、魏志に、「陳思王、西園を鄴に置き、諸才子と夜遊、詩を賦す」 三 詩を誦して、民風を知り、國政を考へ、又、易を講じ、天意のある所を窺ふ 四 天下の重職に任じ、深き天恩を蒙る。說命に「若し和羹を作らば、爾たゞ鹽梅」詩經に「既に醉ふに酒を以てし、既に飽くに德を以てす」 五 春興の曲を歌ひ、情の限りを盡すは、天子の知遇厚き爲なり

(一)還つて端州驛に至る前に高六と別れし處なり

別業臨二青甸一。
鳴鑾降二紫霄一。
長筵鵷鷺集。
仙管鳳凰調。
樹接二南山一近。
煙含二北渚一遙。
承レ恩咸已醉。
戀賞未レ還レ鑣。

て應和して鳴らしむ」又、舊唐書方術傳に、「玄奘、貞觀の初め、西域に遊び、百餘國を經、悉く其國語を解す、十九年歸つて京師に至り、慈恩寺に住み、諸經を翻譯す、京城、人衆きを以て避靜せんとす、高宗勅して宜君山に移住せしむ」 (二) 三僧相伴ひて荊州の淨地に歸り、萬騎長安に餞す。(一乘は佛語、借りて一所の義に用ふ、通は四通の路、莊は六達の衢) (三) 離亭帝城に近く、行路天に達する程遠し (四) 杖鉢を携へて荊南に遊行し、渭北長安の人は、彼岸に渡る橋なきに同じ。(僧は衆生濟度の津梁) (五) 咸道正覺を得、帝都に歸るは何時ならん

長寧公主の東莊に宴に侍す (一)

李嶠

別業青甸に臨み。(二) 鳴鑾紫霄より降る。(三) 長筵鵷鷺集り。仙管鳳凰調ぶ。(四) 樹は南山に接して近く。(五) 煙は北渚を含んで遙かなり。恩を承けて咸已に醉ひ。戀賞して未だ鑣を還さず。

(一) 新唐書公主傳に「長寧公主は中宗の女なり、楊愼に下嫁す、第を西京に作る、右、都城に屬し、左、大道にのぞみ、山を築き池を浚ひ、帝及び后數々臨幸し、酒を置き詩を賦す」漢制に「帝女を公主となし、帝姉妹を長公主となし、姑を大長公主となす」 (二) 公主の別業、東郊に近く、乘興禁中より幸す (三) 百官列を正し、宴席に陪從す。鵷(鳳の屬)鷺(さぎ)、共に飛ぶに次序あり、小は大に先んぜず (四) 簫聲、鳳凰に似たり。列仙傳に「簫史、道を得、善く簫を吹く、秦の穆公、女弄玉を以て之に妻せ、遂に玉をして簫を吹いて鳳鳴を作さしむ、鳳あり、その

帳殿鬱崔嵬。仙遊實壯哉。曉雲連幕捲。夜火雜星回。谷暗千旗出。山鳴萬乘來。扈遊良可賦。終乏掞天才。

一乘歸淨域。萬騎餞通莊。就日離亭近。彌天別路長。荊南旋杖鉢。渭北限津梁。何日紆眞果。還來入帝鄕。

(一)帳殿鬱として崔嵬。仙遊實に壯なるかな。曉雲幕に連なつて捲き。夜火星に雜つて回る。(二)谷暗うして千旗出で。山鳴つて萬乘來る。(三)扈遊良に賦すべし。(四)終に掞天の才に乏し。

㊀ 高宗乾封元年正月、歷代帝王の例に循し、東、泰山に巡狩し、登封の禮を修む ㊁ 帳殿高く聳え、天子の幸遊壯觀を極む ㊂ 暗き谷間より千旗現はれ、諸山反響して鸞輿來る。(封禪志に、「漢武帝嵩山に登封す、山間に聲あり三たび萬歲を呼ぶ」と、暗にその意を用ふ) ㊃ 登封扈從の榮に浴し、賦を獻ずべきも、帝前に展ぶべき才識に乏し

沙門弘景道俊玄奘荊州に還るを送る應制(一)

一乘淨域に歸る。萬騎通莊に餞す。(二)日に就いて離亭近く。天に彌つて別路長し。(三)荊南杖鉢を旋らし。渭北津梁を限る。(四)何の日か眞果を紆うて。(五)還り來つて帝鄕に入らん。

㊀ 僧侶。佛祖備記に「禪師弘景、荊州玉泉寺に於て得度し、章安に依り、止觀を稟受す、天后より中宗に至るまて、凡そ三たび詔して宮に入り、供養せしめ、受戒師となる、後、乞うて山に歸り、帝自ら詩を賦し、李嶠等をし

明月高秋迥。
愁人獨夜看。
暫將弓並曲。
翻與扇俱團。
露濯清輝苦。
風飄素影寒。
羅衣一此鑒。
頓使別離難。

(一)明月高秋迥かなり。愁人獨夜看る。(二)暫く弓と並に曲り。翻つて扇と俱に團なり。露は清輝を濯いで苦え。(三)風は素影を飄して寒し。(四)羅衣一たび此に鑒て。頓に別離をして難からしむ。

㊀月夜、秋空遙かに澄み渡る　㊁暫く弓の如く曲り、やがて團扇の如く圓し　㊂風、樹葉を吹き、白き影を飄す　㊃羅衣（うすもの）の客、月を望み、別離の悲哀を感ず

崔融を送る

君王行出將。
書記遠從征。
祖帳連河闕。
軍麾動洛城。
旌旗朝朔氣。
笳吹夜邊聲。
坐覺烟塵掃。
秋風古北平。

(一)君王行く出でて將たり。(二)書記遠く征に從ふ。(三)祖帳河闕に連なり。軍麾洛城を動す。(四)旌旗朝に朔氣。笳吹夜邊聲。(五)坐に覺ゆ烟塵を掃ふことを。秋風の古北平。

㊀將軍武攸暨、嘗て王に封ぜらる　㊁崔融、書記となり、幕に參して從軍す　㊂別宴の帳（とばり）、伊闕に連なり、全軍一揮の旗、洛陽城を動す程に勇まし　㊃旌旗、朝に朔風に翻り、胡笳、夜、邊境の聲を傳ふ　㊄秋風淋しき北平郡に、胡兵の塵を一掃するならん

(一)登封に扈從する途中の作

宋之問

北斗挂二城邊一。南山倚二殿前一。
雲標金闕逈。樹杪玉堂懸。
半嶺通二佳氣一。中峯繞二瑞烟一。
小臣持獻レ壽。長此戴二堯天一。

北斗(二)城邊に挂り。南山殿前に倚る。雲標(三)金闕逈かに、樹杪玉堂懸る。半嶺佳氣を通じ。中峰瑞烟繞る。(四)小臣持して壽を獻じ。長く此に堯天を戴く。

㊀禁中の正殿、一殿にして三面ある意　㊁北斗星の分野、長安城に當る　㊂雲外に禁門高く、樹間に宮殿姿ゆ　㊃南山の翠色を以て帝壽の極りなきに比し、長く堯帝の如き聖天子を戴く

晉陵の陸丞が早春の遊望に和す(一)

獨有二宦遊人一。偏驚二物候新一。
雲霞出レ海曙。梅柳度レ江春。
淑氣催二黃鳥一。晴光轉二綠蘋一。
忽聞レ歌二古調一。歸思欲レ沾レ巾。

獨宦遊の人あつて。(二)偏に物候の新たなるに驚く。(三)雲霞海を出でて曙け。梅柳江を度つて春なり。(四)淑氣黃鳥を催し。晴光綠蘋を轉ず。(五)忽ち古調を歌ふを聞いて。歸思巾を沾さんと欲す。

㊀同じ詩の體にて作る　㊁地暖く、春の早きに驚く　㊂曉の雲霞、麗しく海に湧き、江の南北、梅咲き柳萌ゆ　㊃春和の氣、黃鶯をうながし啼かしめ、晴光、綠蘋(水草、萍の如く浮き葉圓し)にうつり動く　㊄君が詩を讀み、歸思深く涙流る。古調(古人の如き妙調の意)

康五が月を望んで懷ふところあるに和す

悠悠洛陽去。
此會在二何年一。

金天方肅殺。
白露始專征。
王師非レ樂レ戰。
之子愼レ佳レ兵。
海氣侵二南部一。
邊風掃二北平一。
莫下賣二盧龍塞一。
歸邀中麟閣名上。

り長く山川を繞る。箏（七絃）瑟（二十五絃）㊂酒宴夜を徹し、天の河、曉天に消ゆ ㊃余遠く洛陽に去らば、再び會飲すること難かるべし

崔著作の東征するを送別す

(一)金天方に肅殺。白露始めて專征す。(二)王師戰を樂しむに非ず。この子兵を佳みするを愼め。(三)海氣南部を侵し。邊風北平を拂ふ。(四)盧龍の塞を賣つて。歸つて麟閣の名を邀むるなかれ。

㊀秋天肅殺の氣を帶び、白露すでに下り、始めて胡兵を征す ㊁王師は好んで戰にふあらず、君もまた愼む所あれ。老子に云「佳兵は不祥」と ㊂北海の兵氣、南方を侵し、邊境の風、幽州北平郡を拂ふ、胡兵の使入は防がざるべからず ㊃魏の曹操、烏桓を討つ時、田疇、その間道捷徑を詐惑するを以て自ら率先して嚮導となり、備なきを襲つて大に之を破る、後曹操其功を賞せんと欲せしに、田疇固辭して曰く、我豈盧龍の塞を賣り、以て爵祿に易へんやと、君また功名を麒麟閣に留めんとし、妄に戰を好むなかれ

(一)蓬萊三殿に宴に侍し勅を奉じて終南山を咏ず　杜審言

兒女共沾ㇾ巾。

故鄕杳無ㇾ際。
日暮且孤征。
川原迷二舊國一。
道路入二邊城一。
野戍荒烟斷。
深山古木平。
如何此時恨。
噭噭夜猿鳴。

銀燭吐二青烟一。
金尊對二綺筵一。
離堂思二琴瑟一。
別路繞二山川一。
明月隱二高樹一。
長河沒二曉天一。

津あり、少府の行く地 (三) 人生知己あれば、天涯の遠きも比隣の如し (四) 岐路(別れ路)に臨み、めゝしき涙を流すなかれ。巾、(手巾、物を拭ふに用ふ)

晩に樂鄕縣に次る

陳子昂

故鄕杳として際なし。日暮且つ孤征す。(一)川原舊國に迷ひ。道路邊城に入る。(二)野戍荒烟斷え。深山古木平かなり。如何せん此の時の恨。(三)噭噭として夜猿鳴く。

(一) 戰後に川原荒れ、舊時の國とも見えず (二) 荒野に營戍淋しく、深山に古木隙なく茂る (三) 猿の聲

春夜友人に別る

銀燭青烟を吐き。(一)金尊綺筵に對す。(二)離堂琴瑟を思ひ。別路山川を繞る。明月高樹に隱れ。(三)長河曉天に沒す。(四)悠悠として洛陽に去らば。此の會何の年にか在らん。

(一) 金飾の酒器を美しき席に置き相對して坐す (二) 別筵に、妓をして琴瑟を弾かしめたりし、余が行路は、是よ

烽火照二西京一。
心中自不レ平。
牙璋辭二鳳闕一。
鐵騎繞二龍城一。
雪暗凋二旗畫一。
風多雜二鼓聲一。
寧爲二百夫長一。
勝レ作二一書生一。

（二）烽火西京を照し。心中自ら平かならず。（三）牙璋鳳闕を辭し。（四）鐵騎龍城を繞る。（五）雪暗うして旗畫凋み。（六）風多くして鼓聲雜る。（七）寧ろ百夫の長となるも。一書生となるに勝れり。

（一）樂府題、軍旅のことを詠ず（二）烽火（のろし）長安を照して胡軍の來るを報じ、心落着きなし（三）大軍征討に向ひ、牙璋（將旗）帝城を辭す（四）王師敵の龍城を圍む。晉書に「もと匈奴の築く所、東西三里、南北七里、塊、龍形あり」（五）雪降りて旗伸びず、其畫も凋みし如し（六）風頻に吹き、響鼓聲と雜る（七）軍中百夫の長となれば、功によりて封侯をも得べし、書生となりて塵間に身を委ぬるよりもよし

城闕輔二三秦一。
風烟望二五津一。
與レ君離別意。
同是宦遊人。
海內存二知己一。
天涯若二比鄰一。
無レ爲在二岐路一。

杜少府任に蜀州に之く　王勃

城闕三秦を輔し。風烟五津を望む。君と離別の意。同じく是れ宦遊の人なり。（二）海內知己を存し。（三）天涯比鄰の如し。（四）爲すなかれ岐路に在つて。兒女と共に巾を沾すことを。

（一）楚の項羽、秦を亡し、其地を別ちて三とし、三秦といふ、漢、都を建つるに及び、名づけて京兆・左馮翊・右扶風とし、三輔といふ、二人相別るゝ地（二）蜀の大江岷山より下り犍爲に至るに、白華・萬里・江首・涉頭・江南の五

東皐薄暮望。
徙倚欲ニ何依一。
樹樹皆秋色。
山山惟落暉。
牧人驅レ犢返。
獵馬帶レ禽歸。
相顧無ニ相識一。
長歌懷ニ采薇一。

卷之三

五言律詩

野望　王績

東皐薄暮に望む。(一)徙倚として何に依らんと欲す。樹樹皆秋色。(二)山山惟落暉。牧人(四)犢を驅りて返り。獵馬禽を帶びて歸る。(五)相顧みるに相識なし。長歌采薇を懷ふ。

㊀東の澤曲　㊁行きて進まざる貌　㊂諸山夕日の光を帶ぶ　㊃小牛　㊄世亂れて共に語るべき知己なく、隱棲したき心生ぜり。史記に「伯夷叔齊、武王、紂を伐つを諫めて用ひられず、義として周の粟を食はず、首陽山に隱れ、薇(わらびの類)を採りて之を食ひ、餓ゑて將に死せんとす、歌を作りて曰く、彼の西山に登つてその薇を採る、暴を以て暴に易へ、その非を知らず、神農虞夏忽焉として沒しぬ、我安にか適歸せん、嗟命の衰へたるかなと」

從軍行(一)　楊炯

曉幙紅襟燕。春城白頂烏。只來二梁上一語。不下向二府中一趨上。城頭坎坎鼓聲曙。滿庭新種櫻桃樹。桃花昨夜撩亂開。當レ軒發レ色映二樓臺一。十千兌得餘杭酒。二月春城長命杯。酒後留レ君待二明月一。還將二明月一送二君回一。

餘杭醉歌吳山人に贈る（一）　丁仙芝

曉幙紅襟（二）の燕。春城白頂の烏。（三）只梁上に來つて語り。府中に向つて趨らず。城頭坎坎（四）として鼓聲曙け。滿庭新に種う櫻桃樹。桃花昨夜撩亂（五）として開き。軒に當り色を發して樓臺に映ず。（六）十千兌へ得たり餘杭の酒。二月春城長命の杯。（七）（八）酒後君を留めて明月を待ち。還た明月を將つて君が回るを送らん。

㊀ 杭州に屬し、美酒を産す　㊁ 胸の赤き燕、頭の白き烏。（吳山人の人物、世に稀なるに比す）　㊂ 燕、梁上に囀る如く、吳山人は余が家に遊び、府中に仕官を求めず　㊃ 太鼓の鳴る音　㊄ 花の咲き亂るゝ貌　㊅ 十千錢の價を惜しまず、餘杭の美酒を買ふ　㊆ 長壽を祝ふ杯　㊇ 醉後、月を待ち、路を照らさせて君を送らん、緩かに飲み遊ぶべし

開石槨文。朱門無復張公子。霸亭誰畏李將軍。相顧百齡皆有待。居然萬化咸應改。桂枝芳氣已銷亡。柏梁高宴今何在。春去春來苦自馳。爭名爭利徒爾爲。久留郎署終難遇。空掃相門誰見知。當時一旦擅繁華。自言千載長驕奢。倏忽搏風生羽翼。須臾失浪委泥沙。黄雀徒巢桂。青門遂種瓜。黄金銷鑠素絲變。一貴一賤交情見。紅顏宿昔白頭新。脫粟布衣輕故人。故人有湮淪新知無意氣。灰死韓安國。羅傷翟廷尉。已矣哉歸去來。馬卿辭蜀多文藻。揚雄仕漢乏良媒。三冬自矜誠足用。十年不調幾邅迴。汲黯薪逾積。孫弘閤未開。誰惜長沙傅。獨負洛陽才。

り、その苦衷を知るものなし 五九 忽にして大鵬風に搏つて羽翼を張り、忽にして鯨魚波を失つて泥沙に苦しむ、人生の榮枯は計るべからず 六〇 成帝の時、童謠に云ふ「桂樹華さきて實らず、黄雀その巓に巢ふ、故(むかし)は人に羨まれ、今は人に憐まる」と 六一 秦の東陵侯邵平、秦滅びて布衣となり、瓜を長安の城東青門に種う 六二 黄金も鑠くることあり、白絲も染まることあり、人の交情は貴賤によりて改まる 六三 富貴を得るも、脫粟(精げざる飯)布衣を以て舊友を冷遇す 六四 舊友は不遇に終り、新友は意氣なく共に恃むに足らず 六五 韓安國、梁の孝王に事へ、中大夫となり、後法に坐し罪に抵る、獄吏田甲之を辱しむ、安國曰く、死灰また燃えざらんやと 六六 翟廷尉の門前雀羅を張るべく、羅久しくして損傷す 六七 萬事此の如し、早く家鄕に歸るに如かず 六八 司馬相如、蜀より出でて景帝に仕へ、文筆の才に富めり、自ら比す 六九 揚雄、漢の哀帝に仕へ、高位に昇る媒(なかだち)を得ず。(亦自ら比す) 七〇 東方朔は、三冬(三年に同じ)文史を學び、世の用をなすに足ると誇りしも、張釋之は、十年微官に滯り、少しも調選せられざりき。邅廻(行いて進まざる貌) 七一 汲黯帝に見えて曰ふ、陛下の羣臣を用ふるは薪を積むが如きのみ、後れて來る者上に居ると、余も亦後輩に先んぜらる 七二 孫弘漢の丞相となり、閣を開いて賢士を待ちたり、今の宰相にはこの事なし 七三 漢の賈誼年二十餘、文帝召して博士となし、才名洛陽に高し、後長沙王の太傅となり、空しく不遇に終りしを惜しむ。(また自ら比す)

延年女弟雙飛入。羅敷使君千騎歸。同心結縷帶。連理織成衣。春朝桂尊尊百味。秋夜蘭燈燈九微。翠幌珠簾不ニ獨映一。清歌寶瑟自相依。且論三萬六千是。寧知四十九年非。古來名利若ニ浮雲一。人生倚伏信難レ分。始見田竇相移奪。俄聞衛霍有ニ功勳一。未レ厭金陵氣。先

【二六】食膳に奢を極め、時の鐘を作つ【二七】美しき帳をはり、間數多き堂【二八】青漆にて塗り十二層の樓【二九】黃金の絡(馬の頸飾、おもづら)【三〇】香木の簾、柱を刺繡にて包み曲り繍の模樣をつく【三一】玉の垂木【三二】車馬劍佩の金玉【三三】楚人陸賈、常に公卿貴人の間に遊び、又千金をその五子に分ち、更るがはるその家に週りて遊ぶ【三四】陳遵、まことに客の車轄(くさび)を拔きて井に投じ、歸るを得ざらしむ【三五】趙皇后、李夫人と親しみその族、しきりに往來す【三六】蕭育朱博二人、親交を結び、進退を共にす【三七】禁城に日暮る【三八】車に紺の幰(まく)を張り、青牛に引かせ、脚を蹴立てて行く【三九】銀製の鉤のつる、娼婦攜へて桑を摘む【四〇】娼家には子女花の如し【四一】輕裘肥馬【四二】李延年、妹李夫人と武帝の寵を得【四三】婦女、常に貴人の意に隨ひ、羅敷(古樂府陌上桑の美人)の如き節操なし。(七言絶句、戯に趙使君の美人に贈るの詩參照)【四四】肉桂を酒に入れ、味を和す【四五】蘭膏に火を點じ、九微燈に燃す【四六】翠幌と珠簾と相映じ、清歌と寶瑟(こと)と聲を和す【四七】百年三萬六千日の安樂を貪り、蘧伯玉の如く五十にして四十九年の非を知るものなし【四八】老子に「禍は福の倚るところ、福は禍の伏すところ」と禍福は分別すべからず【四九】漢の田蚡竇嬰、互に權勢を擅にし要職を爭ふに當り、衛青霍去病武勳のために身を興せり【五〇】秦の始皇金陵に王氣あるを見、その厭滅を計りしも、身沒し、國また亡ぶ【五一】衛の靈公を沙丘に葬る時、土中に石槨あり、銘に曰く、其の子に馮らず、靈公奪つて之に里すと、死は始より免れ難し【五二】成帝の寵臣張放、朱門に榮えしも忽ち亡び、李廣將軍、匈奴に敗れて庶人となり、一亭の隊尉に辱めらる一榮一枯すべて斯の如し【五三】人皆百年の壽を希ふも、萬物忽ち舊貌を改む【五四】絶世の美人李夫人も、桂枝凋み香氣消ゆる如くに卒す【五五】漢の孝武帝、柏梁臺を作りて羣臣を宴し、七言の詩を作らしめしも、その跡すでになし【五六】春の來去隨する如く人は徒に名利を爭ふ【五七】漢の顏駟、文景武三帝の朝に歷仕し、長く郎署の職官に留る【五八】漢の魏勃、齊相曹參に見えんと欲し、常にその舍人の門外を掃き、因りて纔かに用ひらる、を得た

牕繡柱玉盤龍。繡柱璇題粉壁映。鏘金鳴玉王侯盛。王侯貴人多二近臣一。朝遊二北里一暮南鄰。陸賈分レ金將二燕喜一。陳遵投レ轄尙留レ賓。趙李經過密。蕭朱交結親。丹鳳朱城白日暮。青牛紺幰紅塵度。俠客金彈垂楊道。娼婦銀鉤採桑路。娼家桃李自芳非。京華遊俠事二輕肥一。

黄雀(六〇)徒に桂に巣くひ。青門(六一)遂に瓜を種う。黄金銷鑠して素絲變じ。一貴一賤交情見る。(六二)紅顏は宿昔白頭新に。脫粟布衣(六三)故人を輕んず。故人(六四)湮淪するあり。新知意氣なし。灰死す(六五)韓安國。羅傷す(六六)翟廷尉。(六七)已んぬるかな、歸去來。馬卿(六八)蜀を辭して文藻多く。揚雄(六九)漢に仕へて良媒に乏し。三冬(七〇)自ら矜る誠に用ふるに足るを。十年調せられず幾たびか邅迴す。汲黯(七一)薪いよいよ積み。孫弘(七二)閣未だ開かず。誰か惜しまん長沙の傅。獨洛陽の才を負ふことを。(七三)

一 帝京の壯觀を寫し、暗に奢侈の風を刺る　二 漢書に「金城千里、天府の國なり」天子親政の地　三 崤關・函谷關の嶮　四 鶉首座三星の分野（長安の地）に龍首山聳え、甸服侯服に連る。（天子の居方千里を甸服とし、その外五百里を侯服とす）　五 金木火水土の五星畿甸の空に集る　六 涇・渭・灞・滻・澇・潏・灃・滈の八水、この地を流る　七 塞堅く百人を二人にて防ぎ得　八 桂の香木の宮殿高く聳え、玉を鏤めし樓閣に對す　九 皇后の宮（山椒を泥に交ぜ壁に塗る）　一〇 多くの廣き街路城につゞく　一一 漢武帝建元年中に作りし臺　一二 四つ辻の街路禁城に向ふ　一三 左傳に「文物以紀レ之、聲明以發レ之」　一四 旌旗車服衣裳等の模樣、日月星等の天文に象る　一五 宮中守護の武官、謹みて香木の御階に侍す　一六 璧（たま）の如く圓き池、諸侯の學宮をうつす　一七 建章宮の上に銅鳳を置き、風に隨ひめぐる　一八 武帝承露盤の金莖聳ゆ　一九 宮中の秘書を藏むる閣　二〇 周回四十里、武帝の鑿ちて、水戰を習はせし池　二一 諸侯の邸　二二 諸王の居　二三 皇居の門扉　二四 外戚の邸　二五 高き塚

指鳳凰闕。劍履南宮入。簪纓北闕來。聲名冠二寰宇一。文物象二昭回一。鉤陳蕭二蘭𦬼一。璧沼浮二槐市一。銅羽應レ風廻。金莖承レ露起。校文天祿閣。習戰昆明水。朱邸抗二平臺一。黄扉通二戚里一。平臺戚里帶二崇闉一。炊レ金饌レ玉待二鳴鐘一。小堂綺帳三千戸。大道靑樓十二重。寶蓋雕鞍金絡馬。蘭

鳳朱城白日暮れ。(三八)靑牛紺幰紅塵度る。俠客の金彈垂楊の道。(三九)娼婦の銀鉤採桑の路。娼家の桃李自ら(四〇)芳菲。京華の(四一)遊俠輕肥を事とす。(四二)延年女弟雙飛して入り。(四三)羅敷の使君千騎歸る。同心結縷の帶。連理織成の衣。春朝の(四四)桂尊尊百味。秋夜の(四五)蘭燈燈九微。(四六)翠幌珠簾獨映ぜず。清歌寶瑟自ら相依る。(四七)しばらく論ず三萬六千の是。寧んぞ知らんや四十九年の非。古來名利は浮雲の若く。(四八)人生の倚伏は信に分ち難し。(四九)始めて見る田竇の相移奪するを。俄かに聞く衞霍の功勳あるを。(五〇)未だ厭せず金陵の氣。(五一)先づ開く石槨の文。(五二)朱門復た張公子なく。繡亭誰か畏れん李將軍。相顧るに百齡皆待つことあり。居然として萬化咸改むべし。(五四)桂枝の(五三)芳氣已に銷亡し。柏梁の高宴今何にか在る。(五六)春去り春來つて苦に自ら馳せ。(五五)名を爭ひ利を爭うて徒に爾爲す。(五七)久しく郎署に留つて終に遇せられ難く。(五八)空しく相門を掃うて誰にか知られん。當時一旦繁華を擅にし。自ら言ふ千載長く驕奢せんと。(五九)倏忽として風に搏つて羽翼を生じ。須臾に浪を失うて泥沙に委す。

山河千里國。城闕九重門。不レ覩二皇居壯一。安知二天子尊一。皇居帝里崤函谷。鶉野龍山侯甸服。五緯連レ影集二星纏一。八水分レ流横二地軸一。秦塞重關一百二。漢家離宮三十六。桂殿陰岑對二玉樓一。椒房窈窕連二金屋一。三條九陌麗二城隈一。萬戶千門平旦開。複道斜通鳷鵲觀。交衢直

(二)山河千里の國。城闕九重の門。皇居の壯なるを覩ずんば。安んぞ天子の尊きを知らん。(三)皇居帝里崤函谷。(四)鶉野龍山侯甸服。(五)五緯影を連ねて星纏に集り。八水流を分ちて地軸に横はる。(七)秦塞の重關一百二。漢家の離宮三十六。(八)桂殿陰(六)岑として玉樓に對し。(九)椒房窈窕として金屋に連る。(一〇)三條九陌城隈に麗き。萬戶千門平旦に開く。複道斜に通ず鳷鵲觀。(一一)交衢直に指す鳳凰臺。劍履南宮に入り。(一二)簪纓北闕より來る。(一三)聲名寰宇に冠たり。(一四)文物昭回に象る。(一五)鉤陳蘭巵に繡たり。(一六)璧沼槐市を浮ぶ。(一七)銅羽風に應じて廻り。(一八)金莖露を承けて起る。文を校す(一九)天祿閣。戰を習はす昆明水。(二〇)朱邸(二一)平臺に抗し。(二二)(二三)黃扉戚里に通ず。(二四)平臺戚里崇牖を帶び。(二五)金を炊ぎ玉を饌して鳴鐘を待つ。(二七)小堂の綺帳三千戶。(二八)大道の靑樓十二重。(二九)寶蓋雕鞍金絡馬。(三〇)蘭䆫繡柱玉盤龍。(三一)繡柱璇題粉壁映じ。(三二)鏘金鳴玉王侯盛なり。王侯貴人近臣多し。朝には北里に遊び暮には南鄰。(三三)陸賈金を分つて將に燕喜せんとし。(三四)陳遵轄を投じて尙ほ賓を留む。(三五)趙李經過密に。(三六)蕭朱交結親し。(三七)丹

去。擣衣砧上拂還來。此時相望不二相聞一。願逐二月華一流照レ君。鴻雁長飛光不レ度。魚龍潛躍水成レ文。昨夜閑潭夢二落花一。可レ憐春半不レ還レ家。江水流レ春去欲レ盡。江潭落月復西斜。斜月沈沈藏二海霧一。碣石瀟湘無レ限路。不レ知乘レ月幾人歸。落月搖レ情滿二江樹一。

(一)呉宮怨　衛萬

君不レ見呉王宮閣臨レ江起。不レ捲二珠簾一見二江水一。曉氣晴來雙闕間。潮聲夜落千門裏。句踐城中非二舊春一。姑蘇臺下起二黃塵一。祇今惟有二西江月一。曾照呉王宮裏人。

君見ずや、呉王の宮閣江に臨んで起るを。(二)珠簾を捲かずして江水を見る。曉氣晴れ來る雙闕の間。(三)潮聲夜落つ千門の裏。句踐城中舊春にあらず。(四)姑蘇臺下黃塵起る。(五)祇今唯西江の月のみあつて。曾て照す呉王宮裏の人。

(一)呉宮の廢滅を傷む。越絶書に「初め闔閭、臺を姑蘇山に起し闕を去る三十五里、夫差高くなして之を飾り、廣亙五里、宮妓千人、春宵宮を立て長夜の飲をなし、天池を作り池中に青龍舟を浮べ、日に西施と水嬉をなす」(二)簾を捲くに及ばず、坐ながら江水を望み得(三)夜の潮聲、諸門の中に聞ゆ(四)越王句踐の城すら昔の春にあらず、呉王の姑蘇臺は黃塵の踊るに任すのみ(五)今は西江の月のみ殘れり、この月曾ては呉王宮中の人を照ししなり

(一)帝京篇　駱賓王

無二纖塵一。皎皎空中孤月輪。江畔何人初見レ月。江月何年初照レ人。人生代代無二窮已一。江月年年望相似。不レ知江月照二何人一。但見長江送二流水一。白雲一片去悠悠。靑楓浦上不レ勝愁。誰家今夜扁舟子。何處相思明月樓。可レ憐樓上月徘徊。應レ照離人粧鏡臺。玉戶簾中卷不レ

憐むべし樓上に月徘徊し。(一一)應に照すべし離人の粧鏡臺。(一二)玉戶簾中卷けども去らず。擣衣砧上拂へども還た來る。(一三)此時相望めども相聞かず。願はくは月華を逐うて流れて君を照さん。(一四)鴻雁長く飛んで光度らず。魚龍潛躍して水文を成す。(一五)昨夜閒潭落花を夢む。憐むべし春半家に還らざるを。江水春を流して去つて盡きんと欲す。江潭の落月また西に斜なり。(一六)斜月沈沈として海霧に藏る。(一七)碣石瀟湘限なき路。知らず月に乘じて幾人か歸る。(一八)落月情を搖して江樹に滿つ。

一 樂府題　二 月、夕潮の生ずるにつれて昇る　三 波に隨ひ光動く　四 流、滯らず、都近く花ある地を繞る　五 月、花林を照し、霰の如く白し　六 月冴え、空中に霜氣流るゝ如く、汀上の白沙光に紛る　七 此處に初めて月を見しは誰ぞ、月が初めて照ししは誰ぞ　八 人生は代謝して已まざるも、月は年々同じやうに明し　九 白雲一片遙かに去り、靑楓浦上の客、愁に堪へず　一〇 今夜江上の扁舟にあるは誰ぞ、思婦明月に對する樓は何處ぞ　一一 思婦の樓に月さし入り、孤樓の粧鏡臺を照す　一二 光は、玉簾を捲くも去らず、砧の杵にて拂ふも來る　一三 遠く望むも消息なし、月に隨ひ水に流れて君を照したし　一四 鴻雁空を飛びて月光を遮り、魚深淵に躍りて水紋を生ず　一五 扁舟の客、昨夜閒潭（靜かなる潭）に落花を夢み、春半家に歸らざるを悲しむ　一六 春は旅中に暮れ、月は淋しく海霧に隠る　一七 東北の碣石、西南の瀟湘、路は極りなく遠し　一八 落月の光相思の情を搖し、花咲く江樹に滿つ

發路傍枝。年年爲客不到舍。舊國存亡那得知。胡塵一起亂天下。何處春風無別離。

春江潮水連海平。海上明月共潮生。灔灔隨波千萬里。何處春江無月明。江流宛轉遶芳甸。月照花林皆似霰。空裏流霜不覺飛。汀上白沙看不見。江天一色

國の存亡那ぞ知るを得ん。(三)胡塵一たび起つて天下亂れ。何の處の春風か別離なからん。

(一) 去年は萍の如く君が家に寄食し、今年は洪州に客路の花を見る (二) 年々客となりて家に歸らず、故國の存亡も知るに由なし (三) 胡塵(安祿山の亂)起り、人々その居に安んぜず、春風に別離の愁多し、獨り余のみにはあらず

春江花月の夜 (一)

張若虛

春江の潮水海に連つて平かなり。(二)海上の明月潮と共に生ず。(三)灔灔として波に隨ふ千萬里。何の處か春江月明なからん。(四)江流宛轉として芳甸を繞り。(五)月は花林を照して皆霰に似たり。(六)空裏の流霜は飛ぶを覺えず。汀上の白沙は看れども見えず。江天一色纖塵なし。皎皎たり空中の孤月輪。(七)江畔何人か初めて月を見る。江月何の年か初めて人を照らす。(八)人生代代窮り已むことなく。江月年年望んで相似たり。知らず江月は何人をか照す。但見る長江の流水を送るを。(九)白雲一片去つて悠悠。青楓浦上愁に勝へず。(一〇)誰が家ぞ今夜扁舟の子。何の處か相思ふ明月の樓。

後相思復何益。茱萸灣頭歸路賒。願君且宿黄公家。風光若レ此人不レ醉。參差辜二負東園花一。

秋風鳴二桑條一。草白孤兎驕。邯鄲飲來酒未レ消。城北原平掣二皂鵰一。射殺空營兩騰虎。迴二身卻月一佩二弓䩪一。

去年燕巣主人屋。今年花

らざるべし　㊂ 君が歸路は茱萸灣上に遙かなり、暫く留りて醉を盡し給へ　㊃ 世説に「王濬沖尚書令となり、公服を著け軺車に乘り、黄公の酒壚の下を經、顧みて後車の客に謂ひて曰く、吾昔嵆叔夜阮嗣宗と共に此壚に飲み、竹林の遊、亦その末に預る、今日之を見れば、邈として山河の如し」　㊄ 春に對して醉はずんば、樂事空しく過ひ、東園の花にも負くこととならん

城傍曲（一）　王昌齡

秋風桑條を鳴し。（二）草白うして狐兎驕る。（三）邯鄲に飲み來つて酒未だ消えず。城北原平かにして皂鵰を掣す。（四）射殺す空營の兩騰虎。身を卻月に迴らして弓䩪を佩ぶ。

㊀ 樂府題、射獵を詠ず　㊁ 草枯れて狐兎跳ね躍る　㊂ 邯鄲の市にて飲み、醉未だ醒めず、城北に皂鵰（はやぶさ）を使ひて射獵す　㊃ 陣營に躍り狂へる二虎を射殺し、身をそらし、卻月（三日月）の下に、弓を携へ歸る（弓の形新月に似たる意を含む）

洪州の客舍より柳博士芳に寄す　薛業

（一）去年燕巣くふ主人の屋。今年花發す路傍の枝。（二）年年客となつて舍に到らず。舊

五侯不レ待レ客。羨君不レ入二五侯宅一。如今七貴方自專。羨君不レ過二七貴門一。丈夫會應レ有二知己一。世上悠悠安足レ論。

らん。

(一)君は去年科擧に應じ、策文を上りしも採用せられず、今他家に寄食す。淹留（逗留に同じ）(二)五侯に比すべき今の諸侯は客を禮遇する心なし（漢元帝の河平二年、王譚を平阿侯とし、商王を成都侯とし、王立を紅陽侯とし、王根を曲陽侯とし、王逢時を高平侯とし、五人同日に封ぜられ、世に五侯といふ）(三)七貴に比すべき今の貴人はたゞ權威を專にす。（漢の呂氏霍氏上官氏趙氏丁氏傅氏の六氏、各々后妃の族たるを以て列侯となり、權威並に熾なり、概稱して七貴といふ）(四)丈夫は必ず知己ありて心を慰むべし、世に賤群多きが如きは、深く憂ふるに足らず

湖中酒に對する作

夜坐不レ厭湖上月。晝行不レ厭湖上山。眼前一樽又長滿。心中萬事如二等閑一。主人有レ黍萬餘石。濁醪數斗應レ不レ惜。即今相對不レ盡レ歡。別

夜坐厭はず湖上の月。晝行厭はず湖上の山。眼前の一樽又長に滿つ。(一)心中萬事等閑なるが如し。主人黍あり萬餘石。(二)濁醪數斗應に惜まざるべし。即今相對して歡を盡さずんば。(三)別後相思ふとも復た何の益あらん。(四)茱萸灣頭歸路賒かなり。(五)願はくは君しばらく宿せよ黃公の家。風光此の若くにして人醉はずんば。參差として東園の花に辜負せん。

(一)酒を飲めば胸中の愁を忘るゝ如し (二)主人は富みて萬餘石の黍を藏し、濁酒數斗を醸するは別に惜しむに足

能令三君心不二自保一。北園新栽桃李枝。根株未レ固何轉移。成レ陰結レ實君自取。若問二傍人一那得レ知。

去年上策不レ見レ收。今年寄食仍淹留。羨君有レ酒能便醉。羨君無レ錢能不レ憂。如今

(一) 樂府題、讒に遇ひ、黜けられしを傷み、人生を孟門山の陰に喩ふ (二) 續齊諧記に「楊寶年九歳、時に華陰山の北に至り、一黄雀、鴟梟に搏墜せられ、螻蟻に困しめらるゝを見、之を取りて歸り、巾箱中に置き黄花を食ましむ、百餘日にして羽毛成り飛び去る、その夜黄衣の童子あり、寶に向つて再拜して曰く、我は西王母の使者なり、君の仁愛救拯、實に成濟を感ず、白環四枚を以て寶とし與へ、君の子孫をして三事に登らしめん」と (三) 余また、君に報いんとせしに、却つて讒誣を試み、黄雀を彈射する如きは何ぞや (四) 主公は魏の平原君の如く、日々缸罇(さかだる)の美酒を酌み、衆賓を會して遊ぶ (五) 滿座、皆忠義の人の如く、中に讒者あらんとは思はざりき (六) 讒諛の言は繰返すべきものにあらず、遂に主公の心を動し、忠臣を憎むに至らしむ (七) 新に桃李を栽ゑ、根の未だ固からざるに他に移すはよき事にあらず (八) 如何なる桃李がよく繁り、又よく美果を結ぶかは、主公自ら判別するを要す、傍の佞人に問はば、却つて正を邪となし、眞價を誤ることあらん

喬林に贈る　張謂

去年上策して收められず。今年寄食して仍ほ淹留す。羨む君が酒あれば能く(一)便ち酔ふことを。羨む君が錢なきも能く憂へざることを。如今(二)五侯は客を待たず。羨む君が五侯の宅に入らざるを。如今(三)七貴は方に自ら專にす。羨む君が七貴の門を過ぎざるを。(四)丈夫かならず應に知己あるべし。世上悠悠安んぞ論ずるに足

終南有二茅屋一。前對二終南山一。終年無レ客長閉レ關。終日無レ心長自閑。不レ妨飲レ酒復垂レ釣。君但能來相往還。

黄雀銜二黄花一。翩翩傍二簷隙一。本擬レ報二君恩一。如何反彈射。金罍美酒滿座春。平原愛レ才多二衆賓一。滿堂盡是忠義士。何意得レ有二讒諛人一。讒言反復那可レ道。

（一）終南に茅屋あり。前は終南山に對す。（二）終年客なく長く關を閉し。終日心なく長く自ら閑なり。妨げず酒を飲んでまた釣を垂るゝを。（三）君たゞ能く來つて相往還せよ。

(一) 終南山の麓、王維輞川の別墅　(二) 客なく、常に門を閉づ　(三) たゞ君のみよく往來せよ

（一）孟門行

崔顥

（二）黄雀黄花を銜み。翩翩として簷隙に傍ふ。本、（三）君恩に報いんと擬す。如何ぞ反つて彈射する。（四）金罍の美酒滿座の春。平原才を愛して衆賓多し。（五）滿堂盡く是れ忠義の士。何ぞ意はん讒諛の人あるを得んとは。（六）讒言反覆那ぞ道ふべき。能く君心をして自ら保ぜざらしむ。（七）北園新に栽う桃李の枝。根株未だ固からず何ぞ轉移せん。（八）陰を成し實を結ぶは君自ら取れ。若傍人に問はば那ぞ知ることを得ん。

多ニ愁夢一。向レ月胡笳誰喜レ聞。烏孫腰間佩ニ兩刀一。刃可レ吹レ毛錦爲レ帶。握中枕宿穹廬室。馬上割飛蠮螉塞。執レ之魍魎誰能前。氣凜淸風沙漠邊。磨用ニ陰山一片玉一。洗將ニ胡地獨流泉一。主人屛風寫ニ奇狀一。鐵鞘金環儼相向。回レ頭瞪レ目時一看。使三予心在ニ江湖上一。

(一)崔五丈が圖屛風、烏孫の佩刀を賦し得たり　李頎

烏孫腰間に兩刀を佩ぶ。(二)刃毛を吹くべく錦を帶となす。(三)握中枕宿す穹廬の室。馬上割飛す蠮螉塞。(四)之を執れば魍魎誰か能く前まん。氣は凜たり淸風沙漠の邊。磨くには陰山一片の玉を用ひ。洗ふには胡地獨流の泉を將てす。(五)主人屛風に奇狀を寫し。鐵鞘金環儼として相向ふ。(六)頭を回らし目を瞪りて時に一看すれば。予が心をして江湖の上に在らしむ。

(一) 崔氏の屛風に種々の珍器を畫く、その中にて烏孫王の佩刀を詠ず、烏孫は朔北の部落、漢代に強盛を極む (二) 刃鋭く、毛を上に置き吹けば切るべし、錦をさげ緒とす (三) 刀を握りて、穹廬(天幕張り)の中に眠り、又振りかざし蠮螉塞のあたりに走る (四) 怪鬼も懼れて進まず、凜然たる氣は沙漠の邊に淸風を生ず (五) 崔氏の屛風にその奇狀を寫し、大刀と小刀と圖上に相對す。鞘(さや)環(わ) (六) 圖を見る時は、かゝる名刀を佩び、江湖(廣き世の中)を周遊したき心生ず

張五弟に答ふ　王維

列卿御史尙書郎。朝回花底恒會レ客。花撲二玉缸一春酒香。

君不レ聞胡笳聲最悲。紫髯綠眼胡人吹。吹レ之一曲猶未レ了。愁殺樓蘭征戍兒。涼秋八月蕭關道。北風吹斷天山艸。崑崙山南月欲レ斜。胡人向レ月吹二胡笳一。胡笳怨兮將レ送レ君。秦山遙望隴山雲。邊城夜夜

すべきものなし ㊂ 朝廷より歸り、常に客を會して花下に宴す ㊃ 落花翻りて玉の缸(さかづき)を攜ち、春酒更に香しさを添ふ

胡笳の歌、顏眞卿使して河隴に赴くを送る

君聞かずや胡笳の聲最も悲しきを。紫髯綠眼の胡人吹く。之を吹いて一曲猶ほ未だ了らず。(一)愁殺す樓蘭の征戍兒。涼秋八月(二)蕭關の道。北風吹き斷つ(三)天山の艸。(四)崑崙山南月斜ならんと欲す。胡人月に向つて胡笳を吹く。(五)胡笳の怨將に君を送らんとす。秦山遙かに望む隴山の雲。邊城夜夜愁夢多し。(七)月に向つて胡笳誰か聞くことを(六)喜ばん。

㊀ 胡笳の聲、樓蘭(西域都護國の別名)遠征の健兒を愁へしむ(殺は强勢修辭) ㊁ 秦の北廻、河隴に行く要道 ㊂ また尋山 ㊃ また建末達山 ㊄ 胡笳の聲怨むが如く、余は北側を以て君を送らん ㊅ 秦山(秦關の地)より隴山の雲を望めば、前途はるかにして遠からん ㊆ 月に向ひ、胡笳を聞くを喜ぶものなし、されど君は王命を奉じて萬里に使す、艱苦を辭せず心丈夫にあれかし

襲鍾還忝二千石。愧附東西南北人。

下レ馬登二鄴城一。城空復何見。東風吹二野火一。暮入二飛雲殿一。城隅南對二望陵臺一。漳水東流不二復回一。武帝宮中人去盡。年年春色爲レ誰來。

今年花似二去年好一。去年人到二今年一老。始知人老不レ如レ花。可レ惜落花君莫レ掃。君家兄弟不レ可レ當。

古鄴城に登る（一）　　岑參

馬より下つて鄴城に登るに。城空しうして復た何をか見る。東風野火（二）を吹いて。暮に飛雲殿に入る。城隅、南、望陵臺（三）に對し。漳（四）水東流して復た回らず。武帝の宮中人去り盡し。年年春色誰が爲にか來る。

（一）魏の武帝曹操の城　（二）野に立つ怪火　（三）また銅雀臺、大銅雀を鑄、高さ一丈五尺、之を樓頭に置く　（四）漳水は東流して回らず、魏の盛運も再び見難し

韋員外が家の花樹の歌

今年の花は去年の好きに似たり。去年の人は今年に到つて老ゆ。始（一）めて知る人老いて花に如かざるを。惜しむべきの落花君掃ふことなかれ。君家（二）の兄弟は當るべからず。列卿御史尙書郎。（三）朝より回つて花底恒に客を會す。（四）花は玉缸を撲つて春酒香し。

（一）少年の時は再び來らず、花の幾度か春に逢ふに若かず　（二）韋君の兄弟は列卿・御史尙書郎など富貴榮達匹敵

索。以茲感歎
辭舊遊。更於
時事無所求。
且與少年飲
美酒。往來射
獵西山頭。
人日題詩寄
草堂。遙憐故
人思故鄉。柳
條弄色不忍
見。梅花滿枝
空斷腸。身在
南蕃無所預。
心懷百憂復
千慮。今年人
日空相憶。明
年人日知何
處。一臥東山
三十春。豈知
書劍老風塵。

に疎し (七) 之を歎きて舊交を絶ち、世事に就きて欲望する所なし (八) たゞ邯鄲の少年と美酒を飲み、共に西山に射獵せんとす、少年の交情は、世人に比して、頼もしきものなり

人日杜二拾遺に寄す (一)

人日詩を題して草堂に寄す。遙かに憐む故人の故鄉を思ふを。(二)柳條色を弄して見るに忍びず。梅花枝に滿ちて空しく腸を斷つ。(三)身は南蕃に在りて預るところなく。心に懷く百憂復た千慮。今年人日空しく相憶ひ。明年人日知らんや何の處ぞ。(四)一臥東山三十春。豈知らんや書劍風塵に老いんとは。(五)龍鍾また忝うす二千石。(六)愧づ爾東西南北の人。

(一) 正月七日、杜甫に寄す。荊楚歲時記に「正月一日を雞とし、二日を狗とし、三日を豕とし、四日を羊とし、五日を牛とし、六日を馬とし、七日を人とし、八日を穀とす」 (二) 柳青く、梅花美しきも、愁多くして見るに忍びず (三) 南蕃蜀中に貶せられ、萬事預り知らざるべきに、種々の憂は却つて盡きず (四) 曾て東山に棲み、閑居三十年書劍を友とし、世上の煩累に老いんとは思はざりき (五) 老衰の身にて、また郡守二千石の俸祿を受く (六) 官に繫がれ東西南北去留自由なる君に愧づ

幹惟畫レ肉不レ畫レ骨。忽使二驊騮氣凋喪一。將軍善畫蓋有レ神。必逢二佳士一亦寫レ眞。卽今漂泊干戈際。屢貌尋常行路人。途窮反遭二俗眼白一。世上未レ有レ如二公貧一。但看古來盛名下。終日坎壈纏二其身一。

邯鄲少年行

高適

邯鄲城南遊俠子。自矜生二長邯鄲裏一。千場縱レ博家仍富。幾處報レ讐身不レ死。宅中歌笑日紛紛。門外車馬如レ雲屯。未レ知肝膽向レ誰是。令三人却憶二平原君一。君不レ見今人交態薄。黃金用盡還踈

(一)邯鄲城南の遊俠子。自ら矜る邯鄲の裏に生長すと。(二)千場博を縱にして家仍ほ富み。幾處か讐を報じて身死せず。(三)宅中の歌笑日に紛紛。門外の車馬雲の如く屯る。(四)未だ知らず肝膽誰に向つて是なるを。(五)人をして却つて平原君を憶はしむ。(六)君見ずや今人交態の薄きを。黃金用ひ盡せば還た踈索す。(七)玆を以て感歎して舊遊を辭し。更に時事に於て求むる所なし。(八)しばらく少年と美酒を飲み。往來射獵せん西山の頭。

(一)趙都繁華の地、古來遊俠の少年多し (二)處々に博奕す (三)日々宴樂し、客の集ること雲の如し (四)その中にて、肝膽相照し、堅く交るべきは誰ぞ (五)古の公子平原君を想ひ易し。史記に「平原君趙勝は趙の諸公子なり、諸子中、勝最も賢、賓客を喜ぶ、蓋、至る者數千人」 (六)今人の交情の薄きを見よ、黃金盡くれば、情誼忽ち

酣戰ᅳ。先帝天馬玉花驄。畫工如レ山貌不レ同。是日牽來赤墀下。迥立ニ閶闔ᅳ生ニ長風ᅳ。詔謂將軍拂ニ絹素ᅳ。意匠慘澹經營中。斯須九重眞龍出。一ニ洗萬古凡馬ᅳ空。玉花卻在ニ御榻上ᅳ。榻上庭前屹相向。至尊含レ笑催レ賜レ金。圉人太僕皆惆悵。弟子韓幹早入レ室。亦能畫レ馬窮ニ殊相ᅳ。

まれ。世上未だ公の貧しきが如くなるあらず。但看よ(二二)古來盛名の下。終日坎壈の其身に纏ふことを。

一 彩色畫 二 將軍は魏の武帝曹操の裔、今は庶人たるも、家門貴し 三 英雄割據の世はすでに過ぎしも、文藝風流の道は、なほ將軍に傳れり 四 名は鑠、晉の汝陽の太守李矩の妻、最も隸書を善くす 五 右將軍會稽の內史王羲之、始め衞夫人に學び、書名世に傳はる 六 終に身を丹青に委ね、老を數へず、富貴を輕んず 七 開元年中、玄宗に召され、屢々南薰殿(闕內の正殿)に上る 八 時に凌烟の功臣の肖像色褪し、顏貌明かならざりしに將軍筆を加へ、新しき光彩を生ず 九 畫中の良相は進賢冠を戴き、武官は大羽箭を帶ぶ 一〇 就中、褒國公段志玄、鄂國公尉遲敬德の二人殊に勇しく、酣戰中より歸り來れる如し 一一 玉花驄といふ馬あり、先帝愛重の名馬にして、多くの畫工に畫かしめしも、終に眞似を得たるものなし 一二 この日赤墀(殿上階上の地、丹漆を塗る)の下に牽き來り、迥かに立たしむれば、宮闕(天子の城門)自ら風を生ぜり 一三 將軍に揮毫の詔下り、苦心慘憺す 一四 暫くにして眞の駿馬描かれ、古來の凡馬は、すべて見るに足らず 一五 畫馬天子の御榻近く置かれ、庭上の眞馬と相對す 一六 將軍に賞金を賜ひ、圉人太僕(主馬寮の官)みな羨み且つ悲しむ 一七 弟子韓幹、また畫道の蘊奧を極め、巧に馬を畫く 一八 たゞ韓幹は外貌のみを畫き、俊骨の神を寫さず、天馬の氣勢を現し難し 一九 將軍は眞に畫馬の名手なり、もし又、會心の士に逢はば、其風貌をも寫すべし 二〇 今亂世となりて零落し、凡人の肖像などを描き生活を營く 二一 俗人の眼には、名畫も却つて賞翫せられず、金を得難くして困窮す 二二 古來名聲の盛なるものは、坎壈不遇に陷り易く、同情すべき事どもなり

庶爲二清門一。英雄割據雖レ已矣。文采風流今尚存。學レ書初學二衞夫人一。但恨無レ過二王右軍一。丹青不レ知老將レ至。富貴於レ我如二浮雲一。開元之中嘗引見。承レ恩數上南薫殿。凌煙功臣少二顏色一。將軍下レ筆開二生面一。良相頭上進賢冠。猛將腰間大羽箭。褒公鄂公毛髮動。英姿颯爽來二

も。文采風流今尚ほ存す。書を學んで初め(四)衞夫人を學ぶ。但恨む(五)王右軍に過ぐることなきを。丹青知らず老の將に至らんとするを。富貴我に於て浮雲の如し。(七)開元の中嘗て(六)引見す。恩を承けて數〻上る南薫殿。(八)凌煙の功臣顏色少し。將軍筆を下して生面を開く。(九)良相頭上の進賢冠。猛將腰間の大羽箭。(一〇)褒公鄂公毛髮動き。英姿颯爽として酣戰より來る。先帝の天馬玉花驄。畫工山の如く貌すれども同じからず。この日牽來る(一一)赤墀の下。迥かに閶闔に立つて長風を生ず。(一二)(一三)詔して謂ふ將軍絹素を拂へと。意匠慘澹たり經營の中。(一四)斯須に九重眞龍出づ。萬古の凡馬を一洗して空し。(一五)玉花卻つて御榻の上に在り。榻上庭前屹として相向ふ。至尊笑を含んで金を賜ふことを催し。(一六)圉人太僕皆惆悵す。(一七)弟子韓幹早く室に入り。亦よく馬を畫いて殊相を窮む。(一八)幹惟肉を畫いて骨を畫かず。忍んで驊騮をして氣凋喪せしむ。(一九)將軍の善畫蓋し神あり。必ず佳士に逢つて亦眞を寫さん。(二〇)卽今漂泊す干戈の際。屢〻貌す尋常行路の人。(二一)途窮り反つて俗眼に白

沙。其餘七匹亦殊絶。迥若三寒空動二烟雪一。霜蹄蹴踏長楸間。馬官厮養森成レ列。可レ憐九馬爭二神駿一。顧視清高氣深穩。借問苦心愛者誰。後有二韋諷一前支遁。憶昔巡二幸新豐宮一。翠華拂レ天來向レ東。騰驤磊落三萬匹。皆與二此圖一筋骨同。自三從獻レ寶朝二河宗一。無三復射二蛟江水中一。君不レ見金粟堆前松柏裏。龍媒去盡鳥呼レ風。

追ひ來りて揮毫を求む　（七）貴族名門も將軍の畫を得て屏風とし、新に光彩あるを覺ゆ　（八）韋諷錄事のために新圖を作り、九馬を描ける中、二馬は勝れて勇し、一は太宗愛養の拳毛騧、一は將軍郭子儀拜賜の獅子花　（九）共に一騎、萬騎に當る名馬にて、縞素（ゑぎぬ）の色、漠々たる風沙に似たり　（一〇）他の七馬も、極めて勇しく、寒空に烟る雪を蹴立つる如し　（一一）畫中の馬は堅き蹄を以て楸（ひさぎの並木）の間を走り、馬官厮養（馬丁）等、列をなして進む　（一二）九馬、駿を爭ひ、姿氣高く、且つ落着けり　（一三）古來名馬を愛せるもの、前には六朝の僧支遁あり、後には韋諷錄事あり　（一四）玄宗曾て新豐宮（驪山の麓）に幸し、翠羽を飾れる旗、空に翻りて東す　（一五）騰り馳せたる多くの馬は、筋骨すべてこの圖の如くなりき　（一六）既にして玄宗崩じ、爾後行幸の事なし。穆天子傳に「天子西征し八龍の駿に馭し、陽紆の山に至る、馮夷河伯の都居するところ、是を河宗氏となす、天子璧を沈めて禮す」と、既にして歸り、幾もなくして崩ず。又前漢書に「元封五年、漢武尋陽に至り、潯陽より江に浮び、親ら蛟を江中に射之を獲たり、舳艫千里、樅陽にせまつて出づ」　（一七）今や駿馬も何處へか去り、金粟堆の陵には鳥悲しげに風に呼ぶのみ。舊唐書に「明皇（玄宗）嘗て睿宗の橋陵に幸し、金粟山の岡を見る龍盤虎踞の勢あり、侍臣に謂つて曰く、吾千秋萬歲の後こゝに葬れと、升遐（崩去）に及び、群臣、先旨に遵つて葬る」

丹青の引、曹將軍霸に贈る

將軍魏武之子孫。於レ今爲レ

（一）將軍は魏武の子孫。今に於て庶たれども淸門たり。（二）英雄の割據は已みぬと雖

眞乘黄。曾貌先帝照夜白。龍池十日飛ニ霹靂ー。內府殷紅瑪瑙盤。婕妤傳レ詔才人索。盤賜ニ將軍ー拜舞歸。輕紈細綺相追飛。貴戚權門得ニ筆跡ー。始覺屏障生ニ光輝ー。昔日太宗拳毛騧。近時郭家獅子花。今之新圖有ニ二馬ー。復令ニ識者久嘆嗟ー。此皆騎戰一敵レ萬。縞素漠漠開ニ風

追飛す。貴戚權門筆跡を得て。始めて覺ゆ屏障に光輝を生ずるを。昔日太宗の拳毛騧。(七)近時郭家の獅子花。(八)今の新圖に二馬あり。復た識者をして久しく嘆嗟せしむ。これ皆騎戰すれば一萬に敵す。縞素漠漠として風沙を開く。その餘の七匹また殊絕。(九)迥として寒空の烟雪を動すが若し。(一一)霜蹄蹴踏す長楸の間。(一〇)馬官厮養森として列を成す。(一二)憐むべし九馬神駿を爭ひ。顧視清高にして氣深穩。(一三)借問す苦心愛する者は誰ぞ。後には韋諷あり前には支遁。(一四)憶ふ昔新豐宮に巡幸せしを。翠華天を拂うて來つて東に向ふ。騰驤磊落三萬匹。(一五)皆此圖と筋骨同じ。寶を獻じて河宗に朝してより。(一六)復た蛟を江水の中に射るなし。(一七)君見ずや金粟堆前松柏の裏。龍媒去り盡して鳥風に呼ぶ。

㊀ 名は覇、魏の曹操の後 ㊁ 名は緒、太宗の猶子、才藝多く、よく馬を描く ㊂ 曹將軍の妙筆により、人間また名馬の姿を見るを得。符瑞圖に「騰黄は神馬なり、色黄、一名は乘黄、肉角あり」 ㊃ 曾て先帝(玄宗)の愛馬照夜白を畫きし時は、龍池に雷鳴起り、飛龍現はるゝこと十日に及べり ㊄ 賞として深紅の瑪瑙盤(めなうの皿)を賜ひ、婕妤才人(女官)に命じ、內府より取出さしめらる ㊅ 諸方より輕紈細綺(美しき絹)を贈物とし、將軍を

翻身向天仰射雲。一箭正墮雙飛翼。明眸皓齒今何在。血汚遊魂歸不得。清渭東流劍閣深。去住彼此無消息。人生有情淚沾臆。江水江花豈終極。黃昏胡騎塵滿城。欲往城南忘城北。

國初以來畫鞍馬。神妙獨數江都王。將軍得名三十載。人間又見

のみ徒に綠なり　㈣ 昔、天子の行幸ありし時、南苑(また芙蓉苑)の萬物、悉く光彩を生ぜしを偲ふ。　霓旌(五色の羽毛を綴にてつくり、虹霓(にじ)の如きにより云ふ)　㈤ 宮中第一の美人楊貴妃、輦を同うし君側に侍す(漢の成帝の趙姬婕飛燕、昭陽殿にありしに比す　㈥ 才人(宮女)御輦に隨ひて弓箭を執り、白馬、黃金の勒(くつわ)を嚙み鳴らす。舊唐書百官志に「皇后の下、九夫人、九嬪婕妤九人、美人九人、才人七人あり、才人は正五品あり」　㈦ 身をそらし、空中高く箭を放てば、二羽の飛鳥、御輦の前に墮つ(曾て目擊の事をいふ)　㈧ 明眸皓齒の楊貴妃、今すでに亡く、血痕を汚し、暨魂永く歸らず、唐書に「安祿山の反する、國忠を誅するを以て名となす、西幸して馬嵬を過ぐるに及び、國忠已に死して軍解けず、帝力士を遣して故を問はしむ、曰く、禍本尙は在りと、帝已むを得ず妃と訣別して去り、路祠の下に縊らしむ」　㈨ 淸き渭水は馬嵬驛より東に流れ、劍閣山は遠くして見るべからず、去るも留るも、互に消息なし　㈩ たゞ曲江の水と花と、年々春に逢ひて極りなきのみ　⑪ 黃昏胡騎(祿山の軍)の塵、城に滿ち、城南少陵に歸らんとするも、方向にさへ迷ふ程なり

韋諷錄事の宅に曹將軍が畫馬の圖を觀る引

(一) 國初以來鞍馬を畫くに。(二) 神妙獨り數ふ江都王。將軍名を得る三十載。人間又見る眞の乘黃。(三) 曾て貌す先帝の照夜白。龍池十日霹靂を飛ばす。(四) 內府殷紅の瑪瑙盤。(五) 婕妤詔を傳へて才人索む。盤將軍に賜うて拜舞して歸れば。(六) 輕紈細綺相

焦遂五斗方卓然。高談雄辯驚二四筵一。

少陵野老呑ㇾ聲哭。春日潛行曲江曲。江頭宮殿鎖二千門一。細柳新蒲爲ㇾ誰綠。憶昔霓旌下二南苑一。苑中萬物生二顏色一。昭陽殿裏第一人。同ㇾ輦隨ㇾ君侍二君側一。輦前才人帶二弓箭一。白馬嚼嚙黃金勒。

書の妙、世人傳へて聖と稱す　(一四)　字々飛動し恰も雲煙の如し　(一五)　傳詳ならず、口吃するも、醉へば雄辯滿座を驚かす。卓然(きつと身を起す貌)

哀江頭 (一)

(二)少陵の野老聲を呑んで哭す。春日潛行す曲江の曲。(三)江頭の宮殿は千門を鎖す。細柳新蒲誰がためにか綠なる。(四)憶ふ昔霓旌南苑に下り、苑中の萬物顏色を生ず。(五)昭陽殿裏第一の人。輦を同うし君に隨つて君の側に侍す。輦前の(六)才人弓箭を帶び。白馬嚼嚙す黃金勒。(七)身を飜し天に向つて仰いで雲を射れば。一箭正に墮つ雙飛翼。(八)明眸皓齒今何にか在る。血汚して遊魂歸ることを得ず。清渭は東流し劍閣は深く。去住彼是消息なし。人生情あり淚臆を沾す。(一〇)江水江(九)花豈終に極らん。(一一)黃昏胡騎塵城に滿ち。城南に往かんと欲すれば城北を忘る。

(一) 天寶十四年、安祿山反し、長安陷り、江頭荒涼の狀を極む　(二) 少陵の野老杜甫、聲を呑みて哭し、春日曲江のほとりに潛行す。本集注に「曲江長安朱雀街の東、龍華寺の南にあり」　(三) 江頭の宮殿は諸門を鎖し、細柳新蒲

萬錢。飮如長鯨吸百川。銜杯樂聖稱避賢。宗之瀟灑美少年。擧觴白眼望靑天。皎如玉樹臨風前。蘇晉長齋繡佛前。醉中往往愛逃禪。李白一斗詩百篇。長安市上酒家眠。天子呼來不上船。自稱臣是酒中仙。張旭三杯艸聖傳。脫帽露頂王公前。揮毫落紙如雲煙。

佛の前。(一一)醉中往往逃禪を愛す。李白一斗詩百篇。長安市上酒家に眠る。(一二)天子呼び來せども船に上らず。自ら稱す臣は是れ酒中の仙と。(一三)張旭三杯艸聖傳ふ。帽を脫し頂を露す王公の前。(一四)毫を揮つて紙に落せば雲煙の如し。(一五)焦遂五斗方に卓然。高談雄辯四筵を驚かす。

(一) 俗を脫し、酒を嗜める八人を詠ず (二) 賀知章、會稽永興の人、自ら四明狂客と稱す、醉ひて馬に騎り、體搖るゝこと舟に乘れるが如し、醉眼朦朧、誤りて井に落つるも、其儘眠ることあるべし (三) 汝陽王 名は璡、玄宗の猶子(甥)三斗の酒を飮みて朝廷に出づ (四) 酒車に逢ふ (五) 領を代へ、酒泉郡の太守たる能はざるを恨む。(郡は肅州に屬し、城下に泉あり、甘きこと酒の如し) (六) 李適之、客を好み、宴を樂む、天寶元年、牛仙客に代りて左丞相となり、五歲、李林甫のために中てられて罷め、天寶九年また侍中に拜す (七) 酒を飮み、聖道を樂み、賢者に官を讓ると稱す。(酒家の隱語に、淸酒を聖といひ、濁酒を賢といふ意を兼ぬ) (八) 崔宗之、封を齊國公に襲ぎ侍御史となる (九) 白玉樹の風に臨める如く美し (一〇) 戶部侍郎蘇晉。舊唐書に「晉、浮屠の術を學び、胡僧慧澄の繡彌勒佛一本を得、之を寶とす、嘗て曰く、この佛米汁を好む、吾性と合へり、吾願くは之に事へん、他佛は愛せざるなりと」 (一一) 醉ひて世事一切を忘れ、禪境に入る (一二) 李白傳に「白、飮徒と市に醉ふ、帝(玄宗)時に白蓮池に宴し、白をして樂章を爲らしめんと欲し召し入る、白已に醉へり、左右水を以て面に洒ぐ、卽ち筆を秉り十四章を成せり、上之を嘉す」又、范傳正李白新墓碑に「白、高將軍に命じ、扶けて以て船に登らしむ」 (一三) 舊唐書に「吳郡の張旭書を善くし酒を好み、醉後常に狂走す、書を索むれば揮洒し、變化窮りなく、神助あるが如し」と、草

惜レ君只欲ニ苦死留一。富貴何如草頭露。蔡侯静者意有レ餘。清夜置レ酒臨ニ前除一。罷レ琴惆悵月照レ席。幾歲寄レ我空中書。南尋ニ禹穴一見ニ李白一。道甫問訊今如何。

知章騎レ馬似レ乗レ船。眼花落レ井水底眠。汝陽三斗始朝レ天。道逢ニ麴車一口流レ涎。恨不三移レ封向ニ酒泉一。左相日興費ニ

んとす（三）詩巻は長く世に殘り、名聲缺くることなからん（四）常に海に遊び、珊瑚樹に釣竿の觸るゝこともあらん（五）龍蛇に比すべき巢父は、遠く江東の深山大澤に去り、春寒く野くもり、風景自ら淋し（六）蓬萊仙境の織女、龍車を回し來り、虛無縹渺の世界を指し、君が歸路を導くべし（七）世人は君に仙骨あるを知らず、強ひて名利の巷に留めんとせり（八）富貴は草の露よりもはかなし（九）蔡侯は心靜なる人にて、よく君の心を知り、送別の宴を開く（除は庭）（一〇）琴を彈くを罷め、愁へ怨めば月輝きて席を照せり（一一）余に仙界の消息を寄するは何時ぞ（一二）南方會稽山に禹穴（禹王書を藏めたる古跡）を尋ね、知人李白に逢はば、長安の杜甫近況を問ひしと傳へよ

（一）飲中八仙歌

（二）知章が馬に騎るは船に乘るに似たり。眼花井に落ちて水底に眠る。（三）汝陽三斗始めて天に朝し。道に（四）麴車に逢うて口涎を流す。（五）恨むらくは封を移して酒泉に向はざることを。（六）左相が日興は萬錢を費す。飲むことは長鯨の百川を吸ふが如く。（七）杯を銜み聖を樂んで賢を避くと稱す。（八）宗之は瀟灑たる美少年。觴を擧げて白眼にして青天を望む。（九）皎として玉樹の風前に臨むが如し。（一〇）蘇晉長齋す繡

騎。走過掣電傾城知。青絲絡頭爲君老。何由卻出橫門道。

巢父掉頭不肯住。東將入海隨烟霧。詩卷長留天地間。釣竿欲拂珊瑚樹。深山大澤龍蛇遠。春寒野陰風景暮。蓬萊織女回龍車。指點虛無引歸路。自是君身有仙骨。世人那得知其故。

の如きは城中の人々皆知りたり　(一〇)今は靑絲にて頭を飾り、安らかに老いんとす、再び戰場に出で功を立つること難かるべし。程大昌雍錄に「長安城北西に出づる第一門を橫門といふ、卽ち是れ西域に通ずるの路」

(一)孔巢父が病を謝して江東に歸遊するを送り、兼て李白に呈す

(二)巢父頭を掉つて住ることを肯んぜず。東のかた將に海に入つて烟霧に隨はんとす。(三)詩卷長く留む天地の間。(四)釣竿拂はんと欲す珊瑚の樹。(五)深山大澤龍蛇遠く。春寒野陰風景暮る。(六)蓬萊の織女龍車を回し。虛無を指點して歸路を引く。自ら是れ君が身に仙骨あり。(七)世人那ぞその故を知るを得ん。君を惜んで只苦死して留めんと欲す。(八)富貴は何ぞ如かん草頭の露。(九)蔡侯は靜者意餘あり。淸夜酒を置いて前除に臨む。(一〇)琴を罷めて惆悵すれば月席を照す。(一一)幾歲か我に寄せん窓中の書。(一二)南のかた禹穴を尋ねて李白を見ば。道へ甫問訊す今如何と。

(一)字は弱翁、竹溪六逸の一、江東は浙江の東、海に近し　(二)巢父都に留らず、海邊に行き、烟霧暗き中に隱れ

安西都護胡青驄。聲價欻然來向レ東。此馬臨レ陣久無レ敵。與レ人一レ心成二大功一。功成惠養隨レ所レ致。飄飄遠自二流沙一至。雄姿未レ受伏櫪恩。猛氣猶思戰場利。腕促蹄高如レ踣レ鐵。交河幾蹴二層冰一裂。五花散作雲滿身。萬里方看汗流レ血。長安壯兒不二敢

高都護驄馬行（一）

（二）安西都護の胡青驄。（三）聲價欻然として來つて東に向ふ。此の馬陣に臨んで久しく敵なく。人と心を一にして大功を成す。（四）功成つて惠養せられて致す所に隨ひ。飄飄として遠く流沙より至る。（五）雄姿未だ受けず伏櫪の恩。猛氣猶ほ思ふ戰場の利。（六）腕促り蹄高くして鐵を踏むが如く。（七）交河幾たびか層冰を蹴つて裂く。五花散じてなる雲滿身。（八）萬里方に看る汗血を流すを。（九）長安の壯兒敢て騎らず。走過掣電城を傾けて知る。（一〇）青絲頭に絡つて君がために老ゆ。何に由つてか卻つて出でん横門の道。

㈠ 高仙芝、安西の副都護たり、西方小勃律國を平げて歸る ㈡ 胡地に產せし青毛の馬 ㈢ 名馬の聲價欻（たちまち）に東長安に傳はる ㈣ 都護に愛養せられ、西域流沙より牽かれ來る ㈤ 雄姿なほ戰場を慕ふ如く、厩の櫪（まぜぎ）に伏し、無事恩養を受くる氣色なし ㈥ 腕（前足の節と爪の間）短く、蹄高く鐵を踏むに似たり ㈦ 西域交河の邊にて幾度か氷を踏み碎きて蹴ひ、毛並は、五色の雲、身を蔽ふが如し ㈧ 萬里を走り、漸く汗を流す。漢書西域傳に「汗前肩髆の小孔中より出て、血の如し」 ㈨ 長安の壯兒も懼れて騎らず、疾走すること電

不見管鮑貧
時交。此道今
人棄如土。

王郎酒酣拔
劍斫地歌莫
哀。我能拔爾
抑塞磊落之
奇才。豫章翻
風白日動。鯨
魚跋浪滄溟
開。且脱劍佩
休徘徊。西得
諸侯棹錦水。
欲向何門趿
珠履。仲宣樓
頭春色深。青
眼高歌望吾
子。眼中之人
吾老矣。

㊀ 人情は少しも定りなく、雲雨の忽ち變改する如し、紛々たる輕薄の交は始より論ずるに足らず ㊁ 管鮑貧時の交の詳細は列子十八史略史記等に散見せり ㊂ この交道は世人棄てて顧みず、土塊の如く輕んじ賤しむ

短歌行　(一)王郎司直に贈る

(二)王郎酒酣にして劍を拔き地を斫つて歌哀むなかれ。(三)我能く爾が抑塞せらるる磊落の奇才を拔かん。(四)豫章風に翻れば白日動き。鯨魚浪を跋めば滄溟開く。且く劍佩を脱して徘徊することを休めよ。(六)西のかた諸侯を得て錦水に棹さば。(五)何の門に向つて珠履を趿まんとか欲する。仲宣樓頭春色深し。(七)青眼高歌して吾子を望まん。(八)眼中の人吾老いたり。

㊀ 王郎蜀に行き仕を求むるを送る ㊁ 醉中、地を斫る勢にて劍舞し、哀しき歌を唱ふるなかれ ㊂ 抑へられたる磊落(大なる貌)の才氣は我よく歌ひ振はしめん ㊃ 豫章(大樹の名)風に搖るれば白日も共に動き、鯨魚浪に躍れば、滄海も路を開く如く、壯年奇才の勢は當るべからず ㊄ 劍を脱し、緩に我が歌を聽き[illegible]するなかれ ㊅ 錦水に棹して蜀に入らば、何れの諸侯に仕へんとするか。史記春申君傳に「客三千人、その上客皆珠履を躡む」 ㊆ 青眼にして高歌し、君の榮達を祈る。晉書に「阮籍禮教に拘らず、能く青白眼をなす、禮俗の士を見れば白眼を以て之に對し、嵇康酒を齎し琴を携げて到れば青眼をなす」 ㊇ 余はすでに老いたり、一身の不遇終に如何ともし難し

酒尊中置二千斛一。載レ妓隨レ波任二去留一。仙人有レ待乘二黃鶴一。海客無レ心隨二白鷗一。屈平詞賦懸二日月一。楚王臺榭空山丘。興酣落レ筆搖二五嶽一。詩成笑傲凌二滄洲一。功名富貴若長在。漢水亦應二西北流一。

して白鷗に隨ふ。(六)屈平が詞賦は日月を懸け。楚王の臺榭は空しく山丘。(七)興酣にして筆を落せば五嶽を搖し。詩成つて笑傲すれば滄洲を凌ぐ。(八)功名富貴若し長に在らば。漢水も亦まさに西北に流るべし。

㈠ 木蘭、沙棠（水に浮んで沈まず舟を作るによき材） 枻（かぢ） ㈡ 美しき簫笛の樂人、舳艫に坐を占む ㈢ 美酒を樽に湛ふ ㈣ 仙人も黃鶴に乘り始めて飛行することを得 ㈤ 海上の客無心無慾なれば、白鷗と馴れ親む。列子に「海上の人鷗鳥を好む者あり、每旦海上に之き鷗鳥に從つて游ぶ、其父曰く、吾聞く鷗鳥皆汝に從うて游ぶと、汝取り來れ、吾之を玩ばんと、明日海上に之けば、鷗鳥舞つて下らず」 ㈥ 楚の大夫屈平の詞賦（離騷）は、日月の如くに永く傳はり、楚王の宮殿は、すでに廢れて山丘となる（榭は樹ある臺） ㈦ 興酣にして詩筆を揮へば、勢、五岳（泰山・衡山・華山・恆山・嵩山）を動さんとし、詩成つて笑ひ樂めば、心滄州（仙境、木々常に花咲き、萬物死することなし）に遊ぶよりも樂し ㈧ 富貴功名、もし長く保つを得ば、漢水も西北に逆流すべし、世間固よりこの理なく、深く賴みとするに足らず

貧交行　杜甫

翻レ手作レ雲覆レ手雨。紛紛輕薄何須レ數。君

(一)手を翻せば雲となり手を覆せば雨。紛紛たる輕薄何ぞ數ふるを須ひん。(二)君見ずや管鮑貧時の交を。(三)この道今人棄てて土の如し。

黄雲城邊烏欲レ棲。歸飛啞啞枝上啼。機中織レ錦秦川女。碧紗如レ煙隔レ窓語。停レ梭悵然憶二遠人一。獨宿二空房一淚如レ雨。

木蘭之枻沙棠舟。玉簫金管坐二兩頭一。美

烏夜啼（一）

李白

（二）黄雲の城邊烏棲まんと欲し。歸り飛んで啞啞として枝上に啼く。（三）機中錦を織る秦川の女。（四）碧紗煙の如く窓を隔てて語る。（五）梭を停めて悵然として遠人を憶ふ。（六）獨り空房に宿して涙雨の如し。

（一）樂府題、思婦の情を述ぶ（二）黄雲たなびく城邊に雌雄の鳥塒を求めんとす（三）機を織る女子あり、秦川の女蘇氏に似たり。列女傳に「晉の竇滔の妻蘇氏名は蕙字は若蘭、文詞を善くす、苻堅の時、竇滔襄陽を鎮し、妾を挈へて行き、音問久しく絶ゆ、蘇氏錦を織り、廻文縦横八寸、詩二百餘言を題し、璇璣圖となし、黄門（召使の男）を遣して齎して襄陽に至らしむ、滔その妙絶に感じ、因つて蘇氏を迎ふ（四）碧紗の窓、煙の如く暗き中に別離の恨を獨語す（五）梭の手をとゞめ、悵然（しを〳〵）と夫を思ふ（六）今夜も空閨に宿し、涙雨の如くならんを悲む

江上吟

（一）木蘭の枻沙棠の舟。（二）玉簫金管兩頭に坐す。（三）美酒樽中に千斛を置き。妓を載せ波に隨つて去留に任す。（四）仙人は待つことあつて黄鶴に乘じ。（五）海客は心なく

下ニ嵩山一兮多ニ所レ思。攜ニ佳人一兮步遲遲。松間明月長如レ此。君再遊兮復何時。

逐臣北地承ニ嚴譴一。謂到ニ南中一每相見。豈意南中岐路多。千山萬水分ニ鄉縣一。雲搖雨散各飜飛。海闊天長音信稀。處處山川同瘴癘。自憐能得ニ幾人歸一。

（一）嵩山を下るに思ふ所多し。佳人を攜へて步遲遲たり。（二）松間の明月は長へに此の如きも、君が再遊するは復た何の時ぞ。（三）

㊀五嶽の一　㊁佳き友と伴ひ、步み自然に遲し　㊂再遊するは何時ならんか、恐らくは是を限なるべし

（一）端州驛に至り、杜五審言、沈三佺期、閻五朝隱、王無競が壁に題せるを見、慨然として詠を成す

（二）逐臣北地に嚴譴を承けたり。調ぜられて南中に至つて每に相見んとす。（三）豈意はんや南中岐路多くして。千山萬水鄉縣を分たんとは。（四）雲搖ぎ雨散るごとく各〻飜飛し。海闊く天長うして音信稀なり。（五）處處の山川は同じく瘴癘。自ら憐む能く幾人か歸ることを得ん。

㊀唐書に「神龍の初、張易之に交通し、杜審言峰州に流され、沈佺期驩州に流され、宋之問・閻朝隱龍州に貶せられ、王無競廣州に貶せらる」と、杜・沈・閻・王四人先づこの驛を過ぎ宋之問後れて至る　㊁嚴しき咎を受け、北地長安を逐はれしも、嶺南に行かば、常に相見るを得んと思ひき　㊂思はざりき、南方に岐路（わかれ路）多く、千山萬水、謫所各々異らんとは　㊃雲、雨の如く離散し、海天遠く、音信稀なり　㊄到る處に惡疫の氣あり、健康を保ち、都に歸り得るもの少からん

開桑田變成レ海。古人無二復洛城東一。今人還對落花風。年年歲歲花相似。歲歲年年人不レ同。寄レ言全盛紅顏子。應レ憐半死白頭翁。此翁白頭眞可レ憐。伊昔紅顏美少年。公子王孫芳樹下。清歌妙舞落花前。光祿池臺開二錦繡一。將軍樓閣畫二神仙一。一朝臥レ病無二相識一。三春行樂在二誰邊一。宛轉蛾眉能幾時。須臾鶴髮亂如レ絲。但看古來歌舞地。惟有二黄昏鳥雀悲一。

清歌妙舞す落花の前。(八)光祿の池臺は錦繡を開き。(九)將軍の樓閣は神仙を畫く。(一〇)一朝病に臥して相識なく。三春の行樂は誰が邊にかある。(一一)宛轉たる蛾眉能く幾時ぞ。須臾にして鶴髮亂れて絲の如し。たゞ看よ古來歌舞の地。たゞ黄昏鳥雀の悲むあるを。

(一) 女子、顏色の變ふるを惜む (二) 今年の落花に顏色衰へ、明年の落花にすでに世を去る (三) 桑田化して滄海となり、人生の轉變極りなし (四) 古人すでに亡く、今人また落花に對して愁ふ (五) 花は年々相似るも、人は年年同じからず (六) 死に近き白頭翁も昔は紅顏の美少年なりき (七) 貴人の子弟花樹の下に遊ぶ (八) 漢の光祿大夫王根、池中に臺を築き、錦繡の帷を開いて遊び、成帝屢々微行す (九) 漢の大將軍梁冀、閣上に神仙を畫き、長生不死を祈る (一〇) 一朝病に罹れば、相識往來の人絶え、三春行樂の興も盡く (一一) 美人の盛りも久しからず、忽ちに鶴髮(しらが)亂れて老い衰ふ

下山の歌

宋之問

雲爲レ雨楚襄王。古來容光人所レ羨。況復今日遙相見。願作ニ輕羅著ニ細腰一。願爲ニ明鏡一分ニ嬌面一。與レ君相向轉相親。與レ君雙棲共ニ一身一。願作ニ貞松一千歲古。誰論芳槿一朝新。百年同謝西山日。千秋萬古北邙塵。

云ふ「妾は巫山の女、朝に行雲となり、暮に行雨となる」と　(二三) うすもの　(二四) 美しく愛らしき顏　(二五) 願くは常綠の松となり、君と千歲の契を結ばん、槿花(むくげ)の如く、短き榮は望ましからず　(二六) 歡樂此の如きも、日の西山に落つる如く、一命やがて盡き、永く北邙(漢以來の墓地)の塵となる

洛陽城東桃李花。飛來飛去落ニ誰家一。洛陽女兒惜ニ顏色一。行逢ニ落花一長歎息。今年花落顏色改。明年花開復誰在。已見松柏摧爲レ薪。更

白頭翁の悲みに代る

洛陽城東桃李の花。飛び來り飛び去つて誰が家に落つ。洛陽の女兒顏色を惜み。行く〳〵落花に逢うて長く歎息す。(一)今年花落ちて顏色改まり。(二)明年花開いて復た誰か在る。已に見る松柏摧けて薪となるを。更に聞く(三)桑田變じて海となるを。古人復た洛城の東になし。今人還た對ふ落花の風。(五)年年歲歲花相似たれども。(四)歲歲年年人同じからず。言を寄す全盛の紅顏子。まさに憐むべし(六)半死の白頭翁。此の翁白頭眞に憐むべきも。これ昔紅顏の美少年。(七)公子王孫芳樹の下。

外。人影搖動
綠波裏。綠波
清迥玉爲砂。
青雲離披錦
作霞。可憐楊
柳傷心樹。可
憐桃李斷腸
花。此日遨遊
邀美女。此時
歌舞入娼家。
娼家美女鬱
金香。飛去飛
來公子傍。的
的朱簾白日
映娥娥玉顏
紅粉粧。花際
徘徊雙蛺蝶。
池邊顧步兩
鴛鴦。傾國傾
城漢武帝。爲

心を傷ましむる樹。憐むべし桃李腸を斷つ花。此の日遨遊して美女を邀へ。此の時歌舞して娼家に入る。娼家の美女鬱金香。飛去飛來す公子の傍。(八)的的たる朱簾は白日映じ。(九)娥娥たる玉顏は紅粉粧ふ。(一〇)花際徘徊す雙蛺蝶。池邊顧步す兩鴛鴦。(一一)國を傾け城を傾く漢の武帝。(一二)雲となり雨となる楚の襄王。古來容光は人の羨む所。況んや復た今日遙かに相見るをや。願くは(一三)輕羅となつて細腰に著かん。願くは明鏡となつて嬌面を分たん。(一四)君と相向つて轉相親み。君と雙び棲んで一身を共にせん。(一五)願くは貞松となつて千歲古りん。誰か論ぜん芳槿一朝の新なるを。百年同じく謝す西山の日。(一六)千秋萬古北邙の塵。

(一) 貴公子の行樂を寫す。樂府明辨に「步趨躊疏、漏らざるを行といふ」 (二) また洛橋、渭水に架く (三) 橋上に貴公子往來す (四) 馬の嘶き青空に響く (五) 水澄みて底の砂玉の如く、雲空にたなびきて錦の如し (六) 楊柳桃李共に美しく、人の心を惱ます (七) 鬱金草より採りたる香、衣服に薰ず (八) 照り輝く簾 (九) 美しく玉の如き顏 (一〇) 公子娼婦を伴ひ、花間池邊に遊步し、雌雄の蛺蝶(一名鳳蝶)の如く、又、鴛鴦の如し (一一) 漢の武帝李夫人を寵す、李延年曾ていふ「夫人の美は一顧して城を傾け、再顧して國を傾く」と (一二) 楚の襄王夢に神女と遊ぶ、神女

月。南陌朝朝騎似ㇾ雲。南陌北堂連二北里一。五劇三條控二三市一。弱柳青槐拂ㇾ地垂。佳氣紅塵暗ㇾ天起。漢代金吾千騎來。翡翠屠蘇鸚鵡杯。羅襦寶帶爲ㇾ君解。燕歌趙舞爲ㇾ君開。別有二豪華稱一將相一。轉ㇾ日回ㇾ天不二相讓一。意氣由來排二灌夫一。專權判不ㇾ容二蕭相一。專權意氣本豪雄。青虬紫燕坐生ㇾ風。自言歌舞長二千載一。自謂驕奢凌二五公一。節物風光不二相待一。桑田碧海須臾改。昔時金階白玉堂。只今惟見青松在。寂寂寥寥揚子居。年年歲歲一床書。獨有二南山桂花發一。飛來飛去襲二人裾一。

翡翠色（綠）の屠蘇酒を飲み、鸚鵡螺（貝の類）の杯を傾く　三三　うす絹の短衣　三四　美人の歌舞　三五　豪華なる將相の客、來りて遊興を擅にし、互に勢を爭ふ。日を轉ず（夕日を招き返す勢）天を廻す（照りたる天を撥き返す勢）　三六　剛直なる灌將軍を排斥し、蕭望之の議論をも容れず　三七　青虬紫燕（千里の名馬）に乘り、勢、自ら風を生ず　三八　歌舞の樂は千歲盡きず、驕奢の遊は五公（張湯・蕭望之・馮奉世・史丹・張安世）にも勝る　三九　日月人を待たず、桑田忽ち碧海に化し、世態移り變る　四〇　金階白玉の堂壞れ、青松淋しく殘るのみ　四一　余は揚子雲の如く、寂しき家に居り、年々一牀の書を友とし、他に求むる所なし　四二　桂花飛び來り、裾（もすそ）に點ず

天津橋下陽春水。天津橋上繁華子。馬聲廻合青雲

公子行（一）

劉廷芝

（二）天津橋下陽春の水。（三）天津橋上繁華の子。（四）馬聲廻合す青雲の外。人影搖動す綠波の裏。（五）綠波清迴玉を砂となし。青雲離披錦を霞と作す。（六）憐むべし楊柳

車中出。含嬌含態情非一。妖童寶馬鐵連錢。娼婦盤龍金屈膝。御史府中烏夜啼。廷尉門前雀欲棲。隱隱朱城臨玉道。遙遙翠幰沒金堤。挾彈飛鷹杜陵北。探丸借客渭橋西。俱邀俠客芙蓉劍。共宿娼家桃李蹊。娼家日暮紫羅裙。清歌一囀口氛氳。北堂夜夜人如

…る車 (四) 貴族の男女遊樂に耽り、美しき車公主(天子の女)の邸に入り金鞍を置きたる馬相連りて諸侯の家に向ふ (五) 美しききぬがさ(龍の口に銜む) (六) 五色絲のふさ(鳳凰の口より垂れ、車の飾となる) (七) 陽炎(かげろふ) (八) 花に啼く鳥、花に戯る、蝶 (九) 空中往來の處 (一〇) 互違ひに搦めたる窗 (一一) 門の兩側にある樓、樓尾の形、鳳凰翼を張る如し (一二) 後漢書に「大將軍梁冀大に第宇を壯にし、加ふるに丹漆を以てし、圖するに雲氣仙靈を以てす」 (一三) 三輔故事に「建章宮の承露盤、高さ二十丈、大さ七圍、銅を以て之を鑄り、上に仙人掌あり、露を承け、玉屑に和して之を飲む」と、漢の武帝作る (一四) 樓前に見、街上に逢ふも、互に知人にあらず (一五) 妙齢の年 (一六) 爾雅に「東方に比目魚あり、比せざれば行かず、名づけて鰈といふ」と、註に「狀牛脾の如く、鱗細にして紫黑色、一眼なり、兩片相合ひて乃ち行くを得」(鴛鴦と共に、夫婦相離れざるに喩ふ) (一七) 帳(とばり)に孤鸞(鳳に似る鳥)を繡へるを忌み、簾子に雙燕の繡紋あるを喜ぶ(双棲を喜ぶ意) (一八) 羅幃(うすものゝとばり)と翠被(翠羽にて織り、衣服の上に掛くるもの)に鬱金草の香を薰す (一九) 蟬翼の如く透きたる髪、雲を帶ぶるに似たり(詩經に鬢髮雲の如し) (二〇) 新月の如き眉を鴉黃(まゆずみの一種)にて畫く (二一) 美しき少年、鐵驄 (黑毛に淺錢の斑あるもの) の寶馬に乘る (二二) 娼婦の髻に蟠龍 (曲りたる龍) に擬したる屈膝(釵の一種)の金釵を插む (二三) 御史廷尉の諸官、日夜遊樂し、府中には、烏雀の類時を得て棲まんとす (二四) 隱々(盛なる貌)。朱城(朱漆にて門戸を塗れる城) (二五) 翠幰(靑き車のとばり)。金堤(固きこと金の如き堤) (二六) 杜陵(西安府城に近き地)の北に、彈丸を用ひ、又鷹を飛ばして狩獵す (二七) 渭橋の西に俠客、丸を探り人を殺す。漢書尹賞傳に「長安中の姦猾日に多く吏を殺し、賕を受け仇を報し相與に丸を探りて彈となし、赤丸を得る者は武吏を斫し、黑丸を得るもの文吏を殺し、白き者は喪を治む」 (二八) 幾刃の匂、芙蓉の生ずるに似たる劍 (二九) 桃李人に媚ぶる如き街 (三〇) 五達の街、三條の廣路、晨・朝・夕の三市につゞく (三一) 秦の中尉、漢に至りて執金吾と改め、天子に近侍し非常を警・ (三二)

相望不二相知一。陌上相逢詎相識。借問吹レ簫向二紫煙一。曾經學レ舞度二芳年一。得レ成二比目一何辭レ死。願レ作二鴛鴦一不レ羨レ仙。比目鴛鴦眞可レ羨。雙去雙來君不レ見。生憎帳額繡二孤鸞一。好取門簾帖二雙燕一。雙燕雙飛繞二畫梁一。羅帷翠被鬱金香。片片行雲著二蟬鬢一。纖纖初月上二鴉黃一。鴉黃粉白

玉道に臨み。遙遙たる翠幰(二五)は金堤に沒す。彈を挾み(二六)鷹を飛ばす杜陵の北(二七)。丸を探り客に借す渭橋の西。倶に邀ふ俠客芙蓉(二八)の劍。共に宿す娼家桃李(二九)の蹊。娼家日暮紫羅裙、清歌一たび轉じて口氤氳。北堂夜夜人月の如く。南陌朝朝騎雲に似たり。南陌北堂北里に連り。五劇(三〇)三條三市に控く。弱柳青槐地を拂つて垂れ。佳氣紅塵天に暗うして起る。漢代(三一)の金吾千騎來る。翡翠の屠蘇(三二)鸚鵡の杯。(三三)羅襦寶帶君が爲めに解き。燕歌(三四)趙舞君が爲めに開く。別に(三五)豪華の將相と稱するあり。日を轉じ天を回して相讓らず。(三六)意氣由來灌夫を排し。專權判して蕭相を容れず。專權意氣本豪雄。(三七)青虬紫燕(三八)坐に風を生ず。自ら言ふ歌舞千載を長ずと。自ら謂ふ驕奢五公を凌ぐと。節物風光相待たず。(三九)桑田碧海須臾に改る。昔時(四〇)の金階白玉堂。只今惟見る青松の在るを。寂寂寥寥たり揚子(四一)が居。年年歲歲一床の書。(四二)獨南山桂花の發くあつて。飛び來り飛び去つて人の裾に襲く。

㊀ 漢代のことに擬し、長安の繁華を寫し、奢侈淫逸の風を諷る ㊁ 挾き街斜なる街 ㊂ 七種の香木にて造れ

長安大道連ニ狹斜ー。青牛白馬七香車。玉輦縱橫過ニ主第ー。金鞭絡繹向ニ侯家ー。龍銜ニ寶蓋ー承ニ朝日ー。鳳吐ニ流蘇ー帶ニ晚霞ー。百丈遊絲爭レ繞レ樹。一羣嬌鳥共啼レ花。啼花戲蝶千門側。碧樹銀臺萬種色。複道交窗作ニ合歡ー。雙闕連甍垂ニ鳳翼ー。梁家畫閣天中起。漢帝金莖雲外直。樓前

長安の大道狹斜に連る。青牛白馬七香車。(三)玉輦縱橫主第に過り。(四)金鞭絡繹として侯家に向ふ。(二)龍は寶蓋を銜んで朝日を承け。(五)鳳は流蘇を吐いて晚霞を帶ぶ。(六)百丈の游絲は爭うて樹を繞り。(七)一羣の嬌鳥は共に花に啼く。(八)啼花戲蝶千門の側。碧樹銀臺萬種の色。(九)複道交窗合歡をなし。(一〇)雙闕連甍鳳翼を垂る。(一一)梁家の畫閣は天中に起り。漢帝の金莖は雲外に直し。(一二)樓前に相望むも相知らず。(一三)陌上に相逢ふも詎ぞ相識らん。借問す簫を吹いて紫煙に向へるは。(一四)曾經て舞を學んで芳年を度りしならん。比目と成るを得ば何ぞ死を辭せん。(一五)鴛鴦と作るを願つて仙を羨まず。比目鴛鴦眞に羨むべし。雙去雙來君見ずや。生憎や帳額に孤鸞を繡へること。好取す門簾に雙燕を帖すことを。雙燕雙飛びんで畫梁を繞る。(一七)羅帷翠被鬱金香。片片たる行雲蟬鬢に著き。(一九)纖纖たる初月鴉黃に上る。(一〇)鴉黃粉白車中より出で。嬌を含み態を含んで情一にあらず。妖童の寶馬鐵連錢。(二一)娼婦の盤龍金屈膝。(二三)御史の府中烏夜啼き。廷尉の門前雀栖まんと欲す。(二四)隱隱たる朱城は

滕王高閣臨江渚。佩玉鳴鸞罷歌舞。畫棟朝飛南浦雲。朱簾暮捲西山雨。閒雲潭影日悠悠。物換星移幾度秋。閣中帝子今何在。檻外長江空自流。

卷之二

七言古詩

(一)滕王閣

王勃

滕王の高閣江渚に臨めり。(二)佩玉鳴鸞歌舞罷む。(三)畫棟朝に飛ぶ南浦の雲。朱簾暮に捲く西山の雨。(四)閒雲潭影日に悠悠。物換り星移りて幾度の秋ぞ。(五)閣中の帝子今何にか在る。檻外の長江空しく自ら流る。

(一)洪州にあり、高祖の季子元嬰の建てし閣、元嬰この地の都督となり、滕王に封ぜらる (二)佩玉(貴人の佩ぶる玉飾り)鳴鸞(車の鈴の音)の響、歌舞の聲と共に罷む (三)彩りたる棟、美しき簾、目もあやなる高閣には、朝に南浦驛の雲飛來し、暮に西山(一名南昌山、府の西方三十里)の雨捲き來る (四)閒雲潭影盡くることなく、幾度の春秋を經し事ぞ (五)帝子滕王はすでになく、檻(てすり)の外に長江空しく流るゝのみ

(一)長安古意

盧照鄰

孤生易ﾚ爲ﾚ感。
失路少ﾚ所ﾚ宜。
索莫竟何事。
徘徊祇自知。
誰爲二後來者一。
當下與二此心一期上。

東林氣微白。
寒鳥忽高翔。
吾亦自ﾚ玆去。
北山歸二草堂一。
杪冬正三五。
日月遙相望。
蕭蕭過二潁上一。
朧朧辨二夕陽一。
川冰生二積雪一。
野火出二枯桑一。
獨往路難ﾚ盡。
窮陰人易ﾚ傷。
傷此無衣客。
如何蒙二雨霜一。

影ある如く、やゝ深く進むに隨ひ、途に疲を忘る (五) 猿は谿に遊ず、處定めぬ鳥、幽谷に鳴き、溪の影、水紋の中に搖る (六) 故郷を去りて心を惱し、人を懷ひて涙流る (七) 孤獨の生は愁へ易く、逆境には快樂少し (八) この淋しさは余ひとり知るのみ (九) この後爾間に來り、余に同情するものは誰ぞ

早に交崖山を發して太室に還る作 (一)

崔　曙

東林氣微に白く。寒鳥忽ち高翔す。吾も亦玆れより去つて。北山草堂に歸らん。(二)杪冬正に三五。(三)日月遙かに相望む。(四)蕭蕭として潁上を過ぎ。(五)朧朧として夕陽を辨ず。(六)川冰積雪に生じ。野火枯桑より出づ。(七)獨往して路盡し難く。窮陰人傷み易し。(八)傷む此の無衣の客。如何ぞ雨霜を蒙る。

(一) 嵩山三十六峰、東を太室とし、西を少室とし、其下各々石室あり (二) 十二月十五日 (三) 夕暮、入日の影と出づる月と相向ふ (四) 氣候寒く、心舒びず (五) おぼろ氣に夕日を見る (六) 積雪の中に川冰り、農家の火枯桑の間に見ゆ (七) ひとり行きて路盡きず、陰氣閉ぢ塞り、人悲み易し (八) 余は、衣服もなき貧者なるに、何故雨雪に苦しむことぞ

遂二此幽居情一。
微雨夜來過。
不レ知春艸生。
青山忽已曙。
鳥雀繞レ舍鳴。
時與二道人一偶。
或隨二樵者一行。
自當レ安二蹇劣一。
誰謂薄二世榮一。

鳥雀舍を繞つて鳴く。(四)時に道人と偶し。或は樵者に隨つて行く。(五)自ら當に蹇劣に安んずべし。(六)誰か謂ふ世榮を薄うすと。

㊀人に貴賤の差異あるも、世の窘みあるは同じ　㊁たゞ余は世事に煩はされず、安らかに幽居を樂むを得　㊂昨夜小雨降り、春草すでに生ぜしならん　㊃或は道人(隱者の類)と對し、或は樵夫(きこり)とともに行く　㊄余は蹇(あしなへ)の如く、拙き生活に安んずべし　㊅世の名利を輕んずるにあらず、之を求むるに拙きなり

(一)南礀中題　　柳宗元

秋氣集二南礀一。
獨遊亭午時。
迴風一蕭瑟。
林景久參差。
始至若レ有レ得。
稍深遂忘レ疲。
羈禽響二幽谷一。
寒藻舞二淪漪一。
去レ國魂已遠。
懷レ人淚空垂。

秋氣南礀に集る。獨遊亭午(二)の時。(三)迴風一に蕭瑟。林景久しく參差たり。(四)始めて至つて得るあるが若く。稍深うして遂に疲を忘る。(五)羈禽幽谷に響き。寒藻淪漪に舞ふ。(六)國を去つて魂已に遠く。人を懷うて涙空しく垂る。(七)孤生感を爲し易く。失路宜き所少し。索寞として竟に何事ぞ。(八)徘徊して祇自ら知るのみ。(九)誰か後來の者となつて。當に此の心と期すべき。

㊀南の水ある谷　㊁正午　㊂地を吹きめぐる風淋しく、林樹の枝長短相交る　㊃始め來りし時、自得する

七層摩二蒼穹一。
下窺指二高鳥一。
俯聽聞二驚風一。
連山若二波濤一。
奔走似レ朝レ東。
青松夾二馳道一。
宮觀何玲瓏。
秋色從レ西來。
蒼然滿二關中一。
五陵北原上。
萬古青濛濛。
淨理了可レ悟。
勝因夙所レ宗。
誓將三挂レ冠去。
覺道資二無窮一。

貴賤雖レ異レ等。
出レ門皆有レ營。
獨無二外物牽一。

色西より來り。（七）蒼然として關中に滿つ。（八）五陵北原の上には。（九）萬古青濛濛たり。（一〇）淨理了に悟るべし。（一一）勝因夙に宗とする所。（一二）誓つて將に冠を挂け去りて。覺道無窮を資けんとす。

（一）西京雜記に「貞觀二十年、高宗東宮にある時、生母文德皇后のために建つ、因つて慈恩寺といふ、浮圖（塔）六級、高さ三百尺」と、長安曲江池の側にあり（二）塔勢大地より湧き出づる如く、高く天に登ゆ。（天宮は、天上の宮殿の意にして佛典に原づく）（三）登り眺むれば、人間界を拔け出でし如く、石の階道空中にめぐる（四）帝京の地を眼下に下瞰し、鬼神の技工かと疑はる。（突兀、崢嶸は共に高き貌）（五）四方の檐（のき）日を遮り、七重の頂青空を摩する（六）青松、天子行幸の道を夾み、宮殿、明に美し（七）秋色蒼く、關中の地（東、函谷關、南、嶢關、西、散關、北、蕭關、四關の中）長安に滿つ（八）北原に前漢五帝（高惠景武昌）の陵あり（九）長き年代を經、草木暗く茂る（一〇）塔に上り、佛門清淨の妙理を悟り得（一一）最勝因の敎は、平生より尊める所なり（一二）余は官を辭して佛に歸依し、未來の功德を求めんと欲す

幽居　　韋應物

（一）貴賤等異なりと雖も。門を出づれば皆營あり。（二）獨外物の牽くことなく。此の幽居の情を遂ぐ。（三）微雨夜來過ぎ。知らず春艸の生ずるを。青山忽ち已に曙くれば。

梁王昔全盛。賓客復多才。
悠悠一千歳。陳迹惟高臺。
寂寞向秋艸。悲風千里來。

塔勢如湧出。孤高聳天宮。
登臨出世界。磴道盤虚空。
突兀壓神州。崢嶸如鬼工。
四角礙白日。

宋中(一)　高適

梁王昔全盛。(二)賓客復た多才なりき。(三)悠悠たり一千歳。(四)陳迹唯高臺のみ。(五)寂寞として秋艸に向へば。悲風千里より來る。

(一) 漢の文帝の子、梁の孝王武の都。史記に「孝王、睢陽城を廣むる七十里、大に宮室を修め、複道、宮より平臺に連るもの四十餘里」 (二) 司馬相如・鄒陽・枚乘・莊忌の諸名士 (三) 久しく遥なる貌 (四) 舊跡はたゞ高臺あるのみ (五) 寂寞として秋草に向へば、悲風千里より來る

高適薛據と同じく慈恩寺の浮圖に登る(一)　岑參

(二)塔勢湧出するが如く。孤高天宮に聳ゆ。(三)登臨すれば世界を出で。磴道虚空に盤る。(四)突兀として神州を壓し。崢嶸として鬼工の如し。(五)四角白日を礙へ。七層蒼穹を摩す。下し窺つて高鳥を指し。俯し聽いて驚風を聞く。連山波濤の若く。奔走して東に朝するに似たり。(六)青松馳道を夾み。宮觀何ぞ玲瓏たる。秋

西山（一）　常建

一身爲二輕舟一。落日西山際。常隨二去帆影一。遠接二長天勢一。物象歸二餘清一。林巒分二夕麗一。亭亭碧流暗。日入孤霞繼。洲渚遠陰映。湖雲尙明霽。林昏楚色來。岸遠荊門閉。至レ夜轉清迥。蕭蕭北風厲。沙邊雁鷺泊。宿處蒹葭蔽。圓月逗二前浦一。孤琴又搖曳。冷然。夜遂深。白露沾二人衣一。

（二）一身輕舟と爲る。落日西山の際。（三）常に去帆の影に隨ひ。遠く長天の勢に接す。（四）物象餘清に歸し。林巒夕麗を分つ。（五）亭亭として碧流暗く。（六）日入つて孤霞繼ぐ。（七）洲渚遠く陰映し。湖雲尙ほ明霽。（八）林昏うして楚色來り。（九）岸遠くして荊門閉づ。夜に至つて轉清迥。蕭蕭として北風厲し。沙邊雁鷺泊し。宿處蒹葭蔽ふ。（一〇）圓月前浦に逗し。孤琴又搖曳す。冷然として夜遂に深く。白露人の衣を沾す。

㊀ 南昌府城西の山　㊁ 一身自由にして、繋がざる舟の如し　㊂ 舟、前方の帆影を追ひ、水遠く天に接す　㊃ 萬物清爽の氣を帶び、林巒(山の小なるもの)に夕日麗し　㊄ 直く長き貌　㊅ 夕燒の霞赤く一筋につゞく　㊆ 洲渚尙暗く、雲猶はほのあかるし　㊇ 淋しく寂なる色　㊈ 對岸遠く、荊門山も定かならず　(一〇) 月影、前浦の雲より漏れ、興に乘じ琴を把りて彈く

壞道哀湍瀉。
萬籟眞笙竽。
秋色正瀟灑。
美人爲二黃土一。
況乃粉黛假。
當時侍二金輿一。
故物獨石馬。
憂來藉レ艸坐。
浩歌淚盈レ把。
冉冉征途間。
誰是長年者。

下レ馬飮二君酒一。
問レ君何所レ之。
君言不レ得レ意。
歸二臥南山陲一。
但去莫二復問一。
白雲無二盡時一。

馬。憂へ來つて草を藉いて坐し。浩歌すれども淚把に盈つ。(一〇)冉冉たる征途の間。(一一)誰か是れ長年の者ぞ。

㈠ 舊唐書に「太宗貞觀二十年、玉華宮を置く、坊州宜君縣の北七里鳳皇谷にあり、永徽二年廢して玉華寺となす」 ㈡ 溪流めぐり、松風の聲遠くつゞく ㈢ 宮荒れ、鼠古瓦の間に棲む ㈣ 宮殿絕壁の下に殘る ㈤ 小暗き殿內に、鬼火靑く燃ゆるかと思はる ㈥ くづれし道に、哀湍(恐しげに鳴り激する水)溢れそゝぐ ㈦ 萬籟(樹木、水等の鳴る聲)自然の笙竽の如く、秋色澄みて淋し ㈧ 寵幸の美人すら、死して黃土となれり、粉黛の粧ひは、殊にはかなきものなり。黛(まゆずみ) ㈨ 天子の金輿に侍りしものは、たゞ石馬(石刻の狗)の殘れるのみ ㈩ 聲を張りて歌へども、淚手に盈つ ⑾ 人生は移り行く行路の如く、長壽を保ち得るものなし、宮中のものすら、なほ此の如きにあらずや

(一)送別　　王維

馬より下つて君に酒を飮ましめ。君に問ふ何の之く所ぞ。(二)君は言ふ意を得ずして。(三)南山の陲に歸臥すと。但去れ復問ふことなかれ。(四)白雲は盡くる時なし。(五)

㈠ 世を避け山に隱るゝ人を送る ㈡ 君は何處に行かるゝにや ㈢ 君は云ふ、人生意の如くならず、南山のほとりに歸臥せんとすと ㈣ 人間名利の事はまた問題とせざれ ㈤ 山中に白雲盡きず、君が樂も窮なからん

暮上㆓河陽橋㆒。落日照㆓大旗㆒。馬鳴風蕭蕭。平沙列㆓萬幕㆒。部伍各見㆑招。中天懸㆓明月㆒。令嚴夜寂寥。悲笳數聲動。壯士慘不㆑驕。借問大將誰。恐是霍嫖姚。

蕭たり。(五)平沙萬幕を列ね。部伍各々招かる。中天明月を懸け。令嚴にして夜寂寥。(六)悲笳數聲動き。壯士慘として驕らず。(七)借問す大將は誰ぞ。(八)恐らくは是れ霍嫖姚ならん。

(一) 塞を出で邊境を征する義、杜甫に前出塞九首、後出塞五首あり、この詩は後の第二首にあたる、天寶十四年、安祿山出師の時の作 (二) 洛陽の東門 (三) 洛陽北端の橋 (四) 夕日、陣營の大旗を照し、馬いなゝき風淋し (五) 沙地に幕を張り列ね、部伍の士、軍將に招かれて命を受く (六) 胡笳(笛の一種、胡人蘆の葉を捲いて作るといふ)の音に、壯士慘烈の氣を帶び、敵を輕んじ侮ることなし (七) 問ふ、大將は誰ならんか (八) 漢の霍去病の如き英雄ならん。史記に「大將軍衞靑の姉の子霍去病、騎射を善くし、詔を受けて嫖姚校尉となり、元狩二年、驃騎將軍となる」

(一)玉華宮

溪回松風長。蒼鼠竄㆓古瓦㆒。不㆑知何王殿。遺構絕壁下。陰房鬼火靑。

(二)溪回つて松風長く。(三)蒼鼠古瓦に竄る。知らず何の王の殿ぞ。(四)遺構絕壁の下。陰(五)房鬼火靑く。(六)壞道哀湍瀉ぐ。(七)萬籟は眞の笙竽。秋色正に瀟灑たり。(八)美人すら黃土となる。況んや乃ち粉黛の假なるをや。(九)當時金輿に侍せしものは。故物獨石

破產不爲家。
滄海得壯士。
椎秦博浪沙。
報韓雖不成。
天地皆震動。
潛匿遊下邳。
豈曰非智勇。
我來圯橋上。
懷古欽英風。
唯見碧水流。
曾無黃石公。
嘆息此人去。
蕭條徐泗空。

椎す博浪沙。韓に報いて成らずと雖も。(四)天地皆震動す。潛匿して下邳に遊ぶ。(五)豈智勇にあらずと曰はんや。我圯橋の上に來つて。(六)古を懷うて英風を欽するに。唯碧水の流るゝを見る。(七)曾て黃石公なし。嘆息す此の人去りて、(八)蕭條として徐泗の空しきことを。

(一) 下邳縣沂水の橋上を過ぎ、漢の張良を懷ふ (二) 張良字は子房、その先は韓の人、五世韓に相たり、韓、秦に亡ぼさるゝ後、家財を傾けて客を求め、秦の始皇を刺さんことを謀る、齊に行き、滄海君に見えて力士を得、乃ち鐵椎の重さ百二十斤なるものを作り、始皇の東遊を待ち、之を博浪沙に椎擊し、誤つて副車に中る、始皇追索すること甚だ急なり、乃ち亡げて下邳に匿る、嘗て圯上(橋の上)に一老人に逢ひ、その墮したる履を拾ひて納め、太公の兵書を授けらる、老人曰く、我は濟北穀城山下の黃石なりと、因りて黃石公といふ (三) 虎の風に嘯く如く英主漢王に仕へざりし時 (四) 復讐の志成らざりしも、天下を震動せり (五) 始皇を擊ち、且つ巧に追索を免れ、智勇ともに備れりといふべし (六) 古を懷ひ、英雄の風姿を慕ふ (七) 老人黃石公の如きは、有無を問ふの要なし (八) 子房去りて後、徐州泗水(下邳を流れ、淮水に注ぐ)の地淋しく、英雄の出づるなきを歎く

後出塞 (一)

杜甫

朝進東門營。

朝に東門の營に進み。(二)暮に河陽の橋に上る。(三)落日大旗を照し。(四)馬鳴いて風蕭

長安一片月。
萬戸擣レ衣聲。
秋風吹不レ盡。
總是玉關情。
何日平二胡虜一。
良人罷二遠征一。

子房未二虎嘯一。

し盛 (四) 今は丘陵に喬木茂るのみ、昭王はすでになし (五) 霸圖(武力を以て諸侯に長たる計)も已みたり、心惆(いた)み、馬を走らせて歸る

(一)子夜呉歌　　李白

(二)長安一片の月。萬戸衣を擣つ聲。(三)秋風吹き盡さず。總べて是れ玉關の情なり。(四)何の日か胡虜を平げて。良人遠征を罷めん。

(一) 晉に女子あり、名を子夜といふ、歌を作り、聲調甚だ悲し、世人その聲を取りて四時行樂の詞を作り子夜四時歌といふ、東晉は呉に都せり故にまた呉歌といふ (二) 長安街上に一片の月輝き、戸々冬衣を擣つ聲淋し (三) 秋風吹きて止まず、婦女皆玉門關外の夫を思へり。唐書地理志に「沙州燉煌郡夜昌縣の西北に玉門關あり、長安を去ること三千六百里」 (四) 胡虜(えびす)を平げ、良人遠征をやめて歸るは何時ぞ

(一)下邳の圯橋を經て、(二)張子房を懷ふ

(三)子房未だ虎嘯せざりしとき。産を破つて家を爲さず。滄海に壯士を得て。秦を

池潢不㆓敢顧㆒。
側見雙翠鳥
集在㆓三珠樹㆒。
矯矯珍木顚。
得㆑無㆓金丸懼㆒。
美服患㆓人指㆒。
高明逼㆓神惡㆒。
今我遊㆓冥冥㆒。
弋者何所㆑慕。

南登㆓碣石館㆒。
遙望㆓黃金臺㆒。
丘陵盡喬木。
昭王安在哉。
霸圖悵已矣。
馳㆑馬復歸來。

在るを。(四)矯矯たる珍木の顚。金丸の懼なきを得んや。(五)美服は人の指さんことを患へ。高明は神の惡みに逼る。(六)今我冥冥に遊ばば。弋者何の慕ふ所ぞ。

(一) 九齡、玄宗に事へて中書令たり。佞人李林甫、牛仙客二人に妨げられ、官を罷めらる、因つて感慨を述ぶ (二) 一羽の鴻(雁の大なるもの)あり、海上より來り、池潢(溜り水)の如き小水を顧みず。(自ら喩へ、志の遠大なるをいふ) (三) 池側に二羽の翠鳥あり、三珠樹(葉皆珠をなし、一年に三たび花咲く仙樹)に巣へり。(李林甫、牛仙客の二人相位にあるに比す) (四) 美羽を著け、高き珍木の頂にあれば、人目に觸れやすく、金丸(はじきだま)にて射らるゝ懼あらん (五) 美服を著、高く明なる室にあれば、人にも嫉まれ、神にも憎まる。(牛李二人の榮華をいふ) (六) 今、孤鴻去つて冥々(高遠の境)の中に遊ばば、弋(矢に絲をつけ、鳥を射るもの)を執る獵夫も、追究するを得ざるべし(閑地に就き、害を避くるをいふ)

薊丘の覽古 (一)

陳子昂

南のかた(二)碣石館に登りて。遙に(三)黃金臺を望む。(四)丘陵は盡く喬木。昭王安に在りや。(五)霸圖悵として已んぬるかな。馬を馳せて復た歸り來る。

(一) 薊城西北隅の薊丘に上り、古を懷ふ。一統志に「もと樓觀あり、並に廢し、たゞ門のみ存す、二阜の旁林木多く、蓊鬱蒼翠たり」 (二) 燕の昭王學を好み、鄒衍を延き業を受けし館 (三) 昭王千金を置き、天下の賢士を招き

空山啼二夜猿一。
既傷二千里目一。
還驚二九折魂一。
豈不レ憚二艱險一。
深懷二國士恩一。
季布無二二諾一。
侯嬴重二一言一。
人生感二意氣一。
功名誰復論。

孤鴻海上來。

羣雄天下を爭ふ （三） 余は、文筆を棄てて戎軒（兵車）に乘り、戰に從事す （四） 戰國の時、蘇秦六國（齊趙燕韓魏楚）に相となり、同盟を結びて秦に對す、その地形縱（南北）に長し、又張儀秦の相となり、六國の同盟を破りて秦に從はしむ、その地形橫（東西）に長し （五） 余はこの計をなし難きも、世亂に遭ひ心に深く憂へ歎けり （六） 後漢の鄧禹、馬の策（むち）を伏き、光武帝に鄴下に謁せし如く、天子に拜辭し、馬を馳せて潼關（長安の東）を出づ （七） 漢の終軍、南越に使する時、武帝に見えて曰ふ、願くは長纓（長き紐）を請ひ、南越王命を聽かずんば、縛して闕下に到らんと、（粤は越の古字）、又、漢の酈食其、軾（車の前の橫木）に憑りて東藩（齊）の王に說き、戰はずしてその諸城を下せり、余その事業を慕ひ、心ひそかに成功を期す （八） 路曲り、高き岫（山の穴あるもの）に登る （九） 山路を上下し平原を望む （一〇） 原野廣く、坂路九折し、心傷み魂驚く （一一） 行路の艱難は厭ふべきも、天子余を待に、國士（國中得難き良士）とせらるゝ深恩に感ず （一二） 季布は任俠を尊び、一たび事を諾すれば死すとも易へず、魏の侯嬴は一言の義を重んじ、公子信陵君と約し、老年軍に從ひ難きに因り、自ら刎ねて死す、余はその氣節を慕へり （一三） 人に重んずべきは意氣相感ずるにあり。余、天子の知遇を受け、身命を抛つて戰はんとす、功名富貴の如きは、固より論ずべきにあらず

感遇（一）

張九齡

（一）孤鴻海上より來り。池潢敢て顧みず。（二）側に見る雙翠鳥の。巢うて三珠樹に

中原還逐鹿。
投筆事戎軒。
縱横計不就。
慷慨志猶存。
仗策謁天子。
驅馬出關門。
請纓繫南粤。
憑軾下東藩。
鬱紆陟高岫。
出沒望平原。
古木鳴寒鳥。

唐詩選巻之一

五言古詩

述懐（一）　　魏徵

（二）中原還た鹿を逐ふ。（三）筆を投じて戎軒を事とす。（四）縱横計就らざるも。（五）慷慨志猶ほ存す。（六）策を仗いて天子に謁し。馬を驅つて關門を出づ。（七）纓を請うて南粤を繫ぎ。軾に憑つて東藩を下さん。（八）鬱紆として高岫に陟り。（九）出沒して平原を望む。古木寒鳥鳴き。空山夜猿啼く。（一〇）既に千里の目を傷ましめ。還た九折の魂を驚かす。（一一）豈に艱險を憚らざらんや。深く國士の恩を懷ふ。（一二）季布は二諾なく。侯嬴は一言を重んず。（一三）人生意氣に感ず。功名誰かまた論ぜん。

㊀ 武德八年（太宗即位の前年）命を拜し、山東を平げんとするに臨み、感慨を述ぶ　㊁ 猶夫中原の鹿を逐ふ如く

里。故今所考訂。不得不爲于鱗雪冤。略贅數語以發其覆。若夫寒鄉乏挾書。訓解亦非無一助。要辨其眞不眩其僞。則不必瑕殄。

一唐詩選原本以蔣注行。其辨既具于前。方于鱗選時。豈必期後有蔣注。今所考訂。要在見眞面目。何憂無注。初學或昧典故。諸書既自歸然。各就考之可。寒陋之士。往往責備一書。蔣注訓解豈備哉。

一原本諸刊頗多。或有增二三者。今不取也。如字有異。多從原本尤善者。兩可難裁。則就品彙詩刪詩解十集考之。從其多且正者。

服元喬

取其億。準繩一立。離明輪工。無施不可。滄溟之刻。安知非嚴師友哉。

一初學熟滄溟選。乃後稍稍就諸家讀焉。則左右取之。無不逢其原。諸家則滄浪詩話。品彙正聲。弇州卮言。元瑞詩藪。此其傑然者。亦不可不讀焉。蔣氏所注。二三評語。諸家已具。讀之可。不讀亦可。仲言解備之掌故。則往往便于質訪。至其解詩意。謬妄居半。不必取也。且詩貴與象。祇謂攖心。胡用喋喋解之爲。若夫誦三百篇。讀騷讀選。旁及歷代諸家。人人知之。不待其論。博文約禮。雖小伎亦然。

一世有唐詩訓解。其書剽襲唐詩選及仲舒注仲言解等。僞選列藝文。而詩全用于鱗選。出入一二。其所題目。既是不知滄溟者所爲。序則文理不屬。始無意義。中間引道子數語。出中郎他文。且中郎於滄溟。不啻仇視。則亦不知中郎者所爲。總評中竽濫太甚。評注取蔣唐。頗爲删補。唯是拙工代斲不救傷指。其他謬妄不可勝計。要之于鱗嘉隆之間爲一代文宗。中郎雖後亦別爲一家風靡晚學。於是或書賈閭師資二家聲譽。爲詩張之具。並署篇端。所倩村學究不辨菽麥。迺急求錢致此鹵莽已。于鱗選貴乎精嚴。毫釐出入或謬千

附言

一近體詩盡於唐。盡也者盡善之謂。而莫善於滄溟選。蓋後世祖述唐人者，家選戶論。大抵宋人好自用其調。絕響大雅。即所選若論。漆桶掃帚。亦惟摸索而已。及南宋嚴滄浪。豁然限目全象始見。雖有來者不能間然。然止論之。未選詩。明興高廷禮品彙正聲出。而唐人諸家玄黃不蔽。詩亦簡拔神駿。冀北遂空。滄溟繼興。蓋猶以廷禮為旁通多可。更作益嚴。掄選數百首。唐詩之粹森如也。後有唐仲言解及十集。要其所出入。亦惟首鼠高李間。不足列之選者。他若鍾氏詩歸。以沙投金。非再經淘汰。無見其眞。故唐詩莫善於滄溟選。又莫精於滄溟選。

一人或謂滄溟選過刻。然予則謂。後世諸家紛然。邪路旁徑。往往蓁塞。初學進步。一左跌然陷大澤。故取路之法。明為之標。而後不容田夫欺。又譬諸入崑岡采玉。玉石磊砢。愚者奚別。非棄廡下。或襲燕石。必過卞和氏而後天下知連城。故學詩先擇其善者而從之。不必

唐詩選序

唐無五言古詩。而有其古詩。陳子昂以其古詩爲古詩。弗取也。七言古詩惟子美。不失初唐氣格。而縱橫有之。太白縱橫。往往彊弩之末。間雜長語。英雄欺人耳。至如五七言絶句。實唐三百年一人。蓋以不用意得之。卽太白亦不自知其所至。而工者顧失焉。五言律排律諸家槩多佳句。七言律體諸家所難。王維李頎頗臻其妙。卽子美篇什雖衆。憒焉自放矣。作者自苦。亦惟天實生才不盡。後之君子乃茲集以盡唐詩。而唐詩盡于此。

濟南李攀龍撰

李頻(三)　李遠(三)　劉滄(三)　劉得仁(三)　陸龜蒙(三)　王駕(三)　王周(唐、三)　王貞白(三)
韋莊(唐、三)　溫憲(三)　溫庭筠(唐、三)　僧貫休(三)　僧處默(唐、三)　僧法振(三)

其他

無名士(唐)
西鄙人(唐)
太上隱者(唐)
杜常(或は云ふ、宋人)(三)
方澤(三)
姚揆、郭良、景池、任蕃、朱褒、孫欣、石召、張鴻、張侹、張鼎、劉洵伯、僧虛中、(所傳明ならず)(並に三)

令孤楚(唐)　呂温(唐)　盧仝(三)　盧綸(唐、三)　王建(唐、三)　王表(唐)　王烈(唐)　韋應物(唐、三)
僧棲霞(三)　僧靈一(三)　僧靈徹(三)

晩唐

于武陵(唐、三)　姚合(三)　高駢(三)　韓偓(三)　項斯(三)　許渾(唐、三)　許棠(三)　黄滔(三)
荊叔(唐)　吳融(三)　崔塗(三)　崔魯(唐、三)　司空圖(三)　司馬禮(唐)　周繇(三)　周賀(三)
章碣(三)　朱慶餘(三)　薛瑩(唐)　薛能(三)　曹松(三)　孫魴(三)　唐彦謙(三)　段成式(唐)
張泌(三)　張演(三)　張喬(唐、三)　張蠙(三)　暢當(三)　褚載(三)　儲嗣宗(三)　徐晶(三)
陳祐(三)　鄭谷(三)　鄭棨(三)　鄭常(三)　趙嘏(唐、三)　杜荀鶴(三)　杜牧(三)　馬戴(三)
裴說(三)　方干(三)　鮑溶(三)　皮日休(三)　孟遲(三)　孟貫(三)　楊發(三)　喩鳬(三)
雍陶(三)　羅隱(三)　羅鄴(三)　來鵠(三)　李郢(三)　李咸(三)　李建勳(唐)　李羣玉(三)
李山甫(三)　李賀(三)　李拯(唐)　李涉(三)　李商隱(唐、三)　李昌府(三)　李中(三)　李洞(三)

張潮（唐）　張謂（唐、三）　儲光羲（唐、三）　鄭審（唐）　丁仙芝（唐）　杜甫（唐）　裴迪（唐）　包佶（三）
萬楚（唐）　孟浩然（唐、三）　李華（唐）　李頎（唐、三）　李適之（唐）　李憕（唐）　李白（唐）　劉方平（三）
盧弼（唐）　樓穎（唐）　王之渙（唐）　王昌齡（唐、三）　王灣（唐、三）　王維（唐、三）　釋皎然（唐、三）

中唐

文宗皇帝（唐）　殷遙（三）　殷堯藩（三）　于鵠（三）　姚倫（三）　歐陽詹（三）　耿湋（唐、三）　韓翃（唐、三）
賈島（唐、三）　韓愈（唐、三）　皇甫冉（唐、三）　皇甫曾（三）　元稹（唐、三）　嚴維（三）　顧況（唐、三）　戴叔倫（唐、三）
崔峒（三）　司空曙（唐、三）　戎昱（唐、三）　章孝標（三）　章八元（三）　朱放（唐）　錢起（唐、三）　張祜（唐、三）
張又新（三）　張繼（唐、三）　張籍（唐、三）　長孫佐輔（三）　張仲素（唐）　張南史（唐、三）　徐凝（三）　陳羽（三）
竇鞏（三）　竇羣（三）　竇庠（三）　竇常（三）　竇牟（三）　包何（唐）　白居易（三）　武元衡（唐）
孟郊（唐）　羊士諤（唐、三）　熊孺登（三）　張祐之（三）　郎士元（唐、三）　李益（唐、三）　李嘉祐（三）　李敬方（三）
李紳（三）　李端（唐、三）　李德裕（三）　劉禹錫（唐、三）　劉言史（三）　劉商（三）　劉長卿（唐、三）　柳宗元（唐、三）

唐詩選三體詩作家世次

初唐

賈　曾(唐)　賀知章(唐)　魏　徵(唐)　郭　振(唐)　沈　期(唐、三)　蘇　頲(唐)　蘇味道(唐)　宋之問(唐、三)

孫　逖(唐、三)　張　說(唐)　張　諤(唐)　張九齡(唐)　張若虛(唐)　張敬忠(唐)　陳子昂(唐)　杜審言(唐、三)

楊　炯(唐)　駱賓王(唐)　李　邕(唐)　李　嶠(唐)　劉廷琦(唐)　劉廷芝(唐)　盧照鄰(唐)　盧　僎(唐)

王　翰(唐)　韋元旦(唐)　王　績(唐)　王　勃(唐、三)　衞　萬(唐)

盛唐

玄宗皇帝(唐)　于良史(三)　賈　至(唐)　高　蟾(三)　高　適(唐、三)　丘　爲(唐)　綦毋潛(唐、三)　嚴　武(唐)

吳象之(唐)　崔　顥(唐、三)　蔡希寂(唐)　崔惠童(唐)　崔國輔(唐)　崔　署(唐、三)　崔敏童(唐)　常　建(唐、三)

秦　系(三)　岑　參(唐、三)　薛　業(唐)　蕭穎士(唐)　祖　詠(唐、三)　張　均(唐、三)　張子容(唐)　張　巡(唐)

敬宗	湛	穆宗長子	三	十八	寶曆二（即位の二年に改元す）
文宗	昂	穆宗第二子	十五	二十三	太和九（即位の二年に改元す） 開成五
武宗	炎	穆宗第五子	七	三十三	會昌六（即位の二年に改元す）
宣宗	忱	憲宗第十三子	十四	五十	大中十三（即位の二年に改元す）
懿宗	漼	宣宗長子	十五	三十一	咸通十四（即位の二年に改元す）
僖宗	儇	懿宗第五子	十六	二十七	乾符六（即位の二年に改元す） 廣明一 中和四 光啓三 文德一
昭宗	曄	懿宗第七子	十七	二十八	龍紀一（即位の二年に改元す） 大順二 景福二 乾寧四 光化三 天復三（天祐元年弑害せらる）
哀帝	祝	昭宗第九子	四	十七	天祐四

中宗	顯	高宗第七子	六	五十五	神龍二　景龍三
睿宗	旦	高宗第八子	三	五十五	景雲二　太極一
玄宗	隆基	睿宗第三子	四十四	七十八	先天一　開元二十九　天寶十四
肅宗	亨	玄宗第三子	七	五十二	至德二　乾元二　上元二　上元二
代宗	豫	肅宗長子	十八	五十二	廣德二（即位の二年に改元す）　永泰一　大曆十四
德宗	适	代宗長子	二十六	六十四	建中四（即位の二年に改元す）　興元一　貞元二十
順宗	誦	德宗長子	一	四十六	永貞一
憲宗	純	順宗長子	十六	四十三	元和十五（即位の二年に改元す）
穆宗	恒	憲宗第三子	四	三十	長慶四

唐世系紀年

姓は李、長安に都す、二十帝一女主、武德元年戊寅より天祐四年丁卯に至るまで二百八十九年

帝號	諱	傳系	在位年數	壽	年號
高祖	淵		九	七十一	武德九
太宗	世民	高祖次子	二十四	五十三	貞觀廿三（卽位の翌年改元す）
高宗	治	太宗第九子	三十四	五十六	永徽六 顯慶五 龍朔三 麟德二 乾封二 總章二 咸亨四 上元二 儀鳳三 調露一 永隆一 開耀一 永淳一 弘道一
則天武氏	曌	高宗皇后	稱制廿一	八十一	光宅一 垂拱四 永昌一 天授二 載初一 長壽二 如意一 延載一 天册萬歲一 萬歲通天一 神功一 聖曆二 久視一 長安四

唐賢三體詩備考大成　熊谷立閑
增注唐賢三體詩詳解　宇都宮由的
三體詩評釋　野口寧齋

岡田正之識

大正九年三月

施し、磧砂寺の住僧魁天紀之を出版せしより、盛に世に行はれ、元明人の詩話にも往往散見せり。我邦に於ては建仁寺の中巖始めて元より齎し來りて之を講じ、義堂・江西・瑞巖等に傳はり、相國寺の萬里は三體詩抄を選び、名けて曉風集といひ、建仁寺の桂林は三體詩注を著はせり。應仁以前既に我が翻刻本あり、明應年間に重刊せられたり。德川時代に及び、物徂徠の派は之を排斥したりしも、世の尊崇は少しも變ぜず、明曆にも、貞享にも享保にも、文政安政にも開板せられ、其の流傳の盛なりしを徵すべし。

●●●參考書 元人及び本邦人に成れる注釋書の重なるものを擧ぐれば左の如し。

箋注唐賢絕句三體詩法 元僧圓至

增注唐賢絕句三體詩法 元裴庾(漢文大系本)

增注三體詩法注 日本僧素隱(漢文叢書本)

首書增註唐賢三體詩法 松永昌易

晩に分ちて之を檢するに左の如し。

初唐	十二人	三首
盛唐	十八人	五十六首
中唐	六十人	百七十七首
晩唐	七十二人	二百四十七首
未詳	十七人	十七首

唐詩選は專ら盛唐に取りたるも、本書は主として中唐殊に晩唐に取れり、就中杜牧に十九首、許渾に十六首を取りしは、選中の尤も多きものなり。但し盛唐作家の少き割合に、獨り岑參に十二首、王維に十六首の多きを採りしは、其の格調に於て選者の志尙に投合したる所ありしに由れるなるべし。

第五　流傳と參考書

流傳　三體詩の事は既に宋の胡存の漁隱叢話に見え、元に至り僧圓至は注釋を

江天清更愁。　風柳入江樓。　雁識楚山晩。　蟬知秦樹愁。
清涼多獨醉。　零落半同游。　豈復平生意。　蒼然蘭杜洲。

此の詩は首の二句の奇想にして穩健なりしに取れるものなり。

要するに以上の諸格は、詩格の變を盡すものにあらざるも、此の書を諷誦するあれば、幾多の詩趣を悟らるべく、殊に採る所の詩は、辭は幽麗にして、調は流暢なれば、朗吟の間にも快感を與へ、詩を學び詩を味ふ上に於て獲る所鮮からざるべし。

編次　三體詩に古本と新本とあり、新本は圓至の注せる本にして、古本は裴庾の注せる本なり。古本は五言律を第一に、七言律を第二に、七言絶句を第三に置けり、新本は七言絶句を第一に、七言律を第二に、五言律を第三に置けり。普通は新本に從へり。

第四　作者

中晩唐の作家多し　三體詩取る所の作家は凡そ一百六十七人なり。今、初盛中

一意　四實・四虛・前後虛實等の體に拘はらず、篇首より篇尾に至るまで、一意を以て言ひ下すものをいふ。

終南別業　　王維

中歲頗好道。　晚家南山陲。　興來每獨往。　勝事空自知。
行到水窮處。　坐看雲起時。　偶然値林叟。　談笑滯還期。

此の詩は王維が終南山の下にある別莊に於て詠めるものにして、詩の大意は中年より道術を好み、晚年に至り南山のほとりに往み、興來れば獨り往き、勝れたる事あれば獨り賞して、水雲の間に樂み、偶然に林叟に逢へば、談笑して家に還るを忘るとなり、卽ち始めより終まで一氣に詠みたるものなり。　但し南山陲の三字は三平にして每獨往の三字は三仄なり、平仄の上より言へば拗體と謂ふべきものなり。

起句　起首の二句に奇健なる句を置く意なり。

題江陵臨沙驛樓

從來涷合關山道。　今日分流漢使前。
莫遣行人照容鬢。　恐驚憔悴入新年。

●詠物　花鳥・風月・琴棋・酒茶等百般の物體に就き、或る一物を主として巧に其の形態性質を詠ずるなり。

牡丹　　羅隱

似共東風別有因。　絳羅高捲不勝春。
若教解語應傾國。　任是無情也動人。
芍藥與君爲近侍。　芙蓉何處避芳塵。
可憐韓令功成後。　辜負穠華過此身。

五言律には七言律と同格なるもの六種あり、則四實・四虛・前虛後實・前實後虛・結句・詠物是なり。大體に於ては七言律と同じきものなるを以て其の說明引證を略し、特に五言律にのみ見ゆる格の一意と起句とに就いて解說せん。

萬頃白波迷宿鷺。　一林黄葉送秋蟬。
兵車未息年華促。　早晩閑吟向滻川。

江亭秋霽　李郢

碧天涼冷雁來疏。　閑看江雲思有餘。
秋館池亭荷葉後。　野人籬落荳華初。
無愁自得山翁術。　多病能忘太史書。
聞說故園香稻熟。　片帆歸去就鱸魚。

鄭谷と李郢との詩を對照せば、前後虚實の二格は說明を待たずして明なるべし。

結句　第七八の句即結句の平穩にして而かも奇健なる作法を云へるものなり。

過九原飲馬泉　李益

綠楊著水草如煙。　舊是胡兒飲馬泉。
幾處吹笳明月夜。　何人倚劍白雲天。

げん。

滁州西澗　韋應物

●獨○憐○幽●草●澗○邊○生。　●上●有○黃○鸝○深●樹○鳴。
○春○潮●帶●雨●晚○來●急。　●野●渡○無○人○舟●自○橫。

題齊安城樓　杜牧

●嗚●軋○江○樓●角●一○聲。　○微○陽●瀲●灧●落○寒○汀。
●不●用○憑○欄●苦○回●首。　●故○鄉●七●十●五○長○亭。

此の種の拗體は、奇句名句を得るにあらざれば、許さざるを例とす。

側●體●　仄韻を蹈み、且つ正格の平仄に依らざるものなり。

夏晝偶作　柳完元

○南○州●溽●暑●醉○如●酒。(上聲有)　●隱●几●熟○眠○開●北●牖。(有)

世間無限丹青手、　一段傷心畫不成。

三體詩には前對の例として六首を載せしが皆蹈落なり。　然し時には對句にして韻を蹈みたるものもあり。

後對　轉結の二句對偶をなせるものなり。

與從弟同下第出關　　盧綸

出關愁暮一沾裳。　滿野蓬生古戰場。

孤村樹色昏殘雨。　遠寺鐘聲帶夕陽。

拗體　拗はネヂルなり、音詞をねぢまげて正格に背ける體を云ふ、卽平の處に仄を用ひ、仄の處に平を用ふる如き類なり。　此には二種あり、一は一句中一定の平仄に依らざるもの、一は起承の二句と轉結の二句と同一の平仄を用ふるもの、卽平起格の起承に接するに、仄起格の轉結を以てし、仄起格の起承に接するに、平起格の轉結を以てするものなり。　一句中の拗體は姑く略し、全仄の拗體に就き、其の例を掲

轉句の句頭に「爭」「定」「那」「從」「此」等の副詞「不」「莫」等の助動詞を使用したるもの多し。

●用事● 詩中に故事史實を詠み込むものを云ふ。詠史は勿論古蹟の事を賦したるものには此の格あり。

秦淮　杜牧

烟籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。

商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭華。

此は陳の後主が玉樹後庭華の歌曲を作りて亡國の音をなし、遂に隋に滅されたる故事を用ひて作りたるものなり。

●前對● 起承の二句が對偶をなせるものなり。此の場合には多くは踏落にて韻を踏まず。

金陵晩眺　高蟾

曾伴浮雲歸晩色。猶陪落日泛秋聲。

遠別秦城萬里游。　亂山高下入商州。
關門不鎖寒溪水。　一夜潺湲送客愁。

此の詩は、關門・溪水の實物を取り來りて、前の旅行經過のさまと、後の客愁を流し送るといふに接續せしめたるものなり。　實接は大概此の如きものなるも、中には截然と分つべからざるものあり。

虛接　虛接は全く實接と反對なる作法にして、轉句に感想動作を寫して、第一二句と第四句との實體を詠みたるものに接續せしむるものなり。

江村即事　司空曙

罷釣歸來不繫船。　江村月落正堪眠。
假令一夜風吹去。　只在蘆花淺水邊。

此の轉句は假定的の感想上より來れるものにして「縱令」の字を用ひし如きは、明瞭に其の虛接の作法たるを示すものなり。　虛接格の内に收められたる詩を觀るに、

接・用事・前對・後對・拗體・側體の七格に分ち、七言律體には、四實・四虛・前虛後實・前實後虛・結句・詠物の六格に分ち、五言律體には、四實・四虛・前虛後實前實後虛・一意・起句・結句・詠物の八格に分ちたり。此等の諸格の大意を領せば、三體詩の內容を理會するのみならず、漢詩の趣致を味ふ一手段ともならん。

●實接● 實とは實體にして、日月・山川・人物・花鳥より、宮室・衣服・器具に至る萬象の形態あるものを云ひ、虛とは人の思想感情・動作、又は物の樣子・氣分等の種類を云ふ。實接とは實を以て虛に接續する義にして、第三句の轉句を本として辭を立てたるものなり、卽轉句に實體の物を詠みて、上の第一、第二の句と下の第四句との感想動作の虛なるものに接續せしむる作法を云ふ。今一つ注意すべきは、轉句の句頭に今朝・明年・他日の語は用ふるも、「却チ」「唯ダ」「復タ」「遙ニ」「會テ」「慇懃ニ」「如何ノ」など云へる副詞を使用することなく、多くは名詞を置けり。是も虛接の格とは異なる點なり。

宿ス武關ニ　李涉

吳楚江漢の間に宦游すること四十年。詩名は江湖に振ひ、著す所に端平集十二卷あり。

詩風　南宋の末には、江西詩派（黃山谷を宗とせる詩派）と、擊壤集の一派（邵康節の詩風に倣へる道學派の詩の一派）とが、詩壇の勢力を占めしが、此の際晚唐の詩を以て、其の詩風を矯めんと企てたるものは、永嘉の四靈（徐照・徐璣・翁卷・趙師秀の四士、共に永嘉の人）及び葉水心等なり。其の風を承けて起りしものは、江湖詩派にして、周弼は其の領袖とも謂ふべきものなり。是を以て周弼は古體を取らずして、專ら近體殊に中晚唐の詩を鼓吹したり。夫の方回の瀛奎律髓に五律七律のみを選びし如きも、其の風潮を受けたるものにして、周弼の三體詩に專ら律絕の詩法を說きしは全く時流の弊を救はんとの精神に出でたるものなり。

第三　內容

詩格　三體詩に分ちたる詩格は、律絕に因りて異れり。七言絕句體には、實接・虛

三體詩解題

第一　總略

選著と傳來　三體詩は宋末の詩人周弼の選にして、唐人の七言絕句と七言律と五言律との三體を取りて、各種の詩格に分ち、以て詩を作る者の標準となさしめんとしたるものなり。是れ唐賢三體詩法の名ある所以なり。其の選は理宗の淳祐十年に成りしと云へば、我後深草帝の建長二年に當れり。我邦へは南北朝の始に傳はり、爾來詩僧學者の傳誦する所となりて、足利德川時代の詩界にも少からざる貢獻をなしたるものなり。

第二　選者

小傳　周弼、字は伯弜、汶陽の人なり。父を文璞と云ひ、詩を善くせり。弼は十七八歲の時より、博聞强記にして、吟咏を好み、又善く墨竹を畫く。長じて進士となり、

唐詩掌故千葉玄之　　　　箋注唐詩選戸崎允明(漢文大系)

(乙)假名文

談唐詩選市川寬齋　　　　唐詩選國字解服部南郭

唐詩師傳講釋千葉玄之(漢文叢書)　　　　唐詩評釋森槐南

右の內、談唐詩選は、唐詩選の李攀龍の著にあらざることを考證したるものなり。其の他は孰れも注釋書なるが、戸崎氏の箋注、千葉氏の師傳講釋、森氏の評釋は尤も參考の價値あらん。明人の著と稱するもの頗る多きも明の吳吳山の吳注唐詩選と蔣一葵の箋釋唐詩選とは、世に行はれたり。

大正九年三月　　　　岡　田　正　之　識

中唐　三十六人　八十一首　百六十七人
晩唐　十七人　十九首　百三十七人
無名氏　三人　六首

明の胡震亨の唐音癸籤に唐人の集目の各書に見えたるものを集め、初盛中晩に分ちて之を錄す。備考の爲に其の人員を附記す。

唐詩選の主とする所は盛唐に在り、殊に杜甫・李白・王維・岑參に取るもの尤も多く、岑參は二十五首、王維は三十四首、李白は三十三首、杜甫に至りては五十一首の多きに達せり。

第五　參考書

唐詩選の評釋論證として我國人の手に成れるもの左の數種あり。

(甲)漢文

唐詩選集注釋大典
唐詩解頤　同上

左の如し。

初唐　唐初より玄宗の開元の初に至る凡そ百餘年(我推古朝より元明朝に至る間)

盛唐　玄宗の開元の初より代宗の大暦に至る凡そ五十餘年(我元正朝より稱德朝に至る間)

中唐　代宗の大暦より文宗の太和に至る凡そ七十餘年(我稱德朝より淳和朝に至る間)

晩唐　文宗の大和より唐末に至る凡そ七十餘年(我仁明朝より醍醐朝に至る間)

作者　唐詩選に採る所の作者は一百二十八家にして、其の詩は凡そ四百六十五首あり。今初盛中晩の四期に分ちて之を算するに左の如し。

	唐詩選		唐音癸籤
初唐	二十九人	八十五首	百五十七人
盛唐	四十二人	二百七十四首	五十人

第五六句　頸聯又後聯又腹聯
第七八句　結聯又結句又落句

五言排律　排は排列の義なり、首尾排列して聯對の精密なる律を云ふ。或は云ふ排は開なり、門扇を開く如く、段々に作り廣むる意なりとも云ふ。其の平仄の形は律に同じ、律は同格の絕二個を合せたるものなり、排律は同格の絕句を三個若くは四個以上を累積したるものなり。概して四句を一解と云ふ、絕句は一解なり、律は二解なり、排律は三解又は三解以上より成るものとす。唐代に進士を試むるとき詩を作らしめたるが、其の詩は此の五言十二句の排律を作るを定制となせり。七言の排律もあれども、極めて少く、唐詩選に取らざりし所以なり。

第四　時代と作者

初盛中晚　古より唐一代の詩風を分ちて初唐・盛唐・中唐・晚唐の四期とせり。本と宋の嚴羽の滄浪詩話に始まり、明の高棅の唐詩品彙に定まれり。四期の時代は

後聯

◐●◐○○●●　○藍•水•遠ク○從リ○千•澗•落ツ

◐○◐●●○○（韻）　•玉○山○高ク•竝テ•兩○峯ニ○寒シ（寒）

結聯

◐○◐●○○●　○明○年•此ノ•會○知レ○誰•健ナラン。

◐●○○◐●○（韻）　•醉テ•把テ○茱○萸ヲ•仔•細○看ル（寒）

五言律も七言律も平仄の形は同格の絶句二個を合せて八句としたるものなり。

但し中間の第三句と第四句、第五句と第六句とは、必ず對句とせざるべからず、是れ其の異なる所なり。

律の句の名稱　律にありては、二句を一聯と云ふ。聯とは連なり、二句を連ねて一對となす意なるべし。毎聯各〻名稱あり、左の如し。

第一二句　起聯又破題又發句

第三四句　頷聯又前聯又中聯

後聯		結聯	
◐○◐●○○●	◐●○○◐●○（韻）	◐●◐○○●●	◐○◐●●○○（韻）

(四)仄起格

起聯		前聯	
◐●○○◐●○（韻）	◐○◐●●○○（韻）	◐○◐●○○●	◐●○○◐●○（韻）

○川○原○繚●繞○浮○雲●外。
○宮●闕○參○差●落●照○間。（刪）
○誰●念○爲○儒○逢●世●難。
●獨○將○衰●鬢●客○秦○關。（刪）

九日藍田崔氏莊　甫

●老●去○悲○秋●強●自○寬。（寒）
●興○來○今●日●盡○君○歡。（寒）
○羞○將●短●髮○還○吹●帽。
●笑●倩○傍○人●爲●正○冠。（寒）

後聯

◐○○●●

◐●●○○（韻）

結聯

◐●○○●

○○●●○（韻）

(三)平起格

起聯

◐○◐●●○○（韻）

◐●○○◐●○（韻）

前聯

◐●◐○○●●

◐○◐●●○○（韻）

○親○朋○無ク●一●字。

●老●病●有ニ○孤○舟。（尤）

○戎●馬○關○山ノ●北。

○憑リテ○軒ニ●涕●泗○流ル。（尤）

長安春望　盧綸

○東○風○吹チ●雨ヲ●過グ○青○山ヲ。（刪）

●却テ●望メバ○千○門●草ヲ●色○開。（刪）

○家ハ●在リテ●夢○中ニ○何ノ●日カ●到ラン。

○春ハ○來リテ○江●上ニ●幾○人カ○還ル。（刪）

後聯		結聯	
◐	○	◐	◐
●	○	○	●
○	●	○	●
○	●	●	○
●	○（韻）	●	○（韻）

(二)平起格

起聯		前聯	
◐	◐	○	◐
○	●	●	○
○	●	○	●
●	○	○	●
●	○（韻）	●	○（韻）

○芳●樹○籠ニ○秦ム●棧ヲ
○春○流●遶ニル●蜀○城ヲ（庚）
○升○沈○應ニ●已ニ●定ル
●不●必ズシモ●問ハ○君○平ニ

登ル岳陽樓ニ　杜甫

●昔○聞ク●洞○庭ノ●水
○今●上ル●岳○陽○樓（尤）
○吳●楚○東○南ニ●坼ケ
○乾○坤●日●夜○浮ブ（尤）

○遙ニ○知ル○兄●弟○登ルレ○高キ●處ニ。　●遍ク●插ミ二○茱○萸ヲ一●少シ●一●人ヲ。

七言絶句にも稀に仄韻を用ふることあり、岑參の「酒泉ノ太守能ク劍舞ス」の詩の如きは是なり、されど變體にして正格にあらざるなり。

五●言●律●七●言●律●　律とは法則なり、對偶平仄に整然たる一定の法則ありて變ずべからざるものを云ふ。其の圖と例とを示せば左の如し。

〔圖〕

(一)仄起格

起聯
◐　●　○　○　●
○　○　●　●　○（韻）

前聯
◑　○　○　●　●
◐　●　●　○　○（韻）

〔例〕

送ル友人ノ入ルヲ蜀ニ　李白

●見ル●説ナラク○蠶○叢ノ●路●
○崎○嶇●不レ●易カラ○行キ（庚）
○山ハ○從リ二○人●面一●起リ
○雲ハ●傍ニ●馬ノ○頭一○生ズ（庚）

○輕○舟○已●過●萬○重○山。（刪）

結句 ◑○◑●●○○（韻）

(二)仄起格

起句 ◑●◑○◑●○（韻）

承句 ◑○◑●●○○（韻）

轉句 ◑○◑●○○●

結句 ◑●◑○◑●○（韻）

楓橋夜泊 張繼

●月●落○烏○啼○霜●滿○天。（先）

○紅○風●漁●火●對○愁○眠。（先）

○姑○蘇○城●外○寒○山●寺。

●夜●半○鐘○聲●到●客○船。（先）

七言絶句に在りては、起句は韻を踏むを正格とす。されども時に韻を踏まぬことあり、俗に之を踏落と云ふ。此の踏落と云ふ名稱は七言絶句に限れる辭にして、五言絶句に稱することとなし。踏落の一例を擧ぐれば左の如し。

九日憶山中兄弟 王維

●獨●在●異○鄕○爲●異●客。

●每○逢○佳●節●倍○思○親。

又仄韻を蹈みたる側體、或は起承の二句と轉結の二句と同一の平仄にしたる拗體（側體拗體のことは三體詩の解題を見よ）などあれども、是等は近體の變則なり。

七言絶句　絶句は本と五言四句の小詩のみを稱したるものなるも、唐以來は七言四句の詩にも絶句と稱せり。其の詩形は五言絶句に二字を加へたるまでにして、平仄もほゞ同じ。其の異なれる點は、起句に韻を蹈むを通例とするに在り。其の平仄圖と例と示せば左の如し。

〔圖〕

(一)平起格

起句　◑○◑●●○○（韻）

承句　◑●◑○◑●○（韻）

轉句　◑●◑○○●●

〔例〕

早發白帝城　李白

○朝ニ○辭ス●白●帝●彩○雲ノ○間。（刪）

○千●里ノ○江○陵●一●日ニシテ○還ル。（刪）

●兩●岸ノ○猿○聲○啼テ●不ㇾ●住マラ。

至りて起承の意を離れて一轉するを以て轉句と云ふ。或は腰句とも云ふ、一首の腰となりて、上下の轉接する所なればなり。第四句を結句又は合句と云ふ。全詩を結び合はするを以てなり。

五●絕●の●例●外●　五言絕句の起句は韻を蹈まざるを通例とすれども、時によりては韻を蹈むことあり、卽ち仄起格なれば◐●●○○とし、平起格なれば◐○●●○とするものとす。

〔例〕

●月●黑●雁○飛○高。（豪）
○單○于●遠●遁逃。（豪）
●欲○將○輕●騎●逐。
●大●雪●滿○弓○刀。（豪）

●北○風○吹●白○雲。（文）
●萬●里●渡○河○汾。（文）
○心●緒○逢○搖●落。
○秋○聲●不●可○聞。（文）

(二)平起格

起句	◑	○	○	●	●
承句	◑	●	●	○	○（韻）
轉句	◑	●	○	○	●
結句	◑	○	●	●	○（韻）

田家春色　高適

●出○門○何●所●見。
○春●色●滿○平○蕪（韻）
●可●歎○無○知●己
○高○陽●一●酒○徒（韻）

圖中の◑は平字にても仄字にても宜しき符號なり。(一)の第一句の二字目が仄なるを以て仄起と云ひ、(二)の第一句の二字目が平なるを以て平起と云ふ。

起承轉結　第一句のことを起句と云ひ、第二句を承句と云ひ、第三句を轉句と云ひ、第四句を結句といふ。此の起承轉結と云ふことは、絶句の組立の大體を示したるものにして、第一句は將に詠ぜんとする情景を起こし始むるものなるを以て起句と云ひ、第二句は起句の情景を承けて述ぶる所あるを以て承句と云ひ、第三句に

にして而かも毎句韻なるものあり、杜甫の飲中八仙歌の如きは是なり。

五言絶句 南北朝の末より、五言四句の小詩を稱して、絶句とも、斷句とも云ひ、其の一首を一絶と云ふ。古詩の事なれば、定まれる平仄もあるなし。唐に及び、近體詩の範圍に入りて、平仄も一定するに至れり。其の平仄の圖と例とを示せば左の如し。

〔圖〕

(一)仄起格

起句	◐	●	○	○	●	
承句	◐	○	◐	●	○	(韻)
轉句	◐	○	○	●	●	
結句	◐	●	●	○	○	(韻)

〔例〕

登鸛鵲樓　王之渙

●白●日○依○山●盡。

○黃○河●入●海○流。(尤)

●欲○窮○千●里●目。

○更●上●一○層○樓。(尤)

（五言絶句　七十四首
（七言絶句　百六十五首

観るべし唐詩選の選びて取りし所は、主として近體の詩にありしことを。尙唐詩選に見えたる古詩の韻法と律絶の形式とを知るは、詩を讀むの心得となるのみならず、詩を作る栞ともなれば、聊左に述べん。

古詩の韻法　古詩の韻の踏み方を大別すれば、二種となす。一は一韻到底格なり、一は換韻格なり。一韻到底とは、六句以上幾句あるも、同一の韻を踏むものなり。換韻とは、一首中二種以上の韻を交互に踏むものなり。五言古詩は一韻到底格を正則とし、七言古詩は換韻格を正則とす。

然し五言古詩にても、時には換韻格を用ふ、李白の經下邳圯橋懷張子房の詩は十麻と二腫と一東との三種の韻を用ひたり。七言古詩にても、時には一韻到底格を用ふ、李白の江上吟は十二句にして十九尤の一韻を以て押し通せり。又一韻到底

句・律・排律の事を云ふ。古體と近體とは、時代と詩形とに因りて區別せられたるものにして、時代の上より言へば、古體は漢魏六朝に行はれたる詩なり。近體は唐の時に起れる新體詩なり。詩形の上より言へば、古體に四言あり、五言あり、時に七言あり、句數に制限なく、平仄も定まらず。近體は五言七言の二種にして、一定の句數平仄あり、律・排律に至りては、必ず對句を取らざるべからず。是れ古體と近體との異なれる點なり。若し唐の作家にして其の詩形の古體なるに於ては古詩の範圍に屬すべきは論を待たざるなり。唐詩選に收められたる古體と近體との詩數は左の如し。

古體 五言古詩 十四首 ／ 七言古詩 三十二首 ── 四十六首

近體 五言律 六十七首 ／ 五言排律 四十首 ／ 七言律 七十三首 ── 四百十九首

を、俗に韻を踏むといふ。其の踏みたる韻字を韻脚とも韻礎とも云ふ。

平仄　上平・下平の三十韻に屬する文字を平字と云ひ、上聲・去聲・入聲に屬する文字を仄字と云ふ。普通に平字の符號に。を用ひ、仄字の符號に●を用ふるを例とせり。

文字の平仄を見分くる一便法として「フックチキに平字なし」といふ語あり。字の音尾にフックチキの音あるは、皆入聲に屬せる文字なるに因れり。例へば協合(ケフ、ガフ)日月(ジツ・ゲツ)策略(サク・リヤク)七八(シチ・ハチ)霹靂(ヘキ・レキ)の如く孰れも皆入聲にして仄字なり。

第三　古詩律絶

五言七言　詩は字を積みて句となす、一字を一言と云ふ故に、一句四字なるを四言と云ひ、五字なるを五言と云ひ、七字なるを七言と云ふ。

古體と近體　詩に古體と近體とあり。古體とは古詩のことを云ひ、近體とは絶

二三 覃・二四 談 ―― 一三 覃

二五 鹽・二六 添 ―― 一四 鹽

二七 咸・二八 銜・二九 嚴・三〇 凡（上平二八 下平三〇）―― 一五 咸（上平一五 下平一五）

四八 感・四九 敢 ―― 二七 感

五〇 琰・五一 忝 ―― 二八 琰

五二 儼・五三 豏・五四 檻・五五 范（五五）―― 二九 豏（三〇或二九）

五二 勘・五三 闞 ―― 二八 勘

五四 豔・五五 㮇・五六 釅 ―― 二九 豔

五七 陷・五八 鑑・五九 梵（五九）―― 三〇 陷（三〇）

韻•字• 右に掲げたる一東・二冬・三鍾とある二百六韻の名稱は其の韻に屬せる文字の代表的韻字なり。詩若しくは韻文に、一定の規則に從ひ、句尾に韻字を用ふる

一三 庚　一四 耕　一五 清
一六 青
一七 蒸　一八 登
一九 尤　二〇 侯　二一 幽
二二 侵

八 庚（かう）
九 青（せい）
一〇 蒸（じよう）
一一 尤（いう）
一二 侵（しん）

三八 梗　三九 耿（かう）　四〇 靜（せい）
四一 迥
四二 拯　四三 等（とう）
四四 有　四五 厚（こう）　四六 黝（いう）
四七 寑

二三 梗（かう）
二四 迥（けい）
拯（じよう）
二五 有（いう）
二六 寑（しん）

四一 漾　四二 宕（たう）
四三 敬　四四 諍（さう）　四五 勁（けい）
四六 徑　四七 證（しよう）　四八 嶝（とう）
四九 宥　五〇 候
五一 沁

二三 漾（いやう）
二四 敬（けい）
二五 徑（けい）
二六 宥（いう）
二七 沁（しん）

三 蕭
四 宵(せう)
五 肴
六 爻(かう)
七 豪
八 歌
九 戈(くわ)
一〇 麻
一一 陽
一二 唐(たう)

二 蕭(せう)
三 肴(かう)
四 豪(がう)
五 歌(か)
六 麻(ま)
七 陽(いやう)

二九 篠
三〇 小(せう)
三一 巧
三二 皓
三三 架
三四 果
三五 馬
三六 養
三七 蕩(たう)

一七 篠(てう)
一八 巧(かう)
一九 皓(かう)
二〇 哿(か)
二一 馬(ま)
二二 養(いやう)

三二 霰
三三 線
三四 嘯
三五 笑
三六 效
三七 號
三八 箇
三九 適
四〇 禡

一七 霰(せん)
一八 嘯(せう)
一九 效(かう)
二〇 號(がう)
二一 箇(か)
二二 禡(ま)

三一 洽
三二 狎(かふ)
三三 業(げふ)
三四 乏(ばふ)
三四

一七 洽(かふ)
一七

二〇 文　二一 欣（きん）
一二 文（ぶん）

二二 元　二三 魂（こん）　二四 痕（こん）
一三 元（げん）

二五 寒　二六 桓（くわん）
一四 寒（かん）

二七 刪　二八 山
一五 刪（さん）

一 先　二 仙
一 先（せん）

一八 吻　一九 隱（いん）
一二 吻（ぶん）

二〇 阮　二一 混（こん）　二二 狠（こん）
一三 阮（げん）

二三 旱　二四 緩（くわん）
一四 旱（かん）

二五 潸　二五 產
一五 潸（さん）

二七 銑　二八 獮（せん）
一六 銑（せん）

二一 震　二二 稕（じゆん）
一二 震（しん）

二三 問　二四 焮
一三 問（ぶん）

二五 願　二六 慁（こん）　二七 恨（こん）
一四 願（げん）

二八 翰　二九 換（くわん）
一五 翰（かん）

三〇 諫　三一 襉（かん）
一六 諫（かん）

二三 錫
一二 錫（せき）

二四 職　二五 德
一三 職（しよく）

二六 緝
一四 緝（しふ）

二七 合　二八 盍（かふ）
一五 合（かふ）

二九 葉　三〇 帖（てふ）
一六 葉（えふ）

九 魚
一〇 虞・一一 模（ぼ）
一二 齊
一三 佳・一四 皆（かい）
一五 灰・一六 咍（たい）
一七 眞・一八 諄（じゆん）・一九 臻（しん）

六 魚（ぎよ）
七 虞（ぐ）
八 齊（せい）
九 佳（か）
一〇 灰（くわい）
一一 眞（しん）

八 語
九 麌・一〇 姥（ぼ）
一一 薺
一二 蟹・一三 駭（がい）
一四 賄・一五 海
一六 軫・一七 準（じゆん）

六 語（ぎよ）
七 麌（ぐ）
八 薺（せい）
九 蟹（かい）
一〇 賄（わい）
一一 軫（しん）

九 御
一〇 遇・一一 暮
一二 霽・一三 祭（さい）
一四 泰
一五 卦・一六 怪・一七 夬（くわい）
一八 隊・一九 代・二〇 廢

六 御（ぎよ）
七 遇（ぐ）
八 霽（せい）
九 泰（たい）
一〇 卦（くわ）
一一 隊（たい）

一〇 月・一一 沒（ぼつ）
一二 曷・一三 末（まつ）
一四 黠・一五 鎋（かつ）
一六 屑・一七 薛（せつ）
一八 藥・一九 鐸（たく）
二〇 陌・二一 麥・二二 昔

六 月（けつ）
七 曷（かつ）
八 黠（かつ）
九 屑（せつ）
一〇 藥（やく）
一一 陌（はく）

四聲二百六韻一百七韻

平聲

切韻	平水韻
一 東	一 東
二 冬　三 鍾	二 冬
四 江	三 江
五 支　六 脂　七 之	四 支
八 微	五 微

上聲

切韻	平水韻
一 董	一 董
二 腫	二 腫
三 講	三 講
四 紙　五 旨　六 止	四 紙
七 尾	五 尾

去聲

切韻	平水韻
一 送	一 送
二 宋　三 用	二 宋
四 絳	三 絳
五 寘　六 至　七 志	四 寘
八 未	五 未

入聲

切韻	平水韻
一 屋	一 屋
二 沃　三 燭	二 沃
四 覺	三 覺
五 質　六 術　七 櫛	四 質
八 物　九 乞	五 物

の差別なきも、作詩上漢字の音調に四聲の區別あることは知らざるべからざるなり。

二百六韻と一百七韻　支那にて隋の頃より、文字の發音と調子とによりて、總ての文字を四聲二百六韻に分つ、卽ち平聲に五十八韻、上聲に五十五韻、去聲に五十九韻、入聲に三十四韻あり。唐宋時代に詩を作りしものは、皆此の韻に依りたるものなれば、唐詩選の詩の韻も二百六韻なるは言を待たざるなり。南宋に至り、更に二百六韻を併合して一百七韻となせり。是より其の韻の分け方は一般に行はれ、現今普通に用ふる作詩の韻法も是なり。二百六韻は隋の陸法言といへる學者が切韻と稱する書を著はししより始まりしを以て、此の韻の分け方を切韻と呼び、又唐代に行はれし韻法なるを以て唐韻とも云ふ。一百七韻は南宋の時平水の劉淵が併合したるに因り、普通に之を平水韻と云ふ。二百六韻と一百七韻とを示せば左の如し。

富嶽の高華なるに比し、南郭に至りては「唐詩之粹森如也」とも、「唐詩莫善於滄溟選」又「莫精於滄溟選」と激賞せるは、實際唐詩選其のものが價値あるに因れるも、一は崇拜せる李攀龍の選に成れるといふに由らずんばあらざるなり。

第三　韻字平仄

漢詩を讀まんとするものは、先づ漢詩の形式を心得ざるべからず。第一は韻字平仄の事なり、第二は古詩律絶の體なり。漢詩の必要條件としては、一定の韻を踏み、又は平仄を諧ふることとなるが、其の事を述ぶる順序として、四聲の事を説明せん。

●四聲●　古來漢字の發音に對し、其の調子の高低緩急に因りて、平聲・上聲・去聲・入聲の四種類に分つ、之を四聲といふ。四聲は平上去入の文字が示す如く、聲の平にスラリとしたる調子を平聲と云ひ、聲の上りてつよき調子を上聲と云ひ、聲の遠く後へ引きて悲哀の調子を帶びたるを去聲と云ひ、聲のつまりて急迫にとりこむ如き調子を入聲と云ふ。　是は支那流に讀むときのことにして、我邦の讀方にては此

看做すも必ずしも不可なかるべし。

滄溟と號す。李攀龍の小傳　李攀龍、字は于鱗、歷城の人なり。其の家東海に近きを以て、自ら滄溟と號す。正德九年(我永正十一年卽二一七〇年)に生れ、諸生たりし時より、詩歌を作り、日に古書を讀む。三十一歲のとき進士となり、陝西提學副使に拔擢せらる。後病と謝して鄕に歸り、白雪樓を構へ、名聲日に高く、賓客門に造るも、率ね謝して見ず、是を以てか簡傲の名を得たり。後再び出でて河南の按察使となる。此の時圭角を脫して圓滿なりしを以て、賓客も亦稍進みたり。尋で母の喪に奔り、哀毀の餘り疾を獲て卒す。時に隆慶四年(我元龜元年卽二二三〇年)なり。

李攀龍と徂徠南郭　李攀龍の學は李夢陽を宗とし、詩文の復古を唱へ、王世貞と竝び、李王と稱せられ、古文辭學派の首領とも謂ふべきものなり。我邦の物徂徠が古文辭を唱へしは、全く此の李王の跡を追ひしものにして、唐詩選の校刻者たる服部南郭は、徂徠の門に游びたるものなり。是を以てか徂徠も深く唐詩選を稱して、

之を手にせざるなし。現今に於ても中等教員檢定受驗者の必讀の書となり、依然として生命を保てるものは、其書に廢すべからざる價値の在るを以てなり。

第二　選者

李攀龍の選にあらず　唐詩選は明の李攀龍の選と傳ふるも、其の實然らざることは、古今の學者の說ける所なるが、市河寬齋の談唐詩選には、最も詳に論證せられたり。其說に據れば、攀龍は歷代の詩を選びて詩刪と名く、射利の徒が詩刪中の唐詩の部分を取り出して、增減を加へ、更に冠するに攀龍が詩刪の唐詩の序を以てして、唐詩選と名け、李攀龍の著となししといふ。蓋し動かすべからざるの論なり。

李攀龍の選に準ずべし　唐詩選は李攀龍の選にあらず、然れども何等本づく所なくして、妄に選びて名を冒せる僞書贋作の類とは大に同じからず、選中載する所の詩は四百六十五首なり。其中此に在りて、詩刪中になきものは、僅々二三十首に過ぎず。されば其異なれるは十五分の一にして、餘は皆同一なれば、李攀龍の選と

唐詩選解題

第一　總略

詩は唐の特長　支那歷代の文學中に、詩を以て一代の特長となせるは、唐の三百年なり。唐代の詩は漢詩の模範とも、代表とも、權威とも謂ふべく、詩を學び詩を味はんとするものは、必ず指を唐詩に染めざるものなし。

唐詩選の價値　唐代の詩が世に重んぜらるゝことは此の如し、是を以てか古來唐代の詩を集めたるものは極めて多し。初學の人に取りて簡便にして要を得たるもの、俗に所謂「手頃の書」としては、唐詩選を推さざるべからず。勿論編纂上又は編纂者の事に就いては、專門家の間に議論あるも、唐詩に於ける一般的知識と趣味とを與ふるもの、蓋し此書に如くはあらざるべし。故に明末清初には盛に鄕塾の間に行はれ、我邦に於ても服部南郭が之を校刻してより以來、詩を讀むものは、必ず

茅山（杜荀鶴）……五四六
山中流泉（儲光羲）……五四七
冷井（孫欣）……五四七
僧舍小池（張鼎）……五四八
聞レ笛（戎昱）……五四八
感二秋林一（姚倫）……五四九
杏華（溫憲）……五四九
孤雁（崔塗）……五五〇
雨（僧皎然）……五五〇

—目次終—

華日（李成用）……五二九
雲居長老（王貞白）……五二九
送二許棠一（張喬）……五三〇
穆陵關北逢三人歸二漁陽一（劉長卿）……五三一
早行寄二朱放一（戴叔倫）……五三一
陝州河亭陪二韋大夫眺望一（劉禹錫）……五三一
巴南舟中（岑參）……五三三
宿二關西客舍一寄二嚴許二山人一……五三三
夜宿二龍吼灘一思二峨眉隱者一……五三三
南亭送三鄭侍御還二東臺一……五三四
南溪別業……五三四
泊二舟盱眙一（常建）……五三五
江南旅懷（祖詠）……五三五
冬日野望（于良史）……五三五
早行（劉洵伯）……五三六
逢二播公一（周賀）……五三六
暮過二山寺一（賈島）……五三七
懷二永樂殷侍御一（馬戴）……五三七
韋處士山居（許渾）……五三八
瀑布寺貞上人院（鄭巢）……五三八
送二龍州樊史君一（許棠）……五三九
送三人尉二黔中一（周繇）……五三九
道院（王周）……五四〇
終南別業（王維）……五四一
晩泊二潯陽一望二爐峯一（浩然）……五四一
茶人（陸龜蒙）……五四一
尋二陸羽一不レ遇（僧皎然）……五四二
軍中醉飲寄二沈八劉叟一（暢當）……五四三
題二江陵臨沙驛樓一（司空曙）……五四三
送三耿山人遊二湖南一（周賀）……五四四
宿二巴江一（僧栖蟾）……五四四
送三陳法師赴二上元一（皇甫冉）……五四五
送三從弟歸二河朔一（嘉祐）……五四五
喜レ晴（李敬方）……五四六

漢陽即事（儲光羲）……五一二
酬二劉員外見一レ寄（嚴維）……五一二
別二至弘上人一……五一三
送下王牧往二吉州一謁中史君叔上（李嘉祐）……五一三
送二章彝下第一（綦毋潛）……五一四
空寂寺悼二元上人一（錢起）……五一四
送二曹倚一（司空曙）……五一五
送二金華王明府一（韓翃）……五一六
和三張侍郎酬二馬尚書一（韓愈）……五一六
送三董卿赴二台州一（張蠙）……五一七
過二香積寺一（王維）……五一七
送三友人尉二蜀中一（徐晶）……五一八
與二諸子一登二峴山一（孟浩然）……五一八
寄二荊逖人一（鄭常）……五一九
吳明徹故壘（劉長卿）……五一九
送二樊兵書謁一漳州韋大夫一（李嘉祐）……五二〇
西郊蘭若（羊士諤）……五二〇
送二普門上人一（皇甫冉）……五二一
送二耿處士一（賈島）……五二一
春喜三友人至二山舍一（周賀）……五二二
龍翔喜二胡梯訪一レ宿（喩鳧）……五二二
秋晚郊居（任藩）……五二三
友人南遊不レ還（于武陵）……五二三
夜泊二淮陰一（項斯）……五二四
秋夜宿二淮口一（景池）……五二四
村行（姚揆）……五二五
題二甘露寺一（曹松）……五二五
秋夜獨坐（王維）……五二六
秋夜汎レ舟（劉方平）……五二六
春日臥レ病書レ懷（劉商）……五二七
林館避レ暑（羊士諤）……五二七
柏梯寺懷二舊僧一（司空圖）……五二七
早春……五二八
江行……五二八

送二鄭宥入レ蜀……四九四
柞州郡齋南亭（姚合）……四九五
日東病僧（項斯）……四九五
送二友人下第歸覲一（劉得仁）……四九六
南游有レ感（于武陵）……四九六
早春寄二華下同志一（裴説）……四九七
途中別二孫璐一（方干）……四九七
送三友及第歸二浙東一……四九八
春宮（杜荀鶴）……四九八
辭二崔尚書一（李頻）……四九九
下方（司空圖）……四九九
華下送二文涓一……五〇〇
游二東林寺一（黃滔）……五〇〇
送二僧還レ嶽（周賀）……五〇一
送二人歸レ蜀（馬戴）……五〇二
經二周處士故居一（方干）……五〇二
送二人歸レ山（石召）……五〇二

送三友人歸二宜春一（張喬）……五〇三
秋日別二王長史一（王勃）……五〇四
汝墳別業（祖詠）……五〇四
宣州使院別二韋應物一（劉長卿）……五〇五
送二陸澧夫延陵尋レ友（皇甫冉）……五〇五
夏夜西亭卽事（耿湋）……五〇六
庭春（姚合）……五〇六
新春……五〇七
晩春答二嚴少尹諸公見レ過（王維）……五〇七
送二王正字山寺讀レ書（李嘉祐）……五〇八
秋日過二徐氏園林一（包佶）……五〇八
灞東司馬郊園（許渾）……五〇九
下第寓二居崇聖寺一……五〇九
寄二山中高逸人一（孟貫）……五一〇
廬嶽隱者（杜荀鶴）……五一〇
寄二司空圖一（虛僧中）……五一一
送二成州程使君一（岑參）……五一一

新年作……四七七
寄下鮑禪師自二龍山一至上(劉長卿)……四七七
酬二秦系一……四七八
送三朱放賊退後往二山陰一……四七八
尋二南溪常道人隱居一……四七九
題二元錄事所居一……四七九
寄二靈一上人一……四八〇
除夜宿二石頭驛一(戴叔倫)……四八〇
汝南別二黃校書一……四八一
江上別二張勸一……四八一
送三丘爲落第歸二江東一(王維)……四八二
丘州逢二司空曙一(李端)……四八二
洛陽早春(顧況)……四八三
送二陸羽一(皇甫曾)……四八三
贈二喬尊師一(張鴻)……四八四
客中(于武陵)……四八四
長安春日(曹松)……四八五
題二破山寺後院一(常建)……四八五
暮過二山村一(賈島)……四八六
山中道士……四八六
贈二山中日南僧一(張籍)……四八七
田家(章孝標)……四八七
秦原早望……四八七
雲陽館與二韓外卿一宿別(司空曙)……四八八
酬二暢當一(耿湋)……四八九
寄二友人一(張蠙)……四八九
送三喩坦之歸二睦州一(李頻)……四九〇
送下李給事歸二徐州一覲省上(孫逖)……四九〇
送二溧水唐明府一(韋應物)……四九一
送三王錄事赴二虢州一(岑參)……四九一
別二鄭蟻一(邱士元)……四九二
送二韓司直一(皇甫冉)……四九二
途中送二權曙一(皇甫曾)……四九三
酬二普選二上人一(嚴維)……四九三

江行……四五九
春日野望（李中）……四六〇
勝果寺（僧處默）……四六〇
靜林寺（僧靈一）……四六一
秋夜同二梁鍠文一宴（錢起）……四六一
望二秦川一（李頎）……四六二
池上（白居易）……四六二
西陵夜居（吳融）……四六三
旅游傷レ春（李昌符）……四六三
春山（僧貫休）……四六四
送二懷州吳別駕一（岑參）……四六四
高官谷贈二鄭鄠一……四六五
山居即事（王維）……四六五
題二薦福寺衡岳師房一（韓翃）……四六六
送三史澤之二長沙一（司空曙）……四六六
送三裴侍御歸二上都一（張謂）……四六七
過二蕭關一（張蠙）……四六七
秋夜宿二僧院一（劉得仁）……四六八
宿二宣義池亭一……四六八
送三殷堯藩遊二山南一（姚合）……四六九
題二李凝幽居一（賈島）……四六九
金山寺（張祜）……四七〇
商山早行（溫庭筠）……四七〇
秋日送三方干遊二上元一（曹松）……四七一
寄二陸睦州一（許棠）……四七一
與二崔員外一秋直（王維）……四七二
送二東川李使君一……四七三
送三楊長史赴二果州一……四七三
赴レ京途中遇レ雪（孟浩然）……四七四
早行（郭良）……四七四
宿二荊溪館一呈二丘義興一（嚴維）……四七四
漂母墓（劉長卿）……四七五
湖中閑夜（朱慶餘）……四七五
陸渾山莊（宋之問）……四七六

又（羅隱）……四四一
梅花……四四二

卷之二　五言律詩

早春游望（杜審言）……四四四
遊二少林寺一（沈佺期）……四四四
晚至二華陰一（皇甫曾）……四四五
經二陵寶慶寺一（司空曙）……四四五
次二北固山下一（王灣）……四四六
岳陽晚景（張均）……四四六
晚發二五溪一（岑參）……四四七
仲夏江陰官舍寄二裴明府一（李嘉祐）……四四七
山行（殷遙）……四四八
送三陸明府之二盱眙一（崔峒）……四四八
溪南書齋（楊發）……四四九
泊二揚子岸一（祖詠）……四四九
新秋寄二樂天一（劉禹錫）……四五〇
秋日送レ客至二潜水驛一……四五〇
得日觀東房（李頎）……四五一
北固晚眺（竇常）……四五一
送三可久歸二越中一（賈島）……四五二
新安江行（章八元）……四五三
三月五日汎二長沙東湖一（張又新）……四五三
送二人入レ蜀（李遠）……四五三
七里灘（許渾）……四五四
孤山寺（張祜）……四五四
惠山寺……四五五
登二蒲澗寺後二巖一（李群玉）……四五五
送二僧還二南海一（李洞）……四五六
鄂北李生舍……四五七
塞上（司空圖）……四五七
寄二永嘉崔道融一……四五八
泊二靈溪館一（鄭巢）……四五八
甘露寺（孫魴）……四五九

陳琳墓（溫庭筠）……四一八
鸚鵡洲眺望（崔塗）……四一八
繡嶺宮……四一九
春山道中寄二孟侍御一（張南史）……四二〇
早春歸二盩厔一寄二耿湋李端一（盧綸）……四二一
松滋渡望二峽中一（劉禹錫）……四二一
春日閑坐……四二二
晏安寺（李紳）……四二三
館娃宮（皮日休）……四二三
方干隱居（李山甫）……四二四
酬二李端病中見レ寄（盧綸）……四二五
贈二道士一（褚載）……四二五
送三客之二湖南一（白居易）……四二六
送二劉谷一……四二七
江上逢二王將軍一……四二八
和三波日休酬二茅山廣文一（陸龜蒙）……四二八
蒲津河亭（唐彥謙）……四二九
感懷（劉長卿）……四三〇
輞川積雨（王維）……四三〇
石門春暮（錢起）……四三一
酬二慈恩文郁上人一（賈島）……四三二
江亭秋霽（李郢）……四三二
漢南春望（薛能）……四三三
春夕旅懷（崔塗）……四三四
長陵（唐彥謙）……四三四
咸陽（韋莊）……四三五
過二九原飲馬泉一（李益）……四三六
欲レ到二西陵一寄二王行周一（李紳）……四三七
洗レ竹（王自白）……四三七
惜レ花（韋偓）……四三八
崔少府池鷺（雍陶）……四三九
鷓鴣（鄭谷）……四四〇
緋桃（唐彥謙）……四四〇
牡丹（羅鄴）……四四一

黃鶴樓（崔顥）……三九四
自二蘇臺一至二望亭驛一人家盡空（李嘉祐）……三九五
與レ僧話レ舊（劉滄）……三九六
長洲懷古……三九六
煬帝行宮……三九七
經二故丁補闕郊居一（許渾）……三九八
贈二蕭兵曹一（李嘉祐）……三九八
酧二張芬赦後見一レ寄（司空曙）……三九九
答二竇拾遺臥レ病見一レ寄（包佶）……四〇〇
寄二樂天一（元稹）……四〇一
秋居病中（雍陶）……四〇一
送三崔約下第歸二揚州一（姚合）……四〇二
旅館寄レ懷（劉滄）……四〇三
潁州客舍（姚揆）……四〇三
春日長安即事（崔魯）……四〇四
江際（鄭谷）……四〇五
中年……四〇五
秋日東郊作（皇甫冉）……四〇六
過二乘如禪師蕭居士嵩丘蘭若一（王維）……四〇七
送二友人遊一江南一（耿湋）……四〇七
送二荊友人一（姚合）……四〇八
嶺南道中（李德裕）……四〇九
病起（來鵬）……四一〇
送三李錄事赴二饒州一（皇甫冉）……四一〇
淸明日與二友人一遊二玉塘莊一（來鵬）……四一一
宿二淮浦一寄二司空曙一（李端）……四一二
尋二郭道士一不レ遇（白居易）……四一三
早秋寄二題天竺靈隱寺一（賈島）……四一三
題二宣州開元寺水閣一（杜牧）……四一四
長安秋夕（趙嘏）……四一四
宿二山寺一（項斯）……四一五
題二永城驛一（薛能）……四一六
慈恩偶題（鄭谷）……四一六
都城蕭員外寄二海棠花一（羊士諤）……四一七

晩自二東郭一留二一二遊侶一……三七〇
題二飛泉觀宿龍池一……三七〇
咸陽懷古……三七一
黄陵廟（李羣玉）……三七二
晩歇二湘源縣一（張泌）……三七二
廢宅（吳融）……三七三
龍泉寺絶頂（方干）……三七四
和三賈至早二朝大明宮一（王維）……三七四
又（岑參）……三七五
酧下暢當嵩山尋二麻道士一見上寄（盧綸）……三七六
吳中別二嚴士元一……三七六
送三王李二少府貶二潭峽一……三七七
西塞山（劉禹錫）……三七八
早春五門西望（王建）……三七八
錦瑟（李商隱）……三七九
江亭春霽（李郢）……三八〇
送三人之二嶺南一……三八〇
九日登二仙臺一呈二劉明府一（崔曙）……三八一
叢臺（李遠）……三八二
寒食（來鵬）……三八三
隋宮（李商隱）……三八四
馬嵬……三八四
籌筆驛……三八五
聞レ歌……三八六
茂陵……三八七
早秋京口旅泊（李嘉祐）……三八八
晩次二鄂州一（盧綸）……三八九
赴二武陵一寒食次二松滋渡一（竇常）……三八九
鄂州寓二嚴澗宅一（元稹）……三九〇
九日齊山登レ高（杜牧）……三九一
贈二王尊師一（姚合）……三九一
贈二王山人一（許渾）……三九一
湘中送二友人一（李頻）……三九三
元達上人種レ藥（皮日休）……三九三

遊二嘉陵後溪一（薛能）……三五三
山居（盧綸）……三五四
韋處士郊居（雍陶）……三五四
江南（陸龜蒙）……三五五
旅夕（高蟾）……三五五
金陵晚眺……三五五
春……三五六
過二鄭山人所一レ居（劉長卿）……三五六
寒食汜上（王維）……三五七
與二從弟一同下第出レ關（盧綸）……三五七
宿二石邑山中一（韓翃）……三五八
贈二張千牛一……三五八
旅望（李頎）……三五九
滁州西澗（韋應物）……三五九
酧二張繼一（皇甫冉）……三六〇
河邊枯木（長孫佐輔）……三六〇
柳州二月（柳宗元）……三六〇
贈二楊鍊師一（鮑溶）……三六一
題二齊安城樓一（杜牧）……三六一
營州歌（高適）……三六二
山家（長孫佐輔）……三六二
夏晝偶作（柳宗元）……三六三
步虛詞（高駢）……三六三
君山……三六四
繡嶺宮（李洞）……三六四

卷之二　七言律詩

同題二仙遊觀一（韓翃）……三六五
和二樂天早春見一レ寄（元稹）……三六六
和二趙相公登二鸛雀樓一（殷堯藩）……三六六
淩歊臺（許渾）……三六七
洛陽城……三六八
金陵……三六八
咸陽城東樓……三六九

宮詞（王建）……三三七
祇レ役過レ風謝二湘中春色一（熊孺登）……三三七
過二勤政樓一（杜牧）……三三八
送レ客（李羣玉）……三三八
靈巖寺（趙嘏）……三三八
柳枝（薛能）……三三九
自遣（陸龜蒙）……三三九
華陽巾……三四〇
秋色（吳融）……三四〇
酧二李穆一（劉長卿）……三四一
休日訪レ人不レ遇（韋應物）……三四一
湘江夜汎（熊孺者）……三四二
贈二侯山人一……三四三
寫レ情（李益）……三四三
竹枝詞（劉禹錫）……三四三
聽二舊宮人穆氏歌一……三四四
訪二隱者一不レ遇（竇鞏）……三四四
重過二文上人院一（李涉）……三四四
題二鶴林寺一……三四五
宮詞（李商隱）……三四五
將レ赴二吳興一登二樂遊原一（杜牧）……三四六
鄭瓘協律……三四六
贈二魏三十七一（李羣玉）……三四七
湘妃廟……三四七
秋日過二員太祝林園一（李涉）……三四八
長安作……三四八
奉誠園聞レ笛（竇牟）……三四九
冬夜寓懷寄二王翰林一（竇庠）……三五〇
焚書坑（章碣）……三五〇
赤壁（杜牧）……三五一
秦淮……三五一
漢宮（李商隱）……三五二
賈生……三五二
集靈臺（張祜）……三五三

患レ眼……三二二
感レ春……三二二
西歸出二斜谷一（雍陶）……三二三
宿二壽陵驛一……三二三
醉後題二僧院一（杜牧）……三二四
經二汾陽舊宅一（趙嘏）……三二四
十日菊（鄭谷）……三二四
老圃堂（薛能）……三二五
偶興（羅隱）……三二五
悼二亡妓一（朱褒）……三二六
送二元二使一レ安西一（王維）……三二六
三月晦日贈二劉評事一（賈島）……三二七
武昌阻レ風（方澤）……三二七
己亥歲（曹松）……三二七
伏翼西洞送レ人（陳羽）……三二八
題二明慧上人房一（秦系）……三二九
寄二許鍊師一（戎昱）……三二九
秋思（張籍）……三三〇
懷二吳中馮秀才一（杜牧）……三三〇
念二昔遊一……三三〇
寄レ友（李羣玉）……三三一
經二賈島墓一（鄭谷）……三三一
修史亭（司空圖）……三三二
答二韋丹一（僧靈徹）……三三二
九日懷二山東兄弟一（王維）……三三三
葉道士山房（顧況）……三三三
宿二昭應一……三三三
江村即事（司空曙）……三三四
宮人斜（雍裕之）……三三四
過二春秋峽一（劉言史）……三三五
初入二諫司一喜二家室至一（竇鞏）……三三五
寄二襄陽章孝標一（雍陶）……三三六
舊宮人（劉得仁）……三三六
小樓（儲嗣宗）……三三六

江南意（于鵠）……三〇八
閑情（孟遲）……三〇八
曲江春草（鄭谷）……三〇八
山路見レ花（崔櫓）……三〇九
逢二入レ京使一（岑參）……三〇九
送三昝之二上黨一（韓翃）……三一〇
病中遣レ妓（司空曙）……三一〇
華淸宮（王建）……三一一
宣州開元寺（杜牧）……三一一
山行……三一二
寄二山僧一（張喬）……三一二
寄レ人（張佖）……三一三
過二南隣花園一（雍陶）……三一三
宮詞（杜牧）……三一三
漢江……三一四
寄二維揚故人一（張喬）……三一四
逢三友人之二上都一（僧法振）……三一四
山中（顧況）……三一五
酬下曹侍御過二象縣一見上レ寄（柳宗元）……三一五
宿二武關一（李涉）……三一六
題二開聖寺一……三一六
宿二盧白堂一（李郢）……三一七
晴景（王駕）……三一七
社日……三一七
自二河西一歸レ山（司空圖）……三一八
野塘（韓偓）……三一八
歲初喜二皇甫侍御至一（嚴維）……三一九
送二魏十六一（皇甫冉）……三一九
送二王永一（劉商）……三二〇
酧下楊八副使赴二湖南一見上レ寄（劉禹錫）……三二〇
逢二鄭三遊一レ山（盧仝）……三二〇
重贈二商玲瓏一兼寄二樂天一（元稹）……三二二
採二松華一（姚合）……三二二
哀二孟寂一（張籍）……三二三

送二元史君自レ楚移一レ越（劉商）……二九二
竹枝詞（李涉）……二九三
香山館聽二子規一（竇常）……二九三
長慶春（徐凝）……二九四
宮詞二首（王建）……二九四
城西訪二友人別墅一（雍陶）……二九五
貴池縣亭子（杜牧）……二九五
送二隱者一（許渾）……二九六
送二朱處士歸一レ山……二九六
秋思……二九七
黃陵廟（李遠）……二九七
贈二彈レ箏人一（溫庭筠）……二九七
韋曲（唐彥謙）……二九八
曲江春望……二九八
鄠宮（陸龜蒙）……二九九
閿鄉卜レ居（吳融）……二九九
尤溪道中（韓偓）……三〇〇
丹陽送二韋參軍一（嚴維）……三〇〇
寒食（韓翃）……三〇一
上陽宮（竇庠）……三〇一
賜二楊鍊師一（鮑溶）……三〇二
和三孫明府懷二舊山一（雍陶）……三〇二
贈二日東鑒禪師一（鄭谷）……三〇三
旅懷（杜荀鶴）……三〇三
寄レ別二朱拾遺一（劉長卿）……三〇三
題二張道士山居一（秦系）……三〇四
寄二李渤一（張籍）……三〇四
南莊春晚（李羣玉）……三〇五
長溪秋思（唐彥謙）……三〇五
隋宮（鮑溶）……三〇六
綺岫宮（王建）……三〇六
送三三藏歸二西域一（李洞）……三〇六
長信秋詞（王昌齡）……三〇七
吳城覽古（陳羽）……三〇七

初過二漢江一（無名氏）……二七九
胡笳曲……二八〇
塞上曲二首（王烈）……二八〇
又……二八一
邊詞（張敬忠）……二八一
九日宴（張諤）……二八二
西施石（樓穎）……二八二
和二李秀才邊庭四時怨一（盧弼）……二八三
又……二八三
宴二城東莊一（崔敏童）……二八四
奉レ和二同前一（崔惠童）……二八四
宿二疎陂驛一（王周）……二八五
塞下曲（釋皓然）……二八五
僧院（釋靈一）……二八五

三體詩

卷之一　七言絕句

華淸宮（杜常）……二八七
宮詞（王建）……二八七
吳姬（薛能）……二八八
歸鴈（錢起）……二八八
逢二賈島一（張籍）……二八九
江南春（杜牧）……二八九
別二李浦之レ京一（王昌齡）……二九〇
題二崔處士林亭一（王維）……二九〇
楓橋夜泊（張繼）……二九一
贈二殷亮一（戴叔倫）……二九一
湘南卽事（戴叔倫）……二九一
送二齊山人一（韓翃）……二九二

十五夜望ㇾ月（王建）……二六三
送二盧起居一（武元衡）……二六三
嘉陵驛……二六四
漢苑行（張仲素）……二六四
塞下曲二首……二六五
又……二六五
秋閨思……二六六
郡中卽事（羊士諤）……二六六
登ㇾ樓……二六七
酬下浩初上人欲ㇾ登二仙人山一見上ㇾ貽（柳宗元）……二六七
題二延平劍潭一（歐陽詹）……二六八
聞三白樂天左二降江州司馬一（元稹）……二六八
胡渭州（張祜）……二六八
雨淋鈴……二六九
虢夫人……二六九
度二桑乾一（賈島）……二七〇
成德樂（王表）……二七〇

漢宮詞（李商隱）……二七一
夜雨寄ㇾ北……二七二
寄二令狐郎中一……二七二
秋思（許渾）……二七三
江樓書ㇾ感（趙嘏）……二七三
楊柳枝（溫庭筠）……二七四
折楊柳（段成式）……二七四
宮怨（司馬禮）……二七五
宴二邊將一（張喬）……二七五
退ㇾ朝望二終南山一（李拯）……二七六
華清宮（崔魯）……二七六
古別離（韋莊）……二七六
宮詞（李建勳）……二七七
水調歌第一疊（張子容）……二七七
涼州歌第二疊……二七八
水鼓子第一曲……二七八
雜詩（陳祐）……二七九

九日送別 …… 二四八
洛陽客舍逢二祖詠一留宴（蔡希叔）…… 二四八
少年行（吳象之）…… 二四八
江南行（張潮）…… 二四九
軍城早秋（嚴武）…… 二四九
重送三裴郎中貶二吉州一（劉長卿）…… 二五〇
送三李判官之二潤州行營一 …… 二五〇
春行寄レ興（李華）…… 二五一
歸鴈（錢起）…… 二五一
登レ樓寄二王卿一（韋應物）…… 二五一
酬下柳郎中春日歸二楊州一南郭見レ別之作上 …… 二五二

卷之八　七言絕句

送三魏十六還二蘇州一（皇甫冉）…… 二五三
曾山送レ別 …… 二五三
寒食（韓翃）…… 二五四
送三客知二鄂州一 …… 二五四
宿二石邑山中一 …… 二五五
送二劉侍郎一（李端）…… 二五五
楓橋夜泊（張繼）…… 二五六
聽レ角思レ歸（顧況）…… 二五六
宿二昭應一 …… 二五七
湖中 …… 二五七
夜發二袁江一寄二李潁川遇侍郎一（戴叔倫）…… 二五八
寄二楊侍御一（包何）…… 二五八
汴河曲（李益）…… 二五八
聽二曉角一 …… 二五九
夜登二受降城一聞レ笛 …… 二五九
從レ軍北征 …… 二六〇
楊柳枝詞（劉禹錫）…… 二六〇
與二歌者何戡一 …… 二六一
浪淘沙詞 …… 二六一
自二朗州一至レ京戲贈二看レ花諸君一 …… 二六二
涼州詞（張籍）…… 二六二

送二李侍郎赴二常州一 …… 二三〇
岳陽樓重宴三別王八員外貶二長沙一 …… 二三三
封奏破二播仙一凱歌二首（岑參） …… 二三三
其二 …… 二三四
首蓿烽寄二家人一 …… 二三四
玉關寄二長安李主簿一 …… 二三五
逢二入レ京使一 …… 二三五
磧中作 …… 二三五
虢州後亭送三李判官使赴二晉絳一得二秋字一 …… 二三六
送二人還一レ京 …… 二三六
赴二北庭一度レ隴思レ家 …… 二三七
酒泉太守席上醉後作 …… 二三七
送三劉判官赴二磧西一 …… 二三七
山房春事 …… 二三八
寄二孫山人一（儲光義） …… 二三八
贈二花卿一（杜甫） …… 二三九
重贈二鄭錬一 …… 二三九
奉レ和二嚴武軍城早秋一 …… 二四〇
解レ悶 …… 二四〇
青堂飲既夜復邀二李尚書一下レ馬月下賦 …… 二四一
塞下曲（常建） …… 二四一
二 …… 二四一
送二宇文六一 …… 二四二
三日尋二李九莊一 …… 二四二
九曲詞（高適） …… 二四三
除夜作 …… 二四四
塞上聞レ吹レ笛 …… 二四四
別二董大一 …… 二四四
送三杜十四之二江南一（孟浩然） …… 二四五
寄二韓鵬一（李頎） …… 二四五
九日（崔國輔） …… 二四六
題二長安主人壁一（張謂） …… 二四六
送三人使二河源一 …… 二四七
涼州詞（王之渙） …… 二四七

黃鶴樓送三孟浩然之二廣陵一……二二六
陪二族叔刑部侍郎曄及中書舍人賈至一遊二洞庭湖一……二二七
望二天門山一……二二八
早發二白帝城一……二二八
秋下二荊門一……二二八
蘇臺覽古……二二九
越中懷古……二二九
與二史郎中欽一聽二黃鶴樓上吹笛一……二三〇
春夜洛城聞レ笛……二三〇
春宮曲（王昌齡）……二三一
西宮春怨……二三一
西宮秋怨……二三二
長信秋詞……二三三
青樓曲……二三三
閨怨……二三三
出塞行……二三四
從軍行三首……二三四
二……二三五
三……二三五
梁苑……二三五
芙蓉樓送二辛漸一……二三六
送三薛大赴二安陸一……二三六
送二別魏三一……二三七
盧溪別レ人……二三七
重別二李評事一……二三八
少年行（王維）……二三八
九月九日憶二山中兄弟一……二三九
與二盧員外象一過二崔處士興宗林亭一……二三九
送二韋評事一……二三九
送三沈子福之二江南一……二四〇
春思二首（賈至）……二四〇
二……二四一
西亭春望……二四一
初至二巴陵一與二李十二白一同泛二洞庭湖一……二四二

三閭廟（戴叔倫）……二〇一
思君恩（令狐楚）……二〇二
登二柳州蛾山一（柳宗元）……二〇二
秋風引（劉禹錫）……二〇三
輦路感懷（呂溫）……二〇三
古別離（孟郊）……二〇三
尋二隱者一不レ遇（賈島）……二〇四
宮中題（文宗皇帝）……二〇四
勸レ酒（于武陵）……二〇五
秋日湖上（薛瑩）……二〇五
題二慈恩塔一（荊叔）……二〇五
伊州歌二首（無名氏）……二〇六
又……二〇六
哥舒歌（西鄙人）……二〇七
答レ人（太上隱者）……二〇七

卷之七　七言絕句

蜀中九日（王勃）……二〇八
渡二湘江一（杜審言）……二〇八
贈二蘇綰書記一……二〇九
戲贈二趙使君美人一……二〇九
銅雀臺（劉廷琦）……二一〇
邙山（沈佺期）……二一〇
送二司馬道士遊二天台一（宋之問）……二一一
送二梁六一（張說）……二一一
涼州詞（王翰）……二一二
清平調詞三首（李白）……二一三
二……二一三
三……二一三
客中行……二一四
峨眉山月歌……二一四
上皇西巡南京歌二首……二一五
二……二一五
聞三王昌齡左二遷龍標尉一遙有二此寄一……二一六

洛陽道獻二呂四郎中一(儲光羲)……一八七
長安道……一八七
關山月……一八八
送二郭司倉一(王昌齡)……一八八
答二武陵田太守一……一八八
孟城坳(裴迪)……一八九
鹿柴……一八九
復愁(杜甫)……一九〇
絕句……一九〇
長干行(崔顥)……一九〇
詠史(高適)……一九一
田家春望……一九二
行軍九日思二長安故園一(岑參)……一九二
見二渭水一思二秦川一……一九三
登二鸛鵲樓一(王之渙)……一九三
終南望二餘雪一(祖詠)……一九三
罷レ相作(李適之)……一九四
奉レ送下五叔入レ京兼寄中綦毋三上(李頎)……一九四
左掖梨花(丘爲)……一九五
九日陪下元魯山登二北城一留別上(蕭穎士)……一九五
平蕃曲二首(劉長卿)……一九六
其二……一九六
逢二俠者一(錢起)……一九六
江上無題……一九七
秋夜寄二丘二十二員外一(韋應物)……一九六
聽二江笛一送二陸侍御一……一九八
聞レ雁……一九八
答二李滸一……一九八
婕妤怨(皇甫冉)……一九九
題二竹林寺一(朱放)……一九九
秋日(耿湋)……二〇〇
和二張僕射塞下曲一(盧綸)……二〇〇
別二盧秦卿一(司空曙)……二〇〇
幽州(李益)……二〇一

自二鞏洛一舟行入二黃河一卽事寄二府縣僚友一(韋應物)……一七一
賜下錢起秋夜宿二靈臺寺一見上寄(郎士元)……一七二
長安春望(盧綸)……一七三
陸勝宅秋雨中探レ韻(張南史)……一七三
鹽州過二胡兒飮馬泉一(李益)……一七四
登二柳州城樓一寄二漳汀封連四州刺史一(柳宗元)……一七五
奉レ和二庫部盧四兄曹長元日朝廻一(韓愈)……一七五

卷之六　五言絕句

題二袁氏別業一(賀知章)……一七七
夜送二趙縱一(楊炯)……一七七
易水送別(駱賓王)……一七八
贈二喬侍御一(陳子昂)……一七八
子夜春歌(郭振)……一七九
南樓望(盧僎)……一七九
汾上驚レ秋(蘇頲)……一七九
蜀道後レ期(張說)……一八〇
照レ鏡見二白髮一(張九齡)……一八〇
同二洛陽李少府一觀下永樂公主入上レ蕃(孫逖)……一八一
靜夜思(李白)……一八一
怨情……一八一
秋浦歌……一八二
獨坐二敬亭山一……一八三
見三京兆韋參軍量二移東陽一……一八三
臨高臺送二黎拾遺一(王維)……一八三
班婕妤……一八四
雜詩……一八四
鹿柴……一八四
竹里館……一八五
長信草(崔國輔)……一八五
少年行……一八五
送二朱大入一レ秦(孟浩然)……一八六
春曉……一八六
洛陽訪二袁拾遺一不レ遇……一八六

寄二綦毋三一……一五〇
送二李回一……一五〇
宿二瑩公禪房一聞レ梵……一五一
贈二盧五舊居一……一五一
望二薊門一（祖詠）……一五二
九日登二仙臺一呈二劉明府一（崔署）……一五三
五日觀レ妓（萬楚）……一五三
杜侍御送二貢物一戲贈（張謂）……一五四
送下李少府貶二峽中一王少府貶中長沙上（高適）……一五五
夜別二韋司士一……一五五
和下賈至舍人早朝二大明宮一之作上（岑參）……一五六
和二祠部王員外雪後早朝即事一……一五七
西掖省即事……一五七
九日使君席奉レ餞三衞中丞赴二長水一……一五八
首春渭西郊行呈二藍田張二主簿一……一五九
暮春虢州東亭送三李司馬歸二扶風別廬一……一五九
萬歲樓（王昌齡）……一六〇
題二張氏隱居一（杜甫）……一六一
宣政殿退朝晚出二左掖一……一六一
紫宸殿退朝口號……一六二
曲江對レ酒……一六二
九日藍田崔氏莊……一六三
望野……一六四
登樓……一六四
愁興四首……一六五
二……一六六
三……一六六
四……一六七
吹笛……一六八
閣夜……一六八
返照……一六九
登レ高……一七〇
闕下贈二裴舍人一（錢起）……一七〇
和二王員外晴雪早朝一……一七一

侍㆓宴安樂公主新宅㆒應制……一二九
紅樓院應制……一三〇
再入㆓道場㆒紀㆑事應制……一三一
遙同㆓杜員外審言過㆑嶺……一三二
興慶池侍㆑宴應制（韋元旦）……一三三
侍㆓宴安樂公主新宅㆒應制（蘇頲）……一三三
奉㆑和㆓春日幸㆓望春宮㆒應制……一三三
奉㆑和㆓初春幸㆓太平公主南莊㆒應制……一三四
幽州新歲作（張說）……一三五
灉湖山寺……一三五
遙同㆓蔡起居偃松篇㆒……一三六
奉㆑和㆓春日出㆑苑矚目㆒應令（賈曾）……一三七
奉㆑和㆓初春幸㆓太平公主南莊㆒應制（李邕）……一三七
和㆘左司張員外自㆑洛使入㆑京中路先赴㆓長安㆒逢㆓立春
日㆒贈㆗韋侍御及諸公㆖（孫逖）……一三八
黃鶴樓（崔顥）……一三九
行經㆓華陰㆒……一四〇
登㆓金陵鳳凰臺㆒（李白）……一四〇
早㆓朝大明宮㆒呈㆓兩省僚友㆒（賈至）……一四一
和㆘賈至舍人早朝㆓大明宮㆒之作㆖（王維）……一四二
和㆓太常韋主簿五郎溫泉寓目㆒……一四三
大同殿生㆓玉芝㆒龍池上有㆓慶雲㆒百官共觀聖恩便賜㆓
燕樂㆒敢書㆓即事㆒……一四三
奉㆑和㆘聖製從㆓蓬萊㆒向㆓興慶㆒閣道中留春雨中春望之
作㆖應制……一四四
勅㆓賜百官櫻桃㆒……一四四
酌㆑酒與㆓裴迪㆒……一四五
酬㆓郭給事㆒……一四六
過㆓乘如禪師蕭居士嵩山蘭若㆒……一四六
奉㆑和㆘聖製從㆓蓬萊㆒向㆓興慶㆒閣道中留春雨中春望之
作㆖應作（李憕）……一四七
送㆓魏萬之㆑京（李頎）……一四八
寄㆓盧司勳員外㆒……一四八
題㆓璿公山池㆒……一四九

奉レ和レ幸二長安故城未央宮一應制（宋之問）……一〇一
奉レ和三晦日幸二昆明池一應制……一〇二
和二姚給事寓直之作一……一〇三
早發二始興江口一至二虛氏村一作……一〇四
同餞三楊將軍兼二原州都督御史中丞一（蘇頲）……一〇五
奉レ和三聖製途經二華嶽一（張說）……一〇五
奉レ和三聖製早度二蒲關一（張九齡）……一〇六
和三許給事直夜簡二諸公一……一〇七
酬下趙二侍御史西軍贈二兩省舊寮一之作上……一〇八
奉レ和四聖制送三尙書燕國公說赴二朔方軍一……一〇九
奉レ和三聖製暮春送二朝集使歸ヒ郡應制（王維）……一一〇
送三李太守赴二上洛一……一一一
送三祕書晁監還二日本一……一一二
送三儲邕之二武昌一（李白）……一一三
陪二張丞相一自二松滋江一東泊二渚宮一（孟浩然）……一一四
送下柴司戶充二劉卿判官一之中嶺外上（高適）……一一五
陪二竇侍御一泛二靈雲池一……一一五
行次二昭陵一（杜甫）……一一六
重經二昭陵一……一一七
王閬州筵奉レ酬二十一舅惜レ別之作一……一一八
春歸……一一九
江陵望レ幸……一二〇
奉レ觀二嚴鄭公廳事岷山沱江圖一……一二〇
冬日洛城北謁二玄元皇帝廟一廟有二吳道士畫五聖圖一……一二二
聖善閣送二裴迪入ヒ京（李頎）……一二三
早秋與二諸子一登二虢州西亭一觀眺（岑參）……一二四
淸明宴二司勳劉郞中別業一（祖詠）……一二四
奉レ使巡三檢兩京路種二果樹一事畢入レ秦因詠歌（鄭審）……一二五
行營酬二呂侍御一（劉長卿）……一二六
送下鄭說之二歙州一謁中薛侍郞上……一二七

卷之五　七言律詩

古意（沈佺期）……一二八
龍池篇……一二八

送遠 …… 七九
題二玄武禪師屋壁一 …… 八〇
玉臺觀 …… 八〇
觀二李固請司馬題山水圖一 …… 八一
禹廟 …… 八二
旅夜書懷 …… 八二
船下二夔州一郭宿雨濕不レ得レ上レ岸別二王十二判官一 …… 八三
登二岳陽樓一 …… 八三
次二北固山下一（王灣） …… 八四
江南旅情（祖詠） …… 八四
蘇氏別業 …… 八五
望二秦川一（李頎） …… 八五
宿二龍興寺一（綦毋潛） …… 八六
胡笳曲（王昌齡） …… 八六
同二王徵君一洞庭有レ懷（張謂） …… 八七
破山寺後禪院（常建） …… 八七
渡二揚子江一（丁仙芝） …… 八八
聞レ笛（張巡） …… 八八
岳陽晚景（張均） …… 八九
穆陵關北逢三人歸二漁陽一（劉長卿） …… 八九
題二松汀驛一（張祜） …… 九〇
聖果寺（釋處默） …… 九〇

卷之四　五言排律

送二劉校書從一レ軍（楊炯） …… 九二
靈隱寺（駱賓王） …… 九二
宿二溫城一望二軍營一 …… 九四
在レ廣聞三崔馬二御史並登二相臺一（蘇味道） …… 九五
奉レ和レ幸二韋嗣立山莊一應制（李嶠） …… 九六
白帝城懷古（陳子昂） …… 九七
峴山懷古 …… 九七
贈二蘇味道一（杜審言） …… 九八
酬二蘇員外味玄夏晚寓直省中見一レ贈（沈佺期） …… 九九
同二韋舍人早朝一 …… 一〇〇

送三沙門弘景道俊玄奘還二荊州一應制……五九
長寧公主東莊侍レ宴（李嶠）……六〇
恩敕麗正殿書院賜レ宴應制得二林字一（張說）……六一
還至二端州驛前一與二高六一別處……六一
幽州夜飲……六二
宿二雲門寺閣一（孫逖）……六二
幸レ蜀西至二劍門一（玄宗皇帝）……六三
塞下曲（李白）……六四
秋思……六四
送二友人一……六五
送二友人入一レ蜀……六五
秋登二宣城謝朓北樓一……六六
臨二洞庭一（孟浩然）……六七
題二義公禪房一……六七
終南山（王維）……六八
過二香積寺一……六八
登二辨覺寺一……六九
送二平淡然判官一……六九
送三劉司直赴二安西一……七〇
送二邢桂州一……七一
使至二塞上一……七一
觀レ獵……七二
送三張子尉二南海一（岑參）……七二
寄二左省杜拾遺一……七三
登二總持閣一……七三
送三劉評事充二朔方判官一賦二得征馬嘶一（高適）……七四
送三鄭侍御謫二閩中一……七五
使二淸夷軍一入二居庸一……七五
自二薊北一歸……七六
醉後贈二張九旭一……七六
登二兗州城樓一（杜甫）……七七
房兵曹胡馬……七七
春宿二左省一……七八
秦州雜詩……七八

送三孔巢父謝レ病歸二遊江東一兼呈二李白一……二六
飲中八仙歌……二七
哀江頭……二九
韋諷錄事宅觀二曹將軍畫馬圖一引……三〇
丹青引贈二曹將軍霸一……三二
邯鄲少年行（高適）……三五
人日寄二杜二拾遺一……三六
登二古鄴城一（岑參）……三七
韋員外家花樹歌……三七
胡笳歌送三顏眞卿使赴二河隴一……三八
崔五丈圖屛風賦二得烏孫佩刀一（李頎）……三九
答二張五弟一（王維）……三九
孟門行（崔顥）……四〇
贈二喬林一（張謂）……四一
湖中對レ酒作……四二
城傍曲（王昌齡）……四三
洪州客舍寄二柳博士芳一（薛業）……四三
春江花月夜（張若虛）……四四
吳宮怨（衛萬）……四六
帝京篇（駱賓王）……四六
餘杭醉歌贈二吳山人一（丁仙芝）……五二

卷之三　五言律詩

野望（王績）……五三
從軍行（楊炯）……五三
杜少府之二任蜀州一（王勃）……五四
晚次二樂鄉縣一（陳子昂）……五五
春夜別二友人一……五五
送二別崔著作東征一……五六
蓬萊三殿侍レ宴奉レ敕詠二終南山一（杜審言）……五六
和二晉陵陸丞早春遊望一……五七
和二康五望レ月有レ懷……五七
送二崔融一……五八
扈二從登封一途中作（宋之問）……五八

目次

唐詩選

卷之一　五言古詩

述懷（魏徵）……一
感遇（張九齡）……二
薊丘覽古（陳子昂）……三
子夜吳歌（李白）……四
經二下邳圯橋一懷二張子房一……四
後出塞（杜甫）……五
玉華宮……六
送別（王維）……七
西山（常建）……八
宋中（高適）……九
與二高適薛據一同登二慈恩寺浮圖一（岑參）……九
幽居（韋應物）……一〇
南澗中題（柳宗元）……一一
早發二交崖山一還二太室一作（崔署）……一二

卷之二　七言古詩

滕王閣（王勃）……一三
長安古意（盧照鄰）……一三
公子行（劉廷芝）……一七
代二悲白頭翁一……一九
下山歌（宋之問）……二〇
至二端州驛一見二杜五審言沈三佺期閻五朝隱王二無競題一レ壁慨然成レ詠……二一
烏夜啼（李白）……二二
江上吟……二二
貧交行（杜甫）……二三
短歌行贈二王郎司直一……二四
高都護驄馬行……二五

例言

一唐詩選及び三體詩各全部を收めて本書一卷とす。

一上欄の原文、之に對する國譯文、並に註解に關しては、唐詩選は森槐南博士の唐詩選評釋に基づき、參酌するに戸崎允明の箋註本、千葉芸閣の師傳講釋等を以てし、三體詩は元の釋圓至の箋註、裴庾の增註、邦人僧素隱の講解、野口寧齋の評釋等に據り、彼此相參看して其宜しきに從へり。

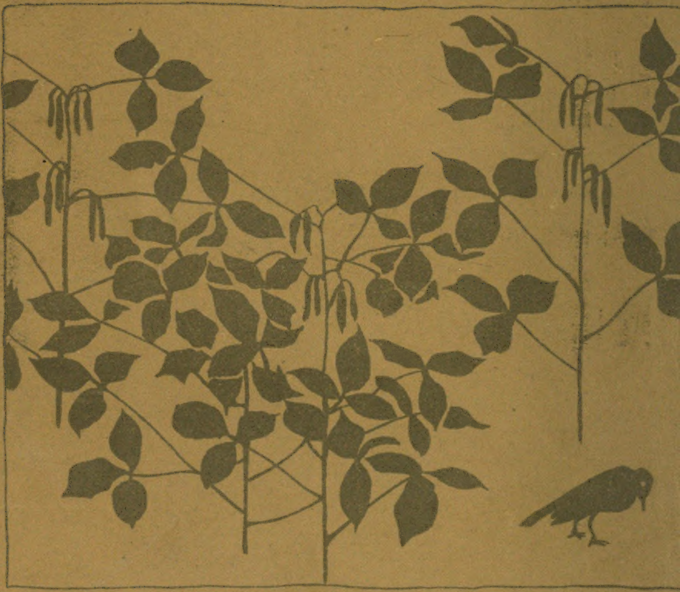
一服部南郭の唐詩選附言は、固より此譯註に直接の關係を有するものに非ざれども、亦唐詩選を讀むものの參考に資すべき點尠なからざるを以て、姑く李于鱗原序の次に附載する事とせり。

PL
2531
L56
1924

LIBRARY
AUG 19 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

唐詩選　全

三體詩　全



PL 2531 L56 1924

Li, P'an-lung
Toshi sen

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY